山梨県韮崎市

宮ノ前遺跡

MIYANOMAE SITE

―韮崎市立韮崎北東小学校建設に伴う発掘調査報告書―

（本文編）

1992

韮崎市遺跡調査会
宮ノ前遺跡発掘調査団
韮崎市
韮崎市教育委員会

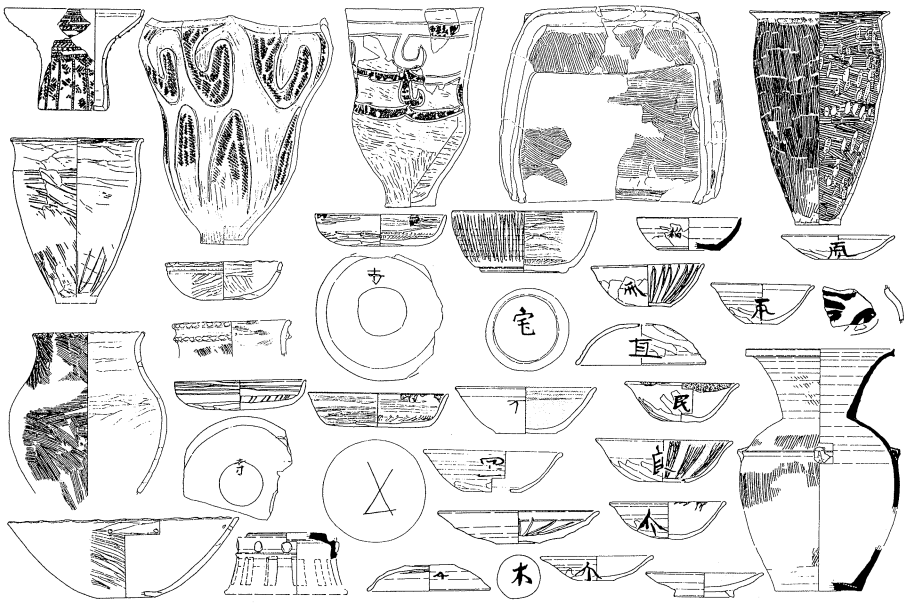
山梨県韮崎市

宮ノ前遺跡

MIYANOMAE SITE

―韮崎市立韮崎北東小学校建設に伴う発掘調査報告書―

（本文編）



1992

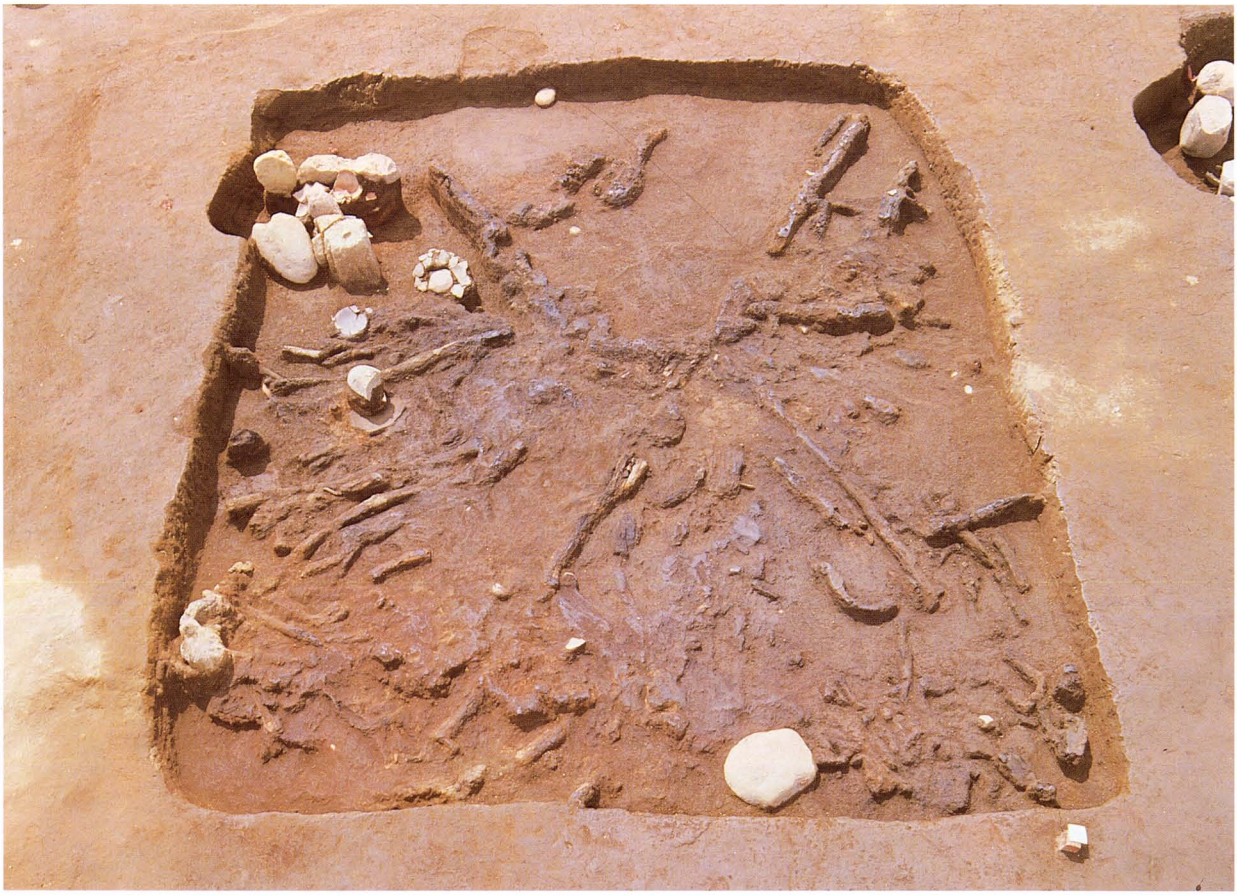
韮崎市遺跡調査会
宮ノ前遺跡発掘調査団
韮崎市
韮崎市教育委員会

遺跡付近の空中写真（東方より）

遺跡周辺の空中写真（北より）

遺跡近景（西方より）

遺跡近景（第261・272・273号住居址付近）



第11号住居址炭化材検出状況

第11号住居址完掘状況

第２号掘立柱建物址（東側から）

第２号掘立柱建物址柱穴掘り方半截状況

巻頭図版６

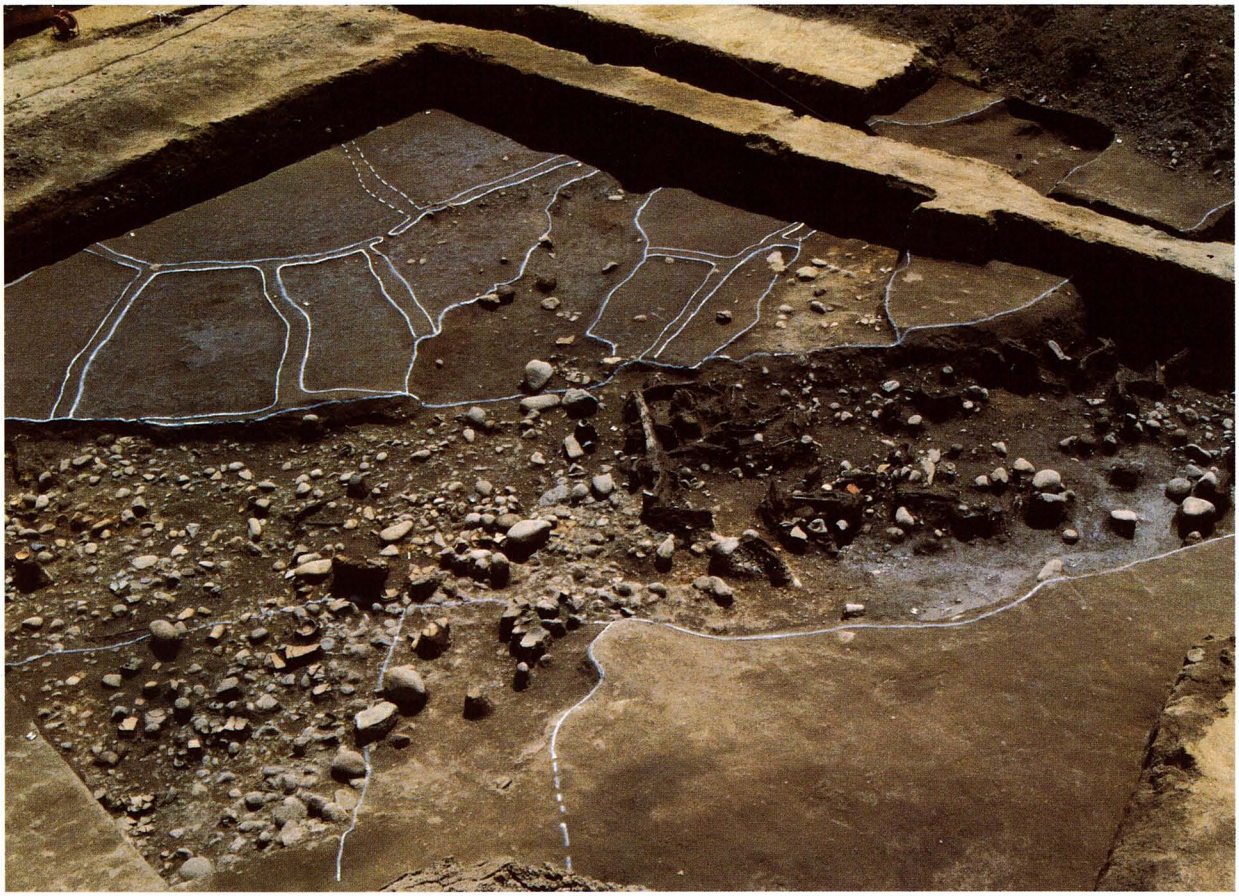
第14号掘立柱建物址（南側から）

１号溝状遺構（東側から）

１号水田址（北東側から）

２号水田址（南側から）

巻頭図版８



２号溝状遺構と２号水田址（北西側から）

２号溝状遺構および周辺条痕文土器出土状況

宮ノ前遺跡を掘る　―この本を利用する皆さんへ―

〈宮ノ前遺跡とは〉　山梨県の北西、八ケ岳の南の韮崎市の藤井平で、1989年、韮崎北東小学校をつくる時に昔のムラのあとが出てきて、おおぜいの人たちが毎日発掘をしました。遺跡の名は土地の呼び名から「宮ノ前遺跡」といいます。苦労のかいもあって、いろんな発見がつづきました。この本は遺跡の調査結果をまとめたものですが、遺跡からなにがでてきて、どんなことがわかったのか、まずお話しましょう。

宮ノ前遺跡は、今から4000年くらい前から1000年くらい前までの間の大きなムラの跡です。遺跡からは先祖が暮らした家の跡、使った道具、川の跡、お墓、それから田んぼの跡まで見つかりました。教科書でいうと「縄文時代」、「弥生時代」、「奈良時代」、「平安時代」になります。今では「山梨県韮崎市」ですが、奈良・平安時代には「甲斐国巨麻郡速見郷」といわれていたようです。

〈遺跡は埋まっている〉　「どうしてわかるの？」と思うでしょう。すごく長い年月がたつと土がたまって昔の地面はだんだん埋まり、1000年くらい前の平安時代だと50cmほど地下にあります。発掘では土の色や性質をよく観察して大昔の地層を見つけ、その時代に掘り込んだ穴を注意深く掘り返すと、たとえば家からは焼けた土や古い土器のかけら、ときには柱なども出てくるのです。

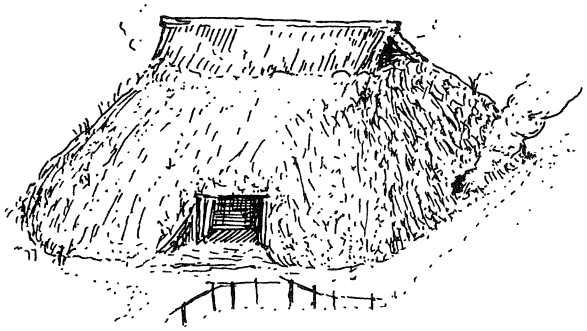
平安時代の食器

〈家のつくり〉　大昔の家は、地面を１ｍくらい掘り下げて平らにして、床にしています。壁が土の中なので冬はとくに暖かかったようです。このような半地下式の家を「竪穴住居」といいます。

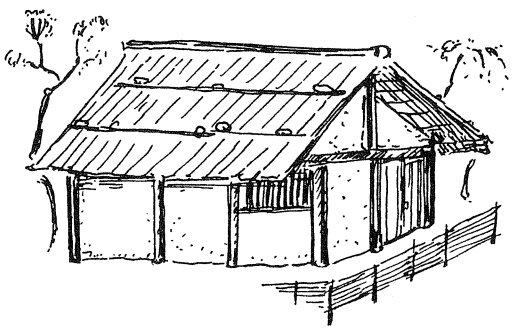
縄文時代の竪穴住居は、上から見ると丸い形で、床のまんなかに石で囲んだ「いろり」があります。奈良・平安時代になると、上から見ると四角形で、東がわか北がわの壁の内に「かまど」がつくられています。かまどは、煮炊きをするための場所で、今でいえば炊飯器やガスコンロです。石で骨組みをつくり粘土をはりつけ、外へ煙を出すための穴もあります。竪穴住居のほかに、柱穴を掘って柱を立てて家や倉庫をつくった「掘立柱建物」もあります。

〈家の中のようす〉　平安時代の家からは、素焼きの土器が出てきます。「土師器」という焼きもので、今でいえばご飯茶わんやお皿です。ろくろを使ってかたちをつくり、へらで削ったあとがあるのが特徴で、「甲斐型土器」という名があります。甲府市の東あたりに土器をつくるムラがあって、そこから山梨県中に運ばれたようです。また愛知県・岐阜県の瀬戸・美濃地方で作られた「灰釉陶器」という食器が、長野県を通ってわざわざ運ばれています。ほかにご飯を煮るための長い甕や、調味料でもいれたらしい小さな鉢などがあります。また、「刀子」という鉄のナイフや、糸をよりあわせる「紡錘車」、俵などを編む時のおもり石も出てきます。そのほかに、まれに鉄のやじりが出ることがありますが、これは家をつくるときのおまつりに使ったもののようです。当時の家の中には、もっとたくさんのいろいろなもの――敷物や曲物、木の器、農具など――があったと思いますが、長い年月の間に腐り果てて、土器や鉄の道具だけが残っていました。

〈ムラのようす〉　宮ノ前遺跡からは竪穴住居が全部で400軒以上、掘立柱建物が50軒以上も見つかりました。それらは同時に全部が建っていたのではなくて、なんども家を建て替えたようすがみられます。家の中から出て



平安時代の竪穴住居（想像図）

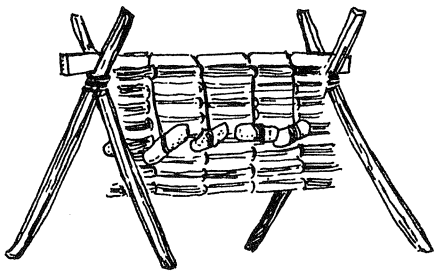


掘立柱建物（想像図）

きた土器の形で細かな時代がわかるので、ある時代のムラのすがたはこうだった、ということがわかります。だいたい10軒くらいから、多い時でも40軒ほどのムラだったと思います。宮ノ前のムラにはりっぱなつくりの掘立柱建物が多く、中には昔の役所によくある大きな倉庫跡もあるので、藤井平では中心となるムラで、役所のようなこともしたムラだったことが想像できます。「奈良三彩」という奈良の都でよく使われた貴重な焼き物のふたが出てきていることからも、都との行き来があったことを物語っています。

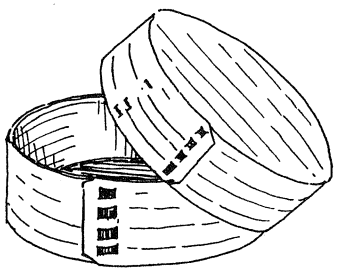
紡錘車の使い方

〈墨書土器〉　土師器に墨で文字を書いた「墨書土器」が出ることがあります。墨で書いた文字は1000年たっても消えないんですね。注意してみると今の文字と少し違います。今では使っていない文字や、記号みたいな文字、中国で考え出された特殊な文字もあります。おまつりに使う時に文字を書き込んだという説、自分の家の土器だという印に書いたという説がありますが、本当のところはよくわかっていません。筆や墨は見つかっていませんが、硯はあります。当時の役所やお寺でよく使われた円形の「円面硯」や、須恵器という焼き物の甕のかけらを硯に使った「転用硯」が出ています。墨の字のほかに、釘のようなもので引っかいて線で記号や字をつけた「線刻土器」もあります。

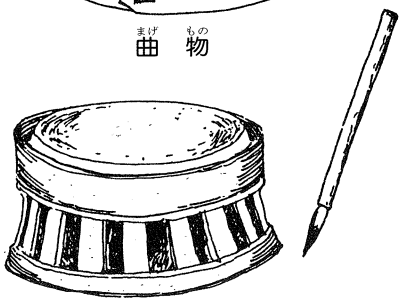


編み物のおもり石

〈田んぼ〉　ムラのまわりには田んぼで稲が作られていました。田んぼの面を探すには、土を顕微鏡で見て、稲の葉に入っている「プラント・オパール」というガラス質の細胞を見つける必要があります。また発掘溝の断面を平らに削って、田んぼのあぜがあるかどうか調べます。宮ノ前遺跡ではムラの西がわで田んぼがみつかり、平安時代の終わりには現在の区画と同じような方向で田んぼが広がっているのがわかりました。ほじょう整備をする前の藤井平には、同じ幅で同じ方向に田んぼが広がっていて、それを「条里型土地割」といいますが、その元は少なくとも奈良時代の終わりから平安時代のはじめまでさかのぼるらしいことがわかったのです。さらに弥生時代のはじめ頃の田んぼも、山梨県で初めて見つかりました。今まで、稲作が山梨あたりではいつから始まったのかよくわかりませんでしたが、弥生時代でもけっこう早い時期に伝わっていたことがはっきりしました。



曲物



円面硯と筆

〈水辺のまつり〉　ムラの西に流れる川の跡では、水分が多いためにふつうの土の中では残らないような木の道具が次から次へと出てきました。いちばん多かったのは、先がこげたり、割れ目が入った木の棒です。これを「斎串」といいます。割れ目のある棒は、おふだをはさんで田んぼの水口にさしたりしたものかもしれません。弓、櫛、曲物、鹿の角、馬の歯などもおまつりのあとにすてられたものでしょう。また「人面墨書土器」という、甕にひげのはえた人の顔を描いた土器もあります。罪やけがれを水に流すために、甕の中に息を吹き込んで川に流したのだといわれています。そのほか、くるみや桃の種、瓜のなかまの種なども出てきました。昆虫の羽や木の葉も色あざやかに残っていました。

人面墨書土器

このように宮ノ前遺跡の調査では、いろいろな発見があり、今までわからなかったことがいくつも明らかになりました。遺跡の一部は韮崎北東小学校の校庭の隅に庭として残してありますので、ずっと大切にしてほしいと思います。また小学校の中に遺跡から出てきたものや、復元した家の模型もありますので、歴史の勉強に役立ててください。

序

韮崎市遺跡調査会は、市内における遺跡・文化財の保護活用を目的として平成元年１月26日に発足いたしました。

韮崎市遺跡調査会では、こうした目的を達成するために遺跡の発掘調査を主たる事業として行い、平成元年２月より平成２年の４月にかけて、韮崎市立韮崎北東小学校建設に伴う宮ノ前遺跡の埋蔵文化財発掘調査を、韮崎市の委託を受け実施し、今般その調査報告書が刊行されることとなりました。

約15ヵ月間の発掘調査の成果が、本報告書にまとめられたわけですが、宮ノ前遺跡は規模・内容ともに県内でも屈指の遺跡であり、市・県内はもとより広く県外に知られ、多くの人々の注目を集めております。

原始・古代は文献資料がまったくないか、僅かに残されている場合でも豪族や貴族といった権力者側の記録がほとんどであります。このような状況のなか、当時の一般人である庶民の実際の生活文化は、発掘調査によって明らかにされる遺跡を通して具体的にとらえることが可能であります。本報告書が歴史学の今後の調査研究に資することを願っております。

最後に、関係各位の多大なる御理解と御協力によって、本発掘調査事業が推進され完了したことに対して、深く感謝の意を表します。

平成４年３月31日

韮崎市遺跡調査会会長

韮崎市長　内藤　登

序

本書は、韮崎市藤井町駒井字宮ノ前地内において、韮崎市立韮崎北東小学校建設に伴い発掘調査された宮ノ前遺跡の報告であります。

宮ノ前遺跡の周辺は、北後田・後田・堂の前・宮ノ前第２などの遺跡が所在しており、古くから連綿と人間が生活を営んでいたことが窺えます。特に今回の調査では、423軒にもおよぶ住居址が検出され、当該地域には本遺跡をふくめ拠点的な集落が存在したことが推測されます。これらの住居址のほとんどが奈良・平安時代にかけてつくられたもので、出土した遺物は土師器・須恵器の坏や皿といった日常生活用具が主流で、当時の生活や文化を知る上で貴重なものとなっています。また、弥生時代前期とされる水田址は東日本で最古に位置付けられる重要な発見で、日本列島の稲作技術波及の問題を考究するうえで歴史上欠かせないものとなっております。

これら貴重な発見の行われた宮ノ前遺跡の報告書がここに刊行できたことは喜ばしいことであり、文化財として永く後世に伝えていくことを責務と痛感いたします。

最後に、今回の発掘調査並びに報告書作成に関し、多大なる御理解と御協力、また御指導・御助言を頂いた皆様方に深甚なる感謝を申し上げる次第です。

平成４年３月31日

宮ノ前遺跡発掘調査団

団長　功刀幸丸

例　言

1．　本書は、山梨県韮崎市藤井町駒井字宮ノ前に所在する宮ノ前（みやのまえ）遺跡の発掘調査報告書である。

2．　本発掘調査は、韮崎市立韮崎北東小学校建設に先立って行われた緊急発掘調査で、韮崎市の委託を受け韮崎市遺跡調査会が宮ノ前遺跡発掘調査団を組織して実施した。

3．　本書は本文編と図版編の２冊より構成されている。

4．　発掘調査の概要および調査組織等は、第１章に記してある。

5．　本書の作成および編集は、宮ノ前遺跡発掘調査団の責任のもと、平野　修と櫛原功一が行った。

6．　整理作業の分担は以下のとおりである。

◇土器復元および遺物実測　　平野、櫛原、佐野靖子、竜沢みち子、矢房静江、名取もと子、斉藤ひろみ、斉藤春美、田辺里江、宮里学、安田卓史、丹羽伸行、山村正光

◇金属製品・木製品復元　　滝沢峯子、宇津宮則子、広瀬悦子、岩間幸恵

◇コンピュータ・データ整理および図化　　日原ゆかり、平野

◇遺構図・遺物実測図トレース　　平野、櫛原、中山千恵

◇図版作成　　平野、櫛原、中山、竜沢(み)、矢房、宇野富貴子

◇写真撮影（遺構・遺物）　　平野、櫛原、山下孝司、矢崎照政

7．　本書の執筆分担は、第１章第１節を山下、第１章第２～５節を平野、第２章を櫛原、第３章第１節を平野と櫛原、同章第２～10節を平野、第５章第４～５節を櫛原、同章第６～８節を平野、第６章第１～２節を平野、第７章を平野が担当した。第４章遺物観察表は、竜沢(み)、矢房の協力を得て、平野と櫛原が作成した。

なお、第５章第１・２・３節には立命館大学文学部助教授　高橋　学氏、帝京大学山梨文化財研究所古植物地理研究室長　外山秀一氏、山梨県埋蔵文化財センター主任文化財主事　中山誠二氏より玉稿を頂戴した。深く感謝申し上げたい。

8．　発掘調査および整理作業において次の調査・業務等を下記の機関に委託および依頼した。

航空写真測量 …… シン航空写真株式会社

金属製品・木製品保存処理 …… 帝京大学山梨文化財研究所

^{14}Ｃ年代測定分析 …… 社団法人　日本アイソトープ協会

9．　石器の石質鑑定では帝京大学山梨文化財研究所地質火山灰研究室長　河西　学氏のお手を煩わせた。記して感謝申し上げたい。

10.　本書にかかる出土品および記録図面や写真等の諸記録は、韮崎市教育委員会にて保管してある。

11.　発掘調査から報告書作成に至るまで、次の諸氏・諸機関に多大なる御教示、御協力を賜った。記して心より厚く御礼申し上げたい。（順不同、所属・敬称略）

磯貝正義、野沢昌康、山中敏史、工楽善通、平川　南、高橋　学、外山秀一、中山誠二、谷口一夫、萩原三雄、波木井市郎、河西　学、鈴木　稔、田代　孝、末木　健、新津　健、坂本美夫、小野正文、保坂康夫、今福利恵、猪股喜彦、瀬田正明、山路恭之助、志村富三、山本寿々雄、西井久晃、林　　亨、岡本範之、平井　貢、木下大三、渡辺広勝、藤澤良祐、中沢道彦、河野喜映、平野吾郎、畑　秀明、畑　大介、帝京大学山梨文化財研究所、山梨県教育委員会、山梨県埋蔵文化財センター、静心寮、コンピュータ・システム株式会社、シン航空写真株式会社、峡北印刷株式会社

凡　例

1．　遺構および遺物の挿図中の縮尺は原則として次のとおりである。

《遺　構》

◇竪穴住居址	1／80（竈は1／40）	◇溝　　址	1／400、セクション1／40
◇掘立柱建物址	1／120	◇畝 状 遺 構	1／160
◇土　　坑	1／40または1／80	◇溝 状 遺 構	1／120
◇配 石 遺 構	1／20または1／40	◇水　田　址	1／120
◇単 独 埋 甕	1／20	◇性格不明ピット	1／450

《遺　物》

◇土　　器	1／4または1／6	◇木　製　品	1／3または1／4
◇石器・石製品	1／2または1／3、1／4	◇金 属 製 品	1／2または1／3、2／3
◇土　製　品	1／3または1／4		

2．　遺構および遺物の写真図版の縮尺は統一されていない。

3．　竪穴住居址挿図中にみられるドットのスクリーントーンと ―・・― の範囲は、焼土およびその範囲を示している。また、遺物のドットに使用した記号は以下のことを示し、番号は挿図中の遺物番号と対応している。
○：土師器、△：須恵器、□：施釉陶器、●：金属製品（鉄滓も含む）、▲：土製品（土錘・羽口等）、
■：石器および石製品、★：炭化物および炭化材

4．　遺物挿図中の土器断面が黒く塗りつぶしてあるものは須恵器、ドットのスクリーントーンは施釉陶器、器体部内外面のドットのスクリーントーンは黒色土器を示し、その他の箇所にみられるスクリーントーンはススや漆等の付着を示している。

5．　本文編挿図第2・3図には、国土地理院発行の1／50,000韮崎、1／25,000韮崎・若神子を使用している。

6．　竪穴住居址の床面積の計測には、プラニメーターを使用し、3回の計測を行い、その平均値を面積とした。使用機器はウシカタX－PLAN360dである。また、掘立柱建物址は桁・梁行の柱間の数値を掛け合わせた数値である。

本 文 編 目 次

巻頭図版

宮ノ前遺跡を掘る（この本を利用する皆さんへ）

序

例　言

凡　例

目　次

第１章　発掘調査の概要

第１節　調査に至る経緯 …… 10

第２節　調査組織 …… 10

第３節　発掘区の設定と調査の方法 …… 12

第４節　層序 …… 13

第５節　調査経過 …… 13

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境 …… 18

第２節　歴史的環境 …… 18

第３章　各時代の遺構

第１節　竪穴住居址 …… 26

第２節　掘立柱建物址 …… 113

第３節　土坑 …… 124

第４節　配石遺構 …… 131

第５節　単独埋甕 …… 132

第６節　溝址 …… 132

第７節　畝状遺構 …… 137

第８節　溝状遺構 …… 137

第９節　水田址 …… 139

第10節　柵列状遺構および性格不明ピット群 …… 139

第４章　出土遺物の観察

第１節　竪穴住居址出土土器 …… 144

第２節　掘立柱建物址出土土器 …… 217

第３節　土坑出土土器 …… 217

第４節　単独埋甕出土土器 …… 218

第５節　溝址出土土器 …… 218

第６節　畝状遺構出土土器 …… 219

第７節　溝状遺構出土土器 …… 220

第８節　性格不明ピット群出土土器 …… 225

第９節　奈良・平安時代以外出土土器 …… 225

第10節　遺構外出土土器 …… 231

第11節　石器および石製品 …… 233

第12節　土製品 …… 237

第13節　木製品 …… 242
第14節　金属製品 …… 250
第５章　各節
第１節　宮ノ前遺跡の地形環境分析 …… 260
第２節　宮ノ前遺跡出土の縄文時代晩期末葉から弥生時代中期初頭の土器群 …… 268
第３節　宮ノ前遺跡におけるプラント・オパール分析 …… 278
第４節　宮ノ前遺跡における縄文時代の遺構と遺物 …… 290
第５節　宮ノ前遺跡における奈良～平安時代の土器・陶器 …… 292
第６節　宮ノ前遺跡における奈良～平安時代の集落様相 …… 330
第７節　金属製品と鍛冶関連遺物について …… 354
第８節　文字関係資料について …… 360
第６章　自然科学分析
第１節　^{14}Ｃ年代測定実施について …… 384
第２節　^{14}Ｃ年代測定結果報告 …… 384
第７章　結語
まとめにかえて …… 386
引用・参考文献 …… 388

挿　図　目　次

第１図　調査地区とグリッド …… 12
第２図　宮ノ前遺跡土層図 …… 14
第３図　周辺の遺跡(1)国土地理院1/50000地図使用 …… 19
第４図　周辺の遺跡(2)国土地理院1/25000地図使用 …… 20
第５図　宮ノ前遺跡と周辺遺跡 …… 21
第６図　１号柵列状遺構 …… 140
第７図　性格不明ピット分布図 …… 141
第８図　地形環境分析の方法と手順 …… 261
第９図　藤井平平野微地形分類図 …… 263
第10図　土器分類(1) …… 269
第11図　土器分類(2) …… 270
第12図　土器組成 …… 275
第13図　試料採取地点 …… 279
第14図　プラント・オパール分析結果 …… 281
第15図－ａ　プラント・オパール分析結果　Ａ地点 …… 283
第15図－ｂ　プラント・オパール分析結果　Ｂ地点 …… 283
第15図－ｃ　プラント・オパール分析結果　Ｃ地点 …… 283
第16図　イネ資料の出土状況（Ｃ地点） …… 285
第17図　土器・陶器の器種分類(1) …… 295
第18図　土器・陶器の器種分類(2) …… 296

第19図　土師器坏Ａの変遷 …… 300
第20図　土師器坏Ａ（甲斐型坏）と須恵器坏の法量変遷 …… 301
第21図　土師器甕Ａの変遷 …… 307
第22図　須恵器坏の変遷 …… 308
第23図　器種の消長 …… 318
第24図　土器・陶器の変遷 …… 319
第25図　土器の変遷（1･2） …… 321
第26図　食器類の種別構成 …… 326
第27図　土師器の器種構成 …… 326
第28図　宮ノ前遺跡の年代（案） …… 328
第29図　竪穴住居址の時期別面積分布図 …… 331
第30図　時期別にみたカマド位置のあり方 …… 332
第31図　竪穴住居址の時期別主軸方向分布図 …… 332
第32図　掘立柱建物址の規模 …… 333
第33図　掘立柱建物址主軸方向分布図 …… 334
第34図　奈良・平安時代集落の居住ブロック …… 338
第35図　遺構変遷図(1) …… 343
第36図　遺構変遷図(2) …… 344
第37図　遺構変遷図(3) …… 345
第38図　遺構変遷図(4) …… 346
第39図　遺構変遷図(5) …… 347
第40図　遺構変遷図(6) …… 348
第41図　遺構変遷図(7) …… 349
第42図　遺構変遷図(8) …… 350
第43図　遺構変遷図(9) …… 351
第44図　遺構変遷図(10) …… 352
第45図　遺構変遷図(11) …… 353
第46図　墨書土器、線刻・ヘラ書土器の量的推移 …… 361
第47図　墨書・線刻・ヘラ書をされる種別割合 …… 363
第48図　墨書土器と線刻土器における種別ごと記銘状況 …… 364
第49図　各期の墨書土器(1) …… 366
第50図　各期の墨書土器(2) …… 367
第51図　各期の墨書土器(3) …… 368
第52図　各期の線刻土器(1) …… 369
第53図　各期の線刻土器(2) …… 370

挿　表　目　次

第１表　宮ノ前遺跡竪穴住居址データ …… 102
第２表　宮ノ前遺跡掘立柱建物址データ …… 122

第３表　竪穴住居址出土土器観察表 …… 144
第４表　掘立柱建物址出土土器観察表 …… 217
第５表　土坑出土土器観察表 …… 217
第６表　単独埋甕出土土器観察表 …… 218
第７表　溝址出土土器観察表 …… 218
第８表　畝状遺構出土土器観察表 …… 219
第９表　１号溝状遺構出土土器観察表 …… 220
第10表　２号溝状遺構出土土器観察表 …… 223
第11表　３号溝状遺構出土土器観察表 …… 225
第12表　性格不明ピット群出土土器観察表 …… 225
第13表　奈良・平安時代以外出土土器観察表 …… 225
第14表　遺構外出土土器観察表 …… 231
第15表　宮ノ前遺跡出土石器および石製品観察表 …… 233
第16表　宮ノ前遺跡出土瓦観察表 …… 237
第17表　宮ノ前遺跡出土ミニチュア土器観察表（奈良・平安時代） …… 237
第18表　宮ノ前遺跡出土土錘観察表 …… 238
第19表　宮ノ前遺跡出土羽口観察表 …… 239
第20表　宮ノ前遺跡出土耳栓観察表 …… 239
第21表　宮ノ前遺跡出土土製円板観察表 …… 239
第22表　宮ノ前遺跡出土土製蓋観察表 …… 240
第23表　宮ノ前遺跡出土ミニチュア土器観察表（縄文時代） …… 241
第24表　宮ノ前遺跡出土その他土製品観察表 …… 241
第25表　宮ノ前遺跡出土木製品観察表 …… 242
第26表　宮ノ前遺跡出土金属製品観察表 …… 250
第27表　縄文晩期～弥生中期初頭の型式および遺跡対応表 …… 274
第28表　宮ノ前遺跡出土墨書土器一覧表 …… 371
第29表　宮ノ前遺跡出土線刻土器一覧表 …… 379

図 版（写真）目 次

巻頭図版
写真１　宮ノ前遺跡周辺空中写真　国土地理院1/10000
写真２　プラント・オパール
写真３　プラント・オパール、その他

第１章

発掘調査の概要

調査風景

第1節

調査に至る経緯

昭和63年に韮崎市から藤井・中田・穴山地区の各小学校を統廃合し、新しい小学校の建設を行うべく開発申請がなされた。当該事業施工予定地域は、周知の埋蔵文化財に一部かかるため、市教育委員会において遺跡の有無確認調査を翌年早々に実施することとした。

確認調査は、昭和64年1月5日から1月7日にかけて、地中レーダー探査を主に一部試掘坑を設け掘下げを行った。調査の結果、レーダーにより遺構面等や試掘坑において遺構の一部が検出され、遺跡の存在が明確となった。これら調査結果をもとに市当局と教育委員会において協議検討した結果、統合小学校建設に先立って遺跡の緊急発掘調査を行うこととした。

調査にあたり韮崎市では、市内の遺跡保護と活用を目的とした遺跡調査会を組織し、開発と文化財保護の円滑な推進につとめることとした。遺跡調査会は、平成元年1月26日に発足し、市と委託契約を結び遺跡名を「宮ノ前遺跡」とし調査を開始する運びとなった。

第2節

調査組織

1．発掘調査地

山梨県韮崎市藤井町駒井字宮ノ前

2．調査主体

韮崎市遺跡調査会

3．調査機関

宮ノ前遺跡発掘調査団

4．調査組織（平成4年3月31日現在）

〈韮崎市遺跡調査会組織〉

会長	市長	内藤　登	
副会長	市助役	仲田八束	
	市教育委員長	保阪庸夫	（後任）秋山利良
	市文化財審議会会長	山寺仁太郎	
理事	学識経験者	磯貝正義	
	学識経験者	野沢昌康	
	学識経験者	谷口一夫	
	学識経験者	萩原三雄	
	学識経験者	波木井市郎	
	学識経験者	志村富三	
	社会教育委員会長	宮川正英	（後任）今福芳徳
参与	県教育庁文化課	新津　健	（後任）坂本美夫
	県埋蔵文化財センター	末木　健	
監事	市収入役	千野　惺	（後任）大柴左京
	市監査委員	標　栄義	

〈韮崎市宮ノ前遺跡発掘調査団組織〉

団　長	市教育委員会教育長	功刀幸丸	
副団長	参事学校教育課長	秋山　積	（後任）金丸邦治
調査担当	帝京大学山梨文化財研究所	平野　修	
	帝京大学山梨文化財研究所	櫛原功一	
	韮崎市教育委員会	山下孝司	
調査員（非常勤）			
	帝京大学山梨文化財研究所	宮澤公雄	
	帝京大学山梨文化財研究所	中山千恵	
	帝京大学山梨文化財研究所	外山秀一	
	立命館大学文学部助教授	高橋　学	
事務局			
事務局長	市社会教育課長	成島主計	（後任）中島尚武
事務局員	市社会教育課長補佐	真壁静夫	
	市社会教育係長	雨宮勝己	（後任）横森淳彦
	市社会教育課主任	山下孝司	

発掘調査および整理作業参加者および協力者（順不同、敬称略）

須賀　富雄、宮川　昌蔵、早川　馨、市川　歌子、井上　昭子、井上　栄子、井上　政江、井上八千代、今福てる子、今福　初音、小沢　永花、口野　芳美、小池　夏子、小林　玉代、新藤かね子、高添つた子、塚田　利子、内藤　妙子、中嶋いとせ、仲田　はつ、保阪　豊子、保坂ふさ江、保坂ゆきよ、松井　文代、水上千代子、山田　悦子、島田とみ子、功刀とよ子、秋山　松義、秋山　半蔵、清水　澄夫、小沢いはえ、藤島　七恵、藤島　初枝、田辺かつら、小沢とよじ、山本　圀義、小林　宥子、向山みその、向山　幸子、金丸　恵子、飯島　悦夫、志村　満恵、志村　ゆり、守屋　一恵、守屋　敏子、由井　恭子、小沢ミツエ、小林二三子、古屋　勝、根津　昭彦、長田　統代、加々美君江、上村　水枝、小林　松子、坂本　恒子、新藤すみ江、戸島　栄、戸嶋　光二、保坂実香子、深沢十四江、宮川かね子、宮川　澄子、宮川　文恵、八巻ひろ子、保阪　宏也、平賀きく代、戸島　梅子、大柴　欣子、井上せつ子、猪股　清子、広島はま子、山田みち子、岩村恵美子、小野　安子、志村　栄子、志村かね子、志村つね代、志村　富枝、穂阪あい子、保坂としえ、穂阪　静子、穂阪　初子、保坂ゆたか、本間まつ子、保阪かつよ、金子きよ子、五味ゆき子、大塚　町子、上原　朝子、上野　絹子、上野志げ香、上野智恵子、円道はる江、小林かめじ、小林　武子、長坂　乙女、八巻富貴江、小林智恵子、小林　章江、小川けさじ、乙黒　弥生、小泉しずか、小林　銀子、土屋　せい、仲沢　宥子、岡本　嘉一、岡本　保枝、小沢　栄子、小沢　高恵、小沢千代子、小沢　春代、小沢　久江、小沢　宮野、小田切絹枝、貝瀬　洋志、小林美枝子、志村　冴子、鈴木きく江、長島　昌子、仲田　太年、成島美智子、石原　芳明、青山　晃、伊東千代美、篠原　哲也、河内　秀樹、末　創一、岩下　泰三、小野　誠二、依田　寿行、三井　健一、白倉　忠純、坂本　茂、大芝　隆、季載　現、石原ひろみ、深沢真知子、菊池　俊宏、丹羽　伸行、前田　賢一、清水久二雄、名取　明美、仲田　竹子、河西美穂子、輿石　智一、名取　房子、神取ツギ子、瀬田　正明、矢崎　照政、日原ゆかり、日原　広樹、渡辺　勝久、佐野　靖子、矢房　静江、竜沢みち子、斉藤ひろみ、斉藤　春美、名取もと子、田辺　里江、宇野富貴子、岩間　幸恵、伊藤　好美、宇津宮則子、原田みゆき、遠藤かほる、矢房さつき、竜沢まさじ、竜沢　峯子、名取　仁代、市川　順子、鈴木麻里子、広瀬千江美、樋泉　彰子、福沢　準子、若木　美和、宮里　学、安田　卓史、渡辺　聡一、土田　宏成、風間　謙、山村　正光、広瀬　悦子、市川　昌子

第３節

発掘区の設定と調査の方法

今回の発掘区の設定にあたっては、主に確認調査において実施した地中レーダーによる探査と空中写真の判読による地形分析から明らかとなった、居住域と考えられる埋没微高地と生産域と考えられる埋没旧河道の一部に発掘区を設定した。なお、低学年グラウンドとする一部区域については下部遺構に影響を及ぼすような掘削等を行わないということで調査対象から外し、保存地区としている。調査対象面積は建設予定面積全体の約半分にあたる19,295㎡で、現況は宅地、水田、畑、桑畑である。この発掘区と建設予定地全体をカバーするように、国家座標第Ⅷ系を用い10m四方を基本とするグリッドを設定し、X軸方向にＡ１～A30、Y軸方向にＢ１～B32とし、両者をあわせて各グリッドの名称とした。X軸は真北を指し、本遺跡の原点（A0B0）の座標は、X＝－30270.0m、Y＝－5120.0m、ちなみにA20B20グリッドの座標はX＝－30080.0m、Y＝－4930.0mである。

発掘調査は、発掘区内を全面的に重機により表土および耕作土を除去し、その後に人力でジョレン等によって遺構確認に努めた。遺構番号やその名称については、確認および調査にかかった段階で随時名称（遺構番号）を

第１図　調査地区とグリッド

付けていったが、明確な遺構となり得なかったり、確認時に考えられていた性格が後になって異なったりして、欠番としたものや名称を変更したものもある。

遺構の調査にあたっては、基本的にプラン確認の後、土層および重複関係、床面等の確認のため土層観察ベルト（十文字）に沿ってサブトレンチを設定し掘り下げ、それらを確認の後、全体を掘り下げた。遺物は極力原位置を保ちながら掘りすすめ、床面直上およびその付近、竈内等必要なものについては出土地点を記録しながら取り上げた。原則的に原位置を保っている遺構内外の遺物の取り上げに際しては、迅速かつ正確を期すためコンピュータ・システム株式会社開発のプログラム「SITE」を使用し、光波測量機とハンドヘルドコンピュータを用いそれぞれの座標および標高を記録して取り上げている。

水田址の調査については、調査前に空中写真の判読を行い、トレンチを設定し水田址等の旧耕地面の確認に努め、それと平行し各層序にわたってプラント・オパール分析を実施した。水田址の存在が予想される層位での遺構確認では、調査区の周囲にそってサブトレンチを設定し、土層の確認を行いながら遺構の検出に努めた。一部検出した水田層の年代決定におけるクロスチェックとして、^{14}C年代測定を社団法人日本アイソトープ協会に依頼して行っている。

遺構の測量では、各遺構の土層図およびエレベーション図の一部、竈平面図および土層図を除き、前述した「SITE」のプログラムを使用したコンピュータ機器を用い、他に写真測量や平板測量も併用し、調査担当者と調査員の指導の下、作業員と航空測量業者が行った。

第4節

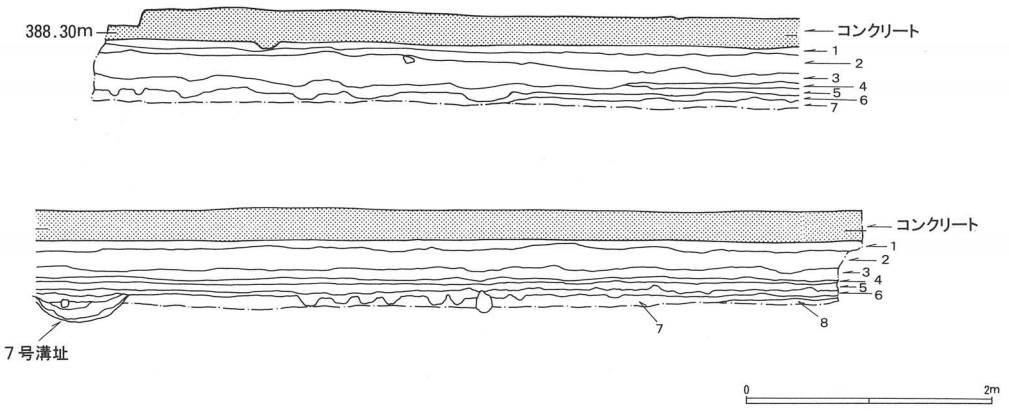
層　　序

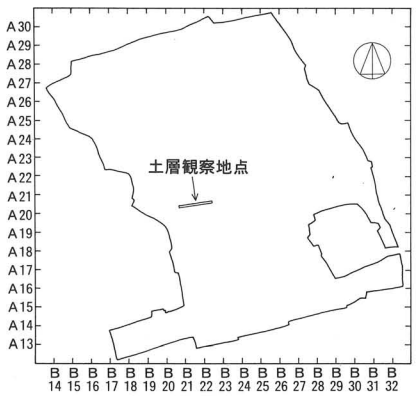
本遺跡の発掘区内には自然堤防状の埋没微高地（埋没旧中州）と埋没旧河道が存在することが地形面分析によって明らかとなっている。そのため洪水等の影響で観察地点により層序の状況が異なり、点的な観察で同一層準を捉えるのも極めて困難であるといえよう。今回の調査では、埋没旧河道内では水田址の調査に伴い立命館大学文学部の高橋学助教授に依頼し、綿密な観察による地層区分を行ったが、一方の埋没微高地内においては、一地点での、ほぼ遺構確認面までの地層観察しか行っていないのが実情で、埋没微高地から埋没旧河道にかけての地層の側方変化についてはその観察を怠っている。埋没旧河道における地層の堆積状況については、後の溝状遺構と水田址の挿図中（図版編129図）において示しているので、本節では多くの住居址群が展開する埋没微高地における地層の堆積状況を本文編第２図において示しておいた。なお、埋没旧河道内における土層説明の表現とは統一がとれていない。

第5節

調　査　経　過

発掘調査は平成元年（1989）２月20日から開始したが、確認調査の段階で、遺跡の規模とその内容、遺構の遺存状況とその種類等細かなデータが得られず、そのまま本調査に臨まなければならなかったことが、後に調査期間を引き伸ばす最大の要因になったことは否定できない事実といえよう。開発優先の確認調査を含む事前調査の在り方に大きな課題を残したといえる。まず、調査開始に先立つ市教育委員会との打ち合せで、調査区内の校舎および体育館、プール等の建造物の建設区域から優先的に調査を行うこととなり、調査区北側半分から調査に入る。開始当初から重機による表土除去作業のもと、60人を上回る作業員を動員して連日ジョレン精査による遺構確認作業を行う。季節がら霜柱や凍結、降雪に悩まされたが、遺構確認作業はほぼ順調に進み、３月初旬からは一





〈土層説明〉

第１層　灰褐色土層　（表土）
第２層　黄褐色土層　鉄分沈着著しい。
第３層　暗褐色土層　炭化物および焼土粒を含む。第５層より黄灰色かかる。
第４層　黄褐色土層　鉄分沈着有。第２・６層より黄味がうすい。
第５層　暗褐色土層
第６層　黄褐色土層　炭化物含む。遺構確認面。
第７層　暗褐色土層
第８層　黄褐色土層

第２図　宮ノ前遺跡土層図

部遺構の調査にも入る。

調査開始当初から、規模は大きくないものの、規則的な配置が認められそうな方形の掘り方を基調とした掘立柱建物址群や、その近辺からの円面硯の出土、５月には69号住居址からの三彩陶器蓋の出土等、一般の集落遺跡とは異なった様相を示す遺構や遺物の出土が相次ぎ、官衙に関連する遺跡か、あるいは在地豪族等の有力者の居館の可能性が考えられたため、調査中に、ご多忙にもかかわらず奈良国立文化財研究所の山中敏史氏の視察を仰いだ。山中氏からは、遺構の性格や建物の構造等について、本遺跡でみられる建物群は官衙の中心部ではないが、それらの関連施設である「館」である可能性があることや、または郷レベルの役所か豪族の居宅である可能性があるのではないかというご指摘をいただいた。こうした指摘を念頭におきながら調査団も慎重に調査をすすめていったが、一方では、調査の進展に伴い、竪穴住居址を中心とした遺構群が当初の予想をはるかに上回る密度で多数存在している可能性が高くなり、全体で100軒程度と考えられていた竪穴住居址の数が、全体の約40％の調査面積ですでに100軒を超していた。こうした遺構数の増大と農繁期に入ったことでの作業員の減少、雨季の長雨等で調査のペースも鈍化し、８月の校舎等建設予定区域の明け渡しが、９月初旬にずれ込んでしまった。なお、７月16日には一般市民を対象とした第１回遺跡見学会を実施している。

校舎等建設予定区域内の調査が終了した後、引き続き残りの外周道路部分とグラウンド部分の調査を９月中旬以降本格的に開始した。重機による表土除去作業とジョレン精査による遺構確認作業を並行して行った結果、北側調査区域よりさらに激しく重複し遺構群が存在していることが判明した。市遺跡調査会および市教育委員会に

対し調査員と作業員の増員を要請し、遺構群の調査にあたった。その後も竪穴住居址等の遺構数は増え続け、12月下旬には300軒を超えた。翌年平成２年（1990）の３月下旬には400軒を突破し、掘立柱建物址も50棟を超えた。同時期にこれら竪穴住居址群を中心とした遺構群の調査も引き続き継続しながら、最後まで残っていた調査区南西部の埋没旧河道内の水田址の調査も開始した。水田址は試掘確認調査での地層の観察、プラント・オパール分析の結果から数面存在することが予想されていたが、今回は予算的、期間的な問題から保存状態が良いと思われる水田層２面を対象に調査を実施することとなった。１号水田址の調査は３月26日に開始し、４月９日に完掘し測量を行った。その調査終了間際の４月７日に第２回遺跡見学会を実施し多数の参加者を得ることができた。そして同月12日から２号水田址の調査に入ったが、その途中で多数の土師器や須恵器、木製品を出土する２・３号溝状遺構も確認し、それぞれの遺構の調査を並行して行った。特に２号溝状遺構における木製品の取り上げ等には手間取ったが、同月26日にはすべて完掘し、27日に器材等を撤去し調査を完了した。

遺物整理は遺物洗浄作業を中心に発掘調査と一部並行しながらすすめられていたが、ミカン箱大のプラスチックコンテナにして約250箱以上に及んだため、その労力たるは膨大なものであった。平成２年10月下旬に水洗、注記、復元作業およびコンピュータによる遺構・遺物データの図化作業、写真測量による図化作業をほぼ終了し、遺物の実測を開始する。それと並行して遺構と遺物のトレース、遺物の写真撮影等を行い、平成３年（1991）12月初旬に一連の作業を完了する。その後、遺構および遺物の図版組と遺物観察表の作成等を行い、原稿の執筆に入った。

なお、宮ノ前遺跡の成果の一部を多くの紙面において公表しているが、その後の整理において遺構数やその名称等に変更がみられる。よってそれらについては本報告書の記載するものが最終的なものであることを断っておきたい。ちなみに、竪穴住居址については遺構番号上では第426号住居址まであるが、欠番（73・108・380号住）が生じたため総数は423軒となっている。また、市当局では、かけがえのない郷土の歴史資料である埋蔵文化財を、学校教育のなかで生かしたいという意向から、校舎内に郷土資料室を設置し、資料室内に平安時代の実物大の竪穴住居址を部分復元し、宮ノ前遺跡出土の遺物や説明パネル等を展示する等、その成果の一部を公表している。

第２章

遺跡の環境

遺跡を南方より望む。条里型地割もわかる。

第１節

地　理　的　環　境

宮ノ前遺跡は、山梨県韮崎市藤井町駒井字宮ノ前に所在する。

韮崎市は、山梨県の北西部、甲府市の北西約13kmに位置し、西方に南アルプス、北方に八ヶ岳（赤岳　標高2899m）、東方に茅ヶ岳（標高1703m）などの山々が囲む。南東側は甲府盆地の一角となって開けており、甲府盆地をはさんで御坂山地の向こうに富士山を望むことができる。

八ヶ岳はフォッサマグナ中央に位置する複式火山で、更新世（１万～200万年前）全般にわたり火山活動がおこなわれ、その活動は古期と新期に分けられている。その古期、末期更新世の中期末頃、15万年ほど前に、現在の権現岳付近が大規模な山体崩壊を起こし、韮崎岩屑流を形成した。この時、甲府盆地南側の曽根丘陵から鰍沢町付近までが岩屑流によって覆われたという。やがて両側を浸食されて残ったのが「七里岩」である。七里岩は八ヶ岳南麓から細長く延びた台地で、長さは約30kmである。高さは40～150m、幅数百m～1.5kmにも及び、屹立した浸食崖を呈す。その特異な地形が「韮崎」の地名起源となったとする説がある。七里岩上には、「流れ山」と呼ぶ山体崩壊時の山体破片が、半球状の円丘として大小100以上もあり、とくに韮崎市穴山付近に多い。武田家最後の城として知られる新府城も、そうした流れ山を利用して構築されている。

この七里岩台地をはさんで東側には秩父山地から塩川が流れ、西側には南アルプスから釜無川が南流し、両河川は隣接する双葉町境付近で合流して甲府盆地に流れ込んでいる。その後釜無川は、甲府盆地で笛吹川などと合流して富士川となり、駿河湾にそそいでいる。

七里岩東側、塩川右岸には長さ9.5km、幅数百m～１kmほどにわたり、平坦で長大な氾濫原である河岸段丘面が形成されている。この段丘面を「藤井平」といい、古くから稲作が盛んである。かつて「藤井五千石」と称せられた肥沃な地域であり、県内では有数の米どころである。この藤井平のほぼ中央、標高388m付近に本遺跡は立地している。塩川まで約800m、七里岩浸食崖まで約300mである。

遺跡の地形環境については第５章で改めて考察するが、現在の塩川として流れが安定する以前は、塩川と支流須玉川が韮崎市桐の木付近で合流した後、藤井平の段丘面上で様々に流れを変えたらしく、いく筋もの埋没旧河道と、自然堤防状の埋没微高地の繰り返しを観察することができる。集落遺跡は主に埋没微高地上に占地し、埋没旧河道は弥生時代以降は水田として利用されてきたようである。また藤井平には条里型地割が広く残り、「中条」、「北下条」、「南下条」などの地名がある。

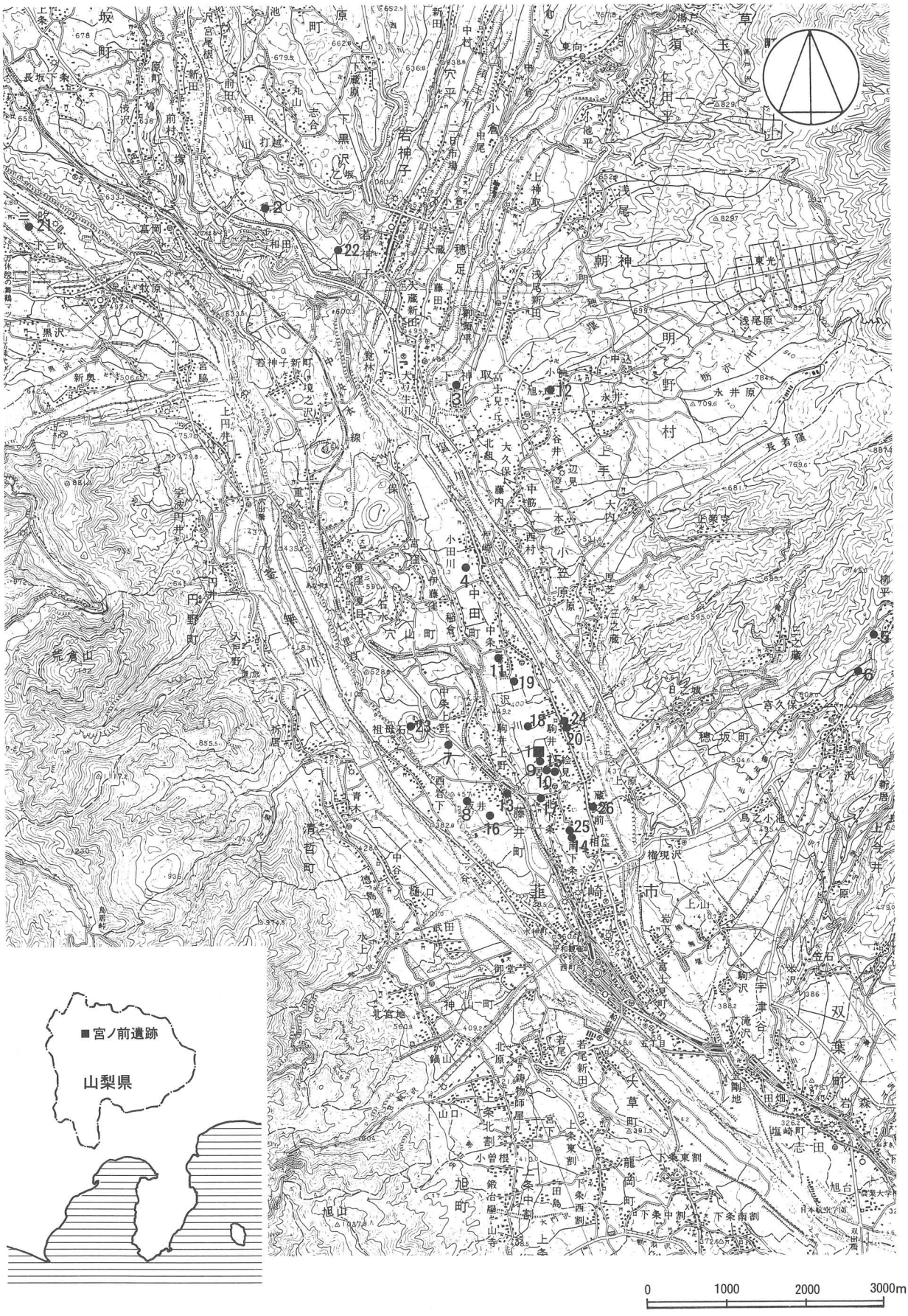
この韮崎市付近は、地質的には八ヶ岳南麓の安山岩地帯、茅ヶ岳山麓のデイサイト地帯、南アルプスの堆積岩・花崗岩地帯の３地帯に分類でき、遺跡東に南流する塩川の河原には、塩川・須玉川の流域に分布する四万十帯の砂岩・粘板岩、新第三紀の花崗岩、飯盛山・水ヶ森の安山岩、茅ヶ岳・黒富士火山のデイサイトがみられる。本遺跡もこうした各種礫からなる礫層上に立地している。

第２節

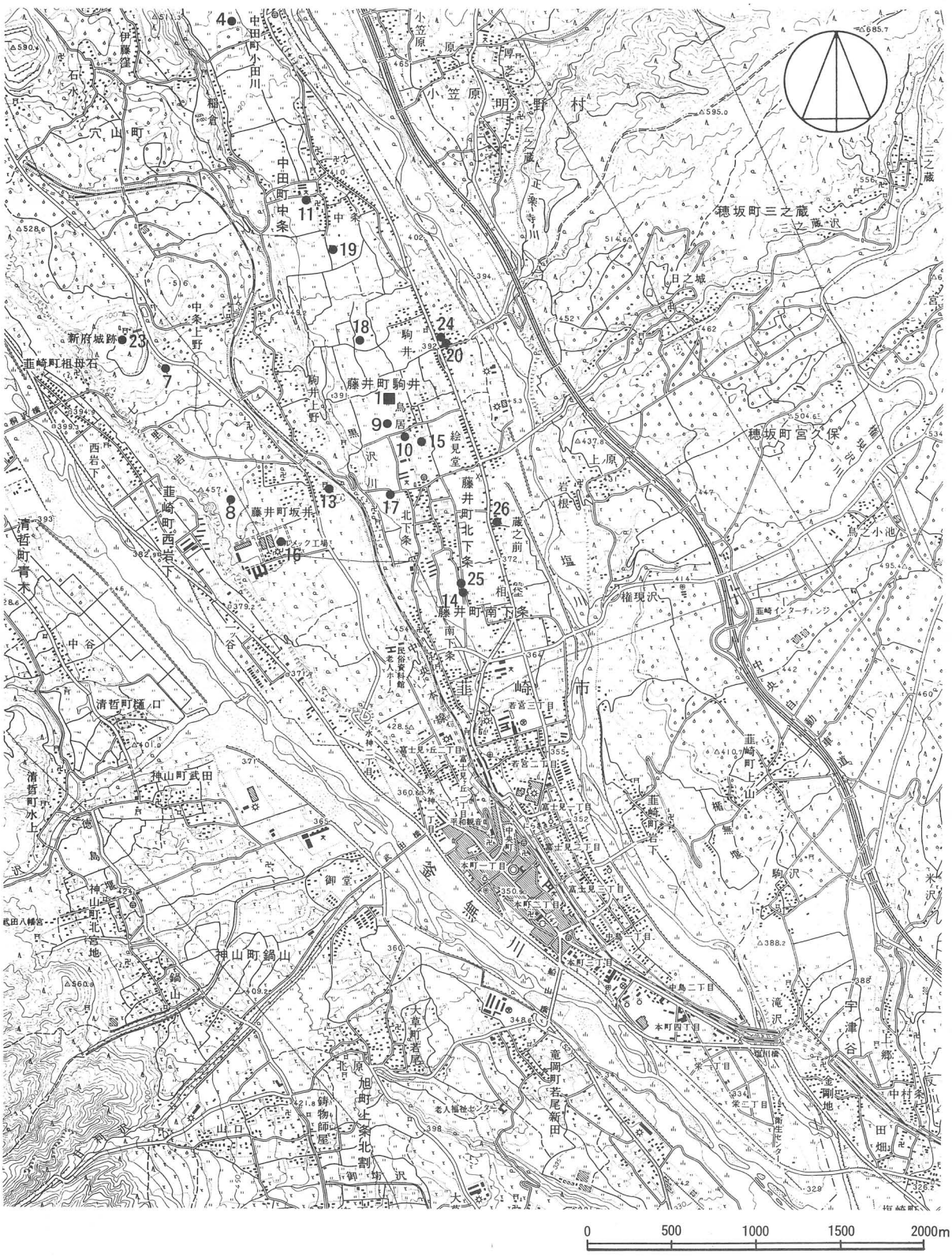
歴　史　的　環　境

藤井平とその周辺では、1985年より圃場整備事業に伴う緊急調査が行われており、新たな遺跡が明らかにされつつある。かつてこの地域をフィールドとして地元の北巨摩郡教育会郷土研究部による『先史原史時代調査』（浅川ほか　1932）の刊行や在野の研究者、志村滝蔵氏や船窪久氏らの活躍があった。考古学研究が比較的早い段階で始まった先駆的な地域である。この地域の主な遺跡を時代順に追って、藤井平の開発の歴史を考えてみたい。

旧石器時代の遺跡は藤井平では確認されていないが、僅かに七里岩台地上縁辺の高根町湯沢遺跡で黒曜石製ナ

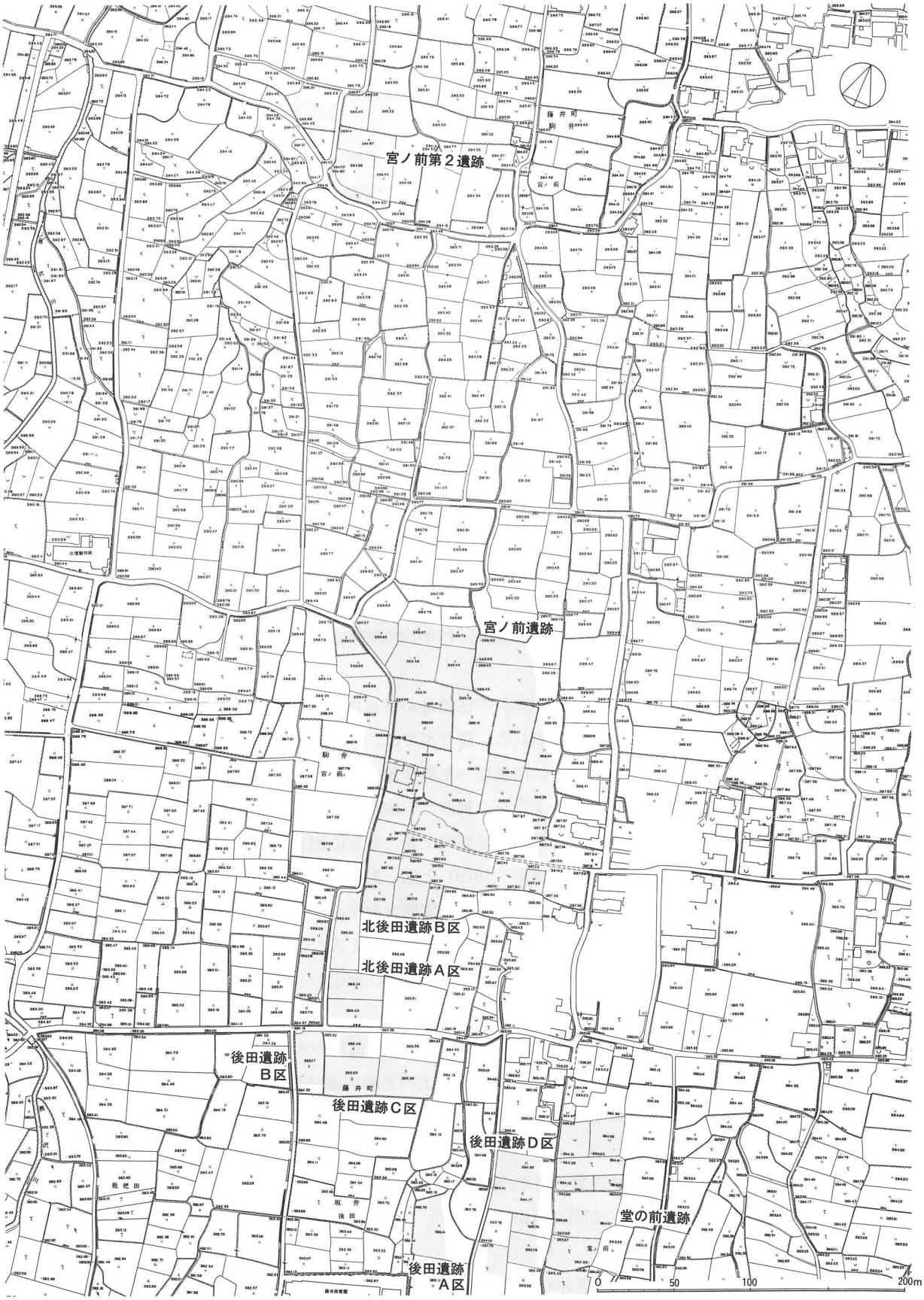


第３図　周辺の遺跡(1)（1/50,000を使用、番号は第４図を参照）



1．宮ノ前遺跡　2．湯沢遺跡　3．神取遺跡　4．中道遺跡　5．中尾根遺跡　6．上手沢遺跡
7．天神前遺跡　8．坂井遺跡　9．北後田遺跡　10．後田遺跡　11．中田小学校遺跡　12．清水端遺跡
13．天王神社遺跡　14．北下条遺跡　15．堂ノ前遺跡　16．坂井南遺跡　17．火の雨塚古墳
18．宮ノ前第２遺跡　19．前田遺跡　20．駒井遺跡　21．宮間田遺跡　22．大小久保遺跡　23．新府城址
24．駒井氏屋敷　25．殿田屋敷　26．蔵の前塁址

第４図　周辺の遺跡(2)（1/25,000を使用）



第５図　宮ノ前遺跡と周辺遺跡

イフ形石器や楔形石器が発見されている（雨宮　1983）。長野県南牧村野辺山の矢出川遺跡群や山梨県高根町清里の丘の公園遺跡に近接した地域でもあり、今後の綿密な調査が必要である。

縄文時代草創期の遺跡は、藤井平では今のところ確認していないが、周辺では明野村神取遺跡で神子柴型石斧１点が発見され、その後の本調査でまとまった資料が得られている。また、長坂町大井ヶ森中込遺跡（浅利ほか1990）では爪形文土器２点が出土している。

早期には、韮崎市中田町中道遺跡（山下　1986）の楕円押型文土器片があり、藤井平に初めて遺跡が出現する。周辺では茅ヶ岳山麓の韮崎市穂坂町中尾根遺跡などに押型文期の遺跡がある。また未報告ではあるが、韮崎市穂坂町上手沢遺跡では撚糸文土器数片が見つかっている。

前期には、本文中で報告しているように、宮ノ前遺跡で前期末住居址１軒と土坑が見つかり、また諸磯b期の土器片もある。周辺では韮崎市坂井天神前遺跡で、かつて志村滝蔵氏が諸磯b～c期の住居址１軒を調査している（志村　1965）。八ヶ岳南麓には、大泉村天神遺跡をはじめとして諸磯b～c期の集落址が多い。

中期には七里岩上の坂井遺跡が代表的であり、狢沢期以降曽利期までがある（志村　1965）。個々の遺跡は取り上げないが八ヶ岳、茅ヶ岳山麓には古くから数多くの遺跡が知られている。藤井平では、宮ノ前遺跡の南に接する北後田遺跡（山下　1990）・後田遺跡（山下　1989a）があり、両者は同一環状集落の一部のようである。住居址は両遺跡合わせて19軒発見されており、うち１軒が後期初頭の可能性があるが、おおよそ曽利Ⅱ～Ⅴ期の集落址である。曽利Ⅱ－２軒、曽利Ⅲ－２軒、曽利Ⅳ－７軒、曽利Ⅴ－３軒で、この縄文中期後半に至ってはじめて継続性をもった集落が形成される。また後田遺跡では環状配石が２箇所見つかり、そのうち２号配石は、環状配石に接続した張り出し部を中心に計12個の正位埋甕を埋設した特殊な遺構であった。土器は曽利Ⅴ期を中心とした大型の深鉢形土器で、12個中10個がＸ字状把手付深鉢形土器である。配石の形状も特異なものであったが、残念ながら圃場整備工事で消滅してしまった。そのほか、中田小学校遺跡（山下　1985b）で曽利Ⅴ期の住居址１軒が見つかっている。

後期には宮ノ前遺跡で称名寺～堀之内式期の３軒の住居址が発見されているが、そのほかに奈良・平安時代の住居構築によって破壊された住居も多いと思われる。藤井平では、中期末以降後期前半の土器は、たいていどの遺跡でも出土しており、中期後半～後期前半に氾濫原へ生活基盤を求めた進出が顕著となっていったようだ。しかし八ヶ岳山麓の大集落にしばしばともなうような、列石や石棺墓などの配石遺構をもつ大集落は見つかっていない。特殊遺物には、後田遺跡に堀之内～加曽利式Ｂ期の土器とともに出土した有脚立体中空土偶がある（山下1989b）。長野県辰野町新町泉水遺跡例（赤羽ほか　1979）と同一形態を示すものであり、周辺ではほかに明野村清水端遺跡、大泉村金生遺跡でも破片が出土しており、甲信地方を中心とした形式分布を予想できる。

晩期になると、藤井平では中道遺跡で浮線網状文を中心とする氷Ⅰ式ないしは氷Ⅰ式前段階の土器と当該期の住居址１軒が見つかっている。また、本遺跡では２号溝状遺構及び周辺から縄文時代晩期～弥生時代前半の土器を多く検出した。

弥生時代には、本文で詳細に説明するように、宮ノ前遺跡で弥生前期の水田１面を発見し、プラント・オパール分析や^{14}C年代測定を行い検証を試みた。そのほか七里岩上の韮崎市藤井町坂井の天王神社遺跡で、未報告ではあるが中期前半と思われる条痕文土器を採集している。また坂井考古館には坂井遺跡出土の容器型土偶があり、中期に位置付けられる。

弥生後期になると藤井平では再び遺跡数が増え、韮崎市中田町中田小学校遺跡で３軒、同藤井町北下条遺跡（山下　1991a）で１軒、同藤井町坂井堂の前遺跡（山下　1987）で４軒の住居址がみられる。いずれも後期後半の櫛描波状文を主体にした土器をもつ。

古墳時代前期には、七里岩上の韮崎市藤井町坂井南遺跡（山下　1984・1988b）で住居址76軒と、浅い谷をはさんで方形周溝墓が４基が見つかり、集落域と墓域の良好な組合わせを示している。また藤井平では、後田遺跡で住居址２軒がある。その後古墳時代中～後期の集落遺跡は見られないが、後期古墳であろうと思われる火の雨塚古墳１基が宮ノ前遺跡の南西、旧藤井小学校西に所在する。

奈良時代になって藤井平の開発は一挙に進んだらしく、宮ノ前第２遺跡（山下　1991b）で３軒、後田遺跡で２軒、堂の前遺跡で３軒、宮ノ前遺跡と連続する北後田遺跡で８軒、北下条遺跡（山下　1991）で６軒、前田遺跡（山下　1988a）で４軒、中田小学校遺跡で11軒、韮崎市藤井町駒井遺跡（山下　1988a）で１軒の住居址が確認されている。

特記すべき遺構として、宮ノ前遺跡に隣接する宮ノ前第２遺跡では集落内寺院１棟が見つかっている。２間×３間の身舎の四方に廂を付けた４間×５間の四面廂付建物址であり、廂部は素掘りの掘立柱、身舎部は柱穴掘り方中に礎石状の礫を入れている。瓦は総数628点で、その内訳は丸瓦148点、平瓦407点、鬼面文鬼瓦９点、熨斗瓦64点である。各種瓦の比率や量、礎石の規模から考えると、棟部のみ瓦葺きであったようだ。技法的には丸瓦は平行叩きの後ナデを施し、平瓦は桶巻き作りで、縄叩きの後５分割しているようである。周辺からは瓦塔片が出土したほか、奈良末～平安初期の寺院との関連性をうかがわせる鉄鉢形須恵器や平城京で壷G類と呼ばれる長頸壷などがある。本文で報告しているように宮ノ前遺跡141号住居址では奈良時代前半～中葉の底部に「寺」の線刻をもつ盤状坏が２点出土し、ほかの地点からは宮ノ前第２遺跡と同一の瓦片が出土するなど、宮ノ前第２遺跡は宮ノ前遺跡と密接なつながりをもつ集落であったようである。

また後田遺跡では円面硯１点が採集されているが、宮ノ前遺跡でも円面硯片数点が出土しており、藤井平の中心部である宮ノ前遺跡付近になんらかの公的な官衙施設が存在したことを示している。

平安時代になると、後田遺跡で10軒、宮ノ前第２遺跡で６軒、堂の前遺跡で12軒、北後田遺跡で21軒、中道遺跡で４軒、北下条遺跡で１軒、前田遺跡で８軒、中田小学校遺跡で７軒の住居址があり、それらに伴う掘立柱建物址もある。その他の遺構に北後田遺跡の井戸１基がある。

平安時代の「和名抄」によると、甲斐国４郡のひとつである巨麻（こま）郡は９郷を有し、一般的には現在の山梨県北巨摩郡、中巨摩郡、南巨摩郡、韮崎市と市川大門町の一部にあたる広大な地域に比定されている。「巨麻」は「高麗」からきたものであることを関晃氏が論証し定説化されており（関　1959）、668年に高句麗が滅亡した後、一部の高句麗系渡来人が巨麻郡に移住して建郡したのが「巨麻郡」であるといわれる。霊亀２年（716）、甲斐をはじめとする７国の高麗人を武蔵国に集め高麗郡をおくという「続日本紀」の記事があり、韮崎市藤井町駒井の「駒井」を「高麗居」と解釈して高麗人の居住地域とする説がある。各郷の位置については諸説があり、藤井平については巨麻郡速見（へみ）郷とする説が有力であるが、栗原郷の一部であるとする説（坂本　1983）もある。

巨麻郡衙の位置について末木氏は、白鳳期の天狗沢瓦窯の所在地で、巨麻郡域でも古墳群が最も密集し、とくに巨大石室をもつ加牟那塚が位置する甲府市湯村～双葉町間の敷島町付近であろうと考えた（末木　1986）。また韮崎市周辺に奈良時代の遺跡が多いことから藤井平付近と考える向きもある。宮ノ前遺跡の調査では、破片ではあるが天狗沢瓦窯と同一叩きをもつ平瓦１点や、円面硯、奈良三彩が出土したり、大型で総柱式の正倉的な掘立柱建物址が見つかるなど官衙的要素が認められる。

ところで中田小学校遺跡では、22号住居址から底部に「葛井」銘墨書をもつ甲斐型坏が出土した。これについて山下孝司氏は「藤井」地名との関連性を指摘し、宝亀９年（778）に甲斐国司に任命された葛井連道依や、天文12年の韮崎市上円井宇波刀神社隋神像の銘文中の「藤井保」に結び付く可能性を考察した（山下　1985a）。一方、末木健氏は速見郷を八ヶ岳南麓の長坂・高根・須玉町南部に想定するとともに、藤井平については、国司葛井氏が高麗人の移動後に荒廃した韮崎市藤井・中田地域を開墾し私領化することによって「当初、速見郷とは別の『葛井保』として成立し、中世に速見庄として合併された」とする新説を提示している（末木　1986）。

さて「延喜式」によると、甲斐国には朝廷に馬を貢納するための御牧が３箇所設置されていた。柏前（かしわざき）牧、真衣野（まきの）牧、穂坂（ほさか）牧である。このうち穂坂牧は、茅ヶ岳山麓の韮崎市穂坂町付近に、真衣野牧は武川村牧ノ原に比定されているが、近年真衣野牧比定地にあたる武川村宮間田遺跡から墨書土器「牧」が見つかり、確証が得られた。柏前牧については従来、高根町念場原方面とする説、勝沼町柏尾とする説が定説であるが、末木氏は、長野県富士見町にある「柏平」、「柏尾」という地名を根拠に、富士見町～小淵沢町に柏前牧を推定した（末木　1987）。いずれにしても、藤井平は各御牧の中心的位置にあたり、稲作を基盤とする高い生産性を生かして御牧の成立、経

営に何らかの形で関与していたと考えられる。

御牧に関して注目されるのが、天長４年（827）、甲斐に牧監を置いたという記事である。牧監の長官は国司に準じる待遇を受けたというが、高根町湯沢の七里岩上で発見された湯沢遺跡は、大形掘立柱建物址や建物群の配置から官衙的な雰囲気があり、牧監の館ではないかとも考えられている。その近くには土師器焼成遺構が検出された大小久保遺跡（山路　1983）があり、造瓦にも携わっていたことが判明している。

最近、岡本範之氏は、真衣野牧と穂坂牧の間に位置する八ヶ岳南麓を、承和２年（835）に一本式部卿葛原親王の賜田として与えられた「巨麻郡馬相野」に比定した（岡本　1990）。これは「馬相野」を「牧と牧の間の土地」と解釈したものである。この八ヶ岳南麓は９世紀代になって一斉に開発が始まった地域であり、集落には掘立柱建物址と鍛冶遺構を伴うなどの共通性があることが既に萩原三雄氏によって指摘されており（萩原　1986）、公権力によって計画的に開発されたのではないかと考えられている。八ヶ岳南麓「馬相野」説は、現段階ではまだ確定的ではないものの、そうした大規模な開発の背景として、藤井平をはじめとする八ヶ岳南麓の周辺地域が果たした役割の大きさが想像されるのである。

平安時代の食膳具に着目した場合、巨麻郡域は甲斐国の中でも灰釉陶器をはじめとする搬入陶器が多く認められる地域である。また信州系ともいわれてきた黒色土器が高い比率を占め、１軒の竪穴住居址内においては地元の甲斐型坏の割合と逆転する場合さえある。これは巨麻郡が信濃国に接し、公的な官道である東海道よりも日常的には東山道との結びつきが強かったためと考えられている。また他の郡に比べ須恵器が多く、信州に多いとされる凸帯壷が巨麻郡各地で発見されるなど、信州系の技術導入による須恵器生産が行われていた可能性もあり、今後、藤井平周辺に須恵器窯が発見される可能性を秘めている。また他の郡にはほとんどないロクロ甕や土師器坏が存在し（八巻　1988）、甲斐型土器に依存する一方で、独自の土器生産を郡単位あるいは小地域単位で行っていた可能性もある。

また前述したように、藤井平では近年の圃場整備による再開発を受けるまでは条里型地割がよく残っていた。この条里型地割は甲府盆地中央部の中央区画条里や春日居町以東の東部条里と方向が少し異っている（森　1990）。藤井平の条里型地割の成立時期に関してはよくわかっていなかったのであるが、宮ノ前遺跡の調査では条里と関係する溝を検出し、住居址との切り合い関係により平安時代に段階的に施行されたと考えられる手がかりを得た。

中世になると、天正９年（1581）、武田勝頼は甲府の躑躅ヶ崎館を廃して韮崎市七里岩台地上に新府城を構築した。その北側には七里岩を横断するように能見城防塁を築き、内側には家臣屋敷を配置し町割も整えられたともいわれる。『甲斐国志』は、七里岩崖下に空堀があったことを伝えており、藤井平の黒沢川沿いにそうした防御施設があった可能性も指摘されている（室伏　1990）。また『山梨県の中世城館跡』によると、藤井平には駒井氏屋敷をはじめ殿田屋敷、蔵の前塁址など９箇所もの館跡が知られている（磯貝ほか　1986）。そうした居館・屋敷を中心に藤井平の農業基盤は整備され、今日見られるような豊かな水田地帯が形成されてきたものと思われる。

第 3 章

各時代の遺構

竪穴住居址の調査

第１節

竪穴住居址

第１号住居址　（第１・130図、図版３）

（位置）Ａ24Ｂ21グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－77°－Ｅ。**（規模）**3.13ｍ×2.82ｍ。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。規模0.92ｍ×0.66ｍ。深さ５㎝。**（床）**7.30㎡。深さ40㎝。標高388.0ｍ。竈周辺のみ堅固。**（壁溝）**全周する。幅20～25㎝、深さ６～10㎝。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在する。**（遺物）**土師器坏Ａ。**（時期）**不明。

第２号住居址　（第１・130図、図版３・82）

（位置）Ａ23・24Ｂ21グリッド。**（重複）**８号溝と重複し、本住居址の方が古い。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－72°－Ｅ。**（規模）**3.40ｍ×3.25ｍ。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。竈内に袖石・天井石が崩落し、掘り方のみ残存。規模1.12ｍ×0.80ｍ。深さ10㎝。**（床）**9.41㎡。深さ43㎝。標高387.97ｍ。竈周辺部のみ堅固。**（壁溝）**西壁下で途切れるが、ほぼ全周する。幅17～28㎝、深さ６～８㎝。**（遺物出土状況）**床面直上および覆土、竈内より散在的に出土。**（遺物）**須恵器坏・蓋Ａ・甕。**（時期）**宮ノ前Ⅴ期。

第３号住居址　（第１・130・131図、図版３・82）

（位置）Ａ22・23Ｂ22グリッド。**（重複）**２号掘立と重複し、本住居址の方が新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－72°－Ｅ。**（規模）**4.02ｍ×4.02ｍ。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。天井石と思われる礫が燃焼部内に崩落。規模1.09ｍ×0.72ｍ。深さ４㎝。**（床）**14.2㎡。深さ55㎝。標高387.85ｍ。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅21～32㎝、深さ10～12㎝。**（遺物出土状況）**床面直上および床面上約数十㎝のレベルの覆土内から散在的に出土。量は多くない。**（遺物）**土師器坏Ａ・甕Ａ、須恵器高台坏・鉢Ａ・Ｂ、釘・鉄斧・鉄鏃。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期。

第４号住居址　（第１・131図、図版３）

（位置）Ａ21・22Ｂ21グリッド。**（重複）**７号溝と重複し、本住居址の方が古い。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－79°－Ｅ。**（規模）**4.02ｍ×3.48ｍ。**（覆土）**竈の前面部に人頭大の礫が、床面上数㎝浮いたレベルで集中してみられる。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。袖石の一部が残存。規模1.13ｍ×0.73ｍ。深さ４㎝。**（床）**12.0㎡。深さ12～15㎝。標高387.76ｍ。竈周辺部のみ堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅17～20㎝、深さ７～10㎝。**（遺物出土状況）**南壁下および竈北側から散在的に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・皿（墨書あり）・小型甕Ｂ、黒色土器坏、須恵器壷・甕。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第５号住居址　（第２・131図、図版３）

（位置）Ａ21Ｂ23グリッド。**（重複）**40号住と重複し、本住居址の方が古い。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－88°－Ｅ。**（規模）**3.23ｍ×3.33ｍ。**（覆土）**住居址中央にて人頭大の礫が床面上数㎝のレベルで集中してみられる。**（竈）**東壁に存在したと思われるが、40号住に切られ欠失している。**（床）**推定9.46㎡。深さ25㎝。標高387.69ｍ。全体に堅固である。**（壁溝）**ほぼ全周すると思われる。幅23～30㎝、深さ６～15㎝。**（遺物出土状況）**量的には極めて少なく、北西コーナー付近の床面直上から須恵器壷の底部破片出土。**（遺物）**土師器蓋Ｂ、須恵器壷。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第６号住居址　（第２・132図、図版３・４・82）

（位置）Ａ20・21Ｂ23グリッド。**（重複）**40・103号住と重複し、40・103号住よりも新しい。**（形状）**隅丸方形。

N－83°－E。**（規模）**3.58m×3.35m。**（覆土）**竈付近を中心に人頭大の礫が床面上数cmのレベルで集中してみられる。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。袖石・天井石の一部が残存。規模1.17m×0.60m。深さ9cm。**（床）**10.0㎡。深さ36cm。標高387.54m。竈周辺部から住居址中央にかけて堅固である。**（壁溝）**全周する。幅18～28cm、深さ6～10cm。**（遺物出土状況）**北壁、東壁、南壁の壁下および竈内から出土。**（遺物）**土師器坏A・高台坏（線刻あり）・甕A、須恵器坏C（線刻あり）・甕・蓋A、鉄鏃・鑿？・鉸具？。**（時期）**宮ノ前VI期。

第7号住居址　（第2・132図、図版4）

（位置）A20・21B23グリッド。**（重複）**30･67･103号住と重複し、いずれの住居址よりも新しい。**（形状）**隅丸方形。N－147°－W。**（規模）**3.52m×3.68m。**（竈）**石組み。南西コーナーに位置する。袖石の一部および支脚石が残存。規模1.15m×0.55m。深さ10cm。**（床）**11.3㎡。深さ約10cm。標高387.78m。竈周辺部のみやや堅固。他は軟弱。**（壁溝）**なし。**（遺物出土状況）**竈付近からわずかに出土。**（遺物）**土師器小型甕C。**（時期）**宮ノ前XI期？。

第8号住居址　（第2・132図、図版4・82）

（位置）A21B22グリッド。**（重複）**8号溝、8号掘立と重複。前者より古く、後者より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－81°－E。**（規模）**3.25m×3.15m。**（竈）**石組みと思われる。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。袖石・支脚石等はすべて抜かれており、それらを据えた径20cm、深さ約10cmのピットのみ残存。焼土が顕著。規模0.9m×0.9m。深さは床面とほぼ同レベル。**（床）**8.21㎡。深さ35cm。標高387.458m。竈周辺部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅25～30cm、深さ15～20cm。**（遺物出土状況）**南壁下周辺および竈内から少量出土。**（遺物）**土師器坏A、須恵器坏・短頸壷C。**（時期）**宮ノ前V～VI期。

第9号住居址　（第2・133図、図版4・82）

（位置）A25B22・23グリッド。**（重複）**17号掘立と重複し、掘立より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－75°－E。**（規模）**3.05m×3.15m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。竈前面部に構築の際に使用されたと思われる平石等の礫がみられる。袖石と天井石の一部が残存。規模1.30m×0.95m。深さ15cm。**（床）**8.62㎡。深さ約20cm。標高388.56m。竈周辺のみ堅固。他は軟弱。**（壁溝）**全周する。幅15～18cm、深さ6～10cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在する。**（遺物）**土師器坏A・椀・甕A、棒状鉄製品。**（時期）**宮ノ前IX期。

第10号住居址　（第3・133図、図版4・82）

（位置）A25B23グリッド。**（重複）**17号掘立と重複。掘立より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－85°－E。**（規模）**3.20m×3.80m。**（覆土）**焼失住居で覆土全体には多量の焼土・炭化物を含み、床面直上より堆積がみられる。**（竈）**石組み。東竈。東壁の南東コーナー近くに位置する。袖石の一部が残存。規模1.10m×1.05m。深さ10cm。**（床）**10.2㎡。深さ約35cm。標高388.47m。竈周辺部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**入り口施設の関係であろうか、北壁から北西コーナー付近で途切れるが、あとは巡っている。幅18～32cm、深さ5～7cm。**（遺物出土状況）**住居址全体にわたり床面直上および覆土内から多量に出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿・小型甕A、須恵器壷、黒色土器坏、竈形土器、緑釉陶器皿・椀、土錘、鉄滓。**（時期）**宮ノ前IX期。

第11号住居址　（第3・134図、図版4・5・82）

（位置）A25・26B23・24グリッド。**（重複）**2・3号溝と重複。両溝より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－86°－E。**（規模）**3.11m×3.65m。**（覆土）**焼失住居で覆土は焼土と炭化物を多量に含んだ暗褐色土層と焼土・炭化物層から成る。また、覆土内には人頭大の礫を多数含む。**（竈）**石組み。東竈。東壁の南東コーナー付近に位置する。袖石の一部、支脚石が残存。規模1.14m×0.58m。深さ6cm。**（床）**9.89㎡。深さ約20cm。標高388.66m。竈周辺部と住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅18～28cm、深さ5～10cm。**（柱穴）**柱穴は確認されて

いないが、炭化した径10～15cmの柱材が出土している。**（遺物出土状況）**住居址全体にわたって出土し、その量も多い。**（遺物）**土師器坏（墨書あり）・皿・小型甕C・甕A、黒色土器坏・椀、灰釉陶器皿、須恵器甕。**（時期）**宮ノ前X期。

第12号住居址　（第３・134図、図版５・83）

（位置）A26B24・25グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸方形。N－18°－W。**（規模）**3.5m×3.22m。**（竈）**石組み。北竈。北壁中央やや西寄りに位置する。袖石の一部残存。また、袖石と支脚石を据えたと思われる径20～25cm、深さ５～10cmのピットあり。規模1.24m×1.00m。深さ14cm。**（床）**10.3㎡。深さ13cm。標高388.50m。全体に軟弱である。**（遺物出土状況）**竈周辺部から少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器坏A・甕A・小型甕C、須恵器高台坏A。**（時期）**宮ノ前VI期。

第13号住居址　（第３・135図、図版５・83）

（位置）A26B25・26グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸方形。N－12°－W。**（規模）**4.4m×4.5m。**（竈）**石組み。北竈。北壁中央やや東寄りに位置する。袖石およびそれらを据えた径15cm、深さ５cmのピットあり。規模1.00m×0.98m。深さ12cm。**（床）**18.5㎡。深さ８cm。標高388.60m。全体に軟弱である。**（壁溝）**全周する。幅22～27cm、深さ６～10cm。**（遺物出土状況）**比較的多量の遺物が住居址全体にわたって散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿・蓋A・鉢・甕A、須恵器坏。**（時期）**宮ノ前VI期。

第14号住居址　（第４・135図、図版５）

（位置）A27B26グリッド。**（重複）**４号掘立と重複。掘立よりも古い。**（形状）**隅丸方形。N－14°－W。**（規模）**2.77m×3.10m。**（覆土）**焼失住居で覆土は炭化物・焼土・灰を多量に含む暗褐色土で炭化物が床面上約数cmの厚さでみられる。**（竈）**北竈。北壁のほぼ中央に位置する。石組みだと思われるが袖石等は欠失しており、掘り方のみ残存。規模0.84m×0.82m。深さ６cm。**（床）**6.88㎡。深さ５～12cm。標高388.75m。全体に軟弱である。**（その他の施設）**竈東脇に径64cm×61cm、深さ10cm、楕円形を呈する貯蔵穴状のピットあり。**（遺物出土状況）**床面直上および覆土内、貯蔵穴状ピット内から比較的多量の遺物が出土。**（遺物）**土師器坏A・甕A、灰釉陶器小瓶。**（時期）**宮ノ前IV期。

第15号住居址　（第４・136図、図版５・83）

（位置）A23B23・24グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸方形。N－82°－E。**（規模）**3.55m×3.50m。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。石組み竈と思われるが、袖石等はすべて欠失しており、掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.74m×0.52m。深さ５cm。**（床）**11.1㎡。深さ８～15cm。標高388.26m。全体に軟弱である。**（壁溝）**全周する。幅10～18cm、深さ５cm。**（その他の施設）**竈東脇に径0.63m×0.58m、深さ８cmの貯蔵穴状のピットあり。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺、貯蔵穴状ピット内から主に出土。**（遺物）**土師器坏A・皿、黒色土器坏、鉄滓。**（時期）**宮ノ前IX～X期。

第16号住居址　（第４・136図、図版５・83）

（位置）A23B23グリッド。**（重複）**9･13号溝、41･44･55号住、２号掘立と重複。両溝および44号住より古く、41･55号住、２号掘立より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－74°－E。**（規模）**3.64m×3.18m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.05m×0.60m。深さ２cm。**（床）**9.83㎡。深さ35cm。標高388.05m。竈周辺部のみ堅固。**（壁溝）**南西コーナー壁下で一端途切れるが、あとは巡っている。幅15～20cm、深さ５～７cm。**（遺物出土状況）**竈周辺部を中心に少量出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿・甕A、須恵器坏、釘。**（時期）**宮ノ前VII期。

第17号住居址　（第４・136図、図版５・83）

（位置）A26B23グリッド。**（重複）**４号溝、３号掘立と重複。前者より古く、後者より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－81°－E。**（規模）**2.56m×2.72m。**（覆土）**焼失住居で、覆土全体に炭化物および焼土を多量に含んでいる。**（竈）**石組み。東竈。東壁の南東コーナー間近に位置する。袖石の一部が残存。規模0.90m×0.78m。深さ５cm。**（床）**推定6.15㎡。深さ15cm。標高388.69m。竈周辺部のみ堅固。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅15～20cm、深さ５cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺部を中心に少量出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿、羽釜A、灰釉陶器皿。**（時期）**宮ノ前IX期。

第18号住居址　（第４・137図、図版５・83）

（位置）A24・25B23グリッド。**（重複）**54号住と重複。54号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－87°－E。**（規模）**3.58m×3.62m。**（覆土）**焼失住居で、住居址中央部には焼土を多量に含んだ暗褐色土が床面上約数cmの厚さで堆積している。**（竈）**東竈。東壁の北東コーナー間近に位置する。石組みと思われるが、袖石等はすべて欠失し、掘り方のみ残存。燃焼部には袖石を据えたと思われる径25cm、深さ５～６cmのピットあり。焼土は顕著。規模1.38m×0.90m。深さ６cm。**（床）**11.4㎡。深さ29cm。標高388.43m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅18～28cm、深さ５～10cm。**（遺物出土状況）**比較的多量の遺物が住居址全体にわたって散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A・皿・小型甕B、羽釜A、土師器墨書土器片、黒色土器坏、灰釉陶器椀、棒状鉄製品・釘・鉄滓。**（時期）**宮ノ前IX期。

第19号住居址　（第５・137図、図版６・84）

（位置）A24B23グリッド。**（重複）**直接の重複はないが、54号住とは極近接している。**（形状）**隅丸方形。N－77°－E。**（規模）**2.95m×2.55m。**（竈）**石組み。東竈。東壁の南東コーナー間近に位置する。袖石の一部および支脚石が残存し、袖石が抜かれた痕跡が認められる。規模1.07m×0.70m。深さ２cm。**（床）**6.19㎡。深さ28cm。標高388.30m。竈周辺部のみ堅固。**（壁溝）**北東コーナー壁下で一端途切れるが、あとは巡っている。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺部を中心に出土。**（遺物）**土師器坏A・皿（墨書あり）、黒色土器坏。**（時期）**宮ノ前IX期。

第20号住居址　（第５・137図、図版６）

（位置）A24B23グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸方形。N－85°－E。**（規模）**3.20m×3.17m。**（竈）**東竈。東壁の南東コーナー間近に位置する。ほとんど原形をとどめていないため、その構造については不明。おそらく石組み竈であろう。規模1.00m×0.80m。深さは床面とほぼ同レベル。**（床）**9.07㎡。深さ15cm。標高388.47m。全体に軟弱である。**（壁溝）**東壁下に一部その痕跡が認められるが、あとは不明。**（柱穴）**径45cm前後、深さ20cm前後のピットが４箇所確認されているが、柱穴かどうかは不明。**（遺物出土状況）**覆土内を中心に散在的に少量出土。**（遺物）**須恵器坏。**（時期）**不明。

第21号住居址　（第５・138図、図版６・84）

（位置）A23・24B22・23グリッド。**（重複）**９・10号溝と重複。両溝より古い。**（形状）**隅丸方形。N－87°－E。**（規模）**3.63m×3.50m。**（竈）**石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。袖石・天井石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.16m×0.82m。深さ12cm。**（床）**10.9㎡。深さ40cm。標高388.07m。竈周辺部のみ堅固。**（壁溝）**全周する。幅13～29cm、深さ７～12cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺部、住居址中央部付近から比較的集中して多量に出土。**（遺物）**土師器坏A・高台坏・甕A、黒色土器、須恵器鉢B、刀子・鎌・鑿状鉄製品。**（時期）**宮ノ前VI期。

第22号住居址　（第５・139図、図版６・84）

（位置）A24B21グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸方形。N－76°－E。**（規模）**2.78m×2.55m。**（竈）**東竈。

東壁中央。袖石等はすでに欠失しており、掘り方をとどめるのみ。掘り方内には袖石等を据えたと思われるピットがみられる。規模1.15m×1.12m。深さ6cm。**（床）**5.91㎡。深さ42cm。標高388.05m。竈周辺部のみ堅固。**（壁溝）**全周する。幅15～24cm、深さ6～10cm。**（遺物出土状況）**北・西・南壁下および竈内より散在的に少量出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・甕A、須恵器高台坏・甕、鉄鏃。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期。

第23号住居址　（第6・140図、図版6・84）

（位置）A27B24グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸方形。N－96°－W。**（規模）**2.82m×2.64m。**（覆土）**焼失住居で、住居址南側を中心に炭化材および炭化物の分布がみられる。**（竈）**石組み。南西コーナー竈。両袖石残存。焼土も顕著。規模1.06m×0.86m。深さ9cm。**（床）**6.19㎡。深さ18cm。標高388.72m。全体に軟弱である。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅18～28cm、深さ5cm。**（遺物出土状況）**東壁下および南壁下より集中して出土。竈西脇から緑釉陶器出土。**（遺物）**土師器坏A・皿（坏・皿ともに墨書あり）、黒色土器坏（墨書あり）、緑釉陶器椀。**（時期）**宮ノ前Ⅸ～Ⅹ期。

第24号住居址　（第6・140図、図版6・84）

（位置）A24・25B26グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸方形。N－78°－E。**（規模）**3.39m×3.25m。**（竈）**石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。袖石の一部が残存するが、石組みは原形をほとんどとどめていない。焼土は顕著。規模1.28m×0.82m。深さ6cm。**（床）**9.72㎡。深さ30cm。標高388.56m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅23～30cm、深さ8～10cm。**（遺物出土状況）**竈前面部のほぼ床面直上から、完形の土師器坏出土。他は竈内および住居址全体から散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A・甕A・小型甕A、黒色土器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第25号住居址　（第6・140・141図、図版6・85）

（位置）A23・24B24グリッド。**（重複）**48･52･53号住、24号掘立と重複。いずれの遺構よりも新しい。**（形状）**隅丸方形。N－85°－E。**（規模）**4.68m×4.00m。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部、支脚石が残存するが、天井石は煙道部に落ち込んでいる。焼土は顕著。規模1.39m×0.87m。深さ13cm。**（床）**15.5㎡。深さ52cm。標高388.10m。竈周辺部から住居址中央部は堅固。**（壁溝）**北壁下で一部途切れるが、あとはすべて巡っている。幅24～35cm、深さ6～8cm。**（柱穴）**径40cm前後、深さ15～20cm前後を測るピットが4箇所確認されている。その配置等から柱穴と思われる。**（遺物出土状況）**床面直上からの出土もあるがその量は少なく、床面上約15～30cmのレベルからの出土が多い。しかし特に集中した傾向はみられない。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿（墨書あり）・甕A・小型甕A、黒色土器坏・高台皿、須恵器甕、釘。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第26号住居址　（第6・142図、図版7・85）

（位置）A24B26グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸方形。N－82°－E。**（規模）**3.90m×3.90m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部が残存するが、ほとんど原形をとどめていない。焼土は顕著。規模1.38m×0.95m。深さ8cm。**（床）**13.4㎡。深さ20cm。標高388.56m。竈周辺部は堅固。他は軟弱。**（壁溝）**全周する。幅18～22cm、深さ6～16cm。**（遺物出土状況）**竈内および住居址中央部付近のほぼ床面直上から散在的に出土している。**（遺物）**土師器坏A・鉢AⅠ・甕A、羽釜B、黒色土器坏、須恵器蓋A。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第27号住居址　（第7・142図、図版7・85）

（位置）A21・22B24・25グリッド。**（重複）**28･31号掘立と重複。本住居址の方が新しい。**（形状）**隅丸方形。N－8°－W。**（規模）**3.70m×3.60m。**（覆土）**竈南東部にて床面直上および床面上約15cmのレベルに、拳大～人頭大の礫を含んでいる。**（竈）**石組み。北竈。北壁ほぼ中央に位置する。両袖石の一部は残存するが、ほとんどは崩落

し燃焼部、煙道部に落ち込んでいる。規模0.92m×0.79m。深さ2cm。**(床)** 11.1㎡。深さ24cm。標高387.90m。竈周辺部は堅固。**(壁溝)** 全周する。幅17～24cm、深さ4～9cm。**(遺物出土状況)** 竈内および竈周辺、南壁、西壁下等から散在的に出土。ほぼ床面直上が多い。古手の様相示す土器群が南壁下周辺で出土しているため、本住居址より古い住居址等の遺構の存在が考えられる。**(遺物)** 土師器坏A・皿・甕A、黒色土器坏、灰釉陶器椀、須恵器長頸壷A・甕胴部破片利用転用硯。**(時期)** 出土した土器は宮ノ前Ⅶ期とⅨ期の様相を含んでいる。

第28号住居址　(第7・143図、図版7・85)

(位置) A26・27B24グリッド。**(重複)** 64・93・119号住、29号掘立と重複。いずれの遺構よりも新しい。**(形状)** 隅丸方形。N－79°－E。**(規模)** 4.25m×4.04m。**(竈)** 石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。袖石・天井石等は崩落し原形をとどめていない。焼土は顕著。規模1.16m×0.84m。深さは床面とほぼ同レベル。**(床)** 14.9㎡。深さ22cm。標高387.94m。竈周辺は非常に堅固。**(壁溝)** 全周する。幅17～29cm、深さ9～20cm。**(遺物出土状況)** 竈内および竈周辺部から主に出土している。**(遺物)** 土師器坏A・皿・甕A、黒色土器坏。**(時期)** 出土した土器は宮ノ前Ⅶ期とⅨ期との様相を含んでいる。

第29号住居址　(第7・143図、図版7)

(位置) A23B25・26グリッド。**(重複)** 71・83号住と重複し、両住居址より古い。**(形状)** 隅丸方形。N－82°－E。**(規模)** 4.25m×4.00m。**(竈)** 石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。袖石の大半と天井石は欠失し、支脚石のみが残存。燃焼部には袖石を据えたと思われる径15～20cm、深さ5～6cmを測るピットがあり。焼土は顕著。規模1.18m×0.79m。深さ15cm。**(床)** 14.8㎡。深さ39cm。標高388.00m。竈周辺部は堅固。他は軟弱。**(壁溝)** 全周する。幅20～28cm、深さ7～9cm。**(遺物出土状況)** 床面直上出土の遺物はなく、覆土内が中心。その量は少ない。**(遺物)** 土師器坏A・甕A・小型甕A、須恵器坏。**(時期)** 宮ノ前Ⅶ期。

第30号住居址　(第7・143図、図版7・85)

(位置) A21B23グリッド。**(重複)** 7・40・67・103号住と重複。7号住より古く、40・67・103号住より新しい。**(形状)** 隅丸方形。N－74°－E。**(規模)** 4.90m×4.50m。**(竈)** 石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。両袖石の一部が残存。燃焼部と煙道部には平石等の礫が落ち込んでいる。焼土は顕著。規模1.15m×0.72m。深さ12cm。**(床)** 19.9㎡。深さ27cm。標高387.76m。竈周辺部は堅固。**(壁溝)** 全周すると思われる。幅18～28cm、深さ6～10cm。**(遺物出土状況)** 竈内および竈周辺から集中的に出土。住居址中央やや南寄りの床面直上から、土錘がまとまって出土している。**(遺物)** 土師器坏A(タール付着あり)・皿・小型甕E、須恵器坏、土錘。**(時期)** 宮ノ前Ⅷ～Ⅸ期。

第31号住居址　(第8・144図、図版7・86)

(位置) A23B25・26グリッド。**(重複)** 45・50・87・99・122号住、20・33号掘立と重複。99・122号住、20・33号掘立より新しく、45・50・87号住より古い。**(形状)** 隅丸方形。N－83°－E。**(規模)** 4.20m×4.25m。**(竈)** 石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。両袖石・天井石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.01m×4.25m。深さ10cm。**(床)** 推定16.5㎡。深さ30cm。標高388.11m。竈周辺部は非常に堅固。**(壁溝)** 全周すると思われる。幅18～26cm、深さ10～12cm。**(遺物出土状況)** 少量の遺物が散在的に出土。**(遺物)** 土師器皿(墨書あり)・小型甕C・D、黒色土器坏、刀子・鉄滓、砥石。**(時期)** 宮ノ前Ⅷ期。

第32号住居址　(第8・144図、図版7・86)

(位置) A24・25B24グリッド。**(重複)** 47・49号住、25・26・27号掘立と重複。47・49号住より古く、25・26・27号掘立より新しい。**(形状)** 隅丸方形。N－83°－E。**(規模)** 3.76m×3.94m。**(竈)** 石組み。東竈。東壁南東コーナー付近に位置する。両袖石・天井石の一部・支脚石が残存。焼土は顕著。規模1.14m×0.76m。深さ9cm。**(床)** 推

定13.0㎡。深さ28cm。標高388.44m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅20～26cm、深さ８～12cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が竈内を中心に出土。**（遺物）**土師器坏A、須恵器高台坏（線刻あり）。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第33号住居址　（第８・144図、図版８・86）

（位置）A23B27グリッド。**（重複）**135号住、14号溝と重複。前者より新しく、後者より古い。**（形状）**隅丸方形。N－80°－E。**（規模）**5.04m×4.74m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石は残存するが、天井石は欠失している。焼土は顕著。規模1.35m×0.78m。深さ12cm。**（床）**21.9㎡。深さ48cm。標高388.47m。竈周辺部のみ堅固。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅19～33cm、深さ７～12cm。**（遺物出土状況）**住居址東側の床面直上から散在的に出土している。**（遺物）**土師器坏A（線刻あり）・甕A・小型甕C、黒色土器坏、須恵器壷、鉄斧。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第34号住居址　（第９・145図、図版８・86）

（位置）A24B25グリッド。**（重複）**71号住と重複するが、新旧関係は不明。**（形状）**隅丸方形。N－82°－E。**（規模）**5.00m×4.95m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石は残存するが、天井石と思われる平石が煙道部内に落ち込んでいる。焼土は顕著。規模1.49m×0.89m。深さ12cm。**（床）**21.4㎡。深さ48cm。標高388.10m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅19～30cm、深さ６～８cm。**（遺物出土状況）**住居址全域にわたって多量の遺物が出土。**（遺物）**土師器坏A・小型甕A、黒色土器坏・椀・高台皿（坏・皿ともに墨書あり）、須恵器高台坏、灰釉陶器椀。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第35号住居址　（第９・145図、図版８・86・87）

（位置）A22B25・26グリッド。**（重複）**77・99・122・123・124号住、20・33号掘立と重複。いずれの遺構より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－88°－E。**（規模）**4.82m×4.66m。**（覆土）**床面直上から床面上約10cmのレベル内に、拳大～人頭大の礫が多量に出土。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石・支脚石・天井石の一部が残存する。焼土は顕著。規模1.00m×0.65m。深さ４cm。**（床）**19.7㎡。深さ45cm。標高388.03m。竈周辺部は非常に堅固。**（壁溝）**東壁の南東コーナー付近、南壁の南西コーナー付近で途切れるが、あとは巡っている。幅24～35cm、深さ８～12cm。**（その他の施設）**竈南脇に径85cm×75cm、深さ18cmを測る貯蔵穴状ピットあり。**（遺物出土状況）**竈周辺部を中心に比較的多量の遺物が散在的に出土し、貯蔵穴状ピット内からも土師器坏の墨書土器が出土している。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿・鉢AⅠ・甕A・小型甕A、灰釉陶器皿、鉄鏃・棒状鉄製品・鉄滓。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第36号住居址　（第９・146図、図版８・87）

（位置）A21B25・26グリッド。**（重複）**90・128号住と重複。両者より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－83°－E。**（規模）**3.84m×3.76m。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー間近に位置する。袖石や天井石は崩落し原形をとどめていない。焼土は顕著。規模0.93m×0.93m。深さ11cm。**（床）**12.5㎡。深さ18cm。標高388.08m。竈前面部のみ堅固。他は軟弱。**（壁溝）**全周する。幅18～34cm、深さ５～６cm。**（遺物出土状況）**竈周辺部のほぼ床面直上から散在的に出土し、覆土内出土も多い。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・鉢AⅡ・甕A・小型甕A、黒色土器坏、須恵器高台坏A・壷、竈形土器、刀子・鉄鏃。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第37号住居址　（第10・146図、図版８・87）

（位置）A23B26グリッド。**（重複）**83号住、31・40号土坑と重複。いずれの遺構より古い。**（形状）**隅丸長方形。N－82°－E。**（規模）**3.75m×3.35m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部が残存する。燃焼部内には天井石や袖石として使用されたと思われる礫が多数落ち込んでいる。焼土は顕著。規模1.26m×

0.75m。深さ10cm。**（床）**11.0㎡。深さ70cm。標高388.25m。竈周辺部のみ堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅15～40cm、深さ12～22cm。**（遺物出土状況）**竈内を中心に出土し、住居址覆土内からも散在的に出土。**（遺物）**土師器甕A、須恵器坏、灰釉陶器壷、釘・筒状銅製品。**（時期）**宮ノ前V期？。

第38号住居址　（第10・147図、図版８・87）

（位置）A24・25B26グリッド。**（重複）**402･403号住と重複。おそらく両者より新しいと思われる。**（形状）**隅丸方形。N－79°－E。**（規模）**3.75m×3.71m。**（覆土）**床面直上および床面上数cmのレベル内に拳大～人頭大の礫散在的に含む。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。袖石の一部が残存する。焼土は顕著。規模1.25m×0.78m。深さ５cm。**（床）**12.4㎡。深さ40cm。標高388.33m。調査途中に湧水したため床の状況は不明。**（壁溝）**確認できず。**（柱穴）**住居址中央の主軸線上に径30cm前後、深さ20cm前後を測るピットあり。そのピット内に柱材と思われる径５cmの木材片が遺存。**（遺物出土状況）**竈前面部の床面直上を中心に比較的多量の遺物が出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿、羽釜A、内黒土器坏・椀、灰釉陶器椀、須恵器高坏、転用硯（灰釉陶器製）。**（時期）**宮ノ前IX期。

第39号住居址　（第10・147図、図版８・87）

（位置）A24・25B27グリッド。**（重複）**165号住と重複。165号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－87°－E。**（規模）**4.00m×3.50m。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー付近に位置する。石組み構造だと思われるが袖石や天井石は欠失し、原形をとどめていない。掘り方のみ残存。規模0.96m×0.95m。深さ９cm。**（床）**推定12.7㎡。深さ15cm。標高388.17m。全体に軟弱。**（壁溝）**北壁、東壁、西壁の壁下で一部途切れるが、他は巡っている。幅15～30cm、深さ７～10cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺部を中心に出土。**（遺物）**土師器坏A（ヘラ書あり）・皿（線刻あり）・甕A、黒色土器鉢。**（時期）**宮ノ前VI期。

第40号住居址　（第10・147図、図版８）

（位置）A21B23グリッド。**（重複）**５･６･30･103号住と重複。６･30号住より古く、５･103号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－82°－E。**（規模）**3.38m×3.42m。**（竈）**東竈。東壁ほぼ中央に位置する。袖石等は全て欠失し、掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.71m×0.82m。深さ13cm。**（床）**10.7㎡。深さ28cm。標高387.62m。竈周辺部は非常に堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅20～28cm、深さ10cm。**（遺物出土状況）**竈周辺部から散在的に少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器坏A・甕A、土錘。**（時期）**宮ノ前VII期。

第41号住居址　（第11・148図、図版９・87）

（位置）A22・23B22・23グリッド。**（重複）**16･55号住、２号掘立と重複。16号住より古く、55号住、２号掘立より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－78°－E。**（規模）**3.72m×3.77m。**（覆土）**竈周辺部の床面直上および床面上５～６cmのレベルに拳大～人頭大の礫の混入がみられる。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。袖石の一部が残存するが、天井石等はない。竈前面部に構築材の礫散乱。焼土は顕著。規模0.80m×0.57m。深さ10cm。**（床）**12.6㎡。深さ28cm。標高388.02m。竈周辺部のみ堅固。**（壁溝）**全周する。幅14～21cm、深さ７～11cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺から少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**土師器甕CII、須恵器坏。**（時期）**宮ノ前III期？。

第42号住居址　（第11・148図、図版９・88）

（位置）A22B20・21グリッド。**（重複）**95号住と重複。95号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－22°－W。**（規模）**3.68m×4.21m。**（竈）**石組み。北竈。北壁のほぼ中央に位置する。両袖石および支脚石が残存。燃焼部内には甕形土器片が散乱する。焼土は顕著で、竈外に掻きだした焼土・灰・炭化物が床面にも散乱する。規模1.20m×

0.70m。深さ９cm。**（床）**14.5㎡。深さ22cm。標高387.86m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅12～24cm、深さ６～10cm。**（遺物出土状況）**竈内およびその周辺から同一個体の甕形土器片出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・甕ＣⅢ、土錘。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期？。

第43号住居址　（第11・149図、図版９・88）

（位置）Ａ26Ｂ22グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸長方形。Ｎ－76°－Ｅ。**（規模）**2.65m×3.97m。**（覆土）**挿図には示していないが、人頭大の礫が住居址中央から竈前面部の覆土内および床面直上でみられる。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。石組みと思われるが、袖石・天井石は欠失している。支脚石は残存。焼土は顕著。規模0.79m×0.80m。深さ10cm。**（床）**9.36㎡。深さ15cm。標高388.65m。竈周辺部のみ堅固。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅12～15cm、深さ７～11cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺から竈形土器の破片が散乱した状態で出土。**（遺物）**竈形土器。**（時期）**不明。

第44号住居址　（第11・149図、図版９・88）

（位置）Ａ23Ｂ22・23グリッド。**（重複）**16・55号住と重複。16号住より古く、55号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－90°－Ｅ。**（規模）**2.92m×3.05m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。規模1.11m×0.64m。深さ６cm。**（床）**7.88㎡。深さ30cm。標高388.08m。竈周辺のみ堅固。**（壁溝）**北壁の北西コーナー付近で途切れるが、あとは巡っている。幅15～26cm、深さ10cm。**（遺物出土状況）**住居址中央部付近から少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**須恵器甕。**（時期）**不明。

第45号住居址　（第12・150図、図版９・88）

（位置）Ａ23Ｂ25グリッド。**（重複）**31・70・94号住と重複。いずれの住居址よりも新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－82°－Ｅ。**（規模）**3.82m×3.21m。**（覆土）**拳大～人頭大の礫が住居址中央から竈前面部の覆土内および床面直上でみられる。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー付近に位置する。両袖石・天井石の一部が残存する。燃焼部内に平石等の礫が散乱。規模1.43m×0.64m。深さ７cm。**（床）**10.4㎡。深さ34cm。標高388.12m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅18～27cm、深さ５～８cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺と住居址全域にわたって散在的に出土しているが、その量は少ない。**（遺物）**土師器坏Ａ（墨書あり）・皿・甕Ａ・小型甕Ａ・鉢ＡⅠ、羽釜Ａ、黒色土器坏、灰釉陶器壷、鉄鏃、砥石。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第46号住居址　（第12・150図、図版９・88）

（位置）Ａ25Ｂ24グリッド。**（重複）**47・56号住、25・26・27号掘立と重複。47号住より古く、56号住、25・26・27号掘立より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－83°－Ｅ。**（規模）**3.20m×3.45m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖の一部、支脚石が残存。焼土は顕著。規模0.78m×0.80m。深さ５cm。**（床）**推定9.86㎡。深さ30cm。標高388.41m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**西壁下は47号住との重複のため欠失しているが、おそらく全周すると思われる。幅18～28cm、深さ５～９cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺部を中心に床面上５～10cmのレベル内で散在的に出土している。**（遺物）**土師器皿・甕Ａ・小型甕Ａ、黒色土器坏（墨書あり）・高台皿、須恵器蓋Ａ・甕、漆紙断片。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第47号住居址　（第12・151図、図版９・88）

（位置）Ａ24・25Ｂ24グリッド。**（重複）**32・46号住、25・26・27号掘立と重複。いずれの遺構よりも新しい。**（形状）**隅丸長方形。Ｎ－27°－Ｗ。**（規模）**2.80m×3.32m。**（竈）**石組み。北竈。北壁北西コーナー付近に位置する。両袖石は残存。天井石と思われる礫が燃焼部内と崩落土内にみられる。規模1.04m×0.91m。深さ６cm。**（床）**7.89㎡。深さ38cm。標高388.30m。竈前面部のごくわずかの範囲は堅固。他は概して軟弱。**（壁溝）**断続的に巡っている。

幅16～30cm、深さ７～10cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈前面部のほぼ床面直上から散在的に出土。覆土内からであるが円面硯の台脚部破片が出土している。**（遺物）**土師器坏Ａ・甕Ａ、灰釉陶器皿、須恵器甕・圏足硯（台脚部破片）。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第48号住居址　（第12・151図、図版10・89）

（位置）Ａ23・24Ｂ24・25グリッド。**（重複）**25･70号住、24号掘立と重複。25･70号住より古く、24号掘立より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－77°－Ｅ。**（規模）**4.89m×4.47m。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー付近に位置する。石組みだったと思われるが袖石等は欠失し、掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模1.19m×0.76m。深さ10cm。**（床）**推定18.9㎡。深さ59cm。標高388.01m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**南西部壁は重複のため欠失しているが、ほぼ全周すると思われる。幅30cm、深さ８～10cm。**（遺物出土状況）**遺物は少なく、竈内とその周辺、住居址中央部から散在的に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ（墨書あり）・小型甕Ａ・甕ＣⅠ、須恵器坏、鉄鋌。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期。

第49号住居址　（第13・151図、図版10・89）

（位置）Ａ24Ｂ24グリッド。**（重複）**32号住、25･26･27号掘立と重複。いずれの遺構よりも新しい。**（形状）**隅丸長方形。Ｎ－80°－Ｅ。**（規模）**2.62m×3.32m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。袖石の一部は残存。燃焼部と竈前面部に構築材に使用されたと思われる礫が散乱。規模1.14m×0.76m。深さ９cm。**（床）**7.42㎡。深さ42cm。標高388.25m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**南東コーナー壁下を除き全周する。幅15～22cm、深さ７cm。**（遺物出土状況）**遺物は少ない。南壁下のほぼ床面直上から墨書土器。**（遺物）**土師器坏Ａ（墨書あり）、釘。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第50号住居址　（第13・151図、図版10・89）

（位置）Ａ22・23Ｂ25グリッド。**（重複）**31･69･87･99号住、33号掘立と重複。69･87号住より古く、31･99号住、33号掘立より新しい。**（形状）**隅丸長方形。Ｎ－80°－Ｅ。**（規模）**3.75m×4.88m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石・支脚石・天井石の一部は残存。焼土は顕著。規模1.10m×0.55m。深さ６cm。**（床）**推定17.5㎡。深さ34cm。標高388.06m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**ほぼ全周すると思われる。幅15～24cm、深さ５～８cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺からまとまって出土。竈支脚石に土師器坏が伏せられた状態で出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・皿・甕Ａ、灰釉陶器皿、土錘、鎌。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第51号住居址　（第13・152図、図版10・89）

（位置）Ａ23・24Ｂ22グリッド。**（重複）**性格不明ピットに南東コーナー部分を切られる。**（形状）**隅丸長方形（台形に近い）。Ｎ－16°－Ｗ。**（規模）**3.70m×4.77m。**（竈）**北竈。北壁中央やや東寄りに位置する。おそらく石組みだろう。支脚石が残存。燃焼部に袖石と思われる平石がみられ、袖石が倒れこんだものだろう。焼土は顕著。規模2.67m×0.60m。深さ11cm。**（床）**15.4㎡。深さ40cm。標高387.97m。竈周辺および住居址中央部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅15～32cm、深さ６～９cm。**（遺物出土状況）**竈内およびその東脇、南壁下の床面上数cmのレベルから少量出土。**（遺物）**土師器坏Ｃ・甕Ｂ、釘。**（時期）**宮ノ前Ⅰ期以前か。

第52号住居址　（第14・152図、図版10）

（位置）Ａ23Ｂ24グリッド。**（重複）**25号住、25･26･27号掘立と重複。25号住より古く、掘立柱建物址群より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－78°－Ｅ。**（規模）**3.49m×3.23m。**（覆土）**挿図には示していないが、人頭大の礫が住居址中央の覆土内および床面直上にみられる。**（竈）**おそらく東竈。25号住に切られ不明。**（床）**推定9.67㎡。深さ48cm。標高388.10m。住居址中央部は堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅18～28cm、深さ６～10cm。**（遺物出土状況）**住居址南東部の床面上２～３cmのレベルから土師器坏の完形品のみ出土。**（遺物）**土師器坏Ａ。**（時**

期）宮ノ前VI期。

第53号住居址　（第14・152図、図版10・89）

（位置）A23B24・25グリッド。（重複）25・70・94号住、10・16・24号掘立と重複。住居址群より古く、掘立柱建物址群より新しい。（形状）不明。N－7°－W。（規模）南北軸3.61m。（竈）不明。（床）面積不明。深さ42cm。標高388.18m。全体にやや軟弱。（壁溝）床面残存部の壁下には巡る。幅22～34cm、深さ10～12cm。（遺物出土状況）住居址中央部から黒色土器椀のみ出土。（遺物）黒色土器椀。（時期）不明。

第54号住居址　（第14・152・153図、図版10・89）

（位置）A24・25B23・24グリッド。（重複）18号住と重複。18号住より古い。（形状）隅丸方形。N－81°－E。（規模）3.11m×2.89m。（竈）石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.09m×0.68m。深さ9cm。（床）7.73㎡。深さ48cm。標高388.23m。竈周辺部は堅固。（壁溝）全周する。幅17～31cm、深さ8～14cm。（遺物出土状況）竈内および南東コーナー壁下周辺の床面直上から、まとまって出土している。（遺物）土師器坏A・高台坏・皿・蓋A・甕A、須恵器高台坏A、円筒土器、鉄滓。（時期）宮ノ前VI期。

第55号住居址　（第14・153図、図版11・89）

（位置）A23B22・23グリッド。（重複）16・44・55号住、性格不明ピットと重複し、いずれの遺構にも切られている。（形状）不明。（規模）不明。（竈）不明。（床）面積不明。深さ22cm。標高388.10m。散在的に堅固な箇所あり。（壁溝）床面残存部には巡っている。幅26～32cm、深さ8～10cm。（遺物出土状況）覆土下層から坏の土師器片がわずかに出土している。（遺物）土師器坏A（線刻あり）。（時期）宮ノ前I期？。

第56号住居址　（第14・153図、図版11・89）

（位置）A25B24グリッド。（重複）46号住と重複。46号住に本住居址の南側半分以上を切られる。（形状）不明。N－77°－E。（規模）東西軸2.50m。（竈）石組み。東竈。東壁北東コーナー近くに位置する。袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模0.77m×0.55m。深さ14cm。（床）面積不明。深さ11cm。標高388.58m。全体に概して軟弱である。（壁溝）なし。（遺物出土状況）竈内から少量出土。（遺物）土師器甕A、黒色土器鉢・高台皿。（時期）不明。

第57号住居址　（第14・153図、図版11・89）

（位置）A25・26B16グリッド。（重複）なし。（形状）隅丸方形。N－82°－E。（規模）3.61m×3.53m。（竈）東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。煙道部は撹乱のため不明。石組み竈と思われるが、袖石等はすべて欠失し掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模南北軸1.12m。深さ12cm。（床）推定12.0㎡。深さ10cm。標高388.52m。竈前面部のごくわずかの範囲は堅固。他は軟弱。（壁溝）全周すると思われる。幅14～21cm、深さ5～10cm。（遺物出土状況）少量の遺物が散在的にほぼ床面直上レベルで出土している。（遺物）土師器坏A・蓋A、須恵器蓋A。（時期）宮ノ前VI期。

第58号住居址　（第15・154図、図版11・89）

（位置）A23・24B17グリッド。（重複）86号住と重複し、86号住より新しい。（形状）隅丸長方形。N－73°－E。（規模）3.75m×3.09m。（竈）石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。両袖石は残存。燃焼部と煙道部に天井石が崩落している。支脚石は抜かれている。焼土は顕著。規模1.33m×0.95m。深さ15cm。（床）10.6㎡。深さ28cm。標高388.02m。竈周辺部は堅固。（壁溝）全周する。幅14～25cm、深さ5～8cm。（遺物出土状況）竈周辺の床面直上レベル付近から、ややまとまって出土している。（遺物）土師器坏A（墨書あり）・皿・甕A・鉢AI、羽釜A、黒色土器坏。（時期）宮ノ前IX期。

第59号住居址　（第15・154図、図版11・89）

（位置）A22B24・25グリッド。**（重複）**85号住、37号土坑と重複し、両者よりも新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－86°－E。**（規模）**4.88m×4.37m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。袖石の一部が残存。天井石とみられる平石が焚口あたりに崩落している。支脚石はない。焼土は顕著。規模1.45m×0.82m。深さ16cm。**（床）**18.7㎡。深さ47cm。標高387.98m。竈周辺は堅固。**（壁溝）**全周する。幅19～35cm、深さ５～12cm。**（遺物出土状況）**竈内および住居址全体にわたって散在的に出土、また、墨書土器が南西壁下の床面直上から出土。**（遺物）**土師器坏A・高台坏・甕A・CI・鉢B、黒色土器坏（墨書あり）、須恵器坏（線刻あり）・蓋A・凸帯壷、肘金具。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期。

第60号住居址　（第15・155図、図版11）

（位置）A24B17グリッド。**（重複）**76号住と重複し、76号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－72°－E。**（規模）**3.06m×3.53m。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。石組み竈と思われるが、袖石等はなく、掘り方と袖石を据えたとみられるピット、支脚石のみ残存。規模0.88m×0.85m。深さ11cm。**（床）**10.1㎡。深さ５cm。標高388.29m。竈周辺は堅固。**（壁溝）**全周する。幅15～21cm、深さ８～10cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が竈周辺を中心に出土している。**（遺物）**土師器皿・甕A。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第61号住居址　（第15・155図、図版11・89）

（位置）A20B24グリッド。**（重複）**119号住と重複し、119号住より古い。**（形状）**隅丸方形。N－72°－E。**（規模）**3.22m×3.14m。**（覆土）**竈前面部の床面直上および覆土下層に礫の集中がみられる。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや北寄りに位置する。両袖石、支脚石が残存。天井石の礫が割れて崩落土内に落ち込んでいる。焼土は顕著。規模0.99m×0.64m。深さ15cm。**（床）**9.07㎡。深さ19cm。標高387.92m。竈周辺のごくわずかな範囲は堅固。他は概して軟弱。**（壁溝）**北西コーナー～西壁中央付近壁下は巡っていないが、他は巡っている。幅13～21cm、深さ４～６cm。**（柱穴）**配置に若干の乱れはあるが、径40～50cm、深さ10～12cmのピットが４箇所で確認されている。**（遺物出土状況）**住居址北西部の床面直上付近のレベルでまとまって出土している。**（遺物）**土師器坏A・甕A。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第62号住居址　（第16・155図、図版11・89）

（位置）A20B23グリッド。**（重複）**401号住と重複。401号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－87°－E。**（規模）**3.35m×3.18m。**（竈）**東竈。ほぼ南東コーナーに位置する。石組み竈と思われるが、袖石等は欠失して掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.91m×0.77m。深さ10cm。**（床）**9.45㎡。深さ18cm。標高387.76m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅15～22cm、深さ５～22cm。**（遺物出土状況）**北・西壁下の床面直上レベルから土錘、土師器坏完形品等が出土。**（遺物）**土師器坏A（タール付着するものあり）・皿、土錘。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第63号住居址　（第16・155図、図版12・90）

（位置）A20・21B24・25グリッド。**（重複）**68・91・119号住と重複。68・91号住より新しく、119号住より古い。**（形状）**隅丸方形。N－84°－E。**（規模）**3.41m×3.43m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部が残存。燃焼部に袖石等に使用したと思われる礫が散乱する。焼土は顕著。規模1.15m×0.87m。深さ６cm。**（床）**10.3㎡。深さ20cm。標高387.97m。竈周辺は堅固。**（壁溝）**全周する。幅18～34cm、深さ４～10cm。**（遺物出土状況）**竈左袖脇の床面直上レベルを中心にややまとまって出土。土錘、鉄製品は床面上約10cmのレベルから出土。**（遺物）**土師器坏A・皿、黒色土器坏（墨書あり）・椀・高台皿、灰釉陶器椀、須恵器壷、竈形土器、土錘、刀子。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第64号住居址　（第16・156図、図版12）

（位置）A21B24グリッド。**（重複）**28号住によって住居址の大半を欠失している。**（形状）**不明。**（規模）**東西軸2.72m。**（竈）**不明。**（床）**面積不明。深さ18cm。標高387.94m。残存部はやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡っている。幅14～22cm、深さ５～７cm。**（遺物出土状況）**残存部の全体にわたってほぼ床面直上レベルから散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A・甕A。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第65号住居址　（第16・156図、図版12）

（位置）A20・21B21・22グリッド。**（重複）**98号住と重複し、98号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－80°－E。**（規模）**4.37m×4.40m。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。石組み竈と思われるが袖石等欠失し掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模1.16m×0.87m。深さ９cm。**（床）**17.6㎡。深さ11cm。標高387.60m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**全周する。幅17～23cm、深さ５～７cm。**（遺物出土状況）**竈内および住居址全体にわたって床面直上レベルから散在的に出土。**（遺物）**須恵器坏、土師器甕CⅢ、苧引金具。**（時期）**宮ノ前Ⅴ期？。

第66号住居址　（第16・157図、図版12・90）

（位置）A20・21B20・21グリッド。**（重複）**81・97号住と重複。両住居址より新しい。**（形状）**N－76°－E。**（規模）**3.33m×3.81m。**（覆土）**竈前面部の床面直上から覆土下層のレベルで拳大～人頭大の礫が散乱している。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石が残存。天井石は竈前面部に散乱する礫のなかに含まれているかもしれない。焼土は顕著。規模1.30m×0.60m。深さ７cm。**（床）**11.1㎡。深さ30cm。標高387.35m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**竈右袖脇の東壁下は巡っていないが、他は巡る。幅21～30cm、深さ10～12cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺の床面直上から集中して出土。**（遺物）**須恵器坏・蓋A、土師器甕CⅡ・Ⅳ・小型甕C。**（時期）**宮ノ前Ⅳ期。

第67号住居址　（第17・157図、図版12）

（位置）A20・21B23・24グリッド。**（重複）**７・30・93号住、９号溝と重複。７・30号住、９号溝より古く、93号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－81°－E。**（規模）**3.88m×3.24m。**（覆土）**竈前面部およびその周辺の床面直上から覆土下層のレベルで拳大～人頭大の礫が散乱している。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石が残存。天井石、支脚石はない。規模1.06m×0.60m。深さ14cm。**（床）**10.6㎡。深さ32cm。標高387.71m。竈周辺のみ堅固。**（壁溝）**全周する。幅13～24cm、深さ５～10cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈右袖脇の床面直上から少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器甕A。**（時期）**不明。

第68号住居址　（第17・157図、図版12）

（位置）A21B24・25グリッド。**（重複）**63・79・84・91・100号住、28・29号掘立と重複。91・100号住、28・29号掘立より新しく、63・79・84号住より古い。**（形状）**隅丸長方形。N－77°－E。**（規模）**6.20m×5.40m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや北寄りに位置する。両袖石（加工石材を一部使用）、支脚石が残存。焼土は顕著。規模1.30m×0.68m。深さ17cm。**（床）**推定30.4㎡。深さ35cm。標高388.02m。竈周辺部および住居址中央部は堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅15～32cm、深さ５～10cm。**（柱穴）**検出されず。**（その他施設）**不明。**（遺物出土状況）**主に竈内から出土しているが、住居址全体でも床面直上または覆土下層から散在的に出土している。**（遺物）**土師器坏A・皿・鉢D・小型甕C、黒色土器椀、灰釉陶器椀、緑釉陶器椀、須恵器坏、加工石材。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第69号住居址　（第17・157・158図、図版12・90）

（位置）A22・23B25グリッド。**（重複）**50・87・99号住、37号土坑と重複。87号住より古く、50・99号住、20号土坑より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－12°－W。**（規模）**2.85m×2.88m。**（竈）**石組み。北竈。北壁北西コーナー

近くに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模0.75m×0.50m。深さ5cm。**（床）**7.40㎡。深さ40cm。標高388.08m。竈周辺のみ堅固。**（壁溝）**なし。**（遺物出土状況）**北壁下と竈内外から比較的まとまって出土している。住居址中央部床面上約10cmのレベルから三彩陶器蓋が出土しているが、本住居址に伴うかは不明。**（遺物）**土師器坏A・皿（タール付着するものあり）、黒色土器坏・椀、灰釉陶器椀・皿、三彩陶器蓋、須恵器鉢A、土錘、鎹状鉄製品・鉄鏃か・鉄滓。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第70号住居址　（第17・158・159図、図版13・90・91）

（位置）A23・24B24・25グリッド。**（重複）**45･48･53･94号住と重複。48･53号住より新しく、45･94号住より古い。**（形状）**隅丸長方形。N－3°－W。**（規模）**4.68m×4.11m。**（竈）**石組み。北竈。北壁の北西コーナー近くに位置する。両袖石の一部と支脚石が残存。袖石を据えたと思われる径30cm前後、深さ5～6cmのピットあり。焼土は顕著。**（規模）**1.40m×1.00m。深さ6cm。**（床）**推定17.8㎡。深さ35cm。標高388.16m。竈周辺部のみ堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅15～27cm、深さ5cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈両袖脇の床面直上レベルからまとまって出土している。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり、タール付着するものあり）・甕A・小型甕A、黒色土器坏（墨書あり）・高台坏、灰釉陶器椀・鉢・長頸壷・短頸壷、須恵器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第71号住居址　（第18・159図、図版13）

（位置）A23・24B25・26グリッド。**（重複）**29･34号住と重複。両住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－11°－W。**（規模）**4.75m×4.54m。**（竈）**石組み。北竈。北壁のほぼ中央に位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.41m×0.91m。深さ16cm。**（床）**18.8㎡。深さ27cm。標高388.31m。竈周辺部のみ堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅15～32cm、深さ7～13cm。**（遺物出土状況）**竈内および覆土下層から少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）、刀子・釘。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第72号住居址　（第18・159図、図版13・91）

（位置）A21・22B26グリッド。**（重複）**74号住と重複し、74号住に大半を破壊されている。**（形状）**不明。N－82°－E。**（規模）**東西軸3.75m。**（竈）**石組み。東竈。74号住に破壊されているが右袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模東西軸0.95m。深さ6cm。**（床）**面積不明。深さ32cm。標高388.10m。竈周辺部のみ堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡っている。幅20～27cm、深さ5～8cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿（墨書あり）、黒色土器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第74号住居址　（第18・159図、図版13・91）

（位置）A22B26グリッド。**（重複）**72･89･102号住と重複。いずれの住居址よりも新しい。**（形状）**隅丸方形。N－78°－E。**（規模）**3.52m×3.34m。**（竈）**石組み。東竈。東壁の南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。燃焼部内には構築材に使用されたと思われる礫が散乱している。焼土は顕著。規模1.32m×0.75m。深さ12cm。**（床）**10.3㎡。深さ23cm。標高388.10m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅15～34cm、深さ6～10cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈両袖脇南壁下の床面直上レベルで床面上10cm以内のレベルからまとまって出土している。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿（墨書あり）・甕A・小型甕A、黒色土器坏、灰釉陶器小瓶、須恵器甕。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第75号住居址　（第18・159図、図版13）

（位置）A23・24B17・18グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸方形。N－18°－W。**（規模）**2.75m×2.81m。**（竈）**北竈。北壁中央やや西寄りに位置する。掘り方と袖石を据えたと思われる径25cm前後、深さ3～4cmのピットが残存。焼土は顕著。規模0.72m×0.70m。深さ8cm。**（床）**7.30㎡。深さ16cm。標高388.15m。全体にやや軟弱。

（壁溝）全周する。幅13～18cm、深さ７～10cm。**（遺物出土状況）**覆土内を中心に少量の土師器細片が散在的に出土。**（遺物）**土師器細片少量。用途不明鉄製品・釘。**（時期）**不明。

第76号住居址　（第96・160図、図版13）

（位置）A24B17グリッド。**（重複）**60･86号住と重複し、両住居址の方が新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－72°－E。**（規模）**2.53m×3.00m。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.88m×0.65m。深さ13cm。**（床）**推定6.97㎡。深さ15cm。標高388.29m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**全周すると思われる。幅14～20cm、深さ８～13cm。**（遺物出土状況）**竈内および住居址中央部やや北西寄りの床面直上レベルから出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・甕Ａ・Ｃ・小型甕Ａ。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期？。

第77号住居址　（第19・160図、図版13・91）

（位置）A22B25・26グリッド。**（重複）**35･100･125号住、33号掘立と重複。100号住、33号掘立より新しく35･123号住より古い。**（形状）**不明。**（規模）**東西軸5.85m。**（竈）**不明。**（床）**面積不明。深さ30cm。標高388.05m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡っている。幅20～30cm、深さ５～９cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ、須恵器蓋Ａ・鉢Ａ・甕。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期？。

第78号住居址　（第19・160図、図版14・91）

（位置）A21・22B27・28グリッド。**（重複）**405号住、13･14号溝と重複。13･14号溝より古く、405号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－76°－E。**（規模）**4.27m×4.17m。**（竈）**石組み・東竈。東壁中央やや北寄りに位置する。両袖石の一部が残存。構築材に使用されたと思われる礫が左袖前方部に散乱している。焼土は顕著。規模0.89m×0.65m。深さ４cm。**（床）**16.2㎡。深さ26cm。標高388.04m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅19～29cm、深さ８～10cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺部の床面直上レベルから土師器坏を中心に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ（墨書あり）・皿、鎌。**（時期）**宮ノ前Ⅸ～Ⅹ期。

第79号住居址　（第19・160図、図版14・92）

（位置）A21B24・25グリッド。**（重複）**63･68･91号住、28･29号掘立と重複。63号住より古く、68･91号住、28･29号掘立より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－81°－E。**（規模）**3.26m×2.84m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石および支脚石が残存。燃焼部内と右袖脇に構築材に使用されたと思われる礫が散乱する。焼土は顕著。規模1.07m×0.65m。深さ９cm。**（床）**8.17㎡。深さ35cm。標高387.90m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅17～23cm、深さ５～８cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**土師器甕Ａ、灰釉陶器平瓶、鉄滓。**（時期）**不明。

第80号住居址　（第20・161図、図版14・92）

（位置）A21B28グリッド。**（重複）**385･412号住と重複。両住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－93°－E。**（規模）**4.50m×4.10m。**（覆土）**住居址中央部の床面直上に約１mの楕円形の範囲で、５～６cmの厚さをもって堆積する炭化物を含んだ灰層を確認。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部が残存。袖石状の礫が燃焼部内に散乱する。焼土は顕著。規模1.11m×0.76m。深さ８cm。**（床）**16.2㎡。深さ20cm。標高387.90m。竈周辺部と住居址中央部は堅固。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅17～37cm、深さ７～９cm。**（遺物出土状況）**住居址中央で確認された灰層下（床面直上）から土師器坏一括と獣骨片が出土。**（遺物）**土師器坏Ａ（タール付着するものあり）・皿・高脚高台皿、獣骨片。**（時期）**宮ノ前Ⅺ期。

第81号住居址　（第20・161図、図版14・92）

（位置）A20・21B21グリッド。**（重複）**66・97号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**不明。N－81°－E。**（規模）**南北軸3.65m。**（竈）**東竈。東壁の北東コーナー寄りに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.60m×0.57m。深さ5cm。**（床）**面積不明。深さ32cm。標高387.33m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**なし。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**土師器坏B（線刻あり）、須恵器坏・蓋A。**（時期）**宮ノ前Ⅰ期？。

第82号住居址　（第20・161図、図版14・92）

（位置）A22B26グリッド。**（重複）**89・112・129号住、40・41号掘立と重複。いずれの遺構よりも新しい。**（形状）**隅丸方形。N－95°－W。**（規模）**4.00m×4.00m。**（竈）**南西コーナー竈。掘り方のみ残存。燃焼部内に袖石状の礫が散乱。焼土は顕著。規模1.15m×1.21m。深さ10cm。**（床）**14.8㎡。深さ4cm。標高388.47m。散在的に堅固な箇所が認められる。**（壁溝）**不明。**（遺物出土状況）**竈内、東・西・南壁下の床面直上レベルから出土している。**（遺物）**土師器高脚高台坏・皿、土師器皿、灰釉陶器椀。**（時期）**宮ノ前XI期。

第83号住居址　（第20・161図、図版14・92）

（位置）A23・24B26グリッド。**（重複）**29・37・71号住と重複し、各住居址より新しいが、調査順序を間違い29・71号住から掘り下げてしまったため南側半分を失ってしまった。**（形状）**不明。N－80°－E。**（規模）**南北軸4.33m。**（竈）**石組み。東竈。東壁のほぼ中央に位置する。両袖石の一部と支脚石が残存。焼土は顕著。規模0.86m×0.66m。深さ10cm。**（床）**面積不明。深さ49cm。標高388.31m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡っている。幅24～32cm、深さ10～12cm。**（遺物出土状況）**竈内およびその周辺部を中心に出土。特に竈内では土師器皿が支脚石上に伏せた状態で出土している。**（遺物）**土師器坏A・皿（墨書土器片あり）、須恵器蓋A、釘。**（時期）**宮ノ前IX期。

第84号住居址　（第21・161・162図、図版14・93）

（位置）A21・22B25グリッド。**（重複）**68・90・101号住と重複。68号住より古く、90・101号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－16°－W。**（規模）**4.70m×5.00m。**（竈）**石組み。北竈。北壁北東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。竈内外には構築材と思われる礫が散乱する。焼土は顕著。規模1.17m×0.76m。深さ3cm。**（床）**21.9㎡。深さ36cm。標高388.01m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅18～40cm、深さ4～6cm。**（遺物出土状況）**竈内およびその周辺を中心に散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A（スス付着するものあり、墨書あり）・皿（スス付着するものあり）・甕A・小型甕A、羽釜A、灰釉陶器皿・小瓶。**（時期）**宮ノ前IX期。

第85号住居址　（第21・162図、図版15）

（位置）A22B24グリッド。**（重複）**59号住、31・34号掘立と重複。59号住、31号掘立より古く、34号掘立より新しい。**（形状）**隅丸方形か。N－79°－E。**（規模）**4.22m×3.92m。**（竈）**不明。**（床）**面積不明。深さ40cm。標高388.00m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部に巡る。幅15～33cm、深さ7～10cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**須恵器坏・蓋A。**（時期）**宮ノ前V期？。

第86号住居址　（第21・162図、図版15・93）

（位置）A24B17グリッド。**（重複）**58・76号住と重複。58号住より古く、76号住より新しいが、新旧関係の判断ミスで76号住から掘り下げたため、西壁の大半を失ってしまった。**（形状）**隅丸方形。N－78°－E。**（規模）**3.95m×4.21m。**（竈）**東壁中央のやや南寄りの壁下で、炭化物を多量に含んだ楕円状の落ち込みがあるが、竈かどうかは不明。焼土は粒子状で散乱する。規模0.77m×0.71m。深さ2cm。**（床）**推定16.3㎡。深さ10cm。標高388.22m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**なし。**（遺物出土状況）**住居址中央やや西寄りの床面直上から羽口片等が出土。**（遺物）**土師器坏A・小型甕A、須恵器甕胴部破片利用転用硯、羽口、刀子。**（時期）**宮ノ前IX期。

第87号住居址　（第21・162・163図、図版15）

（位置）A22・23B25グリッド。**（重複）**31・50・69・99号住、５号溝と重複し、いずれの住居より新しく、５号溝より古い。**（形状）**隅丸方形か。Ｎ－80°－Ｅ。**（規模）**3.54m×3.75m。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.22m×0.92m。深さ13cm。**（床）**11.9㎡。深さ15cm。標高387.93m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**北壁下は巡っていないが、他は巡っている。幅17～30cm、深さ６～10cm。**（遺物出土状況）**竈内を中心に出土している。**（遺物）**土師器坏Ａ（タール・スス付着するものあり、墨書あり）・甕Ａ、土錘、鉄具。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第88号住居址　（第22・163図、図版15）

（位置）A26・27B24・25グリッド。**（重複）**５号掘立と重複。掘立の掘り方とは直接の重複がないため新旧関係は不明。**（形状）**不明。Ｎ－85°－Ｅ。**（規模）**東西軸2.95m。**（竈）**石組み。東竈。東壁のほぼ中央付近に位置する。左袖石の一部が残存。規模0.98×0.74m。深さ10cm。**（床）**面積不明。深さ７cm。標高388.60m。全体に軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡っている。幅15～26cm、深さ10cm。**（遺物出土状況）**特になし。**（遺物）**特になし。**（時期）**不明。

第89号住居址　（第22・163図、図版15・93）

（位置）A22B26グリッド。**（重複）**74・82・102号住と重複。74・82号住より古く、102号住より新しい。本住居址測量前に102号住を掘り下げてしまったため、住居址の大半を失ってしまった。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－82°－Ｅ。**（規模）**3.72m×3.84m。**（覆土）**竈前面部の床面直上レベル付近に礫が散乱。**（竈）**石組み。東竈。東壁のほぼ中央に位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模0.98m×0.56m。深さ７cm。**（床）**推定13.8㎡。深さ14cm。標高388.32m。竈周辺で散在的に堅固な箇所があり。**（壁溝）**全周すると思われる。幅14～23cm、深さ４～６cm。**（遺物出土状況）**竈内およびその周辺から中心に出土している。**（遺物）**土師器坏Ａ（墨書あり）・甕Ａ・小型甕Ａ、羽釜Ａ、黒色土器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第90号住居址　（第22・163図、図版15）

（位置）A21B25グリッド。**（重複）**36・84・128号住と重複。39・84号住より古く、128号住より新しい。**（形状）**不明。Ｎ－76°－Ｅ。**（規模）**東西軸3.43m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。左袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模0.85m×0.67m。深さ６cm。**（床）**面積不明。深さ21cm。標高388.14m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**床面残存部は巡っている。幅18～20cm、深さ４～８cm。**（遺物出土状況）**竈内を中心に出土している。**（遺物）**土師器甕Ａ。**（時期）**不明。

第91号住居址　（第22・164図、図版15）

（位置）A21B24・25グリッド。**（重複）**63・68・79号住、29号掘立と重複。各住居址より古く、29号掘立より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－81°－Ｅ。**（規模）**3.72m×3.18m。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。規模0.67m×0.51m。深さ４cm。**（床）**10.2㎡。深さ34cm。標高387.85m。竈周辺部のみ堅固。**（壁溝）**全周する。幅17～25cm、深さ８～12cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・皿（墨書あり）、黒色土器高台皿、灰釉陶器椀。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第92号住居址　（第23図、図版15）

（位置）A27・28B16・17グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－86°－Ｅ。**（規模）**3.65m×3.29m。**（竈）**東竈。東壁中央やや北寄りに位置する。掘り方のみ残存。焼土はやや顕著。規模0.77m×0.63m。深さ10cm。**（床）**10.9㎡。深さ２～３cm。標高388.90m。堅固な箇所が散在的にみられる。**（壁溝）**全周する。幅15～28cm、深さ10～12cm。**（遺物出土状況）**特になし。**（遺物）**特になし。**（時期）**不明。

第93号住居址　（第23・164図、図版16・93）

（位置）A20・21B24グリッド。**（重複）**28･64･67号住、10号溝、29号掘立と重複。住居址および溝より古く、掘立より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－80°－E。**（規模）**4.00m×3.44m。**（覆土）**住居址中央付近の床面直上レベルに礫が散乱する。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.87m×0.75m。深さ７cm。**（床）**推定12.0㎡。深さ29cm。標高387.71m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡っている。幅19～26cm、深さ５～８cm。**（遺物出土状況）**竈内を中心に出土している。**（遺物）**土師器坏A・甕A、須恵器坏・甕・長頸壷A。**（時期）**宮ノ前Ⅴ期。

第94号住居址　（第23・164図、図版16・93）

（位置）A23B24・25グリッド。**（重複）**45･53･70号住、10号掘立と重複。45･70号住より古く、53号住、10号掘立より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－３°－W。**（規模）**3.70m×3.37m。**（竈）**北竈。北壁のほぼ中央に位置する。掘り方のみ残存。規模0.66m×0.61m。深さ14cm。**（床）**11.5㎡。深さ10cm。標高388.09m。住居址全体にわたって堅固な箇所が散在的に認められる。**（壁溝）**全周する。幅11～27cm、深さ７～９cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**黒色土器高台皿（墨書あり）。**（時期）**不明。

第95号住居址　（第23・164図、図版16）

（位置）A21・22B20グリッド。**（重複）**42号住と重複。42号住より古い。**（形状）**隅丸方形。N－66°－E。**（規模）**4.08m×4.41m。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。煙道部は42号住に切られる。掘り方と支脚石が残存。焼土は顕著。規模南北軸0.77m。深さ７cm。**（床）**推定16.7㎡。深さ10cm。標高387.85m。竈周辺部のみ堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅16～23cm、深さ７～９cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈前面部の床面直上からわずかだが出土している。**（遺物）**須恵器坏。**（時期）**不明。

第96号住居址　（第24・164図、図版16・93）

（位置）A20・21B21・22グリッド。**（重複）**98号住、７号溝と重複。７号溝より古く、98号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－78°－E。**（規模）**2.47m×2.57m。**（竈）**石組み。東竈。東壁のほぼ中央に位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.13m×0.59m。深さ７cm。**（床）**5.26㎡。深さ65cm。標高387.45m。竈周辺のごくわずかな範囲は堅固。**（壁溝）**全周する。幅17～38cm、深さ８～13cm。**（遺物出土状況）**北壁下の床面直上から少量出土。**（遺物）**須恵器坏・高台坏B。**（時期）**宮ノ前Ⅳ期？。

第97号住居址　（第24・164図、図版16）

（位置）A20・21B21グリッド。**（重複）**66･81号住と重複。66号住より古く、81号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－81°－E。**（規模）**3.33m×3.73m。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。掘り方のみ残存。焼土はやや顕著。規模1.23m×0.87m。深さ17cm。**（床）**推定11.1㎡。深さ33cm。標高387.53m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**全周すると思われる。幅16～32cm、深さ７～15cm。**（遺物出土状況）**竈内を中心に少量出土。**（遺物）**須恵器坏・壷、土師器小型甕D。**（時期）**不明。

第98号住居址　（第24図、図版16）

（位置）A20・21B21グリッド。**（重複）**65･96号住と重複。両住居址に大半を壊されている。**（形状）**不明。N－79°－E。**（規模）**東西軸4.33m。**（竈）**東竈。東壁のほぼ中央に位置するか。掘り方と袖石状の礫１個が残存。焼土は顕著。規模南北軸0.79m。深さ15cm。**（床）**面積不明。深さ12cm。標高387.60m。残存部は軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡っている。幅15～19cm、深さ４～５cm。**（遺物出土状況）**特になし。**（遺物）**特になし。**（時期）**不明。

第99号住居址　（第24・165図、図版16・93・94）

（位置）A22・23B25グリッド。**（重複）**31・50・69・87・122号住、33号掘立と重複。31・50・69・87号住より古く、122号住、33号掘立より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－79°－E。**（規模）**5.30m×5.08m。**（覆土）**住居址中央部および北東部付近の床面直上～10数cm浮いたレベルに礫が散乱する。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方および支脚石が残存。焼土は顕著。規模1.04m×1.16m。深さ20cm。**（床）**24.5㎡。深さ54cm。標高387.56m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**断続的に巡っている。幅15～38cm、深さ４～10cm。**（遺物出土状況）**南東コーナー付近の床面直上からややまとまって出土しているが、他は概して散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A、須恵器坏・凸帯壷・壷、釘・刀子。**（時期）**宮ノ前VI期。

第100号住居址　（第25・165図、図版16・17・94）

（位置）A21・22B25グリッド。**（重複）**68・77・84・101号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。N－80°－E。**（規模）**6.54m×6.90m。**（覆土）**図示していないが、竈前面部の床面直上を中心に礫が散乱する。**（竈）**東竈。東壁のほぼ中央に位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模1.67m×1.17m。深さ15cm。**（床）**推定42.1㎡。深さ51cm。標高387.78m。竈周辺から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**全周する。幅26～38cm、深さ10～13cm。**（柱穴）**規則的に４箇所確認。規模径0.90～1.20m、深さ35～45cm。根石等は認められず。**（遺物出土状況）**竈内および住居址全体にわたって散在的に出土しており、その量は多い。床面直上～10数cm浮いたレベルから出土。**（遺物）**土師器坏A・B・高台坏（線刻あり）・甕CII、須恵器坏・高台坏B・鉢A・B・高坏・甕、刀子、銅製鑢子（鍍金を施す）。**（時期）**宮ノ前IV期。

第101号住居址　（第25図、図版17）

（位置）A21B25グリッド。**（重複）**84・90・100号住と重複。84・90号住より古く、100号住より新しい。**（形状）**不明。**（規模）**不明。**（竈）**東竈。東壁に位置する。掘り方の一部が残存。掘り方内に袖石状の礫あり。規模南北軸0.51m。深さ19cm。**（床）**面積不明。深さ29cm。標高388.08m。床面状況不明。**（壁溝）**床面残存部には巡っている。幅15～20cm、深さ５cm。**（遺物出土状況）**特になし。**（遺物）**特になし。**（時期）**不明。

第102号住居址　（第25・166図、図版17・94）

（位置）A22B26グリッド。**（重複）**74・89号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。N－７°－W。**（規模）**3.19m×2.98m。**（竈）**北竈。北壁のほぼ中央に位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.98m×1.00m。深さ９cm。**（床）**推定9.00㎡。深さ25cm。標高388.19m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅17～23cm、深さ５～11cm。**（遺物出土状況）**竈内を中心に出土。**（遺物）**土師器坏A（タール付着）・皿・蓋A（墨書あり）・甕A。**（時期）**宮ノ前VI期。

第103号住居址　（第26・166図、図版17）

（位置）A21B23グリッド。**（重複）**６・７・30・40号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。N－83°－E。**（規模）**3.54m×3.72m。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。燃焼部には袖石を据えたとみられる径20cm前後、深さ３～６cmのピットあり。焼土は顕著。規模1.04m×1.07m。深さ６cm。**（床）**推定11.6㎡。深さ38cm。標高387.52m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**全周すると思われる。幅20～30cm、深さ４～10cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**土師器甕CIII。**（時期）**不明。

第104号住居址　（第26・166・167図、図版17・94）

（位置）A22B26・27グリッド。**（重複）**120号住と重複。120号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－79°－E。**（規模）**3.36m×3.44m。**（覆土）**床面直上および床面上10数cm浮いたレベルで礫が散在的に散乱する。**（竈）**石

組み。東竈。東壁のほぼ中央に位置する。両袖石の一部が残存。規模0.93m×0.88m。深さ4cm。**（床）**10.2㎡。深さ30cm。標高388.17m。壁際を除いた全体が堅固。**（壁溝）**全周する。幅22～30cm、深さ5～6cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈両袖脇の床面上約5～10cmのレベルから出土。**（遺物）**土師器皿・甕A、灰釉陶器長頸壷、須恵器横瓶・甕胴部破片利用転用硯、刀子。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第105号住居址　（第26・167図、図版17・94）

（位置）A20・21B26・27グリッド。**（重複）**118・120・163・326号住、43号掘立と重複。いずれの遺構より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－81°－E。**（規模）**4.96m×5.64m。**（覆土）**床面直上レベルで住居址全体にわたって礫が散在的に散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁のほぼ中央に位置する。左袖石の一部および支脚石が残存。右袖には袖石を据えたとみられるピットあり。規模1.19m×0.78m。深さ4cm。**（床）**25.8㎡。深さ17cm。標高388.03m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**全周する。幅16～26cm、深さ5～9cm。**（遺物出土状況）**竈前面部から住居址北東部にかけて比較的多量の遺物が散在的に出土する。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿・甕A、羽釜A、灰釉陶器段皿、須恵器短頸壷、羽口、鉄斧・刀子・鉄滓。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第106号住居址　（第26・168図、図版17・18・95）

（位置）A20・21B24・25グリッド。**（重複）**119・167号住と重複。両住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－17°－W。**（規模）**4.50m×4.71m。**（竈）**石組み。南東コーナー竈。燃焼部の掘り方および煙道部の袖石が残存。規模1.32m×1.32m。深さ18cm。**（床）**19.5㎡。深さ15cm。標高388.00m。竈周辺部のみ堅固。**（壁溝）**なし。**（柱穴）**柱穴状のピットが計5箇所確認。規模径35～50cm、深さ15～25cm。**（遺物出土状況）**住居址中央部の床面直上から散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A・甕A・高脚高台皿。**（時期）**宮ノ前Ⅺ期。

第107号住居址　（第27・168図、図版18・95）

（位置）A22・23B26グリッド。**（重複）**112・125号住、20号掘立と重複。いずれの遺構より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－83°－E。**（規模）**4.67m×4.19m。**（覆土）**竈前面部の床面上わずかに浮いた状態で礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.26m×0.96m。深さ5cm。**（床）**17.2㎡。深さ37cm。標高388.16m。竈周辺部と住居址中央部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅23～36cm、深さ8～10cm。**（遺物出土状況）**竈内および南壁周辺の床面直上を中心に出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書・線刻土器片あり）・皿・壷A・甕D、須恵器坏・高台坏・蓋A・甕、円筒土器、刀子。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期。

第109号住居址　（第27・168図、図版18・95）

（位置）A24・25B25グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸方形。N－81°－E。**（規模）**3.09m×3.23m。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。右袖石1個のみが残存。規模1.21m×0.80m。深さ8cm。**（床）**8.91㎡。深さ15cm。標高388.47m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅18～22cm、深さ5～8cm。**（遺物出土状況）**竈内および住居址中央部の床面直上から散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A・皿・甕A・小型甕A・鉢AⅠ、灰釉陶器椀。**（時期）**宮ノ前Ⅸ～Ⅹ期。

第110号住居址　（第27・168・169図、図版18・95）

（位置）A24B27グリッド。**（重複）**134・165・404号住と重複。いずれの住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－80°－E。**（規模）**3.61m×3.59m。**（覆土）**竈前面部の床面直上に礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。両袖石の一部と支脚石が残存。規模1.18m×0.73m。深さ9cm。**（床）**11.9㎡。深さ18cm。標高388.36m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**全周する。幅16～23cm、深さ5～8cm。**（遺物出土状況）**竈内およびその周辺の床面直上から出土。特に南東コーナー付近からは土師器坏がまとまって出土している。**（遺物）**土師器坏A（墨

書あり）・高台坏・甕A、須恵器甕。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第111号住居址　（第27・169図、図版18・95）

（位置）A23・24B27・28グリッド。**（重複）**134・137号住、13・14号溝と重複。両住居址より新しく、両溝址より古い。**（形状）**隅丸方形。N－82°－E。**（規模）**3.54m×3.49m。**（覆土）**住居址南西部の床面直上および床面より若干浮いたレベルで礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石および天井石が残存するが、天井石は原位置は保っていない。焼土は顕著。規模1.53m×0.69m。深さ13cm。**（床）**10.1㎡。深さ38cm。標高388.24m。竈周辺部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**全周する。幅23～34cm、深さ６～10cm。**（遺物出土状況）**住居址全体にわたって散在的に出土しているが、特に竈右袖脇の南東コーナー付近の床面直上からややまとまって出土している。**（遺物）**土師器坏A（線刻土器片あり）・高台坏・皿、須恵器高台坏A・壷底部利用転用硯、刀子。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期。

第112号住居址　（第28・169図、図版18・96）

（位置）A22・23B26・27グリッド。**（重複）**82・107・121・129号住と重複。82・107号住より古く、121・129号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－84°－E。**（規模）**4.34m×4.31m。**（竈）**石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.32m×0.75m。深さ12cm。**（床）**推定17.0㎡。深さ30cm。標高388.28m。竈周辺部は非常に堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅18～26cm、深さ７cm。**（遺物出土状況）**竈内および南東コーナー壁下の床面直上、もしくは浮いた状態でややまとまって出土。**（遺物）**須恵器坏・高台坏・蓋A、土師器小型甕A・C。**（時期）**宮ノ前Ⅳ期？。

第113号住居址　（第28・170図、図版18・96）

（位置）A22B27グリッド。**（重複）**156号住、14号溝と重複。156号住より新しく、14号溝より古い。**（形状）**隅丸長方形。N－76°－E。**（規模）**4.11m×3.52m。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部と支脚石が残存。焼土は顕著。規模1.31m×0.77m。深さ17cm。**（床）**12.5㎡。深さ30cm。標高388.09m。竈周辺部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**全周する。幅21～33cm、深さ５～７cm。**（遺物出土状況）**南東コーナーおよび南壁下等の床面直上から中心に比較的多量の遺物が出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・高台坏・皿（墨書・線刻あり）・蓋A・甕A・小型甕C、須恵器坏、黒色土器坏、刀子・紡錘車・鉄鏃か・鉄滓。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第114号住居址　（第28・170図、図版19・96）

（位置）A23B28グリッド。**（重複）**126・418号住と重複。両住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－82°－E。**（規模）**4.26m×4.50m。**（覆土）**竈左袖前面部を中心に床面直上から床面上約10cmのレベル内で礫が散乱する。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.97m×0.76m。深さ14cm。**（床）**16.9㎡。深さ42cm。標高388.05m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅20～28cm、深さ５～８cm。**（遺物出土状況）**住居址中央部の床面直上に灰と炭化物が堆積する範囲があり、その内外を中心に遺物が比較的まとまって出土。小片が多い。**（遺物）**土師器坏A（線刻土器片あり）・高台坏A・坏D・皿・甕A・CV、須恵器高台坏A・長頸壷A、黒色土器坏、刀子。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期。

第115号住居址　（第29・171図、図版19・96）

（位置）A24B28グリッド。**（重複）**146・164・248号住と重複。いずれの住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－78°－E。**（規模）**4.38m×4.03m。**（覆土）**竈前面部の床面直上もしくは若干浮いたレベルで礫集積がみられる。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.22m×0.82m。

深さ５cm。**（床）**15.3㎡。深さ51cm。標高388.08m。竈周辺から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**全周する。幅17～40cm、深さ７～10cm。**（遺物出土状況）**各壁際の床面より浮いた状態で出土しているものが多い。**（遺物）**土師器坏Ａ（線刻土器片あり）・皿（墨書あり）・甕Ａ、黒色土器坏・高台坏・椀、須恵器坏・短頸壷Ｂ、灰釉陶器段皿、鎌・用途不明鉄製品。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第116号住居址　（第29・171図、図版19・96）

（位置）Ａ22・23Ｂ27グリッド。**（重複）**14号溝と重複。14号溝より古い。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－81°－Ｅ。**（規模）**3.28m×3.44m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石と支脚石が残存。焼土は顕著。規模1.84m×0.66m。深さ４cm。**（床）**9.87㎡。深さ20cm。標高388.26m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**ほぼ全周すると思われる。幅16～31cm、深さ４～７cm。**（遺物出土状況）**竈内を中心に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・皿・蓋Ａ・甕Ａ。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第117号住居址　（第29・171図、図版19・97）

（位置）Ａ21・22Ｂ28グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－74°－Ｅ。**（規模）**4.44m×4.31m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.23m×0.70m。深さ10cm。**（床）**17.7㎡。深さ40cm。標高388.10m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**全周する。幅15～20cm、深さ５～６cm。**（遺物出土状況）**竈内を中心に出土している。**（遺物）**土師器皿、灰釉陶器椀、竈形土器。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第118号住居址　（第29・117図、図版19）

（位置）Ａ20・21Ｂ26・27グリッド。**（重複）**105･326号住と重複。105号住より古く、326号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－83°－Ｅ。**（規模）**3.12m×3.14m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや北寄りに位置する。右袖石の一部が残存。煙道部に天井石状の礫が崩落している。焼土は顕著。規模0.97m×0.58m。深さ11cm。**（床）**8.92㎡。深さ16cm。標高388.05m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅16～22cm、深さ４～６cm。**（遺物出土状況）**竈内から少量の遺物が出土している。**（遺物）**土師器皿・甕Ａ。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第119号住居址　（第30・172図、図版19・97）

（位置）Ａ20・21Ｂ24グリッド。**（重複）**28･62･63･106号住と重複。28･106号住より古く、61･63号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－13°－Ｗ。**（規模）**3.65m×3.12m。**（竈）**石組み。北竈。北壁北西コーナー近くに位置する。両袖石と支脚石が残存。その一部に焼成粘土柱を使用。焚口を塞ぐように礫がみられる。焼土は顕著。規模1.18m×0.52m。深さ９cm。**（床）**推定10.6㎡。深さ10cm。標高388.01m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅18～22cm、深さ４～６cm。**（遺物出土状況）**竈内から羽釜等が集中して出土している。**（遺物）**土師器皿（墨書土器片あり）・小型甕Ａ、羽釜Ａ、黒色土器椀。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第120号住居址　（第30・172図、図版20）

（位置）Ａ21Ｂ26グリッド。**（重複）**104号住と重複。104号住より古い。**（形状）**不明。Ｎ－21°－Ｗ。**（規模）**東西軸3.92m。**（覆土）**住居址全体にわたって床面より若干浮いた状態で礫が散乱する。**（竈）**石組み。北竈。北壁ほぼ中央に位置する。左袖石１個のみが残存。規模0.84m×0.62m。深さ15cm。**（床）**面積不明。深さ16cm。標高388.21m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅20～25cm、深さ４～６cm。**（遺物出土状況）**床面より若干浮いた状態で散在的に出土。**（遺物）**土師器皿（墨書あり）・甕Ａ、黒色土器坏、土錘。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第121号住居址　（第30・172図、図版20・97）

（位置）Ａ22・23Ｂ26・27グリッド。**（重複）**112･129号住と重複。112号住より古く、129号住より新しい。**（形状）**

隅丸長方形。N－85°－E。**（規模）**3.36m×2.67m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部と支脚石が残存。規模1.12m×0.65m。深さ6cm。**（床）**8.34㎡。深さ41cm。標高388.11m。竈周辺部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅13～23cm、深さ5～8cm。**（遺物出土状況）**竈崩落土内を中心に出土。**（遺物）**土師器皿・甕CⅠ・小型甕C、須恵器坏・高台坏・蓋A・甕。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期。

第122号住居址　（第30・173図、図版20・97）

（位置）A22・23B25・26グリッド。**（重複）**31・35・99・123・124号住、33号掘立と重複。31・35・99号住より古く、123・124号住、33号掘立より新しい。**（形状）**推定隅丸方形。N－79°－E。**（規模）**4.95m×4.87m。**（竈）**東竈。東壁ほぼ中央に位置する。掘り方のみ残存。規模南北軸0.87m。深さ6cm。**（床）**面積不明。深さ48cm。標高387.80m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅21～30cm、深さ10～15cm。**（遺物出土状況）**南壁際の床面直上から浮いた状態で出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）、須恵器甕、鉄鏃か。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第123号住居址　（第31・173図、図版20）

（位置）A22B25・26グリッド。**（重複）**35・77・122号住と重複。35・122号住より古く、77号住より新しい。**（形状）**不明。N－82°－E。**（規模）**東西軸4.08m。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模1.30m×0.77m。深さ9cm。**（床）**面積不明。深さ51cm。標高387.83m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部にはほぼ巡る。幅23～30cm、深さ11cm。**（遺物出土状況）**竈内から少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器坏A・甕CⅣ。**（時期）**不明。

第124号住居址　（第31・174図、図版20・97）

（位置）A22・23B25・26グリッド。**（重複）**31・35・99号住、20・30号掘立と重複。各住居址および20号掘立より古く、33号掘立より新しい。**（形状）**不明。N－80°－E。**（規模）**南北軸3.77m。**（竈）**石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。左袖石1個が残存。燃焼部等に袖石状の礫が散乱。焼土は顕著。規模0.91m×0.64m。深さ8cm。**（床）**面積不明。深さ35cm。標高388.03m。竈前面部のごくわずかな範囲は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅23～32cm、深さ7cm。**（遺物出土状況）**竈内を中心に出土している。**（遺物）**土師器坏A・皿、須恵器甕。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第125号住居址　（第31・174図、図版20・97）

（位置）A23B26グリッド。**（重複）**37・107号住、20号掘立、31・40号土坑と重複。いずれの遺構より古い。**（形状）**不明。N－79°－E。**（規模）**東西軸3.89m。**（竈）**不明。**（床）**面積不明。深さ30cm。標高388.28m。住居址中央部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅22～28cm、深さ5～10cm。**（遺物出土状況）**住居址中央部近くの床面上約10cmのレベルから、土師器坏の墨書土器出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）。**（時期）**宮ノ前Ⅴ期。

第126号住居址　（第31・174図、図版20・97）

（位置）A23B27・28グリッド。**（重複）**114・418号住と重複。114号住より古く、418号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－8°－W。**（規模）**3.35m×3.87m。**（竈）**石組み。北竈。北壁のほぼ中央に位置する。両袖石の一部が残存。燃焼部には支脚石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模1.48m×0.72m。深さ29cm。**（床）**推定12.1㎡。深さ48cm。標高388.10m。残存部はやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅20～34cm、深さ8～10cm。**（遺物出土状況）**北西コーナー付近で床面からわずかに浮いた状態で出土している。**（遺物）**土師器坏B・小型甕C、須恵器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅱ期。

第127号住居址　（第31・174図、図版20）

（位置）A21・22B27グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸方形。N－82°－E。**（規模）**2.77m×2.75m。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。掘り方内に天井石状の平石が落ち込んでいる。焼土は顕著。規模0.81m×0.69m。深さ7cm。**（床）**6.52㎡。深さ12cm。標高388.15m。竈前面部のごくわずかな範囲が堅固。**（壁溝）**全周する。幅21～25cm、深さ5～7cm。**（遺物出土状況）**竈内および南東コーナー壁下の床面よりやや浮いたレベルから少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器坏A（線刻あり）・皿・甕A。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第128号住居址　（第32・174図、図版21）

（位置）A21B25・26グリッド。**（重複）**36・90号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。N－82°－E。**（規模）**2.72m×2.86m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。右袖石の一部と支脚石が残存。焼土は顕著。規模0.85m×0.70m。深さ8cm。**（床）**6.79㎡。深さ28cm。標高388.08m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**断続的に巡る。幅17～25cm、深さ5～7cm。**（遺物出土状況）**遺物は少ないが、竈内および竈前面部のほぼ床面直上から出土。**（遺物）**土師器坏A・小型甕C。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第129号住居址　（第32・175図、図版21）

（位置）A23B26・27グリッド。**（重複）**112・121号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**不明。N－7°－W。**（規模）**南北軸3.00m。**（竈）**不明。おそらく北竈であろう。**（床）**面積不明。深さ18cm。標高388.33m。残存部の北西部分は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅16～26cm、深さ6cm。**（遺物出土状況）**北東コーナー壁下のほぼ床面直上から甕形土器の破片がまとまって出土。**（遺物）**土師器坏B（線刻あり）・甕CV・小型甕B。**（時期）**宮ノ前Ⅱ期？。

第130号住居址　（第32・175図、図版21・98）

（位置）A22B28グリッド。**（重複）**131・168・173号住と重複。いずれの住居址より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－88°－E。**（規模）**3.00m×2.40m。**（竈）**東竈。東壁のほぼ中央に位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.98m×0.79m。深さ11cm。**（床）**5.86㎡。深さ28cm。標高388.06m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅18～29cm、深さ6～8cm。**（遺物出土状況）**南東コーナーの床面上約10cm以内のレベルからややまとまって出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書土器片あり）・皿、須恵器高台坏A・長頸壺C。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期。

第131号住居址　（第32・175図、図版21）

（位置）A22B28グリッド。**（重複）**130・168・173号住と重複。130号住より古く、168・173号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－85°－E。**（規模）**2.72m×2.68m。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.84m×0.80m。深さ9cm。**（床）**推定6.98㎡。深さ12cm。標高388.21m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**全周する。幅15～24cm、深さ5～7cm。**（遺物出土状況）**覆土内から少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A・鉢。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第132号住居址　（第32・175図、図版21・98）

（位置）A19B23・24グリッド。**（重複）**141・154・155・378号住と重複。いずれの住居址より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－78°－E。**（規模）**2.64m×3.02m。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は堅固。規模0.98m×0.63m。深さ5cm。**（床）**6.97㎡。深さ29cm。標高387.52m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**全周する。幅20～27cm、深さ6～10cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈両脇の床面上数cmのレベルからややまとまって出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・甕A、黒色土器坏、鉄鏃。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第133号住居址　（第32・176図、図版21・98）

（位置）A21B27グリッド。**（重複）**408号住と重複。408号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－78°－E。**（規模）**3.35m×2.87m。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.89m×0.90m。深さ7cm。**（床）**8.65㎡。深さ27cm。標高388.05m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**全周する。幅15～20cm、深さ5～8cm。**（遺物出土状況）**竈周辺部から散在的に出土。床面上約数cm浮いたレベルから出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿・耳皿・甕A、須恵器凸帯壷、黒色土器坏。**（時期）**宮ノ前IX期。

第134号住居址　（第33図、図版21）

（位置）A24B27グリッド。**（重複）**110・111号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸長方形。N－77°－E。**（規模）**4.57m×3.70m。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方の一部が残存。規模東西軸0.66m。深さ11cm。**（床）**推定15.7㎡。深さ20cm。標高388.37m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**西壁下を中心に巡る。幅27～36cm、深さ4～8cm。**（遺物出土状況）**非常に少ない。**（遺物）**水晶片。**（時期）**不明。

第135号住居址　（第33・176図、図版21）

（位置）A23B24グリッド。**（重複）**33・136・137号住と重複。33号住より古く136・137号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－78°－E。**（規模）**4.48m×3.80m。**（竈）**不明。**（床）**面積不明。深さ23cm。標高388.40m。残存部はやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅18～27cm、深さ8～11cm。**（遺物出土状況）**覆土内から少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器坏A小片。**（時期）**不明。

第136号住居址　（第33・176図、図版22）

（位置）A23B27グリッド。**（重複）**33・135・137号住、14号溝と重複。33・135号住、14号溝より古く、137号住より新しい。**（形状）**不明。N－82°－E。**（規模）**南北軸2.55m。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。掘り方および支脚石が残存。焼土は顕著。**（規模）**0.95m×0.68m。深さ12cm。**（床）**面積不明。深さ10cm。標高388.46m。竈周辺で堅固な箇所が散在する。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅17～19cm、深さ4～6cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**須恵器坏。**（時期）**不明。

第137号住居址　（第33・176図、図版22・98）

（位置）A23・24B27グリッド。**（重複）**33・111・135・136号住、13・14号溝と重複。いずれの遺構より古い。**（形状）**隅丸方形。N－81°－E。**（規模）**4.03m×4.19m。**（覆土）**住居址全体にわたって床面直上～床面上約10cmのレベル内において礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。左袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.13m×0.67m。深さ22cm。**（床）**推定15.5㎡。深さ37cm。標高388.23m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅18～33cm、深さ6～8cm。**（遺物出土状況）**竈前面部の床面上数cmのレベルから中心に出土。**（遺物）**土師器坏A・皿・甕A・CI、須恵器坏（墨書あり）・高台坏A・蓋・長頸壷C、鉄斧、縄文時代石剣。**（時期）**宮ノ前VI期。

第138号住居址　（第33・177図、図版22・98・99）

（位置）A20・21B27・28グリッド。**（重複）**415号住、14号溝と重複。14号溝より古く、415号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－78°－E。**（規模）**6.32m×5.81m。**（覆土）**床面直上から床面より若干浮いたレベルで礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや北寄りに位置する。両袖石の一部が残存。天井石状の平石が焚口を塞いだ状態で出土。焼土は極めて顕著。規模1.23m×0.63m。深さ6cm。**（床）**31.1㎡。深さ58cm。標高387.58m。竈周辺は堅固。**（壁溝）**全周する。幅26～40cm、深さ6～9cm。**（柱穴）**2箇所に柱穴状のピットあり。径1.00m前後、深さ18～33cmを測る。**（遺物出土状況）**遺物の出土は大きく竈内とその周辺および南壁下とに分けられ、時

期的にも異なっている。そうした遺物の時期的様相から古い段階の住居址等が存在した可能性が考えられる。出土レベルは床面直上のものが多い。**（遺物）**土師器坏A（タール付着するものあり、墨書・線刻あり）・皿・甕A・小型甕A・C、須恵器坏・高台坏A・B・蓋A・甕・鉢B・高坏、黒色土器坏、鉄鏃。**（時期）**宮ノ前V期。

第139号住居址　（第34・177・178図、図版22・99）

（位置）A18B24グリッド。**（重複）**283･367号住と重複。両住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－83°－E。**（規模）**4.21m×4.03m。**（覆土）**床面直上～床面上約10cmのレベル内で礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。左袖石1個のみ残存。焼土は顕著。規模1.45m×1.13m。深さ29cm。**（床）**14.6㎡。深さ40cm。標高387.21m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅26～30cm、深さ6～8cm。**（柱穴）**2箇所に柱穴状のピットあり。径35～40cm、深さ25～55cmを測る。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺を中心に出土。床面より浮いた状態で出土。**（遺物）**土師器坏A・高台坏（墨書・線刻あり）・皿・甕A・小型甕A、黒色土器坏（墨書あり）、須恵器壷、灰釉陶器長頸壷。**（時期）**宮ノ前VII～VIII期。

第140号住居址　（第34・178図、図版22・99）

（位置）A18B23グリッド。**（重複）**283･367号住、18号溝と重複。いずれの遺構より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－94°－E。**（規模）**3.14m×3.10m。**（覆土）**床面上わずかに浮いたレベルで、竈周辺部を中心に礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石および支脚石が残存。燃焼部と煙道部に天井石状の平石が落ち込む。焼土は顕著。規模1.14m×0.65m。深さ16cm。**（床）**8.08㎡。深さ37cm。標高387.27m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**東壁下と南壁下の一部は巡らない。幅19～28cm、深さ4～6cm。**（遺物出土状況）**竈前面部の床面直上からわずかに出土。**（遺物）**土師器坏A（線刻土器は流入品だろう）・皿（タール付着）。**（時期）**宮ノ前IX期。

第141号住居址　（第35・178・179図、図版22・99）

（位置）A19・20B23・24グリッド。**（重複）**132･140･144･154･406号住、18号溝と重複。いずれの住居址より古く、18号溝より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－9°－W。**（規模）**6.72m×7.36m。**（覆土）**竈周辺部を中心に床面直上レベルで礫が散乱する。**（竈）**石組み。北竈。北壁のほぼ中央に位置する。両袖石が残存。焼土は非常に顕著。掻きだされたとみられる焼土と灰が竈前面部で看取できる。規模1.45m×0.88m。深さ15cm。**（床）**44.3㎡。深さ39cm。標高387.31m。壁際を除いた全体が堅固。**（壁溝）**全周する。幅22～44cm、深さ7～10cm。**（柱穴）**精査を行なったが確認できず。**（遺物出土状況）**多量に出土しているが、竈内および竈右袖脇周辺の床面直上からややまとまって出土する。また本住居址に直接伴うかは不明だが、和鏡と歯の納められた漆器が覆土上層から出土している。おそらく後世の土坑等の遺構に伴うものと考えられる。**（遺物）**土師器坏B（タール付着するものあり、線刻あり）・甕B・CIV・CV・小型甕B・E・球胴甕A、手捏ね土器、漆器、銅製鏡。**（時期）**宮ノ前II期。

第142号住居址　（第35・179図、図版22・99）

（位置）A20B23グリッド。**（重複）**143･150･401号住と重複。143号住より古く、150･401号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－84°－E。**（規模）**3.73m×3.30m。**（覆土）**住居址中央やや北寄りを中心の床面直上～床面上約10cm以内のレベルで礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。右袖石の一部が残存。左袖部には袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模1.17m×0.77m。深さ13cm。**（床）**10.9㎡。深さ35cm。標高387.55m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**全周する。幅17～30cm、深さ6～7cm。**（遺物出土状況）**竈内および南壁下の床面直上から少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器坏A（線刻あり）・小型甕A、須恵器坏。**（時期）**宮ノ前V期。

第143号住居址　（第35・180図、図版23・99）

（位置）A20B23・24グリッド。**（重複）**142・147・159・401号住と重複。いずれの住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－83°－E。調査ミスで西壁の大半を欠失してしまった。**（規模）**3.86m×3.49m。**（竈）**東竈。東壁のほぼ中央に位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.88m×0.74m。深さ6cm。**（床）**11.8㎡。深さ22cm。標高387.71m。竈前面部のみ堅固。**（壁溝）**断続的に巡る。幅15～23cm、深さ4～6cm。**（遺物出土状況）**住居址南東部のほぼ床面直上から散在的に出土。**（遺物）**土師器皿・甕A、鎌。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第144号住居址　（第36・180図、図版23・100）

（位置）A18・19B24グリッド。**（重複）**141号住、9号溝と重複。141号住より新しく、9号溝より古い。**（形状）**隅丸方形。N－88°－E。**（規模）**3.48m×3.50m。**（覆土）**住居址中央部の床面上約10cm以内のレベルで礫の集積がみられる。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部と支脚石が残存。焼土は顕著。竈前面部に灰を掻きだした痕跡あり。規模0.88m×0.56m。深さ3cm。**（床）**10.5㎡。深さ33cm。標高387.38m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**北壁の一部で途切れるが、他は巡る。幅16～28cm、深さ5～10cm。**（遺物出土状況）**住居址東側部分の床面直上から散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿（墨書あり）・甕A・C、黒色土器坏、須恵器凸帯壷・甕、棒状鉄製品。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第145号住居址　（第36・181図、図版23・100）

（位置）A14B23・24グリッド。**（重複）**158・174・229号住と重複。いずれの住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－69°－E。**（規模）**2.48m×2.39m。**（覆土）**床面上2～30cmのレベル内に礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石と天井石の一部および支脚石が残存。焼土は顕著。規模1.02m×0.43m。深さ6cm。**（床）**4.83㎡。深さ40cm。標高386.50m。竈前面部のみやや堅固。**（壁溝）**全周する。幅18～40cm、深さ4～7cm。**（遺物出土状況）**床面よりわずかに浮いた状態で少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A・皿（墨書あり）・甕A。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第146号住居址　（第36・181図、図版23・100）

（位置）A24B28グリッド。**（重複）**115号住と重複。115号住より古い。**（形状）**不明。N－78°－E。**（規模）**南北軸2.88m。**（竈）**不明。**（床）**面積不明。深さ12cm。標高388.40m。壁際を除いて非常に堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅23～31cm、深さ5～7cm。**（遺物出土状況）**住居址中央部および南壁際の床面からやや浮いたレベルから散在的に出土。**（遺物）**須恵器坏（線刻あり）、土師器甕CⅡ、鉄鏃か。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期。

第147号住居址　（第36・181図、図版23・100）

（位置）A19・20B23・24グリッド。**（重複）**143・159号住と重複。143号住より古く、159号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－78°－E。**（規模）**3.32m×3.01m。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。掘り方内に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模1.31m×0.74m。深さ16cm。**（床）**推定9.08㎡。深さ23cm。標高387.68m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅19～23cm、深さ4cm。**（遺物出土状況）**小破片が中心で、竈周辺の床面よりやや浮いたレベルから集中して出土。**（遺物）**土師器坏A・鉢AⅠ・甕A・小型甕A。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第148号住居址　（第36・181・182図、図版24・100）

（位置）A15・16B28・29グリッド。**（重複）**149・151・426号住と重複。149号住より古く、151・426号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－79°－E。**（規模）**3.88m×4.41m。**（覆土）**住居址中央部の床面直上を中心に礫の集積がみられる。**（竈）**石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.16m×

0.61m。深さ10cm。**（床）**推定15.6㎡。深さ35cm。標高386.74m。竈周辺部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅23～28cm、深さ５～７cm。**（遺物出土状況）**竈右袖脇より東壁際の床面直上から集中的に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・高台坏・皿・蓋Ａ・甕Ａ・小型甕Ａ、須恵器高台付坏・蓋Ａ。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期。

第149号住居址　（第37・182図、図版24・100）

（位置）Ａ16Ｂ28グリッド。**（重複）**148･152･153･213号住と重複。152号住より古く、他の住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－68°－Ｅ。**（規模）**4.25m×3.92m。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石と天井石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.35m×0.83m。深さ14cm。**（床）**14.8㎡。深さ50cm。標高386.76m。竈前面部のみ堅固。**（壁溝）**全周する。幅22～33cm、深さ５～10cm。**（遺物出土状況）**住居址中央部および北・南壁下のほぼ床面直上から散在的に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ（墨書あり）・皿（線刻あり）・甕Ａ、黒色土器坏、灰釉陶器段皿、緑釉陶器耳皿。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第150号住居址　（第37・182・183図、図版100）

（位置）Ａ19・20Ｂ23グリッド。**（重複）**142号住、18号溝と重複。142号住より古く、18号溝より新しい。**（形状）**不明。Ｎ－87°－Ｅ。**（規模）**東西軸3.19m。**（竈）**石組み。東竈。東壁の中央あたりに位置する。右袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.02m×0.80m。深さ12cm。**（床）**面積不明。深さ35cm。標高387.55m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅20～27cm、深さ５～８cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈前面部の床面直上からややまとまって出土。**（遺物）**須恵器坏・土師器甕Ａ・ＣⅠ・ＣⅡ・小型甕Ｃ。**（時期）**宮ノ前Ⅳ期。

第151号住居址　（第37・183図、図版24・100）

（位置）Ａ15Ｂ28・29グリッド。**（重複）**148･157･426号住と重複。148･157号住より古く?、426号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－76°－Ｅ。**（規模）**3.11m×3.42m。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部と支脚石が残存。焼土は顕著。規模1.32m×0.99m。深さ11cm。**（床）**推定9.90㎡。深さ15cm。標高386.72m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅18～23cm、深さ４～６cm。**（遺物出土状況）**竈内を中心に少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・皿・甕ＣⅢ・小型甕Ｂ。**（時期）**宮ノ前Ⅱ・Ⅷ期。

第152号住居址　（第37・183図、図版24）

（位置）Ａ16Ｂ28グリッド。**（重複）**149･153号住と重複。両住居址より新しい。**（形状）**隅丸長方形。Ｎ－72°－Ｅ。**（規模）**3.04m×3.40m。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石が残存するが、燃焼部および煙道部に天井石状の平石が落ち込んでいる。焼土は顕著。規模1.23m×0.61m。深さ９cm。**（床）**9.02㎡。深さ13cm。標高386.87m。竈前面部のみ堅固。**（壁溝）**全周する。幅17～30cm、深さ４～７cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・皿、緑釉陶器椀、刀子。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第153号住居址　（第38・183・184図、図版24・101）

（位置）Ａ16Ｂ28グリッド。**（重複）**149･152･213･216･224号住と重複。149･152･224号住より古く、216号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－18°－Ｗ。**（規模）**5.52m×5.41m。**（竈）**石組み。北竈。北壁北西コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は非常に顕著。規模1.48m×0.83m。深さ17cm。**（床）**26.9㎡。深さ26cm。標高387.01m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅20～32cm、深さ５～９cm。**（遺物出土状況）**竈左袖脇周辺の床面直上および床面上５～10cmのレベルから集中的に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ（墨書あり）・皿（墨書・線刻あり）・甕Ａ・小型甕Ｃ・鉢、黒色土器坏・椀・高台皿、灰釉陶器椀（ヘラ書あり）・長頸壷、須恵器長頸壷Ａ、釘。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第154号住居址　（第38・184図、図版24・101）

（位置）A19B23・24グリッド。**（重複）**132・141・155号住と重複。132号住より古く、141・155号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－77°－E。**（規模）**2.74m×2.65m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。右袖石の一部が残存。両袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模0.82m×0.60m。深さ4cm。**（床）**6.44㎡。深さ31cm。標高387.43m。竈前面部は堅固で、住居址中央部にも堅固な箇所が散在する。**（壁溝）**ほぼ巡る。幅18～23cm、深さ4～7cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺部のほぼ床面直上から少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器皿・甕A。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第155号住居址　（第38・185図、図版24・101）

（位置）A19B23・24グリッド。**（重複）**132・154・378号住と重複。132・154号住より古く、378号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－83°－E。**（規模）**3.43m×4.07m。**（竈）**石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。右袖石の一部と支脚石が残存。左袖石の一部が燃焼部内に倒れこんでいる。焼土は顕著。規模0.81m×0.75m。深さ16cm。**（床）**推定12.8㎡。深さ21cm。標高387.60m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅19～28cm、深さ4～6cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺の床面直上から集中的に出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿（墨書あり）・甕A、黒色土器坏・鉢。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第156号住居址　（第38図、図版24）

（位置）A22B27グリッド。**（重複）**113・405号住、14号溝と重複。113号住、14号溝より古く、405号住より新しい。**（形状）**不明。主軸方向不明。**（規模）**東西軸3.42m。**（竈）**不明。**（床）**面積不明。深さ18cm。標高388.16m。残存部はやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅19～20cm、深さ5～6cm。**（遺物出土状況）**細片の土器が覆土内から少量出土。**（遺物）**実測できる遺物なし。**（時期）**不明。

第157号住居址　（第39・185図、図版25・102）

（位置）A15B28・29グリッド。**（重複）**151・426号住、16号溝と重複。いずれの遺構より新しい?。**（形状）**隅丸長方形。N－83°－E。**（規模）**3.57m×4.02m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.13m×0.70m。深さ14cm。**（床）**推定12.6㎡。深さ36cm。標高386.74m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**ほぼ巡る。幅22～29cm、深さ5～7cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺、北壁際の床面直上と床面上約20cmのレベル内で散在的に出土。**（遺物）**土師器坏B・D（タール付着するものあり）・鉢B・甕A・C、須恵器坏・壷・蓋A（硯として転用）・甕、手捏ね土器。**（時期）**宮ノ前Ⅰ期?。

第158号住居址　（第39・186図、図版25・102）

（位置）A14B23グリッド。**（重複）**145・166・174号住と重複。145・166号住より古く、174号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－80°－E。**（規模）**4.32m×3.60m。**（竈）**不明。**（床）**推定13.7㎡。深さ48cm。標高386.58m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅17～27cm、深さ4～9cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物がかなりのレベル差をもって散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書・線刻土器片あり）、黒色土器坏（墨書あり）、須恵器高台坏A、手捏ね土器、刀子・楔形鉄製品。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第159号住居址　（第39・186・187図、図版25・102）

（位置）A20B23・24グリッド。**（重複）**143・147号住、9・10号溝と重複。いずれの遺構より古い。**（形状）**隅丸方形。N－84°－E。**（規模）**4.36m×4.00m。**（竈）**石組み。東竈。東壁のほぼ中央に位置する。右袖石の一部が残存。左袖部には袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模1.06m×0.78m。深さ8cm。**（床）**14.9㎡。深さ40cm。標高387.57m。竈周辺部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**全周する。幅23～33cm、深さ4～6cm。

（遺物出土状況）竈内および竈周辺の床面直上と床面上10～20cmのレベル内で集中的に出土。**（遺物）**土師器坏A・鉢B・甕A・CI・小型甕B、須恵器坏高台坏A（ヘラ書あり）・蓋A・鉢A、刀子・釘か。**（時期）**宮ノ前V期。

第160号住居址　（第39・188図、図版25・102）

（位置）A16・17B27グリッド。**（重複）**227・293号住と重複。両住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－78°－E。**（規模）**4.38m×4.26m。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.34m×1.10m。深さ11cm。**（床）**16.4㎡。深さ33cm。標高387.12m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅24～35cm、深さ7～10cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺、西壁際等の床面からわずかに浮いたレベルから多量に出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり、タール付着するものあり）・皿・甕A、羽釜A、黒色土器坏、灰釉陶器壷、須恵器蓋A、羽口片、棒状鉄製品・鏃子用金具・銅製環。**（時期）**宮ノ前IX期。

第161号住居址　（第40・188図、図版25・102）

（位置）A16・17B26グリッド。**（重複）**175・299号住と重複。両住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－85°－E。**（規模）**3.94m×3.85m。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存するが、掘り方内に袖石状の礫が散乱する。焼土は顕著。規模1.09m×0.84m。深さ9cm。**（床）**推定14.1㎡。深さ20cm。標高387.27m。竈前面部から住居址中央部にかけて非常に堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅13～22cm、深さ4～6cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺、北東コーナー付近の床面からわずかに浮いたレベルから散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿・小型甕A、羽釜A、緑釉陶器椀（陰刻花文あり）、刀子。**（時期）**宮ノ前IX期。

第162号住居址　（第40・188図、図版25・103）

（位置）A14B25・26グリッド。**（重複）**184・185号住と重複する。両住居址より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－77°－E。**（規模）**2.91m×3.37m。**（覆土）**住居址中央部の床面よりわずかに浮いたレベルで礫が散乱。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.11m×0.76m。深さ9cm。**（床）**9.17㎡。深さ26cm。標高386.68m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅15～18cm、深さ4～6cm。**（遺物出土状況）**竈右袖脇と南東コーナーの間の床面直上から集中的に出土。**（遺物）**土師器坏A・皿・甕A、灰釉陶器長頸壷、手捏ね土器。**（時期）**宮ノ前VIII期。

第163号住居址　（第40・189図、図版25）

（位置）A20B26グリッド。**（重複）**105号住、43号掘立と重複。105号住より古く、43号掘立より新しい。**（形状）**ややいびつな隅丸方形。N－74°－E。**（規模）**3.35m×3.40m。**（覆土）**住居址中央部の床面直上から床面上約25cmのレベル内に礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。焼土は顕著。規模1.11m×0.81m。深さ5cm。**（床）**9.36㎡。深さ35cm。標高387.80m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅19～29cm、深さ4～6cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈右袖脇の床面から数cm浮いたレベルで集中的に出土。**（遺物）**土師器坏A（タール付着するものあり）・皿・小型甕A、黒色土器坏、棒状鉄製品。**（時期）**宮ノ前IX期。

第164号住居址　（第40・189図、図版25・103）

（位置）A24B28グリッド。**（重複）**115・248号住と重複。115号住より古く、248号住より新しい。**（形状）**不明。N－83°－E。**（規模）**南北軸3.94m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部と支脚石が残存。焼土は顕著。規模1.28m×0.93m。深さ14cm。**（床）**面積不明。深さ24cm。標高388.22m。壁際を除いて全体に堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅22～27cm、深さ4～6cm。**（遺物出土状況）**住居址全体にわたって床面直上および床面上約10cmのレベル内から散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A（線刻あり）・高台坏・甕A、須恵器坏・高台坏・蓋A・横瓶。**（時期）**宮ノ前VII期。

第165号住居址　（第41・189図、図版26）

（位置）A24B27グリッド。**（重複）**39・110号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。N－82°－E。**（規模）**3.24m×3.10m。**（竈）**東竈。東壁のほぼ中央に位置する。掘り方のみ残存。焼土はあまり顕著ではない。規模0.87m×0.72m。深さ5cm。**（床）**推定9.17㎡。深さ6cm。標高388.52m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅17～23cm、深さ4～5cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が床面直上から散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A・甕C、須恵器坏・高台坏A。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期。

第166号住居址　（第41・190図、図版26・103）

（位置）A14B23グリッド。**（重複）**158・171・174号住と重複。171号住より古く、158・174号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－75°－E。**（規模）**3.26m×3.60m。**（覆土）**竈前面部の床面直上から床面上約25cmのレベル内で礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。右袖石の一部が残存する。竈前面部を中心に灰を多量に含んだ暗褐色土が床面上最高10cmの厚さで堆積している。焼土は顕著。規模1.07m×0.70m。深さ7cm。**（床）**推定10.6㎡。深さ50cm。標高386.64m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅18～27cm、深さ4～5cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺部の床面上やや浮いたレベルから散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A・甕A・小型甕A・C、黒色土器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第167号住居址　（第41・190図、図版26・103・104）

（位置）A20B25グリッド。**（重複）**106号住、44号掘立と重複。106号住より古く、44号掘立より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－82°－E。**（規模）**3.71m×3.39m。**（竈）**東竈。東壁ほぼ中央に位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.91m×0.62m。深さ9cm。**（床）**10.1㎡。深さ48cm。標高387.72m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**全周する。幅23～35cm、深さ4～8cm。**（遺物出土状況）**南東コーナー付近の床面直上から主に出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・甕A・小型甕C、須恵器坏・高台坏A（墨書・線刻あり）。**（時期）**宮ノ前Ⅴ期。

第168号住居址　（第41図、図版26）

（位置）A22B27・28グリッド。**（重複）**130・131号住、13号溝と重複。いずれの遺構より古い。**（形状）**隅丸長方形。N－86°－E。**（規模）**2.92m×3.44m。**（竈）**石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。掘り方が主に残存するが、掘り方内には袖石状の礫も残存する。焼土は顕著。規模南北軸0.69m。深さ9cm。**（床）**推定9.09㎡。深さ20cm。標高388.17m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅19～31cm、深さ7～9cm。**（遺物出土状況）**小片が覆土内からわずかに出土。**（遺物）**特になし。**（時期）**不明。

第169号住居址　（第42・191図、図版26・104）

（位置）A16・17B25・26グリッド。**（重複）**175・298・299・391号住、17号溝と重複。いずれの住居址より新しく、17号溝より古い。**（形状）**隅丸方形。N－78°－E。**（規模）**4.70m×4.82m。**（覆土）**住居址全体にわたって礫が床面直上から床面よりやや浮いたレベルで散乱する。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方が残存。掘り方内には袖石状の礫も残存。焼土は顕著。規模1.39m×0.87m。深さ17cm。**（床）**20.6㎡。深さ33cm。標高387.24m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅17～30cm、深さ6～10cm。**（遺物出土状況）**特に集中することはないが、土師器坏Aが南壁下際の床面直上と床面上約10cm以内のレベルから出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿・甕A、須恵器甕、黒色土器坏、刀子・棒状鉄製品、碁石状石製品。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第170号住居址　（第42・191・192図、図版26・104）

（位置）A13・14B23グリッド。**（重複）**178・204・205号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。

N－10°－W。**（規模）**3.67m×3.53m。**（竈）**北竈。北壁中央やや東寄りに位置する。掘り方が残存するが、左袖部に袖石状の礫が故意に置かれたような状態で残存。焼土は顕著。規模1.48m×0.83m。深さ14cm。**（床）**11.3㎡。深さ58cm。標高386.42m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**全周する。幅17～23cm、深さ４～７cm。**（遺物出土状況）**住居址中央部と南東コーナー付近に遺物のまとまりがみられるが、その大半が床面上10～30cmのレベルから出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・Ｂ（墨書・線刻あり）・甕Ａ・Ｂ・Ｃ・ＣＶ・小型甕Ｃ・Ｄ・球胴甕Ａ・小型壷Ａ。**（時期）**宮ノ前Ⅰ期。

第171号住居址　（第42・192図、図版26・104）

（位置）Ａ14・15Ｂ23グリッド。**（重複）**166・176・182・352号住と重複。176号住より古く、166・182・352号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－75°－Ｅ。**（規模）**3.69m×3.76m。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。掘り方内に袖石状の礫がまとまって残存する。焼土は顕著。規模1.56m×0.97m。深さ11cm。**（床）**12.3㎡。深さ55cm。標高386.60m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅17～25cm、深さ５～９cm。**（遺物出土状況）**竈内および床面上約10cmのレベル内から散在的に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ（スス付着するものあり）・皿・甕Ａ。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第172号住居址　（第43・192・193図、図版26・27・105）

（位置）Ａ15Ｂ25グリッド。**（重複）**191・199・200・203・206号住と重複。191・199・206号住より古く、200・203号住より新しい。**（形状）**不明。Ｎ－76°－Ｅ。**（規模）**南北軸4.25m。**（覆土）**竈前面部の広い範囲の床面上やや浮いたレベルで礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。両袖石の一部が残存。焚口部付近に天井石状の平石も残存。焼土は顕著。規模1.06m×0.69m。深さ16cm。**（床）**面積不明。深さ５cm。標高386.96m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅15～25cm、深さ４～６cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺の床面直上と床面から若干浮いたレベルから集中的に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ（線刻あり）・甕ＣⅡ・小型甕Ｃ、須恵器坏・高台坏・鉢Ａ（線刻あり）・高坏・甕、手捏ね土器。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期。

第173号住居址　（第43図、図版27）

（位置）Ａ22Ｂ28グリッド。**（重複）**130・131号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**不明。Ｎ－84°－Ｅ。**（規模）**南北軸3.44m。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著ではない。規模0.76m×0.69m。深さ９cm。**（床）**面積不明。深さ４cm。標高388.21m。散在的に堅固な箇所あり。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅16～22cm、深さ４～５cm。**（遺物出土状況）**住居址覆土内から鉄製品出土。**（遺物）**鎌・釘。**（時期）**不明。

第174号住居址　（第43図、図版27）

（位置）Ａ14Ｂ23グリッド。**（重複）**145・158・166号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**不明。主軸方向不明。**（規模）**不明。**（竈）**不明。**（床）**面積不明。深さ33cm。標高386.63m。やや軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅20～31cm、深さ７～８cm。**（遺物出土状況）**特になし。**（遺物）**特になし。**（時期）**不明。

第175号住居址　（第43・193図、図版27）

（位置）Ａ16・17Ｂ26グリッド。**（重複）**161・169・233号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－77°－Ｅ。**（規模）**2.74m×2.94m。**（覆土）**住居址中央部のほぼ床面直上で礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。両袖石と支脚石が残存。焼土は顕著。規模0.92m×0.71m。深さ15cm。**（床）**推定6.99㎡。深さ25cm。標高387.17m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅16～20cm、深さ４～７cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が竈内等から出土。**（遺物）**土師器甕Ｃ、須恵器甕。**（時期）**不明。

第176号住居址　（第43・193図、図版27・105）

（位置）A14・15B23グリッド。**（重複）**171・192・223・352・409号住と重複。いずれの住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－78°－E。**（規模）**4.12m×3.92m。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。右袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模0.91m×0.70m。深さ10cm。**（床）**14.0㎡。深さ48cm。標高386.64m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅17～34cm、深さ４～８cm。**（遺物出土状況）**床面直上および床面よりわずかに浮いたレベルから散在的に出土。破片資料が中心。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・小型甕A、黒色土器坏・高脚高台坏、青磁片、砥石。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第177号住居址　（第44・194図、図版27・105）

（位置）A14B25グリッド。**（重複）**187・228・246号住と重複。いずれの住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－80°－E。**（規模）**4.24m×4.06m。**（覆土）**竈前面部のほぼ床面直上で礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石と天井石の一部および支脚石が残存。規模1.72m×0.83m。深さ20cm。**（床）**15.3㎡。深さ29cm。標高386.69m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅20～30cm、深さ５～７cm。**（遺物出土状況）**床面直上および床面上約20cmのレベル内で散在的に出土。壁際の遺物は浮いた状態のものが目立つ。**（遺物）**土師器坏A・皿（墨書・線刻あり）・甕A・小型甕A・C・鉢AⅠ、黒色土器坏・椀、棒状鉄製品。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第178号住居址　（第44・194図、図版27）

（位置）A13B23・24グリッド。**（重複）**170・188号住と重複。両住居址より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－76°－E。**（規模）**2.48m×2.88m。**（覆土）**床面上約２～７cmのレベルで巨石を含む礫の集積がみられる。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。右袖石の一部が残存するが、崩落土上に天井石とみられる平石が残存。焼土は顕著。規模0.83m×0.70m。深さ５cm。**（床）**推定6.36㎡。深さ24cm。標高386.60m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅17～25cm、深さ５～９cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A・皿・甕A。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第179号住居址　（第44・194図、図版28・105）

（位置）A15B26グリッド。**（重複）**202・209号住、17号溝と重複。両住居址より新しく、17号溝より古い。**（形状）**隅丸長方形。N－78°－E。**（規模）**3.82m×3.24m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.32m×0.86m。深さ16cm。**（床）**10.5㎡。深さ47cm。標高386.87m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**断続的に巡る。幅21～36cm、深さ４～６cm。**（遺物出土状況）**遺物量は少ないが、ロクロ整形土師器甕の一括資料が竈周辺の床面直上から出土。**（遺物）**土師器坏B・甕CⅡ、須恵器坏・蓋A、砥石、刀子・釘。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期。

第180号住居址　（第45・195図、図版28・105）

（位置）A16B29グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸長方形。N－71°－E。**（規模）**3.47m×2.96m。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模0.94m×0.83m。深さ12cm。**（床）**推定9.18㎡。深さ34cm。標高386.72m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅18～24cm、深さ５～７cm。**（遺物出土状況）**土師器甕一括資料が竈内とその周辺のほぼ床面直上から出土。全体的に遺物量は少ない。**（遺物）**土師器坏A・高台坏・甕A・小型甕A。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第181号住居址　（第45・195図、図版28・105）

（位置）A14・15B25・26グリッド。**（重複）**187号住と重複。187号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－74°－E。**（規模）**4.16m×4.00m。**（覆土）**竈周辺部の床面直上から床面上約30cmのレベルの範囲内で礫が集積する。**（竈）**

石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部と左袖部に粘質土で構築された袖の一部が残存。規模1.37m×0.97m。深さ6cm。**(床)** 14.6㎡。深さ37cm。標高386.64m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**(壁溝)** 全周する。幅18～28cm、深さ4～8cm。**(遺物出土状況)** 竈内および各壁際の床面直上から散在的に出土。**(遺物)** 土師器坏A（墨書あり）・皿・甕A・小型甕A、黒色土器坏。**(時期)** 宮ノ前Ⅷ期。

第182号住居址　(第45・196図、図版28・105)

(位置) A14・15B23・24グリッド。**(重複)** 171・235・352号住と重複。171・235号住より古く、352号住より新しい。**(形状)** 隅丸方形。N－9°－W。**(規模)** 3.58m×3.92m。**(竈)** 不明。**(床)** 推定11.7㎡。深さ55cm。標高386.66m。住居址中央部は堅固。**(壁溝)** 床面残存部は巡る。幅17～35cm、深さ4～6cm。**(遺物出土状況)** 少量の遺物が床面直上より数cm浮いたレベルから散在的に出土。**(遺物)** 土師器坏B（線刻あり）・甕B・小型甕B。**(時期)** 宮ノ前Ⅰ期？。

第183号住居址　(第45・196図、図版28・106)

(位置) A14B24・25グリッド。**(重複)** 225・228・244・246・257号住と重複。いずれの住居址より新しい。**(形状)** 隅丸長方形。N－74°－E。**(規模)** 3.39m×2.98m。**(竈)** 不明。**(床)** 9.22㎡。深さ13cm。標高387.00m。住居址中央部を中心として堅固。**(壁溝)** ほぼ全周する。幅18～23cm、深さ5～7cm。**(遺物出土状況)** 少量の遺物が散在的に出土。**(遺物)** 土師器坏、須恵器蓋A。**(時期)** 不明。

第184号住居址　(第45・196図、図版28)

(位置) A14B26グリッド。**(重複)** 162・185号住と重複。両住居址より古い。**(形状)** 隅丸方形。N－77°－E。**(規模)** 3.28m×3.49m。**(竈)** 石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。右袖石の一部が残存。掘り方内には袖石を据えたとみられるピットがあり、凹凸が著しい。焼土は顕著。規模1.35m×0.89m。深さ14cm。**(床)** 推定10.1㎡。深さ23cm。標高386.67m。竈前面部は堅固。**(壁溝)** 床面残存部は巡る。幅16～25cm、深さ5～6cm。**(遺物出土状況)** 竈右袖脇の床面上約10cmのレベルから土師器甕片出土。**(遺物)** 土師器甕B、鉄鏃。**(時期)** 不明。

第185号住居址　(第46・196図、図版28・106)

(位置) A14B25・26グリッド。**(重複)** 162・184号住と重複。162号住より古く、184号住より新しい。**(形状)** 隅丸方形。N－78°－E。**(規模)** 3.83m×4.21m。**(竈)** 石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部と左袖石が残存。燃焼部内に袖石と支脚石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模1.01m×0.78m。深さ9cm。**(床)** 14.2㎡。深さ32cm。標高386.58m。竈周辺部は堅固。**(壁溝)** 全周する。幅14～24cm、深さ4～6cm。**(遺物出土状況)** 竈内および竈周辺の床面直上から主に出土。**(遺物)** 土師器坏A（墨書あり）・皿（線刻あり）・甕A・B、黒色土器坏・高台皿（墨書あり）、灰釉陶器椀。**(時期)** 宮ノ前Ⅶ期。

第186号住居址　(第46・197図、図版28・106)

(位置) A13・14B24グリッド。**(重複)** 257・269・北後田遺跡B21号住と重複。北後田遺跡B21号住より古く、257・269号住より新しい。**(形状)** 隅丸方形。N－81°－E。**(規模)** 3.94m×4.17m。**(覆土)** 住居址中央部の床面上わずかに浮いたレベルを中心に礫が散乱する。**(竈)** 石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部と支脚石が残存。焼土は顕著。規模1.28m×0.53m。深さ11cm。**(床)** 推定15.5㎡。深さ33cm。標高386.63m。竈周辺部は堅固。**(壁溝)** 全周すると思われる。幅14～25cm、深さ5～8cm。**(遺物出土状況)** 竈内からやや集中的に出土し、他は床面直上から床面上約20cm前後のレベルの範囲で散在的に出土。**(遺物)** 土師器坏A・B・甕A・小型甕A、黒色土器坏、須恵器坏、須恵器甕胴部破片利用転用硯。**(時期)** 宮ノ前Ⅷ期。

第187号住居址　（第46・197図、図版29）

（位置）A14・15B25グリッド。**（重複）**177・181・191号住と重複。いずれの住居址より新しい。**（形状）**不明。N－74°－E。**（規模）**東西軸3.18m。**（竈）**東竈。東壁のほぼ中央に位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模東西軸1.08m。深さ10cm。**（床）**面積不明。深さ30cm。標高386.76m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅20～23cm、深さ６～９cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A・皿・甕A、石鉢片？、青磁片。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第188号住居址　（第46・197図、図版29・106）

（位置）A13・14B23・24グリッド。**（重複）**178・229・256号住と重複。178号住より古く、229・256号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－70°－E。**（規模）**3.20m×2.36m。**（竈）**石組みと思われる。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方と支脚石のみ残存。規模1.02m×0.64m。深さ５cm。**（床）**6.33㎡。深さ27cm。標高386.54m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅13～24cm、深さ３～５cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が竈周辺部の床面上数cmのレベルから出土。**（遺物）**土師器坏（墨書あり）・甕A・鉢AⅠ、黒色土器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第189号住居址　（第47・198図、図版29・106）

（位置）A14B25グリッド。**（重複）**243・244号住と重複。両住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－75°－E。**（規模）**3.45m×3.30m。**（竈）**石組み。東竈。東壁のほぼ中央に位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.46m×0.83m。深さ19cm。**（床）**10.3㎡。深さ20cm。標高386.82m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**全周する。幅12～18cm、深さ３～４cm。**（遺物出土状況）**竈周辺部のほぼ床面直上から主に出土。**（遺物）**土師器坏A・皿（墨書あり）・甕A、黒色土器坏、須恵器坏・高台坏A。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第190号住居址　（第47図、図版29）

（位置）A14B24グリッド。**（重複）**198号住、19号溝と重複。両遺構より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－75°－E。**（規模）**2.69m×2.80m。**（竈）**東竈。東壁のほぼ中央に位置する。掘り方のみ残存。規模0.99m×0.83m。深さ14cm。**（床）**6.56㎡。深さ24cm。標高386.91m。堅固な箇所が散在的に残存。**（壁溝）**北壁下で一端途切れるが、あとは巡る。幅18～22cm、深さ４～６cm。**（遺物出土状況）**遺物はほとんど出土せず。**（遺物）**特になし。**（時期）**不明。

第191号住居址　（第47・198図、図版29・106・107）

（位置）A15B25グリッド。**（重複）**187・199・254号住、16号溝と重複。いずれの遺構より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－79°－E。**（規模）**3.63m×4.06m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部が残存し、右袖部には袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模1.22m×0.88m。深さ14cm。**（床）**13.2㎡。深さ46cm。標高386.63m。竈周辺部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**全周する。幅20～30cm、深さ４～６cm。**（柱穴）**不規則ではあるが西壁下を除く各壁下に柱穴状のピットあり。径20～30cm、深さ約15cmを測る。**（遺物出土状況）**量はさほど多くはないが、住居址全体にわたって床面直上および床面上約30cmのレベル内で散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿（墨書あり）・甕A、黒色土器椀、須恵器坏、砥石。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第192号住居址　（第47・198図、図版29・107）

（位置）A14・15B22・23グリッド。**（重複）**176・223・409号住と重複。176号住より古く、223・409号住より新しい。**（形状）**不明。N－72°－E。**（規模）**南北軸3.37m。**（竈）**不明。**（床）**面積不明。深さ28cm。標高386.77m。残存部の南東部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅19～32cm、深さ５～７cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A・高台坏、須恵器高坏。**（時期）**不明。

第193号住居址　（第47・199図、図版29・107）

（位置）A14・15B24グリッド。**（重複）**198号住、19号溝と重複。198号住より古く、19号溝より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－81°－E。**（規模）**3.34m×2.97m。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模1.05m×0.80m。深さ7cm。**（床）**推定8.04㎡。深さ12cm。標高386.88m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅16～27cm、深さ6～8cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A、須恵器坏A・蓋A。**（時期）**宮ノ前V期？。

第194号住居址　（第48・199図、図版29・107）

（位置）A14B22グリッド。**（重複）**239･245号住と重複。両住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－73°－E。**（規模）**3.52m×3.45m。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。掘り方のみ残存。左袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模0.82m×0.64m。深さ15cm。**（床）**10.8㎡。深さ20cm。標高386.78m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅19～24cm、深さ3～5cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺部のほぼ床面直上から散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A・皿・甕A・小型甕C、須恵器甕胴部破片利用転用硯。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第195号住居址　（第48・199図、図版30）

（位置）A14・15B26・27グリッド。**（重複）**48号土坑と重複。48号土坑より古い。**（形状）**隅丸長方形。N－81°－E。**（規模）**3.63m×3.14m。**（覆土）**竈周辺部の床面上2～12cmのレベルに礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部が残存。掘り方内に天井石状、袖石状の礫が散乱する。焼土は顕著。規模1.08m×0.72m。深さ11cm。**（床）**9.91㎡。深さ15cm。標高386.96m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**全周する。幅15～23cm、深さ5～7cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が竈内および床面上数cmのレベルから散在的に出土。**（遺物）**土師器皿・甕A、黒色土器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第196号住居址　（第48・199図、図版30・107）

（位置）A15B28グリッド。**（重複）**16号溝と重複。16号溝より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－72°－E。**（規模）**3.64m×3.20m。**（竈）**東竈。東壁ほぼ中央に位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.99m×0.71m。深さ8cm。**（床）**10.3㎡。深さ13cm。標高386.96m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**全周する。幅18～26cm、深さ6～8cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物がほぼ床面直上から散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A・皿、須恵器高台坏A。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第197号住居址　（第48・199・200図、図版30・107）

（位置）A15・16B27グリッド。**（重複）**208･217･219号住と重複。いずれの住居址より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－80°－E。**（規模）**4.06m×3.55m。**（覆土）**床面直上および床面上約20cmのレベル内で礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部が残存。焚口部で土師器甕の一括品が潰れた状態で出土。焼土は顕著。規模1.15m×0.67m。深さ6cm。**（床）**12.5㎡。深さ45cm。標高389.92m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**全周する。幅18～32cm、深さ5～9cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈前面部の床面直上から集中的に出土。**（遺物）**土師器坏A・甕A・B・小型甕C、須恵器坏・高台坏A・壷・甕、黒色土器坏。**（時期）**宮ノ前V期。

第198号住居址　（第48・200・201図、図版30・107）

（位置）A14・15B24グリッド。**（重複）**190･193号住と重複。190号住より古く、193号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－111°－E。**（規模）**3.04m×3.20m。**（覆土）**住居址中央部の床面上わずかに浮いたレベルで礫が散

乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。左袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模0.97m×0.64m。深さ13cm。**（床）**8.19㎡。深さ26cm。標高386.87m。竈周辺部および住居址中央部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅16～25cm、深さ６～８cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈前面部の床面直上から主に出土。**（遺物）**土師器坏A・甕A。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第199号住居址　（第49・201図、図版30・107・108）

（位置）A15B25グリッド。**（重複）**172・191・200・203・206・211・254号住と重複。191・211号住より古く、172・200・203・206・254号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－81°－E。**（規模）**4.14m×3.70m。**（覆土）**床面上２～12cmのレベル内に礫の集積がみられる。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.05m×0.68m。深さ11cm。**（床）**推定14.0㎡。深さ33cm。標高386.69m。竈周辺部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅19～29cm、深さ５～８cm。**（遺物出土状況）**ほぼ床面直上および床面上約20cmのレベルで比較的多量の遺物が出土。また礫の集積内に石皿・蜂ノ巣石が含まれる。**（遺物）**土師器坏A（線刻あり）・甕CⅡ、須恵器坏・高台坏A（線刻あり）・蓋A・甕。**（時期）**宮ノ前Ⅳ期。

第200号住居址　（第49・202図、図版30・108）

（位置）A15B25・26グリッド。**（重複）**172・191・199・203号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**不明。N－78°－E。**（規模）**南北軸4.66m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石と天井石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.31m×0.75m。深さ４cm。**（床）**面積不明。深さ23cm。標高386.88m。竈周辺部はやや堅固だが、他は軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅21～27cm、深さ４～６cm。**（遺物出土状況）**竈内および床面直上から散在的に出土。**（遺物）**土師器坏B（線刻あり）・甕B・小型甕C・球胴甕B・甑、須恵器坏、手捏ね土器。**（時期）**宮ノ前Ⅰ期。

第201号住居址　（第49図、図版30）

（位置）A14・15B21グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸長方形。N－12°－W。**（規模）**2.53m×2.25m。**（竈）**北竈。北壁の北西コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.82m×0.63m。深さ15cm。**（床）**4.84㎡。深さ30cm。標高386.84m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅15～28cm、深さ３～５cm。**（遺物出土状況）**覆土内から土師器、須恵器の細片が少量出土。**（遺物）**実測可能な遺物なし。**（時期）**不明。

第202号住居址　（第49・202図、図版30）

（位置）A15B26グリッド。**（重複）**179号住、17号溝と重複。両遺構より古い。**（形状）**隅丸方形。N－17°－W。**（規模）**3.02m×3.37m。**（覆土）**竈前面部から住居址中央部にかけての床面直上から床面上約20cmのレベル内に礫が集積している。**（竈）**石組み。北竈。北壁の北東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存、焼土は顕著。規模1.16m×0.63m。深さ17cm。**（床）**8.09㎡。深さ40cm。標高386.86m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅22～50cm、深さ４～７cm。**（遺物出土状況）**竈内から少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器鉢AⅠ。**（時期）**不明。

第203号住居址　（第50・202図、図版31・108）

（位置）A15・16B25・26グリッド。**（重複）**199・200・206・211・281号住と重複。199・206・211号住より古く、200・281号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－78°－E。**（規模）**7.03m×4.94m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや北寄りに位置する。両袖石の一部が残存。右袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模1.01m×0.72m。深さ23cm。**（床）**推定32.9㎡。深さ42cm。標高386.82m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅18～28cm、深さ５～８cm。**（遺物出土状況）**竈周辺部の床面直上付近から散在的に出土。**（遺物）**土師器甕CⅡ・D・小型甕C、刀子。**（時期）**不明。

第204号住居址　（第50・203図、図版31・108）

（位置）A13B23グリッド。**（重複）**170・205号住と重複。両住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－70°－E。**（規模）**3.20m×3.03m。**（竈）**石組み。東竈。東壁の南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。燃焼部に支脚石を据えたとみられるピットあり。焼土はあまり顕著ではない。規模1.14m×0.61m。深さ６cm。**（床）**8.21㎡。深さ21cm。標高386.61m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**南西コーナー付近で途切れる。幅13～24cm、深さ４～９cm。**（柱穴）**南東コーナーに柱穴状のピットあり。径38cm前後、深さ15cmを測る。**（遺物出土状況）**竈内および床面直上から散在的に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ（線刻あり）・皿（線刻あり）・甕Ａ。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第205号住居址　（第50・203図、図版31・109）

（位置）A13B23グリッド。**（重複）**170・204号住と重複。204号住より古く、170号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－78°－E。**（規模）**2.84m×3.96m。**（覆土）**礫が住居址全体にわたって床面直上から床面上約15cmのレベル内に散乱する。**（竈）**東竈。東壁中央やや北寄りに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.66m×0.68m。深さ16cm。**（床）**推定10.3㎡。深さ25cm。標高386.69m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅17～24cm、深さ４～６cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**土師器皿・甕Ａ。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第206号住居址　（第51・203図、図版31・109）

（位置）A15・16B25グリッド。**（重複）**172・199・203号住と重複。199号住より古く、172・203号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－78°－E。**（規模）**3.52m×3.33m。**（竈）**東竈。東壁の南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。左袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土はあまり顕著ではない。規模0.92m×0.85m。深さ９cm。**（床）**推定10.4㎡。深さ24cm。標高386.78m。竈周辺部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅23～30cm、深さ５～９cm。**（遺物出土状況）**床面直上および竈内から少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器甕Ｃ、須恵器坏・蓋Ａ・短頸壷Ｃ。**（時期）**宮ノ前Ⅴ期。

第207号住居址　（第51・203図、図版31・109）

（位置）A15B27グリッド。**（重複）**217・241号住、16号溝と重複。いずれの遺構より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－12°－W。**（規模）**4.16m×3.74m。**（覆土）**住居址南東部の床面上４～18cmのレベルで礫が集積する。**（竈）**北竈。北壁中央やや西寄りに位置する。石組みは残存しないが、袖石状の礫が掘り方内にみられる。焼土は顕著。規模0.94m×0.80m。深さ15cm。**（床）**14.1㎡。深さ32cm。標高386.91m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**南壁下で一部途切れる。幅19～26cm、深さ４～８cm。**（遺物出土状況）**竈内および住居址中央付近の竈周辺部の床面直上から、量は少ないがややまとまって出土している。**（遺物）**土師器坏Ａ（線刻あり）・皿・甕ＣⅤ、黒色土器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期。

第208号住居址　（第51・204図、図版31・109）

（位置）A15B27・28グリッド。**（重複）**197・214・217号住と重複。197・217号住より古く、214号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－77°－E。**（規模）**2.74m×2.89m。**（覆土）**住居址中央部の床面直上を中心に炭化材が散在する。覆土内には多量の焼土が含まれることから、焼失住居である。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部が残存し、掘り方内の焚口部付近には天井石状の礫がみられる。焼土は非常に顕著。規模0.86m×0.72m。深さ12cm。**（床）**推定7.30㎡。深さ27cm。標高386.99m。竈周辺部は非常に堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅13～22cm、深さ４～８cm。**（遺物出土状況）**床面直上から少量の遺物が出土。**（遺物）**須恵器坏（墨書あり）、土師器甕ＣⅠ。**（時期）**宮ノ前Ⅴ期？。

第209号住居址　（第51・204図、図版31・109）

（位置）A15B26グリッド。**（重複）**179・263号住と重複。179号住より古く、263号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－79°－E。**（規模）**3.43m×3.66m。**（覆土）**住居址中央部付近の床面上約10～20cmのレベル内に礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁の南東コーナー近くに位置する。右袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模0.88m×0.92m。深さ7cm。**（床）**推定11.2㎡。深さ35cm。標高386.84m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅18～24cm、深さ4～6cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺部から少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器蓋A・甕CIV・壷。**（時期）**不明。

第210号住居址　（第52・204図、図版32・35・109）

（位置）A15B26・27グリッド。**（重複）**230・263号住と重複。両住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－73°－E。**（規模）**3.29m×3.27m。**（竈）**東竈。東壁北東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。残存する崩落土上層で焼土が顕著。規模0.85m×0.70m。深さ4cm。**（床）**9.51㎡。深さ48cm。標高386.83m。竈前面部のみ堅固。**（壁溝）**全周する。幅20～26cm、深さ4～6cm。**（遺物出土状況）**竈内および住居址南側の床面上わずかに浮いたレベルから散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A（線刻あり）・皿・甕A・CII・小型甕C、須恵器高台坏、棒状鉄製品、用途不明石製品。**（時期）**宮ノ前VII期。

第211号住居址　（第52・205図、図版32・109）

（位置）A15B25グリッド。**（重複）**199・203・218・253号住、19号溝と重複。218・253号住より古く、199・203号住、19号溝より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－81°－E。**（規模）**3.08m×3.18m。**（竈）**東竈。東壁の南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。焼土はやや顕著。規模0.89m×0.66m。深さ19cm。**（床）**推定8.75㎡。深さ30cm。標高386.76m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅18～24cm、深さ4～9cm。**（遺物出土状況）**床面直上を中心に住居址全体にわたり散在的に出土。土師器坏の墨書土器が北東コーナーの壁際から浮いた状態で出土。**（遺物）**土師器坏A・D（墨書・線刻あり、タール付着するものあり）・高台坏・甕A、須恵器坏・高台坏、用途不明石製品（線刻あり）、鉄滓。**（時期）**宮ノ前III期？。

第212号住居址　（第52・205図、図版32・109・110）

（位置）A15・16B26グリッド。**（重複）**179・221・236・252・262号住と重複。いずれの住居址より新しいが、221号住との新旧関係は不明。**（形状）**隅丸長方形。N－81°－E。**（規模）**3.92m×3.37m。**（竈）**東竈。東壁ほぼ中央に位置する。掘り方のみ残存。右袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模1.01m×0.95m。深さ14cm。**（床）**11.9㎡。深さ48cm。標高386.82m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅20～28cm、深さ5～8cm。**（遺物出土状況）**竈前面部の床面直上を中心に散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A・高台坏・蓋A、須恵器坏・蓋A、刀子・釘。**（時期）**宮ノ前V～VI期？。

第213号住居址　（第52・205図、図版32・110）

（位置）A15・16B28グリッド。**（重複）**149・153号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**不明。N－77°－E。**（規模）**東西軸4.17m。**（竈）**不明。**（床）**面積不明。深さ26cm。標高386.90m。残存する住居址中央部付近は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅15～22cm、深さ3～5cm。**（遺物出土状況）**遺物の全体量は少ないが、南壁際の床面上約10cmのレベルから転用硯出土。**（遺物）**土師器皿、須恵器甕胴部破片利用転用硯。**（時期）**不明。

第214号住居址　（第53・206図、図版32・110）

（位置）A15・16B27・28グリッド。**（重複）**208・216号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸長方形。N－81°－E。**（規模）**4.39m×5.02m。**（覆土）**竈前面部の床面直上に礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁ほぼ

中央に位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.17m×0.95m。深さ9cm。**（床）**19.6㎡。深さ44cm。標高386.72m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**全周する。幅22～34cm、深さ4～7cm。**（遺物出土状況）**竈周辺部を中心にややまとまって出土。床面上やや浮いたレベルで出土するものが多い。**（遺物）**土師器坏A・皿・甕B・CⅢ・CV・小型甕B、須恵器高台坏・蓋利用転用硯。土師器墨書土器片があるが流入品であろう。**（時期）**宮ノ前Ⅱ・Ⅸ期？。

第215号住居址　（第53・206図、図版32・110）

（位置）A15B28・29グリッド。**（重複）**237号住と重複。237号住より古い。**（形状）**隅丸方形。N－85°－E。**（規模）**3.77m×3.81m。**（竈）**不明。**（床）**推定12.1㎡。深さ31cm。標高386.65m。住居址中央部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅18～25cm、深さ4～6cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が床面から浮いた状態で散在的に出土。土師器皿の墨書土器が西壁下で出土。**（遺物）**土師器皿（墨書あり）、黒色土器高台坏、砥石。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第216号住居址　（第53・206・207図、図版32・110）

（位置）A15・16B27・28グリッド。**（重複）**153・214号住と重複。153号住より古く、214号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－78°－E。**（規模）**3.26m×3.14m。**（覆土）**竈前面部の床面直上を中心に礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部が残存。両袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土はやや顕著。規模0.81m×0.90m。深さ16cm。**（床）**9.18㎡。深さ22cm。標高387.03m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅13～27cm、深さ3～4cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺部の床面直上および床面から数cm浮いたレベルからややまとまって出土。**（遺物）**土師器坏A・高台坏・甕A・鉢D、須恵器高台坏・短頸壷。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期。

第217号住居址　（第53・207図、図版33・111）

（位置）A15B27グリッド。**（重複）**197・207・208・219号住と重複。197・207号住より古く、208・219号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－80°－E。**（規模）**4.13m×3.96m。**（覆土）**竈前面部の床面直上および床面から浮いたレベルに礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部が残存。右袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。竈前面部に掻きだした焼土の範囲がみられる。規模1.11m×0.85m。深さ15cm。**（床）**13.9㎡。深さ47cm。標高386.78m。竈前面部は非常に堅固。**（壁溝）**全周する。幅21～27cm、深さ5～9cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が床面からやや浮いた状態で出土。**（遺物）**土師器甕A・B、須恵器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅳ期？。

第218号住居址　（第54・207・208図、図版33・111）

（位置）A15・16B24・25グリッド。**（重複）**211・231・253・304号住と重複。231号住より古く、211・253・304号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－79°－E。**（規模）**3.88m×3.32m。**（覆土）**竈前面部の床面上約15cmのレベルに礫が少量集積している。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部と天井石の一部が残存。両袖石の一部に縄文時代の石皿を転用している。焼土は顕著。規模1.20m×0.72m。深さ16cm。**（床）**推定11.6㎡。深さ41cm。標高386.87m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**南・西壁下の一部には巡っていない。幅18～30cm、深さ4～6cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺部の床面からわずかに浮いたレベルからややまとまって出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿・甕A、灰釉陶器長頸壷、刀子、砥石。**（時期）**宮ノ前Ⅸ～X期。

第219号住居址　（第54・208図、図版33・111）

（位置）A15・16B26・27グリッド。**（重複）**197・220・262・263号住と重複。197号住より古く、220・262・263号住

より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－16°－Ｗ。**（規模）**3.71ｍ×3.87ｍ。**（竈）**石組み。北竈。北壁中央やや東寄りに位置する。両袖石の一部が残存。両袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模0.96ｍ×0.74ｍ。深さ９㎝。**（床）**推定12.9㎡。深さ41㎝。標高386.94ｍ。全体にやや軟弱。**（壁溝）**全周すると思われる。幅15～24㎝、深さ３～５㎝。**（遺物出土状況）**竈右袖部斜め前の床面直上から中心に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ（線刻あり、内面に布目痕をもつものあり）・皿・蓋Ａ・甕ＣＶ、須恵器坏・高台坏・蓋Ａ。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期。

第220号住居址　（第54・208図、図版33）

（位置）Ａ16Ｂ26・27グリッド。**（重複）**219・424・425号住と重複。219号住より古く、424・425号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。Ｎ－79°－Ｅ。**（規模）**3.89ｍ×3.46ｍ。**（竈）**石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。両袖石の一部と天井石の一部が残存。両袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模1.02ｍ×0.71ｍ。深さ15㎝。**（床）**推定12.2㎡。深さ35㎝。標高387.00ｍ。竈前面部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅18～26㎝、深さ３～８㎝。**（遺物出土状況）**覆土下層を中心に少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**土師器甕Ａ、須恵器坏・高台坏Ａ、砥石、鉄滓。**（時期）**不明。

第221号住居址　（第54・209図、図版33・111）

（位置）Ａ16Ｂ26グリッド。**（重複）**212・236・252・262・277号住と重複。212号住との新旧は不明で、他の住居址より新しい。**（形状）**不明。Ｎ－58°－Ｅ。**（規模）**東西軸3.02ｍ。**（竈）**石組み。東竈。東壁北東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模0.79ｍ×0.69ｍ。深さ23㎝。**（床）**面積不明。深さ32㎝。標高386.93ｍ。全体にわたって堅固。やや凹凸が激しい。**（壁溝）**床面残存部には巡っている。幅16～21㎝、深さ４～６㎝。**（遺物出土状況）**竈内から土師器甕の一括資料出土。**（遺物）**土師器坏Ａ（墨書・線刻あり）・甕Ａ、須恵器坏、灰釉陶器壷。但し、墨書土器片および須恵器坏は流入品の可能性あり。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期？。

第222号住居址　（第55・209図、図版33・111）

（位置）Ａ15Ｂ24グリッド。**（重複）**226・234・249号住と重複。226号住より古く、234・249号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－84°－Ｅ。**（規模）**3.18ｍ×3.18ｍ。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。焼土はあまり顕著ではない。規模0.98ｍ×0.75ｍ。深さ16㎝。**（床）**推定9.15㎡。深さ８㎝。標高386.68ｍ。竈前面部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅13～19㎝、深さ３～７㎝。**（遺物出土状況）**竈内および竈前面部から中心に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・Ｂ・高台坏（墨書あり）・皿・甕Ａ、黒色土器坏（線刻あり）。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第223号住居址　（第55・209・210図、図版33・34・112）

（位置）Ａ14・15Ｂ22・23グリッド。**（重複）**176・192・322・409号住と重複。176・192号住より古く、322・409号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。Ｎ－83°－Ｅ。**（規模）**4.66ｍ×5.33ｍ。**（覆土）**住居址全体の床面直上を中心に礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。右袖石の一部と支脚石が倒れた状態で残存。袖石には加工石材を使用。焼土は顕著。規模1.25ｍ×0.80ｍ。深さ15㎝。**（床）**推定21.9㎡。深さ48㎝。標高386.63ｍ。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**西壁下～南壁下の一部では巡らない。幅22～29㎝、深さ３～５㎝。**（遺物出土状況）**竈周辺部および北・西壁下の床面直上からややまとまって出土。**（遺物）**土師器坏Ａ（線刻あり）・皿・甕Ａ・小型甕Ａ・Ｄ、黒色土器坏、須恵器長頸壷・短頸壷。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第224号住居址　（第55・210図、図版34・112）

（位置）Ａ16・17Ｂ28グリッド。**（重複）**153・286号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－76°－Ｅ。**（規模）**4.09ｍ×3.69ｍ。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規

模0.94m×0.71m。深さ13cm。**（床）**推定14.0㎡。深さ22cm。標高387.07m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅19～26cm、深さ５～８cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈前面部の床面直上から中心的に出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿・甕A・小型甕A、黒色土器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第225号住居址　（第55・211図、図版34・112）

（位置）A14B24グリッド。**（重複）**257号住と重複。257号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－7°－W。**（規模）**2.49m×2.83m。**（覆土）**床面直上および床面上約15cmのレベル内で少量の礫が散乱する。**（竈）**石組み。北竈。北壁ほぼ中央に位置する。右袖石の一部が残存。左袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。規模1.56m×0.82m。深さ７cm。**（床）**5.90㎡。深さ47cm。標高386.61m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**北壁西半分から西壁下の一部には巡っていない。幅17～28cm、深さ５～７cm。**（遺物出土状況）**覆土下層から少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器坏B、棒状鉄製品（紡錘車の紡軸か）。**（時期）**宮ノ前Ⅱ期。

第226号住居址　（第56・211図、図版34・112）

（位置）A15B24グリッド。**（重複）**222・234・249号住と重複。いずれの住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－83°－E。**（規模）**3.95m×4.08m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。右袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模0.95m×0.73m。深さ17cm。**（床）**14.1㎡。深さ47cm。標高386.72m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅17～37cm、深さ５～10cm。**（遺物出土状況）**住居址全体にわたって散在的に出土。床面直上出土のものが多い。**（遺物）**土師器坏A（墨書・線刻あり）・皿・甕A、黒色土器坏、須恵器甕、刀子。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第227号住居址　（第56・211～213図、図版34・35・112・113）

（位置）A16B27グリッド。**（重複）**160・423・424・425号住と重複。160号住より古く、423・424・425号住より新しい。**（形状）**N－76°－E。**（規模）**4.50m×5.22m。**（覆土）**住居址全体にわたって炭化材および炭化物が床面直上から出土し、焼土も顕著にみられる。焼失住居であろう。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石および天井石の一部、支脚石が残存し、右袖部は袖石の側面に灰褐色粘土が貼られた状態で遺存し、原型の一部を留める。また左袖部脇の床面にも同粘土が貼られている。焼土も顕著。規模1.19m×0.92m。深さ11cm。**（床）**推定21.9㎡。深さ35cm。標高386.98m。竈周辺部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**北壁下の一部には巡っていない。幅20～23cm、深さ３～４cm。**（遺物出土状況）**遺物量は豊富。竈前面部および北壁下・南壁下の床面直上、焼土混じりの炭化層中からまとまって出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり、タール付着するものあり）・皿・鉢AⅡ・甕A・C・小型甕A・B・C、羽釜A、黒色土器坏、紡錘車・刀子・苧引金具・鉄滓、お握り状炭化物、獣骨片。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第228号住居址　（第56・213図、図版35・113）

（位置）A14B24・25グリッド。**（重複）**177・183・244・246号住と重複。177・183号住より古く、244・246号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－14°－W。**（規模）**3.88m×3.43m。**（竈）**石組み。北竈。北壁北西コーナー近くに位置する。左袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模0.79m×0.64m。深さ８cm。**（床）**推定13.1㎡。深さ20cm。標高386.89m。全体にやや軟弱。竈前面部に灰、焼土の範囲あり。**（壁溝）**西壁下および北壁下の一部に巡る。幅16～22cm、深さ４～７cm。**（遺物出土状況）**床面直上から散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A・皿。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第229号住居址　（第56・213図、図版35・113）

（位置）A13・14B23・24グリッド。**（重複）**145・188・256号住、19号溝と重複。145・188号住より古く、256号住、19号溝より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－67°－E。**（規模）**3.46m×3.20m。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄り

に位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.97m×0.78m。深さ7cm。**(床)** 推定9.81㎡。深さ20cm。標高386.66m。竈前面部は堅固。**(壁溝)** 床面残存部には巡る。幅18～25cm、深さ4～8cm。**(遺物出土状況)** 竈内から少量の遺物が出土。**(遺物)** 土師器甕A。**(時期)** 不明。

第230号住居址　(第57・213図、図版35・113)

(位置) A15B26・27グリッド。**(重複)** 210・263号住と重複。前者より古く、後者より新しい。**(形状)** 隅丸長方形。N－80°－E。**(規模)** 4.37m×3.77m。**(竈)** 東竈。東壁中央やや北寄りに位置する。掘り方のみ残存。右袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模1.03m×0.83m。深さ11cm。**(床)** 推定15.3㎡。深さ30cm。標高386.95m。壁際を除いて他は堅固。**(壁溝)** 床面残存部には巡る。幅20～29cm、深さ4～10cm。**(遺物出土状況)** 少量の遺物が竈内および床面から浮いた状態で出土。**(遺物)** 土師器坏A（タール付着）・小型甕C、須恵器高台坏A、紡錘車。**(時期)** 宮ノ前Ⅳ期？。

第231号住居址　(第57・213図、図版35)

(位置) A15・16B24グリッド。**(重複)** 218・304号住と重複。両住居址より新しい。**(形状)** 隅丸長方形。N－82°－E。**(規模)** 2.55m×2.95m。**(竈)** 石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。左袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模0.93m×0.68m。深さ20cm。**(床)** 6.68㎡。深さ20cm。標高386.90m。壁際を除いて他は堅固。**(壁溝)** ほぼ全周する。幅13～16cm、深さ3～4cm。**(遺物出土状況)** 土師器坏等の小片が竈内からわずかに出土しているのみ。**(遺物)** 土師器坏A、須恵器坏。**(時期)** 宮ノ前Ⅶ期？。

第232号住居址　(第57・213図、図版36)

(位置) A15・16B26グリッド。**(重複)** 212・221・236・262号住と重複。212・221・236号住より古く、262号住より新しい。**(形状)** 隅丸長方形。N－73°－E。**(規模)** 3.46m×3.09m。**(竈)** 石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。右袖石の一部が残存し、袖石を据えたとみられるピットもあり。焼土は顕著。規模0.94m×0.87m。深さ16cm。**(床)** 推定9.35㎡。深さ38cm。標高386.85m。全体にわたって堅固。**(壁溝)** 床面残存部には巡る。幅17～26cm、深さ5～8cm。**(遺物出土状況)** 竈内等から少量の遺物が出土。**(遺物)** 土師器甕C、須恵器坏。**(時期)** 不明。

第233号住居址　(第57・213・214図、図版36・113・114)

(位置) A16B26グリッド。**(重複)** 175・306号住と重複。両住居址より新しい。**(形状)** 隅丸長方形。N－78°－E。**(規模)** 4.38m×5.07m。**(竈)** 石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。支脚石が残存し、両袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模1.19m×0.98m。深さ13cm。**(床)** 18.9㎡。深さ32cm。標高387.05m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**(壁溝)** 全周する。幅19～30cm、深さ3～9cm。**(遺物出土状況)** 比較的まとまった量の遺物が、住居址全体にわたって出土。特に竈内および竈周辺部の床面直上出土のものが目立つ。**(遺物)** 土師器坏A（墨書あり、タール付着するものあり）・皿・甕A・鉢AⅠ、緑釉陶器皿、須恵器坏・鉢B・甕（須恵器は流入品の可能性あり）。**(時期)** 宮ノ前Ⅸ期。

第234号住居址　(第58・214図、図版36)

(位置) A15B24グリッド。**(重複)** 222・242・249号住と重複。222号住より古く、242・249号住より新しい。**(形状)** 隅丸長方形。N－75°－E。**(規模)** 3.41m×3.05m。**(竈)** 石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は非常に顕著。規模1.05m×0.73m。深さ21cm。**(床)** 推定8.53㎡。深さ37cm。標高386.83m。全体にやや軟弱。**(壁溝)** 断続的に巡る。幅25～33cm、深さ3～7cm。**(遺物出土状況)** 少量の遺物が散在的に出土。**(遺物)** 土師器坏A。**(時期)** 宮ノ前Ⅸ期。

第235号住居址　（第58・214・215図、図版36・114）

（位置）A15B23グリッド。**（重複）**182号住、18号溝と重複。両遺構より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－7°－W。**（規模）**3.56m×4.18m。**（覆土）**住居址中央部の床面直上を中心に礫が散乱する。**（竈）**石組み。北竈。北壁ほぼ中央に位置する。右袖石の一部が残存する。焼土はやや顕著。規模1.28m×1.16m。深さ12cm。**（床）**12.2㎡。深さ65cm。標高386.49m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅16～30cm、深さ４～９cm。**（遺物出土状況）**竈内および住居址中央部から南壁下付近にかけてのほぼ床面直上から散在的に出土。**（遺物）**土師器坏Ｂ・高台坏(線刻あり)・甕Ｂ・CⅢ・Ｄ・小型壷Ａ、須恵器高台坏Ａ・鉢、手捏ね土器、板状鉄製品。**（時期）**宮ノ前Ⅱ期。

第236号住居址　（第58・215図、図版36・114）

（位置）A15・16B26グリッド。**（重複）**212･221･232･262号住と重複。前二者より古く、後二者より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－73°－E。**（規模）**3.04m×3.03m。**（竈）**東竈。東壁北東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.80m×0.67m。深さ11cm。**（床）**推定8.19㎡。深さ38cm。標高386.99m。残存部は全体に堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅16～22cm、深さ３～５cm。**（遺物出土状況）**竈内を中心に少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器坏Ａ（線刻あり）、須恵器蓋Ａ。**（時期）**宮ノ前Ⅴ期。

第237号住居址　（第59・215図、図版36・114）

（位置）A15B29グリッド。**（重複）**215･240号住、15号溝と重複。いずれの遺構より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－10°－W。**（規模）**3.49m×3.94m。**（竈）**石組み。北竈。北壁北西コーナー近くに位置する。両袖石の一部と天井石の一部が残存。両袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模1.24m×0.88m。深さ６cm。**（床）**11.9㎡。深さ55cm。標高386.47m。竈前面部から住居址中央部付近にかけて堅固。**（壁溝）**北東・北西コーナー壁下で一部途切れる。幅15～20cm、深さ３～５cm。**（遺物出土状況）**竈周辺部および壁際の床面直上から出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・皿・甕Ａ、黒色土器坏、灰釉陶器椀、須恵器壷。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第238号住居址　（第59・216図、図版36・114・115）

（位置）A14・15B27グリッド。**（重複）**252号住と重複。252号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－81°－E。**（規模）**3.94m×4.59m。**（覆土）**住居址中央部の床面直上から床面上約30cmのレベル内に礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。両袖石の一部が残存。崩落土内に天井石状の平石がみられる。焼土は顕著。規模0.94m×0.69m。深さ10cm。**（床）**推定16.1㎡。深さ39cm。標高386.78m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**南壁下～北壁下の一部は不明瞭。幅26～36cm、深さ５～７cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺部の床面直上または床面上わずかに浮いたレベルからややまとまって出土。**（遺物）**土師器坏Ａ（墨書あり）・皿（墨書・線刻あり）・鉢ＡⅠ・小型甕Ｃ、黒色土器坏・高台皿・椀、半月形穂摘具・鉄滓。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第239号住居址　（第59・216図、図版36・115）

（位置）A14・15B22グリッド。**（重複）**194号住と重複。194号住より古い。**（形状）**隅丸方形。N－61°－E。**（規模）**3.43m×3.29m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。左袖石の一部と支脚石が残存。焼土はやや顕著。規模0.83m×0.70m。深さ15cm。**（床）**推定10.1㎡。深さ12cm。標高386.85m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**南壁下は巡らない。幅16～19cm、深さ６～７cm。**（遺物出土状況）**南東コーナー壁下周辺の床面直上からややまとまって出土。**（遺物）**土師器坏Ａ（線刻あり）・甕Ａ、黒色土器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第240号住居址　（第59・217図、図版37・115）

（位置）A14・15B28・29グリッド。**（重複）**237号住、15号溝と重複。前者より古く、後者より新しい。**（形状）**不明。N－12°－W。**（規模）**東西軸5.37m。**（竈）**石組み。北竈。北壁北西コーナー近くに位置する。両袖石の一

部が残存。燃焼部内に天井石状の平石が落ち込んでいる。焼土は顕著。規模1.23m×0.68m。深さ10cm。**（床）**面積不明。深さ43cm。標高386.52m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅19～23cm、深さ３～４cm。**（遺物出土状況）**竈内および北西コーナー付近、北東コーナー付近の床面直上からややまとまって出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿・甕A・小型甕C、黒色土器坏・鉢、灰釉陶器段皿。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第241号住居址　（第60・217図、図版37・115）

（位置）A15B27グリッド。**（重複）**207号住、16号溝と重複。両者より古い。**（形状）**隅丸長方形。N－75°－E。**（規模）**2.79m×2.42m。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。左袖石の一部が残存。焼土はやや顕著。規模1.04m×0.69m。深さ13cm。**（床）**5.86㎡。深さ15cm。標高386.86m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅13～20cm、深さ４～７cm。**（遺物出土状況）**竈内および住居址覆土下層から少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器坏A・甕B、須恵器甕。**（時期）**不明。

第242号住居址　（第60・218図、図版37・115）

（位置）A15B24・25グリッド。**（重複）**234･249号住、32号土坑と重複。いずれの遺構より古い。**（形状）**隅丸長方形。N－8°－W。**（規模）**3.53m×3.09m。**（竈）**石組み。北竈。北壁北西コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.06m×0.90m。深さ４cm。**（床）**9.40㎡。深さ59cm。標高386.51m。全体にわたってやや軟弱。**（壁溝）**全周する。幅16～26cm、深さ３～10cm。**（遺物出土状況）**竈内からややまとまって出土し、床面直上からも散在的に出土。**（遺物）**土師器坏B・C・甕A・CV・小型甕B。**（時期）**宮ノ前Ⅱ期？。

第243号住居址　（第60・218・219図、図版37・116）

（位置）A13・14B24・25グリッド。**（重複）**189･244･北後田遺跡B32号住と重複。189号住より古く、244･北後田遺跡B32号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－77°－E。**（規模）**3.93m×3.33m。**（覆土）**住居址全体の床面直上および床面上わずかに浮いたレベルで礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.14m×0.86m。深さ10cm。**（床）**11.7㎡。深さ25cm。標高386.59m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅14～21cm、深さ３～６cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺部の床面直上から主に出土。量的にも多い。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・甕A、黒色土器坏・鉢、灰釉陶器皿、須恵器甕・甕胴部破片利用転用硯、刀子。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第244号住居址　（第60・219・220図、図版37・116）

（位置）A14B24・25グリッド。**（重複）**177･183･186･189･228･243･246･257･269号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。N－76°－E。**（規模）**6.90m×6.50m。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部と支脚石が残存。焼土は顕著。規模1.37m×0.70m。深さ６cm。**（床）**推定30㎡。深さ30cm。標高386.62m。竈周辺部および住居址中央部周辺は堅固。**（壁溝）**床面残存部にはほぼ巡る。幅16～20cm、深さ４～６cm。**（遺物出土状況）**竈内および住居址全体にわたって散在的に出土。床面直上のものが多い。**（遺物）**土師器坏A（墨書・線刻あり）・甕CⅡ、須恵器坏・高台坏・鉢・蓋A・甕・壷、手捏ね土器、石錘、刀子、釘。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期。

第245号住居址　（第61・220図、図版37・116）

（位置）A14B22グリッド。**（重複）**194号住と重複。194号住より古い。**（形状）**隅丸長方形。N－60°－E。**（規模）**3.08m×3.55m。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。左袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土はやや顕著。規模0.69m×0.71m。深さ10cm。**（床）**9.18㎡。深さ32cm。標高386.66m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**西壁下～南壁下にかけて巡る。幅18～28cm、深さ３～４cm。**（遺物出土状況）**床面直上

から少量の遺物が出土。**（遺物）**黒色土器坏、土師器高坏。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第246号住居址　（第61・220図、図版38・116）

（位置）A14B24・25グリッド。**（重複）**177・183・228号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。N－78°－E。**（規模）**3.03m×3.26m。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。規模0.85m×0.72m。深さ23cm。**（床）**8.64㎡。深さ８cm。標高386.65m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅15～18cm、深さ３～６cm。**（遺物出土状況）**床面直上から少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・甕A。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第247号住居址　（第61・220図、図版38・116）

（位置）A21B29グリッド。**（重複）**343号住と重複。343号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－82°－E。**（規模）**3.56m×3.47m。**（竈）**東竈。東壁ほぼ中央に位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.85m×0.74m。深さ13cm。**（床）**11.1㎡。深さ８cm。標高387.92m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**全周する。幅16～23cm、深さ５～６cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が床面直上および床面上数cmのレベルから出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿・甕A、羽釜A、灰釉陶器椀・長頸壷、釘。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第248号住居址　（第61・221図、図版38・117）

（位置）A24B28・29グリッド。**（重複）**115・164号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。N－85°－E。**（規模）**4.59m×4.41m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや北寄りに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.16m×0.73m。深さ13cm。**（床）**推定18.5㎡。深さ13cm。標高388.28m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**断続的に巡る。幅15～23cm、深さ３～７cm。**（遺物出土状況）**竈内および竈北側、住居址中央から北寄りの床面直上または床面に極近いレベルから出土。**（遺物）**須恵器坏・高台坏A・甕、土師器坏A・高台坏・甕CⅠ・CⅡ・小型甕C。**（時期）**宮ノ前Ⅴ期。

第249号住居址　（第62・221図、図版38）

（位置）A15B24グリッド。**（重複）**222・226・234・242号住と重複。222・226・234号住より古く、242号住より新しい。**（形状）**不明。N－79°－E。**（規模）**不明。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部と天井石の一部が残存。焼土は顕著。規模南北軸0.79m。深さ16cm。**（床）**面積不明。深さ41cm。標高386.74m。残存部はやや堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅18～27cm、深さ３～７cm。**（遺物出土状況）**床面直上から少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器甕A・小型甕A、手捏ね土器。**（時期）**不明。

第250号住居址　（第62・222図、図版38・117）

（位置）A21B29・30グリッド。**（重複）**386号住と重複。386号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－89°－E。**（規模）**4.58m×4.29m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや北寄りに位置する。両袖石の一部が残存。焼土はあまり顕著でない。規模1.11m×0.74m。深さ12cm。**（床）**17.1㎡。深さ22cm。標高387.62m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**全周する。幅24～32cm、深さ３～５cm。**（遺物出土状況）**床面上数cm浮いたレベルから散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A・皿・甕B、黒色土器坏、砥石、刀子。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第251号住居址　（第62・222図、図版38）

（位置）A15・16B23・24グリッド。**（重複）**278・301・330号住と重複。301号住より古く、278・330号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－80°－E。**（規模）**3.93m×3.61m。**（覆土）**住居址中央部の床面上５～40cmのレベル内に少量の礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石が残存。焼土は顕著。規

模1.12m×0.92m。深さ11cm。**（床）**11.7㎡。深さ51cm。標高386.77m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅20～35cm、深さ４～７cm。**（遺物出土状況）**比較的多量の遺物が竈周辺部の床面直上から散在的に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・鉢・甕Ａ、黒色土器坏・高台坏・鉢、灰釉陶器長頸壷、釘。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第252号住居址　（第62・222図、図版38）

（位置）Ａ14Ｂ27グリッド。**（重複）**238号住と重複。238号住より古い。**（形状）**隅丸長方形。Ｎ－77°－Ｅ。**（規模）**3.60m×3.02m。**（覆土）**北東コーナー周辺部の床面直上または床面上約10cm内のレベルに礫が集積する。**（竈）**東竈。東壁ほぼ中央に位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.96m×0.95m。深さ10cm。**（床）**9.44㎡。深さ46cm。標高386.68m。ほぼ全体にわたって堅固。**（壁溝）**全周する。幅21～33cm、深さ３～８cm。**（遺物出土状況）**床面上数cm浮いたレベルから少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器坏Ｂ、須恵器甕。**（時期）**宮ノ前Ⅱ期。

第253号住居址　（第63・223図、図版39・117）

（位置）Ａ15・16Ｂ24・25グリッド。**（重複）**211・218号住と重複・218号住より古く、211号住より新しい。**（形状）**不明。Ｎ－75°－Ｅ。**（規模）**南北軸3.09m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。右袖石の一部が残存。左袖部には袖石を据えたとみられるピットあり。崩落土内に天井石状の平石がみられる。焼土は顕著。規模1.19m×0.68m。深さ12cm。**（床）**面積不明。深さ38cm。標高386.89m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅15～29cm、深さ４～９cm。**（遺物出土状況）**南東コーナー壁下の床面直上からややまとまって出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・皿、黒色土器坏（墨書あり）。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第254号住居址　（第63・223図、図版39・117）

（位置）Ａ15Ｂ25グリッド。**（重複）**191・199号住、19号溝と重複。両住居址より古く、19号溝より新しい。**（形状）**不明。主軸方向も不明。**（規模）**南北軸3.46m。**（竈）**不明。**（床）**面積不明。深さ27cm。標高386.79m。残存部はやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅16～26cm、深さ４～８cm。**（遺物出土状況）**床面上数cm浮いたレベルから少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器皿（流入品の可能性あり）。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期？。

第255号住居址　（第63・223図、図版39・117）

（位置）Ａ15Ｂ21・22グリッド。**（重複）**265・266号住と重複。両住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－80°－Ｅ。**（規模）**3.21m×3.08m。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模0.86m×0.81m。深さ20cm。**（床）**8.61㎡。深さ14cm。標高386.91m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**北壁下を除き他は巡る。幅15～21cm、深さ３～６cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が竈内および竈周辺部の床面直上から出土。**（遺物）**土師器皿・甕Ａ・小型甕Ａ、竈形土器、土錘。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第256号住居址　（第63・223図、図版39）

（位置）Ａ13・14Ｂ24グリッド。**（重複）**178・188・229・北後田遺跡Ｂ21・33号住と重複。178・188・229号住より古く、北後田遺跡Ｂ21・33号住より新しい。**（形状）**不明。Ｎ－73°－Ｅ。**（規模）**南北軸2.93m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。右袖石の一部と支脚石が残存。焼土は顕著。規模0.73m×0.75m。深さ12cm。**（床）**面積不明。深さ８cm。標高386.56m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅13～16cm、深さ３～５cm。**（遺物出土状況）**竈内および南東コーナー壁下の床面直上から出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・甕Ａ、黒色土器坏（線刻あり）。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第257号住居址　（第63・223図、図版39・117）

（位置）Ａ14Ｂ24グリッド。**（重複）**183・186・225・244・269号住と重複。183・186・225号住より古く、244・269号住

より新しい。**（形状）**隅丸方形か。Ｎ－83°－Ｅ。**（規模）**2.98ｍ×3.25ｍ。**（竈）**東竈。東壁中央やや北寄りに位置する。掘り方のみ残存。焼土はあまり顕著でない。規模0.58ｍ×0.62ｍ。深さ８㎝。**（床）**推定8.95㎡。深さ35㎝。標高386.62ｍ。竈前面部はやや堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅16～23㎝、深さ４～５㎝。**（遺物出土状況）**須恵器蓋１点が南東コーナー付近の床面上約20㎝のレベルから出土。**（遺物）**須恵器蓋Ａ（流入品の可能性大）。**（時期）**不明。

第258号住居址　（第63・224図、図版39）

（位置）Ａ17・18Ｂ22グリッド。**（重複）**264･361号住と重複。前者より古く、後者より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－78°－Ｅ。**（規模）**3.72ｍ×3.66ｍ。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。右袖石の一部が残存。両袖部に袖石を据えたとみられるピットがあり、燃焼部内にも支脚石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模0.98ｍ×0.84ｍ。深さ７㎝。**（床）**11.3㎡。深さ35㎝。標高387.06ｍ。竈前面部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅22～28㎝、深さ４～６㎝。**（遺物出土状況）**竈前面部の床面直上から少量の遺物が出土。**（遺物）**須恵器高台坏Ａ、円筒土器。**（時期）**不明。

第259号住居址　（第64・224図、図版39・117）

（位置）Ａ16・17Ｂ21・22グリッド。**（重複）**329号住と重複。329号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－79°－Ｅ。**（規模）**2.71ｍ×2.58ｍ。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。両袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模0.83ｍ×0.71ｍ。深さ６㎝。**（床）**6.15㎡。深さ15㎝。標高387.07ｍ。全体にやや軟弱。**（壁溝）**不明。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺部の床面直上からややまとまって出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・甕Ａ、竈形土器。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第260号住居址　（第64・224・225図、図版39・40・118）

（位置）Ａ17Ｂ20・21グリッド。**（重複）**45･46号掘立と重複。両掘立より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－79°－Ｅ。**（規模）**3.21ｍ×3.24ｍ。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.10ｍ×0.74ｍ。深さ11㎝。**（床）**8.81㎡。深さ33㎝。標高386.98ｍ。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅16～30㎝、深さ３～６㎝。**（遺物出土状況）**竈内および竈前面部の南壁際の床面直上または床面上数㎝浮いたレベルから出土。**（遺物）**土師器坏Ａ（線刻あり）・甕Ａ・ＣＩ・小型甕Ｃ、須恵器坏・高坏、黒色土器高台坏（線刻あり）。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期。

第261号住居址　（第64・225図、図版40・118）

（位置）Ａ16Ｂ20・21グリッド。**（重複）**272･280･311号住、11号溝と重複。11号溝より古く、いずれの住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－87°－Ｅ。**（規模）**4.84ｍ×4.56ｍ。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模1.26ｍ×0.98ｍ。深さ17㎝。**（床）**20.0㎡。深さ42㎝。標高386.85ｍ。竈前面部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅17～27㎝、深さ４～５㎝。**（遺物出土状況）**竈内を含む住居址全体にわたって床面直上および床面上約20㎝のレベル内から散在的に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・高台坏・皿・甕Ａ・Ｃ、須恵器坏、灰釉陶器長頸壷、円筒土器、砥石、獣骨片。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期。

第262号住居址　（第64図、図版40）

（位置）Ａ15・16Ｂ26・27グリッド。**（重複）**212･219･221･232･236号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**不明。Ｎ－76°－Ｅ。**（規模）**東西軸3.90ｍ。**（竈）**石組み。東竈。東壁の中央付近に位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模0.74ｍ×0.68ｍ。深さ11㎝。**（床）**面積不明。深さ29㎝。標高386.95ｍ。残存部はやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅19～27㎝、深さ４～６㎝。**（遺物出土状況）**特になし。**（遺物）**復元可能な遺物

なし。**（時期）**不明。

第263号住居址　（第65・226図、図版40）

（位置）A15B26・27グリッド。**（重複）**209・210・212・219・230・262号住と重複。262号住より新しく、他の住居址より古い。**（形状）**隅丸長方形。主軸方向不明。**（規模）**4.54m×3.95m。**（竈）**不明。**（床）**推定16.5㎡。深さ20cm。標高386.92m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅15～23cm、深さ５～６cm。**（遺物出土状況）**住居址覆土内から少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器坏A・甕CIV、羽釜A。遺物の大半は流入の可能性大。**（時期）**不明。

第264号住居址　（第65・226図、図版40・118）

（位置）A17・18B22グリッド。**（重複）**258号住、７号溝と重複。７号溝より古く、258号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－75°－E。**（規模）**3.77m×3.79m。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.66m×0.62m。深さ12cm。**（床）**12.5㎡。深さ27cm。標高387.17m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**不明。**（遺物出土状況）**竈前面部の床面直上からまとまって出土。**（遺物）**土師器坏A（線刻あり、タール付着するものあり）・皿・甕A・C、須恵器甕。**（時期）**宮ノ前IX期。

第265号住居址　（第65・226図、図版40・118）

（位置）A15・16B21・22グリッド。**（重複）**255・341号住と重複。前者より古く、後者より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－82°－E。**（規模）**4.07m×3.33m。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。掘り方のみ残存。掘り方内に性格不明ピットあり。焼土は顕著。規模1.28m×0.93m。深さ14cm。**（床）**12.1㎡。深さ29cm。標高386.79m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**南壁下・北壁下の一部を除き他は巡る。幅15～22cm、深さ３～５cm。**（遺物出土状況）**竈周辺部の床面直上から少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器坏A、須恵器坏・高坏、円筒土器。**（時期）**宮ノ前IV？。

第266号住居址　（第65・226・227図、図版40・118）

（位置）A15B22グリッド。**（重複）**312・317号住と重複。両住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－78°－E。**（規模）**4.99m×4.77m。**（覆土）**住居址北東部の床面直上を中心に礫が散乱する。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.87m×0.68m。深さ13cm。**（床）**20.9㎡。深さ27cm。標高386.77m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅22～28cm、深さ３～４cm。**（遺物出土状況）**住居址全域にわたって散在的に床面直上もしくは床面上数cmのレベルから出土。**（遺物）**土師器坏A（線刻あり）・皿・小型甕A・D、黒色土器坏、灰釉陶器皿、須恵器甕胴部破片利用転用硯。**（時期）**宮ノ前VIII期。

第267号住居址　（第65・227図、図版40）

（位置）A17・18B21・22グリッド。**（重複）**268・279・362号住と重複。279号住より古く、268・362号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－83°－E。調査順序を誤り南壁を欠失。**（規模）**4.44m×4.12m。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模0.85m×0.75m。深さ９cm。**（床）**推定17.1㎡。深さ34cm。標高387.06m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅18～28cm、深さ４～９cm。**（遺物出土状況）**住居址全域にわたって散在的に床面直上もしくは床面上数cmのレベルから出土。**（遺物）**土師器坏A・鉢・甕B・C、須恵器坏・高台坏A・長頸壷・甕。**（時期）**宮ノ前V期？。

第268号住居址　（第66・227図、図版41・118）

（位置）A17・18B21・22グリッド。**（重複）**267・313・361号住と重複。267号住より古く、313・361号住より新し

い。**（形状）**隅丸長方形。Ｎ－77°－Ｅ。**（規模）**4.08ｍ×3.67ｍ。**（覆土）**住居址中央部の床面直上および床面上約30㎝のレベル内に礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。両袖石の一部および支脚石が残存。焼土は顕著。規模1.07ｍ×0.78ｍ。深さ11㎝。**（床）**13.0㎡。深さ42㎝。標高386.99ｍ。竈前面部は非常に堅固。**（壁溝）**全周する。幅17～30㎝、深さ４～８㎝。**（遺物出土状況）**竈前面部の床面直上からまとまって出土。**（遺物）**須恵器坏・蓋Ａ・鉢Ｂ、土師器甕ＣⅠ・小型甕Ｃ。**（時期）**宮ノ前Ⅳ期？。

第269号住居址　（第66・228図、図版41・119）

（位置）Ａ13・14Ｂ24・25グリッド。**（重複）**186・244・257号住と重複。186・257号住より古く、244号住より新しい。**（形状）**不明。Ｎ－84°－Ｅ。**（規模）**南北軸3.76ｍ。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。左袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.03ｍ×0.88ｍ。深さ14㎝。**（床）**面積不明。深さ５㎝。標高386.61ｍ。残存部はやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部の北壁下から東壁下の一部には巡る。幅15～19㎝、深さ３～５㎝。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**須恵器蓋Ａ、土師器甕ＣⅠ。**（時期）**不明。

第270号住居址　（第66・228図、図版41・119）

（位置）Ａ22Ｂ30グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸長方形。Ｎ－96°－Ｅ。**（規模）**2.81ｍ×2.25ｍ。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は非常に顕著。規模0.75ｍ×0.73ｍ。深さ11㎝。**（床）**5.51㎡。深さ47㎝。標高387.62ｍ。全体に堅固。**（壁溝）**不明。**（遺物出土状況）**竈内および竈周辺部の床面直上から主に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・皿・甕Ａ、竈形土器。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第271号住居址　（第67・228図、図版41・119）

（位置）Ａ15・16Ｂ26グリッド。**（重複）**212号住と重複。212号住より古い。**（形状）**不明。主軸方向不明。**（規模）**南北軸2.76ｍ。**（覆土）**北壁近くの床面上約30㎝のレベルに少量の礫が散乱する。**（竈）**不明。**（床）**面積不明。深さ21㎝。標高386.92ｍ。全体に堅くしまる。**（壁溝）**巡らない。**（遺物出土状況）**少量の遺物が床面直上または床面上約10㎝のレベルから出土。**（遺物）**須恵器高台皿・蓋Ａ、刀子。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期？。

第272号住居址　（第67・228図、図版41・119）

（位置）Ａ16Ｂ21グリッド。**（重複）**261号住と重複。261号住より古い。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－84°－Ｅ。**（規模）**3.54ｍ×3.35ｍ。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.82ｍ×0.56ｍ。深さ16㎝。**（床）**推定10.0㎡。深さ28㎝。標高386.95ｍ。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅20～28㎝、深さ４～５㎝。**（遺物出土状況）**少量の遺物がほぼ床面直上から散在的に出土。**（遺物）**須恵器坏・甕。**（時期）**宮ノ前Ⅳ期。

第273号住居址　（第67・228図、図版41）

（位置）Ａ16・17Ｂ21グリッド。**（重複）**46号掘立と重複。46号掘立より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－83°－Ｅ。**（規模）**2.43ｍ×2.40ｍ。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。掘り方のみ残存。焼土は非常に顕著。規模0.93ｍ×0.86ｍ。深さ７㎝。**（床）**4.78㎡。深さ28㎝。標高386.98ｍ。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅18～25㎝、深さ３～５㎝。**（遺物出土状況）**竈内および住居址覆土下層から少量出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・甕Ｃ、須恵器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅴ期。

第274号住居址　（第67・229図、図版41・119）

（位置）Ａ16Ｂ22・23グリッド。**（重複）**319・320・358・387・411号住と重複。いずれの住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－81°－Ｅ。**（規模）**4.33ｍ×4.29ｍ。**（竈）**石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。右袖石の一部

が残存。焼土は顕著。規模1.18m×0.91m。深さ5cm。**(床)** 16.3㎡。深さ39cm。標高386.81m。竈周辺部は堅固。**(壁溝)** 全周する。幅20～27cm、深さ3～5cm。**(遺物出土状況)** 竈周辺部および北西コーナー付近の床面直上から出土。**(遺物)** 土師器坏A・皿・甕A・CIV・小型甕A、黒色土器坏、灰釉陶器皿、釘。**(時期)** 宮ノ前IX期。

第275号住居址　(第67・229図、図版42・119)

(位置) A15・16B22グリッド。**(重複)** 266・282・319・341号住と重複。266号住より古く、他の住居址より新しい。**(形状)** 隅丸方形。N－73°－E。**(規模)** 3.64m×3.56m。**(覆土)** 住居址中央部の床面直上および床面上約15cmのレベル内に少量の礫が散乱する。**(竈)** 石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.17m×0.87m。深さ18cm。**(床)** 推定11.2㎡。深さ30cm。標高386.78m。竈周辺部は堅固。**(壁溝)** 床面残存部の南壁下は巡っていない。幅20～28cm、深さ4～5cm。**(遺物出土状況)** 竈右袖脇の住居址南東コーナー付近の床面直上からまとまって出土。**(遺物)** 土師器坏A(スス付着するものあり)・皿・甕A、黒色土器坏、灰釉陶器皿、須恵器坏(線刻あり、流入の可能性大)・鉢B。**(時期)** 宮ノ前IX期。

第276号住居址　(第68・229・230図、図版42・119)

(位置) A16B21・22グリッド。**(重複)** 311・319・341号住と重複。311・341号住より古く、319号住より新しい。**(形状)** 隅丸方形。N－88°－E。**(規模)** 3.93m×3.85m。**(覆土)** 住居址中央部の床面上2～25cmのレベル内に礫が狭い範囲で散乱する。**(竈)** 東竈。東壁ほぼ中央に位置する。掘り方のみ残存。焼土はあまり顕著でない。規模0.88m×0.79m。深さ9cm。**(床)** 12.8㎡。深さ43cm。標高386.77m。竈前面部は堅固。**(壁溝)** ほぼ全周する。幅15～25cm、深さ3～5cm。**(遺物出土状況)** 住居址全体にわたって散在的に出土。床面上わずかに浮いた状態で出土するものが多い。**(遺物)** 土師器坏B・高台坏・甕CI・CIII・小型甕C、須恵器坏・高台坏A・B・高坏・蓋A。**(時期)** 宮ノ前II期。

第277号住居址　(第68図、図版42)

(位置) A15・16B25・26グリッド。**(重複)** 221号住、17号溝と重複。両者より古い。**(形状)** 隅丸長方形。N－19°－W。**(規模)** 4.64m×4.04m。**(竈)** 石組み。北竈。北壁の北東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著でない。規模0.73m×0.53m。深さ6cm。**(床)** 推定16.7㎡。深さ12cm。標高387.21m。全体にやや軟弱。**(壁溝)** 床面残存部には巡る。幅11～20cm、深さ3～6cm。**(遺物出土状況)** 住居址の覆土内からごく微量の土師器片が出土。**(遺物)** 復元できる遺物なし。**(時期)** 不明。

第278号住居址　(第68・230・231図、図版42・119)

(位置) A15・16B24グリッド。**(重複)** 251・304号住と重複。両住居址より古い。**(形状)** 隅丸方形。N－76°－E。**(規模)** 3.86m×4.07m。**(竈)** 東竈。東壁の南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.79m×0.70m。深さ12cm。**(床)** 推定14.1㎡。深さ49cm。標高386.77m。竈前面部は堅固。**(壁溝)** 床面残存部には巡る。幅22～27cm、深さ3～5cm。**(遺物出土状況)** 床面直上および床面上約20cmの以内レベルから散在的に出土。**(遺物)** 須恵器坏・蓋A・甕、土師器甕B、刀子。**(時期)** 宮ノ前V期？。

第279号住居址　(第68・231図、図版42)

(位置) A17・18B21グリッド。**(重複)** 267・362号住と重複。両住居址より新しい。**(形状)** 隅丸長方形。N－80°－E。**(規模)** 3.72m×3.27m。**(竈)** 石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模0.94m×0.92m。深さ10cm。**(床)** 10.5㎡。深さ29cm。標高387.05m。竈前面部は堅固。**(壁溝)** 東壁下以外は巡る。幅19～22cm、深さ3～6cm。**(遺物出土状況)** 竈内、西壁および南壁際の床面よりわずかに浮いた状態で少量出土。**(遺物)** 土師器坏A(線刻あり)、須恵器坏・蓋A、円筒土器。**(時期)** 不明。

第280号住居址　（第69・231図、図版42）

（位置）A16B21グリッド。**（重複）**393号住、11号溝と重複。11号溝より古く、393号住より新しい。**（形状）**不明。N－84°－E。**（規模）**南北軸2.54m。**（竈）**東竈。東壁中央やや北寄りに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.65m×0.57m。深さ9cm。**（床）**面積不明。深さ13cm。標高387.00m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅14～24cm、深さ3～4cm。**（柱穴）**北壁と南壁際に柱穴状のピットあり。径40～50cm、深さ約5cmを測る。**（遺物出土状況）**少量の遺物が床面上わずかに浮いたレベルから出土。**（遺物）**須恵器坏・高台坏。**（時期）**不明。

第281号住居址　（第69図、図版42）

（位置）A15B26グリッド。**（重複）**200号住と重複。200号住より古い。**（形状）**不明。N－80°－E。**（規模）**南北軸3.61m。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。左袖石の一部が残存。焼土は顕著でない。規模0.87m×0.55m。深さ4cm。**（床）**面積不明。深さ20cm。標高386.95m。床面状況不明。**（壁溝）**不明瞭だが床面残存部には巡る。幅17～23cm、深さ3～5cm。**（遺物出土状況）**ほとんど出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第282号住居址　（第69・231図、図版42・120）

（位置）A15・16B22グリッド。**（重複）**275・307・320号住と重複。275・307号住より古く、320号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－80°－E。**（規模）**3.72m×3.77m。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模1.01m×0.65m。深さ15cm。**（床）**推定12.2㎡。深さ41cm。標高386.65m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅18～28cm、深さ4～7cm。**（遺物出土状況）**竈脇の床面直上から主に出土。**（遺物）**土師器高台坏・皿（混入か）・甕CII、須恵器坏（線刻あり）、黒色土器坏（混入か）、棒状鉄製品。**（時期）**宮ノ前III・IX期。

第283号住居址　（第69・231図、図版43）

（位置）A18B23・24グリッド。**（重複）**139・140・367号住と重複。139・140号住より古く、367号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－84°－E。**（規模）**3.06m×3.29m。**（覆土）**床面直上および床面上わずかに浮いたレベルで少量の礫が散乱する。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模南北軸0.83m。深さ3cm。**（床）**推定8.50㎡。深さ35cm。標高387.16m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅22～31cm、深さ4～6cm。**（遺物出土状況）**竈内を中心に少量の遺物が出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿、黒色土器坏（墨書あり）。**（時期）**宮ノ前IX期？。

第284号住居址　（第70・232図、図版43・120）

（位置）A16・17B25グリッド。**（重複）**349・379・381号住と重複。いずれの住居址より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－76°－E。調査順序を誤り北西コーナーと西壁の一部を欠失。**（規模）**2.99m×3.59m。**（覆土）**竈前面部の床面直上および床面上数cmのレベル内に礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存する。焼土は顕著。規模0.84m×0.68m。深さ8cm。**（床）**推定9.48㎡。深さ29cm。標高387.01m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**北壁下は巡らない。幅15～29cm、深さ4～6cm。**（遺物出土状況）**竈周辺部のほぼ床面直上から少量出土。**（遺物）**土師器坏A・B（混入品あり）・甕A、黒色土器坏。**（時期）**宮ノ前IX期。

第285号住居址　（第70・232図、図版43・120）

（位置）A17B25・26グリッド。**（重複）**299・354・391号住と重複。いずれの住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－88°－E。**（規模）**3.20m×3.53m。**（覆土）**住居址全体にわたって床面直上および床面上5cm以内のレベルに礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。右袖石の一部と支脚石が残存。焼土は顕著。規模1.03m×1.02m。深さ14cm。**（床）**9.59㎡。深さ22cm。標高387.27m。堅固な箇所が散在的に残存。**（壁**

溝）不明。（**遺物出土状況**）竈内から土師器甕等がまとまって出土。（**遺物**）土師器皿・甕A・CII・CIV、羽釜A、須恵器甕胴部破片利用転用硯、砥石。（**時期**）宮ノ前IX期。

第286号住居址　（第70・233・234図、図版43・120）

（**位置**）A16・17B28グリッド。（**重複**）224・332号住と重複。両住居址より新しい。（**形状**）隅丸長方形。N－22°－W。（**規模**）4.44m×3.82m。（**覆土**）住居址中央部から北側部分にかけての床面上数cmのレベルに礫が散乱する。（**竈**）石組み。北竈。北壁北西コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。右袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。竈前面部に掻きだされた灰の範囲あり。規模1.47m×0.85m。深さ19cm。（**床**）15.4㎡。深さ40cm。標高386.96m。竈前面部から住居址中央部にかけて堅固。（**壁溝**）西壁下～南壁下の一部には巡らない。幅16～28cm、深さ3～5cm。（**遺物出土状況**）竈内および竈周辺部のほぼ床面直上から主に出土。（**遺物**）土師器坏A・皿（墨書あり）・甕A・小型甕A、黒色土器坏（線刻あり）、須恵器凸帯壷・壷。（**時期**）宮ノ前VIII期。

第287号住居址　（第70・234図、図版43・120）

（**位置**）A16B22グリッド。（**重複**）274・319・342・411号住、35号掘立と重複。274号住より古く、他の住居址、掘立より新しい。（**形状**）隅丸方形。N－81°－E。（**規模**）4.29m×3.88m。（**竈**）東竈。東壁中央やや北寄りに位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著でない。規模0.95m×0.77m。深さ17cm。（**床**）推定15.0㎡。深さ41cm。標高386.87m。全体にやや軟弱。（**壁溝**）全周する。幅22～31cm、深さ5～10cm。（**遺物出土状況**）南壁際の床面直上から中心に出土。石銙は床面上約19cmのレベルから出土。（**遺物**）土師器坏A（タール付着するものあり）皿・甕C、灰釉陶器皿、石銙、銅製銙帯（鉈尾か）・棒状鉄製品。（**時期**）宮ノ前IX期。

第288号住居址　（第71・234・235図、図版43・121）

（**位置**）A16B24・25グリッド。（**重複**）289・304・309・379・387・410号住と重複。304号住より古く、他の住居址より新しい。（**形状**）隅丸方形。N－80°－E。（**規模**）4.42m×4.63m。（**覆土**）竈周辺部の床面直上に礫が散乱する。（**竈**）石組み。東竈。東壁中央やや北寄りに位置する。両袖石の一部と支脚石が残存。右袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模1.46m×0.87m。深さ7cm。（**床**）18.0㎡。深さ25cm。標高386.74m。竈周辺部は堅固。（**壁溝**）全周する。幅19～28cm、深さ5～10cm。（**遺物出土状況**）住居址東側部分の床面直上から散在的ではあるが比較的多量の遺物が出土。（**遺物**）土師器坏A・B・高台坏（墨書・線刻あり、混入品あり）・皿（墨書あり）・甕CI・CV・D、円筒土器、手捏ね土器、須恵器坏・高台坏（線刻あり）・甕・甕胴部破片利用転用硯、刀子・鉄鏃・棒状鉄製品・板状鉄製品。（**時期**）宮ノ前VI期。

第289号住居址　（第71図、図版43・122）

（**位置**）A16B25グリッド。（**重複**）288・290・387・410号住と重複。288・290号住より古く、387・410号住より新しい。（**形状**）不明。N－79°－E。（**規模**）南北軸3.83m。（**竈**）石組みか。東竈。東壁中央やや北寄りに位置する。掘り方のみ残存するが、崩落土内に袖石状の礫がみられる。焼土は顕著。規模0.92m×0.86m。深さ9cm。（**床**）面積不明。深さ25cm。標高387.04m。竈前面部から住居址中央部付近にかけて堅固。（**壁溝**）床面残存部には巡る。幅17～23cm、深さ3～5cm。（**遺物出土状況**）土師器等の細片が覆土内からわずかに出土。（**遺物**）なし。（**時期**）不明。

第290号住居址　（第71・236図、図版44・121）

（**位置**）A16B25グリッド。（**重複**）289号住と重複。289号住より新しい。（**形状**）隅丸方形。N－82°－E。（**規模**）3.60m×3.27m。（**覆土**）住居址東側部分の床面直上および床面上数cmのレベル内に少量の礫が散乱する。（**竈**）石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著でない。規模1.00m×0.69m。深さ8cm。（**床**）9.72㎡。深さ31cm。標高386.99m。住居址中央周辺部は堅固。（**壁溝**）全周する。幅20～37cm、

深さ３～７㎝。**（遺物出土状況）**竈周辺部のほぼ床面直上から散在的に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ（墨書あり）・皿（墨書あり）・甕Ａ・小型甕Ａ、黒色土器坏（墨書あり）。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第291号住居址　（第72・236図、図版44・122）

（位置）Ａ16Ｂ23・24グリッド。**（重複）**301・310・336・344号住と重複。301・310号住より古く、336・344号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－86°－Ｅ。**（規模）**3.44m×3.29m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.04m×0.78m。深さ９㎝。**（床）**9.66㎡。深さ46㎝。標高386.81m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅14～23㎝、深さ４～５㎝。**（遺物出土状況）**南壁下のほぼ床面直上レベルから主に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・Ｂ（タール付着するものあり、線刻あり、混入品あり）・皿（墨書あり）・甕Ａ、黒色土器坏、灰釉陶器壷、須恵器甕、鉄滓。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第292号住居址　（第72・237図、図版44・122）

（位置）Ａ18Ｂ26グリッド。**（重複）**53号掘立と重複。新旧関係不明。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－16°－Ｗ。**（規模）**3.59m×3.42m。**（竈）**北竈。北壁中央やや西寄りに位置する。掘り方のみ残存。焼土はやや顕著。規模0.78m×0.76m。深さ10㎝。**（床）**10.8㎡。深さ15㎝。標高387.64m。住居址中央部付近に堅固な箇所あり。**（壁溝）**不明。**（遺物出土状況）**竈周辺部および南壁際の床面直上もしくは床面上わずかに浮いたレベルからややまとまって出土。**（遺物）**土師器坏Ａ（墨書あり、タール付着するものあり）・高台坏・皿（墨書あり）、黒色土器坏、灰釉陶器椀、須恵器甕胴部破片利用転用硯、鉄鏃か。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第293号住居址　（第72・237・238図、図版44・123・124）

（位置）Ａ17Ｂ27グリッド。**（重複）**160・316・337・413号住と重複。160・316号住より古く、337・413号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－70°－Ｅ。**（規模）**6.30m×6.50m。**（覆土）**住居址中央部の床面直上および床面上数㎝浮いたレベルに礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。右袖石の一部が残存。同袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は非常に顕著。規模1.50m×1.24m。深さ21㎝。**（床）**推定36.2㎡。深さ36㎝。標高387.15m。竈前面部は特に堅固で、住居址全体でも散在的に堅固な箇所が残存する。**（壁溝）**全周すると思われる。幅26～40㎝、深さ４～８㎝。**（柱穴）**柱穴状のピットが４箇所認められる。径70～100㎝、深さ20～30㎝を測る。その配置等から柱穴の可能性大。**（遺物出土状況）**住居址全体にわたって多量の遺物が散在的に出土。特に壁際、竈周辺部からの出土が目立ち、床面から浮いた状態での出土が多い。**（遺物）**土師器坏Ａ（墨書・線刻あり、タール付着するものあり）・高台坏・皿（墨書あり、タール付着するものあり）・蓋Ａ（墨書あり）・甕Ａ・小型甕Ａ・Ｃ・小型壷Ｂ、甑、黒色土器坏・椀（墨書あり）、須恵器坏・高台坏・甕・壷・甕胴部破片利用転用硯、円筒土器、土錘、刀子。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期。

第294号住居址　（第72・239図、図版44）

（位置）Ａ17・18Ｂ24グリッド。**（重複）**302・348・359号住、38号掘立と重複。いずれの遺構より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－80°－Ｅ。**（規模）**3.24m×3.10m。**（覆土）**床面直上および床面上約15㎝のレベル内で住居址全体にわたって少量の礫が散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。右袖石の一部が残存。焼土は顕著でない。規模0.79m×0.74m。深さ９㎝。**（床）**8.28㎡。深さ23㎝。標高387.26m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**全周する。幅21～30㎝、深さ４～６㎝。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**土師器皿、黒色土器坏、刀子。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第295号住居址　（第73・239図、図版44・125）

（位置）Ａ17Ｂ22・23グリッド。**（重複）**360号住、42号掘立と重複。両遺構より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－

83°－E。**（規模）**4.03m×4.29m。**（覆土）**少量の礫が床面直上および床面上約35cm以内のレベルで散乱する。**（竈）**東竈。東壁ほぼ中央に位置する。掘り方のみ残存。袖石または天井石とみられる礫が落ち込んでいる。焼土は顕著。規模1.03m×0.87m。深さ12cm。**（床）**15.1㎡。深さ48cm。標高386.87m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅20～30cm、深さ３～５cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在して出土。**（遺物）**須恵器坏（タール付着するものあり）、土師器甕CIV。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期？。

第296号住居址　（第73・239図、図版44・125）

（位置）A17B23グリッド。**（重複）**360号住、54号掘立、18号溝と重複。いずれの遺構より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－82°－E。**（規模）**3.38m×3.48m。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。両袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は非常に顕著。規模1.03m×0.72m。深さ７cm。**（床）**9.38㎡。深さ40cm。標高387.01m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅18～29cm、深さ４～６cm。**（遺物出土状況）**住居址中央周辺部から散在的に出土。床面から浮いた状態での出土が多い。**（遺物）**土師器坏A・皿・蓋A・甕A、須恵器坏・蓋A。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期。

第297号住居址　（第73・240図、図版44）

（位置）A16・17B23グリッド。**（重複）**321・335号住、８号溝と重複。321号住、８号溝より古く、335号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－86°－E。**（規模）**3.34m×3.38m。**（竈）**東竈。東壁ほぼ中央に位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.78m×0.66m。深さ７cm。**（床）**9.83㎡。深さ14cm。標高387.19m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**全周する。幅13～23cm、深さ３～５cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在的に出土。小片が多い。**（遺物）**土師器坏A、須恵器高台坏A。**（時期）**不明。

第298号住居址　（第74・240図、図版45）

（位置）A17B25グリッド。**（重複）**169・391号住と重複。前者より古く、後者より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－83°－E。北東コーナー付近は撹乱のため欠失。**（規模）**2.89m×2.85m。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。169号住に切られ1/2以上欠失する。掘り方の一部が残存。焼土は顕著。規模東西軸1.16m。深さ12cm。**（床）**推定7.47㎡。深さ10cm。標高387.37m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅17～23cm、深さ４～７cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在的に出土。**（遺物）**土師器皿・甕A、棒状鉄製品。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第299号住居址　（第74・240図、図版45・125）

（位置）A17B25・26グリッド。**（重複）**161・169・285・391号住と重複。161・169・285号住より古く、391号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－86°－E。**（規模）**4.35m×4.67m。**（覆土）**床面直上および床面上数cmのレベル内に少量の礫がほぼ住居址全体にわたって散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。右袖石の一部が残存し、両袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模1.29m×1.29m。深さ９cm。**（床）**推定19.1㎡。深さ31cm。標高387.24m。竈周辺部から住居址中央部にかけて堅固。**（壁溝）**北壁下の一部には巡らない。幅20～27cm、深さ３～５cm。**（遺物出土状況）**竈周辺部を中心に床面上わずかに浮いたレベルから出土。**（遺物）**土師器坏A（タール付着するものあり）・甕A・小型甕B、黒色土器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第300号住居址　（第74・240図、図版45・125）

（位置）A16B23グリッド。**（重複）**321・333・358号住と重複。いずれの住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－74°－E。**（規模）**3.60m×3.55m。**（覆土）**床面に10～50cm大の礫が散在する。**（竈）**東竈。東南コーナー寄りに位置。石組は全く残存せず。規模1.05m×0.70m。深さ15cm。焼土は顕著。**（床）**11.3㎡。深さ30cm。標高386.83m。竈前面部は堅い。**（壁溝）**全周する。幅15～25cm、深さ５cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が南壁側に分布する。**（遺**

物）土師器皿・坏A・小型甕A、須恵器高台坏・蓋A、灰釉陶器壷。（時期）宮ノ前Ⅷ期。

第301号住居址　（第74・240図、図版45・125）

（位置）A16B23・24グリッド。（重複）251・291・310・336・344号住と重複。いずれの住居址より新しい。（形状）隅丸方形。N－78°－E。（規模）3.50m×3.90m。（竈）東竈。東南コーナー寄り。規模1.10m×0.75m。深さ11cm。焼土は顕著。両袖石と天井石の一部が良好に残る。（床）12.1㎡。深さ50cm。標高386.77m。竈前面は床が堅い。（壁溝）全周する。幅20～35cm、深さ6cm。（遺物出土状況）床面全体に散在。（遺物）土師器甕A・坏A（墨書あり）・皿、黒色土器坏、鎌。（時期）宮ノ前Ⅸ期。

第302号住居址　（第75・241図、図版45・125）

（位置）A17B24グリッド。（重複）294・348・349号住と重複。294号住より古く、348・349号住より新しい。（形状）隅丸方形。N－82°－E。（規模）3.70m×3.75m。（竈）石組み。東竈。右袖石1個を残すのみ。支脚ピットあり。また支脚状の石もあり。規模1.10m×0.80m。深さ6cm。焼土は顕著。（床）11.7㎡。深さ43cm。標高386.96m。竈前面と床面中央西寄りに焼土・炭・灰が堆積。（壁溝）全周する。幅25～30cm、深さ8cm。（遺物出土状況）南壁付近および竈内、竈北側に多い。（遺物）灰釉陶器壷、土師器坏A・皿・高台坏（墨書あり）・甕A・小型甕A、黒色土器坏・高台皿、須恵器蓋A・甕、刀子・ピン状青銅製品。（時期）宮ノ前Ⅵ期。

第303号住居址　（第75・241・242図、図版45・125）

（位置）A18B26・27グリッド。（重複）337・365・366・397号住、52号掘立と重複。いずれの遺構より新しい。（形状）隅丸方形。N－70°－E。（規模）4.35m×4.44m。（覆土）床面中央に礫が散乱。（竈）石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.10m×0.80m。深さ7cm。（床）17.6㎡。深さ19cm。標高387.41m。竈周辺部は堅固。（壁溝）南壁下のみ巡る。幅22～30cm、深さ5cm。（遺物出土状況）竈内を中心に出土。（遺物）土師器坏A（墨書あり）・皿・甕A・小型甕A、羽釜A、黒色土器坏、灰釉陶器壷。（時期）宮ノ前Ⅸ期。

第304号住居址　（第75・242図、図版45・126）

（位置）A15・16B24グリッド。（重複）278・319号住と重複。両住居址より新しい。（形状）隅丸方形。N－73°－E。（規模）3.95×3.60m。（覆土）床面中央付近に礫集中10m～50cm大。（竈）石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。袖石の一部と天井石は良好に残る。規模1.35m×0.50m。深さ8cm。焼土は顕著。（床）推定12.7㎡。標高386.78m。深さ23cm。炭化物・炭化材が床面に広く分布。全体に堅い。（壁溝）竈北側から北壁のみ。南壁にはない。幅20～25cm、深さ5cm。（遺物出土状況）礫の集中部分に分布。竈内にも多い。（遺物）土師器坏A（墨書・線刻あり）・皿・甕A、須恵器坏・長頸壷、手捏ね土器、鋤か鍬。（時期）宮ノ前Ⅷ期。

第305号住居址　（第75・242図、図版45）

（位置）A14・15B21・22グリッド。（重複）305・325・340・407号住と重複。いずれの住居址より新しい。南壁付近は試掘時のトレンチに切られ不明。（形状）隅丸方形。N－71°－E。（規模）3.20m×？m。（竈）石組み。東竈。東壁のほぼ中央か。両袖石の一部が残る。規模1.15m×0.65m。深さ11cm。焼土は顕著。支脚石残存。高さ15cm。（床）面積不明。深さ15cm。標高386.8m。焼土・灰が中央付近に広く分布。（壁溝）床面残存部では全周する。幅20～25cm、深さ5cm。（遺物出土状況）全体的には少量。竈内に分布する。（遺物）土師器坏A・甕A・C、灰釉陶器壷。（時期）宮ノ前Ⅸ期。

第306号住居址　（第76・243図、図版46・126）

（位置）A16B26・27グリッド。**（重複）**233号住と重複。233号住より古い。**（形状）**隅丸方形。N－11°－W。**（規模）**3.75m×？m。**（竈）**北竈。北壁東寄り。石組みはない。規模0.80m×0.70m。深さ10cm。明瞭な焼土層はない。**（床）**面積不明。標高387.19m。削平により床面の掘り込みはない。**（壁溝）**全周する。幅15～25cm、深さ8cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が竈前面に集中。**（遺物）**土師器小型甕C、須恵器坏。**（時期）**宮ノ前VI期？。

第307号住居址　（第76・243図、図版46・126）

（位置）A15B22・23グリッド。**（重複）**282・327・334・358号住と重複。282号住より古く、327・334・358号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－93°－E。**（規模）**3.50m×3.35m。**（竈）**東竈。中央南寄り。石組みは残存しない。規模1.15m×0.90m。深さ20cm。焼土は顕著。**（床）**推定10.8㎡。深さ28cm。標高386.88m。**（壁溝）**全周する。幅15～25cm、深さ6cm。**（遺物出土状況）**竈内に主に分布。**（遺物）**土師器甕A・CIII・皿、須恵器甕・坏、刀子。**（時期）**宮ノ前VII期？。

第308号住居址　（第76・243図、図版46・126）

（位置）A16B24グリッド。**（重複）**309・336号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸方形か。西・南壁を切られ、全形は不明。N－81°－E。**（規模）**3.70m×？m。**（竈）**東竈。石組みは残存せず。規模0.85m×0.70m。深さ25cm。焼土は顕著。**（床）**床面積不明。深さ38cm。標高386.96m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**全周する。幅18～30cm、深さ8cm。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**土師器坏A（タール付着するものあり）・皿・鉢AI。**（時期）**宮ノ前VIII期。

第309号住居址　（第76・243・244図、図版46・126）

（位置）A16B24グリッド。**（重複）**278・288・304・308・336号住と重複。278・304・336号住より古く、308号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－78°－E。**（規模）**3.85m×3.90m。**（竈）**東竈。東壁やや北寄り。石組みはなく掘り方のみ。規模0.85m×0.85m。深さ10cm。焼土は顕著。**（床）**推定14.2㎡。深さ22cm。標高386.73m。全面に炭化材・焼土分布。北壁東寄り付近に板状の炭化材120cm×50cmあり。南半分の床は堅い。**（壁溝）**全周する。幅12～28cm、深さ5cm。**（遺物出土状況）**竈内、床面にやや多くの遺物が散在。**（遺物）**土師器皿・坏A、須恵器甕・蓋A・坏。須恵器の方が量的に土師器を上回る。砥石。**（時期）**宮ノ前VI期？。

第310号住居址　（第77・244図、図版46・126）

（位置）A16・17B23・24グリッド。**（重複）**291・301・335・336・350号住と重複。291・301・336号住より古く、335・350号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－86°－E。**（規模）**4.35m×3.50m。**（竈）**石組み。東竈。中央わずかに南寄り。袖石の一部が残る。規模1.20m×0.90m。深さ14cm。焼土は顕著。**（床）**推定13.8㎡。深さ42cm。標高386.94m。全体にやや堅固。**（壁溝）**全周する。幅18～33cm、深さ8cm。**（遺物出土状況）**壁際に分布。**（遺物）**緑釉陶器皿、土師器坏A（スス付着するものあり）・鉢AI・小型甕A、黒色土器坏・椀（墨書あり）、土錘。**（時期）**宮ノ前IX期。

第311号住居址　（第77・244図、図版46・126）

（位置）A16B21グリッド。**（重複）**261・276号住と重複。前者より古く、後者より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－80°－E。**（規模）**3.05m×3.15m。**（竈）**東竈。東壁南寄り。石組みはない。規模？m×0.90m。深さ13cm。焼土は顕著。**（床）**8.05㎡。深さ32cm。標高386.78m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**全周する。幅20～40cm、深さ8cm。**（遺物出土状況）**南壁寄りに少量まとまって出土。**（遺物）**土師器甕CIV、須恵器坏・鉢B・角坏、刀子。**（時期）**宮ノ前IV期と思われる。

第312号住居址　（第77図、図版46）

（位置）A15B22グリッド。**（重複）**305・325・340号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**不明。主軸方向不明。**（規模）**？m×2.80m。**（竈）**不明。**（床）**面積不明。深さ20cm。標高386.62m。残存部はやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部は巡る。幅15～22cm、深さ3cm。**（遺物出土状況）**特になし。**（遺物）**復元実測できる遺物なし。**（時期）**不明。

第313号住居址　（第77・244・245図、図版46・126・127）

（位置）A17B21・22グリッド。**（重複）**268・361号住と重複。268号住より古く、361号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－76°－E。**（規模）**3.95m×3.45m。**（覆土）**竈前面～床面南半分に15～40cm大の礫集中。また礫と分布が重なるように焼土・炭化物が多く分布する。**（竈）**石組み。東竈。中央南寄り。袖石と天井石の一部が良好に残る。規模1.00m×0.75m。深さ12cm。焼土は顕著。**（床）**11.85㎡。深さ55cm。標高386.84m。全体に堅固。**（壁溝）**全周する。幅18～23cm、深さ4cm。壁は良好。**（遺物出土状況）**礫の集中部から南壁際にかけて非常に多い。**（遺物）**土師器甕A・C・坏A（線刻あり）、黒色土器高台坏、須恵器坏・高台坏A・鉢B・蓋A・短頸壷、砥石。**（時期）**宮ノ前Ⅳ期。

第314号住居址　（第77・245図、図版47）

（位置）A21B29グリッド。**（重複）**343・388号住と重複。両住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－80°－E。**（規模）**3.70m×3.90m。**（覆土）**竈周辺などに10～40cm大の礫が散在。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央わずかに北寄り。右袖石1個のみ残る。規模1.10m×0.85m。深さ25cm。焼土は顕著。**（床）**12.7㎡。深さ16cm。標高387.73m。全体に軟弱。**（壁溝）**全周する。幅20～27cm、深さ5cm。**（遺物出土状況）**床面南半分の礫分布と重なる。**（遺物）**土師器坏A・皿（スス付着するものあり）・甕、黒色土器坏、灰釉陶器壷・三足段皿、刀子。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第315号住居址　（第78・246図、図版47・127）

（位置）A22B28・29グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸方形。N－80°－E。**（規模）**4.00m×4.30m。**（覆土）**床面から数cm浮上してやや小さな礫15cm大が非常に多い。**（竈）**石組みか。東竈。東壁南寄り。左袖石1個のみ残る。規模1.10m×0.85m。深さ12cm。焼土は顕著。**（床）**14.6㎡。深さ27cm。標高387.87m。全体的に堅固。**（壁溝）**南・北壁の一部を除いて巡る。幅22～25cm、深さ6cm。壁は砂質で脆い。**（遺物出土状況）**竈内、南壁付近に多い。**（遺物）**土師器坏A（墨書・線刻あり、スス付着するものあり）・皿・甕A・小型甕A、黒色土器坏、須恵器壷・甕、刀子。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第316号住居址　（第78・246図、図版47・127）

（位置）A17・18B27・28グリッド。**（重複）**293・337・392・413号住と重複。いずれの住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形か。N－66°－E。**（規模）**？m×3.80m。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.13m×0.89m。深さ13cm。**（床）**面積不明。深さ24cm。標高387.30m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅22～25cm、深さ5～7cm。**（遺物出土状況）**散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり、タール付着するものあり）・皿（墨書あり）・甕C。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第317号住居址（第78・247図、図版47）

（位置）A15B22グリッド。**（重複）**266・322・325・331・340号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**隅丸方形か。重複が激しく竈付近～住居東半分しか遺存しない。N－90°－E。**（規模）**？m×3.60m。**（竈）**東竈。中央北寄り。掘り方のみ残存。規模1.05m×0.75m。深さ7cm。焼土はやや顕著。**（床）**面積不明。深さ23cm。標高386.69m。全体に堅い。**（壁溝）**全周する。幅18～28cm、深さ6cm。壁は良好。**（遺物出土状況）**竈内などに少量散在。**（遺物）**土師器甕CⅠ・CⅣ、羽口。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期？。

第318号住居址　（第78・247図、図版47・127）

（位置）A20B28グリッド。**（重複）**412号住、13号溝と重複。412号住より新しく、13号溝より古い。**（形状）**隅丸方形。N－79°－E。**（規模）**3.50m×3.40m。**（覆土）**床面全体に礫（5～40cm大）が散在。**（竈）**石組み。東竈。東壁南寄り。規模1.10m×0.80m。深さ11cm。焼土は顕著。**（床）**10.03㎡。深さ52cm。標高387.53m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周しない。南壁と東壁に分かれて存在する。幅23～32cm、深さ5cm。**（遺物出土状況）**東壁付近に分布。西側に鉄製品が4点分布。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）、羽釜A、須恵器坏・高台坏A・蓋A・甕・壷、黒色土器坏、灰釉陶器壷、土錘、刀子・釘・鉄鏃・棒状鉄製品。**（時期）**宮ノ前Ⅳ期とⅨ期の遺物が混在する。

第319号住居址　（第79・247図、図版47・127）

（位置）A16B22グリッド。**（重複）**274・275・287・341・342号住と重複。275・287・341号住より古く、274・342号住より新しい。**（形状）**隅丸方形か。重複が激しく形状不明。N－80°－E。**（規模）**？m×5.05m。**（竈）**東竈。東壁南寄り。石組みはない。規模1.10m×0.95m。深さ21cm。焼土は顕著。**（床）**面積不明。深さ30cm。標高386.77m。全体に軟弱。**（壁溝）**全周する。幅15～25cm、深さ5cm。壁良好。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**土師器皿（線刻あり）・高台坏、羽釜A、須恵器坏・高台坏A・蓋A・甕、鉄滓。**（時期）**不明。

第320号住居址　（第79・248図、図版47・128）

（位置）A15・16B22・23グリッド。**（重複）**274・282・319・411号住と重複。274号住より古く、282・319・411号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－83°－E。**（規模）**3.49m×3.52m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや北寄りに位置する。右袖石の一部が残存し、燃焼部と両袖部に袖石および支脚石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模1.15m×0.76m。深さ5cm。**（床）**推定11.4㎡。深さ28cm。標高386.76m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅11～25cm、深さ3～5cm。**（遺物出土状況）**散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A・皿。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期？。

第321号住居址　（第79・248図、図版48）

（位置）A16B23グリッド。**（重複）**297・300・333・357号住と重複。333・357号住より古く、297・300号住より新しい。**（形状）**隅丸方形か。N－81°－E。**（規模）**4.40m×4.20m。**（覆土）**ほぼ中央に礫が散在。**（竈）**東竈。東壁南寄り。袖石等は全く残存せず。掘り方のみ残存。規模1.00m×0.80m。深さ14cm。焼土は顕著。**（床）**推定16.6㎡。深さ36cm。標高386.83m。**（壁溝）**全周しない。北側にはない。幅15～25cm、深さ6cm。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**土師器小型甕C・皿、黒色土器坏・高台皿、須恵器坏・高台坏A、砥石、刀子。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第322号住居址　（第79・248図、図版48）

（位置）A15B22グリッド。**（重複）**317・409号住と重複。前者より古く、後者より新しい。**（形状）**隅丸方形か。主軸方向不明。**（規模）**2.50m×？m。**（竈）**不明。**（床）**面積不明。深さ32cm。標高386.61m。炭化物が北側に多く散在する。**（壁溝）**全周する。幅15～20cm、深さ6cm。**（遺物出土状況）**西壁付近に少量散在。**（遺物）**土師器坏、鉄滓。**（時期）**不明。

第323号住居址　（第79・248図、図版48・128）

（位置）A18B22グリッド。**（重複）**8号溝と重複。8号溝より古い。**（形状）**隅丸方形。N－80°－E。**（規模）**2.70m×2.50m。**（覆土）**床面中央付近に数cm浮上して礫（10～45cm大）が集中する。**（竈）**石組み。東竈。東壁南寄り。両袖石の一部が残る。規模0.85m×0.50m。深さ7cm。焼土は顕著。**（床）**6.00㎡。標高387.31m。深さ12cm。竈前面の床は堅固。**（壁溝）**全周する。幅15～22cm、深さ10cm。北壁は不良。**（遺物出土状況）**竈付近の南側に集中する。**（遺物）**土師器坏A・小型甕A。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第324号住居址　（第80・248図、図版48・128）

（位置）A19・20B27グリッド。**（重複）**347・416号住と重複。両者より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－81°－E。**（規模）**3.00m×3.20m。**（覆土）**東壁側に礫（10～45cm大）が散在する。**（竈）**石組み。東竈。東壁南寄り。両袖石、天井石ともに残りが良い。支脚石も残存する。規模1.00m×0.70m。深さ15cm。焼土は顕著。**（床）**8.27㎡。深さ38cm。標高387.62m。竈前面と中央部が堅固。**（壁溝）**北西コーナー部を除き全周する。幅20～30cm、深さ8cm。**（遺物出土状況）**西壁寄りに分布する。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿・甕A、羽釜A、黒色土器坏、灰釉陶器椀、須恵器甕。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第325号住居址　（第80・249図、図版48・128）

（位置）A15B22グリッド。**（重複）**331・340号住と重複。両住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形か。N－6°－W。**（規模）**3.80m×3.50m。本来完存であったが、手順ミスで測量前に次の住居址の調査へ移ったため北壁の大半を欠失してしまった。**（竈）**北竈。北壁北西コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。規模等は不明。**（床）**推定13.4㎡。深さ20cm。標高386.59m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅20～23cm、深さ4～5cm。**（遺物出土状況）**床面直上を中心に散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A・D（スス付着、灯明具として使用されたと思われる）・甕C・D、須恵器坏・蓋B・長頸壷B・鉢A・甕、手捏ね土器、砥石。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期？。

第326号住居址　（第80・249・250図、図版48・128）

（位置）A20B26・27グリッド。**（重複）**105・118号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。N－80°－E。**（規模）**3.73m×3.39m。**（覆土）**床面全体にわたってやや浮いたレベルで礫が散乱する。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄りに位置。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.94m×0.83m。深さ14cm。**（床）**10.4㎡。深さ25cm。標高387.88m。全体にわたって堅固。**（壁溝）**全周する。幅23～27cm、深さ4～9cm。**（遺物出土状況）**床面直上および床面からわずかに浮いたレベルで散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿（タール付着するものあり）・小型甕A、黒色土器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第327号住居址　（第80・250図、図版48）

（位置）A15B22・23グリッド。**（重複）**282・307・334・358号住と重複。282・307号住より古く、334・358号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－88°－E。**（規模）**4.60m×4.30m。**（竈）**東竈。東壁南寄り。袖石は残存せず。規模0.75m×0.60m。深さ14cm。焼土は顕著。**（床）**推定17.2㎡。深さ28cm。標高386.72m。全体に軟弱。**（壁溝）**全周する。幅20～30cm、深さ5cm。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**土師器坏A・甕A、砥石。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期。

第328号住居址　（第81・250図、図版48・128）

（位置）A17B22グリッド。**（重複）**351号住、35号掘立と重複。351号住より古く、35号掘立より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－84°－E。**（規模）**3.80m×3.40m。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄り。袖石は残存しない。掘り方のみ残存。規模1.15m×1.00m。深さ20cm。焼土は顕著。**（床）**11.0㎡。深さ33cm。標高386.95m。北西隅付近に灰が堆積する。**（壁溝）**全周する。幅20～30cm、深さ5cm。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**須恵器坏A（線刻あり）・高台坏A・甕、土師器坏A。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期。

第329号住居址　（第81・250図、図版49・129）

（位置）A16・17B22グリッド。**（重複）**259・351号住、35号掘立と重複。いずれの遺構より古い。**（形状）**隅丸方形。N－11°－W。**（規模）**2.75m×2.65m。**（竈）**北竈。北壁中央わずかに東寄り。袖石は全く残存せず。掘り方のみ残存。規模0.95m×0.85m。深さ12cm。焼土はやや顕著。**（床）**6.23㎡。深さ18cm。標高386.87m。全体に堅固。**（壁溝）**全周する。幅18～30cm、深さ5cm。壁良好。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**須恵器坏・壷。**（時期）**

宮ノ前Ⅳ期？。

第330号住居址　（第81・250・251図、図版49・129）

（位置）A15B23グリッド。**（重複）**251・334号住と重複。前者より古く、後者が新しい。**（形状）**隅丸方形。N－86°－E。**（規模）**3.80m×3.15m。**（覆土）**10～25cm大の礫を多く混入。**（竈）**石組み。東竈。中央わずかに南寄りに位置する。竈内に礫が崩落し、原型を留めていない。焼土は顕著。規模1.10m×0.80m、深さ10cm。**（床）**推定9.97㎡。深さ40cm。標高386.75m。全体に堅固。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅18～29cm、深さ５cm。**（遺物出土状況）**散在する。**（遺物）**土師器坏A・高台坏・皿・甕A、円筒土器、須恵器坏・甕・凸帯壷（頭部にヘラ書あり）、羽口。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期。

第331号住居址　（第81・251図、図版49・129）

（位置）A15B22グリッド。**（重複）**317・325・340号住と重複。325号住より古く、317・340号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－84°－E。**（規模）**3.20m×2.80m。**（竈）**石組み。東竈。中央南寄りに位置する。煙道付近の石組みは残る。燃焼部中央に、径30cm、深さ15cmの支脚穴がある。焼土は顕著。規模0.95m×0.75m、深さ５cm。**（床）**7.90㎡。深さ30cm。標高386.42m。非常に堅い。**（壁溝）**全周する。幅22～28cm、深さ５cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在する。**（遺物）**土師器蓋A・甕CⅡ・小型甕C、須恵器坏・甕、砥石、刀子。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期？。

第332号住居址　（第81・251図、図版49・129）

（位置）A17B28グリッド。**（重複）**286・368号住と重複。前者より古く、後者より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－70°－E。**（規模）**3.11m×2.90m。**（竈）**東竈。東壁ほぼ中央に位置する。掘り方が残存し、右袖部には袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。**（床）**推定8.34㎡。深さ17cm。標高387.22m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**床面残存部は巡る。幅17～28cm、深さ４～５cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が竈周辺部から散在的に出土。**（遺物）**土師器坏・甕A、灰釉陶器皿。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第333号住居址　（第82・251図、図版49）

（位置）A16B23グリッド。**（重複）**358号住と重複。358号住より古い。**（形状）**隅丸方形。南約半分は欠如する。N－6°－W。**（規模）**3.10m×3.10m。**（竈）**不明。**（床）**推定8.45㎡。深さ38cm。標高386.73m。西側半分が非常に堅いが、他は軟弱。**（壁溝）**全周する。幅16～27cm、深さ５cm。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在する。**（遺物）**土師器坏B。**（時期）**宮ノ前Ⅰ期。

第334号住居址　（第82・252図、図版49・129）

（位置）A15・16B23グリッド。**（重複）**307・327・330・358号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。東壁半分、西南隅が重複のため欠如。N－3°－W。**（規模）**3.20m×3.25m。**（覆土）**礫が南東に散在。**（竈）**不明。**（床）**推定9.72㎡。深さ26cm。標高386.94m。堅い。**（壁溝）**全周する。幅15～20cm、深さ５cm。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**土師器坏A、須恵器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期？。

第335号住居址　（第82・252図、図版49・129）

（位置）A16・17B23グリッド。**（重複）**297・321・350・369号住と重複。297・321号住より古く、350・369号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－2°－W。**（規模）**4.85m×4.10m。**（覆土）**礫が散在。**（竈）**石組み。北竈。東北コーナー寄り。支脚石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模1.15m×0.80m、深さ10cm。**（床）**17.78㎡。深さ35cm。標高386.83m。やや堅固。**（壁溝）**全周する。幅18～25cm、深さ６cm。**（遺物出土状況）**南～西側に分布。**（遺物）**土師器坏A・B・高台坏・皿・鉢C・小型甕B、須恵器坏、鉄鏃。**（時期）**宮ノ前Ⅱ・Ⅸ期

の２時期の遺物を含む。

第336号住居址　（第82・252図、図版50）

（位置）A16B24グリッド。**（重複）**291・301・310・344号住と重複。291・301・344号住より古く、310号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－78°－E。**（規模）**？m×4.55m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央わずかに南寄り。右側袖石が一部残る。火床中央に支脚ピット。焼土は顕著。規模1.17m×0.97m、深さ13cm。**（床）**面積不明。標高386.82m。深さ28cm。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅20～25cm、深さ５cm。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・甕A、須恵器高台坏。**（時期）**不明。

第337号住居址　（第83・252図、図版50・129）

（位置）A17・18B27グリッド。**（重複）**293・316・366・392・413号住と重複。293・316号住より古く、366・392・413号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－66°－E。**（規模）**5.50m×6.02m。**（覆土）**少量の礫が床面直上を中心に散乱する。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄りに位置。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模1.49m×1.13m。深さ７cm。**（床）**推定32.4㎡。深さ12cm。標高387.41m。竈前面部から床面中央部にかけ堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅22～24cm、深さ５～８cm。**（柱穴）**４箇所に柱穴状のピットあり。径70～120cm、深さ25～45cmを測る。**（遺物出土状況）**床面中央部のやや浮いたレベルから散在的に出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書・線刻あり）・皿・小型甕A、須恵器高台坏・蓋A・甕・甕胴部破片利用転用硯、黒色土器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期。

第338号住居址　（第83・253図、図版50・129・130）

（位置）A20B28グリッド。**（重複）**388・412号住と重複。両住居址より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－85°－E。**（規模）**2.55m×3.30m。**（覆土）**床面中央を中心に10～55cm大の礫が、床面上15cm付近に多量に存在する。**（竈）**石組み。東竈。東壁南寄りに位置する。天井石を除き石組みが良好に遺存。焼土は顕著。規模1.10m×0.65m。深さ７cm。**（床）**7.14㎡。深さ10cm。標高387.75m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅15～25cm、深さ10cm。**（遺物出土状況）**竈燃焼部内から３個体以上の竈形土器が出土。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿、羽釜A、竈形土器、須恵器鉢B・坏、黒色土器坏、緑釉陶器椀、灰釉陶器段皿。**（時期）**宮ノ前Ⅹ期。

第339号住居址　（第83・254図、図版50・130）

（位置）A18B25グリッド。**（重複）**353・354号住と重複。両住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－67°－E。**（規模）**2.80m×2.90m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央より南寄り。石組みは崩落する。地山の礫が露出する。焼土は顕著。規模1.00m×0.80m。深さ15cm。**（床）**7.20㎡。深さ２cm。標高387.53m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**南西コーナーを除き全周するが、明確ではない。幅17～19cm、深さ５～６cm。**（遺物出土状況）**竈火床内にやや多い。また南西コーナー付近に集中するが、全体としては少ない。**（遺物）**土師器皿・甕A・小型甕A。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第340号住居址　（第83・254図、図版50）

（位置）A15B22グリッド。**（重複）**266・305・312・317・325・331号住と重複。266・312・317・325号住より新しく、305・331号住より古い。**（形状）**隅丸長方形。N－12°－W。**（規模）**3.30m×4.05m。**（竈）**不明。**（床）**推定11.56㎡。深さ28cm。標高386.46m。やや堅い。**（壁溝）**全周する。幅14～20cm、深さ５cm。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**土師器坏A・B・D・甕CⅡ。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期？。

第341号住居址　（第84・254図、図版50・130）

（位置）A16B21・22グリッド。**（重複）**265・275・276・319号住と重複。265・275号住より古く、276・319号住より

新しい。**（形状）**隅丸長方形。Ｎ－84°－Ｅ。**（規模）**4.65m×4.00m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや北寄り。右袖石が１個残存し、両袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模0.87m×0.70m。深さ12cm。**（床）**16.8㎡。深さ45cm。標高386.62m。全体に堅固。**（壁溝）**全周する。幅18～27cm、深さ９cm。**（遺物出土状況）**散在する。**（遺物）**土師器坏Ａ・甕ＣⅡ・小型甕Ｃ、須恵器坏・高台坏Ａ・蓋Ａ（転用硯）、手捏ね土器。**（時期）**宮ノ前Ⅳ期？。

第342号住居址　（第84図、図版50）

（位置）Ａ16Ｂ22グリッド。**（重複）**287･319号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸方形か。Ｎ－87°－Ｅか。**（規模）**重複により不明。現状では2.70m×1.80m。**（竈）**不明。**（床）**面積不明。深さ38cm。標高386.82m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅25～35cm、深さ６cm。**（遺物出土状況）**西壁溝上で俵編み石器が13個まとまって出土。床上約５cm。その他は微量。**（遺物）**俵編み石器。**（時期）**不明。

第343号住居址　（第84・255図、図版51・130）

（位置）Ａ21Ｂ29グリッド。**（重複）**247･314･388号住と重複。いずれの住居址より古い。近・現代の石組み暗渠が北西隅を斜めに通る。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－85°－Ｅ。**（規模）**5.15m×5.50m。**（覆土）**礫が散在。**（竈）**東竈。石組みか。東壁ほぼ中央に位置する。掘り方のみ残存。左袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模0.89m×0.87m。深さ10cm。**（床）**推定面積26.61㎡。標高387.73m。深さ24cm。竈前面は堅固。**（壁溝）**北西コーナー付近以外は全周する。幅20～32cm、深さ５cm。**（遺物出土状況）**竈南側、南東隅付近に集中。**（遺物）**土師器坏Ａ・皿・甕Ａ、黒色土器坏、手捏ね土器、瓦片（敷島町天狗沢瓦窯と同一の格子叩き目をもつ。白鳳～奈良初。混入であろう）、砥石。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第344号住居址　（第85・255図、図版51）

（位置）Ａ16Ｂ24グリッド。**（重複）**291･301･336号住と重複。291･301号住より古く、336号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－77°－Ｅ。**（規模）**2.95m×3.30m。**（竈）**東竈。東壁中央南寄り。掘り方のみ残存。左袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土はやや顕著。規模1.15m×0.95m。深さ13cm。**（床）**推定面積8.67㎡。深さ18cm。標高386.83m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**竈北西を除き全周か。幅14～32cm、深さ７cm。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**土師器坏Ａ・蓋Ａ・甕Ａ・ＣⅡ、須恵器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第345号住居址　（第85・255・256図、図版51・130）

（位置）Ａ17Ｂ24グリッド。**（重複）**350･369号住と重複。両住居址より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－80°－Ｅ。**（規模）**3.65m×3.20m。**（覆土）**中央付近、床面直上に礫集中。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー寄り。天井石を除き石組みが良好に残存し、支脚石も残存。焼土は顕著。規模1.26m×0.77m。深さ16cm。**（床）**10.0㎡。深さ45cm。標高386.85m。全体に堅固。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅25～29cm、深さ６cm。**（遺物出土状況）**竈内、竈周辺に多い。**（遺物）**土師器坏Ａ・甕Ａ、黒色土器坏、石製紡錘車。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第346号住居址　（第85・256図、図版51・130）

（位置）Ａ18Ｂ24グリッド。**（重複）**水道管が北壁付近を通る。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－76°－Ｅ。**（規模）**3.10m×3.55m。**（覆土）**床面から３～５cm上、中央付近に礫が集中。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央南寄り。袖石の一部が残る。焼土は顕著。規模0.94m×0.70m。深さ６cm。**（床）**8.97㎡。深さ33cm。標高387.27m。全体に堅固。**（壁溝）**北西コーナーを除き全周する。幅20～40cm、深さ５～10cm。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**土師器坏Ａ（墨書あり）・皿・甕Ａ、竈形土器。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第347号住居址　（第85・257図、図版51・130）

（位置）A19・20B27グリッド。**（重複）**324号住と重複。324号住より古い。**（形状）**隅丸方形。N－77°－E。**（規模）**2.75m×2.80m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄り。竈内に石が崩落。焼土は顕著。規模0.80m×0.75m。深さ5cm。**（床）**推定6.47㎡。深さ33cm。標高387.67m。残存部はやや軟弱。**（壁溝）**全周する。幅15～30cm、深さ8cm。**（遺物出土状況）**竈火床内に分布。全体に少ない。**（遺物）**土師器坏A・甕。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第348号住居址　（第85・257図、図版51・130）

（位置）A17B24グリッド。**（重複）**294･302号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。N－78°－E。**（規模）**3.20m×2.80m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄り。袖石・天井石・支脚石は良好に残る。焼土は顕著。規模1.25m×0.65m。深さ27cm。**（床）**推定8.00㎡。深さ18cm。標高387.24m。やや軟弱である。**（壁溝）**ほぼ全周する。幅15～35cm、深さ7cm。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿、須恵器甕胴部破片利用転用硯。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第349号住居址　（第86・257図、図版51・130）

（位置）A17B24・25グリッド。**（重複）**302号住と重複。302号住より古い。**（形状）**隅丸長方形。N－82°－E。**（規模）**4.65m×3.95m。**（覆土）**竈周辺、床面東半分に礫が多く集まる。床面上2～3cmに堆積。**（竈）**東竈。東壁ほぼ中央に位置する。掘り方のみ残存。小礫を多く混入する。焼土は顕著。規模1.23m×1.03m。深さ32cm。**（床）**推定15.99㎡。深さ33cm。標高387.1m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**竈北側を除き全周する。幅18～38cm、深さ8cm。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**土師器坏B・甕B・CV、灰釉陶器壷底部（ヘラ書あり、混入の可能性あり）。**（時期）**宮ノ前Ⅱ期？。

第350号住居址　（第86・258図、図版52・131）

（位置）A16・17B23・24グリッド。**（重複）**310･345･355･369号住と重複。310･355号住より古く、345･369号住より新しい。**（形状）**隅丸方形か。N－3°－W。竈周辺部などごく一部しか残らない。**（規模）**推定4.70m×4.65m。**（竈）**石組み。北竈。北壁ほぼ中央に位置する。左袖石の一部が残る。竈内から完形の土師器皿出土（上向き）。焼土は顕著。規模1.10m×0.60m。深さ11cm。**（床）**推定20.9㎡。深さ6cm。標高387.0m。竈前面は堅固で、灰堆積がみられる。**（壁溝）**全周すると思われる。幅21～35cm、深さ6cm。**（遺物出土状況）**竈内に分布。**（遺物）**土師器皿・甕A。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期？。

第351号住居址　（第86・258図、図版52・131）

（位置）A16・17B22グリッド。**（重複）**328･329号住と重複。前者より古く、後者より新しい。**（形状）**隅丸方形。完存。N－6°－W。**（規模）**3.65m×3.45m。**（竈）**東竈。中央南寄り。袖石はない。焼土は顕著。規模0.85m×0.80m、深さ8cm。**（床）**11.53㎡。深さ31cm。標高386.91m。全体に堅固。**（壁溝）**全周する。幅15～25cm、深さ6cm。**（柱穴）**北壁中央やや東寄りにピットが1個ある。径28cm、深さ24cm。**（遺物出土状況）**竈火床内とその南側に主に分布。**（遺物）**土師器坏A・甕A・小型甕C・鉢D、須恵器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期？。

第352号住居址　（第86・258図、図版52）

（位置）A15B23グリッド。**（重複）**171･176･182号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**不明。N－21°－Wか。**（規模）**不明。**（竈）**東竈。東壁北東コーナー寄り。焼土は顕著。規模0.83m×0.70m。深さ14cm。**（床）**面積不明。深さ10cm。標高386.71m。堅固。**（壁溝）**北壁には存在。**（遺物出土状況）**少量、散在。**（遺物）**土師器甕A・坏A。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第353号住居址　（第87・258図、図版52・131）

（位置）A18B25グリッド。**（重複）**339号住に南側を切られ、西側は削平のため存在しない。**（形状）**隅丸方形か。N－73°－E。**（規模）**？m×3.20m。**（竈）**石組みか。東竈。東壁ほぼ中央。掘り方には地山の礫が露出する。焼土は顕著。規模1.00m×0.90m。深さ15cm。**（床）**面積不明。深さ3cm。標高387.58m。削平のため床は遺存しない。**（壁溝）**北側は削平のため途中で消失。幅15～23cm、深さ5cm。**（遺物出土状況）**竈火床内に分布。**（遺物）**土師器坏A・皿・甕A。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第354号住居址　（第87・258図、図版52・131）

（位置）A17・18B25・26グリッド。**（重複）**285号住と重複。285号住より古い。**（形状）**隅丸長方形。N－77°－E。**（規模）**3.55m×4.05m。**（覆土）**床面直上に、床中央を中心にして7～45cm大の礫が散乱。**（竈）**石組み。東竈。東壁わずかに東寄り。両袖石がよく残り、他は崩落する。焼土はやや顕著。規模1.25m×1.00m。深さ3cm。**（床）**推定12.19㎡。深さ14cm。標高387.4m。北側約半分の床には、地山の礫層が露出する。**（壁溝）**全周するが、全体に不明瞭。地山の礫層が露出する。幅20～32cm、深さ10cm。**（遺物出土状況）**竈火床内など。**（遺物）**土師器坏A・皿・甕A、黒色土器坏、須恵器坏・甕、刀子。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第355号住居址　（第87・258図、図版52）

（位置）A18B22グリッド。**（重複）**床面中央に電柱の支線による撹乱がある。また東壁に沿って7号溝が南北に走る。**（形状）**隅丸方形。N－82°－E。**（規模）**3.20m×3.35m。**（竈）**東竈。東壁中央よりも南へ寄る。石はない。焼土は顕著。規模0.90m×0.70m。深さ12cm。**（床）**8.66㎡。深さ43cm。標高386.99m。堅固。**（壁溝）**全周する。幅23～26cm、深さ7cm。**（遺物出土状況）**少量、散在。**（遺物）**土師器甕CⅠ。**（時期）**不明。

第356号住居址　（第87・259図、図版52・131）

（位置）A18・19B21グリッド。**（重複）**414号住と重複。414号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－81°－E。**（規模）**4.05m×3.50m。**（覆土）**床面より浮いた状態で礫が散乱。**（竈）**東竈。東壁の中央よりも南寄り。焼土はやや顕著。規模1.30m×1.05m。深さ21cm。**（床）**11.85㎡。深さ47cm。標高387.07m。床面は堅い。**（壁溝）**全周する。幅18～28cm、深さ7cm。**（遺物出土状況）**床面西側に散在。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・甕A・C、須恵器高台坏A・蓋A・壺、棒状鉄製品。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期？。

第357号住居址　（第88・259図、図版52・131）

（位置）A16B23グリッド。**（重複）**321・411号住、7号溝と重複。411号住、7号溝より古く、321号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－12°－W。**（規模）**3.40m×3.50m。**（竈）**東竈。中央わずかに南寄り。焼土はやや顕著。規模1.07m×0.85m。深さ15cm。**（床）**10.64㎡。深さ42cm。標高386.83m。南・東壁はやや不明瞭。床面から10数cm浮上して焼土ブロックが存在する。**（壁溝）**全周する。幅12～25cm、深さ6cm。**（遺物出土状況）**南壁付近に分布。**（遺物）**土師器坏A・小型甕A・皿、黒色土器鉢、灰釉陶器皿。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第358号住居址　（第88・259図、図版53・131）

（位置）A15・16B22・23グリッド。**（重複）**300・334号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸長方形。N－4°－W。**（規模）**3.60m×4.80m。**（竈）**北竈。北壁中央わずかに東寄り。焼土は顕著。規模1.22m×0.95m。深さ18cm。**（床）**13.62㎡。深さ52cm。標高386.57m。竈前面から西側にかけて礫が集中。東南コーナー付近を除き、床面は堅い。**（壁溝）**全周する。幅17～30cm、深さ6cm。**（遺物出土状況）**散在。**（遺物）**土師器坏A、甕D、須恵器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅱ期。

第359号住居址　（第88・260図、図版53）

（位置）A17・18B24・25グリッド。**（重複）**294・348号住、38号掘立と重複。294号住、38号掘立より古く、348号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－73°－E。**（規模）**2.75m×2.80m。**（竈）**東竈。中央やや南寄り燃焼部内に礫が崩落し袖石などは残っていないが、袖石の掘り方と支脚ピットがある。焼土は顕著。規模0.95m×0.75m。深さ7cm。**（床）**6.37㎡。深さ23cm。標高387.19m。東半分は堅いが、西半分は砂質で不良。西壁も不明瞭である。**（壁溝）**全周する。幅23～26cm、深さ5cm。北壁は礫層が露出する。**（遺物出土状況）**竈火床内などに少量散在。**（遺物）**土師器坏A・鉢AI、須恵器坏。**（時期）**宮ノ前IX期。

第360号住居址　（第88・260図、図版53・131）

（位置）A17B22・23グリッド。**（重複）**295・296号住、54号掘立と重複。両住居址より古く、掘立より新しい。**（形状）**隅丸長方形か。N－7°－W。**（規模）**4.85m×4.05m。**（覆土）**竈北側に直径5～15cm大の礫が集まる。**（竈）**東竈。東壁南寄り。焼土は顕著。規模0.85m×0.85m。深さ16cm。**（床）**推定面積17.4㎡。深さ45cm。標高386.88m。竈周辺部はやや堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅21～35cm、深さ5cm。**（遺物出土状況）**竈燃焼部内などに散在。**（遺物）**土師器坏D（灯明具か）・甕C・小型甕C。**（時期）**不明。

第361号住居址　（第89・260図、図版53・131）

（位置）A17B21・22グリッド。**（重複）**268・313号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。N－78°－E。**（規模）**3.70m×3.60m。**（竈）**東竈。東壁中央南寄り。袖石は残存する。焼土は顕著。規模1.00m×0.65m。深さ7cm。**（床）**11.45㎡。深さ51cm。標高386.77m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅18～27cm、深さ5cm。**（遺物出土状況）**竈燃焼部内を中心に散在する。**（遺物）**土師器高台坏（墨書あり）・甕CII・CIV、須恵器坏。**（時期）**宮ノ前III期？。

第362号住居址　（第89・260図、図版53）

（位置）A18B21グリッド。**（重複）**267・279号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸方形か。N－12°－W。**（規模）**？m×4.20m。**（竈）**石組み。北竈。北壁中央やや東寄り。袖石は良く残る。燃焼部内に礫が崩落する。焼土は顕著。規模0.85m×0.60m。深さ19cm。**（床）**面積不明。深さ20cm。標高387.22m。竈周辺は堅固。**（壁溝）**全周する。幅17～24cm、深さ6cm。**（遺物出土状況）**竈前面に散布。**（遺物）**土師器甕CI。**（時期）**不明。

第363号住居址　（第89・260図、図版53）

（位置）A18B22グリッド。**（重複）**7号溝と重複。7号溝より古い。また床面中央に直径1.8～2.0mの井戸による撹乱がある。**（形状）**隅丸方形。N－82°－E。**（規模）**3.50m×3.20m。**（覆土）**床面直上ないし数cm浮いて、竈前面に礫が散乱。**（竈）**東竈。東壁南寄り。焼土は顕著。規模0.80m×0.75m。深さ18cm。**（床）**9.37㎡。深さ24cm。標高387.32m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅23～28cm、深さ5cm。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**須恵器甕・長頸壷C。**（時期）**不明。

第364号住居址　（第89・261図、図版53・131・132）

（位置）A19B27グリッド。**（重複）**365号住と重複。365号住より新しい。**（形状）**隅丸長方形。N－83°－E。**（規模）**3.70m×2.80m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央。右袖石を残して崩落する。焼土は顕著。規模1.05m×0.70m。深さ8cm。**（床）**9.25㎡。深さ27cm。標高387.4m。竈前面は堅いが、西側は軟弱。**（壁溝）**全周する。幅17～22cm、深さ5cm。**（遺物出土状況）**やや多くの遺物が散在。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿・甕A・鉢AI、黒色土器坏、灰釉陶器皿・長頸壷、土錘。**（時期）**宮ノ前IX期。

第365号住居址　（第90・261図、図版53・132）

（位置）A18・19B27グリッド。**（重複）**303・364号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。N－73°－E。**（規模）**3.85m×3.95m。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄り。袖石は全くない。焼土は顕著。規模1.23m×1.08m。深さ8cm。**（床）**14.36㎡。深さ27cm。標高387.32m。全体に軟弱、不明瞭。竈南側に平石。また礫も散在する。**（壁溝）**全周する。幅15～20cm、深さ8cm。西壁際は礫層が露出。**（遺物出土状況）**竈南側、東南コーナー付近にやや多い。**（遺物）**土師器坏A（灯明具か）・皿・甕A、羽釜A、黒色土器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第366号住居址　（第90・261図、図版54・132）

（位置）A18B27グリッド。**（重複）**337・394号住と重複。前者より古く、後者より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－7°－W。**（規模）**5.20m×4.80m。**（竈）**337号住の柱穴に切られ不明。**（床）**23.8㎡。深さ15cm。標高387.37m。堅固な箇所が散在する。**（壁溝）**東壁の北半分を除き全周するが、全体に不明瞭。幅15～23cm、深さ9cm。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**黒色土器坏、須恵器甕。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期？。

第367号住居址　（第90・262図、図版54・132）

（位置）A18B23・24グリッド。**（重複）**140・139・283号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。N－3°－W。**（規模）**2.90m×3.25m。**（竈）**石組み。北竈。北壁中央やや西寄り。両袖石は残存するが、一部内部に倒れ込む。支脚石あり。焼土顕著。規模1.00m×0.70m。深さ8cm。**（床）**推定8.50㎡。深さ33cm。標高387.20m。竈前面は堅固。焼土層が東側床面上に分布する。**（壁溝）**全周すると思われる。幅20～30cm、深さ5cm。西壁は不良。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**土師器坏A・皿。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第368号住居址　（第90・262図、図版54・132）

（位置）A17B28グリッド。**（重複）**332号住と重複。332号住より古い。東側は調査区外に延びる。**（形状）**隅丸方形か。N－10°－W。**（規模）**3.60m×？m。**（竈）**不明。**（床）**面積不明。深さ26cm。標高387.12m。**（壁溝）**全周すると思われる。幅20～27cm、深さ4cm。**（遺物出土状況）**西壁溝上、中央付近に少量分布。**（遺物）**土師器坏A、灰釉陶器椀。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第369号住居址　（第91・262図、図版54・132）

（位置）A17B23・24グリッド。**（重複）**335・345・350号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**隅丸方形か。N－7°－W。**（規模）**？m×4.90m。**（竈）**不明。北壁にないところから、東竈か。**（床）**面積不明。深さ33cm。標高386.98m。中央付近は堅固だが、周辺は砂利質で不良。**（壁溝）**全周する。幅12～36cm、深さ8cm。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**黒色土器坏（墨書あり）、土師器皿。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第370号住居址　（第91・262図、図版54・132）

（位置）A18B21グリッド。**（重複）**376号住と重複。376号住より古い。撹乱が東北コーナー付近に入る。**（形状）**隅丸方形。N－7°－W。**（規模）**3.15m×3.50m。**（竈）**不明（北竈の可能性あり）。**（床）**推定10.45㎡。深さ2～3cm。標高387.4m。床面は削られて欠失する。床面中央は堅固だが、南側は軟弱。北壁に炭化材・灰あり。**（壁溝）**全周すると思われる。幅10～18cm、深さ5cm。壁は立ち上がりがほとんどない。**（遺物出土状況）**北東コーナー付近に集中。**（遺物）**土師器坏A（線刻あり）・小型甕A、須恵器坏（線刻あり）・甕、黒色土器坏、釘。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期。

第371号住居址　（第91・263図、図版54・133）

（位置）A20B28グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸方形か。N－2°－W。南側が調査区外に延びる。**（規模）**？

m×3.30m。**（竈）**不明。東竈か。**（床）**面積不明。深さ23cm。標高387.67m。床は軟弱。**（壁溝）**全周する。幅14～23cm、深さ５cm。**（遺物出土状況）**散在する。**（遺物）**土師器坏Ａ（墨書あり）・甕、須恵器壷。**（時期）**不明。

第372号住居址　（第91・263図、図版54・133）

（位置）Ａ19Ｂ22グリッド。**（重複）**373号住と重複。373号住より古い。**（形状）**隅丸方形か。Ｎ－76°－Ｅ。**（規模）**4.30m×？m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。袖石は残存。焼土は顕著。規模1.05m×0.80m。深さ10cm。**（床）**面積不明。深さ36cm。標高387.28m。竈前面に多量の礫が散乱。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅17～27cm、深さ５cm。**（遺物出土状況）**竈周辺部から主に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・鉢Ｂ・甕Ｃ、須恵器坏高台坏Ｂ・甕。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期。

第373号住居址　（第91・264図、図版54）

（位置）Ａ19Ｂ22グリッド。**（重複）**372･399号住、47号掘立、７・８号溝と重複。両溝より古く、住居址、掘立より新しい。**（形状）**隅丸方形か。Ｎ－75°－Ｅ。**（規模）**4.20m×3.80m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄りに位置する。袖石は残存し、燃焼部内に天井石が落ち込む。焼土は顕著。規模1.30m×0.55m。深さ11cm。**（床）**12.05㎡。深さ36cm。標高387.24m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅15～28cm、深さ５cm。**（遺物出土状況）**竈内から主に出土。**（遺物）**土師器甕ＣⅡ。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期？。

第374号住居址　（第92・264図、図版55・133）

（位置）Ａ18Ｂ20グリッド。**（重複）**11号溝と重複。11号溝より古い。南壁付近は撹乱を受ける。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－12°－Ｗ。**（規模）**3.35m×3.25m。**（竈）**石組み。北竈。北壁ほぼ中央に位置する。両袖石が残存。焼土は顕著。竈内に土器片が多い。骨片もあり。焼土は顕著。規模1.05m×0.80m。深さ12cm。**（床）**9.49㎡。深さ15cm。標高387.28m。中央は堅固。**（壁溝）**全周する。幅17～20cm、深さ５cm。**（遺物出土状況）**竈内から主に出土。**（遺物）**土師器甕ＣⅤ・小型甕Ａ・球胴甕。**（時期）**宮ノ前Ⅱ期？。

第375号住居址　（第92・264図、図版55・133）

（位置）Ａ18・19Ｂ23グリッド。**（重複）**390号住と406号住重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－79°－Ｅ。**（規模）**？m×2.85m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや北寄りに位置する。両袖石が残存。焼土は顕著。規模1.20m×0.70m。深さ10cm。**（床）**面積不明。深さ45cm。標高387.23m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**全周すると思われる。幅15～20cm、深さ８cm。**（遺物出土状況）**竈内から主に出土。**（遺物）**土師器坏Ｂ・甕Ｂ、棒状鉄製品・板状鉄製品。**（時期）**宮ノ前Ⅱ期？。

第376号住居址　（第92・265図、図版55・133）

（位置）Ａ18Ｂ20・21グリッド。**（重複）**370号住と重複。370号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－78°－Ｅ。**（規模）**3.45m×3.40m。**（覆土）**竈周辺、床面直上２～10cm付近に礫が散乱。**（竈）**石組みと思われる。東竈。東壁中央やや南寄り。両袖の位置に礫が残存するが、袖石ではない。焼土はやや顕著。規模0.95m×0.68m。深さ10cm。**（床）**10.18㎡。深さ37cm。標高387.10m。床面は堅固。**（壁溝）**全周する。幅22～27cm、深さ５cm。壁は良好。**（遺物出土状況）**竈内に土器片が集中する。**（遺物）**須恵器坏Ａ、土師器甕Ａ。**（時期）**宮ノ前Ⅴ期？。

第377号住居址　（第92・265図、図版55・134）

（位置）Ａ19・20Ｂ22・23グリッド。**（重複）**47号掘立、399号住と重複。前者より古く、後者より新しい。**（形状）**隅丸長方形。Ｎ－86°－Ｅ。**（規模）**4.50m×4.10m。**（竈）**東竈。東壁ほぼ中央。石組みと思われるが石は残らない。支脚石が残存。焼土は顕著。規模1.00m×0.80m。深さ16cm。**（床）**16.53㎡。深さ36cm。標高387.46m。竈

周辺に礫が集中する。床は堅固。**（壁溝）**全周する。幅15～30cm、深さ９cm。**（遺物出土状況）**東半分に多く散布。竈内、左袖付近に灰釉陶器壷の胴下半部が遺存。**（遺物）**土師器坏Ａ・甕ＣＩ、須恵器坏・高台坏Ａ・甕・鉢Ｂ・高坏、棒状鉄製品。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期。

第378号住居址　（第93・266図、図版55・134）

（位置）Ａ19Ｂ23・24グリッド。**（重複）**132･155号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸長方形。Ｎ－82°－Ｅ。**（規模）**4.00m×3.75m。**（覆土）**礫が少量散乱する。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄り。右袖石が残存する。焼土はやや顕著。規模1.20m×0.90m。深さ13cm。**（床）**12.05㎡。深さ45cm。標高387.34m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅22～40cm、深さ５cm。**（遺物出土状況）**竈内を中心に散布。**（遺物）**土師器甕ＣＩ・ＣⅡ、須恵器坏・高台坏Ａ（墨書あり）・甕。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期。

第379号住居址　（第93・266図、図版55・134）

（位置）Ａ16・17Ｂ24・25グリッド。**（重複）**288･349号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－83°－Ｅ。**（規模）**3.45m×3.05～3.50m。**（竈）**東竈。東壁中央南寄り。袖石はない。焼土はやや顕著。規模1.05m×0.80m。深さ10cm。**（床）**推定面積10.25㎡。深さ12cm。標高387.00m。竈前面に灰・炭が堆積。中央付近は堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅17～28cm、深さ５cm。北壁は不良。**（遺物出土状況）**床面中央付近に散在。竈内に土器片。また上面から鉄鏃出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・高台坏・皿（墨書あり）・甕Ａ・小型甕Ａ、須恵器甕、鉄鏃。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期。

第381号住居址　（第93図、図版55・134）

（位置）Ａ17Ｂ25グリッド。**（重複）**284･349号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**不明。Ｎ－18°－Ｗ。**（規模）**不明。**（竈）**不明。**（床）**面積不明。深さ22cm。標高387.12m。残存部は堅固。**（壁溝）**床面残存部では全周する。幅25～30cm、深さ５cm。壁は良好。**（遺物出土状況）**北東コーナー付近から少量出土。**（遺物）**土師器坏Ｂ（線刻あり）・甕Ｂ。**（時期）**宮ノ前Ⅱ期？。

第382号住居址　（第93図、図版56・135）

（位置）Ａ17Ｂ20グリッド。**（重複）**南東コーナーから中央付近が電柱の支線で撹乱を受ける。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－80°－Ｅ。**（規模）**3.00m×3.05m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央やや南寄り。両袖石の一部残存。焼土は顕著。規模1.00m×0.70m。深さ14cm。**（床）**8.06㎡。深さ20cm。標高387.15m。中央付近に、床面よりもやや浮いて焼土ブロックが広く堆積する。北半分の床は堅固。**（壁溝）**全周するが、壁、壁溝ともに不明瞭。幅18～24cm、深さ８cm。**（遺物出土状況）**竈内から少量出土。**（遺物）**土師器鉢Ｄ、棒状鉄製品。**（時期）**不明。

第383号住居址　（第93・267図、図版56・135）

（位置）Ａ18Ｂ19・22グリッド。**（重複）**375･390号住、50号掘立、８号溝と重複。８号溝より古く、375･390号住、50号掘立より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－81°－Ｅ。**（規模）**3.45m×3.40m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央よりも南寄り。竈内に石組みが崩落するが、両袖石の一部は残る。焼土は顕著。規模1.10m×0.80m。深さ10cm。**（床）**9.82㎡。深さ52cm。標高387.12m。全体に堅固。**（壁溝）**全周する。幅25～34cm、深さ８cm。壁は良好。**（遺物出土状況）**竈内と南壁中央付近に集中。**（遺物）**土師器坏Ａ・甕ＣＩ・小型甕Ｃ、須恵器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期。

第384号住居址　（第94・268図、図版56・135）

（位置）Ａ19Ｂ25グリッド。**（重複）**39号掘立と重複。39号掘立より新しい。**（形状）**隅丸長方形。Ｎ－88°－Ｅ。**（規模）**4.50m×3.60m。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄り。燃焼部内に地山の礫が露出する。焼土は顕著。規模

1.00m×0.85m。深さ13cm。**（床）**14.73㎡。深さ13cm。標高387.73m。礫散在。竈前面に炭・灰が散布。床面は堅固。**（壁溝）**北東コーナーを除き全周する。幅18～25cm、深さ７cm。**（遺物出土状況）**全体的に散在。**（遺物）**土師器坏Ａ（墨書あり）、須恵器甕、縄文時代土製円板・耳栓。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第385号住居址　（第94・268図、図版56・135）

（位置）Ａ21Ｂ28グリッド。**（重複）**80･412号住、13号溝と重複。住居址より新しく、溝より古い。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－77°－Ｅ。**（規模）**3.65m×3.75m。**（覆土）**床面上、南半分に礫が散在。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー寄り。石組みかと思われるが、袖石はほとんど残らない。焼土はやや顕著。規模1.10m×0.80m。深さ12cm。**（床）**11.62㎡。標高387.72m。深さ38cm。**（壁溝）**全周する。幅18～32cm、深さ38cm。南壁は不明瞭。北壁は良好。**（遺物出土状況）**中央付近に散在。**（遺物）**土師器皿、灰釉陶器椀、須恵器坏・鉢Ｃ（両須恵器は混入品だろう）、紡錘車。**（時期）**宮ノ前Ⅺ期。

第386号住居址　（第94図、図版56）

（位置）Ａ21Ｂ29グリッド。**（重複）**250･388･343号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**重複のため全形は不明だが、隅丸方形か。Ｎ－85°－Ｅ。**（規模）**？m×3.50m。**（覆土）**床面直上約３cm浮いて礫あり。**（竈）**東竈。東壁南寄り。竈前面に礫が散在するが、袖石など石組みは残存しない。焼土は顕著。規模0.85m×0.70m。深さ５cm。**（床）**面積不明。深さ10cm。標高387.73m。堅固な箇所が散在的に残存。**（壁溝）**全周すると思われるが、全体に不明瞭。幅18cm、深さ５cm。**（遺物出土状況）**特になし。**（遺物）**復元実測できる遺物なし。**（時期）**不明。

第387号住居址　（第94・268図、図版56・135）

（位置）Ａ16Ｂ24・25グリッド。**（重複）**288･410号住と重複。両住居址より古い。東・南壁付近のみ残存。**（形状）**隅丸長方形か。Ｎ－13°－Ｗ。**（規模）**3.15m×4.10m。**（竈）**不明。北竈か。**（床）**推定11.52㎡。深さ25cm。標高386.78m。北東コーナー付近では地山の黄色ロームが露出する。**（壁溝）**全周するが良好ではない。幅13～28cm、深さ４cm。**（遺物出土状況）**東南コーナー付近に散布。**（遺物）**土師器坏Ｂ、須恵器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅱ期。

第388号住居址　（第95図、図版56）

（位置）Ａ20・21Ｂ29グリッド。**（重複）**314･338号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸長方形。Ｎ－76°－Ｅ。**（規模）**4.70m×4.35m。**（竈）**東北コーナー。規模1.00m×1.00m。深さ10cm。微量の焼土粒子を含むのみで、竈でない可能性がある。**（床）**推定19.08㎡。深さ19cm。標高387.72m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**東壁の一部を除き全周する。幅18～28cm、深さ８cm。**（遺物出土状況）**特になし。**（遺物）**復元実測できる遺物なし。**（時期）**不明。

第389号住居址　（第95・268図、図版56・135）

（位置）Ａ18Ｂ25グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－80°－Ｅ。**（規模）**2.95m×2.75m。**（覆土）**床面上に礫散乱。南東コーナー付近に特に集中。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄り。竈内に礫が散乱するが石組みのものか否か不明。焼土は顕著。規模0.85m×0.85m。深さ13cm。**（床）**6.87㎡。深さ17cm。標高387.48m。全体に堅固。**（壁溝）**全周する。幅15～25cm、深さ５cm。**（遺物出土状況）**竈内およびその周辺部から主に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・甕Ａ。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第390号住居址　（第95・268図、図版57・135）

（位置）Ａ18・19Ｂ22グリッド。**（重複）**383号住と重複。383号住より古い。**（形状）**隅丸方形か。Ｎ－80°－Ｅ。**（規模）**？m×3.10m。**（竈）**東竈。東壁中央南寄り。石組みはない。焼土は顕著。規模1.20m×0.85m。深さ15cm。

煙道が長く延びる。幅25cm。長さ85cm。深さ７cm。**（床）**面積不明。深さ49cm。標高387.18m。**（壁溝）**全周すると思われる。幅22～32cm、深さ８cm。**（遺物出土状況）**東南コーナー付近に少量散在。**（遺物）**土師器坏Ａ・甕ＣⅡ、須恵器高台坏Ｂ。**（時期）**宮ノ前Ⅲ期？。

第391住居址　（第95・268図、図版57・135）

（位置）Ａ17Ｂ25グリッド。**（重複）**169･285･299号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**隅丸方形か。Ｎ－５°－Ｗ。**（規模）**不明。**（竈）**不明。**（床）**面積不明。深さ20cm。標高387.29m。**（壁溝）**床残存部では全周するが不明瞭。幅15～25cm、深さ５cm。壁は不良。**（遺物出土状況）**西壁際に散在。**（遺物）**土師器皿、須恵器坏・高台坏、灰釉陶器皿、竈形土器。**（時期）**宮ノ前Ⅳ期、Ⅸ期の混在。

第392号住居址　（第95・269図、図版57・135）

（位置）Ａ17・18Ｂ27・28グリッド。**（重複）**316号住と重複。316号住より古い。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－66°－Ｅ。**（規模）**3.75m×3.70m。**（竈）**東竈。東壁ほぼ中央。袖石は全くない。焼土は顕著。規模1.05m×0.80m。深さ20cm。**（床）**推定12.0㎡。深さ15cm。標高387.33m。床は堅固。**（壁溝）**全周する。幅16～25cm、深さ５cm。**（遺物出土状況）**散在する。**（遺物）**土師器坏Ａ・皿、緑釉陶器耳皿。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第393号住居址　（第96・269図、図版57・135）

（位置）Ａ15Ｂ20・21グリッド。**（重複）**平安期の280号住に一部貼られる。**（形状）**円形。主軸方向は不明。**（規模）**径4.32m×4.50m。**（炉）**中央に土器底部あり。炉体土器の可能性があったが未実測で取り上げている。**（床）**全体に軟弱である。**（壁溝）**確認できず。**（柱穴）**壁際にピットが11個巡るが、柱穴かどうかは疑わしい。**（遺物出土状況）**床面中央に十三菩提式期の土器底部あり。**（遺物）**深鉢片。**（時期）**縄文時代前期末（十三菩提式期）。

第394号住居址　（第96・269図、図版57・136）

（位置）Ａ18Ｂ27グリッド。**（重複）**421号住の炉に隣接するが同一の住居の可能性も有り。**（形状）**円形の範囲に敷石が分布するが判然としない。主軸方向不明。**（規模）**南北約5.00mを測るがはっきりしない。**（炉）**住居ほぼ中央に埋設土器有り。正位で後期初頭の土器で炉体土器の可能性有り。焼土はみられない。**（床）**敷石。柱穴およびその他の施設については不明。**（遺物出土状況）**炉体土器以外特になし。**（遺物）**深鉢。**（時期）**縄文時代後期初頭（称名寺式期）。

第395号住居址　（第96・269・270図、図版57・136）

（位置）Ａ19Ｂ22グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸長方形。Ｎ－84°－Ｅ。**（規模）**4.25m×3.15m。**（覆土）**礫が床面直上～床面上２cm浮いて散乱する。**（竈）**東竈。東壁中央南寄り。両袖は良好に残る。焼土は顕著。規模1.15m×0.75m。深さ８cm。**（床）**11.3㎡。深さ62cm。標高387.06m。竈前面は非常に堅固。**（壁溝）**全周する。幅20～30cm、深さ６cm。**（遺物出土状況）**竈内に土器片が多い。**（遺物）**土師器甕ＣⅤ、須恵器坏・蓋Ａ・甕、棒状鉄製品。**（時期）**宮ノ前Ⅴ期。

第396号住居址　（第97・270図、図版57・136）

（位置）Ａ25Ｂ27グリッド。**（重複）**49号掘立と重複。49号掘立より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－80°－Ｅ。**（規模）**4.15m×3.60m。**（竈）**石組み。東竈。東壁中央北寄り。両袖石および支脚石が残存。燃焼部内に石組みの崩落礫が混入する。焼土はやや顕著。規模1.15m×1.00m。深さ11cm。**（床）**13.19㎡。深さ20cm。標高388.55m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅15～28cm、深さ６cm。**（遺物出土状況）**竈内から主に出土。**（遺物）**土師器坏Ｂ・甕ＣⅠ・小型甕Ａ・Ｃ、須恵器坏・短頸壷、弥生時代壷片。**（時期）**宮ノ前Ⅱ期？。

第397号住居址　（第97・270図、図版58・136）

（位置）A18B27グリッド。**（重複）**303･365号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸方形か。N－82°－E。**（規模）**？m×3.95m。**（覆土）**床面上に礫が散乱。**（竈）**東竈。東壁中央南寄り。礫が竈内に散乱するが袖石など石組みは残存しない。焼土はやや顕著。規模0.95m×1.00m。深さ７cm。**（床）**面積不明。深さ35cm。標高387.32m。竈周辺の一部は堅固。北側に床面よりやや浮いて灰・炭化物層あり。**（壁溝）**全周する。幅15～30cm、深さ10cm。**（遺物出土状況）**竈内から主に出土するが、量は少ない。**（遺物）**土師器坏A・甕A。**（時期）**宮ノ前IX期。

第398号住居址　（第97・271図、図版58・136）

（位置）A25B27・28グリッド。**（重複）**なし。**（形状）**隅丸方形。N－77°－E。**（規模）**3.55m×3.50m。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー寄り。袖石は残っていないが支脚状の石がある。焼土混合土層の厚さ12cm。火床内には礫が混入するとともに地山の礫が露出する。規模1.10m×0.85m。深さ13cm。**（床）**推定11.06㎡。深さ20cm。標高388.52m。地山の礫や混入礫が極めて多く、床面が不明瞭である。**（壁溝）**全周する。幅17～24cm、深さ６cm。南西コーナー付近の壁は不明瞭。**（遺物出土状況）**竈内を中心に全体に散在。**（遺物）**須恵器坏（線刻あり）・蓋A・鉢A・B・甕・壷、土師器甕CI。**（時期）**宮ノ前IV期？。

第399号住居址　（第97・271図、図版58・136）

（位置）A19・20B22グリッド。**（重複）**373･377号住、47号掘立、８号溝と重複。いずれの遺構より古い。**（形状）**隅丸方形か。N－５°－W。**（規模）**2.60m×?m。**（竈）**不明。東竈か。**（床）**面積不明。深さ28cm。標高387.42m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**全周する。幅18～32cm、深さ７cm。**（遺物出土状況）**微量。**（遺物）**須恵器坏。**（時期）**不明。

第400号住居址　（第97・271図、図版58・136）

（位置）A20B27グリッド。**（重複）**324・347号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。N－78°－E。**（規模）**3.05m×3.45m。**（竈）**東竈。東壁中央南寄り。石組みはない。焼土は顕著。規模1.05m×1.00m。深さ20cm。**（床）**推定8.96㎡。深さ27cm。標高387.8m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅15～25cm、深さ７cm。壁は不明瞭。**（遺物出土状況）**竈内と床面上に散在。**（遺物）**土師器坏A・皿・甕A、黒色土器坏。**（時期）**宮ノ前VIII期。

第401号住居址　（第98図、図版58）

（位置）A20B23グリッド。**（重複）**62･142･143号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**不明。N－77°－E。**（規模）**4.12m×？m。**（竈）**不明。東竈か。**（床）**面積不明。深さ14cm。標高387.76m。堅固な箇所が散在的に残存。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅17～22cm、深さ４cm。**（遺物出土状況）**覆土内から微量出土。**（遺物）**土師器坏A・小型甕E。**（時期）**宮ノ前IX期。

第402号住居址　（第98・271図、図版58・136）

（位置）A24B25・26グリッド。**（重複）**38号住と重複。38号住より古い。**（形状）**隅丸方形。N－16°－W。**（規模）**3.10m×2.80m。**（竈）**北竈。北壁西寄り。竈内に石があるが、袖石ではない。焼土はやや顕著。規模1.20m×0.80m。深さ５cm。**（床）**7.35㎡。深さ27cm。標高388.32m。堅い。ほぼ全面に灰・炭がひろがる。また竈前面を中心に焼土が分布。**（壁溝）**全周する。幅18～25cm、深さ５cm。壁は良好。**（遺物出土状況）**竈内とその周辺を中心に少量散在。**（遺物）**土師器坏A・皿・甕A・小型甕A。**（時期）**宮ノ前IX期。

第403号住居址　（第98・271図、図版58・136）

（位置）A25B26グリッド。**（重複）**38号住と重複。38号住より古い。**（形状）**隅丸方形か。N－12°－W。**（規模）**？m×2.35m。**（竈）**不明。東竈か。**（床）**面積不明。深さ18cm。標高388.45m。全体に軟弱。北壁寄りの床上に灰・

炭化物層があるが、竈ではない。**（壁溝）**全周するが、全体に不明瞭。幅18～25cm、深さ５cm。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**土師器坏Ａ（墨書あり）・皿。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第404号住居址　（第98・272図、図版58）

（位置）Ａ24・25Ｂ27・28グリッド。**（重複）**110号住と重複。110号住より古い。**（形状）**隅丸長方形。Ｎ－83°－Ｅ。**（規模）**4.75m×3.65m。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄り。小礫が多く混入し、地山の礫層が露出する。焼土はやや顕著。規模1.20m×1.10m。深さ17cm。**（床）**推定16.18㎡。深さ８cm。標高388.53m。礫層が露出する。床上には焼土・炭化物層がひろがる。**（壁溝）**全周する。幅12～20cm、深さ８cm。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**土師器甕Ｂ・球胴甕。**（時期）**宮ノ前Ⅰ～Ⅱ期。

第405号住居址　（第98・272図、図版59）

（位置）Ａ22Ｂ27・28グリッド。**（重複）**78･156号住、14号溝と重複。いずれの遺構より古い。**（形状）**隅丸方形か。Ｎ－82°－Ｅ。**（規模）**不明。**（竈）**東竈。袖石はない。焼土層はなく、焼土粒子を少量含む。規模0.80m×0.65m。深さ13cm。**（床）**面積不明。深さ18cm。標高388.12m。中央付近は堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅15～18cm、深さ５cm。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**土師器坏Ａ（線刻あり）、須恵器高台坏。**（時期）**不明。

第406号住居址　（第99・272図、図版59）

（位置）Ａ19Ｂ23グリッド。**（重複）**375号住、８号溝と重複。375号住より新しく、８号溝より古い。**（形状）**隅丸方形か。Ｎ－98°－Ｅ。**（規模）**2.55m×2.28m。**（竈）**東竈。東壁ほぼ中央。竈内に礫が崩落し、両袖石の一部が残存する。焼土は顕著。規模0.80m×0.70m。深さ18cm。**（床）**推定面積5.30㎡。深さ17cm。標高387.50m。全体にわたって堅固。**（壁溝）**全周する。幅12～15cm、深さ５cm。**（遺物出土状況）**覆土上層から微量出土。**（遺物）**土師器坏Ａ。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期。

第407号住居址　（第99・272図、図版59）

（位置）Ａ15Ｂ22グリッド。**（重複）**312･317･325･331号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－72°－Ｅ。**（規模）**3.25m×3.20m。**（竈）**東竈。東壁ほぼ中央。掘り方のみ残存。純粋な焼土はみられないが、焼土を多量に含む混合土が顕著。規模0.90m×0.80m。深さ８cm。**（床）**9.18㎡。深さ18cm。標高386.42m。全体に堅固。**（壁溝）**全周する。幅18～23cm、深さ６cm。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**須恵器壷？。**（時期）**不明。

第408号住居址　（第99・272図、図版59・137）

（位置）Ａ21Ｂ27グリッド。**（重複）**平安期の133･178号住等に切られる。**（形状）**主体部はの円形。張り出し部をもち、正位の埋甕１個を埋設する。Ｎ－25°－Ｗ。**（規模）**長軸7.15（主体部は6.00m）×6.00m。**（覆土）**全体に礫が散乱し、敷石状ではない。**（炉）**床面中央部の炉の位置に径1.00m×1.30m、深さ６cmを測る浅い落ち込みあり。焼土はみられないが炉の可能性が高い。**（床）**全体に軟弱で明確ではない。壁際は縁石にそって鉄平石による敷石が一部有り。深さ10～15cm。**（壁溝）**なし。壁際に配石・縁石をもつ。ほぼ壁にそって円形に巡るらしい。東西壁側が良好に残る。**（柱穴）**確かなものはないが、柱穴状の落ち込みが主体部に７箇所、張り出し部に２箇所有り。**（その他の施設）**埋甕は入口状張り出し部２柱穴間にあり。**（遺物出土状況）**少量の破片が散在。**（遺物）**入口部右脇に丸石状の自然石。蜂ノ巣石。埋甕。**（時期）**縄文時代後期（堀之内式期）。

第409号住居址　（第100・273図、図版59）

（位置）Ａ15Ｂ22・23グリッド。**（重複）**176･192･223･322号住と重複。176･192･223号住より古く、322号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。Ｎ－85°－Ｅ。**（規模）**4.30m×4.10m。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄り。掘り方の

み残存。焼土はあまり顕著でない。規模0.70m×0.80m。深さ7cm。**（床）**15.42㎡。深さ20cm。標高386.4m。全体に堅固。**（壁溝）**全周する。幅18～25cm、深さ5cm。壁は良好。**（遺物出土状況）**多くの遺物が床面南半分に散在。**（遺物）**土師器坏A・甕A、須恵器蓋A・凸帯壷、土錘。**（時期）**宮ノ前Ⅶ期。

第410号住居址　（第100・273図、図版59）

（位置）A16B25グリッド。**（重複）**288･387号住と重複。前者より古く、後者より新しい。**（形状）**隅丸方形か。N－84°－E。**（規模）**？m×3.40m。**（竈）**東竈。東壁ほぼ中央。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.90m×0.80m。深さ16cm。**（床）**面積不明。深さ15cm。標高386.73m。床は全体に軟弱。**（壁溝）**全周する。幅15～20cm、深さ5cm。**（遺物出土状況）**竈内と周辺に少量集中。**（遺物）**土師器甕CⅠ、須恵器坏、棒状鉄製品。**（時期）**宮ノ前Ⅴ期?。

第411号住居址　（第100・273図、図版59）

（位置）A16B22・23グリッド。**（重複）**289･333･357号住と重複。289･357号住より古く、333号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－86°－E。**（規模）**3.25m×3.45m。**（竈）**東竈。東壁中央やや南寄り。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.85m×0.65m。深さ13cm。**（床）**10.06㎡。深さ13cm。標高386.69m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**全周する。幅15～23cm、深さ21cm。**（遺物出土状況）**微量散在。**（遺物）**土師器坏A。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期？。

第412号住居址　（第101・274図、図版60・137）

（位置）A20・21B28・29グリッド。**（重複）**80･318･338･385号住、13号溝と重複。いずれの遺構より古い。**（形状）**隅丸方形。N－82°－E。**（規模）**7.42m×8.12m。**（覆土）**残存する床面全体にわたって礫が散乱する。**（竈）**東竈。東壁ほぼ中央に位置する。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模1.83m×1.23m。深さ15cm。**（床）**推定47.1㎡。深さ27cm。標高387.60m。竈周辺部は特に堅固で、他も堅固な箇所が散在的に残存。**（壁溝）**全周すると思われる。幅17～27cm、深さ3～5cm。**（柱穴）**4箇所で確認。径0.90～1.50m、深さ約70cmを測る。柱痕も顕著。**（遺物出土状況）**竈内から主に出土。床面全体にも散在する。**（遺物）**土師器坏A（線刻あり）・坏D・甕CⅠ・小型甕B・C・球胴甕、須恵器坏（スス付着するものあり）・蓋A・甕・壷、釘か。なお、422号住に図示した縄文時代以外の土器群は本址に伴うものと思われる。**（時期）**宮ノ前Ⅱ～Ⅲ期？。

第413号住居址　（第101・274図、図版60・137）

（位置）A17・18B27・28グリッド。**（重複）**293･316･392号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。N－21°－W。**（規模）**5.00m×5.20m。**（竈）**不明。北壁の北西コーナー寄りに焼土が堆積することから、東竈かと思われる。**（床）**推定23.96㎡。深さ20cm。標高387.20m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**西・北・東壁の一部を欠く。全周。幅15～26cm、深さ6cm。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）・皿、黒色土器椀。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第414号住居址　（第102・274・275図、図版60・138）

（位置）A19B21グリッド。**（重複）**356号住と重複。356号住より古い。**（形状）**隅丸方形か。N－11°－W。**（規模）**？m×4.40m。**（竈）**不明。東竈か。**（床）**面積不明。深さ45cm。標高387.12m。軟弱。**（壁溝）**なし。**（遺物出土状況）**床面中央付近に散在。**（遺物）**土師器坏A・甕A・CⅠ、須恵器坏・高台坏B・甕、灰釉陶器平瓶（混入品か）。**（時期）**宮ノ前Ⅳ期？。

第415号住居址　（第102・275図、図版60・138）

（位置）A20B28グリッド。**（重複）**138号住と重複。138号住より古い。**（形状）**隅丸方形か。N－78°－E。**（規模）**？m×3.45m。**（竈）**東竈。東壁中央南寄り。掘り方のみ残存。焼土はやや顕著。規模0.90m×0.70m。深さ

6㎝。**（床）**面積不明。深さ28㎝。標高387.52m。竈前面に焼土が多く堆積。竈前面部はやや堅固。**（壁溝）**全周する。幅13～23㎝、深さ８㎝。壁は不良。**（遺物出土状況）**細片微量出土。**（遺物）**竈形土器。**（時期）**不明。

第416号住居址　（第102・275図、図版60・138）

（位置）A19B27グリッド。**（重複）**324号住と重複。324号住より古い。**（形状）**隅丸方形。N－81°－E。**（規模）**3.70m×3.20m。**（覆土）**床面中央から南壁にかけて礫が散在する。**（竈）**東竈。東壁中央南寄り。石組みは残存せず。焼土は顕著。規模0.85m×0.75m。深さ12㎝。**（床）**10.5㎡。深さ25㎝。標高387.55m。全体に堅固。**（壁溝）**全周する。幅15～32㎝、深さ５㎝。壁は良好。**（遺物出土状況）**竈内を中心に出土。**（遺物）**土師器坏A、須恵器坏・蓋A・壷・甕、鉄鏃。**（時期）**宮ノ前VI期？。

第417号住居址　（第102・276図、図版60・138）

（位置）A20B28グリッド。**（重複）**422号住を切るらしい。平安期の318・338・412号住に切られる。**（形状）**主体部は円形か。壁がないため不明。配石を入口部にもつ。柄鏡形住居か。N－25°－W。**（規模）**不明。**（炉）**主体部中央にコの字形の方形石組（囲）炉有り。入口部側のかき出し口に相当する炉石が１枚ない。0.30m×0.30m。深さ20㎝。**（床）**不明。南側は重複によって削平をうけ、地山の礫が露出する。**（壁溝）**なし。**（柱穴）**ピットは多いが柱穴状のものはない。**（その他の施設）**入口部配石（埋甕を伴う）。1.20m×1.10m、深さ22㎝。**（遺物出土状況）**埋甕は住居主体部へ向って傾斜。礫が口縁上にのる。**（遺物）**深鉢。**（時期）**縄文時代後期（堀之内式期）。

第418号住居址　（第103・276図、図版61）

（位置）A23B27・28グリッド。**（重複）**114・126号住と重複。両住居址より古い。**（形状）**隅丸方形。N－81°－E。**（規模）**2.75m×2.85m。**（竈）**東竈。東北コーナー寄り。石組みであろう。焼土はやや顕著。規模1.05m×1.00m。深さ15㎝。**（床）**推定7.10㎡。深さ13㎝。標高387.98m。全体に堅固。**（壁溝）**全周する。幅15～20㎝、深さ４㎝。壁溝・壁ともに良好。**（遺物出土状況）**微量散在。**（遺物）**須恵器甕。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期？。

第419号住居址　（第103・276図、図版61・138）

（位置）A16・17B20グリッド。**（重複）**420号住と重複。420号住より新しい。西側が調査区外にのびる。また撹乱を受ける。**（形状）**隅丸方形か。N－82°－E。**（規模）**？m×4.25m。**（竈）**東竈。中央北寄り。掘り方のみ残存。焼土は顕著。規模0.65m×0.75m。深さ10㎝。**（床）**面積不明。深さ17㎝。標高387.00m。全体に堅固。床面上やや浮いて、全体的に炭化物が分布する。**（壁溝）**全周する。幅18～23㎝、深さ７㎝。**（遺物出土状況）**東南隅付近に少量分布。**（遺物）**土師器坏A・高台坏。**（時期）**宮ノ前Ⅷ期。

第420号住居址　（第103・276図、図版61・138）

（位置）A16・17B20グリッド。**（重複）**11溝、419号住と重複。両遺構より古い。**（形状）**隅丸方形。N－87°－E。**（規模）**5.00m×4.40m。**（竈）**石組み。東竈。東壁ほぼ中央。両袖石は残る。焼土は顕著。規模1.20m×0.90m。深さ９㎝。袖石が床より浮いているので、本来の床はもう少し高かったと思われる。**（床）**18.02㎡。深さ43㎝。標高386.75m。全体にやや軟弱。**（壁溝）**全周する。幅25～45㎝、深さ５㎝。**（遺物出土状況）**少量散在。**（遺物）**土師器坏A（線刻あり）・甕A・小型甕C、須恵器蓋A・坏。**（時期）**宮ノ前VI期。

第421号住居址　（第96・276・277図、図版61）

（位置）A18B27グリッド。**（形状）**炉石と周辺のピットで１軒と考えるが、394号住の配石とも重複し、区別が難しい。主軸方向不明。**（規模）**不明。**（炉）**方形の石囲炉と思われるが、南北２辺の石のみ遺存し、２枚は欠如する。0.55m×0.70m。深さ30㎝。**（床）**不明。**（壁溝）**不明。**（柱穴）**明確な柱穴はない。**（遺物出土状況）**特に

なし。**（遺物）**特にないが、本住居址の時期とは食い違う肘金具出土。**（時期）**炉の形態から推察して縄文時代中期末～後期初頭か。

第422号住居址　（第102・277図、図版60・138）

（位置）A20・21B28・29グリッド。**（重複）**417号住に切られ北半分のわずかな部分しか残存しない。**（形状）**13個程の隅の丸い平石を利用して敷石を設ける。柄部は全く遺存しないが柄鏡形住居の可能性が高い。主軸方向不明だが、炉の向きからすると、住居全体は417号住と同じかもしれない。**（規模）**不明。**（炉）**炉の方向は417号住と同じらしい。0.45m×0.50m。深さ30cmを測り、やや小型の炉をもつ。**（床）**炉の東側に敷石をもつ。**（壁）**壁は北壁が一部残存。**（柱穴）**ピットは２個あるが、柱穴か否かは不明。**（遺物出土状況）**特になし。**（遺物）**当該期の遺物はほとんどなし。土師器および須恵器類も出土している。**（時期）**住居形態から推察して縄文時代後期（堀之内式期）か。

第423号住居址　（第103・277図、図版61・138）

（位置）A16B27グリッド。**（重複）**227・424・425号住と重複。227・424号住より古く、425号住より新しい。**（形状）**隅丸方形。N－71°－E。**（規模）**4.03m×3.84m。**（竈）**石組み。東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。両袖石の一部が残存し、袖石と支脚石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模1.05m×0.82m。深さ９cm。**（床）**推定13.0㎡。深さ40cm。標高386.88m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**全周すると思われる。幅15～28cm、深さ４～６cm。**（遺物出土状況）**竈内から少量出土。**（遺物）**土師器甕ＣＩ、円筒土器。**（時期）**不明。

第424号住居址　（第104・277図、図版61）

（位置）A16B27グリッド。**（重複）**220・227・423・425号住と重複。423号住より新しく、他の住居址より古い。**（形状）**不明。N－72°－E。**（規模）**？m×2.72m。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。両袖部と燃焼部に袖石と支脚石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模0.86m×0.80m。深さ17cm。**（床）**面積不明。深さ18cm。標高387.02m。竈前面部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅16～27cm、深さ５～７cm。**（遺物出土状況）**微量出土。**（遺物）**須恵器坏。**（時期）**不明。

第425号住居址　（第104・277図、図版61）

（位置）A16B27グリッド。**（重複）**227・423・424号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**隅丸方形か。N－68°－E。**（規模）**3.44m×？m。**（竈）**東竈。東壁南東コーナー近くに位置する。掘り方のみ残存。両袖部に袖石を据えたとみられるピットあり。焼土は顕著。規模1.07m×0.94m。深さ17cm。**（床）**面積不明。深さ５cm。標高387.01m。堅固な箇所が散在的に残存。**（壁溝）**一部に巡る。幅18～20cm、深さ４cm。**（遺物出土状況）**微量出土。**（遺物）**須恵器蓋Ａ。**（時期）**不明。

第426号住居址（第104図）

（位置）A15・16B29グリッド。**（重複）**148・151・157号住と重複。いずれの住居址より古い。**（形状）**不明。N－75°－E。**（規模）**？m×4.41m。**（竈）**石組み。東竈。東壁ほぼ中央に位置する。両袖石の一部が残存。焼土は顕著。規模1.06m×0.91m。深さ10cm。**（床）**面積不明。深さ25cm。標高386.73m。竈周辺部は堅固。**（壁溝）**床面残存部には巡る。幅16～25cm、深さ４～８cm。**（遺物出土状況）**竈内から細片が微量出土。**（遺物）**復元実測できる遺物なし。**（時期）**不明。

第１表　宮ノ前遺跡竪穴住居址データ

・（　）付の数値は推定値を示す。
・カマド位置の〝支〟は支脚石の残存を示す。

番号	時　期	規　模(m)	主　軸	面　積	カマド位置	切り合い関係
1	?	3.13×2.82	N-77°-E	7.30㎡	東（やや南）	－
2	V	3.40×3.25	N-72°-E	9.41㎡	東（やや南）	8溝より古
3	VI	4.02×4.02	N-72°-E	14.20㎡	東（やや南）、支	2掘より新
4	VIII	4.02×3.48	N-79°-E	12.00㎡	東（やや南）	7溝より古
5	VII?	3.23×3.33	N-88°-E	(9.46)㎡	－	40住より古
6	VI	3.58×3.35	N-83°-E	10.01㎡	東（やや南）	40・103住より新
7	XI?	3.52×3.68	N-147°-W	11.30㎡	南西コーナー、支	30・67・103住より新
8	V～VI	3.25×3.15	N-81°-E	8.21㎡	東（やや南）	8溝より古、8掘より新
9	IX	3.05×3.15	N-75°-E	8.62㎡	東（やや南）	17掘より新
10	IX	3.20×3.80	N-85°-E	10.20㎡	東、南東コーナー近く	17掘より新
11	X	3.11×3.65	N-86°-E	9.89㎡	東、南東コーナー近く、支	2・3溝より新しい
12	VI	3.50×3.22	N-18°-W	10.30㎡	北（やや西）	－
13	VI	4.40×4.50	N-12°-W	18.50㎡	北（やや東）	－
14	IX	2.77×3.10	N-14°-W	6.88㎡	北	4掘より古?
15	IX～X	3.55×3.50	N-82°-E	11.10㎡	東（やや南）	－
16	VII	3.64×3.18	N-74°-E	9.83㎡	東（やや南）	9・13溝、44住より古、41・55住、2掘立より新
17	IX	2.56×2.72	N-81°-E	(6.15)㎡	東、南東コーナー近く	4溝より古、3掘より新
18	IX	3.58×3.62	N-87°-E	11.40㎡	東、北東コーナー近く	54住より新
19	IX	2.95×2.55	N-77°-E	6.19㎡	東、南東コーナー近く、支	－
20	?	3.20×3.17	N-85°-E	9.07㎡	東、南東コーナー	－
21	VI	3.63×3.50	N-87°-E	10.92㎡	東、中央	9・10溝より古
22	VI	2.78×2.55	N-76°-E	5.91㎡	東、中央	－
23	IX～X	2.82×2.64	N-96°-W	6.19㎡	南西コーナー	－
24	IX	3.39×3.25	N-78°-E	9.72㎡	東、中央	－
25	VII	4.68×4.00	N-85°-E	15.50㎡	東、南東コーナー近く、支	48・52・53住、24掘より新
26	IX	3.90×3.90	N-82°-E	13.40㎡	東（やや南）	－
27	VII・IX	3.70×3.60	N-8°-W	11.10㎡	北	28・31掘より新
28	VII・IX	4.25×4.04	N-79°-E	14.90㎡	東	93・64・119住、29掘より新
29	VII	4.25×4.00	N-82°-E	14.80㎡	東、南東コーナー近く	71・83住より古
30	VIII～IX	4.90×4.50	N-74°-E	19.90㎡	東	7住より古、40・67・103住より新
31	VIII	4.20×4.25	N-83°-E	(16.50)㎡	東	40・50・87住より古、99・122住、20・33掘より新
32	VIII	3.76×3.94	N-83°-E	13.00㎡	東、南東コーナー近く、支	25・26・27掘より新、47・49住より古
33	VII	5.04×4.74	N-80°-E	21.90㎡	東（やや南）	14溝より古、135住より新
34	IX	5.00×4.95	N-82°-E	21.40㎡	東（やや南）	71住と重複、新旧不明
35	IX	4.82×4.66	N-88°-E	19.70㎡	東（やや南）	77・99・122・123・124住、20・33掘より新
36	IX	3.84×3.76	N-83°-E	12.50㎡	東、南東コーナー近く	90・128住より新
37	V?	3.75×3.35	N-82°-E	11.00㎡	東（やや南）	83住、31・40土より古
38	IX	3.75×3.71	N-79°-E	12.40㎡	東（やや南）	402・403住より新?
39	VI	4.00×3.50	N-87°-E	(12.70)㎡	東、南東コーナー近く	165住より新
40	VII	3.38×3.42	N-82°-E	10.70㎡	東	6・30住より古、5・103住より新

番号	時　期	規　模(m)	主　軸	面　積	カマド位置	切り合い関係
41	Ⅲ？	3.72×3.77	N-78°-E	12.60㎡	東（やや南）	16住より古、55住、2掘より新
42	Ⅲ？	3.68×4.21	N-22°-W	14.50㎡	北、支	95住より新
43	？	2.65×3.97	N-76°-E	9.36㎡	東、南東コーナー近く、支	－
44	？	2.92×3.05	N-90°-E	7.88㎡	東（やや南）	16住より古、55住より新
45	Ⅸ	3.82×3.21	N-82°-E	10.40㎡	東、南東コーナー近く	31・70・94住より新
46	Ⅶ	3.20×3.45	N-83°-E	(9.86)㎡	東（やや南）、支	47住より古、56住、25・26・27掘より新
47	Ⅸ	2.80×3.32	N-27°-W	7.89㎡	北、北西コーナー近く	32・46住、25・26・27掘より新
48	Ⅵ	4.89×4.47	N-77°-E	(18.90)㎡	東、南東コーナー近く	25・70住より古、24掘より新
49	Ⅸ	2.62×3.32	N-80°-E	7.42㎡	東（やや南）	32住、25・26・27掘より新
50	Ⅸ	3.75×4.88	N-80°-E	(17.50)㎡	東（やや南）、支	69・87住より古、31・99住、33掘より新
51	Ⅰ以前？	3.70×4.77	N-16°-W	15.40㎡	北（やや東）、支	—
52	Ⅵ	3.49×3.23	N-78°-E	(9.67)㎡	東?	25住より古、25・26・27掘より新
53	？	？×3.61	N-7°-W	？	？	25・70・94住より古、10・16・24掘より新
54	Ⅵ	3.11×2.89	N-81°-E	7.73㎡	東（やや南）	18住より古
55	Ⅰ？	？	？	？	？	16・44・55住、性格不明ピットより古
56	？	2.50×？	N-77°-E	？	東、北東コーナー近く	46住より古
57	Ⅵ	3.61×3.53	N-82°-E	(12.00)㎡	東（やや南）	－
58	Ⅸ	3.75×3.09	N-73°-E	10.60㎡	東	86住より新
59	Ⅵ	4.88×4.37	N-86°-E	18.70㎡	東（やや南）	85住、37土より新
60	Ⅷ	3.06×3.53	N-72°-E	10.10㎡	東（やや南）	76住より新
61	Ⅸ	3.22×3.14	N-77°-E	9.07㎡	東（やや北）、支	119住より古
62	Ⅸ	3.35×3.18	N-87°-E	9.45㎡	東、南東コーナー	401住より新
63	Ⅸ	3.41×3.43	N-84°-E	10.30㎡	東（やや南）	68・91住より新、119住より古
64	Ⅷ	2.72×？	？	？	？	28住より古
65	Ⅴ？	4.37×4.40	N-80°-E	17.60㎡	東、南東コーナー近く	98住より新
66	Ⅳ？	3.33×3.81	N-76°-E	11.10㎡	東（やや南）	81・97住より新
67	？	3.88×3.24	N-81°-E	10.60㎡	東、南東コーナー近く	7・30住、9溝より古、93住より新
68	Ⅷ	6.20×5.40	N-77°-E	(30.40)㎡	東（やや北）、支	91・100住、28・29掘より新、63・79・84住より古
69	Ⅸ	2.85×2.88	N-12°-W	7.40㎡	北、北西コーナー近く	87住より古、50・99住、20土より新
70	Ⅶ	4.68×4.11	N-3°-W	(17.80)㎡	北、北西コーナー近く、支	45・94住より古、48・53住より新
71	Ⅸ	(4.75)×4.54	N-11°-W	18.80㎡	北、中央	29・34住より新
72	Ⅸ	3.75×？	N-82°-E	？	東	74住より古
73	—	—	—	—	—	—
74	Ⅸ	3.52×3.34	N-78°-E	10.30㎡	東、南東コーナー近く	72・89・102住より新
75	？	2.75×2.81	N-18°-W	7.30㎡	北（やや西）	－
76	Ⅵ？	2.53×3.00	N-72°-E	(6.97)㎡	東（やや南）	60・86住より古
77	Ⅵ？	5.85×？	？	？	？	100住、33掘より新、35・123住より古
78	Ⅸ～Ⅹ	4.27×4.17	N-76°-E	16.20㎡	東（やや北）	13・14溝より古、405住より新
79	？	3.26×2.84	N-81°-E	8.17㎡	東（やや南）、支	63住より古、68・91住、28・29掘より新
80	Ⅺ	4.50×4.10	N-93°-E	16.20㎡	東（やや南）	385・412住より新

番号	時　期	規　模(m)	主　軸	面　積	カ マ ド 位 置	切　り　合　い　関　係
81	Ⅰ？	？×3.65	N-81°-E	？	東、北東コーナー近く	66・97住より古
82	Ⅺ	4.00×4.00	N-95°-W	14.80㎡	南西コーナー	89・112・129住、40・41掘より新
83	Ⅸ	？×4.33	N-80°-E	？	東、支	29・37・71住より新
84	Ⅸ	4.70×5.00	N-16°-W	21.90㎡	北、北東コーナー近く	68住より古、90・101住より新
85	Ⅴ？	(4.22)×3.92	N-79°-E	？	？	59住、31掘より古、34掘より新
86	Ⅸ	3.95×4.21	N-78°-E	(16.30)㎡	東（やや南）	58住より古、76住より新
87	Ⅷ	3.54×3.75	N-80°-E	11.90㎡	東、南東コーナー近く	31・50・69・99住より新、5溝より古
88	？	2.95×？	N-85°-E	？	東	5掘と重複、新旧不明
89	Ⅸ	3.72×3.84	N-82°-E	(13.80)㎡	東	74・82住より古、102住より新
90	？	3.43×？	N-76°-E	？	東（やや南）	36・84住より古、128住より新
91	Ⅶ	3.72×3.18	N-81°-E	10.20㎡	東、南東コーナー近く	63・68・79住より古、29掘より新
92	？	3.65×3.29	N-86°-E	10.90㎡	東（やや北）	－
93	Ⅴ	4.00×3.44	N-80°-E	(12.00)㎡	東（やや南）	28・64・67住、13溝より古、29掘より新
94	？	3.70×3.37	N-3°-W	11.50㎡	北	45・70住より古、53住、10掘より新
95	？	4.08×4.41	N-66°-E	(16.70)㎡	東（やや南）、支	42住より古
96	Ⅳ？	2.47×2.57	N-78°-E	5.26㎡	東	7溝より古、98住より新
97	？	3.33×3.73	N-81°-E	(11.10)㎡	東（やや南）	81住より新、66住より古
98	？	4.33×？	N-79°-E	？	東	65・96住より古
99	Ⅵ	5.30×5.08	N-79°-E	24.50㎡	東、南東コーナー近く	31・50・69・87住より古、122住、33掘より新
100	Ⅳ	6.54×6.90	N-80°-E	(42.10)㎡	東	68・77・84・101住より古
101	？	？	？	？	東	84・90住より古、100住より新
102	Ⅵ	3.19×2.98	N-7°-W	(9.00)㎡	北	74・89住より古
103	？	3.54×3.72	N-83°-E	(11.60)㎡	東、南東コーナー近く	6・7・30・40住より古
104	Ⅷ	3.36×3.44	N-79°-E	10.20㎡	東	120住より新
105	Ⅸ	4.96×5.64	N-81°-E	25.80㎡	東、支	118・120・163・326住、43掘より新
106	Ⅺ	4.50×4.71	N-17°-W	19.50㎡	南東コーナー	119・167住より新
107	Ⅵ	4.67×4.19	N-83°-E	17.20㎡	東	112・125住、20掘より新
108	—	—	—	—	—	—
109	Ⅸ～Ⅹ	3.09×3.23	N-81°-E	8.91㎡	東、南東コーナー近く	－
110	Ⅶ	3.61×3.59	N-80°-E	11.90㎡	東、支	134・165・404住より新
111	Ⅵ	3.54×3.49	N-82°-E	10.10㎡	東（やや南）	134・137住より新、13・14溝より古
112	Ⅳ？	4.34×4.31	N-84°-E	(17.00)㎡	東	82・107住より古、121・129住より新
113	Ⅶ	4.11×3.52	N-76°-E	12.50㎡	東、南東コーナー近く、支	156住より新、14溝より古
114	Ⅵ？	4.26×4.50	N-82°-E	16.90㎡	東（やや南）	126・418住より新
115	Ⅷ	4.38×4.03	N-78°-E	15.30㎡	東（やや南）	146・164・248住より新
116	Ⅶ	3.28×3.44	N-81°-E	9.87㎡	東（やや南）、支	14溝より古
117	Ⅸ	4.44×4.31	N-74°-E	17.70㎡	東（やや南）	－
118	Ⅸ	3.12×3.14	N-83°-E	8.92㎡	東（やや北）	105住より古、326住より新
119	Ⅸ	3.65×3.12	N-13°-W	(10.60)㎡	北、北西コーナー近く、支	28・106住より古、61・63住より新
120	Ⅸ	3.92×？	N-21°-W	？	北	104住より古

番号	時　期	規　模(m)	主　軸	面　積	カ マ ド 位 置	切　り　合　い　関　係
121	Ⅵ	3.36×2.67	N-85°-E	8.34㎡	東（やや南）、支	112住より古、129住より新
122	Ⅶ	4.95×4.87	N-79°-E	?	東	31・35・99住より古、123・124住、33掘より新
123	?	4.08×?	N-82°-E	?	東、南東コーナー近く	35・122住より古、77住より新
124	Ⅶ	?×3.77	N-80°-E	?	東	31・35・99住、20掘より古、33掘より新
125	Ⅴ	3.89×?	N-79°-E	?	?	37・107住、20掘、31・40土より古
126	Ⅱ	3.35×3.87	N-8°-W	(12.10)㎡	北、中央	114住より古、418住より新
127	Ⅸ	2.77×2.75	N-82°-E	6.52㎡	東、南東コーナー近く	－
128	Ⅶ	2.72×2.86	N-82°-E	6.79㎡	東（やや南）、支	36・90住より古
129	Ⅱ?	?×3.00	N-7°-W	?	北?	112・121住より古
130	Ⅵ	3.00×2.40	N-88°-E	5.86㎡	東、中央	131・168・173住より新
131	Ⅶ	2.72×2.68	N-85°-E	(6.98)㎡	東（やや南）	130住より古、168・173住より新
132	Ⅸ	2.64×3.02	N-78°-E	6.97㎡	東（南東隅近く）	141・154・155・378住より新
133	Ⅸ	3.35×2.87	N-78°-E	8.65㎡	東（南東隅近く）	408住より新
134	?	4.57×3.70	N-77°-E	(15.70)㎡	東（南東隅近く）	110・111住より古
135	?	4.48×3.80	N-78°-E	?	?	33住より古、136・137住より新
136	?	?×2.55	N-82°-E	?	東（やや南）	33・135住、14溝より古、137住より新
137	Ⅵ	4.03×4.19	N-81°-E	(15.50)㎡	東（南東隅近く）	33・111・135・136住、13・14溝より古
138	Ⅴ	6.32×5.81	N-78°-E	31.10㎡	東（やや北）	14溝より古、415住より新
139	Ⅶ～Ⅷ	4.21×4.03	N-83°-E	14.60㎡	東（南東隅近く）	283・367住より新
140	Ⅸ	3.14×3.10	N-94°-E	8.08㎡	東（南東隅近く）、支	283・367住、18溝より新
141	Ⅱ	6.72×7.36	N-9°-W	44.30㎡	北、中央	132・140・144・154・406住より古、27溝より新
142	Ⅴ	3.73×3.30	N-84°-E	10.90㎡	東（南東隅近く）	143住より古、150・401住より新
143	Ⅷ	3.86×3.49	N-83°-E	11.80㎡	東、中央	142・147・159・401住より新
144	Ⅷ	3.48×3.50	N-88°-E	10.50㎡	東、やや南、支	141住より新、9溝より古
145	Ⅸ	2.48×2.39	N-69°-E	4.83㎡	東、南東隅近く、支	158・174・229住より新
146	Ⅵ?	?×2.88	N-78°-E	?	?	115住より古
147	Ⅸ	3.32×3.01	N-78°-E	(9.08)㎡	東、南東隅近く	143住より古、159住より新
148	Ⅵ	3.88×4.41	N-79°-E	(15.60)㎡	東、中央	149住より古、151・426住より新
149	Ⅷ	4.25×3.92	N-68°-E	14.80㎡	東、南東隅近く	152住より古、148・153・213住より新
150	Ⅳ	3.19×?	N-87°-E	?	東、中央	142住より古、18溝より新
151	Ⅱ・Ⅷ	3.11×3.42	N-76°-E	(9.90)㎡	東、南東隅近く、支	148・157住より古、426住より新
152	Ⅷ	3.04×3.40	N-72°-E	9.02㎡	東、南東隅近く	149・153住より新
153	Ⅷ	5.52×5.41	N-18°-W	26.90㎡	北、北西隅近く	149・152・224住より古、216住より新
154	Ⅸ	2.74×2.65	N-77°-E	6.44㎡	東（やや南）	132住より古、141・155住より新
155	Ⅶ	3.43×4.07	N-83°-E	(12.80)㎡	東、中央	132・154住より古、378住より新
156	?	3.42×?	?	?	?	113住、14溝より古、405住より新
157	Ⅰ?	3.57×4.02	N-83°-E	(12.60)㎡	東（やや南）	151・426住、16溝より新、土器は混入の可能性あり
158	Ⅸ	4.32×3.60	N-80°-E	(13.70)㎡	?	145・166住より古、174住より新
159	Ⅴ	4.36×4.00	N-84°-E	14.90㎡	東、中央	143・147住、9・10溝より古
160	Ⅸ	4.38×4.26	N-78°-E	16.40㎡	東、南東隅近く	227・293住より新

番号	時　期	規　模(m)	主　軸	面　積	カ マ ド 位 置	切　り　合　い　関　係
161	Ⅸ	3.94×3.85	N-85°-E	(14.10)㎡	東、南東隅近く	175・299住より新
162	Ⅷ	2.91×3.37	N-77°-E	9.17㎡	東、南東隅近く	184・185住より新
163	Ⅸ	3.35×3.40	N-74°-E	9.36㎡	東、南東隅近く	105住より古、43掘より新
164	Ⅶ	？×3.94	N-83°-E	？	東（やや南）、支	115住より古、248住より新
165	Ⅲ	3.24×(3.10)	N-82°-E	(9.17)㎡	東、中央	39・110住より古
166	Ⅸ	3.26×(3.60)	N-75°-E	(10.60)㎡	東、南東隅近く	171住より古、158・174住より新
167	Ⅴ	3.71×3.39	N-82°-E	10.10㎡	東、中央	106住より古、44掘より新
168	？	2.92×3.44	N-86°-E	(9.09)㎡	東、中央	130・131住、13溝より古
169	Ⅸ	4.70×4.82	N-78°-E	20.60㎡	東、南東隅近く	175・298・299・391住より新、17溝より古
170	Ⅰ	3.67×3.53	N-10°-W	11.30㎡	北（やや東）	178・204・205住より古
171	Ⅸ	3.69×3.76	N-75°-E	12.30㎡	東、南東隅近く	176住より古、166・182・352住より新
172	Ⅲ	？×4.25	N-76°-E	？	東、中央	191・199・206住より古、200・203住より新
173	？	？×3.44	N-84°-E	？	東、南東隅近く	130・131住より古
174	？	？	？	？	？	145・158・166住より古
175	？	2.74×2.94	N-77°-E	(6.99)㎡	東、中央、支	161・169・233住より古
176	Ⅷ	4.12×3.92	N-78°-E	14.00㎡	東、南東隅近く	171・192・223・352・409住より新
177	Ⅸ	4.24×4.06	N-80°-E	15.30㎡	東（やや南）	187・228・246住より新
178	Ⅷ	2.48×2.88	N-76°-E	(6.36)㎡	東、南東隅近く	170・188住より新
179	Ⅲ	3.82×3.24	N-78°-E	10.50㎡	東（やや南）	17溝より古、202・209住より新
180	Ⅶ	3.47×2.96	N-71°-E	(9.18)㎡	東、南東隅近く	—
181	Ⅷ	4.16×4.00	N-74°-E	14.60㎡	東（やや南）	187住より新
182	Ⅰ？	3.58×3.92	N-9°-W	(11.70)㎡	？	171・235住より古、352住より新
183	Ⅸ	3.39×2.98	N-74°-E	9.22㎡	？	225・228・244・246・257住より新
184	？	3.28×3.49	N-77°-E	(10.10)㎡	東、南東隅近く	162・185住より古
185	Ⅶ	3.83×4.21	N-78°-E	14.20㎡	東、南東隅近く	162住より古、184住より新
186	Ⅷ	3.94×4.17	N-81°-E	(15.50)㎡	東、やや南、支	北後田Ｂ21より古、257・269住より新
187	Ⅶ	3.18×？	N-74°-E	？	東、中央	177・181・191住より古
188	Ⅷ	3.20×2.36	N-70°-E	6.33㎡	東、南東隅近く、支	178住より古、229・256住より新
189	Ⅸ	3.45×3.30	N-75°-E	10.30㎡	東、中央	243・244住より新
190	？	2.69×2.80	N-75°-E	6.56㎡	東、中央	198住、19溝より新
191	Ⅶ	3.63×4.06	N-79°-E	13.20㎡	東（やや南）	187・199・254住、16溝より新
192	？	？×3.37	N-72°-E	？	？	176住より古、223・409住より新
193	Ⅴ？	3.34×2.97	N-81°-E	(8.04)㎡	東（やや南）	198住より古、19溝より新
194	Ⅷ	3.52×3.45	N-73°-E	10.80㎡	東（やや南）	239・245住、25溝より新
195	Ⅶ	3.63×3.14	N-81°-E	9.91㎡	東（やや南）	48土より古
196	Ⅶ	3.64×3.20	N-72°-E	10.30㎡	東、中央	16溝より新
197	Ⅴ	4.06×3.55	N-80°-E	12.50㎡	東（やや南）	208・217・219住より新
198	Ⅸ	3.04×3.20	N-111°-E	8.19㎡	東、南東隅近く	190住より古、193住より新
199	Ⅳ	4.14×3.70	N-81°-E	(14.00)㎡	東、南東隅近く	191・211住より古、172・200・203・206・254住より新
200	Ⅰ	？×4.66	N-78°-E	？	東（やや南）	172・191・199・203住より古

番号	時　期	規　模(m)	主　軸	面　積	カマド位置	切り合い関係
201	?	2.53×2.25	N-12°-W	4.84㎡	北、北西隅近く	—
202	?	3.02×3.37	N-17°-W	8.09㎡	北、北東近く	179住、17溝より古
203	?	7.03×4.94	N-78°-E	(32.90)㎡	東（やや北）	199・206・211住より古、200・281住より新
204	Ⅸ	3.20×3.03	N-70°-E	8.21㎡	東、南東隅近く	170・205住より新
205	Ⅸ	2.84×3.96	N-78°-E	(10.30)㎡	東（やや北）	170住より新、204住より古
206	Ⅴ	3.52×3.33	N-78°-E	(10.40)㎡	東、南東隅近く	199住より古、172・203住より新
207	Ⅵ	4.16×3.74	N-12°-W	14.10㎡	北（やや西）	217・241住、16溝より新
208	Ⅴ?	2.74×2.89	N-77°-E	(7.30)㎡	東（やや南）	197・217住より古、214住より新
209	?	3.43×3.66	N-79°-E	(11.20)㎡	東、南東隅近く	179住より古、263住より新
210	Ⅶ	3.29×3.27	N-73°-E	9.51㎡	東、北東隅近く	230・263住より新
211	Ⅲ?	3.08×3.18	N-81°-E	(8.75)㎡	東、南東隅近く	218・253住より古、199・203住、19溝より新
212	Ⅴ～Ⅵ?	3.92×3.37	N-81°-E	11.90㎡	東、中央	179・232・236・262住より新、221住との新旧は不明
213	?	4.17×?	N-77°-E	?	?	149・153住より古
214	Ⅱ・Ⅸ?	4.39×5.02	N-81°-E	19.60㎡	東、中央	208・216住より古
215	Ⅷ	3.77×3.81	N-85°-E	(12.10)㎡	?	237住より古
216	Ⅵ	3.26×3.14	N-78°-E	9.18㎡	東（やや南）	153住より古、214住より新
217	Ⅳ?	4.13×3.96	N-80°-E	13.90㎡	東（やや南）	197・207住より古、208・219住より新
218	Ⅸ～Ⅹ	3.88×3.32	N-79°-E	(11.60)㎡	東、東南隅近く	231住より古、211・253・304住より新
219	Ⅵ	3.71×3.87	N-16°-W	(12.90)㎡	北（やや東）	197住より古、220・262・263住より新
220	?	3.89×3.46	N-79°-E	(12.20)㎡	東、中央	219住より古、424・425住より新
221	Ⅵ?	3.02×?	N-58°-E	?	東、北東隅近く	236・252・262・277住より新、212住との新旧は不明
222	Ⅸ	3.18×3.18	N-84°-E	(9.15)㎡	東、南東隅近く	226住より古、234・249住より新
223	Ⅶ	4.66×5.33	N-83°-E	(21.90)㎡	東、中央、支	176・192住より古、322・409住より新
224	Ⅸ	4.09×3.69	N-76°-E	(14.00)㎡	東、南東隅近く	153・286住より古
225	Ⅱ	2.49×2.83	N-7°-W	5.90㎡	北、中央	257住より新
226	Ⅷ	3.95×4.08	N-83°-E	14.10㎡	東（やや南）	222・234・249住より新
227	Ⅸ	(4.50)×5.22	N-76°-E	(21.90)㎡	東、南東隅近く	160住より古、423・424・425住より新
228	Ⅸ	3.88×3.43	N-14°-W	(13.10)㎡	北、北西隅近く	177・183住より古、244・246住より新
229	?	3.46×3.20	N-67°-E	(9.81)㎡	東（やや南）	145・188住より古、256住、19溝より新
230	Ⅳ?	4.37×3.77	N-80°-E	(15.30)㎡	東（やや北）	210住より古、263住より新
231	Ⅶ?	2.55×2.95	N-82°-E	6.68㎡	東、南東隅近く	218・304住より新
232	?	3.46×3.09	N-73°-E	(9.35)㎡	東（やや南）	212・221・236住より古、262住より新
233	Ⅸ	4.38×5.07	N-78°-E	18.90㎡	東、南東隅近く、支	175・306住より新
234	Ⅸ	3.41×3.05	N-75°-E	(8.53)㎡	東、南東隅近く	222住より古、242・249住より新
235	Ⅱ	3.56×4.18	N-7°-W	12.20㎡	北、中央	182住、18溝より新
236	Ⅴ	3.04×3.03	N-73°-E	(8.19)㎡	東、北東隅近く	212・221住より古、232・262住より新
237	Ⅸ	3.49×3.94	N-10°-W	11.90㎡	北、北西隅近く	215・240住、15溝より新
238	Ⅶ	3.94×4.59	N-81°-E	(16.10)㎡	東、中央	252住より新
239	Ⅷ	3.43×3.29	N-61°-E	(10.10)㎡	東（やや南）、支	194住より古
240	Ⅸ	5.37×?	N-12°-W	?	北、北西隅近く	237住より古、15溝より新

番号	時　期	規　模(m)	主　軸	面　積	カマド位置	切り合い関係
241	?	2.79×2.42	N-75°-E	5.86㎡	東、南東隅近く	207住、16溝より古
242	Ⅱ?	3.53×3.09	N-8°-W	9.40㎡	北、北西隅近く	234・249住、32土より古
243	Ⅷ	3.93×3.33	N-77°-E	11.70㎡	東、南東隅近く	189住より古、244・北後田B32住より新
244	Ⅲ	6.90×6.50	N-76°-E	(30.00)㎡	東、南東隅近く、支	177・183・186・189・228・243・246・257・269住より古
245	Ⅷ	3.08×3.55	N-60°-E	9.18㎡	東、南東隅近く	194住より古
246	Ⅷ	3.03×3.26	N-78°-E	8.64㎡	東、南東隅近く	177・183・228住より古
247	Ⅸ	3.56×3.47	N-82°-E	11.10㎡	東、中央	343住より新
248	Ⅴ	4.59×4.41	N-85°-E	(18.50)㎡	東（やや北）	115・164住より古
249	?	?	N-79°-E	?	東、南東隅近く	222・226・234住より古、242住より新
250	Ⅷ	4.58×4.29	N-89°-E	17.10㎡	東（やや北）	386住より新
251	Ⅷ	3.93×3.61	N-80°-E	11.70㎡	東（やや南）	301住より古、278・330住より新
252	Ⅱ	3.60×3.02	N-77°-E	9.44㎡	東、中央	238住より古
253	Ⅸ	?×3.09	N-75°-E	?	東（やや南）	218住より古、211住より新
254	Ⅵ?	?×3.46	?	?	?	191・199住より古、19溝より新
255	Ⅸ	3.21×3.08	N-80°-E	8.61㎡	東、南東隅近く	265・266住より新
256	Ⅸ	?×2.93	N-73°-E	?	東（やや南）、支	178・188・229住より古、北後田B21・33住より新
257	?	2.98×(3.25)	N-83°-E	(8.95)㎡	東（やや北）	183・186・225住より古、244・269住より新
258	?	3.72×3.66	N-78°-E	11.30㎡	東、南東隅近く	264住より古、361住より新
259	Ⅸ	2.71×2.58	N-79°-E	6.15㎡	東、南東隅近く	329住より新
260	Ⅲ	3.21×3.24	N-79°-E	8.81㎡	東、南東隅近く	45・46掘より新
261	Ⅵ	4.84×4.56	N-87°-E	20.00㎡	東（やや南）	11溝より古、272・280・311住より新
262	?	3.90×?	N-76°-E	?	東、中央	212・219・221・232・236住より古
263	?	4.54×3.95	?	(16.50)㎡	?	262住より新、209・210・212・219・230住より古
264	Ⅸ	3.77×3.79	N-75°-E	12.50㎡	東、南東隅近く	7溝より古、258住より新
265	Ⅳ?	4.07×3.33	N-82°-E	12.10㎡	東（やや南）	255住より古、341住より新
266	Ⅷ	4.99×4.77	N-78°-E	20.90㎡	東、南東隅近く	312・317住より新
267	Ⅴ?	4.44×4.12	N-83°-E	(17.10)㎡	東、南東隅近く	279住より古、268・362住より新
268	Ⅳ?	4.08×3.67	N-77°-E	13.00㎡	東、中央	267住より古、313・361住より新
269	?	?×3.76	N-84°-E	?	東、南東隅近く	186・257住より古、244住より新
270	Ⅷ	2.81×2.25	N-96°-E	5.51㎡	東（やや南）	—
271	Ⅲ?	?×2.76	?	?	?	212住より古
272	Ⅳ?	3.54×3.35	N-84°-E	(10.00)㎡	東、南東隅近く	261住より古
273	Ⅴ	2.43×2.40	N-83°-E	4.78㎡	東（やや南）	46掘より新
274	Ⅸ	4.33×4.29	N-81°-E	16.30㎡	東、中央	319・320・358・387・411住より新
275	Ⅸ	3.64×3.56	N-73°-E	(11.20)㎡	東（やや南）	266住より古、282・319・341住より新
276	Ⅱ	3.93×3.85	N-88°-E	12.80㎡	東、中央	311・341住より古、319住より新
277	?	4.64×4.04	N-19°-W	(16.70)㎡	北、北東隅近く	221住、17溝より古
278	Ⅴ?	3.86×4.07	N-76°-E	(14.10)㎡	東、東南隅近く	251・304住より古
279	?	3.72×3.27	N-80°-E	10.50㎡	東（やや南）	267・362住より新
280	?	?×2.54	N-84°-E	?	東（やや北）	11溝より古、393住より新

番号	時　期	規　模(m)	主　軸	面　積	カマド位置	切り合い関係
281	?	?×3.61	N-80°-E	?	東、南東隅近く	200住より古
282	Ⅲ・Ⅸ	3.72×3.77	N-80°-E	(12.20)㎡	東、南東隅近く	275・307住より古、320住より新
283	Ⅸ?	3.06×3.29	N-84°-E	(8.50)㎡	東、南東隅近く	139・140住より古、367住より新
284	Ⅸ	2.99×3.59	N-76°-E	(9.48)㎡	東、南東隅近く	349・379・381住より新
285	Ⅸ	3.20×3.53	N-88°-E	9.59㎡	東、南東隅近く、支	299・354・391住より新
286	Ⅷ	4.44×3.82	N-22°-W	15.40㎡	北、北西隅近く	224・332住より新
287	Ⅸ	4.29×3.88	N-81°-E	(15.00)㎡	東（やや北）	274住より古、319・342・411住、35掘より新
288	Ⅵ	4.42×4.63	N-80°-E	18.00㎡	東（やや北）、支	304住より古、289・309・379・387・410住より新
289	?	?×3.83	N-79°-E	?	東（やや北）	288・290住より古、387・410住より新
290	Ⅷ	3.60×3.27	N-82°-E	9.72㎡	東、南東隅近く	289住より新
291	Ⅷ	3.44×3.29	N-86°-E	9.66㎡	東（やや南）	301・310住より古、336・344住より新
292	Ⅶ	3.59×3.42	N-16°-W	10.80㎡	北（やや西）	53掘（新旧は不明）
293	Ⅵ	6.30×6.50	N-70°-E	(36.20)㎡	東（やや南）	160・316住より古、337・413住より新
294	Ⅷ	3.24×3.10	N-80°-E	8.28㎡	東、中央	302・348・359住、38掘より新
295	Ⅲ?	4.03×4.29	N-83°-E	15.10㎡	東、中央	360住、42掘より新
296	Ⅵ	3.38×3.48	N-82°-E	9.38㎡	東、南東隅近く	360住、54掘、18溝より新
297	?	3.34×3.38	N-86°-E	9.83㎡	東、中央	321住、8溝より古、335住より新
298	Ⅸ	2.89×2.85	N-83°-E	(7.47)㎡	東、南東隅近く	169住より古、391住より新
299	Ⅸ	4.35×4.67	N-86°-E	(19.10)㎡	東（やや南）	161・169・285住より古、391住より新
300	Ⅷ	3.60×3.55	N-74°-E	11.30㎡	東、南東隅近く	321・333・358住より新
301	Ⅸ	3.50×3.90	N-78°-E	12.10㎡	東、南東隅近く	251・291・310・336・344住より新
302	Ⅵ	3.70×3.75	N-82°-E	11.70㎡	東	294住より古、348・349住より新
303	Ⅸ	4.35×4.44	N-70°-E	17.60㎡	東、南東隅近く	337・366・365・397住、52掘より新
304	Ⅷ	3.95×3.60	N-73°-E	(12.70)㎡	東、中央	278・319住より新
305	Ⅸ	3.20×?	N-71°-E	?	東、中央	305・325・340・407住より新
306	Ⅵ?	3.75×?	N-11°-W	?	北、東より	233住より古
307	Ⅶ?	3.50×3.35	N-93°-E	(10.80)㎡	東（やや南）	282住より古、327・358・334住より新
308	Ⅷ	3.70×?	N-81°-E	?	東	309・336住より古
309	Ⅵ?	3.85×3.90	N-78°-E	(14.20)㎡	東（やや北）	278・304・336住より古、288・308住より新
310	Ⅸ	4.35×3.50	N-86°-E	(13.80)㎡	東（やや南）	291・301・336住より古、335・350住より新
311	Ⅳ?	3.05×3.15	N-80°-E	8.05㎡	東、南より	261住より古、276住より新
312	?	?×2.80	?	?	?	305・325・340住より古
313	Ⅳ	3.95×3.45	N-76°-E	11.85㎡	東、南より	361住より新、268住より古
314	Ⅷ	3.70×3.90	N-80°-E	12.70㎡	東（やや北）	343・388住より新
315	Ⅶ	4.00×4.30	N-80°-E	14.60㎡	東（やや南）	—
316	Ⅷ	?×3.80	N-66°-E	?	東、南東隅近く	293・337・392・413住より新
317	Ⅲ?	?×3.60	N-90°-E	?	東、北より	266・331・322・325・340住より古
318	Ⅳ・Ⅸ	3.50×3.40	N-79°-E	10.03㎡	東、南より	13溝より古、412住より新
319	?	?×5.05	N-80°-E	?	東、南より	275・287・341住より古、274・342住より新
320	Ⅷ?	3.49×3.52	N-83°-E	(11.40)㎡	東（やや北）	274住より古、282・319・411住より新

番号	時　期	規　模(m)	主　軸	面　積	カ マ ド 位 置	切　り　合　い　関　係
321	Ⅸ	4.40×4.20	N-81°-E	(16.60)㎡	東、南より	333・357住より古、297・300住より新
322	?	2.50×?	?	?	?	409住より新、317住より古
323	Ⅸ	2.70×2.50	N-80°-E	6.00㎡	東、南より	8溝より古
324	Ⅷ	3.00×3.20	N-81°-E	8.27㎡	東、南より、支	347・416住より新
325	Ⅲ?	(3.80)×3.50	N-6°-W	(13.40)㎡	北、北西隅近く	331・340住より新
326	Ⅸ	3.73×3.39	N-80°-E	10.40㎡	東（やや南）	105・118住より古
327	Ⅷ	4.60×4.30	N-88°-E	(17.20)㎡	東、南より	282・307住より古、334・358住より新
328	Ⅲ	3.80×3.40	N-84°-E	11.00㎡	東（やや南）	351住より古、35掘より新
329	Ⅳ?	2.75×2.65	N-11°-W	6.23㎡	北（やや東）	351・259住、35掘より古
330	Ⅵ	3.80×3.15	N-86°-E	(9.97)㎡	東（やや南）	251住より古、334住より新
331	Ⅵ?	3.20×2.80	N-84°-E	7.90㎡	東、南より	317・340住より新、325住より古
332	Ⅸ	3.11×2.90	N-70°-E	(8.34)㎡	東、中央	286住より古、368住より新
333	Ⅰ	3.10×3.10	N-6°-W	(8.45)㎡	?	358住より古
334	Ⅲ?	3.20×3.25	N-3°-W	(9.72)㎡	?	307・327・330・358住より古
335	Ⅱ・Ⅸ	4.85×4.10	N-2°-W	17.78㎡	北、東より	297・321住より古、350・369住より新
336	?	?×4.55	N-78°-E	?	東（やや南）	291・301・344住より古、310住より新
337	Ⅵ	5.50×6.02	N-66°-E	(32.40)㎡	東（やや南）	293・316住より古、366・392・413住より新
338	Ⅹ	2.55×3.30	N-85°-E	7.14㎡	東、南より	388・412住より新
339	Ⅸ	2.80×2.90	N-67°-E	7.20㎡	東、南より	353・354住より新
340	Ⅲ?	3.30×4.05	N-12°-W	(11.56)㎡	?	305・331住より古、266・312・317・325住より新
341	Ⅳ?	4.65×4.00	N-84°-E	16.80㎡	東（やや北）	265・275住より古、276・319住より新
342	?	?	N-87°-E?	?	?	287・319住より古
343	Ⅷ	5.15×5.50	N-85°-E	(26.61)㎡	東、中央	314・388・247住より古
344	Ⅶ	2.95×3.30	N-77°-E	(8.67)㎡	東、南より	291・301住より古、336住より新
345	Ⅷ	3.65×3.20	N-80°-E	10.00㎡	東、南東隅近く、支	350・369住より新
346	Ⅷ	3.10×3.55	N-76°-E	8.97㎡	東、南より	—
347	Ⅸ	2.75×2.80	N-77°-E	(6.47)㎡	東（やや南）	324住より古
348	Ⅷ	3.20×2.80	N-78°-E	(8.00)㎡	東（やや南）	294・302住より古
349	Ⅱ?	4.65×3.95	N-82°-E	(15.99)㎡	東、中央	302住より古
350	Ⅸ?	(4.70×4.65)	N-3°-W	(20.90)㎡	北	310・335住より古、345・369住より新
351	Ⅲ?	3.65×3.45	N-6°-W	11.53㎡	東、南より	329住より新、328住より古
352	Ⅷ?	?	N-21°-W?	?	東、北東隅近く?	171・176・182住より古
353	Ⅸ	?×3.20	N-73°-E	?	東、中央	339住より古
354	Ⅷ	3.55×4.05	N-77°-E	(12.19)㎡	東（やや南）	285住より古
355	?	3.20×3.35	N-82°-E	8.66㎡	東、南より	—
356	Ⅵ?	4.05×3.50	N-81°-E	11.85㎡	東、南より	414住より新
357	Ⅸ	3.40×3.50	N-12°-W	10.64㎡	東（やや南）	321住より新、411住、7溝より古
358	Ⅱ	3.60×4.80	N-4°-W	13.62㎡	北（やや東）	334・300住より古
359	Ⅸ	2.75×2.80	N-73°-E	6.37㎡	東（やや南）	348住より新、294住、38掘より古
360	?	4.85×4.05	N-7°-W	(17.40)㎡	東、南より	295住より古、296住、54掘より新

番号	時　期	規　模(m)	主　軸	面　積	カマド位置	切り合い関係
361	Ⅲ？	3.70×3.60	N-78°-E	11.45㎡	東、南より	313・268住より古
362	？	？×4.20	N-12°-W	？	北（やや東）	267・279住より古
363	？	3.50×3.20	N-82°-E	9.37㎡	東、南より	7溝より古
364	Ⅸ	3.70×2.80	N-83°-E	9.25㎡	東、中央	365住より新
365	Ⅸ	3.85×3.95	N-73°-E	14.36㎡	東、南より	364・303住より古
366	Ⅷ？	5.20×4.80	N-7°-W	23.80㎡	？	337住より古、394住より新
367	Ⅷ	2.90×3.25	N-3°-W	(8.50)㎡	北、やや西、支	139・140・283住より古
368	Ⅸ	3.60×？	N-10°-W	？	？	332住より古
369	Ⅸ	？×4.90	N-7°-W	？	？	335・345・350住より古
370	Ⅲ	3.15×3.50	N-7°-W	(10.45)㎡	？	376住より古
371	？	？×3.30	N-2°-W	？	東?	－
372	Ⅲ	4.30×？	N-76°-E	？	東、やや南	373住より古
373	Ⅲ？	4.20×3.80	N-75°-E	12.05㎡	東、南より	372・399住、47掘より新、7・8溝より古
374	Ⅱ？	3.35×3.25	N-12°-W	9.49㎡	北、中央	11溝より古
375	Ⅱ？	？×2.85	N-79°-E	？	東、やや北	390・406住より古
376	Ⅴ？	3.45×3.40	N-78°-E	10.18㎡	東、やや南	370住より新
377	Ⅲ	4.50×4.10	N-86°-E	16.53㎡	東、中央、支	47掘より古、399住より新
378	Ⅲ	4.00×3.75	N-82°-E	12.05㎡	東（やや南）	155・132住より古
379	Ⅵ	3.45×3.05～3.50	N-83°-E	(10.25)㎡	東、南より	288・349住より古
380	—	—	—	—	—	—
381	Ⅱ？	？	N-18°-W	？	？	284・349住より古
382	？	3.00×3.05	N-80°-E	8.06㎡	東（やや南）	—
383	Ⅲ	3.45×3.40	N-81°-E	9.82㎡	東、南より	375・390住、50掘より新、8溝より古
384	Ⅷ	4.50×3.60	N-88°-E	14.73㎡	東（やや南）	39掘より新
385	Ⅺ	3.65×3.75	N-77°-E	11.62㎡	東、南東隅近く	80.・412住より新、13溝より古
386	？	？×3.50	N-85°-E	？	東、南より	250・343・388住より古
387	Ⅱ	3.15×4.10	N-13°-W	(11.52)㎡	北?	288・410住より古
388	？	4.70×4.35	N-76°-E	(19.08)㎡	東、北東隅近く	314・338住より古
389	Ⅸ	2.95×2.75	N-80°-E	6.87㎡	東（やや南）	－
390	Ⅲ？	？×3.10	N-80°-E	？	東、南より	383住より古
391	Ⅳ・Ⅸ	？	N-5°-W	？	？	169・285・299住より古
392	Ⅶ	3.75×3.70	N-66°-E	(12.00)㎡	東、中央	316住より古
393	縄文前	4.32×4.50	？	？	－	—
394	縄文後	？×5.00	？	？	－	421住と重複、新旧不明
395	Ⅴ	4.25×3.15	N-84°-E	11.30㎡	東、南より	－
396	Ⅱ？	4.15×3.60	N-80°-E	13.19㎡	東、北より、支	49掘より新
397	Ⅸ	？×3.95	N-82°-E	？	東、南より	303・365住より古
398	Ⅳ？	3.55×3.50	N-77°-E	(11.06)㎡	東、南東隅近く、支	—
399	？	2.60×？	N-5°-W	？	東?	373・377住、47掘、8溝より古
400	Ⅷ	3.05×3.45	N-78°-E	(8.96)㎡	東、南より	324・347住より古

番号	時　期	規　模(m)	主　軸	面　積	カマド位置	切り合い関係
401	Ⅸ	4.12×？	N-77°-E	？	東?	62・142・143住より古
402	Ⅸ	3.10×2.80	N-16°-W	7.35㎡	北、西より	38住より古
403	Ⅸ	？×2.35	N-12°-W	？	東?	38住より古
404	Ⅰ～Ⅱ	4.75×3.65	N-83°-E	(16.18)㎡	東（やや南）	110住より古
405	？	？	N-82°-E	？	東	78・156住、14溝より古
406	Ⅸ	2.55×2.28	N-98°-E	(5.30)㎡	東、中央	375住より新、8溝より古
407	？	3.25×3.20	N-72°-E	9.18㎡	東、中央	312・317・325・331住より古
408	縄文後	7.15×6.00	N-25°-W	？	－	113・178住、14・15溝より古
409	Ⅶ	4.30×4.10	N-85°-E	15.42㎡	東（やや南）	176・192・223住より古、322住より新
410	Ⅴ？	？×3.40	N-84°-E	？	東、中央	288住より古、387住より新
411	Ⅸ？	3.25×3.45	N-86°-E	10.06㎡	東（やや南）	333住より新、289・357住より古
412	Ⅱ～Ⅲ？	7.42×8.12	N-82°-E	(47.10)㎡	東、中央	80・318・338・385住、13溝より古
413	Ⅷ	5.00×5.20	N-21°-W	(23.96)㎡	東?	293・316・392住より古
414	Ⅳ？	？×4.40	N-11°-W	？	東?	356住より古
415	？	？×3.45	N-78°-E	？	東、南より	138住より古
416	Ⅵ？	3.70×3.20	N-81°-E	10.50㎡	東、南より	324住より古
417	縄文後	？	N-25°-W	？	－	422住より新?、318・338・412住より古
418	Ⅷ？	2.75×2.85	N-81°-E	(7.10)㎡	東、東北隅近く	114・126住より古
419	Ⅷ	？×4.25	N-82°-E	？	東、北より	420住より新
420	Ⅵ	5.00×4.40	N-87°-E	18.02㎡	東、中央	419住、11溝より古
421	縄文中末	？	？	？	－	394住と重複、新旧不明
422	縄文後	？	？	？		417住より古
423	？	4.03×3.84	N-71°-E	(13.00)㎡	東・南東隅近く	227・424住より古、425住より新
424	？	？×2.72	N-72°-E	？	東、南東隅近く	220・227・425住より古、423住より新
425	？	3.44×？	N-68°-E	？	東、南東隅	227・423・424住より古
426	？	？×4.41	N-75°-E	？	東、中央	148・151・157住より古

第２節

掘立柱建物址

第１号掘立柱建物址　（第105図、図版62）

（位置）A21・22B22グリッド。**（重複）**特になし。**（規模および主軸方向）**東西３間（4.32m）×南北３間（4.40m）。N－10°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.40m、南北方向1.30～1.60m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長方形。一辺60～100cm、深さ44～70cm。**（覆土および柱痕の有無）**ほとんどの掘り方において柱痕はみられる。掘り方覆土は炭化物粒を含む暗褐色土。**（遺物出土状況）**遺物の出土は皆無。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第２号掘立柱建物址　（第105図、図版62）

（位置）A22・23B22・23グリッド。**（重複）**３・16・41号住と重複。いずれの住居址より古い。**（規模および主軸方向）**東西３間（4.44m）×南北３間（4.44m）。N－10°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.40～1.50m、南北方向1.40～1.50m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長方形。一辺60～90cm、深さ40～70cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ３・Ｐ４を除いた掘り方に柱痕はみられる。柱痕内には多量の焼土ブロックと炭化物を含んでいる。**（遺物出土状況）**微量出土。**（遺物）**須恵器鉢Ａ片。**（時期）**不明。

第３号掘立柱建物址　（第105図、図版62）

（位置）A26B21・22グリッド。**（重複）**17号住、４号溝と重複。両遺構より古い。**（規模および主軸方向）**東西３間（6.20m）×南北２間（4.20m）。N－15°－W。**（柱間寸法）**東西方向2.00～2.10m、南北方向2.00～2.20m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長方形。一辺70～90cm、深さ30～50cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ７・Ｐ９を除き柱痕あり。Ｐ４・Ｐ６には根石状の平石が底面にあり。**（遺物出土状況）**ほとんど出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第４号掘立柱建物址　（第105図、図版62）

（位置）A27B26グリッド。**（重複）**14号住と重複。14号住より新しい。**（規模および主軸方向）**東西２間（4.20m）×南北３間（6.00m）。N－12°－W。**（柱間寸法）**東西方向2.10m、南北方向2.00～2.10m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺40～70cm、深さ８～10cm。**（覆土および柱痕の有無）**後世の削平により掘り方下部しか残存しない。**（遺物出土状況）**出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第５号掘立柱建物址　（第105図、図版62）

（位置）A27B24・25グリッド。**（重複）**掘り方との重複はないが、88号住と重複。新旧関係は不明。**（規模および主軸方向）**東西３間（10.8m）×南北２間（3.20m）。総柱。N－14°－W。**（柱間寸法）**東西方向3.00～4.40m、南北方向1.20～1.60m。**（掘り方形態および規模）**円形あるいは楕円形。径25～70cm、深さ10～20cm。**（覆土および柱痕の有無）**後世の削平により掘り方下部しか残存しない。掘り方覆土は粘性の強い灰色がかった暗褐色土。柱痕は不明。**（遺物出土状況）**出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第６号掘立柱建物址　（第106図、図版63）

（位置）A25・26B24グリッド。**（重複）**掘り方どうしの重複はないが、32号掘立と重複。新旧関係は不明。**（規模および主軸方向）**東西２間（3.30m）×南北３間（5.90m）。N－14°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.40～1.70m、南北方向1.40～3.10m。**（掘り方形態および規模）**円形あるいは楕円形。径30～56cm、深さ10～30cm。**（覆土および柱痕の有無）**掘り方覆土は粘性の強い灰色がかった暗褐色土。柱痕は不明。**（遺物出土状況）**出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第７号掘立柱建物址　（第106図、図版63）

（位置）Ａ24Ｂ22グリッド。**（重複）**12号掘立と重複。12号掘立より新しい。建替えの可能性大。**（規模および主軸方向）**東西３間（4.80m）×南北３間（4.60m）。Ｎ－７°－Ｗ。**（柱間寸法）**東西方向1.50～1.80m、南北方向1.50～1.60m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長方形。一辺62～104cm、深さ40～90cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ１・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ６・Ｐ10・Ｐ12は柱痕が明瞭。柱痕は焼土ブロック、炭化物を多量に含む暗褐色土。掘り方覆土も焼土ブロックを含む暗褐色土。**（遺物出土状況）**ほとんど出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第８号掘立柱建物址　（第107図、図版63）

（位置）Ａ21Ｂ22・23グリッド。**（重複）**５・８号住と重複。両住居址より古い。**（規模および主軸方向）**東西３間（4.70m）×南北３間（4.60m）。溝もち。Ｎ－７°－Ｗ。**（柱間寸法）**東西方向1.50～1.60m、南北方向1.30～1.70m。**（掘り方形態および規模）**基本的には方形あるいは長方形。Ｐ２・Ｐ３とＰ８・Ｐ９との間に溝がみられる。一辺60～120cm、深さ32～60cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ７を除き柱痕がみられる。炭化物を多く含む暗褐色土。溝部は暗黄褐色土が版築状の堆積を示す。**（遺物出土状況）**出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第９号掘立柱建物址　（第107図、図版63）

（位置）Ａ21・22Ｂ23・24グリッド。**（重複）**13号溝、30・31号掘立と重複。いずれの遺構より古い。**（規模および主軸方向）**東西２間（3.90m）×南北３間（5.20m）。Ｎ－３°－Ｗ。**（柱間寸法）**東西方向1.70～2.10m、南北方向1.60～1.80m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺56～80cm、深さ20～30cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ１・Ｐ８・Ｐ９において柱痕がみられる。掘り方覆土は炭化物を少量含む暗褐色土。**（遺物出土状況）**Ｐ５等から須恵器細片微量出土。**（遺物）**復元できる遺物なし。**（時期）**不明。

第10号掘立柱建物址　（第108・278図、図版63・139）

（位置）Ａ22・23Ｂ24・25グリッド。**（重複）**53・94号住、16号掘立と重複。両住居址より古く、16号掘立より新しい。**（規模および主軸方向）**東西３間（6.50m）×南北２間（4.50m）。Ｎ－11°－Ｗ。**（柱間寸法）**東西方向2.00～2.40m、南北方向2.20～2.40m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長方形。一辺100～144cm、深さ40～70cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ３・Ｐ４・Ｐ９を除き柱痕がみられる。掘り方および柱痕覆土は多量の焼土ブロック・炭化物を含む暗褐色土で、特にＰ１・Ｐ２・Ｐ７・Ｐ８・Ｐ９・Ｐ10において焼土が顕著。**（遺物出土状況）**ほとんどの掘り方内、柱痕内から多量の須恵器等が出土。故意に入れられたものだろう。**（遺物）**土師器坏Ａ（タール付着するものあり）、須恵器坏・高台坏Ａ・蓋Ａ・長頸壷・甕、土錘、鎚鉋状鉄製品。**（時期）**宮ノ前Ⅴ～Ⅵ期？。

第11号掘立柱建物址　（第108・278図、図版64）

（位置）Ａ23・24Ｂ23・24グリッド。**（重複）**21･22･23号掘立、52号住と重複。いずれの掘立、住居址より古いが、23号掘立との新旧関係は不明。**（規模および主軸方向）**東西３間（5.30m）×南北３間（6.40m）。Ｎ－６°－Ｗ。**（柱間寸法）**東西方向1.30～2.00m、南北方向2.00～2.30m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長方形。一辺84～118cm、深さ32～50cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ３・Ｐ10・Ｐ11において柱痕がみられる。掘り方および柱痕覆土ともに焼土ブロック・炭化物を多量に含む暗褐色土で、焼土は柱痕で顕著。**（遺物出土状況）**Ｐ１・Ｐ11・Ｐ12を中心に須恵器片、土師器片出土。**（遺物）**土師器皿、須恵器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅵ期？。

第12号掘立柱建物址　（第106図、図版64）

（位置）Ａ24Ｂ22グリッド。**（重複）**７号掘立と重複。７号掘立より古い。**（規模および主軸方向）**東西２間（3.94m）×南北２間（3.92m）。Ｎ－４°－Ｗ。**（柱間寸法）**東西方向1.80～2.00m、南北方向1.90～2.00m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺50～80cm、深さ35～50cm。**（覆土および柱痕の有無）**明瞭な柱痕はみられない。掘り方覆土は焼土

ブロック・炭化物を含む暗褐色土。柱痕の方が焼土が顕著。**（遺物出土状況）**出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第13号掘立柱建物址　（第109図、図版64）

（位置）A26・27B16グリッド。**（重複）**なし。**（規模および主軸方向）**東西２間（4.20m）×南北３間（5.80m）。N－7°－W。**（柱間寸法）**東西方向2.10m、南北方向1.80～2.00m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長方形。一辺46～80cm、深さ10～20cm。**（覆土および柱痕の有無）**掘り方覆土はやや粘性の強い暗褐色土。柱痕不明。**（遺物出土状況）**出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第14号掘立柱建物址　（第109図、図版64）

（位置）A27・28B17・18グリッド。**（重複）**なし。**（規模および主軸方向）**東西４間（9.60m）×南北３間（7.85m）。N－1°－W。総柱。西側南北柱穴列に対応するように小ピット列あり。**（柱間寸法）**東西方向2.35～2.40m、南北方向2.30～2.40m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長方形。一辺84～130cm、深さ６～56cm。**（覆土および柱痕の有無）**後世の削平により遺存状況はあまり良くないが、柱痕が確認できたのはＰ２・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ８・Ｐ10・Ｐ11・Ｐ14・Ｐ15・Ｐ16・Ｐ17・Ｐ20である。掘り方覆土は炭化材・炭化物を含む暗褐色土。柱を抜いた後、人為的に埋められた痕跡がみられる。**（遺物出土状況）**出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第15号掘立柱建物址　（第110図、図版64）

（位置）A27・28B16グリッド。**（重複）**なし。**（規模および主軸方向）**東西２間（3.60m）×南北３間（6.60m）。N－9°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.79～1.80m、南北方向1.80～2.30m。**（掘り方形態および規模）**基本的には方形。一辺48～90cm、深さ４～18cm、**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ１・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ６において柱痕がみられる。掘り方覆土は粘質の暗褐色土。**（遺物出土状況）**ほとんど出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第16号掘立柱建物址　（第108図、図版65）

（位置）A23B24・25グリッド。**（重複）**53号住、10号掘立と重複。両遺構より古い。**（規模および主軸方向）**東西３間（5.50m）×南北２間（4.20m）。N－8°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.80～1.90m、南北方向2.00～2.10m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺64～96cm、深さ30～40cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ13を除き柱痕がみられる。柱痕は焼土・炭化物を多量に含む暗褐色土。掘り方覆土は焼土小ブロック・炭化物粒を含む暗褐色土。**（遺物出土状況）**ほとんど出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第17号掘立柱建物址　（第110・278図、図版65）

（位置）A25・26B23グリッド。**（重複）**９・10号住と重複。両住居址より古い。**（規模および主軸方向）**東西３間か（5.80m）×南北２間（3.60m）。総柱。N－12°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.60～2.00m、南北方向1.60～2.00m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺58～70cm、深さ34～52cm。**（覆土および柱痕の有無）**柱痕は不明。掘り方覆土は暗黄褐色土、暗褐色土からなる。**（遺物出土状況）**Ｐ７から土師器甕片微量出土。**（遺物）**土師器甕Ａ。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期？。

第18号掘立柱建物址　（第110・278図、図版65・139）

（位置）A25B25グリッド。**（重複）**なし。**（規模および主軸方向）**東西２間（3.40m）×南北２間（3.20m）。N－6°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.60～1.70m、南北方向1.50～1.70m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺50～90cm、深さ26～40cm。**（覆土および柱痕の有無）**全て掘り方で柱痕はみられる。掘り方および柱痕覆土はともに灰褐色粘質土だが、柱痕には炭化物を多く含む。**（遺物出土状況）**Ｐ５覆土上面から須恵器高台坏出土。**（遺物）**須恵器高台坏Ｂ。**（時期）**不明。

第19号掘立柱建物址　（第110図、図版65）

（位置）A29B17・18グリッド。**（重複）**なし。大半が調査区域外にあり全容は不明。**（規模および主軸方向）**東西？間×南北？間。N－7°－W？。**（柱間寸法）**東西方向2.40m、南北方向不明。**（掘り方形態および規模）**方形か。一辺90cm、深さ56cm。**（覆土および柱痕の有無）**P3において柱痕がみられる。掘り方覆土は黄褐色土小ブロックを含む暗褐色土。柱痕も暗褐色土であるが炭化物を多く含む。**（遺物出土状況）**出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第20号掘立柱建物址　（第110図、図版65）

（位置）A22・23B25・26グリッド。**（重複）**31・35・107号住と重複。いずれの住居址より古い。**（規模および主軸方向）**東西2間（4.12m）×南北3間（4.70m）。N－7°－W。**（柱間寸法）**東西方向2.00～2.10m、南北方向1.55～1.60m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺44～79cm、深さ32～52cm。**（覆土および柱痕の有無）**残存する全ての掘り方において柱痕はみられる。柱痕は炭化物・焼土粒を含む暗褐色土。**（遺物出土状況）**細片微量出土。**（遺物）**復元できる遺物なし。**（時期）**不明。

第21号掘立柱建物址　（第108・278図、図版64）

（位置）A23・24B23・24グリッド。**（重複）**11・12・23号掘立と重複。11・22号住より新しい。23号掘立との新旧関係は不明。**（規模および主軸方向）**東西3間（4.30m）×南北4間（6.20m）。N－14°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.40m、南北方向1.20～1.80m。**（掘り方形態および規模）**円形あるいは楕円形。径37～88cm、深さ40～50cm。**（覆土および柱痕の有無）**掘り方覆土は焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色土。柱痕は不明。**（遺物出土状況）**須恵器細片微量出土。**（遺物）**須恵器蓋A、土師器皿。**（時期）**不明。

第22号掘立柱建物址　（第108図、図版64）

（位置）A23・24B23・24グリッド。**（重複）**11・21・23号掘立と重複。21号掘立より古く、11号掘立より新しい。23号掘立との新旧関係は不明。**（規模および主軸方向）**東西2間（3.60m）×南北3間（4.80m）。N－12°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.70～1.80m、南北方向1.50～1.60m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長楕円形。一辺50～126cm、深さ16～50cm。**（覆土および柱痕の有無）**掘り方覆土は暗褐色土で、炭化物粒を含む。柱痕は不明。**（遺物出土状況）**ほとんど出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第23号掘立柱建物址　（第108図、図版64）

（位置）A23・24B23・24グリッド。**（重複）**11・21・22掘立、52号住と重複。52号住より古く、11号掘立より新しい。21・22号掘立との新旧関係は不明。**（規模および主軸方向）**東西3間（4.80m）×南北3間（4.80m）。N－15°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.40～1.80m、南北方向1.20～1.80m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長楕円形。一辺46～84cm、深さ24～48cm。**（覆土および柱痕の有無）**掘り方覆土は暗褐色土で炭化物粒を少量含む。柱痕は不明。**（遺物出土状況）**出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第24号掘立柱建物址　（第111図、図版65）

（位置）A23・24B24・25グリッド。**（重複）**25・48号住と重複。両住居址より古い。**（規模および主軸方向）**東西3間（6.90m）×南北2間（4.10m）。N－7°－W。**（柱間寸法）**東西方向2.20～2.25m、南北方向1.80～2.00m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺74～112cm、深さ28～44cm。**（覆土および柱痕の有無）**掘り方覆土、柱痕とも不明。**（遺物出土状況）**細片微量出土。**（遺物）**復元実測できるものなし。**（時期）**不明。

第25号掘立柱建物址　（第111図、図版66）

（位置）A24・25B24・25グリッド。**（重複）**32・46・47・49号住、26・27号掘立と重複。いずれの住居址より古く、

両掘立より新しい。**（規模および主軸方向）**東西３間（6.45m）×南北２間（4.30m）。Ｎ－14°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.50～3.00m、南北方向2.10～2.20m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長方形。一辺62～104cm、深さ68～70cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ２・Ｐ３・Ｐ８・Ｐ10において柱痕がみられる。掘り方覆土は焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色土。**（遺物出土状況）**土師器等の細片微量出土。Ｐ６覆土中層から鉄製品出土。**（遺物）**土器類は復元実測できる遺物なし。鉄製品では釘・閂金具と思われるものがある。**（時期）**不明。

第26号掘立柱建物址　（第111図、図版66）

（位置）Ａ24・25Ｂ24・25グリッド。**（重複）**32・46・47・49号住、25・27号掘立と重複。いずれの住居址および25号掘立より古く、27号掘立より新しい。**（規模および主軸方向）**東西３間（5.85m）×南北３間（5.00m）。Ｎ－７°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.80～2.00m、南北方向1.70～1.90m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長方形。一辺66～92cm、深さ50～76cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ16において柱痕がみられる。掘り方覆土は焼土粒を含む暗褐色土。**（遺物出土状況）**土師器等の細片少量出土。Ｐ16から鉄製品出土。**（遺物）**鉄製紡錘車の紡輪。**（時期）**不明。

第27号掘立柱建物址　（第111図、図版66）

（位置）Ａ24・25Ｂ24・25グリッド。**（重複）**32・46・47・49号住、25・26号掘立と重複。いずれの住居址および掘立より新しい。**（規模および主軸方向）**東西３間（5.15m）×南北２間（4.15m）。Ｎ－７°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.60～1.80m、南北方向1.90～2.20m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺62～104cm、深さ46～52cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ24に柱痕あり。掘り方および柱痕覆土ともに焼土小ブロックと炭化物を多量に含む暗褐色土。**（遺物出土状況）**土師器等細片微量出土。**（遺物）**復元実測できる遺物なし。**（時期）**不明。

第28号掘立柱建物址　（第112図、図版66・139）

（位置）Ａ21Ｂ24グリッド。**（重複）**27・68・79号住、29号掘立と重複。いずれの住居址より古く、29号掘立より新しい。**（規模および主軸方向）**東西３間（6.20m）×南北２間（3.10m）。Ｎ－11°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.70～2.30m、南北方向1.40～1.50m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長方形。一辺64～98cm、深さ20～30cm。**（覆土および柱痕の有無）**掘り方覆土、柱痕とも不明。**（遺物出土状況）**Ｐ10覆土内から土師器片、黒色土器坏片微量出土。**（遺物）**黒色土器坏。**（時期）**不明。

第29号掘立柱建物址　（第112図、図版66）

（位置）Ａ21Ｂ24グリッド。**（重複）**28・68・79・91・93号住、28号掘立と重複。いずれの遺構より古い。**（規模および主軸方向）**東西２間（4.50m）×南北２間（4.10m）。Ｎ－５°－W。**（柱間寸法）**東西方向2.00～2.30m、南北方向1.80～2.20m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長方形。一辺79～114cm、深さ18～44cm。**（覆土および柱痕の有無）**掘り方覆土、柱痕とも不明。**（遺物出土状況）**土師器細片微量出土。**（遺物）**復元実測できる遺物なし。**（時期）**不明。

第30号掘立柱建物址　（第107図、図版66）

（位置）Ａ21・22Ｂ24グリッド。**（重複）**９・31号掘立と重複。前者より新しく、後者より古い。**（規模および主軸方向）**東西２間（3.20m）×南北３間（4.75m）。Ｎ－15°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.50～1.70m、南北方向1.50～1.60m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺54～98cm、深さ12～38cm。**（覆土および柱痕の有無）**掘り方覆土は、炭化物粒を含む暗褐色土。柱痕は不明瞭。**（遺物出土状況）**土師器および須恵器の細片が微量出土。**（遺物）**復元実測できる遺物なし。**（時期）**不明。

第31号掘立柱建物址　（第107・278図、図版66）

（位置）Ａ21・22Ｂ24グリッド。**（重複）**９・30・34号掘立、85号住と重複。いずれの遺構より新しい。**（規模およ**

び主軸方向）東西２間（4.50m）×南北３間（5.20m）。Ｎ－12°－Ｗ。**（柱間寸法）**東西方向2.10～2.30m、南北方向1.30～2.10m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長方形。一辺60～108cm、深さ25～50cm。**（覆土および柱痕の有無）**掘り方覆土は炭化物粒を含む暗褐色土。柱痕はＰ23・Ｐ24・Ｐ29・Ｐ30においてみられる。掘り方覆土より若干暗い暗褐色土。**（遺物出土状況）**Ｐ23から土師器片微量出土。**（遺物）**土師器坏Ａ。**（時期）**不明。

第32号掘立柱建物址　（第106図、図版66）

（位置）Ａ26Ｂ24グリッド。**（重複）**掘り方どうし直接の切り合いはないが、６号掘立と位置的に重複。新旧関係は不明。**（規模および主軸方向）**東西２間（3.40m）×南北２間（3.70m）。Ｎ－14°－Ｗ。**（柱間寸法）**東西方向1.60～1.90m、南北方向1.64～1.90m。**（掘り方形態および規模）**円形あるいは楕円形。径28～38cm、深さ８～20cm。**（覆土および柱痕の有無）**掘り方覆土は粘性の強い灰色がかった暗褐色土。柱痕は不明。**（遺物出土状況）**出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第33号掘立柱建物址　（第112図、図版66）

（位置）Ａ22・23Ｂ25・26グリッド。**（重複）**35･99･122･123・124号住と重複。いずれの住居址より古い。**（規模および主軸方向）**東西２間（4.20m）×南北３間（6.90m）。Ｎ－７°－Ｗ。**（柱間寸法）**東西方向2.00～2.20m、南北方向2.00～2.60m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺68～104cm、深さ54～66cm。**（覆土および柱痕の有無）**掘り方覆土は焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色土。Ｐ３・Ｐ５において柱痕がみられる。**（遺物出土状況）**土師器等の細片と鉄製品が微量出土。**（遺物）**釘。**（時期）**不明。

第34号掘立柱建物址　（第112図、図版66）

（位置）Ａ22Ｂ24・25グリッド。**（重複）**59・85号住、31号掘立と重複。いずれの遺構より古い。**（規模および主軸方向）**東西３間（5.40m）×南北２間（4.60m）。Ｎ－13°－Ｗ。**（柱間寸法）**東西方向1.80～1.90m、南北方向2.00～2.50m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺76～92cm、深さ20～37cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ１・Ｐ６において柱痕がみられる。掘り方覆土は焼土粒を多量に含む暗褐色土、柱痕は灰・焼土ブロックを含む。**（遺物出土状況）**出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第35号掘立柱建物址　（第113図、図版66）

（位置）Ａ16・17Ｂ22グリッド。**（重複）**287･329･342･351号住と重複。287･342号住より古く、329･351号住より新しい。**（規模および主軸方向）**東西３間（4.80m）×南北２間（3.80m）。Ｎ－３°－Ｗ。**（柱間寸法）**東西方向1.35～2.10m、南北方向1.80～1.90m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺48～62cm、深さ35～46cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ７・Ｐ８において柱痕確認。掘り方覆土は少量の焼土粒。炭化物粒を含む暗褐色土で、柱痕は焼土小ブロック・炭化物を含む暗褐色土。**（遺物出土状況）**少量出土。**（遺物）**黒色土器坏。**（時期）**宮ノ前Ⅳ期か。

第36号掘立柱建物址　（第113図、図版66）

（位置）Ａ18・19Ｂ23グリッド。**（重複）**54号掘立、18号溝と重複。18号溝より新しい。54号掘立との新旧関係は不明。**（規模および主軸方向）**東西３間（4.80m）×南北２間（4.20m）。Ｎ－１°－Ｗ。**（柱間寸法）**東西方向1.45～1.60m、南北方向2.00～2.10m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺64～94cm、深さ30～52cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ２･Ｐ10を除き柱痕がみられる。掘り方覆土は黄褐色土小ブロック・焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色土で、柱痕は焼土粒を多く含む暗褐色土。**（遺物出土状況）**土師器等の細片が微量出土。**（遺物）**復元実測できる遺物なし。**（時期）**不明。

第37号掘立柱建物址　（第113図、図版66・67）

（位置）A17・18B23・24グリッド。**（重複）**296号住と重複。296号住より古い。**（規模および主軸方向）**東西２間（4.00m）×南北３間（4.10m）。N－8°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.90～2.10m、南北方向1.30～1.60m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺60～88cm、深さ14～50cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ６において柱痕がみられる。掘り方覆土は黄褐色土小ブロックを含む暗褐色土で、柱痕は炭化物を少量含む暗褐色土。**（遺物出土状況）**Ｐ３等の掘り方から土師器細片等微量出土。**（遺物）**復元実測できる遺物なし。**（時期）**不明。

第38号掘立柱建物址　（第113図、図版67・139）

（位置）A17・18B24グリッド。**（重複）**294･359号住と重複。両住居址より古い。**（規模および主軸方向）**東西３間（4.65m）×南北２間（3.15m）。N－12°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.50～1.60m、南北方向1.50～1.60m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺60～80cm、深さ13～39cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ７において柱痕がみられる。掘り方覆土は焼土粒。炭化物粒を微量含む暗褐色土で、柱痕はややしまりの弱い暗褐色土。**（遺物出土状況）**少量出土。**（遺物）**土師器坏Ａ（墨書あり）。**（時期）**宮ノ前Ⅴ期。

第39号掘立柱建物址　（第113図、図版67）

（位置）A18・19B25・26グリッド。**（重複）**384号住と重複。384号住より古い。**（規模および主軸方向）**東西３間（4.70m）×南北３間（7.10m）。N－8°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.40～1.60m、南北方向2.20～2.40m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長方形。一辺62～102cm、深さ20～50cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ９を除いて全ての掘り方において柱痕がみられる。掘り方覆土は黄褐色土粒を多く含む暗褐色土で、柱痕は焼土粒・焼土小ブロックを多量に含む暗褐色土。**（遺物出土状況）**Ｐ１等から土師器細片、須恵器細片が微量出土。**（遺物）**復元実測できる遺物なし。**（時期）**不明。

第40号掘立柱建物址　（第113図、図版67）

（位置）A22B26・27グリッド。**（重複）**82･112･121号住、41号掘立と重複。いずれの住居址より古く、41号掘立より新しい。**（規模および主軸方向）**東西２間（4.15m）×南北？間。N－6°－W。41号掘立は建替えに伴うものだろう。**（柱間寸法）**東西方向2.10m、南北方向1.85～1.90m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長方形。一辺80～110cm、深さ36～44cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４・Ｐ５において柱痕がみられる。掘り方覆土は炭化物粒・黄褐色土小ブロックを含む暗褐色土で、柱痕は炭化物粒を多く含むややしまりの弱い暗褐色土。**（遺物出土状況）**Ｐ２・Ｐ３等から土師器細片が微量出土。**（遺物）**復元実測できる遺物なし。**（時期）**不明。

第41号掘立柱建物址　（第113図、図版67）

（位置）A22・23B26・27グリッド。**（重複）**82･112･121･129号住、40号掘立と重複。いずれの住居址、掘立より古いが、129号住との新旧関係は不明。**（規模および主軸方向）**東西２間（4.20m）×南北３間（5.25m）。N－6°－W。40号掘立は建替えに伴うものだろう。**（柱間寸法）**東西方向2.00～2.20m、南北方向1.75～1.80m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺66～84cm、深さ17～30cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ8のみ柱痕がみられる。掘り方覆土は炭化物粒・黄褐色土小ブロックを少量含む暗褐色土。柱痕は炭化物粒を含む暗褐色土。**（遺物出土状況）**出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第42号掘立柱建物址　（第114図、図版67）

（位置）A17B22・23グリッド。**（重複）**295号住と重複。295号住より古い。**（規模および主軸方向）**東西２間（3.20m）×南北２間（3.80m）。総柱か。N－12°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.40～1.75m、南北方向1.70～2.00m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長方形。一辺54～82cm、深さ20～26cm。**（覆土および柱痕の有無）**掘り方覆土は

炭化物粒を多く含む暗黄褐色土。明確な柱痕は確認できず。**（遺物出土状況）**出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第43号掘立柱建物址　（第114図、図版67）

（位置）A20B25・26グリッド。**（重複）**105・163号住と重複。両住居址より古い。**（規模および主軸方向）**東西３間（6.50m）×南北３間（5.90m）。N－13°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.80～2.70m、南北方向1.45～2.20m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長方形。一辺80～132cm、深さ36～56cm。**（覆土および柱痕の有無）**全ての掘り方において柱痕がみられる。掘り方覆土は炭化物粒・黄褐色土小ブロックを含む暗褐色土。柱痕は焼土粒・炭化物粒を多量に含む暗褐色土。**（遺物出土状況）**出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第44号掘立柱建物址　（第114図、図版67）

（位置）A20B25グリッド。**（重複）**167号住と重複。167号住より古い。**（規模および主軸方向）**東西３間（6.00m）×南北２間（3.90m）。N－9°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.80～2.00m、南北方向1.80～2.00m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺82～114cm、深さ23～50cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ３のみ明確な柱痕あり。掘り方覆土は炭化物粒・焼土粒を微量含む暗褐色土。柱痕は炭化物粒を多量に含むややしまりの弱い暗褐色土。**（遺物出土状況）**出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第45号掘立柱建物址　（第114図、図版67）

（位置）A17B21グリッド。**（重複）**260号住と重複。260号住より古い。**（規模および主軸方向）**東西１間（2.20m）×南北１間（2.30m）か。N－6°－W。**（柱間寸法）**東西方向2.20m、南北方向2.20～2.30m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長方形。一辺58～76cm、深さ14～30cm。**（覆土および柱痕の有無）**掘り方覆土および柱痕とも不明。**（遺物出土状況）**出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第46号掘立柱建物址　（第115図、図版68）

（位置）A16・17B21グリッド。**（重複）**260・273号住と重複。両住居址より古い。**（規模および主軸方向）**東西？間×南北２間（4.40m）。N－2°－W。**（柱間寸法）**東西方向2.10～2.30m、南北方向2.40m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長方形。一辺63～92cm、深さ18～70cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４において柱痕あり。掘り方覆土および柱痕ともに暗褐色土だが、掘り方覆土はしまりが弱い。**（遺物出土状況）**出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第47号掘立柱建物址　（第115図、図版68）

（位置）A19・20B22グリッド。**（重複）**372・373・377・399号住と重複。399号住より新しく、他の住居址より古い。**（規模および主軸方向）**東西２間（4.80m）×南北２間（5.20m）。N－8°－W。**（柱間寸法）**東西方向2.30～2.40m、南北方向2.30～2.60m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺68～92cm、深さ44～52cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ５・Ｐ７において柱痕がみられる。掘り方覆土および柱痕ともに暗褐色土であるが、柱痕には焼土粒が含まれる。**（遺物出土状況）**出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第48号掘立柱建物址　（第115図、図版68）

（位置）A19・20B26グリッド。**（重複）**なし。**（規模および主軸方向）**東西３間（4.40m）×南北２間（4.20m）。N－10°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.00～2.10m、南北方向2.00～2.20m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺56～100cm、深さ21～48cm。**（覆土および柱痕の有無）**掘り方覆土は自然の堆積状況を示し、炭化物粒を多く含む暗褐色土。明確な柱痕はみられない。**（遺物出土状況）**Ｐ２覆土中層から鉄製品出土。**（遺物）**鉄製鍋または釜の脚部（鋳物）。**（時期）**不明。

第49号掘立柱建物址　（第115図、図版68）

（位置）A25B26・27グリッド。**（重複）**396号住と重複。396号住より古い。**（規模および主軸方向）**東西３間(6.20m)×南北２間（4.20m）。N－9°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.90～2.20m、南北方向1.80～2.20m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺58～72cm、深さ16～34cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ８・Ｐ10において柱痕がみられる。掘り方覆土は粒子の細かい砂質の暗褐色土。柱痕も掘り方同様暗褐色土であるが、炭化物粒を多く含む。**（遺物出土状況）**土師器細片微量出土。**（遺物）**復元実測できる遺物なし。**（時期）**不明。

第50号掘立柱建物址　（第116図、図版68）

（位置）A18・19B22グリッド。**（重複）**363・383・385号住と重複。いずれの住居址より古い。**（規模および主軸方向）**東西２間（4.20m）×南北２間（6.00m）。N－8°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.90～2.20m、南北方向2.80～3.00m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺66～90cm、深さ50～76cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ２・Ｐ３・Ｐ８において柱痕がみられる。掘り方覆土はやや茶色がかった暗褐色土で炭化物粒を少量含む。柱痕は焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色土。**（遺物出土状況）**土師器細片、須恵器細片微量出土。**（遺物）**復元実測できる遺物なし。**（時期）**不明。

第51号掘立柱建物址　（第116図、図版68・139）

（位置）A18・19B26・27グリッド。**（重複）**364・365号住と重複。両住居址より古い。**（規模および主軸方向）**東西２間（4.20m）×南北２間（4.00m）か。N－7°－W。**（柱間寸法）**東西方向2.00～2.20m、南北方向1.80～2.20m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺84～142cm、深さ24～60cm。**（覆土および柱痕の有無）**掘り方覆土は自然堆積を示し、焼土粒を少量含む暗褐色土。明確な柱痕はみられない。**（遺物出土状況）**土師器細片微量出土。**（遺物）**土師器皿。**（時期）**宮ノ前Ⅸ期？。

第52号掘立柱建物址　（第116図、図版68）

（位置）A18B26・27グリッド。**（重複）**303号住、性格不明ピットと重複。両遺構より古い。**（規模および主軸方向）**東西２間（4.40m）×南北２間（4.70m）。N－15°－W。**（柱間寸法）**東西方向2.20～2.40m、南北方向2.30～2.40m。**（掘り方形態および規模）**方形あるいは長方形。一辺70～102cm、深さ20～25cm。**（覆土および柱痕の有無）**Ｐ１・Ｐ７・Ｐ８において柱痕確認。掘り方覆土は焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色土。柱痕は焼土粒・炭化物粒を多量に含む暗褐色土。**（遺物出土状況）**出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第53号掘立柱建物址　（第116図、図版69）

（位置）A18B26グリッド。**（重複）**292号住と重複。292号住より新しいと思われる。**（規模および主軸方向）**東西２間（4.35m）×南北１間（2.70m）。N－24°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.80～2.20m、南北方向2.50～2.70m。**（掘り方形態および規模）**不整円形。径40～90cm、深さ10～28cm。**（覆土および柱痕の有無）**掘り方覆土、柱痕とも不明。**（遺物出土状況）**出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第54号掘立柱建物址　（第116図、図版69）

（位置）A27・28B23グリッド。**（重複）**296・360号住、36号掘立と重複。両住居址より古いが、36号掘立との新旧関係は不明。**（規模および主軸方向）**東西２間（3.30m）×南北？間。N－7°－W。**（柱間寸法）**東西方向1.50～1.80m、南北方向1.80m。**（掘り方形態および規模）**方形。一辺50～66cm、深さ16～20cm。**（覆土および柱痕の有無）**掘り方覆土は炭化物粒を含む砂質の暗褐色土。明確な柱痕はみられない。**（遺物出土状況）**出土せず。**（遺物）**なし。**（時期）**不明。

第２表　宮ノ前遺跡掘立柱建物址データ

掘立番号	位　置(グリッド)	規　　模（m）	主軸方位	面　積	掘り方平面形	備　　考
1	A21・22B22	3間×3間　4.32×4.40	N-10°-W	19.01㎡	方形	掘り方内に多量の炭化物。柱痕明確。
2	A22・23B22・23	3間×3間　4.44×4.44	N-10°-W	19.71㎡	方形	3・16・41住より古い。 掘り方内に多量の焼土ブロックと炭化物を含む。
3	A26B21・22	3間×2間　6.20×4.20	N-15°-W	26.04㎡	方形	17住、4溝址より古い。
4	A27B26	2間×3間　4.20×6.00	N-12°-W	25.20㎡	方形	14住より新しい。
5	A27B24・25	3間×2間 10.80×3.20	N-14°-W	34.56㎡	円形・楕円形	88住と重複。新旧関係不明。
6	A25・26B24	2間×3間　3.30×5.90	N-14°-W	19.47㎡	円形・楕円形	32掘立と重複。新旧関係不明。
7	A24B22	3間×3間　4.80×4.60	N-7°-W	22.08㎡	方形	12掘立より新しい。 掘り方内に多量の焼土ブロックと炭化物を含む。
8	A21B22・23	3間×3間　4.70×4.60	N-7°-W	21.62㎡	方形(溝もち)	5・8住より古い。 掘り方内に多量の炭化物を含む。
9	A21・22B23・24	2間×3間　3.90×5.20	N-3°-W	20.28㎡	方形	13溝址、30・31掘立より古い。 掘り方内に炭化物含む。
10	A22・23B24・25	3間×2間　6.50×4.50	N-11°-W	29.25㎡	方形	53・94住より古く、16掘立より新しい。 掘り方内に多量の焼土ブロックと炭化物を含む。
11	A23・24B23・24	3間×3間　5.30×6.40	N-6°-W	33.92㎡	方形	21・22掘立、52住より古い。23掘立との新旧関係は不明。 掘り方内に多量の焼土ブロックと炭化物を含む。
12	A24B22	2間×2間　3.94×3.92	N-4°-W	15.44㎡	方形	総柱。7掘立より古い。 掘り方内に焼土ブロックと炭化物を含む。
13	A26・27B16	2間×3間　4.20×5.80	N-7°-W	24.36㎡	方形	
14	A27・28B17・18	4間×3間　9.60×7.85	N-1°-W	75.36㎡	方形	総柱。本遺跡最大規模。掘り方内に炭化物を含む。 柱を抜き人為的に埋め戻した痕跡がみられる。
15	A27・28B16	2間×3間　3.60×6.60	N-9°-W	23.76㎡	方形	
16	A23B24・25	3間×2間　5.50×4.20	N-8°-W	23.10㎡	方形	53住、10掘立より古い。
17	A25・26B23	3間×2間　5.80×3.60	N-12°-W	20.88㎡	方形	総柱。9・10住より古い。
18	A25B25	2間×2間　3.40×3.20	N-6°-W	10.88㎡	方形	
19	A29B17・18	－　　－	－	－	方形？	大半が調査区域外にあり。掘り方内炭化物を含む。
20	A22・23B25・26	2間×3間　4.12×4.70	N-7°-W	19.36㎡	方形	31・35・107住より古い。掘り方内に焼土と炭化物含む。
21	A23・24B23・24	3間×4間　4.30×6.20	N-14°-W	26.66㎡	円形・楕円形	11・12住より新しく、23住との新旧関係不明。 掘り方内に焼土粒と炭化物含む。
22	A23・24B23・24	2間×3間　3.60×4.80	N-12°-W	17.28㎡	方形	21掘立より古く、11掘立より新しい。 23住との新旧関係不明。
23	A23・24B23・24	3間×3間　4.80×4.80	N-15°-W	23.04㎡	方形	52住より古く、11掘立より新しい。21・22掘立との新旧関係は不明。掘り方内に少量炭化物含む。
24	A23・24B24・25	3間×2間　6.90×4.10	N-7°-W	28.29㎡	方形	25・48住より古い。
25	A24・25B24・25	3間×2間　6.45×4.30	N-14°-W	27.74㎡	方形	32・46・47・49住より古く、26・27掘立より新しい。 掘り方内に焼土と炭化物含む。
26	A24・25B24・25	3間×3間　5.85×5.00	N-7°-W	29.25㎡	方形	32・46・47・49住、25掘立より古く、27掘立より新しい。 掘り方内に焼土を含む。
27	A24・25B24・25	3間×2間　5.15×4.15	N-7°-W	21.37㎡	方形	32・46・47・49住、25・26掘立より新しい。 掘り方内に多量の焼土ブロックと炭化物を含む。
28	A21B24	3間×2間　6.20×3.10	N-11°-W	19.22㎡	方形	27・68・79住より古く、29掘立より新しい。
29	A21B24	2間×2間　4.50×4.10	N-5°-W	18.45㎡	方形	28・68・79・91・93住、28掘立より古い。
30	A21・22B24	2間×3間　3.20×4.75	N-15°-W	15.20㎡	方形	9掘立より新しく、31掘立より古い。
31	A21・22B24	2間×3間　4.50×5.20	N-12°-W	23.40㎡	方形	85住、9・30・34掘立より新しい。
32	A26B24	2間×2間　3.40×3.70	N-14°-W	12.58㎡	円形・楕円形	6掘立と重複するが、新旧関係不明。
33	A22・23B25・26	2間×3間　4.20×6.90	N-7°-W	28.98㎡	方形	35・99・122・123・124住より古い。 掘り方内に焼土と炭化物含む。
34	A22B24・25	3間×2間　5.40×4.60	N-13°-W	24.84㎡	方形	59・85住、31掘立より古い。掘り方内に多量の焼土を含み、柱痕には灰と焼土ブロックを含む。
35	A16・17B22	3間×2間　4.80×3.80	N-3°-W	18.24㎡	方形	287・342住より古く、329・351住より新しい。 掘り方内に焼土と炭化物含む。
36	A18・19B23	3間×2間　4.80×4.20	N-1°-W	20.16㎡	方形	18溝址より新しく、54掘立との新旧関係は不明。 掘り方内に焼土粒と炭化物含む。
37	A17・18B23・24	2間×3間　4.00×4.10	N-8°-W	16.40㎡	方形	296住より古い。柱痕に少量の炭化物を含む。
38	A17・18B24	3間×2間　4.65×3.15	N-12°-W	14.65㎡	方形	294・359住より古い。 掘り方内に微量の焼土粒と炭化物を含む。
39	A18・19B25・26	3間×3間　4.70×7.10	N-8°-W	33.37㎡	方形	384住より古い。柱痕内に多量の焼土ブロックを含む。
40	A22B26・27	2間×－　4.15×－	N-6°-W	－	方形	82・112・121住より古く、41掘立より新しい。 掘り方内と柱痕内に炭化物を含む。

掘立番号	位　置(グリッド)	規　　模（m）	主軸方位	面　積	掘り方平面形	備　　考
41	A22・23B26・27	2間×3間　4.20×5.25	N-6°-W	22.05㎡	方形	82・112・121住、40掘立より古く、129住との新旧関係は不明。 柱痕に炭化物含む。
42	A17B22・23	2間×2間　3.20×3.80	N-12°-W	12.16㎡	方形	295住より古い。掘り方内に多量の炭化物を含む。
43	A20B25・26	3間×3間　6.50×5.90	N-13°-W	38.35㎡	方形	105・163住より古い。 掘り方内に炭化物、柱痕内に多量の焼土と炭化物を含む。
44	A20B25	3間×2間　6.00×3.90	N-9°-W	23.40㎡	方形	167住より古い。掘り方内に微量の焼土粒と炭化物を含む。 柱痕には多量の炭化物を含む。
45	A17B21	1間×1間　2.20×2.30	N-6°-W	5.60㎡	方形	260住より古い。
46	A16・17B21	－×2間　－×4.40	N-2°-W	－	方形	260・273住より古い。
47	A19・20B22	2間×2間　4.80×5.20	N-8°-W	24.96㎡	方形	372・373・377住より古く、399住より新しい。 柱痕に焼土粒含む。
48	A19・20B26	3間×2間　4.40×4.20	N-10°-W	18.48㎡	方形	掘り方内に炭化物含む。鍋足出土。
49	A25B26・27	3間×2間　6.20×4.20	N-9°-W	26.04㎡	方形	396住より古い。
50	A18・19B22	2間×2間　4.20×6.00	N-8°-W	25.20㎡	方形	363・383・385住より古い。 柱痕に焼土粒と炭化物を含む。
51	A18・19B26・27	2間×2間　4.20×4.00	N-7°-W	16.80㎡	方形	364・365住より古い。 掘り方内に少量の焼土粒を含む。
52	A18B26・27	2間×2間　4.40×4.70	N-15°-W	20.68㎡	方形	303住より古い。掘り方内には焼土粒と炭化物を含み、柱痕 にも多量の焼土粒と炭化物を含む。
53	A18B26	2間×1間　4.35×2.70	N-24°-W	11.75㎡	円形	292住より新しい。
54	A27・28B23	2間×－　3.30×－	N-7°-W	－	方形	296・360住より古く、36掘立との新旧関係は不明。 掘り方内に炭化物を含む。

第３節

土　　坑

第１号土坑　（第117・280図、図版69・139）

（位置）Ａ24Ｂ22グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸1.17ｍ×短軸1.12ｍ。深さ６～14㎝。平面形は長楕円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面は平坦である。本来はもう少し上部から掘り込まれていたと思われる。覆土は粘質の弱い暗褐色土である。**（遺物出土状況）**大小２個体の深鉢形土器がほぼ底面に接するレベルで口縁部を合わせ、潰れた状態で出土している。甕棺の可能性が強い。覆土内にも骨粉状のものが微量に含まれる。**（遺物）**深鉢形土器。**（時期）**縄文時代晩期～弥生時代前期。

第２号土坑　（第117図）

（位置）Ａ26Ｂ20グリッド。**（重複）**４・８号溝と重複。新旧関係ははっきりとしない。両溝址の関連施設かもしれない。**（規模および形状）**長軸1.76ｍ×短軸1.74ｍ。深さ78㎝。平面形は方形を呈する。壁の立ち上がりは急で、テラスをもち、断面形は鍋底状を呈する。底面にはやや凹凸がみられる。覆土は基本的に４層に分かれ、暗褐色粘質土と砂質土が互層をなす。下層へいくにしたがい鉄分の沈殿が顕著で、拳大～人頭大の礫が多数混入している。**（遺物出土状況）**出土遺物はほとんどない。**（時期）**不明。

第３号土坑　（第117・280図、図版69）

（位置）Ａ24Ｂ23グリッド。**（重複）**10号溝に一部切られる。**（規模および形状）**長軸1.12ｍ×短軸1.12ｍ。深さ45㎝。平面形はほぼ円形を呈する。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面は平坦である。覆土は粘性の弱い暗褐色土である。**（遺物出土状況）**覆土中層から縄文土器片が集中して出土。**（遺物）**深鉢形土器。**（時期）**縄文時代晩期～弥生時代前期。

第４号土坑　（第117・280図、図版69・139）

（位置）Ａ26Ｂ16・17グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸1.30ｍ×短軸1.12ｍ。深さ40㎝。平面形は長方形を呈する。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面は平坦である。覆土は基本的に２層に分かれ、炭化物を多量に含む暗褐色土である。**（遺物出土状況）**遺物は第１層の下面から主に出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・鉢ＡⅠ、円筒土器、須恵器坏・高台坏Ａ・長頸壷。**（時期）**宮ノ前Ⅵ～Ⅶ期。

第５号土坑　（第117・280図、図版69・139）

（位置）Ａ26Ｂ15グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸1.26ｍ×短軸1.16ｍ。深さ10㎝。平面形は楕円形を呈する。上部はほとんど削平され、下部のみが残存。壁の立ち上がりはやや緩やかで、断面形は皿状を呈する。底面は平坦である。覆土は１層のみで暗褐色粘質土である。**（遺物出土状況）**底面にほぼ接する状態で深鉢形土器一括が出土。**（遺物）**深鉢形土器。**（時期）**十三菩提式土器が共伴する。縄文時代前期末か。

第６号土坑　（第117・281図、図版139）

（位置）Ａ27Ｂ16グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸0.84ｍ×短軸0.83ｍ。深さ26㎝。平面形はほぼ円形を呈する。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面は平坦である。覆土は基本的に２層に分かれ上層は暗褐色土、下層は白色粘土塊を含む暗黄褐色土で、いずれも礫を少量含む。**（遺物出土状況）**下層の底面近くのレベルに縄文土器片が散乱する。**（遺物）**深鉢形土器。**（時期）**縄文時代前期末。

第７号土坑　（第118図）

（位置）Ａ27Ｂ17グリッド。**（重複）**８号土坑を切る。**（規模および形状）**長軸1.22ｍ×短軸1.17ｍ。深さ32㎝。平面形は方形を呈する。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面は平坦である。覆土は基本的に２層に分かれ、やや灰色味かかる暗褐色土で礫を少量含む。**（遺物出土状況）**土師器片が少量出土。**（時期）**おそらく平安時代の所産であるが詳細は不明。

第８号土坑　（第118図）

（位置）Ａ27Ｂ17グリッド。**（重複）**７号土坑に切られる。**（規模および形状）**南北軸0.98ｍ。深さ18㎝。平面形は方形を呈すると思われる。本来はもう少し上部から掘り込まれていたであろう。壁の立ち上がりはやや急で、断面形は鍋底状を呈する。底面はほぼ平坦である。覆土は基本的に２層に分かれ、７号土坑の覆土と類似した灰色味かかる暗褐色土である。**（遺物出土状況）**覆土中から土師器片が少量出土。**（時期）**７号土坑と同様に平安時代の所産と思われるが詳細は不明。

第９号土坑　（第118図）

（位置）Ａ27Ｂ17グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸1.20ｍ×短軸1.04ｍ。深さ20㎝。平面形は方形を呈する。本址も上半部の大半を削平され下半部のみ残存。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面は平坦である。覆土は基本的に２層に分かれ、灰色味かかる暗褐色土で、礫の混入が顕著。**（遺物出土状況）**覆土上層から土師器片が少量出土し、下層には縄文時代土器片がわずかに出土。**（時期）**詳細は不明。平安時代の所産か。

第10号土坑　（第118図）

（位置）Ａ28Ｂ15グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸1.00ｍ×短軸0.52ｍ。深さ32㎝。平面形は長楕円形を呈する。壁の立ち上がりはやや急で、断面形は皿状を呈する。底面は平坦である。覆土は１層でやや粘質の強い暗褐色土である。**（遺物出土状況）**遺物の出土は特にみられない。**（時期）**不明。

第11号土坑　（第118図）

（位置）Ａ27Ｂ15グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸1.01ｍ×短軸0.84ｍ。深さ10㎝。平面形は長楕円形を呈する。上半部のほとんどが削平され、浅い凹状となっている。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状を呈する。底面には凹凸をもつ。覆土は１層のみで、やや粘質の強い暗褐色土である。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第12号土坑　（第118図）

（位置）Ａ27Ｂ15グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸1.35ｍ×短軸1.25ｍ。深さ18㎝。平面形は楕円形を呈する。本址もかなりの削平をうけている。壁の立ち上がりはやや急で、断面形は皿状を呈する。底面は平坦である。覆土は基本的に１層で、やや粘質の強い暗褐色土である。拳大の礫を少量含む。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第13号土坑　（第118図）

（位置）Ａ27Ｂ15グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸0.75ｍ×短軸0.53ｍ。深さ22㎝。平面形は長楕円形を呈する。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面はほぼ平坦。覆土は基本的に１層で、粘質の強い暗褐色土である。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第14号土坑　（第118図）

（位置）A27B15グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸0.68m×短軸0.47m。深さ35cm。平面形は長方形を呈する。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面は平坦である。覆土は基本的に1層で、やや灰色味かかる暗褐色粘質土である。礫を少量含む。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第15号土坑　（第118図）

（位置）A27B15グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸1.05m×短軸0.50m。深さ12cm。平面形は長楕円形を呈する。壁はやや緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面はやや凹凸をもつ。覆土は1層で、暗褐色粘質土である。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第16号土坑　（第118図）

（位置）A27B15グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸0.99m×短軸0.48m。深さ15cm。平面形は長楕円形を呈する。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状を呈する。底面は平坦である。覆土は1層で、暗褐色粘質土である。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第17号土坑　（第118図）

（位置）A27B15グリッド。**（重複）**18･19号土坑と重複。両土坑より新しい。**（規模および形状）**長軸0.87m×短軸0.86m。深さ25cm。平面形は方形を呈する。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面は平坦である。覆土は基本的に2層に分かれ、やや灰色味かかる暗褐色粘質土である。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第18号土坑　（第118図）

（位置）A27B15グリッド。**（重複）**17号土坑と重複。17号土坑より古い。**（規模および形状）**長軸1.05m×短軸0.75m。深さ18cm。平面形は長方形を呈する。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面は平坦である。覆土は基本的に2層に分かれ、やや灰色味かかる暗褐色土である。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第19号土坑　（第118図）

（位置）A27B15グリッド。**（重複）**17号土坑と重複。17号土坑より古い。**（規模および形状）**長軸0.68m×短軸0.68m。深さ17cm。平面形は方形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面は平坦である。覆土は基本的に1層で、灰色味かかる暗褐色粘質土である。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第20号土坑　（第118図）

（位置）A27B15グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸0.63m×短軸0.48m。深さ25cm。平面形は長方形を呈するが、ややいびつ。壁の立ち上がりは急で、断面形は筒状を呈する。覆土は1層で、暗褐色粘質土である。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第21号土坑　（第118図）

（位置）A27B15グリッド。**（重複）**22・23号土坑と重複。両土坑より古い。**（規模および形状）**長軸1.72m×短軸？m。深さ21cm。形状は22･23号土坑に切られているため不明であるが、平面形はおそらく楕円形を呈するものと思われる。壁はやや緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面は若干凹凸をもつ。覆土は基本的に1層で、白色粘土小ブロックを少量含む暗褐色土である。拳大の礫をやや多く含む。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第22号土坑　（第118・280図）

（位置）A27B15グリッド。**（重複）**21・23号土坑と重複。21号土坑より新しいが、23号土坑との新旧関係は不明。**（規模および形状）**長軸1.63m×短軸1.03m。深さ17cm。平面形は長方形を呈する。上半部がかなり削平をうけているため詳細は不明であるが、壁の立ち上がりはやや緩やかで、断面形は皿状を呈する。底面は平坦である。覆土は1層で、小礫と炭化物を含む暗褐色土である。**（遺物出土状況）**覆土内から土師器坏片が少量出土している。**（遺物）**土師器坏A（墨書あり）。**（時期）**宮ノ前VI期？。

第23号土坑　（第118図）

（位置）A27B15グリッド。**（重複）**21・22号土坑と重複。21号土坑より新しいが、22号土坑との新旧関係は不明。**（規模および形状）**長軸1.06m×短軸0.95m。深さ14cm。平面形は方形を呈する。壁はやや急に立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面は平坦である。覆土は1層で、炭化物を少量含む暗褐色土である。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第24号土坑　（第118図）

（位置）A27B15グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸1.66m×短軸1.58m。深さ19cm。平面形はいびつな方形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面は平坦である。覆土は1層で、炭化物を微量に含む暗褐色土である。拳大の礫も少量混入している。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第25号土坑　（第118図）

（位置）A27B15グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸1.14m×短軸0.71m。深さ16cm。いびつな長方形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面は平坦である。覆土は1層で、炭化物を微量に含む暗褐色土である。小礫も少量含む。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第26号土坑　（第118図）

（位置）A27B15グリッド。**（重複）**30号土坑に切られる。**（規模および形状）**長軸0.96m×短軸0.75m。深さ11cm。平面形は楕円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面はやや凹凸をもつ。覆土は1層で、黄褐色土粒子を含む暗褐色土である。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第27号土坑　（第118図）

（位置）A27B15グリッド。**（重複）**28号土坑と接しているが、その新旧関係は不明。**（規模および形状）**長軸0.86m×短軸0.55m。深さ16cm。平面形は長楕円形を呈する。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状を呈する。底面は平坦である。覆土は1層で、炭化物を微量に含む暗褐色土である。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第28号土坑　（第118図）

（位置）A26・27B15グリッド。**（重複）**29号土坑を切る。27号土坑にも接しているが、その新旧関係は不明。**（規模および形状）**長軸1.08m×短軸0.84m。深さ15cm。平面形は長方形を呈する。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状を呈する。底面はやや凹凸をもつ。覆土は1層で、黄褐色土粒子を含む暗褐色土である。小礫も少量含む。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第29号土坑　（第118図）

（位置）A26・27B15グリッド。**（重複）**28号土坑に切られる。**（規模および形状）**長軸推定1.40m×短軸1.10m。深さ15cm。平面形は長楕円形を呈すると思われる。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状を呈する。底面はやや凹凸をもつ。覆土は1層で、黄褐色土粒子を含む暗褐色土である。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第30号土坑　（第118図）

（位置）A27B15グリッド。**（重複）**26号土坑を切る。**（規模および形状）**長軸0.96m×短軸0.76m。深さ19cm。平面形は楕円形を呈する。壁の立ち上がりはやや急で、断面形は鍋底状を呈する。底面は平坦である。覆土は1層で黄褐色土粒子を含む暗褐色土である。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第31号土坑　（第119図、図版69）

（位置）A23B26グリッド。**（重複）**37・125号住、40号土坑と重複。いずれの遺構より新しい。**（規模および形状）**長軸1.62m×短軸1.50m。深さ52cm。平面形は円形を呈する。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面は平坦である。覆土は黄褐色土粒子と炭化物を含む暗褐色土で、覆土上層には拳大～人頭大の礫が集中してみられる。**（遺物出土状況）**礫以外の出土遺物はみられない。**（時期）**9世紀前半代と考えられる37号住を切っていることから、それ以降の所産であるが、詳細は不明。

第32号土坑　（第119図、図版70）

（位置）A15B24グリッド。**（重複）**242号住の覆土を掘り込んで構築している。**（規模および形状）**長軸1.25m×短軸0.95m。深さ16cm。平面形は楕円形を呈する。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状を呈する。底面は平坦である。覆土は基本的に3層に分かれ、炭化物を多く含む暗褐色砂質土が主体である。拳大～人頭大の礫も多く含む。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第33号土坑　（第119図）

（位置）A16B28グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸0.84m×短軸0.84m。深さ50cm。平面形は円形を呈する。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面は平坦である。覆土は4層に分かれ、焼土粒、炭化物粒を含む暗褐色土が基本で、上層と下層に人頭大の礫が多く混入している。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第34号土坑　（第119図、図版70）

（位置）A17B21グリッド。**（重複）**46号掘立に一部切られる。**（規模および形状）**長軸1.41m×短軸1.23m。深さ42cm。平面形は方形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は椀状を呈する。土坑内には10～30cm大の礫が、厚さ約30cmにわたって隙間なく詰められている。礫は熱をうけた痕跡はみられない。覆土は暗褐色砂質土で焼土、炭化物はまったくみられない。**（遺物出土状況）**礫以外、他の出土遺物はみられない。**（時期）**46号掘立より古いのは確かだか、詳細な時期については不明。

第35号土坑　（第119図）

（位置）A19B26・27グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸1.59m×短軸1.19m。深さ16cm。平面形は楕円形を呈する。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状を呈する。底面は平坦である。覆土は黄褐色土粒を多く含む暗褐色土で、礫が底面から浮いたレベルでみられる。**（遺物出土状況）**覆土内から礫と混在する状態で縄文土器片が出土。**（遺物）**深鉢形土器。**（時期）**縄文時代中期末。

第36号土坑　（第119・281図、図版70）

（位置）A24B23グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸1.70m×短軸1.60m。深さ42cm。平面形は楕円形を呈する。土坑内にも長軸0.85m×短軸0.71m。深さ約10cmを測る方形ピットがある。壁の立ち上がりはそれぞれ急で、断面形は鍋底状を呈する。底面は平坦である。覆土は炭化物、焼土粒を多量に含む暗褐色土で、礫の混入はほとんどみられない。**（遺物出土状況）**坑底内のピット上面から、竈形土器が潰れたというよりも故意に破壊された状態で出土している。また、覆土上層からは炭化したドングリ状の種実が多量に出土している。**（遺物）**竈形土器、灰釉陶器皿、炭化種実（ドングリか）。**（時期）**宮ノ前Ⅸ～Ⅹ期か。

第37号土坑　（第120図、図版70）

（位置）A22・23B25グリッド。**（重複）**59・69号住と重複するが、新旧関係は不明。**（規模および形状）**長軸2.55m×短軸2.31m。深さ52cm。平面形は方形を呈する。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面は平坦である。覆土は炭化物粒を少量含む暗褐色土で、礫の混入はほとんどみられない。**（遺物出土状況）**覆土内から縄文土器片、土師器片、須恵器片が少量出土している。**（遺物）**実測できる遺物なし。**（時期）**詳細は不明だが平安時代の所産か。

第38号土坑　（第120図）

（位置）A17B25グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸1.06m×短軸1.06m。深さ19cm。平面形は円形を呈する。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面は平坦である。覆土は黄褐色土粒子を含む暗褐色土である。礫の混入が少量みられる。**（遺物出土状況）**覆土内から縄文土器細片がわずかに出土している。**（遺物）**実測できる遺物なし。**（時期）**縄文時代の所産か。

第39号土坑　（第120・281図、図版70）

（位置）A15B21グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸2.46m×短軸1.56m。深さ73cm。平面形は楕円形を呈する。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面は平坦である。覆土は基本的に４層に分かれ、黄褐色土ブロックを含む暗褐色土である。礫が比較的多く混入する。**（遺物出土状況）**覆土中層において土師器細片、須恵器片が少量出土している。**（遺物）**須恵器高台坏・甕。**（時期）**平安時代の所産か。

第40号土坑　（第120図）

（位置）A23B26グリッド。**（重複）**37･125号住、31号土坑と重複。両住居址より新しく、31号土坑より古い。**（規模および形状）**長軸1.53m×短軸1.25m。深さ70cm。平面形は円形を呈する。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面は平坦である。覆土は黄褐色土粒、炭化物を含む暗褐色粘質土である。礫の混入も顕著。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**９世紀前半代と考えられる37号住を切っていることから、それ以降の所産であるが、詳細は不明。

第41号土坑　（第120図）

（位置）A16B26グリッド。**（重複）**233号住と重複。233号住の方が新しい。**（規模および形状）**長軸0.88m×短軸0.86m。深さ40cm。平面形は円形を呈する。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面にはやや凹凸をもつ。覆土は基本的に２層に分かれ、黄褐色土小ブロック、炭化物粒を含む暗褐色土である。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**10世紀前半代の所産と考えられる233号住より古いため、それ以前の所産としかいえない。

第42号土坑　（第121図）

（位置）A19B26グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸1.32m×短軸1.13m。深さ36cm。平面形は楕円形を呈する。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面は平坦である。覆土は基本的に２層に分かれ、黄褐色土小ブロック、炭化物粒を少量含む暗褐色土である。礫が少量混入している。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第43号土坑　（第121図）

（位置）A19B27グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸1.02m×短軸0.87m。深さ30cm。平面形は楕円形を呈する。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面はほぼ平坦である。覆土は２層に分かれ、黄褐色土小ブロック、炭化物粒を含む暗褐色土である。礫がわずかに混入している。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第44号土坑　（第121図）

（位置）A19B27グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸0.67m×短軸0.67m。深さ20cm。平面形は方形を呈する。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面はやや凹凸をもつ。覆土は基本的に２層に分かれ、黄褐色土小ブロック、炭化物粒を含む暗褐色土である。礫がわずかに混入している。**（遺物出土状況）**遺物の出土みられない。**（時期）**不明。

第45号土坑　（第121図）

（位置）A19・20B26グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸1.25m×短軸1.16m。深さ31cm。平面形はややいびつな方形を呈する。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面はやや傾斜して平坦である。覆土は炭化物粒、焼土粒を含む暗褐色土である。礫はみられない。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第46号土坑　（第121図）

（位置）A19B20・21グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸1.11m×短軸1.00m。深さ33cm。平面形は方形を呈する。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面は平坦である。覆土は２層に分かれ、炭化物粒を含んだしまりが強い暗褐色土が基本である。覆土中層に礫が少量混入している。**（遺物出土状況）**覆土中層から土師器細片、須恵器細片が少量出土。**（遺物）**実測できる遺物なし。**（時期）**平安時代の所産か。

第47号土坑　（第121図）

（位置）A21・22B28グリッド。**（重複）**なし。**（規模および形状）**長軸1.28m×短軸0.74m。深さ44cm。平面形は楕円形を呈する。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は椀状を呈する。底面は平坦である。覆土は黄褐色土粒子を含む暗褐色土で、礫が多量に混入している。**（遺物出土状況）**覆土内の礫に混じり、蜂ノ巣石や石棒片が出土している。**（遺物）**蜂ノ巣石・石棒。**（時期）**縄文時代中期の所産か。

第48号土坑　（第48図、図版30）

（位置）A15B27グリッド。**（重複）**195号住の覆土から掘り込んで構築している。**（規模および形状）**長軸1.20m×短軸1.01m。深さ16cm。平面形は長方形を呈する。壁の立ち上がりは急で、断面形は鍋底状を呈する。底面は平坦である。覆土は炭化物粒を含む暗褐色土で、礫が混入している。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**９世紀後半代と考えられる195号住を掘り込んで構築しているため、それ以降の所産であろう。

第4節

配　石　遺　構

1号配石遺構　（第122図、図版71）

（位置）A25B18・19グリッド。**（重複）**11号溝と重複し、同溝より新しい。**（形状・規模）**表土層直下において5～30㎝大の礫が長方形状に配されているのが確認された。規模は長軸約5.60m、短軸約3.50mを測る。礫は整然と一段のみ配されているが、北東部分の礫は欠失している。礫は数段積み上げられた石積みだった可能性もあり、本配石が何かの建物址の可能性が高い。配石内の平面精査と断ち割りを行い柱穴および版築の有無の確認を行ったが、建物に伴う施設、版築等の状況は認められず、本配石の性格については不明な点が多い。**（遺物出土状況）**本配石内からの遺物の出土はみられない。**（時期）**詳細は不明だが中・近世以降の所産か。

2号配石遺構　（第122・123・297図、図版71）

（位置）A14・15B25・26グリッド。**（重複）**16号溝、172・191・199・200・202号住等に切られる。**（形状・規模）**平安時代における遺構群によって切られているため、配石としてのまとまりは不明瞭であるが、現存で長軸約20m、短軸約8mの範囲にわたって礫およびピットの拡がりが認められる。礫は主に北側に密集しており、磨石や蜂ノ巣石等の石器類も混じっている。**（遺物出土状況）**礫の密集区内から石器の他、深鉢形土器片、ミニチュア土器が出土。**（遺物）**深鉢形土器、ミニチュア土器、磨石・蜂ノ巣石。**（時期）**縄文時代後期前半の所産か。

3号配石遺構　（第123図、図版71）

（位置）A26B27・28グリッド。**（形状・規模）**長軸2.90m、短軸1.20mを測る、南北に細長い小規模な配石である。扁平な石を中心に配しているが、地山に含まれる礫との区別が難しい。北側はやや間隔があいており、遺存状態はあまり良くない。**（遺物出土状況）**配石内からは遺物の出土は全くみられない。**（時期）**不明。

4号配石遺構　（第124・297図、図版71）

（位置）A18・19B27グリッド。**（重複）**303・316号住等に切られる。**（形状・規模）**303・316号住等に切られ、破壊が著しく、配石としてのまとまりは欠けている。残存する石の配列から推測すると長軸7.00m、短軸4.50m程度の規模をもつ方形状を呈する配石だろう。縁辺には安山岩の扁平な石が敷かれている。**（遺物出土状況）**残存する扁平な石の下部から長大な粘板岩の剥片が2枚重なった状態で出土し、その他耳栓や土製円板等が少量散在して出土している。**（遺物）**台付深鉢形土器、耳栓、土製円板、粘板岩の剥片。**（時期）**縄文時代中期末の所産か。

5号配石遺構　（第124・297図、図版72）

（位置）A21B26・27グリッド。**（形状・規模）**長軸0.60m、短軸0.60mを測る、不整円形もしくは方形を呈する配石である。石は大きめの石を用いコンパクトである。**（遺物出土状況）**配石東端で2個体分の石棒が出土している。**（遺物）**石棒。**（時期）**縄文時代の所産だと思われるが、詳細は不明。

第５節

単　独　埋　甕

第１号単独埋甕　（第125・282図、図版71・168）

（位置）Ａ23Ｂ28グリッド。南側約2.5ｍに２号単独埋甕が位置する。**（形状・規模）**底部を穿孔した深鉢形土器が正位に埋設されている。口縁部を欠くが、おそらく表土剥ぎの段階で欠失したものだろう。自然礫を多量に含む地山を掘り込んでいるため掘り方は不明。土器内部の覆土は小礫を含む暗褐色土である。焼土・炭化物は含んでいない。**（土器）**現存部の最大径43cm、底径11cm、現存高40cmを測る大型の深鉢形土器。焼成は良好で、丁寧なつくりである。

第２号単独埋甕　（第125・282図、図版71・168）

（位置）Ａ23Ｂ28グリッド。北側約2.5ｍの所に１号単独埋甕が位置する。**（形状・規模）**底部を穿孔した深鉢形土器が正位に埋設されている。これも１号単独埋甕と同様に口縁部を欠くが、おそらく表土剥ぎの段階で欠失したものだろう。掘り方も自然礫を多量に含む地山を掘り込んでいるため不明。土器内部の覆土は小礫を含む暗褐色土である。焼土・炭化物は含んでいない。また、土器内部には別個体の深鉢形土器の口縁部破片、底部破片が含まれており、入れ子になっていた土器の可能性がある。**（土器）**現存部の最大径44cm、底径11cm、現存高44cmを測る大型の深鉢形土器。焼成は良好で、丁寧なつくりである。もう一個体は破片資料ではあるが推定口径34cm、底径8.5cm、推定高46cmを測る。胎土はやや粗いが、焼成は良好。

第３号単独埋甕　（第125・282図、図版72・168）

（位置）Ａ16Ｂ26グリッド。233号住の東壁際にあり。**（形状・規模）**大型の深鉢形土器が正位に埋設されている。掘り方は楕円形を呈し、その規模は長軸86cm、短軸68cm、確認面からの深さは40cmを測る。覆土は暗黄褐色土と黄褐色粘質土に分けられる。土器内部の覆土は、暗黄褐色土が主体である。焼土および炭化物は含んでいない。**（土器）**口径38cm、底径5.5cm、高さ51cmを測る大型の深鉢形土器。口縁部を一部欠くがほぼ完形。焼成は良好で、丁寧なつくりである。

第６節

溝　　址

第１号溝址　（第126・283図、図版72）

（位置）Ａ27Ｂ22～24グリッド。**（重複）**２号溝に切られる。**（規模および形状）**確認されている長さ約22ｍ、幅40～65cm、深さ24～30cmを測る東西にのびる溝である。所々寸断している。走行方位はＮ－72°－Ｅ。断面形はＵ字形を呈し、覆土は灰褐色粘質土で、底面近くは鉄分の沈殿が著しい。**（遺物出土状況）**覆土内から散在して出土しているが、覆土上層から土師器、灰釉陶器片等が出土している。**（遺物）**土師器坏Ａ、灰釉陶器皿（高台部外面を硯として転用している）・椀。**（時期）**宮ノ前Ⅸ～Ⅹ期か。

第２号溝址　（第126図、図版72）

（位置）Ａ25～30Ｂ22～24グリッド。**（重複）**１・３・４号溝、11号住と重複。１号溝、11号住より新しく、３・４号溝との新旧関係ははっきりしない。**（規模および形状）**確認されている長さ約29.6ｍ、幅35～110cm、深さ15～45cmを測る南北にのびる溝である。まだ北および南にのびるものと思われる。走行方位Ｎ－17°－Ｗ。断面形はＵ字形を呈し、覆土は４層に分かれるが、上層は灰褐色粘質土で、下層は鉄分の沈殿で暗褐色化している。**（遺物出土状況）**全体にわたって散在的に出土しているが、土師器等の小片、細片が中心である。**（遺物）**実測できる遺物なし。

（時期） 1号溝を切っていることからそれ以降の所産であろう。詳細は不明。

第３号溝址　（第126図、図版72・73）

（位置） A25～27B23・24グリッド。**（重複）** 1・2・4号溝、11号住と重複。11号住より新しいが、1・2・4号溝との新旧関係ははっきりしない。**（規模および形状）** 確認されている長さ約13.4m、幅30～50cm、深さ17～20cmを測る南北にのびる溝である。２号溝から分岐し、同溝と平行して走る。同時存在した可能性も高い。走行方位はN－19°－W。断面形はU字形を呈し、覆土は２層に分かれ、上層は粘性の強い黒色土で、下層は鉄分を多く含んだ粘性の強い暗褐色土である。**（遺物出土状況）** 土師器の細片等が散在して出土。**（遺物）** 実測できる遺物なし。**（時期）** 詳細は不明であるが、２号溝とほぼ同時期であろう。

第４号溝址　（第126・284図、図版73）

（位置） A25・26B20～24グリッド。**（重複）** 2・3・7・8・23号溝、３号掘立、17号住、２号土坑と重複。３号掘立、17号住より新しいが、他の遺構との新旧関係ははっきりしない。**（規模および形状）** 確認されている長さ約44.3m、幅40～60cm、深さ10～12cmを測る東西にのびる溝である。一部緩くクランク状に屈曲している。走行方位はN－78°－E。断面形はU字形を呈し、覆土は２層に分かれる。上層は灰色味がかる暗褐色土で、下層は鉄分を多く含む褐色土である。**（遺物出土状況）** 土師器片等が散在して少量出土。**（遺物）** 土師器坏A。**（時期）** 10世紀代の所産と考えられる17号住を切っているため、それ以降の所産であろう。

第５号溝址　（第126・284図、図版73）

（位置） A21～23B20～25グリッド。**（重複）** 7・8・9・10号溝、69号住、10・16号掘立等と重複。69号住、10・16号掘立より新しいが、7・8・9・10号溝との新旧関係ははっきりしない。**（規模および形状）** 確認されている長さ約47.5m、幅40～66cm、深さ15～20cmを測る東西にのびる溝である。南北にのびる７・８・９・10号溝と交差しているが新旧関係ははっきりせず、同時存在したのかもはっきりしない。走行方位はN－75°－E。断面形はU字形を呈し、覆土は２～３層に分かれる。上層は灰色味がかった暗褐色土で、下層は鉄分を含んだ砂質の褐色土である。**（遺物出土状況）** 散在して全体から出土しているが、遺物は時期的に一定していない。**（遺物）** 須恵器高台坏B、縄文土器片等。**（時期）** 10世紀代の所産と考えられる69号住を切るため、それ以降の所産であろう。

第６号溝址　（第126図、図版73）

（位置） A25・26B22～27グリッド。**（重複）** 9・10号溝と重複。新旧関係は不明。**（規模および形状）** 確認されている長さ約56.6m、幅40～60cm、深さ10～16cmを測る東西にのびる溝である。西端で9・10号溝とL字状に接続している。走行方位はN－76°－E。**（遺物出土状況）** 散在して出土しているが、縄文土器から土師器まで出土しており、時期的に一定していない。**（遺物）** 実測できる遺物なし。**（時期）** 不明。

第７号溝址　（第126・283図、図版73）

（位置） A16～29B19～23グリッド。**（重複）** 本溝址より新しい住居址、掘立柱建物址はない。4・5号溝との新旧関係ははっきりしない。**（規模および形状）** 確認されている長さ約145m、幅60～160cm、深さ20～40cmを測る南北にのびる溝である。北側は調査区外へまだのびている。走行方位はN－14°－W。８号溝とほぼ平行して走り、その間隔は1.6～3.3mを測る。溝の深さは南へ行くほど浅くなり、北側でも浅くなって途切れる箇所があるが、これは表土の剥ぎすぎによるものだろう。断面形はU字形を呈し、覆土は３～４層に分かれ、上層は褐色土、中層は拳大～人頭大以上の礫を含む灰色味がかる暗褐色砂質土、下層は鉄分をやや多く含む暗褐色土である。**（遺物出土状況）** 散在して出土している。特に中層からの出土が多く、遺物の時期も縄文式土器から土師質土器まで様々である。**（遺物）** 土師器皿、砥石、凹石、鉄鏃・紡錘車・その他鉄製品。**（時期）** ９世紀後半代と考えられる４号

住を本溝址が明らかに切っており、少なくともそれ以降の所産であろう。

第８号溝址　（第126図、図版73）

（位置）A16～26B20～23グリッド。**（重複）**本溝址より新しい住居址、掘立柱建物址はない。4・5号溝、２号土坑との新旧関係ははっきりしない。**（規模および形状）**確認されている長さ約96m、幅40～100cm、深さ20～40cmを測る東西にのびる溝である。走行方位はN－14°－W。７号溝と平行して走り、北端は２号土坑、４号溝と接続する。さらに北へのびるかは不明。断面形はU字形を呈し、覆土は２層に分かれる。上層はやや黒味が強い暗褐色土で、下層は灰色味がかる暗褐色土である。**（遺物出土状況）**散在して出土。主に下層から出土しているが土師器等の細片が中心。**（遺物）**実測できる遺物なし。**（時期）**走行方位等が７号溝と類似しているため、同時存在の可能性が極めて高く、同時期の所産と思われるが詳細は不明。

第９号溝址　（第126図、図版73）

（位置）A18～25B22～24グリッド。**（重複）**本溝址より新しい住居址、掘立柱建物址はない。5・6号溝との新旧関係ははっきりしない。**（規模および形状）**確認されている長さ約63m、幅50～100cm、深さ10～20cmを測る南北にのびる溝である。６号溝から南下し、10号溝と平行して走っている。その間隔は0.4～1.4mを測る。北へのびる可能性もあったが確認できなかった。南側では10号溝と合流している。走行方位はN－14°－W。断面形はU字形を呈し、覆土は２層に分かれる。上層は黄褐色土小ブロックを含む暗褐色土で、下層はやや鉄分を含む暗褐色砂質土である。**（遺物出土状況）**散在して出土しているが、土師器等の細片が中心。**（遺物）**実測できる遺物なし。**（時期）**９世紀後半代の所産と考えられる144号住を切っているため、それ以降の所産であろう。

第10号溝址　（第126図、図版73）

（位置）A18～25B23・24グリッド。**（重複）**本溝址より新しい住居址、掘立柱建物址はない。5・6号溝との新旧関係ははっきりしない。**（規模および形状）**確認されている長さ約64m、幅40～130cm、深さ14～20cmを測る南北にのびる溝である。９号溝と平行して走り、南端では９号溝と合流する。９号溝と同じように６号溝から南下する。さらに北へのびるかどうかは不明。走行方位はN－14°－W。断面形はU字形を呈し、覆土は２層に分かれる。上層は黄褐色土小ブロックを含む暗褐色土で、下層は礫を含む暗褐色土である。**（遺物出土状況）**散在して出土している。土師器や須恵器の細片が中心。**（遺物）**実測できる遺物なし。**（時期）**走行方位および覆土等が９号溝と類似するところから、同溝と同時期の所産であろう。しかし詳細については不明。

第11号溝址　（第126・283図、図版73）

（位置）A12～27B18～21グリッド。**（重複）**本溝址より新しい住居址はない。ただし１号配石は本溝より新しい。**（規模および形状）**確認されている長さ約143m、幅160～510cm、深さ８～20cmを測る南北にのびる溝である。南はまだ調査区外にのびている。走行方位はN－13°－W。断面形は北側では幅広のU字形、南側でもU字形を呈する。覆土は基本的に２層に分かれ、上層は灰色がかる黄褐色土で、下層は礫を多量に含む灰褐色砂質土である。**（遺物出土状況）**散在して出土しているが、北側からの出土が多い。縄文土器や須恵器片等様々な遺物が出土しており、時期的には一定していない。**（遺物）**須恵器坏A・甕・凸帯壷、手捏ね土器、土錘、刀子・棒状鉄製品・筒状鉄製品。**（時期）**９世紀前半代と考えられる261・420号住を切っているため、少なくともそれ以降の所産ではあるが、同溝より新しいとされる１号配石の時期が判明しないため詳細な時期については不明である。

第12号溝址　（第126図、図版73）

（位置）A19・20B24～26グリッド。**（重複）**43号掘立と一部重複するが、本溝の方が新しい。**（規模および形状）**確認されている長さ約18.5m、幅30～40cm、深さ10～15cmを測る東西にのびる溝である。中央付近で途切れてい

る。走行方位はN－78°－E。断面形はU字形を呈し、覆土は基本的に１層で、暗褐色砂質土である。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第13号溝址　（第126図、図版74）

（位置）A20～23B27・28グリッド。**（重複）**本溝址より新しい住居址はない。**（規模および形状）**確認されている長さ約35m、幅38～60cm、深さ12～14cmを測る南北にのびる溝で、14号溝がすぐ西側を平行して走っている。その間隔は1.2～1.4mを測る。南は保存地区内までのびている。15号溝はその一部かもしれない。北側にもさらにのびると思われるが未確認。走行方位はN－10°－W。断面形はU字形を呈し、覆土は２層に分けられる。上層は暗褐色土で、下層は小礫を多く含む灰色がかる暗褐色砂質土である。**（遺物出土状況）**土師器、須恵器の細片が散在して少量出土。**（遺物）**鉄鏃・棒状鉄製品。土器類は細片のため実測不可能。**（時期）**10世紀代の所産と考えられる78号住居址を切っているため、それ以降の所産と思われるが詳細は不明。

第14号溝址　（第126・283図、図版74）

（位置）A20～23B27・28グリッド。**（重複）**本溝址より新しい住居址はない。**（規模および形状）**確認されている長さ39.5m、幅45～80cm、深さ20～26cmを測る南北にのびる溝である。13号溝がすぐ東側を平行して走る。南は保存地区へのび、北へもさらにのびそうであるが未確認。走行方位はN－10°－W。断面形はU字形を呈し、覆土は13号溝と同様に２層に分けられる。上層は暗褐色土で、下層は小礫混じりの灰色味がかる暗褐色砂質土である。**（遺物出土状況）**土師器、須恵器の細片が散在して少量出土。**（遺物）**須恵器坏。**（時期）**本溝と平行して走る13号溝の走行方位および覆土が類似するため、同時期の所産と思われ、同時存在した可能性が高い。

第15号溝址　（第126・283図、図版74）

（位置）A29B14～16グリッド。**（重複）**237・240号住、16号溝と重複する。定かではないが本溝の方が新しいと思われる。**（規模および形状）**確認されている長さ約16.6m、幅70～90cm、深さ25～30cmを測る南北にのびる溝である。南は調査区外にのび、北は保存地区内にのびる。13・14号溝の一部かもしれない。走行方位はN－10°－W。断面形はU字形を呈し、覆土は基本的に２層に分けられる。上層は炭化物粒を少量含む暗褐色土で、下層はやや灰色味がかる暗褐色砂質土である。**（遺物出土状況）**土師器片、須恵器片、縄文土器片等が散在して少量出土している。**（遺物）**土師器坏Ａ・皿、須恵器坏、縄文時代後期深鉢形土器。**（時期）**10世紀前半代の所産と考えられる237・247号住よりも新しいと思われるため、それ以降の所産であろう。

第16号溝址　（第126・283図、図版74）

（位置）A15B25～30グリッド。**（重複）**157・196・207・241号住、15号溝と重複。157・196・207号住、15号溝より古く、241号住より新しい。**（規模および形状）**確認されている長さ約50.6m、幅70～140cm、深さ14～25cmを測る東西にのびる溝である。東は１号溝状遺構と接続し、西は確認されている所でほぼ完結すると思われる。走行方位はN－81°－E。断面形はU字形を呈し、覆土は基本的に２層に分かれる。上層はやや黒味が強い暗褐色土で、下層は粘性の弱い暗褐色砂質土である。**（遺物出土状況）**土師器片を中心に散在して出土。**（遺物）**土師器坏Ａ・甕ＣⅣ、須恵器坏、縄文土器深鉢形土器。**（時期）**９世紀半ばの所産と考えられる196号住に切られているため、それ以前の所産であろう。

第17号溝址　（第126・283図、図版74）

（位置）A15・16B25・26グリッド。**（重複）**207号住、16号溝を切る。**（規模および形状）**確認されている長さ約18m、幅100～170cm、深さ20～25cmを測る南北にのびる溝である。南は確認されている所でほぼ完結すると思われるが、北については不明。走行方向はN－12°－W。断面形は幅広のU字形を呈し、覆土は１層で拳大～人頭大

の礫を含む暗褐色砂質土である。**（遺物出土状況）**覆土内から土師器等が散在して出土している。**（遺物）**土師器皿（墨書あり）、灰釉陶器皿、青磁片。**（時期）**出土遺物から11～12世紀代の所産か。

第18号溝址　（第126図、図版74）

（位置）A15～19B23グリッド。**（重複）**140・176・230・296・297・335号住に切られる。**（規模および形状）**確認されている長さ約46m、幅65～188cm、深さ約10cmを測る南北にのびる溝である。やや蛇行しているため幅は一定していない。走行方位は不明。断面形はU字形を呈し、覆土は拳大の礫を含む灰色味かかる暗褐色砂質土である。**（遺物出土状況）**遺物は少なく縄文土器片、土師器細片が散在して出土。**（遺物）**実測できる遺物なし。**（時期）**８世紀後半代の所産と考えられる230号住に切られていることから、それ以前の所産であろう。

第19号溝址　（第126図、図版74）

（位置）A14・15B24・25グリッド。**（重複）**190・193・198・211・229・254号住に切られる。**（規模および形状）**確認されている長さ約18m、幅60～100cm、深さ17～20cmを測る南北に蛇行してのびる溝である。走行方位は不明。断面形はU字形を呈し、覆土は拳大の礫を多く含む暗褐色砂質土である。**（遺物出土状況）**遺物は少なく縄文土器片、土師器細片が散在して出土。**（遺物）**実測できる遺物なし。**（時期）**８世紀後半代の所産と考えられる211号住に切られていることから、それ以前の所産であろう。

第20号溝址　（第126・283図、図版74）

（位置）A12～14B22・23グリッド。**（重複）**194・245号住に切られる。**（規模および形状）**確認されている長さ約15m、幅35～120cm、深さ８～10cmを測る南北にやや蛇行してのびる溝である。走行方位は不明。何本かの流路に分かれているが最終的には１本となる。断面形は幅広のU字形で、覆土は灰色味がかる暗褐色砂質土である。**（遺物出土状況）**少量の遺物が散在して出土している。**（遺物）**土師器坏B、須恵器坏。**（時期）**出土遺物から宮ノ前Ⅰ～Ⅱ期の所産か。

第21号溝址　（第127図、図版75）

（位置）A15・16B26～28グリッド。**（重複）**１号畝状遺構を切る。**（規模および形状）**確認されている長さ約24m、幅24～36cm、深さ８～10cmを測る東西にのびる溝である。断面形はU字形を呈し、覆土は砂利混じりの灰褐色砂質土である。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第22号溝址　（第127図、図版75）

（位置）A15B26・27グリッド。**（重複）**１号畝状遺構を切る。**（規模および形状）**確認されている長さ約12.6m、幅25～36cm、深さ10cmを測り、やや蛇行しながら東西にのびる溝である。断面形はU字形を呈し、覆土は砂利混じりの灰褐色砂質土である。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第23号溝址　（第127図、図版75）

（位置）A16B26・27グリッド。**（重複）**１号畝状遺構を切る。**（規模および形状）**確認されている長さ約11.4m、幅20～30、深さ５～10cmを測る東西にのびる溝である。断面形はU字形を呈し、覆土は砂利混じりの灰褐色砂質土である。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第24号溝址　（第126図、図版74）

（位置）A26・27B21グリッド。**（重複）**４号溝と重複するが、新旧関係ははっきりしない。**（規模および形状）**確認されている長さ約9.7m、幅30～40cm、深さ８～10cmを測る南北にのびる溝である。断面形はU字形を呈し、覆土はやや灰色味がかる暗褐色砂質土である。**（遺物出土状況）**遺物の出土はみられない。**（時期）**不明。

第７節

畝　状　遺　構

第１・２号畝状遺構　（第127・284図、図版75）

（位置）A14～16B26～28グリッド。**（重複）**21･22･23号溝と重複か。**（形状・規模）**遺跡南東部の表土層直下で確認されたもので、畝状遺構と命名したものの、これが畠なのかどうかは判然としない。１号・２号畝状遺構と便宜上分けてはいるが、ここでは両者を一括して報告することにする。

形状は南北にのびる長さ約6.0～16.0m、幅約30～50cm、確認面からの深さ約８～10cmの細長い溝が幾条もみられ、確認された範囲は東西約24m、南北約23mに及んでいる。畝部にあたると思われる溝と溝との間隔は約0.60～2.0mを測り、一定していない。この南北にのびる溝と直交するように、溝址として報告している21･22･23号溝が東西にのびているが、もしかしたら同溝址も同畝状遺構の一部かもしれない。**（遺物出土状況）**土師器片等が散在して出土しているが、同遺構の下部には埋没した平安時代を中心とする住居址群が存在しており、畝を切る際に掘り起こされたものであろう。**（時期）**詳細は不明だが、平安時代を中心とする住居址群の上部に構築されていることから中・近世以降の所産か。

第８節

溝　状　遺　構

生産域と思われる埋没旧河道内の調査に先立ち、発掘区内に東西のトレンチを設定し、地層の堆積状況の検討を行い、１a層から21b層に地層区分した。そしてトレンチの３地点において細分された各地層ごとにプラント・オパール分析のための試料採取を行っている。その結果、土壌層とされたa層のいくつかからイネのプラント・オパールが検出された。以下、本節と次節で説明する溝状遺構と水田址は前述した両分析によって確認、検出されたものである。なお、各地層についての詳しい説明は図版編第129図を参照されたい。

１号溝状遺構（第128・285～289・298図、図版75・169）

（位置）A15～21B30～32グリッド。**（形状・規模）**遺跡南東端を南北に流下する溝状遺構である。確認されている範囲で、長さ約55m、幅約13.0～17.0m、確認面からの深さ約70cmを測る。遺構内には大小様々な規模をもつ礫が散乱し、ある程度の流水量があったことを物語っているが、現在では掘り下げても湧水はみられない。地層の観察から、洪水によってもたらされたシルト質の細砂が幾層かみられる。西側対岸寄りには堰状の石列がみられるが、これも最下層のシルト質の細砂によって埋没し、機能した期間はきわめて短いものと思われる。また、保存地区を挟んだ北東側の何箇所かにトレンチを設定し、本溝状遺構の続きを追ったところ、河床の一部と思われる落ち込みとそれに伴う礫が確認された。**（遺物出土状況）**土師器等古代の古手の様相を示す土器群は多量の礫に混じり最下層のシルト質細砂中から出土しており、新しい様相を示す土器群は、やや土壌化した細砂質のシルト層内から出土し、およそ２時期にわたって機能していた可能性を示唆している。遺物量は多く、特に集中した傾向はみられないが、北東側トレンチ内からは遺物がほとんど出土しておらず、住居址群に近い保存地区南側の区域からの出土が目立っている。出土遺物の中心は前述のとおり土器類で木製品類は全く出土していない。とりわけ中心となるのは平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器の一般什器類と甕・瓶等の貯蔵器類で、その種類も多岐にわたっている。破片資料ではあるが当該期の墨書・線刻土器も多数みられ、他に手捏ね土器等、祭祀的色彩の強い遺物の出土もみられる。土器類は概して摩滅がみられず、遠方から流されてきたものではなく、出土地点の近辺で廃棄された可能性が強い。**（遺物）**縄文時代深鉢形土器、土師器坏Ａ・Ｃ・高台坏（墨書・線刻あり）・

高坏・皿・甕Ｂ・ＣＶ、黒色土器坏、須恵器坏・高台坏Ａ・Ｂ（墨書・線刻あり、転用硯あり）・鉢Ａ・Ｂ・Ｄ・蓋Ａ・Ｃ・甕・凸帯壷・円面硯、灰釉陶器椀・皿・耳皿・長頸壷（ヘラ書あり）、緑釉陶器椀、土錘、手捏ね土器、砥石、棒状鉄製品等。**（時期）**遺物の中心は前述のとおり平安時代における土器類が中心で、当該期に存在したことはほぼ間違いない。当該期の最も新しい様相を示す土器は、11世紀代と推測される土師器高台坏がみられる。よって本溝状遺構の開始段階はおそらく８世紀代で、洪水等により９世紀代で大方その機能は低下し、少なくとも11世紀代まで存続した可能性が強い。

２号溝状遺構（第129・290～292・298～302図、図版76～78・140～147）

（位置）Ａ12～14Ｂ19～20グリッド。**（形状・規模）**調査区南西部の埋没旧河道内にみられる溝状遺構である。３号溝状遺構と２号水田址を切り南北に流下している。確認されている範囲での長さ約20ｍ、幅約3.20～5.20ｍを測り、確認面からの深さは約0.90ｍを測る。覆土は基本的に３層に分かれ、シルト層とシルト質極細砂層から成る。内部の施設としては、南西端で井戸状の掘り方がみられる。不整円形を呈すると思われ、径約1.80ｍを測り、素掘りである。深さは湧水のため定かではないが、約50㎝近くを測る。土層観察からこの井戸状の掘り方は、本溝状遺構と同時存在したものと思われる。堰等の施設は確認されていない。**（遺物出土状況）**遺物は１号溝状遺構と同じように多量に出土している。上層からの出土はみられず、下層にあたる12a′層から出土しており、確認された範囲全体に散在している。**（遺物）**縄文時代の土器群の他、弥生時代前期に属すると思われる土器群および、８～９世紀代の土師器、須恵器類が多量に出土している。土師器坏Ａ・Ｄ・皿、須恵器には坏・高台坏Ａ・Ｂ（墨書・線刻あり）・高坏・壷・甕等があり、墨書土器や線刻土器もせまい調査範囲ながら比較的多く出土しており、人面墨書土器も破片ではあるが出土している。土器類の他、木製品もあり、曲物・折敷・柄杓・丸木弓・横櫛・斎串等がみられる。また、桃・胡桃等の植物遺体や獣骨類も多量に出土している。**（時期）**２号水田址を明らかに切っていることや、中心となる出土遺物が奈良時代と平安時代の土師器、須恵器であることから、１号溝状遺構同様、８～９世紀代を中心に機能していた遺構と思われる。９世紀代より降る土器は一切みられない。

３号溝状遺構（第129・293図、図版76）

（位置）Ａ12～14Ｂ19グリッド。**（形状・規模）**２号水田址を切るものの、２号溝状遺構に大半を切られている。確認された範囲で長さ約８ｍ、幅約1.30～2.20ｍ、確認面からの深さ約46㎝を測る。覆土は基本的に２層に分かれ、底面近くでは中礫混じりの粗砂、その上層には細砂が堆積している。この地層の状況から洪水等によって一気に埋まってしまったものと思われ、機能していた期間もごく短い間だったと思われる。**（遺物出土状況）**出土遺物は散在的で、その量も多くない。遺物は15b層から出土している。**（遺物）**土器では土師器、須恵器の坏と鉢、木製品では曲物等が出土している。**（時期）**２号溝状遺構に切られるものの、土層および出土遺物からみて時期的にはさほど差はないと思われる。８世紀代を中心とした所産と考えておきたい。

４号溝状遺構（第129・304図、図版79・80）

（位置）Ａ13～14Ｂ19～20グリッド。**（形状・規模）**２号溝状遺構に切られ、２号水田址の西側部分を切っているかたちで、南北に流下している。確認された範囲で長さ約７ｍ、幅1.00～2.10ｍ、確認面からの深さ約30㎝を測る。覆土は基本的に１層で細砂～中砂が堆積し、洪水により一気に埋まってしまった状況がうかがわれる。**（遺物出土状況）**本遺構に直接伴うものかどうかは明確ではないが、覆土および底面から出土している。**（遺物）**縄文時代晩期から弥生時代前期に属すると思われる鉢片が比較的多く出土している。当該期以外の時期の遺物は出土していない。**（時期）**土器の詳しい時期については後で詳しくふれるため、ここでは土層の観察から、本遺構は２号水田址と時間差があまりない時期と指摘しておきたい。

第９節

水　田　址

１号水田址（第129図、図版79）

（位置）A12～13B17～18グリッド。**（層位）**本水田址は、A地点の4a層上面において検出したものである。**（形状・規模等）**東西約12m、南北約11mの範囲で検出されている。当然もう少し広い範囲に広がるものと思われるが、東、西、北の各方向にいくにしたがい、上層の耕作による削平が著しく検出が極めて困難であった。調査範囲内では、７区画が検出され、断面形が台形もしくは蒲鉾型を呈する幅10～20cm、高さ10～15cmを測る畦畔によって区画されている。調査区北東部では、畦畔が途中で幅10cmほど途切れた箇所があり、おそらく水口だと思われる。区画の平面形態は、南北にやや長い長方形を呈し、その面積は約20㎡前後を測る。畦畔は土盛で、畦畔上にヨシと思われる植物の繊維の分布が認められることから、植物等を畦畔の上面に敷いたか、意識的に混入した可能性が考えられる。また、北西方向から南東方向にかけてのびる水路状の溝もみられるが、本水田址に伴う可能性が強い。**（遺物とその出土状況）**須恵器の細片が水田層上面からわずかに出土しているが、直接本址に伴うかどうか不明である。**（時期）**詳細な時期は不明だが、地層からみると、２号溝状遺構の上部に本址の水田層がみられるため、少なくとも９世紀以降の所産であろう。

２号水田址（第129・303図、図版79・80）

（位置）A13～14B19～20グリッド。**（層位）**本水田址は、C地点19a層上面において検出されている。**（形状・規模等）**東西約８m、南北約11mの範囲で検出されている。本址の西側は９世紀代まで機能したと思われる２号および３号溝状遺構と時期不明の４号溝状遺構に切られている。調査範囲内では、８区画が検出され、断面形が台形もしくは蒲鉾型を呈する幅15～20cm、高さ10～15cmを測る土盛の畦畔によって区画されている。調査区中央部では、南北にのびる畦畔が途中で幅約10cmほど途切れており、おそらく水口だと思われる。区画の平面形態は不定形で、面積も３～11㎡と小区画である。本水田址は、以前河道であった所が流路の変更に伴い水たまりとなり、そうした湿地を利用してつくられたものと考えられる。従って、各水田の区画は、狭い範囲のなかで地形にかなり制約をうけた形状となっている。地形的な状況からみて、東側には水田址は広がらないと思われる。**（遺物とその出土状況）**水田址の上面からの出土遺物はほとんどないが、わずかに水田層直上から条痕文系土器１点出土している。水田層を覆う上位の17a層から18a層までの砂層中には、波状文を施す弥生時代中期から後期にかけての土器片がわずかだが挟在している。また、水田層直下の19a′層、19b層には東日本では縄文時代晩期とされる土器群が含まれており、これら水田層の上層と下層にはそれ以外の時期に属する土器群を全く含んでいないプライマリーな地層である。**（時期）**以上の状況から弥生時代前期後葉と考えておきたい。また、水田層とそれと同層準と考えられる地層の２点について^{14}C年代の測定を実施している。その結果については第６章に掲載しているが、それから得られた数値からみても、弥生時代前期後葉として差し支えなかろう。

第10節

柵列状遺構および性格不明ピット群

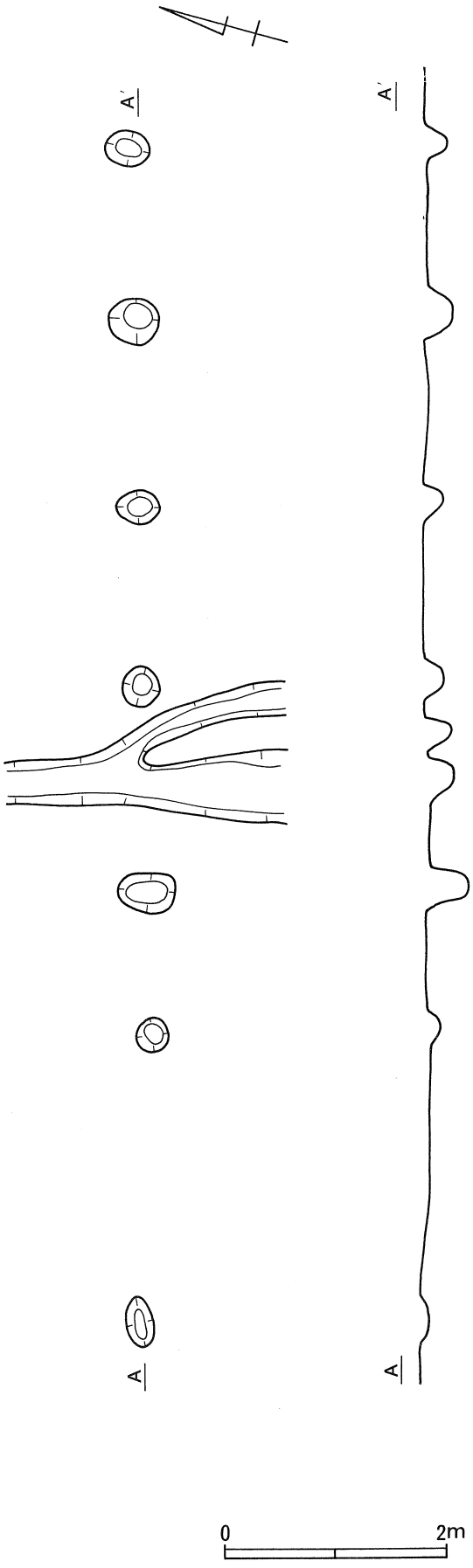
１号柵列状遺構　（本文編　第６図）

（位置）A27B23～24グリッド。**（形状・規模等）**１号溝址と平行し、２号溝址をまたぐように東西にのびる柵列状の柱穴列である。現長約10.6mを測り、ピットは計７基検出されているが、柱穴列西側は表土剥ぎの際、深く削りすぎてしまっていることから、同方向にもう少しつづく可能性がある。ピットの平面形は円形または楕円形

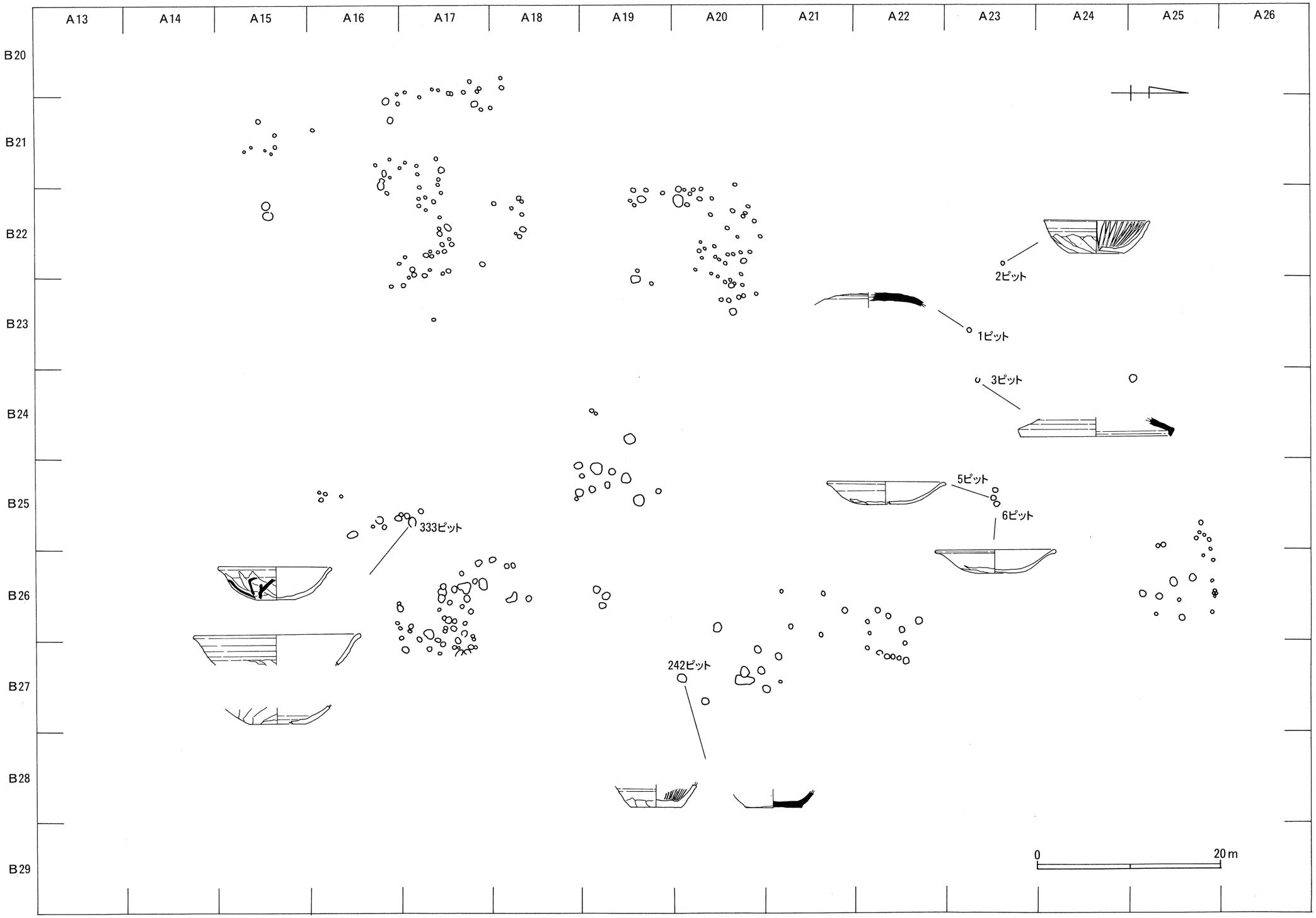
を呈し、径25～50cm、確認面からの深さ10～36cmを測る。ピットの間隔は1.3～1.8mを測る。ピットの覆土は、灰褐色粘質土で柱痕等は確認されなかった。**（遺物およびその出土状況）**ピット内からは遺物は出土していない。**（時期）**遺物が出土していないので不明であるが、１号溝址と一定の間隔をおいて平行してみられることから、同溝址と同時期の所産である可能性が考えられる。

性格不明ピット群　（本文編　第７図）

微高地上の夥しい数の竪穴住居址の合間を縫うがごとく、ピットは調査区の全体に広く分布しており、それらは非居住空間に点在し群をなしている。建物址や柵列等のように特に規則的な配列をみせないものに対して性格不明ピットとした。No.を付けたピットは計338基に及んでおり、個々の説明は省くが、平面形態は円形、楕円形、長楕円形等はさまざまで、規模は径が20～30cm前後、深さも確認面から10～30cmを測るものが主流を占める。覆土は大方暗褐色砂質土で明確な柱痕等は認められなかった。1・2・3・5・6・242・333号ピットからは土師器や須恵器が出土しており、特に333号ピット出土の土師器には「介」と記された墨書もみられ、その出土状態をみると、埋没過程の流入ではなく、故意に埋められた状況がうかがわれる。何らかの儀礼行為に伴って埋置されたものだろうか。それらの所属時期については、遺物の出土がみられないものについては検討の余地はないが、奈良・平安時代を中心として、その前後のものもかなり存在するものと思われる。



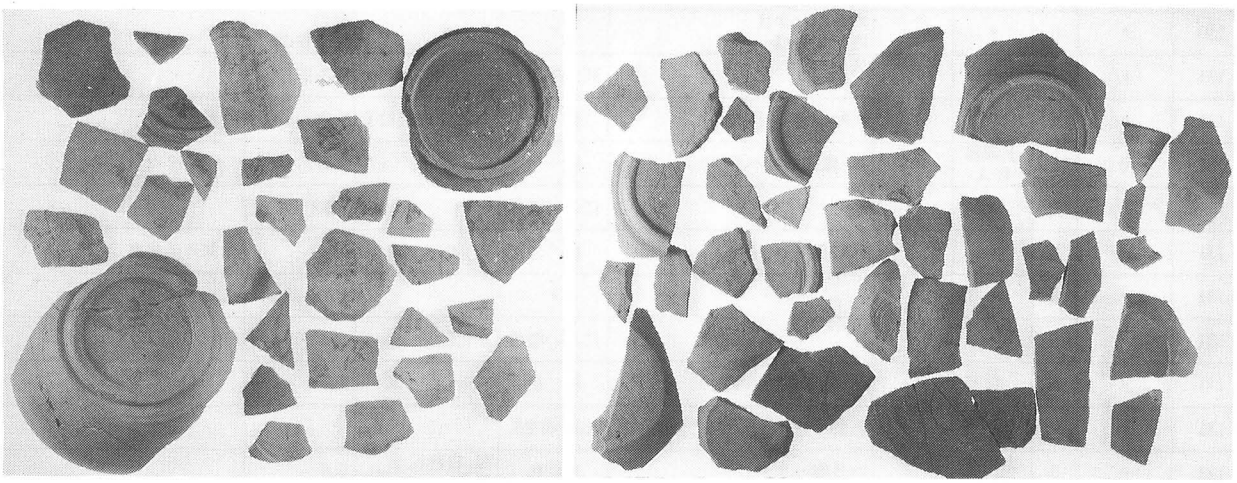
第６図　１号柵列状遺構（１／60）



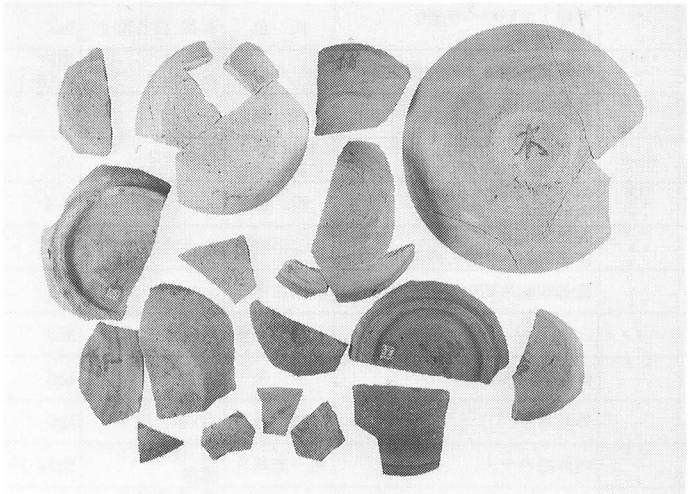
第７図　性格不明ピット分布図（1/450）

第 4 章

出土遺物の観察



1 号溝状遺構出土の墨書土器と線刻土器



2 号溝状遺構の墨書土器

第１節

竪穴住居址出土土器

第３表　竪穴住居址出土土器観察表

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
130	１号住	1	土師器 坏A	(15.4) — —		赤褐色		竈内	
130	２号住	1	須恵器 坏	11.6 5.9 4.2	底部回転糸切り	灰　色	白色粒子、小礫	No.1	
130	〃	2	〃	(12.6) 7.2 4.7		灰白色		No.3	
130	〃	3	〃	— (5.6) —	底部回転糸切り	〃			
130	〃	4	〃	— (7.0) —	底部回転糸切り	〃			
130	〃	5	須恵器 蓋A	(16.2) — 4.9	体部回転ヘラ削り	灰　色	白色粒子	No.3	
130	〃	6	〃	— — —	体部回転ヘラ削り	〃	〃		
130	〃	7	須恵器 甕	23.0 — 45.0	外面叩き	暗褐色	小礫	No.4・5・6・9・11・12・13・14・15	3・4・19・25・27・29・34・42・44・59・61・74・91・95・111号住、2河道、13号土坑、7・11号溝
130	３号住	1	土師器 坏A	(11.0) 5.2 3.7	体・底部手持ヘラ削り 内面暗文	赤褐色		No.7	
130	〃	2	〃	(11.6) 5.2 4.5	体・底部手持ヘラ削り 内面暗文	橙　色	赤色粒子少量	竈内 No.1	
130	〃	3	須恵器 高台坏	— 4.6 —	底部糸切り後回転ヘラ削り 付高台	灰　色	白色粒子		
130	〃	4	須恵器 鉢D	(18.0) — —	体部下半回転ヘラ削り 丸底か	灰白色		No.4・5	
130	〃	5	土師器 甕A	— — —	内外面ハケ目 内面指頭痕	赤褐色	粗、白色粒子 雲母を多量	竈内 No.14・15・16	
130	〃	6	〃	(26.2) (8.0) —	内外面ハケ目 底部木葉痕	〃	〃	竈内 No.17・18・19・20	
131	〃	7	須恵器 鉢B	(20.8) 10.4 15.0	底部ヘラナデ ロクロナデ	灰～黒灰色		No.2・9	
131	〃	8	〃	(29.0) (11.6) (17.0)	ロクロナデ	灰　色	やや粗、白色粒子	No.8	21号住
131	４号住	1	土師器 坏A	(11.4) 3.7 4.1	体・底部手持ヘラ削り	橙　色	赤色粒子	No.1	
131	〃	2	〃	(12.0) 4.6 4.4	〃	にぶい橙色	〃	No.12	
131	〃	3	〃	(11.8) — —	体部手持ヘラ削り	橙　色	〃		体部外面墨書
131	〃	4	〃	(12.4) — 4.4	〃	〃		No.18	
131	〃	5	〃	(13.0) — 4.2	〃	にぶい橙色	赤色粒子		
131	〃	6	土師器 皿	(13.0) 3.4 2.9	体・底部手持ヘラ削り	橙　色	〃	No.11	
131	〃	7	黒色土器 坏	(17.2) (5.0) (5.8)	底部手持ヘラ削り	にぶい黄橙色			
131	〃	8	土師器 甕A	(32.6) — —	内外面ハケメ	褐　色	粗、白色粒子 雲母	No.6	
131	〃	9	土師器 小型甕B	(16.0) — —	外面縦ヘラ削り、ナデ	灰黄褐色	やや粗 白色粒子	No.8・9	
131	〃	10	須恵器 壷	— — —	外部下半回転ヘラ削り ロクロナデ	灰　色	石英、白色粒子	No.7	
131	〃	11	須恵器 甕	(41.2) — —	口縁部外面４本の蛇行沈線	〃	やや粗 白色粒子	竈内 No.15・17	
131	５号住	1	土師器 蓋B	(23.2) — 4.4	底部削り出し高台 体部回転ヘラ削り	橙　色			皿の可能性もある
131	〃	2	須恵器 壷	— (10.4) —	底部回転ヘラ削り 付高台ロクロナデ	暗灰色～ にぶい赤褐色	白色粒子	No.1	
132	６号住	1	土師器 坏A	(11.2) 6.2 4.7	体・底部手持ヘラ削り 内面暗文	橙　色		No.2	底部外面焼成後線刻
132	〃	2	土師器 高台坏	15.3 8.5 5.9	底部削り出し高台 体部回転ヘラ削り、内面暗文	にぶい橙色	赤色粒子	No.6	
132	〃	3	須恵器 坏	11.4 5.5 4.0	底部回転糸切り	灰白色		No.1	体部外面焼成後線刻「＋」
132	〃	4	〃	— 7.3 —	〃	にぶい黄橙色	白色粒子	No.3	
132	〃	5	須恵器 蓋A	16.8 — —	体部回転ヘラ削り	灰　色	〃	No.8	
132	〃	6	須恵器 甕	— — —	外面叩き	橙　色	白・赤色粒子	No.9	67号住No.2、103号住No.5・8、A21 B23・24、須恵器の不良品か
132	〃	7	土師器 甕A	22.4 — —	内外面ハケメ	褐～黒褐色	粗、白色粒子 雲母	No.14・16	
132	〃	8	〃	— 8.4 —	内外面ハケメ、内面指頭痕	黒褐色	粗、白色粒子 雲母多量	No.4	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
132	7号住	1	土師器 小型甕C	13.0 — —		にぶい橙色	粗、白色粒子	No.1	外面剥離
132	8号住	1	土師器 坏A	10.8 6.0 4.1	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.3	
132	〃	2	須恵器 坏	11.6 — —		灰色		No.5	
132	〃	3	〃	— 6.3 —	底部回転糸切り	〃	白色粒子	No.2	
132	〃	4	須恵器 短頸壺C	(5.2) — —	外面一部回転ヘラ削り ロクロナデ	〃		No.4	
133	9号住	1	土師器 坏A	(13.0) 4.5 3.8	体部手持ヘラ削り 底部回転糸切り	明赤褐色	赤色粒子	No.9・10	内面に漆付着
133	〃	2	〃	(14.0) (4.8) 4.1	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	褐色	〃	No.3	
133	〃	3	土師器 椀	17.0 7.4 6.6	体部手持ヘラ削り 底部糸切り後付高台	橙色	〃	No.7	
133	〃	4	土師器 甕A	(29.0) — —	内外面ハケメ	暗褐色	粗、白色粒子 雲母	No.1	
133	10号住	1	土師器 坏A	12.2 4.6 3.6	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.25	
133	〃	2	〃	12.6 5.7 4.2	〃	〃	〃		
133	〃	3	〃	13.0 3.6 3.8	〃	〃	〃	No.33	
133	〃	4	〃	(13.0) (4.6) 3.7	体・底部手持ヘラ削り	にぶい褐色	白・赤色粒子		
133	〃	5	〃	(13.0) (5.4) 3.6	〃	赤褐色	赤色粒子		
133	〃	6	〃	(13.4) (6.2) 3.8	〃	橙色	〃	No.27	
133	〃	7	〃	(14.6) (5.6) 3.8	〃	にぶい橙色	〃	No.12	体部外面墨書
133	〃	8	土師器 皿	(12.0) 4.5 2.7	底部回転糸切り	橙色	白・赤色粒子	No.21	
133	〃	9	〃	16.4 3.6 2.6	体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.2・32	
133	〃	10	〃	(12.8) (4.8) 2.7	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.32	
133	〃	11	〃	13.3 2.6 2.5	体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.23	
133	〃	12	〃	(13.0) 6.4 2.0	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	黒色			
133	〃	13	甲斐型黒色土器 坏	(16.0) (5.8) 4.7	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.30	
133	〃	14	緑釉陶器 皿	(14.6) — —	両面施釉	緑			
133	〃	15	緑釉陶器 椀		両面施釉、口縁部輪花状	〃			
133	〃	16	須恵器 壷	— 5.8 —	底部回転ヘラ削り後、付高台	灰色	白色粒子	No.29	
133	〃	17	土師器 小型甕A	(15.0) 6.8 (13.5)	外面ハケメ、内面ハケメ後ナデ 底部木葉痕	暗赤褐色	粗、白・赤色粒子 雲母	No.28	
133	〃	18	〃	(15.6) — —	外面ハケメ、内面ナデ	〃	粗、白色粒子 雲母	No.19	
133	〃	19	土師器 竈形土器	— — —	内外面ハケメ	暗褐色	白色粒子、雲母	No.24	
134	11号住	1	土師器 坏A	(11.6) (6.0) 3.2	底部回転糸切り	灰黄、黒灰色	白色粒子		
134	〃	2	〃	(11.8) 6.0 3.0	〃	にぶい橙色	〃	竈内 No.37	
134	〃	3	〃	12.1 5.5 4.0	底部回転糸切り後、底部～外周手持ヘラ削り	橙色	〃	竈内、 No.37・39・40・41	
134	〃	4	〃	(2.8) (7.6) 3.2	底部回転糸切り	橙、灰黄色	〃	No.1	
134	〃	5	〃	12.6 4.3 3.1	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.17	灯明具
134	〃	6	〃	(13.0) (6.2) 3.9	底部回転ヘラ削り後、底部～外周手持ヘラ削り	〃	白色粒子 小礫	竈内 No.38	
134	〃	7	〃	(14.4) 5.5 4.4	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	赤色粒子	No.16	
134	〃	8	〃	(15.6) 6.6 4.6	底部回転糸切り	橙色	〃	No.33	
134	〃	9	〃	15.8 6.2 5.0		にぶい橙色	〃	竈内 No.38・42	内外面表面剥離
134	〃	10	土師器 皿	(11.0) (5.8) 1.9	底部回転糸切り		白・赤色粒子 小礫	No.5	
134	〃	11	〃	13.3 (5.0) 2.6	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	赤色粒子	No.5・28	
134	〃	12	土師器 坏A	— (5.0) —	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文				底部外面墨書「上」
134	〃	13	黒色土器 坏	(12.4) (6.0) 3.2	底部回転糸切り、内面黒色	灰黄色	白色粒子	竈内 No.36	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
134	11号住	14	黒色土器 坏	12.6 4.6 3.5	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	にぶい橙色	白色粒子、小礫異質	No.23	完形
134	〃	15	〃	(15.4) 6.2 4.4	底部回転糸切り、内面黒色	黒灰色	白色粒子		
134	〃	16	黒色土器 椀	14.6 7.4 5.0	底部回転糸切り後、付高台、内面黒色	にぶい黄橙	〃	No.22	
134	〃	17	黒色土器 皿	13.0 5.4 2.4	底部回転糸切り、内面黒色	褐　色	〃	No.29	
134	〃	18	灰釉陶器 皿	— (7.1) —	付高台、内面施釉	灰　色	〃	No.43	
134	〃	19	土師器 小型甕C	(11.6) 6.0 9.6	体・底部手持ヘラ削り	褐灰色	〃	No.18・34・35	
134	〃	20	土師器 甕A	— (7.2) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	赤褐色	粗、白・赤色粒子小礫	No.3・20・25・40・44	
134	〃	21	須恵器 甕	— — —	外面叩き	灰赤色	白色粒子	No.27	
134	12号住	1	土師器 坏A	(11.0) (6.0) (4.1)	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	にぶい黄橙色	赤色粒子	No.10～12	
134	〃	2	〃	(11.4) (6.4) 4.2	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	〃	No.9	
134	〃	3	須恵器 高台坏A	— 8.9 —	底部・高台周辺回転ヘラ削り	灰　色	白色粒子	No.17	
135	13号住	1	土師器 坏A	11.2 5.3 4.2	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙　色	白・赤色粒子	No.7	ほぼ完形
135	〃	2	〃	11.4 5.6 4.5	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	暗褐～褐色	〃	No.5	体・底部外面墨書「氏」
135	〃	3	〃	(14.0) (7.0) 5.4	〃	橙　色	〃	No.1～3	体・底部外面墨書「氏」
135	〃	4	〃	(10.4) — —	体部手持ヘラ削り	〃	〃	No.7	体部外面墨書
135	〃	5	〃	— (6.0) —	体部手持ヘラ削り、内面暗文	にぶい橙色	白色粒子、雲母		体部外面墨書「氏」
135	〃	6	〃	— 5.6 —	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	黄褐色	白・赤色粒子		体部外面墨書「氏」
135	〃	7	〃	— 6.0 —	〃	黒褐色～にぶい橙色	白・赤色粒子雲母	No.13	
135	〃	8	土師器 皿	(16.0) 5.8 2.9	体・底部回転ヘラ削り	橙　色	白・赤色粒子	竈内No.12	
135	〃	9	土師器 鉢?	(14.0) — —	体部回転ヘラ削り	〃	〃	No.14	
135	〃	10	土師器 蓋A	(17.6) — —	〃	〃	〃	No.7	体部外面墨書
135	〃	11	土師器 甕A	— (9.0) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	黒褐色	やや粗、白色粒子小礫、雲母	竈内No.9・10	
135	〃	12	土師器 坏A	— — —	内面暗文	にぶい橙色	白・赤色粒子雲母		体部外面墨書
135	〃	13	〃	— — —	〃	橙　色	白・赤色粒子		体部外面墨書
135	〃	14	須恵器 坏	— — —	底部回転糸切り	淡黄色	〃		底部外面墨書
135	14号住	1	土師器 坏A	(12.9) (4.0) 4.0	体・底部手持ヘラ削り	橙　色	赤色粒子	No.14	
135	〃	2	〃	12.2 3.9 3.7	底部糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	〃		No.13	
135	〃	3	〃	12.6 3.8 4.1	体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.1	内面に漆付着
135	〃	4	〃	12.6 5.4 3.5	〃	〃	白・赤色粒子	No.11	
135	〃	5	〃	(13.8) 5.1 4.3	〃	〃	赤色粒子	No.9・10	
135	〃	6	〃	(14.3) — —		〃	〃	No.15	
135	〃	7	〃	(12.8) — —		にぶい橙色	〃		
135	〃	8	灰釉陶器 小瓶	— 5.6 —	底部回転糸切り、体部上半施釉	灰　色		No.8	底部外面タール付着
135	〃	9	土師器 甕A	(18.2) — —	内外面ハケメ	暗赤色	白色粒子、雲母		
135	〃	10	〃	(28.0) — —	〃	赤褐色	白色粒子	No.6・7・12	
136	15号住	1	土師器 坏A	(11.4) (3.5) (3.5)	体・底部手持ヘラ削り	橙　色			
136	〃	2	〃	(12.7) (4.1) 3.9	体・底部手持ヘラ削り 底部回転糸切り	橙　色			
136	〃	3	〃	(13.4) 6.1 4.2	底部回転糸切り	〃			
136	〃	4	〃	(13.7) (3.6) 5.3	体・底部手持ヘラ削り	〃		竈脇ピット内	
136	〃	5	〃	(13.5) (4.5) 5.0	底部回転糸切り	にぶい黄橙色			
136	〃	6	〃	— 5.6 —	〃	橙　色		竈脇ピット内	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
136	15号住	7	土師器 皿	12.8 3.8 2.8	底部糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	明赤褐色			
136	〃	8	〃	13.6 4.5 2.6	体部手持ヘラ削り 底部回転糸切り	橙　色			
136	〃	9	黒色土器 坏	15.3 5.9 6.0	底部回転ヘラ削り、内面黒色	にぶい赤褐色			
136	〃	10	甲斐型黒色土器 坏	(13.0) (5.5) 5.0	体部下半・底部手持ヘラ削り、内面黒色	橙　色			
136	〃	11	〃	12.7 — —	内面黒色	〃			
136	〃	12	〃	(17.2) — —	体部手持ヘラ削り、内面黒色	にぶい橙色			
136	16号住	1	土師器 坏A	(11.0) 4.5 4.4	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙　色	白・赤色粒子		体部外面墨書「木」
136	〃	2	土師器 皿	— 5.6 —	体・底部回転ヘラ削り 内面回転ヘラナデ（暗文）	〃	〃		
136	〃	3	須恵器 坏	(12.0) (6.0) 3.7	底部回転糸切り	灰　色	白色粒子		
136	〃	4	土師器 甕A	(25.0) (8.0) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	茶褐色	白色粒子 雲母、小礫	竈内他	
136	〃	5	〃	— (9.0) —	内外面ハケメ	〃	白色粒子、雲母		
136	17号住	1	土師器 坏A	(13.0) (5.0) 4.0	体・底部手持ヘラ削り	褐　色	小礫		
136	〃	2	〃	(15.0) (6.0) 4.4	体・底部手持ヘラ削り	橙　色	赤色粒子多量		体部外面墨書
136	〃	3	土師器 皿	12.8 3.0 2.2	体・底部手持ヘラ削り	〃	白・赤色粒子		
136	〃	4	灰釉陶器 皿	— — 6.5	付高台	灰　色			
136	〃	5	土師器 羽釜A	(26.2) — —	外面ハケメ、内面ナデ	黒褐色	雲母	竈内他	
137	18号住	1	土師器 坏A	12.0 4.4 3.4	体・底部手持ヘラ削り	明黄褐色			
137	〃	2	〃	12.4 5.0 3.9	体・底部手持ヘラ削り	橙　色			
137	〃	3	〃	(12.2) (3.4) 3.6	体・底部手持ヘラ削り	明黄褐色			
137	〃	4	〃	(12.0) (4.8) 3.3	体部手持ヘラ削り 底部回転糸切り	〃			
137	〃	5	〃	14.4 4.4 4.4	体・底部手持ヘラ削り	橙　色			
137	〃	6	〃	(15.0) 5.4 4.4	体・底部手持ヘラ削り	にぶい褐色			
137	〃	7	土師器 皿	(12.6) (3.9) 2.1	体・底部手持ヘラ削り	橙　色			
137	〃	8	〃	(12.0) (4.5) 2.1	体部手持ヘラ削り 底部回転糸切り	〃			
137	〃	9	〃	(12.3) (3.0) 2.2	体・底部手持ヘラ削り	明黄褐色			
137	〃	10	〃	13.2 3.8 2.5	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	〃			ほぼ完形
137	〃	11	〃	12.8 4.0 2.0	体・底部手持ヘラ削り	橙　色			
137	〃	12	甲斐型黒色土器 坏	— 4.8 —	体部手持ヘラ削り 底部回転糸切り				
137	〃	13	灰釉陶器 椀	(13.0) — —		灰白色			
137	〃	14	土師器 坏A	— — —					体部外面墨書
137	〃	15	土師器 小型甕B	11.0 — —	体部外面手持ヘラ削り 内面ナデ	黄褐色～ 明黄褐色			
137	〃	16	土師器 羽釜A	(30.0) 8.4 —	内外面ハケメ	褐　色	白色粒子、雲母		
137	19号住	1	土師器 坏A	(12.0) (4.0) 3.5	体・底部手持ヘラ削り		白・黒・赤色粒子		
137	〃	2	〃	(13.0) (5.0) 3.5	〃	橙　色	粗 白・赤色粒子		
137	〃	3	〃	(13.6) (4.5) 4.1	〃	明褐色	赤色粒子		
137	〃	4	〃	(13.8) — —	体部手持ヘラ削り	にぶい橙色	白色粒子		
137	〃	5	〃	(15.0) (6.0) 4.3	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	明赤褐色	白・赤色粒子		
137	〃	6	土師器 皿	(11.0) (3.8) (2.3)	体・底部手持ヘラ削り	赤褐色	粗、白色粒子		
137	〃	7	〃	(16.5) (4.4) (2.5)	〃	明褐色	赤色粒子		
137	〃	8	〃	(12.8) 4.3 3.1	体部手持ヘラ削り 底部回転糸切り	橙　色	白・赤色粒子		体部外面墨書
137	〃	9	甲斐型黒色土器 坏	14.5 4.0 4.4	体・底部手持ヘラ削り 内面黒色	明赤褐色	〃		

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
137	20号住	1	須恵器坏	— 3.0 —	底部回転糸切り	灰白色	白・黒色粒子		
138	21号住	1	土師器坏A	(10.0) 4.4 4.0	体・底部手持ヘラ削り 内面暗文	橙色		No.18	
138	〃	2	〃	(11.0) 5.0 4.0	体部手持ヘラ削り 底部回転糸切り	〃	赤色粒子		
138	〃	3	〃	(11.6) 5.2 4.1	〃	浅黄～黄橙色	〃	No.6	
138	〃	4	〃	11.2 5.6 4.2	体部手持ヘラ削り、底部回転糸切り、内面暗文	浅黄橙色		No.7・17	
138	〃	5	〃	(11.4) (6.0) 4.2	体・底部手持ヘラ削り	黄橙色			
138	〃	6	〃	(11.2) 5.6 4.4	体部手持ヘラ削り 底部回転糸切り	灰白～黄橙色		No.18	
138	〃	7	〃	(12.0) (6.0) 3.7	体部手持ヘラ削り、内面暗文	にぶい橙色			
138	〃	8	土師器高台坏	— 8.0 —	体・底部回転ヘラ削り 削り出し高台、内面暗文	橙色		No.16	
138	〃	9	黒色土器？	(12.0) — —	内面黒色	にぶい黄橙色	小礫	No.18	
138	〃	10	須恵器鉢B	(29.0) (15.0) 15.5		灰色	〃	No.12・15	
138	〃	11	土師器甕A	(24.0) (8.0) —	内外面ハケメ	茶褐色	やや粗 雲母多量	No.11	
138	〃	12	〃	(26.0) — —	内外面ハケメ、内面縦ナデ	〃	〃	No.2・8・10・37	
138	〃	13	〃	— — —	内外面ハケメ	黒褐色	〃	竈内他、No.19・21～24・33・35	
138	〃	14	〃	— — —	内外面ハケメ	茶褐色	やや粗、雲母	竈内他 No.2	
139	22号住	1	土師器坏A	(10.8) 5.5 4.2	底部糸切り後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	にぶい橙色	スコリア	No.1	灯明具 底部外面墨書「介」
139	〃	2	須恵器高台坏?	— 8.2 —	底部回転ヘラ削り			No.2	
139	〃	3	土師器甕A	— (8.0) —	内外面ハケメ、底部木葉痕、内面指頭圧痕	茶褐色	雲母多量	竈内 No.9	
139	〃	4	須恵器甕	(21.0) (16.0) —	外面叩き	黄灰色		竈No.6	11・22・27・29・34・41・46・54・59・70・83・99・107・124号住
139	〃	5	〃	(30.0) (15.0) —	〃			No.4	3・5・16・18・19・32・40・41・45・46・47・54号住、24号掘立
140	23号住	1	土師器坏A	11.9 4.5 4.0	底部回転糸切り	橙色	白・赤色粒子	No.8	
140	〃	2	〃	11.5 4.6 4.5	〃	〃	〃	No.10	
140	〃	3	〃	13.0 5.5 4.0	体・底部手持ヘラ削り	明赤褐色	〃	No.5～7	体部外面墨書
140	〃	4	〃	13.8 (4.7) 4.1	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.3	
140	〃	5	〃	14.0 (5.0) 4.4	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤・白色粒子	No.6	体部外面墨書
140	〃	6	〃	14.3 5.6 4.5	〃	〃	赤色粒子	No.4	体部外面墨書「介」
140	〃	7	〃	14.4 5.7 5.0	底部回転糸切り	〃	白色粒子	No.2	
140	〃	8	土師器皿	12.4 5.0 2.7	体・底部手持ヘラ削り	〃	白・赤色粒子	No.16	体部外面墨書「万」
140	〃	9	〃	12.8 4.5 2.5	体部手持ヘラ削り 底部回転糸切り	〃	〃	No.4・12～15	体部外面墨書
140	〃	10	甲斐型黒色土器坏	(14.4) (5.2) 4.6	体・底部手持ヘラ削り 内面黒色	にぶい橙色		No.6	体部外面墨書
140	〃	11	緑釉陶器椀	(17.0) (8.5) 6.1	付高台、口縁部輪花状、全面緑釉			No.1	
140	〃	12	〃	— (7.0) —	付高台、全面緑釉	オリーブ灰色		No.1	
140	24号住	1	土師器坏A	12.2 4.6 4.0	底部糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.2	完形
140	〃	2	〃	(13.2) (4.0) 5.7	〃	褐色		No.14	
140	〃	3	土師器皿	(12.4) (3.4) 2.2	体部手持ヘラ削り 底部回転糸切り	褐色		No.14・21	
140	〃	4	甲斐型黒色土器坏	— (4.4) —	体・底部手持ヘラ削り	黒褐色		No.5	
140	〃	5	灰釉陶器皿	(18.0) (8.0) (3.8)		灰白色		No.7	
140	〃	6	土師器小型甕A	(16.2) (7.6) (13.6)	内外面ハケメ	橙色	やや粗	No.12・20	
140	〃	7	土師器甕A	(27.8) — —	〃	褐色	〃	No.3・16・18・20	
140	25号住	1	土師器坏A	(12.0) (5.6) 4.2	体・底部手持ヘラ削り	明赤褐色	〃	竈内他	
140	〃	2	〃	(12.0) 4.8 4.3	〃	〃			

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
140	25号住	3	土師器 坏A	(12.8) 5.4 3.9	底部回転糸切り	橙色	やや粗	竈 掘立内	
140	〃	4	〃	(13.0) 5.4 3.7	底部回転糸切り後、手持ヘラ削り	にぶい橙色	粗		器形歪む
140	〃	5	〃	(16.0) — —	体部回転ヘラ削り	橙色			内面摩耗、内面黒色の可能性
140	〃	6	〃	— 4.8 —	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色			
140	〃	7	土師器 皿	(12.6) (4.4) 2.4	体・底部回転ヘラ削り 内面渦巻状暗文	橙色	やや粗 白・赤色粒子		
141	〃	8	〃	(13.0) 4.6 2.5	〃	〃	白・赤色粒子	掘方内	
141	〃	9	〃	(13.0) 4.5 2.3	〃	〃	〃	竈内	
141	〃	10	〃	(13.2) (5.4) 2.1	〃	〃	白色粒子	竈内	
141	〃	11	〃	(13.4) 4.8 2.6	〃	〃	白・赤色粒子		
141	〃	12	〃	(13.6) 5.0 2.3	〃	〃	赤色粒子	掘方内	
141	〃	13	〃	(13.0) — 2.0	〃	〃	〃		
141	〃	14	〃	— — —	〃	明赤褐色			底部外面墨書「宅」
141	〃	15	黒色土器 坏	(12.0) 5.3 4.4	底部回転糸切り、内面黒色	にぶい橙色	やや粗 白・赤色粒子	No.8	
141	〃	16	〃	12.0 (5.4) 4.2	〃	〃	〃		
141	〃	17	黒色土器 高台皿?	12.6 — —	内面黒色	〃	〃		
141	〃	18	土師器 坏A	— — —		橙色			体部外面墨書
141	〃	19	土師器 小型甕D	12.0 — —	胴部外面及び口縁部内面カキメ	明赤褐色	やや粗 白色粒子	竈内 掘方内	
141	〃	20	土師器 小型甕A	18.0 — —	内外面ハケメ	にぶい赤褐色	粗、白色粒子 雲母	No.2・5	外面摩耗
141	〃	21	土師器 甕A	23.0 — —	〃	にぶい褐色	〃	No.1・3	
141	〃	22	〃	24.0 — —	〃	暗赤褐色	〃	掘方内 No.12	
141	〃	23	〃	28.0 — —	〃	明赤褐色	〃	竈内 No.19	
141	〃	24	須恵器 甕	17.4 — 29.0	外面叩き 底部付近に一部布目痕	褐灰色			49・33号住、3号掘立ピット A23B22
142	26号住	1	土師器 坏A	13.0 5.0 3.5	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	やや粗 赤色粒子	No.4	
142	〃	2	土師器 皿	12.2 (3.2) 2.7	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	白・赤色粒子	No.7	
142	〃	3	甲斐型黒色土器 坏	(17.0) (4.5) 5.3	体・底部手持ヘラ削り 内面黒色	橙色	赤色粒子		
142	〃	4	須恵器 蓋A	(21.0) — —		明赤褐色	白色粒子	No.5	
142	〃	5	土師器 鉢AI	(22.0) — —	内外面ハケメ	〃	粗	竈内 No.24・26	
142	〃	6	土師器 甕A	(36.0) — —	〃	暗赤褐色	粗、白色粒子 雲母	No.28	
142	〃	7	土師器 羽釜B	(27.4) — —	外面ハケメ後2段の凸帯 内面指頭圧痕	灰褐色		No.3・6・21	類例不明
142	27号住	1	土師器 坏A	(11.0) 4.4 4.0	体・底部手持ヘラ削り 内面暗文	橙色		No.10	
142	〃	2	〃	12.2 4.8 4.2	底部糸切り後、体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	〃		No.1	
142	〃	3	〃	(12.6) 3.2 3.8	底部糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	〃		No.23	
142	〃	4	〃	13.0 4.0 4.1	〃	〃		No.12・13	
142	〃	5	〃	(13.8) 5.2 (5.3)	〃	〃	やや粗	No.14	
142	〃	6	土師器 皿	(13.4) (6.6) 2.1	体・底部回転ヘラ削り 内面渦巻状暗文	〃		No.8	
142	〃	7	〃	— 4.6 —	体・底部手持ヘラ削り	〃	やや粗 小礫多量	No.15	坏の可能性もある
142	〃	8	黒色土器 坏	13.4 7.4 4.0	底部回転糸切り 内面ミガキ後黒色	白褐色		No.7	
142	〃	9	須恵器 蓋A	— — —	体部回転ヘラ削り	青灰色		No.2	
142	〃	10	灰釉陶器 椀	(17.2) (8.0) 4.8	底部付高台、内外面灰釉ハケ塗り	灰白色			
142	〃	11	土師器 甕A	(30.0) — —	内外面ハケメ	赤褐色	白色粒子 雲母	No.18	
142	〃	12	〃	(30.6) — —	〃	茶褐色	雲母	竈内 No.17	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
142	27号住	13	須恵器 長頸壺A?	— — —	肩部に耳	暗灰色		No.5・6	
142	〃	14	須恵器 甕		外面叩き	暗青灰色		No.3	転用硯
143	28号住	1	土師器 坏A	10.8 5.0 4.3	体・底部手持ヘラ削り 内面暗文	橙　色	白・赤色粒子	No.1	64号住
143	〃	2	甲斐型黒色土器 坏	15.4 6.0 5.2	体・底部手持ヘラ削り 内面黒色	にぶい赤褐色	白色粒子		
143	〃	3	土師器 皿	12.9 4.0 2.4	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	白・赤色粒子	No.34	
143	〃	4	〃	(12.6) (4.0) 2.6	体・底部手持ヘラ削り 内面渦巻状暗文	橙　色	赤色粒子		A21B24
143	〃	5	〃	12.3 3.2 2.7	体・底部手持ヘラ削り	にぶい赤褐色	白・赤色粒子	No.35	
143	〃	6	土師器 小型甕A	(14.6) — —	外面ハケメ、内面ハケメ後ナデ	にぶい橙色	白色粒子、雲母	No.40・41	
143	〃	7	土師器 甕A	(27.3) — —	内外面ハケメ	橙　色	〃	No.18・23	
143	〃	8	〃	(31.4) — —	〃	〃	〃	No.3・15・16	
143	29号住	1	土師器 坏A	(10.4) (4.0) 4.4	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃			
143	〃	2	〃	(13.8) — —	体部手持ヘラ削り、内面暗文	〃			
143	〃	3	須恵器 坏	(11.6) — —		浅黄橙色 ～褐灰色	やや粗		
143	〃	4	土師器 甕A	— 9.6 —	内外面ハケメ、底部木葉痕	にぶい赤褐色	粗、白色粒子		
143	〃	5	〃	(26.0) — —	内外面ハケメ	〃	白色粒子、雲母	No.3	
143	30号住	1	土師器 坏A	11.8 3.7 4.3	体部手持ヘラ削り 底部糸切り後手持ヘラ削り	橙　色	白・赤色粒子	No.16	灯明具
143	〃	2	〃	(14.0) (4.4) 4.9	体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.22・23	
143	〃	3	土師器 皿	(12.7) (5.5) 2.8	体部手持ヘラ削り	〃	白色粒子	No.21	
143	〃	4	〃	12.5 4.4 2.9	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	赤色粒子	No.17	
143	〃	5	須恵器 坏	— 6.9 —	底部回転糸切り	灰白色	白色粒子		
143	〃	6	土師器 小型甕E	(21.8) — —	外面ナデ後、縦ヘラ削り	明赤褐色	〃	No.19・20・21	7号住
144	31号住	1	土師器 皿	12.4 4.8 2.6	体・底部手持ヘラ削り	橙　色	やや粗 赤色粒子	No.11	底部外面墨書
144	〃	2	〃	12.8 4.6 2.9	〃	〃		No.6	
144	〃	3	〃	(13.6) 5.2 2.7	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	明赤褐色	赤色粒子	No.3	
144	〃	4	〃	12.8 4.2 2.4	底部回転ヘラ削り 内面渦巻状暗文	〃	やや粗 赤色粒子	No.1	
144	〃	5	黒色土器 坏	(11.8) (5.8) 4.7	底部回転糸切り 内面ナデ後黒色	にぶい褐色			
144	〃	6	土師器 小型甕D	— 9.0 —	外面カキメ、底部ナデ	明赤褐色	粗	No.10	
144	〃	7	土師器 小型甕C	— (9.0) —	底部ナデ	にぶい橙色	やや粗	No.11	外面剥離
144	32号住	1	土師器 坏A	12.0 5.0 4.1	体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.1	口縁部内面黒色付着
144	〃	2	〃	(14.0) (5.5) (4.2)	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	灰褐色		竈 No.9・10	
144	〃	3	〃	(16.0) (7.0) 5.7	底部回転糸切り	にぶい褐色	赤色粒子	No.10・11	
144	〃	4	須恵器 高台坏A	— (9.8) —	底部回転ヘラ削り後、付高台	褐灰色	白色粒子	No.6	底部外面焼成後線刻
144	33号住	1	土師器 坏A	(11.6) 5.2 4.0	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい褐色		No.7	底部外面線刻
144	〃	2	〃	(11.0) 5.8 4.5	底部回転糸切り後回転ヘラ削り(?) 内面暗文	〃		No.9	
144	〃	3	〃	(12.4) (6.5) 4.5	体・底部手持ヘラ削り 内面暗文	にぶい橙色			A23B27
144	〃	4	〃	(14.3) (6.1) 5.0	体・底部手持ヘラ削り	〃		No.13	
144	〃	5	黒色土器 坏	(12.8) 5.4 4.0	底部回転糸切り 内面ナデ後黒色	にぶい黄橙色		No.16	
144	〃	6	土師器 小型甕C	— 6.6 —	底部回転糸切り	灰黄褐色	やや粗	No.6	
144	〃	7	須恵器 壷	— 8.5 —	底部付高台	灰白色	白色粒子	No.4	
144	〃	8	土師器 甕A	(24.0) — —	内外面ハケメ	にぶい赤褐色	雲母	竈内 No.14	
144	〃	9	〃	— 8.0 —	内外面ハケメ、底部木葉痕	灰褐色	やや粗	No.1	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
145	34号住	1	土師器 坏A	(12.0) 4.3 3.9	体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子	No.12	
145	〃	2	黒色土器 坏	(14.2) 6.1 5.3	底部回転糸切り、内面黒色	にぶい黄橙色		No.38	
145	〃	3	〃	(14.8) (6.2) 4.9	底部回転糸切り 内面ミガキ後黒色	灰白色		No.15・17・ 23・26	底部、体部外面2ヶ所、計3ヶ所に墨書「万」
145	〃	4	黒色土器 椀	(15.2) — —	底部回転糸切り後、付高台 内面ミガキ後黒色	〃		No.15・17・19	
145	〃	5	黒色土器 高台皿	12.3 6.4 2.6	底部付高台、内面黒色	浅黄橙色		No.2	完形
145	〃	6	〃	12.8 5.6 3.0	〃	にぶい橙色		No.39	完形
145	〃	7	〃	(13.0) 6.2 2.7	〃	灰白色		No.15	
145	〃	8	〃	12.7 6.3 2.9	〃	浅黄橙色		No.25	完形、底部外面墨書
145	〃	9	須恵器 坏	(13.0) (7.4) 4.3	底部回転糸切り	灰色	白色粒子	No.30	
145	〃	10	須恵器 高台坏?	— (8.2) —	底部回転糸切り後、付高台	〃	〃	No.31	
145	〃	11	灰釉陶器 椀	16.8 8.0 5.4	底部付高台 内面施釉(ハケ塗り)	明オリーブ灰色		No.8・9・13・ 14	
145	〃	12	土師器 小型甕A	(14.8) — —	内外面ハケメ	にぶい赤褐色	やや粗 白色粒子、雲母		
145	〃	13	〃	(22.0) — —	〃	明赤褐色	白色粒子、雲母	竈内	
145	〃	14	〃	— 5.8 —	内外面ハケメ、底部木葉痕	にぶい赤褐色	やや粗	No.40	
145	35号住	1	土師器 坏A	(11.5) 9.1 4.9	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	赤色粒子	No.4	
145	〃	2	〃	(12.6) (4.0) 3.6	体部手持ヘラ削り 底部回転糸切り	にぶい褐色	白色粒子		灯明具
145	〃	3	〃	(12.8) 4.0 4.9	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.26	
145	〃	4	〃	(13.2) 3.9 3.5	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.22	
145	〃	5	〃	(13.8) (4.9) 4.3	体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.22	体部外面墨書
145	〃	6	〃	(16.0) (6.0) 5.5	体・底部手持ヘラ削り	〃	白・赤色粒子	No.34・37	
145	〃	7	土師器 皿	(12.0) 3.7 2.8	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.27	
145	〃	8	〃	(12.9) 4.2 2.8	〃	〃	〃	No.24・26	
145	〃	9	〃	(13.4) 3.5 2.8	体・底部手持ヘラ削り	〃	〃		
145	〃	10	灰釉陶器 皿	(14.1) 7.0 2.8	底部付高台 内外面施釉(つけがけ)	灰色			
145	〃	11	〃	— 6.3 —	付高台	褐灰色		No.15	
145	〃	12	土師器 鉢AI	(44.0) — —	内外面ハケメ	にぶい橙色 ～黒褐色	やや粗 白色粒子、小礫	竈内 No.17・25	
146	〃	13	土師器 小型甕A	(16.4) 7.6 15.0	内外面ハケメ、底部木葉痕	赤褐色	やや粗 白色粒子	No.12	
146	〃	14	〃	— 6.6 —	〃	暗褐色～ 赤褐色	やや粗 白色粒子		
146	〃	15	土師器 甕A	30.4 — —	内外面ハケメ	暗褐色	粗、白色粒子 雲母	竈内 No.18・19・29	
146	〃	16	〃	— 9.3 —	外面ハケメ、内面ナデ	にぶい橙色	やや粗 白色粒子	No.1	77号住
146	36号住	1	土師器 坏A	11.1 — —	体部手持ヘラ削り	橙色		No.9	
146	〃	2	〃	(12.4) 4.0 4.2	体部手持ヘラ削り 底部回転糸切り	〃			
146	〃	3	〃	(16.0) — —	体部手持ヘラ削り	にぶい褐色			体部外面墨書
146	〃	4	土師器 鉢AII	(20.0) (8.6) 6.9	外面ハケメ、内面ナデ 底部木葉痕	橙色	やや粗	No.4	
146	〃	5	甲斐型黒色土器 坏	(14.8) 5.4 5.0	体部手持ヘラ削り 底部回転糸切り、内面黒色	〃			
146	〃	6	須恵器 高台坏A	— 7.5 —	底部付高台	緑灰色	小礫	No.9・10	
146	〃	7	須恵器 壷?	— (9.4) —	底部回転糸切り	浅黄色			
146	〃	8	土師器 小型甕A	(14.2) — —	内外面ハケメ		やや粗、雲母		
146	〃	9	土師器 甕A	(24.2) — —	〃	橙色	やや粗		
146	〃	10	土師器 竈形土器	— — —	〃	明赤褐色	雲母、白色粒子多量		
146	37号住	1	須恵器 坏	(12.0) (6.0) 3.8	底部回転糸切り	灰色	白色粒子		

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
146	37号住	2	須恵器 坏	(12.0) (6.0) 3.8	底部回転糸切り	褐灰色	やや粗		
146	〃	3	土師器 甕A	(24.0) — —	外面ハケメ 内面横ハケメ後縦ナデ	赤褐色	粗、雲母	No.2・3・4・5・ 6・7・8	
146	〃	4	灰釉陶器 壷?	— — —	外面施釉	灰白色			5号溝
147	38号住	1	土師器 坏A	(12.4) 4.0 3.8	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい赤褐色	赤色粒子	No.23	体部外面墨書
147	〃	2	〃	(13.0) 4.8 3.5	体部手持ヘラ削り 底部回転糸切り		赤色粒子	No.14	
147	〃	3	〃	(14.2) 5.4 4.6	〃	橙　色	〃	No.17	
147	〃	4	〃	14.4 4.8 4.8	体・底部手持ヘラ削り	にぶい黄橙色			体部外面墨書
147	〃	5	〃	(14.8) 5.2 4.85	体部手持ヘラ削り、 底部回転糸切り	橙　色	赤色粒子	No.26	
147	〃	6	土師器 皿	(12.4) (3.0) 2.6	〃	〃	〃		
147	〃	7	〃	13.2 4.0 2.5	体部手持ヘラ削り	〃	〃	No.13	
147	〃	8	黒色土器 坏	14.4 5.4 4.8	底部回転糸切り、内面黒色	にぶい黄橙色		No.25	
147	〃	9	黒色土器 椀	— 5.4 —	底部回転糸切り、付高台			No.2	
147	〃	10	須恵器 高坏	— — —		灰オリーブ色		No.11	
147	〃	11	灰釉陶器 ?	— 7.8 —	付高台	灰白色		No.12	転用硯(高台内利用)
147	〃	12	灰釉陶器 椀	16.0 8.4 5.3	付高台 みこみ部と内外面施釉(はけ塗り)	〃		No.16	
147	〃	13	土師器 羽釜A	(24.0) — —	外面ハケメ、内面縦ナデ	黒褐～ 淡黄色	やや粗	No.9	26号住No.10
147	39号住	1	土師器 坏A	(11.0) 5.8 4.2		にぶい橙		No.4	内外面剥離
147	〃	2	〃	11.4 5.6 4.2	体・底部手持ヘラ削り	橙　色	赤色粒子	No.1	
147	〃	3	〃	12.0 5.8 4.3	底部回転糸切り後、底部手持ヘラ削り	にぶい黄橙 ～黒色		No.3	
147	〃	4	〃	11.2 — —	体部手持ヘラ削り	にぶい橙		No.9	
147	〃	5	黒色土器 鉢	— 6.6 —	底部回転糸切り	灰黄褐色	白色粒子	No.2	底部外面焼成前線刻
147	〃	6	土師器 皿	(15.2) (7.5) 2.2	体・底部回転ヘラ削り 内面放射状暗文	橙　色		No.14	底部外面墨書「上」
147	〃	7	土師器 甕A	(16.0) — —	内外面ハケメ	褐　色	やや粗 白色粒子、雲母	No.6	
147	40号住	1	土師器 坏A	12.0 — —	体部手持ヘラ削り、内面暗文	橙　色		No.1	
147	〃	2	土師器 甕A	(26.0) — —	内外面ハケメ	赤褐色	粗、赤色粒子 雲母		
148	41号住	1	須恵器 坏	(13.6) (7.6) 4.7	底部回転糸切り	灰黄～ にぶい黄色	白色粒子	No.5	
148	〃	2	〃	(13.6) — —		灰　色	〃	No.12	
148	〃	3	〃	(14.8) (8.8) 3.5	底部ヘラ切り後、ヘラナデ	〃	やや粗 白・黒色粒子	No.1	
148	〃	4	土師器 甕CⅡ	(21.0) (7.7) 34.0	底部回転糸切り、胴部叩き目	にぶい橙色	粗、白・赤色粒子 小礫	No.6～10・ 15～17	
148	42号住	1	土師器 坏A	12.8 5.4 3.5	体・底部手持ヘラ削り	橙　色	白・赤色粒子 小礫	No.4	混入か?
148	〃	2	土師器 甕CⅢ	21.2 — —	外面ヘラ削り、内面ナデ	浅黄橙色	粗、白色粒子 小礫	竈内 No.13.16	
148	〃	3	〃	(24.8) 9.5 36.5	外面ヘラ削り、口縁叩き、内面縦ハケメ	にぶい黄橙	やや粗、白・赤色 粒子、雲母、小礫	竈内、No.1・2・3・5・7・8・ 10・11・12・14・15・20・22	
149	43号住	1	土師器 竈形土器	(28.5) (27.8) 25.8	外面縦ハケメ、内面横ハケメ	にぶい赤褐色	粗、白色粒子	竈内、No.2・5・6・8・ 9・10・12・13・15	
149	44号住	1	須恵器 甕	(42.0) — —	口縁部2本の蛇行沈線	灰　色		No.2・7	8・10号住、16号掘立
150	45号住	1	土師器 坏A	(13.0) 3.4 4.1	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙	白・赤色粒子		
150	〃	2	〃	12.6 5.2 4.0	〃	橙　色	白・赤色粒子多量	No.11	完形
150	〃	3	〃	(13.0) (5.0) 4.1	〃	暗褐色	白・赤色粒子		
150	〃	4	土師器 皿	(13.0) (3.4) 2.8	体部手持ヘラ削り 底部回転糸切り	内—橙色 外—黄橙色	やや粗 白・赤色粒子		
150	〃	5	〃	(13.0) (5.0) 3.0	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	白・赤色粒子 雲母		
150	〃	6	〃	(13.0) (4.0) 3.2	〃	内—暗褐色 外—黄褐色	やや粗、白・赤色 粒子、小礫	6号ピット内	体部外面墨書
150	〃	7	甲斐型黒色土器 坏	(14.0) (5.4) 4.4	体・底部手持ヘラ削り 内面黒色	橙　色	白・赤色粒子	竈内、No.10・ 15・16・30	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
150	45号住	8	甲斐型黒色土器 坏	(16.0) (5.6) 4.8	体・底部手持ヘラ削り 内面黒色	橙色	白・赤色粒子 雲母	No.29	
150	〃	9	土師器 鉢AI	(39.0) — —	外面ハケメ、内面ハケメ後ナデ	茶褐色	白・赤色粒子、雲母、黒色粒子	No.2・23・31	
150	〃	10	灰釉陶器 壷?	— 9.4 —	底部回転ヘラ削り 付高台後ナデ、外面施釉	灰色	白色粒子 小礫	No.1・5・6・7	
150	〃	11	土師器 小型甕A	(17.0) 8.0 (16.4)	内外面ハケメ、底部木葉痕	茶褐色	やや粗、白・赤色粒子、雲母、小礫	竈内、No.13・14・18・19・20・21・28	
150	〃	12	土師器 甕A?	— (8.0) —	〃	〃	やや粗、小礫、白・赤色粒子、雲母	No.9	
150	〃	13	土師器 羽釜A	(21.0) — —	内外面ハケメ	〃	やや粗 白色粒子、雲母	No.21・24	
150	46号住	1	土師器 皿	(12.0) (4.2) 2.5	体・底部回転ヘラ削り 内面渦巻状暗文	橙色	白・赤色粒子	No.11	
150	〃	2	甲斐型黒色土器 坏	(16.0) — —	内面ミガキ後、黒色	黄褐色	白・赤色粒子 雲母		体部外面墨書「内」?
150	〃	3	黒色土器 高台皿	(13.6) (7.0) 2.9	内面ミガキ後、黒色、底部付高台	〃	〃	竈内 No.15	
150	〃	4	須恵器 蓋A	— — —	外面回転ヘラ削り	オリーブ灰色		No.8	
150	〃	5	須恵器 甕	(19.0) — —	外面叩き	暗青灰色		No.3	32号住
150	〃	6	土師器 小型甕A	(16.0) (7.0) (14.0)	内外面ハケメ	茶褐色	白色粒子 雲母		A25B24
150	〃	7	土師器 甕A?	(12.0) — —	〃	黄褐色	やや粗 白色粒子、雲母		混入品か
150	〃	8	土師器 甕A	(28.0) — —	〃	茶褐色	やや粗 白色粒子、雲母	竈内 No.5	
151	47号住	1	土師器 坏A	12.3 4.4 3.8	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.5	A25B24 ほぼ完形
〃	2	151	〃	13.8 5.4 4.8	〃	明赤褐色	〃		A25B24
151	〃	3	灰釉陶器 皿	— 8.0 —	付高台、内面施釉(全面はけ塗り)	灰白色		No.3	
151	〃	4	須恵器 甕?	— — —	外面叩き	青灰色			32号住 A25B24
151	〃	5	土師器 甕A	(32.0) — —	内外面ハケメ	内—黒褐色 外—明赤褐色	やや粗	No.2・3・6・7	A25B24
151	〃	6	須恵器 円面硯		脚部長方形透し孔				円面硯脚部片
151	48号住	1	土師器 坏A	— (6.0) —	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色			体部外面墨書
151	〃	2	須恵器 坏	(12.4) 6.2 4.4	底部回転糸切り	灰黄色	白色粒子	No.2	
151	〃	3	土師器 小型甕A	(13.6) — —	内外面ハケメ	暗褐色	やや粗	No.11	
151	〃	4	土師器 甕CI	(22.0) 8.6 (35.5)	内外面ナデ	にぶい赤褐色	粗、白色粒子 小礫多	竈内、No.3～7・10・12・13	
151	49号住	1	土師器 坏A	(15.0) — —	体部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子	No.3	体部外面墨書
151	50号住	1	土師器 坏A	(12.4) 4.1 4.0	体部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.5・6	
151	〃	2	〃	(12.6) 4.5 3.6	〃	〃	〃	No.14	
151	〃	3	〃	14.5 5.8 4.6	〃	〃	白・赤色粒子	No.11	
151	〃	4	〃	13.0 4.6 3.7	〃	にぶい橙		No.4	
152	〃	5	土師器 皿	(12.0) (4.0) 2.9	体・底部手持ヘラ削り	にぶい赤褐色			
152	〃	6	灰釉陶器 皿	(16.4) (7.6) 3.6	付高台、内面施釉	灰色	白色粒子	No.13	
152	〃	7	土師器 甕A	(33.0) — —	内外面ハケメ	暗褐色	粗、白色粒子 雲母	No.2	
152	51号住	1	土師器 坏C	(14.0) (4.0) (4.5)	内面ハケメ	橙色	やや粗 白・赤色粒子	No.9	
152	〃	2	土師器 甕B	(22.4) — —	外面ヘラ削り、ナデ、内面ハケメ	にぶい橙色	やや粗 白色粒子	竈内 No.11・12	
152	〃	3	〃	31.8～33 10.2 23.3	〃	〃	やや粗 白色粒子	竈内 No.1～4・10・13	内面白色付着物
152	52号住	1	土師器 坏A	11.0 5.0 4.3	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	赤色粒子	No.1	
152	53号住	1	黒色土器 椀	15.2 7.2 4.9	体部回転ヘラ削り 底部付高台、内面黒色	にぶい橙色		No.4～7	
152	54号住	1	土師器 坏A	11.0 4.6 4.4	体部手持ヘラ削り 底部回転糸切り、内面暗文	〃		No.48	完形
152	〃	2	〃	(11.6) (6.2) 4.3	〃	橙色	赤色粒子	No.20・34	
152	〃	3	土師器 高台坏	— (7.4) —	体部回転ヘラ削り 底部削り出し高台、内面暗文	にぶい橙色	〃	No.21	
152	〃	4	土師器 皿	16.2 6.2 2.2	体・底部回転ヘラ削り 内面渦巻状暗文	橙色		No.23	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
152	54号住	5	土師器 蓋A	17.0 — —	外面回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	橙色	赤色粒子	No.6	
152	〃	6	〃	(17.2) — 4.4	外面回転ヘラ削り	〃		No.19・40・41	
152	〃	7	須恵器 高台坏A	(15.2) 8.0 6.5	底部糸切り後、付高台、回転ヘラ削り	暗灰色	白色粒子、小礫	No.13	
153	〃	8	土師器 甕A	(23.2) — —	内外面ハケメ	暗赤褐色	粗、白色粒子 雲母多量	竈内、No.16・17・31・33・42・43・6	
153	〃	9	土師器 円筒土器?	— — —	外面縦ナデ、内面横ナデ	橙色	粗、白色粒子 小礫	No.26・30・32・44	
153	55号住	1	土師器 坏A?	(9.8) (6.2) 3.5	体部内外面横ミガキ	〃			底部外面に焼成後線刻「田」 A23B22
153	56号住	1	黒色土器 鉢	17.0 6.6 6.6	底部回転糸切り、内面黒色	にぶい橙色	やや粗	No.4・.5	A25B24
153	〃	2	黒色土器 高台皿	(13.0) 6.7 2.7	底部回転糸切り後、付高台 内面黒色	褐色	やや粗 白色粒子	No.1	
153	〃	3	土師器 甕A	— (9.4) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	赤褐色	粗、白色粒子 雲母	No.2	
153	57号住	1	土師器 坏A	(10.8) 5.4 4.0	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい赤褐色		No.4	
153	〃	2	土師器 蓋A	(17.0) — —		橙色		No.2	
153	〃	3	須恵器 蓋A	18.0 — —	外面回転ヘラ削り	灰色	白色粒子	No.1	
153	58号住	1	土師器 坏A	13.8 5.6 4.5	底部糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子	No.8・18	
153	〃	2	土師器 坏A?	13.6 6.6 4.1	体部ナデ、底部糸切り後ナデ 内面みこみ部花弁状暗文	赤褐色	白色粒子	No.27	混入品か
153	〃	3	土師器 皿	12.0 3.6 2.6	体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子	No.6・7・14	
153	〃	4	〃	12.7 4.8 2.7	〃	〃	〃	No.12・17	
153	〃	5	甲斐型黒色土器 坏	(17.7) (5.9) 5.0	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	明赤褐色	赤色粒子	No.17・34	
153	〃	6	土師器 鉢AI	(38.1) — —	内外面ハケメ	褐色	白色粒子 雲母	No.22・31・32	
153	〃	7	土師器 坏A	— — —		橙色			体部外面墨書
154	〃	8	土師器 甕A	(31.1) — —	内外面ハケメ	赤褐色	白色粒子 雲母	No.2	
154	〃	9	土師器 羽釜A	(22.7) — —	内面ハケメ	明赤褐色	白色粒子 雲母		
154	59号住	1	土師器 坏A	(11.0) (6.0) (4.3)	体部手持ヘラ削り 底部糸切り後手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子 雲母		
154	〃	2	〃	— (6.0) —	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	赤色粒子 雲母	No.12	
154	〃	3	土師器 高台坏	— 8.5 —	底部静止糸切り後付高台 回転ヘラ削り	〃	赤色粒子多量	No.2	
154	〃	4	黒色土器 坏	(14.0) 7.4 4.6	体部回転ヘラ削り、底部手持ヘラ削り、内面ミガキ後、黒色	にぶい橙色	白・赤色粒子 小礫	No.4・5	底部外面墨書
154	〃	5	〃	(16.0) (7.0) 4.7	底部手持ヘラ削り 内面ミガキ後、黒色	黄橙色	小礫	No.3	
154	〃	6	須恵器 坏	(10.0) (6.0) 3.9	底部回転糸切り	灰白色	白色粒子	No.1	みこみ部線刻
154	〃	7	須恵器 蓋A	(16.0) — —	外面手持ヘラ削り	青灰色	〃	No.10	
154	〃	8	土師器 鉢B	(20.0) 8.7 11.0	外面ケズリ、ミガキ、内面暗文 底部手持ヘラ削り、ナデ	橙色	白・赤色粒子	竈内 No.8・9	
154	〃	9	土師器 甕CI	— — —	内外面ナデ	黄褐色	やや粗 白色粒子	竈内 No.15・16	
154	〃	10	〃	(22.0) — —	〃	橙色	やや粗 白・赤色粒子	No.13	
154	〃	11	土師器 甕A	(21.0) (8.0) —	内外面ハケメ、内面指頭痕	黒褐色	やや粗 雲母を多量	竈内 No.7	
154	〃	12	須恵器 凸帯壺	— (14.0) —	外面叩き、突帯上に耳 底部付近回転ヘラ削り	灰色			
155	60号住	1	土師器 皿	(13.0) (5.2) 2.6	体・底部回転ヘラ削り 内面渦巻状暗文	橙色	白・赤色粒子		
155	〃	2	土師器 甕A	(27.0) — —	内外面ハケメ	にぶい褐色	やや粗 白色粒子、雲母	No.1	
155	61号住	1	土師器 坏A	(12.0) 4.0 4.0	体・底部手持ヘラ削り	褐色	白・赤色粒子	No.25	灯明具
155	〃	2	〃	(12.6) (4.0) 3.7	〃	橙色	〃	No.35	
155	〃	3	〃	(13.0) — —	体部手持ヘラ削り	〃	〃	竈内 No.21	
155	〃	4	土師器 甕A	(29.0) — —	外面ハケメ、内面ハケメ後ナデ	黄褐色	やや粗 白色粒子、雲母	No.22	A21B24
155	〃	5	〃	— (9.0) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	茶褐色	〃	No.1・3・5～8 10～18	
155	62号住	1	土師器 坏A	(12.5) 4.0 4.4	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	やや粗 白・赤色粒子	No.8	灯明具

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
155	62号住	2	土師器 坏A	(14.0) (4.0) 4.3	体・底部手持ヘラ削り	茶褐色	やや粗 白・赤色粒子	No.6	
155	〃	3	土師器 皿	(14.0) (6.4) 2.0	〃	橙　色	白・赤色粒子		
155	63号住	1	土師器 坏A	(12.0) (4.5) 4.1	〃	褐　色	白・赤色粒子 雲母		
155	〃	2	〃	(14.0) (5.0) 4.5	〃	黄褐色	白・赤色粒子		内外面黒色付着物
155	〃	3	〃	(14.6) (9.0) (3.9)	体部内外面、みこみ部暗文 底部手持ヘラ削り	橙　色	赤色粒子 雲母	No.4	混入品か
155	〃	4	土師器 皿	(14.0) (4.0) 2.8	体・底部回転ヘラ削り	〃	赤色粒子		
155	〃	5	黒色土器 坏	(16.0) 6.0 5.3	底部回転糸切り 内面ミガキ後黒色	灰黄色	やや粗	No.10・15・16	体部外面墨書「万」
155	〃	6	黒色土器 椀	14.8 7.2 5.6	底部回転糸切り後付高台 内面黒色	黄褐色	やや粗 赤色粒子を多量	No.1	
155	〃	7	黒色土器 高台皿	(13.0) 7.5 2.4	底部付高台、内面ミガキ後黒色	〃	白色粒子 雲母	No.14	
155	〃	8	須恵器 壷?	— (5.0) —	底部付高台	灰　色	白色粒子	No.8	
155	〃	9	灰釉陶器 椀	(16.0) (6.5) 5.0	体・底部回転ヘラ削り、付高台	灰白色	〃	No.13	
155	〃	10	土師器 竈形土器	(31.0) (33.0) (30.0)	内外面ハケメ、径3.8cmの孔	茶褐色	やや粗 白色粒子、雲母	No.12	91号住
156	64号住	1	土師器 坏A	(15.0) — —	体部手持ヘラ削り	橙　色	白、赤色粒子	No.3	
156	〃	2	土師器 甕A	(32.0) — —	内外面ハケメ	黒褐色	やや粗 雲母多量	No.5	28号住 A21B24
156	65号住	1	須恵器 坏	(13.0) — —		黄褐色	白、赤色粒子	No.4	
156	〃	2	〃	— (8.0) —	底部及び底部周辺回転ヘラ削り	灰白色	白色粒子	No.3	
156	〃	3	土師器 甕?	— 7.0 —	底部周辺回転ヘラ削り 底部回転糸切り	〃	粗、白・赤色粒子 雲母	No.6	
156	〃	4	土師器 甕CⅢ	(24.0) — —	外面縦ナデ、ケズリ	茶褐色	粗、赤色粒子 小礫	竈内 No.7～10・12～16	
156	66号住	1	須恵器 坏	(12.8) 7.4 3.8	底部回転糸切り	灰　色	白色粒子	竈内	
156	〃	2	〃	— 6.0 —	体部手持ヘラ削り 底部回転糸切り	〃	〃	No.5	
156	〃	3	〃	— (9.0) —	体部手持ヘラ削り	灰白色	白色粒子、小礫	No.1	
156	〃	4	須恵器 蓋A	(23.0) — —	外面回転ヘラ削り	黄灰色 ～灰色	小礫多量	No.6・11・18	
156	〃	5	土師器 小型甕C	(11.4) 7.0 10.3	体部回転ヘラ削り 底部回転糸切り	褐　色	粗、小礫多量	No.7・9・12	
156	〃	6	〃	(13.0) — —		〃	やや粗 白色粒子、雲母	竈内	
156	〃	7	土師器 甕CⅣ	(22.0) — —	体部叩き後下半縦ヘラ削り 内面縦ハケメ	橙　色	〃	竈内	
157	〃	8	土師器 甕CⅡ	(26.6) — —	外面一部叩き	褐　色	粗、小礫多量	竈内 No.4・16・17	
157	67号住	1	土師器 甕A	(25.0) — —	内外面ハケメ	茶褐色	やや粗 白色粒子、雲母	竈内 No.3	
157	68号住	1	土師器 坏A	(12.0) 4.4 4.9	体・底部手持ヘラ削り	橙　色		No.19・20	
157	〃	2	〃	(12.0) (5.0) 4.5	〃	黄褐色			
157	〃	3	〃	(13.0) (4.0) 4.1	〃	橙　色	赤色粒子多量	No.8	
157	〃	4	〃	(14.0) 5.0 5.3	〃	〃		No.1・18・19	体部一部に黒色付着物
157	〃	5	〃	(17.0) — —	体部手持ヘラ削り	〃		No.27	
157	〃	6	〃	— (4.0) —	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	褐　色		No.16	
157	〃	7	土師器 皿	(13.0) (4.4) 2.5	体、底部回転ヘラ削り 内面渦巻状暗文	橙　色			
157	〃	8	黒色土器 椀	14.0 7.2 5.5	底部糸切り後、付高台 内面黒色	黄褐色	粗	No.2	
157	〃	9	甲斐型黒色土器 坏	(14.0) — —	体部手持ヘラ削り 内面暗文、黒色	〃		No.21	
157	〃	10	須恵器 坏	— (7.6) —	体部回転ヘラ削り 底部回転糸切り	灰　色		No.22	
157	〃	11	灰釉陶器 椀	(17.0) (8.4) 5.4	底部付高台、内面施釉	オリーブ灰		No.14	
157	〃	12	緑釉陶器 椀	— (9.0) —	底部付高台、内外面施釉	淡い緑		No.23	
157	〃	13	土師器 小型甕C	(13.0) — —		茶褐色	白色粒子多量	No.13・24・26	
157	〃	14	土師器 鉢D	(36.0) — —	体部下半ケズリ、内面ナデ	褐　色		竈内、No.4・5・6・ 7・10・11・12・25	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
157	69号住	1	土師器坏A	(12.4) 4.6 3.9	体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.7	
157	〃	2	〃	(12.0) 5.5 4.4	〃	褐色		No.8	
157	〃	3	黒色土器坏	— (6.4) —	底部回転糸切り、内面黒色	〃		No.2	
158	〃	4	土師器皿	(13.0) — —	体部手持ヘラ削り	〃		No.8	
158	〃	5	〃	(12.8) 3.8 2.6	体部手持ヘラ削り 底部糸切り後手持ヘラ削り	橙色		No.9	灯明具
158	〃	6	〃	12.6 4.7 2.5	〃	褐色		No.12	完品
158	〃	7	黒色土器椀	(20.0) 9.2 6.5	底部糸切り後付高台 内面ミガキ、暗文後、黒色	〃		No.3	底部高台内に朱痕、スリ痕
158	〃	8	灰釉陶器椀	14.8 7.2 4.3	付高台、内外面施釉	灰色		No.10・11	
158	〃	9	灰釉陶器皿	— 8.0 —	〃	〃		No.4	
158	〃	10	三彩陶器蓋	4.8 — 1.5	外面を黄・黄緑・白に塗り別ける	灰白色	軟質	No.13	完形
158	〃	11	須恵器鉢A	(31.0) — —		〃			
158	70号住	1	土師器坏A	(10.4) 5.4 4.8	底部回転糸切り後、手持ヘラ削り 外部手持ヘラ削り	橙色		ピット内	
158	〃	2	〃	11.6 4.4 4.3	内外面手持ヘラ削り、内面暗文	にぶい橙色	赤色粒子	No.13	灯明具 53号住No.13
158	〃	3	〃	11.6 4.2 4.2	体部手持ヘラ削り、底部糸切り後手持ヘラ削り、内面暗文	明赤褐色		No.3・5・6	
158	〃	4	〃	(12.0) 5.2 4.2	体部手持ヘラ削り 底部回転糸切り、内面暗文	橙色	赤色粒子		53号住No.16
158	〃	5	〃	(12.0) (5.0) 4.3	体・底部手持ヘラ削り 内面暗文	明赤褐色			
158	〃	6	〃	(12.6) (5.6) 3.7	体・底部手持ヘラ削り 内面暗文	橙色	赤色粒子		53号住No.3
158	〃	7	〃	(11.8) — —	体部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	〃		53号住 体部外面墨書「生」
158	〃	8	〃	— (5.2) —	体・底部手持ヘラ削り 内面暗文	〃	〃		53号住No.14
158	〃	9	黒色土器坏	(11.0) — —	内面黒色	にぶい橙色			体部外面墨書
158	〃	10	黒色土器高台坏	— 7.8 —	底部削り出し高台 内面ヘラナデ、黒色		白色粒子		内面に漆状付着物 53号住No.2
158	〃	11	須恵器坏	12.8 4.6 3.5	底部回転糸切り	灰白色	やや粗	No.4	全体に歪み
158	〃	12	灰釉陶器鉢	(21.2) (8.8) 7.0	底部静止糸切り後回転ヘラ削り 内面施釉	〃	白色粒子	No.22・31	
158	〃	13	灰釉陶器椀	— 8.6 —	体・底部回転ヘラ削り 内面施釉、付高台	〃		No.15	
158	〃	14	土師器小型甕A	(13.0) (6.4) 10.1	内外面ハケメ、底部木葉痕	暗褐色	粗、白色粒子 雲母	No.2	
158	〃	15	土師器甕A	— 9.0 —	〃	明赤褐色	〃	No.16	
158	〃	16	〃	(30.8) — —	内外面ハケメ	にぶい赤褐色	〃	竈 No.20・21	
158	〃	17	〃	— (9.0) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	褐灰色		竈内、No.6・7・11・13・16・17・19・21	
159	〃	18	灰釉陶器長頸壷?	— 8.8 —	底部回転ヘラ削り 付高台、体部上半施釉	灰色		No.1	
159	〃	19	灰釉陶器短頸壷	(11.0) — —	体部上半施釉	灰白色		No.22・25・26・29、A24B25	
159	71号住	1	土師器坏A	(14.4) 4.4 4.6	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	赤色粒子		
159	〃	2	〃	(15.0) — —	体部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子		体部外面墨痕
159	72号住	1	土師器皿	12.2 4.4 2.7	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子		体部外面墨書「子」2ヶ所
159	〃	2	土師器坏A	— 4.0 —	体・底部手持ヘラ削り	橙色～にぶい黄橙色			体部外面墨書
159	〃	3	甲斐型黒色土器坏	(14.8) 4.8 5.2	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色				
159	74号住	1	土師器坏A	11.9 3.7 3.7	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.30	体部外面墨書「介」
159	〃	2	〃	12.7 4.9 3.7	底部回転糸切り後、体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.1	
159	〃	3	土師器皿	12.0 4.4 2.7	〃	〃	〃	No.11・12	
159	〃	4	〃	12.5 3.2 2.5	体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.12・20	体部外面墨書、ほぼ完形
159	〃	5	〃	12.7 4.2 2.6	体部手持ヘラ削り、底部回転糸切り	〃	〃	竈内 No.5・6	
159	〃	6	甲斐型黒色土器坏	(12.7) (4.2) (5.2)	体・底部手持ヘラ削り 内面黒色	〃		No.33	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
159	74号住	7	灰釉陶器小瓶	— 5.0 —	底部回転糸切り、体部上半施釉	灰色		No.25	
159	〃	8	須恵器甕	— — —	外面叩き			No.24	35・99・164号住 A24B28
159	〃	9	土師器甕A	(25.2) — —	内外面ハケメ	明赤褐色	赤色粒子 雲母	No.2・22・23	
159	〃	10	土師器小型甕A	(16.6) (8.6) 14.0	内外面ハケメ、底部木葉痕	赤褐色	雲母	竈内、No.8・9・10・32・36・48	
160	76号住	1	土師器坏A	(5.6) —	底部回転糸切後体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色		No.7	
160	〃	2	土師器甕C？	(22.0) — —		〃		No.19	
160	〃	3	〃	— — —		〃		No.80	
160	〃	4	土師器小型甕A	(10.0) — —	内外面ハケメ	〃	やや粗	No.3	
160	〃	5	土師器甕A	(24.6) — —	〃	褐色	やや粗、雲母	No.21	
160	77号住	1	土師器坏A	(10.8) (5.0) 4.4	体・底部手持ヘラ削り	橙色			
160	〃	2	須恵器蓋A	(17.2) — 3.3	外面回転ヘラ削り	内-黄灰 外-にぶい褐色	やや粗、小礫	No.10	35号住No.2、48号住、A21B25
160	〃	3	須恵器鉢A？	— — —	外面叩き	褐灰色	白色粒子	No.3・4・5	
160	〃	4	須恵器甕	— (11.2) —	〃	灰色		No.6・7	34・85・88号住、100住No.12、137住、A22B25
160	78号住	1	土師器坏A	11.9 4.5 3.7	底部回転糸切後体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色		No.5	ほぼ完形
160	〃	2	〃	12.8 4.5 3.7	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.7	〃
160	〃	3	〃	12.9 5.0 4.3	〃	にぶい橙色	〃	No.3・4	
160	〃	4	〃	(13.6) (5.2) 4.6	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.1・2	全体に歪み
160	〃	5	〃	13.8 5.4 5.0	底部回転糸切	橙色	白色粒子	No.2・6	〃
160	〃	6	土師器皿	12.8 3.0 2.8	体・底部手持ヘラ削り、やや厚い	にぶい橙色		No.8・12	
160	〃	7	土師器坏A	— — —		橙色			体部外面墨書
160	79号住	1	灰釉陶器平瓶	— — —		灰白色		No.5	
160	〃	2	土師器甕A？	(30.0) — —	外面ヘラ削り、内面ハケメ	褐灰色	白色粒子、雲母	竈内 No.2	
161	80号住	1	土師器皿	10.0 5.2 2.2	底部回転糸切	浅黄色			
161	〃	2	土師器坏A	12.6 5.2 3.9	底部回転糸切後ナデ	灰白色	やや粗、小礫	No.9	ほぼ完形
161	〃	3	〃	13.5 5.8 4.6	底部回転糸切	灰オリーブ色	粗	No.7・8	大きく歪む
161	〃	4	〃	— 4.0 —	底部ナデ	にぶい黄橙色		No.12	
161	〃	5	〃	— 6.0 —	底部回転糸切	にぶい橙色		No.2	
161	〃	6	土師器高脚高台皿	(12.0) — —	底部付高台	橙色		No.6	
161	〃	7	〃	14.0 9.0 5.3	〃	黒褐色	やや粗	No.10	
161	81号住	1	土師器坏B	12.4 8.0 3.2	底部手持ヘラ削り	橙色			体部内面焼成後線刻 66号住竈
161	〃	2	須恵器坏	(12.4) (5.3) 4.2	底部回転糸切、外周手持ヘラ削り	オリーブ灰色	白色粒子	No.1・4	
161	〃	3	須恵器蓋A	(13.4) — —	外面回転ヘラ削り	青灰色		No.3	
161	82号住	1	土師器高脚高台坏	16.5 11.0 9.8	底部付高台	にぶい黄橙色		No.2	ほぼ完形
161	〃	2	土師器皿？	15.0 — —		灰黄褐色		No.7	A22B26
161	〃	3	〃	— 6.0 —	底部回転糸切	にぶい橙色		No.1	
161	〃	4	土師器高脚高台皿	— 6.4 —	底部付高台	〃		No.3	
161	〃	5	灰釉陶器椀	— (7.0) —	底部付高台、内面施釉	黄灰色	小礫		
161	〃	6	〃	(13.0) (7.0) (5.3)	底部付高台、無釉	灰白色			A22B26
161	83号住	1	土師器坏A	12.4 4.5 3.6	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色		No.5・6・8・9	
161	〃	2	土師器皿	12.8 5.0 2.9	底部回転糸切	橙色	白・赤色粒子	No.1・2	
161	〃	3	〃	(12.2) 6.2 2.3	体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	竈内	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
161	83号住	4	土師器皿	13.0 (4.0) 2.5	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	白・赤色粒子	竈内 No.11	
161	〃	5	〃	(13.0) (4.4) 2.6	〃	橙　色	白色粒子	竈内 No.1	
161	〃	6	土師器坏A	— — —		にぶい橙色		竈内	体部外面墨書
161	〃	7	須恵器蓋A	(17.0) — 2.6		灰～褐灰色		No.3	
161	84号住	1	土師器坏A	12.0 5.4 4.0	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙　色		No.8	口縁部内面黒色付着物
161	〃	2	〃	(12.0) 4.3 4.6	〃	〃		No.15	〃
161	〃	3	〃	12.4 4.8 3.8	体・底部手持ヘラ削り	内-浅黄色 外-橙色			
161	〃	4	〃	(12.2) 4.8 4.2	〃	橙　色	小礫	No.3	
161	〃	5	〃	(13.0) 4.8 4.0	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃			
161	〃	6	〃	(13.0) 4.6 4.5	〃	〃		No.4	底部外面線刻「万」
161	〃	7	〃	(13.0) 3.6 3.5	〃	〃		No.10	体部外面墨書「生」
161	〃	8	〃	— 4.1 —	〃	〃		No.17	
161	〃	9	土師器皿	(13.0) — —	体部手持ヘラ削り	〃		No.28	
161	〃	10	〃	13.4 (3.6) 2.8	体・底部手持ヘラ削り	〃		No.15	内外面黒色付着物
162	〃	11	灰釉陶器皿	14.6 6.6 3.1	底部付高台、内外面施釉(はけ塗り)	灰白色	白色粒子		転用硯か、内面赤色塗料付着、100号住No.9
162	〃	12	灰釉陶器小瓶	— (4.0) —	体・底部回転糸切、体部上半施釉	〃		No.6	
162	〃	13	土師器小型甕A	(19.4) — —	内外面ハケメ	明赤褐色	白色粒子、雲母		100号住No.8
162	〃	14	土師器甕A	(36.0) — —	〃	橙　色		No.1	
162	〃	15	土師器羽釜A	(34.0) — —	〃	〃			A21B24
162	85号住	1	須恵器坏	(12.6) — —		灰褐色			
162	〃	2	〃	(15.2) (8.4) 4.4	底部回転糸切	灰黄色		No.1	
162	〃	3	須恵器蓋A	— — —	外面回転ヘラ削り	黄褐色			
162	〃	4	〃	(16.0) — —		灰　色			
162	86号住	1	土師器坏A	(13.0) 2.4 1.9	体・底部手持ヘラ削り	橙　色	小礫、赤色粒子		ピット4
162	〃	2	〃	6.5 — (3.1)	体部手持ヘラ削り	〃		No.6	
162	〃	3	土師器小型甕A	(11.0) (5.0) —	内外面ハケメ	黒褐色		No.3	
162	〃	4	須恵器甕	— — —	外面叩き	暗緑灰色	やや粗	No.1	転用硯、朱痕、スリ面
162	87号住	1	土師器坏A	11.3 4.1 3.9	体・底部手持ヘラ削り	褐　色		No.2	灯明具
162	〃	2	〃	— (5.8) —		内-黄橙色 外-橙色		No.8	
162	〃	3	〃	— — —	底部回転糸切	橙　色			体部外面墨書
163	〃	4	土師器甕A	(33.0) — —	内外面ハケメ	にぶい橙色	雲母、小礫	No.4・6・7	
163	89号住	1	土師器坏A	(13.2) 4.8 3.5	体・底部手持ヘラ削り	橙　色		No.11	
163	〃	2	〃	(14.0) (6.0) 5.0	底部回転糸切	〃	赤色粒子		本部外面墨書 102号住No.10
163	〃	3	甲斐型黒色土器坏	(14.6) — —	底部手持ヘラ削り、内面黒色	にぶい赤褐色			
163	〃	4	土師器甕A?	— 7.6 —	底部ヘラ削り	内-明黄褐色 外-にぶい黄橙色			
163	〃	5	土師器小型甕A	— 6.8 —	内外面ハケメ、底部木葉痕	にぶい赤褐色	やや粗	竈内 No.10	
163	〃	6	土師器羽釜A	23.8 — —	内外面ハケメ		〃	No.2・12・17	
163	90号住	1	土師器甕A	(36.8) 10.0 —	内外面ハケメ、底部木葉痕	暗赤灰色	〃	No.1・10～14	
163	〃	2	〃	— 9.0 —	〃	にぶい赤褐色	やや粗、白色粒子 雲母	No.6・9・11～13	
164	91号住	1	土師器坏A	(10.8) (4.3) 3.8	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙　色	赤色粒子	No.10	
164	〃	2	土師器皿	— — —	体・底部回転ヘラ削り	〃	〃		底部外面墨書

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
164	91号住	3	黒色土器高台皿?	(14.8) — —	内面黒色	にぶい橙色		No.6	
164	〃	4	灰釉陶器椀	(16.0) — —	内面と外面の一部に施釉			No.11	
164	93号住	1	土師器坏A	11.1 6.3 4.3	体部手持ヘラ削り、底部回転糸切内面暗文	赤褐色	赤色粒子	No.28・40	
164	〃	2	須恵器坏	11.1 6.4 3.6	底部回転糸切	灰色	白・黒色粒子	No.5・8	
164	〃	3	〃	11.7 6.7 4.1	〃	灰白色	〃	No.38・39・42	
164	〃	4	須恵器甕	— (11.0) —	外面叩き、内面ナデ	暗赤灰色	白色粒子	No.16・41	85号住、A20B24
164	〃	5	須恵器長頸壷A	8.2 — —		赤灰色	〃	No.9	67号住
164	〃	6	土師器甕A	(25.8) — —	内外面ハケメ	赤褐色	雲母	No.18・19・20・22・24・26	
164	〃	7	〃	(25.5) 8.4 —	内外面ハケメ、底部木葉痕	〃	白色粒子、雲母	No.15・18・21・22・23・25・27・29・32・36・40・44	
164	94号住	1	黒色土器高台皿	(12.2) (6.0) 3.3	底部回転糸切後、付高台、内面黒色	浅黄橙色		No.1	体部外面墨書?
164	95号住	1	須恵器坏	(11.0) (6.0) (3.9)	底部回転糸切	明オリーブ灰色		No.3	
164	96号住	1	〃	(11.4) 7.0 3.7	〃	灰白色		No.3	
164	〃	2	須恵器高台坏B	(11.8) (8.4) (3.4)	底部回転糸切後、付高台	灰褐色		No.1	
164	97号住	1	須恵器坏	(12.6) (5.0) 3.5	底部手持ヘラ削り	灰白色		No.10	
164	〃	2	〃	(13.0) — —		〃		No.8・9	
164	〃	3	土師器小型甕D	(10.0) — —	外面カキメ	灰褐色	やや粗		
164	〃	4	須恵器壷?	— — —		灰色	白色粒子	No.2	59・61・93号住No.31、115号住
165	99号住	1	土師器坏A	(11.0) (5.0) 4.2	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	にぶい橙色		No.20・21	
165	〃	2	〃	(11.0) (6.0) 4.4	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.8	
165	〃	3	〃	11.3 5.2 4.4	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色		No.26	
165	〃	4	〃	— 6.0 —	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色		No.29	
165	〃	5	須恵器坏	(11.8) 6.2 4.2	底部回転糸切	にぶい黄橙色	軟質 赤・白色粒子	No.3	口縁部内面に黒色付着物
165	〃	6	〃	(12.0) (6.7) —	〃	灰色		No.34	31号住
165	〃	7	〃	— 7.4 —	〃	灰色がかったにぶい橙色	白色粒子 砂粒少量	No.11	
165	〃	8	須恵器凸帯壷	— — —	肩部凸帯上に耳	暗オリーブ灰色		No.2	31・33・38・107・115・117・124・131・142号住、その他
165	〃	9	須恵器壷?	— (14.7) —	外面叩き、底部と周辺ナデ	〃	白色粒子、小礫	No.31・32・33	
165	〃	10	〃	— (11.0) —	底部回転糸切	灰白色	白色粒子	No.35	
165	100号住	1	土師器高台坏	(10.8) (6.5) 4.9	底部削り出し高台、高台周辺回転糸切、内面・みこみ部暗文	橙色	赤色粒子		底部外面に線刻
165	〃	2	土師器坏A	(11.5) — —	体部回転ヘラ削り、内面暗文	〃	〃		
165	〃	3	〃	— (5.5) —	体部手持ヘラ削り、底部回転糸切	〃	白色粒子		
165	〃	4	〃	— 8.1 —	底部回転糸切後、ヘラ削り	にぶい黄橙色	赤色粒子	No.56	
165	〃	5	須恵器?高坏	— — —		橙色		No.19	脚部片
165	〃	6	須恵器坏	(10.8) — —		灰白色	白・黒色粒子	竈内	
165	〃	7	〃	(12.3) 7.8 4.2	底部回転糸切	灰色	白色粒子	No.28・29	
165	〃	8	〃	12.7 7.3 3.6	底部回転糸切、周辺回転ヘラ削り	〃	〃	No.34	
165	〃	9	〃	(14.0) 7.1 3.7	底部回転糸切	灰白色	〃	No.1・3	
165	〃	10	〃	(13.8) 7.0 3.8	〃	〃	〃	No.37・48	
165	〃	11	〃	14.3 8.0 4.9	〃	〃	〃	No.31・41	
165	〃	12	〃	(14.9) (9.7) 5.5	底部回転ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.21	77号住
165	〃	13	須恵器高台坏B	(12.5) — —	底部回転ヘラ削り後、付高台(欠)	灰白色	白色粒子	No.5・32	
165	〃	14	土師器坏B	— (9.4) —		橙色			底部外面線刻 77号住No.9

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
165	100号住	15	土師器甕CⅡ	(19.6) — —	外面かすかに叩き	橙色	白色粒子	竈内 No.50・52	
166	〃	16	須恵器甕	(12.2) 7.1 16.9	外面底部叩き	緑灰色	白・黒色粒子	No.2	66・68・84・104・107号住、その他
166	〃	17	須恵器鉢B	(18.3) — —		にぶい黄橙色	白色粒子	No.6	
166	〃	18	須恵器鉢A	— — —	外面叩き	赤灰色	〃		A21B25
166	〃	19	須恵器甕	— — —	〃	灰色	白・黒色粒子	No.8・10・17・20・22・23・26・35	84・113号住
166	102号住	1	土師器坏A	11.2 6.2 4.5	体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.11	灯明具
166	〃	2	土師器皿	(13.8) (7.4) 2.6	体・底部回転ヘラ削り	にぶい黄橙色	やや粗	No.15	
166	〃	3	土師器蓋A	(17.6) — (4.2)	外面回転ヘラ削り、内面暗文	橙色		No.9・16	体部外面墨書「木」
166	〃	4	土師器甕A	(23.8) — —	内外面ハケメ	赤褐色	雲母	No.17・20	
166	103号住	1	土師器甕CⅢ	(16.0) — —	外面ヘラ削り後ナデ	橙色		No.13	
166	104号住	1	土師器皿	(12.7) (4.5) 2.0	体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.5	
166	〃	2	〃	(12.8) (5.0) 2.6	体・底部回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	〃	〃	No.6	
166	〃	3	〃	(12.6) (3.8) 2.6	体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.27	
166	〃	4	〃	— (4.0) —	体・底部回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	〃	〃	No.7.8	
166	〃	5	土師器甕A	(25.0) — —	内外面ハケメ	赤褐色	白色粒子、雲母	No.11・16	
167	〃	6	灰釉陶器長頸壷?	— 9.0 —	底部回転ヘラ削り、付高台、外面施釉	灰白色	白色粒子	No.24	
167	〃	7	須恵器横瓶	— — —	外面叩き	灰色	〃	No.19	120号住No.11
167	〃	8	須恵器甕	— — —	〃	〃	〃	竈内 No.25	転用硯
167	105号住	1	土師器坏A	(12.7) 5.0 4.3	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.24・25	
167	〃	2	〃	(13.0) 4.2 3.1	体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.40	
167	〃	3	〃	(12.6) 4.2 3.9	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.3	
167	〃	4	〃	(14.0) (5.0) 4.1	体・底部手持ヘラ削り	灰褐色 ～橙色	〃	No.37	
167	〃	5	〃	(15.6) — (4.8)	体部手持ヘラ削り	明赤褐色		No.8	
167	〃	6	土師器皿	(12.5) — 2.5	体・底部手持ヘラ削り （底面丸く仕上げる）	橙色	黒色粒子	No.6	
167	〃	7	灰釉陶器段皿	14.2 7.1 2.2	付高台、内外面底部一部施釉（はけ塗り）	灰白色		No.1	若干歪む
167	〃	8	土師器坏A	— — —					体部外面墨書
167	〃	9	〃	— — —					〃
167	〃	10	〃	— — —					〃
167	〃	11	須恵器短頸壷?	— — —		外面-赤灰色 内面-青灰色		No.30	A20B26
167	〃	12	土師器甕A	(29.0) — —	内外面ハケメ	明赤褐色		No.29・36・39・41	
167	〃	13	土師器羽釜A	(23.0) — —	〃	〃		No.9	
168	106号住	1	土師器坏A	(13.2) — —		黒褐色			
168	〃	2	〃	(15.6) (7.2) 3.9	底部ヘラナデ	にぶい橙色	やや粗	No.5	
168	〃	3	〃	— 4.4 —	底部回転糸切	橙色	赤色粒子	No.2	
168	〃	4	土師器高脚高台皿	— — —	付高台	〃		No.4	
168	〃	5	土師器甕A	— 6.8 —	内面ハケメ、底部木葉痕	にぶい赤褐色	粗、雲母	No.3	
168	107号住	1	土師器坏A	11.0 5.2 3.8	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色		No.6	ほぼ完形
168	〃	2	〃	(11.0) (5.8) 4.1	体・底部手持ヘラ削り、底部回転糸切、内面みこみ部暗文	〃		No.3	
168	〃	3	土師器皿	(18.0) — —	体部回転ヘラ削り	〃		No.22	
168	〃	4	土師器蓋A	(18.0) — —	外面回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	明赤褐色		No.21	
168	〃	5	須恵器坏	(12.0) (6.8) 3.6	底部回転糸切	灰色	白色粒子	No.15	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
168	107号住	6	須恵器坏	(13.0) (7.0) 4.3	底部回転糸切	灰黄色		No.8	
168	〃	7	須恵器高台坏?	— 6.2 —	底部静止糸切後回転ヘラ削り、付高台	灰白色	やや粗	No.24	
168	〃	8	須恵器蓋A	(15.6) — —	外面回転ヘラ削り	オリーブ灰色		No.10	
168	〃	9	土師器坏A?	— — —		にぶい橙色			底部外面墨書、線刻
168	〃	10	土師器甕D	(17.0) — —	体部縦ヘラ削り	橙　色		No.1	
168	〃	11	土師器円筒土器	(10.8) — —	外面ナデ	にぶい橙色	粗、白色粒子	竈内 No.13・23	
168	〃	12	須恵器甕	— (16.0) —		暗オリーブ灰色		No.20	99号住番号8と同一の可能性
168	109号住	1	土師器坏A	— 4.6 —	底部回転糸切	橙　色	赤色粒子	No.8	
168	〃	2	土師器皿	(12.9) 3.6 2.5	体・底部手持ヘラ削り	〃	白・赤色粒子	No.12	
168	〃	3	灰釉陶器椀?	— 6.8 —	付高台	にぶい黄橙色		No.11	
168	〃	4	灰釉陶器椀	— — (6.6)	付高台、内面施釉	〃	白色粒子	No.23	
168	〃	5	土師器鉢A1	(25.7) — —	内外面ハケメ	にぶい赤褐色	白色粒子、雲母	No.18	
168	〃	6	土師器甕A	(27.8) — —	〃	〃	雲母	No.2	
168	110号住	1	土師器坏A	(10.2) 4.6 4.5	体・底部手持ヘラ削り 内面暗文	橙　色		No.9	体部外面墨書
168	〃	2	〃	10.6 5.4 3.7	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃		No.2・7	ほぼ完形
168	〃	3	〃	10.4 5.6 4.1	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	赤色粒子	No.24	
168	〃	4	〃	10.8 4.0 4.2	〃	〃		No.20・21	
168	〃	5	〃	10.7 5.4 3.9	〃	にぶい橙色		No.23	完形
168	〃	6	〃	(11.0) 5.4 4.3	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	明赤褐色		No.12	
169	〃	7	〃	(11.0) 4.9 4.2	体部手持ヘラ削り、底部回転糸切	にぶい赤褐色	白色粒子	No.15	器面荒れ
169	〃	8	〃	11.2 4.9 4.2	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	赤色粒子	No.8	ほぼ完形 111号住No.22
169	〃	9	土師器高台坏	(14.8) 7.8 5.7	底部削り出し高台	橙　色		No.3・4	ほぼ完形
169	〃	10	須恵器甕	— (14.0) —	外面叩き	内-褐灰色 外-にぶい赤褐色	白色粒子	No.10	
169	〃	11	土師器甕A	(30.0) (8.0) —	内外面ハケメ	灰褐色	やや粗、白色粒子 雲母	竈内、No.11・13・ 14・17・19・22	
169	111号住	1	土師器坏A	(10.4) 5.8 4.3	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙　色		No.3	
169	〃	2	〃	10.6 4.8 4.3	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃		No.7	
169	〃	3	〃	11.1 4.8 3.8	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃		No.9	A24B27
169	〃	4	〃	11.0 5.0 4.7	〃	〃		No.18・19	ほぼ完形
169	〃	5	〃	11.0 5.4 4.4	〃	〃		No.2	内外面共摩滅 底部外面墨書
169	〃	6	〃	11.0 5.2 4.4	〃	〃		No.6	ほぼ完形
169	〃	7	〃	(11.0) (6.0) 4.3	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	黄橙色			
169	〃	8	土師器高台坏	(15.4) (8.7) 6.5	底部削り出し高台、体部回転ヘラ削り、内面暗文	にぶい橙色		竈内 No.23	
169	〃	9	土師器皿	— — —	体・底部回転糸切	橙　色		No.12・13	
169	〃	10	土師器坏?	— — —		〃			体部外面線刻
169	〃	11	須恵器高台坏A	— (7.8) —	底部回転糸切後、削り出し高台			No.10	
169	〃	12	須恵器壺?	— — —	底部回転ヘラ削り、付高台	緑灰色		No.4	底部外面転用硯 スリ面
169	112号住	1	須恵器坏	(11.0) (6.0) 3.7	底部回転糸切	明オリーブ灰色			
169	〃	2	〃	(6.4) (7.0) 3.7	〃	灰　色			
169	〃	3	〃	(12.0) (7.0) 4.1	〃	オリーブ灰色			
169	〃	4	〃	— (6.2) —	〃	〃			
169	〃	5	須恵器高台坏	(14.6) (9.3) 6.5	底部回転ヘラ削り後、付高台	灰　色		No.8	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
169	112号住	6	須恵器 高台坏	(15.0) — —		灰色			
169	〃	7	〃	— (7.8) —	底部回転ヘラ削り後、付高台	オリーブ灰色	白色粒子	No.12	
169	〃	8	須恵器 蓋A	17.0 — 4.0	外面回転ヘラ削り	灰黄褐色	白色粒子	No.2～5	
169	〃	9	土師器 小型甕C	(12.0) — —	ロクロナデ	橙色	やや粗、白色粒子	No.6	
169	〃	10	土師器 小型甕A	(13.0) — —	内外面ハケメ	褐色	粗、白色粒子	No.9	
170	113号住	1	土師器 坏A	10.9 5.1 4.1	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文		赤色粒子	No.3	灯明具、ほぼ完形
170	〃	2	〃	(11.4) 4.4 4.2	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	にぶい赤褐色	〃	No.16	体部外面墨書「又」
170	〃	3	土師器 高台坏	(16.6) 7.4 5.5	体・底部回転ヘラ削り、底部削り出し高台	にぶい橙色		No.15	
170	〃	4	土師器 皿	(12.6) 5.9 2.1	体・底部回転ヘラ削り	橙色	赤色粒子	竈内	体部外面墨書
170	〃	5	〃	12.7 5.0 2.7	〃	〃	白・赤色粒子	No.7.8	
170	〃	6	〃	(13.4) 5.9 2.6	〃	〃	赤色粒子	No.12	底部外面墨書
170	〃	7	〃	— (5.0) —	〃	〃	〃		底部内・外面線刻
170	〃	8	土師器 蓋A	(18.0) — —		〃	〃	No.29	
170	〃	9	黒色土器 坏	(12.8) 5.2 4.3	底部回転糸切、内面ミガキ後黒色	にぶい橙色			
170	〃	10	須恵器 坏	— (5.1) —	底部回転糸切	灰白色	白色粒子	No.2	
170	〃	11	土師器 小型甕C	(12.8) — —	ロクロナデ	にぶい橙色	〃	No.13	
170	〃	12	土師器 甕A	(28.8) — —	内外面ハケメ	暗赤褐色	白色粒子、雲母	No.19	
170	114号住	1	土師器 坏A	(11.0) 5.4 4.0	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色		No.7	
170	〃	2	〃	(11.0) 6.2 3.9	底部静止糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃		No.1	
170	〃	3	土師器 高台坏	— 8.6 —	底部削り出し高台、内面暗文	〃		No.5	
170	〃	4	土師器 坏D	(10.6) 6.0 2.6	体・底部ナデ	にぶい橙色	やや粗		灯明具
170	〃	5	土師器 皿	(16.0) — —		橙色		No.24・25	
170	〃	6	甲斐型黒色土器 坏	(11.0) (5.0) 3.9	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文黒色	〃			
170	〃	7	須恵器 高台坏A	(14.0) (8.0) 6.3	底部付高台、ナデ	灰色		No.15	
170	〃	8	土師器 坏A	— 5.6 —	底部静止糸切後、体・底部手持ヘラ削り、みこみ部暗文	にぶい橙色			底部外面線刻
170	〃	9	〃	— (5.0) —	底部手持ヘラ削り	〃			〃
170	〃	10	須恵器 長頸壷A	— — —	ロクロナデ	灰色		No.19	
170	〃	11	土師器 甕CV	24.0 — —	外面カキメ、内面ナデ	にぶい橙色			
170	〃	12	灰釉陶器 壷?	— — —	外面施釉	暗赤褐色	やや粗、白色粒子		113号住、A21B28・30
170	〃	13	土師器 甕A	28.0 — —	内外面ハケメ	〃	粗	No.28	
170	〃	14	〃	25.6 8.5 38.2	〃	暗褐色	やや粗、白色粒子 雲母、小礫	竈内、No.30・35・37・38・40・41・42・43・45	体部下半スス付着 A23B28
171	115号住	1	土師器 坏A	(11.9) (6.0) 4.3	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子		
171	〃	2	〃	— (9.5) —	体部ナデ、横ミガキ、底部糸切後ナデ	〃		No.14	
171	〃	3	土師器 皿	(12.1) (5.3) 2.2	体部手持ヘラ削り、底部糸切後手持ヘラ削り	黄橙色	赤色粒子	No.30	
171	〃	4	〃	12.8 4.0 2.9	体・底部手持ヘラ削り		白色粒子	No.22・23	
171	〃	5	黒色土器 椀	12.0 4.6 3.7	底部回転糸切、内面黒色	橙色	〃	竈内 No.31	
171	〃	6	〃	15.7 6.3 5.1	〃	〃	〃	No.29・34	
171	〃	7	〃	(17.8) (6.2) 6.2	底部ヘラ削り、内面ミガキ後、暗文黒色	〃		No.1・2	
171	〃	8	須恵器 椀	11.3 5.5 3.6	底部回転糸切	にぶい橙色	白色粒子	No.42	
171	〃	9	〃	— (6.8) —		灰色	〃	No.21	
171	〃	10	須恵器 高台坏?	— (7.0) —	底部糸切後、付高台	〃	〃		

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
171	115号住	11	須恵器坏?	— (6.4) —	底部回転ヘラ削り	灰色	白色粒子		
171	〃	12	灰釉陶器段皿	— 8.2 —	付高台、内外面施釉	白灰色		No.7	
171	〃	13	土師器皿	— 7.6 —	体・底部回転ヘラ削り	橙色	赤色粒子		体部外面墨書
171	〃	14	土師器坏A	— — —		〃			底部内・外面線刻
171	〃	15	土師器甕A	(33.2) — —	内外面ハケメ	明赤褐色	白色粒子、雲母	No.5	
171	〃	16	須恵器短頸壷B	11.5 15.5 28.6	内外面かすかに指頭痕	灰色	白色粒子、小礫	No.26・27	
171	116号住	1	土師器坏A	(10.4) 4.5 4.2	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい褐色	白色粒子	No.22・24	
171	〃	2	〃	11.9 4.8 4.8	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	にぶい黄褐色		No.35	
171	〃	3	土師器皿	(14.0) (6.0) 2.9	底部回転糸切後、体・底部回転ヘラ削り	にぶい橙色		No.10・27	
171	〃	4	土師器蓋A	15.8 — 4.5		〃		竈内 No.2・3・29	
171	〃	5	土師器甕A	(30.0) — —	内外面ハケメ	にぶい赤褐色		No.6・23・31	
171	117号住	1	土師器皿	(12.4) (4.4) 2.7	体・底部手持ヘラ削り	暗褐色		竈内	
171	〃	2	灰釉陶器椀	(16.4) (8.6) 5.5	付高台、内外面施釉	灰白色			
171	〃	3	土師器竈形土器	— — —	内外面ハケメ	暗茶褐色	やや粗、白・赤色粒子、雲母	No.3	
171	118号住	1	土師器皿	(13.0) (4.6) 2.6	体・底部手持ヘラ削り	橙色	やや粗	No.2	
171	〃	2	土師器甕A	(30.0) — —	内外面ナデ	〃	粗、白・黒色粒子雲母	No.5	
172	119号住	1	土師器皿	12.3 3.2 2.8	体・底部手持ヘラ削り	〃		No.6・15・17	
172	〃	2	黒色土器椀	(15.6) 6.1 4.5	内面黒色	褐色	雲母	No.2	
172	〃	3	土師器小型甕A	18.8 — —	内外面ハケメ	暗褐色	やや粗、白色粒子雲母	No.1・7・13・14・16・18・19	
172	〃	4	土師器羽釜A	(27.8) — —	〃	橙色	やや粗 雲母多量	No.8・10・11	
172	〃	5	土師器皿?	— — —		〃			底部外面墨書
172	120号住	1	土師器皿	(13.3) 4.3 2.9	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.12	体部外面墨書
172	〃	2	〃	(13.2) (4.4) 2.4	体・底部手持ヘラ削り	〃		No.10	体・底部外面墨書
172	〃	3	黒色土器坏?	19.0 — —	内面黒色	〃		No.4	
172	〃	4	土師器皿	— — —					体部外面墨書
172	〃	5	土師器甕A	(29.0) — —	内外面ハケメ	にぶい黄橙色	やや粗 雲母	No.4	
172	121号住	1	土師器皿	(17.6) (8.0) 2.5	体・底部回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	にぶい赤褐色			
172	〃	2	須恵器坏	(13.2) (8.0) 4.1	底部回転糸切	浅黄橙色		No.4	
172	〃	3	須恵器高台坏	(16.4) 9.8 6.8	底部回転糸切後、付高台	灰色		No.2	
172	〃	4	須恵器蓋A	(19.0) — —		〃		No.1	
172	〃	5	須恵器甕	— (14.0) —		〃	粗 白色粒子、雲母	No.5・8	須恵器の焼成不良品
172	〃	6	土師器小型甕C	(14.0) — —	ロクロナデ	にぶい褐色	粗 白色粒子	No.13	
172	〃	7	土師器甕CI?	— — —	〃	にぶい橙色	〃	No.8・10	
173	〃	8	須恵器甕	— — —	内外面ナデ	灰色		竈内 No.11・16	
173	122号住	1	土師器坏A	(12.0) (6.0) 4.4	体部わずかに手持ヘラ削り、底部糸切後、手持ヘラ削り、内面暗文	橙色		No.4・5	底部外面墨書
173	〃	2	須恵器甕	— — —	外面叩き、内面青海波	にぶい赤褐色		No.1	
173	123号住	1	土師器坏A	— (6.0) —	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色		No.5	
173	〃	2	土師器甕CIV?	— — —	外面ハケメ、内面ナデ	橙色	やや粗 雲母	No.6	
174	124号住	1	土師器坏A	(11.0) (4.8) 3.9	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃		No.1	
174	〃	2	土師器皿	(13.6) 4.2 2.4	体・底部回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	〃	赤色粒子	No.2	
174	〃	3	須恵器甕	30.0 — —		褐灰色		No.5	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、(　)は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
174	125号住	1	土師器坏A	10.8 5.9 4.6	体・底部手持ヘラ削り、内面みこみ部暗文	明赤褐色		No.2	体・底部外面墨書「北」
174	126号住	1	土師器坏B	(17.7) 9.8 5.3	体部縦の暗文、底部手持ヘラ削り後ナデ、内面みこみ部暗文状ミガキ	橙　色		No.3・7	
174	〃	2	須恵器坏	(14.6) (7.8) 4.5	底部回転ヘラ切後、手持ヘラ削り	灰白色	やや粗、小礫少量	No.2	
174	〃	3	土師器小型甕C	(11.0) — —	ロクロナデ	暗褐色	やや粗、雲母		
174	127号住	1	土師器坏A	(12.6) (4.4) 4.1	体部手持ヘラ削り	褐　色		No.10	体部外面線刻
174	〃	2	土師器皿	(12.5) (3.5) 2.4	体・底部手持ヘラ削り	暗褐色		竈内	
174	〃	3	土師器甕A	(30.0) — —	内外面ハケメ	〃	雲母	No.5	
174	128号住	1	土師器坏A	(11.0) (5.0) 3.8	体部手持ヘラ削り、底部回転糸切内面暗文	にぶい橙色			
174	〃	2	土師器小型甕C?	— — —	内外面ナデ	〃	赤色粒子		
174	〃	3	〃	— 7.2 —	内外面ナデ、底部回転糸切	暗褐色	白色粒子	No.1	
175	129号住	1	土師器坏B?	— (4.0) —	底部手持ヘラ削り	橙　色			底部外面線刻
175	〃	2	土師器小型甕B	— 9.4 —	内外面ナデ、底部木葉痕	にぶい橙色	白色粒子	No.1	
175	〃	3	〃	12.2 (7.0) 15.2	〃	明赤褐色	白色粒子、雲母	No.2・3	
175	〃	4	土師器甕CV	— — —	外面カキメ	橙　色	〃	No.6・7・9	
175	130号住	1	土師器坏A	10.6 4.8 4.6	体部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.7	
175	〃	2	〃	12.8 5.0 4.6	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃		No.6	
175	〃	3	〃	10.6 5.0 4.3	体部手持ヘラ削り	〃		竈内 No.1	
175	〃	4	〃	10.8 5.0 4.5	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃		竈内 No.5・8	
175	〃	5	〃	10.8 5.6 3.9	〃	にぶい褐色	赤色粒子	No.3	
175	〃	6	土師器皿	14.0 9.0 2.3	内面放射状暗文	明赤褐色			
175	〃	7	須恵器高台坏A?	— 9.0 —	付高台	橙　色		No.10	
175	〃	8	須恵器長頸壺C	— — —	ロクロナデ	青灰色			壺G類か、110・115号住 A24B27
175	〃	9	土師器坏A	— — —					底部外面墨書
175	〃	10	〃	— — —	内面暗文				底部外面墨書「氏」?
175	131号住	1	〃	10.2 4.8 4.0	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙　色	赤色粒子		
175	〃	2	土師器鉢?	20.0 — —	内面暗文	にぶい黄橙色	〃		
175	132号住	1	土師器坏A	(12.8) 4.5 4.1	体・底部手持ヘラ削り	橙　色	白・赤色粒子、砂粒	No.11	体部外面墨書「吉」
175	〃	2	〃	15.8 5.5 5.4	〃	〃	白・赤色粒子	No.5	体部外面墨書 154号住No.1
175	〃	3	黒色土器坏	— (5.8) —	底部回転糸切、内面ミガキ後黒色	黄褐色	やや粗、白色粒子雲母	No.6	
175	〃	4	甲斐型黒色土器坏	— 4.5 —	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	橙　色	白・赤色粒子	No.4	
175	〃	5	土師器甕A	(28.0) — —	内外面ハケメ	茶褐色	やや粗、白色粒子雲母	No.7	131号住No.8
175	〃	6	土師器甕A?	— (9.0) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	暗褐色	粗、白色粒子、砂粒、雲母	竈内 No.3・8	
176	133号住	1	土師器皿	(13.0) — —	体部手持ヘラ削り	黄褐色	やや粗、白・赤色粒子、雲母		
176	〃	2	〃	(13.0) (4.6) 3.7	体・底部手持ヘラ削り	橙　色	白・赤色粒子		
176	〃	3	〃	(13.2) (4.4) 2.7	〃	暗褐色	〃		
176	〃	4	土師器耳皿	9.5 5.0 —	底部回転糸切	黄褐色	やや粗、白色粒子雲母	No.3	
176	〃	5	甲斐型黒色土器坏	(18.0) (4.8) 5.2	体・底部手持ヘラ削り	黒褐色	白・赤色粒子、雲母	竈内	
176	〃	6	土師器坏A	— 5.0 —	〃	にぶい橙色	白・赤色粒子		底部外面墨書
176	〃	7	土師器甕A	(30.8) — —	内外面ハケメ	茶褐色	やや粗、白色粒子雲母、小礫	No.4・5	
176	〃	8	須恵器凸帯壺	— — —	肩部凸帯上に耳、外面叩き	灰　色	白色粒子、小礫	竈内 No.1	27・31・35・87・104号住、その他
176	135号住	1	土師器坏A?	— (7.0) —	底部回転糸切	褐　色		No.1	137号住

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
176	136号住	1	須恵器坏	(5.8)	底部回転糸切	灰色	やや粗、白色粒子	No.1	
176	137号住	1	土師器坏A	(11.8) (7.0) 4.1	底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色			
176	〃	2	〃	13.6 5.6 5.6	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃		No.3・5	
176	〃	3	土師器皿	(14.8)		淡褐色		No.4	
176	〃	4	須恵器高台坏A	(14.4) (9.2) 6.8	底部回転ヘラ削り、付高台	灰色			
176	〃	5	〃	(8.0)	底部糸切後、回転ヘラ削り、付高台	暗青灰色		No.9	
176	〃	6	須恵器蓋A	(16.6)	外面回転ヘラ削り	暗灰色			
176	〃	7	〃		〃	褐色			
176	〃	8	須恵器長頸壷C		ロクロナデ	暗青灰色	やや粗		壷G類か 110・111号住、A22B29
176	〃	9	須恵器坏			灰色			体部外面墨書
176	〃	10	土師器甕CI	(20.8)	ロクロナデ	淡褐色	粗、小礫 砂粒多量	竈内	
176	〃	11	土師器甕A?	9.0	内外面ハケメ、底部木葉痕	褐色	やや粗、雲母多量	No.7	
177	138号住	1	土師器坏A	(10.5) 6.1 4.8	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面みこみ暗文	橙色	赤色粒子	No.23	
177	〃	2	〃	(11.0) (6.8) 2.9	体・底部手持ヘラ削り、底部ミガキ、ナデ	〃	〃		体部外面から底部にかけて墨書、「印」らしく見えるが不明
177	〃	3	〃	(12.8) 7.5 4.6	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.2	底部内外面、線刻
177	〃	4	〃	12.8 4.7 4.3	体・底部手持ヘラ削り	〃	白・赤色粒子	No.43	灯明具の可能性あり、ほぼ完形
177	〃	5	土師器皿	12.3 4.5 2.4	〃	〃	赤色粒子		ほぼ完形
177	〃	6	甲斐型黒色土器坏	(10.9) 6.5 4.3	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文、黒色	〃	白・赤色粒子	No.25・27	
177	〃	7	土師器坏A			〃			底部外面線刻
177	〃	8	〃			〃			体部外面墨書
177	〃	9	須恵器坏	(11.8) (7.4) 4.3	底部回転糸切	灰色	白色粒子		
177	〃	10	〃	(12.7) (6.0) 3.9	底部手持ヘラ削り	緑灰色	〃	No.15	
177	〃	11	〃	(12.9) 6.9 4.6	底部回転糸切	灰色	〃	No.14	
177	〃	12	〃	(12.8) (7.7) 3.9	〃	暗緑灰色	〃		
177	〃	13	〃	(12.8) (7.3) 4.5	〃	灰白色	〃		
177	〃	14	〃	(13.1) 7.5 4.3	〃	〃	やや粗、やや軟質 白・黒粒子	No.10	ほぼ完形
177	〃	15	須恵器高台坏B	12.1 8.5 4.0	底部回転ヘラ削り、付高台	橙色	白色粒子	No.12	
177	〃	16	須恵器高台坏A	(12.6) 7.1 4.9	底部回転糸切後、回転ヘラ削り、付高台	灰黄色	白・黒色粒子	No.6	
177	〃	17	須恵器蓋A	(13.1)		明赤褐色	白色粒子		
177	〃	18	〃	16.0 — 4.4	外面回転ヘラ削り	灰黄色	白・赤色粒子	No.34	
177	〃	19	須恵器高坏	(20.1)		灰色	白色粒子		
177	〃	20	土師器小型甕C	(14.2) 8.3 (12.0)	底部回転糸切、内外面ロクロナデ	橙色	白・赤色粒子	竈内、No.1・22・31・40	110号住
177	〃	21	土師器小型甕A?	7.5	内外面ハケメ、底部木葉痕	赤褐色	白色粒子、雲母	No.53	
177	〃	22	土師器甕A	(31.4)	内外面ハケメ	〃	〃	竈内、No.48・49・51・52・54・56・58・59	番号21と同一の可能性
177	〃	23	須恵器鉢B	17.5 8.8 11.0	内外面ロクロナデ、底部回転糸切	灰白色	白色粒子	No.20・24・26・28・29・30・46	ほぼ完形
177	〃	24	須恵器甕	(15.5)	外面叩き、底部ナデ	灰褐色	〃	No.11	
177	139号住	1	土師器坏A	(11.0) 4.3 4.1	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	淡橙色		No.15	
177	〃	2	〃	(11.6) (4.0) 4.6	体・底部手持ヘラ削り	褐色		No.18	体部外面墨書「立」
177	〃	3	〃	(11.4) 4.0 4.6	〃	〃		No.7	
177	〃	4	〃	(11.8) 5.0 3.8	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色			
177	〃	5	〃	(11.8) 5.0 4.0	〃	〃			

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
177	139号住	6	土師器坏A	(12.4) 5.4 4.2	体・底部手持ヘラ削り	褐色		竈内	
177	〃	7	〃	— 5.8 —	〃	赤褐色		No.19	底部外面線刻
177	〃	8	土師器高台坏	— (5.8) —	底部削り出し高台、内面暗文	白褐色			体部外面墨書
178	〃	9	土師器皿	(12.8) 4.6 3.0	体・底部回転ヘラ削り	橙色			
178	〃	10	〃	13.0 5.4 2.4	底部糸切後、体・底部回転ヘラ削り	〃	やや粗	竈内 No.12	
178	〃	11	〃	13.0 3.1 2.9	体・底部回転ヘラ削り	〃		No.21	
178	〃	12	〃	13.2 4.1 3.2	体・底部回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	〃		No.4・5	
178	〃	13	黒色土器坏	(12.0) — —	内面黒色	褐色			体部外面墨書
178	〃	14	〃	— 5.0 —	底部回転糸切、内面黒色	白褐色		No.2	
178	〃	15	須恵器壷?	— 8.6 —	付高台	灰色		No.23	
178	〃	16	灰釉陶器長類壷	— — —	外面施釉	灰白色			
178	〃	17	土師器小型甕A	(15.6) — —	外面ハケメ、内面ハケメ後ナデ	暗褐色	雲母	No.9	
178	〃	18	〃	— 9.0 —	内外面ハケメ、底部木葉痕	〃	やや粗 雲母	No.1	
178	〃	19	土師器甕A	(26.4) — —	内外面ハケメ	〃	雲母	竈内	
178	〃	20	〃	(29.0) — —	〃	橙色	〃	No.14	
178	140号住	1	土師器坏A	12.4 3.9 4.4	体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.2	ほぼ完形
178	〃	2	土師器皿	12.1 4.5 2.9	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	〃		完形であるが歪む、口縁部外面にスス付着
178	141号住	1	土師器坏B	(14.0) 7.6 3.3	静止糸切後底～体部手持ヘラ削り、内外面・みこみ部暗文	〃		No.14	灯明具 体部外面焼成後刻書「寺」
178	〃	2	〃	(13.8) 4.6 3.2	〃	〃	赤色粒子		底部外面焼成後刻書「寺」 140号住
178	〃	3	〃	14.6 10.6 3.1	底部手持ヘラ削り、内面・みこみ部暗文	にぶい橙色		No.2	灯明具 みこみ部線刻
178	〃	4	〃	14.9 11.0 3.5	底部手持ヘラ削り、内外面・みこみ部暗文	明赤褐色		No.4	灯明具 底部外面・みこみ部線刻
178	〃	5	〃	(15.0) (10.0) (2.9)	〃	橙色			
178	〃	6	須恵器鉢?	— 9.7 —	底部手持ヘラ削り、みこみ部暗文	〃	白・赤色粒子	No.47	みこみ部線刻
178	〃	7	土師器坏B	— 10.2 —	底部手持ヘラ削り	明赤褐色			底部外面線刻
179	〃	8	土師器甕CⅢ	(20.0) — —	内外面ハケメ	橙色	粗 白色粒子、雲母		
179	〃	9	土師器甕CⅣ	(24.0) — —	〃	にぶい橙色	粗 白色粒子		
179	〃	10	土師器小型甕E	(17.0) — —	〃	橙色	粗 白色粒子、雲母	No.42	
179	〃	11	土師器甕CV	(23.0) — —	外面カキメ	にぶい赤褐色	白・赤色粒子 雲母	No.1	
179	〃	12	土師器小型甕B	— (8.2) —	内面ハケメ	橙色	粗、白色粒子、雲母	竈内 No.31・32	表面風化
179	〃	13	土師器甕B	— (10.0) —	外面ハケメ、ヘラ削り、内面ハケメ	〃	粗 白色粒子	No.7	
179	〃	14	〃	(21.5) — —	内外面ナデ	にぶい橙色	やや粗 白色粒子	竈内 No.5・6・18・19	
179	〃	15	〃	— 12.7 —	内外面・底部ナデ	橙色		No.15・17・40	
179	〃	16	土師器球胴甕A	(33.5) (10.4) —	内外面ハケメ、胴下半ナデ	〃	白・赤色粒子	竈内、No.3・9・39・43・44・45・50	
179	142号住	1	須恵器坏	(11.2) (6.0) 3.6	底部回転糸切	青灰色		No.3	
179	〃	2	〃	— (6.8) —		灰白色	軟質	No.1	底部摩耗
179	〃	3	土師器坏A	— — —					底部外面線刻「井」
179	〃	4	土師器小型甕A	(13.8) (7.4) (11.1)	内面ハケメ	明赤褐色	やや粗	竈	
180	143号住	1	土師器皿	(12.4) (3.8) 2.0	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.5	
180	〃	2	〃	— (5.4) —	底部回転糸切	〃		竈内	
180	〃	3	土師器甕A	— (7.0) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	明赤褐色	やや粗	No.3	外面摩耗
180	〃	4	〃	(28.2) — —	内面ハケメ	〃	やや粗 雲母	No.4	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
180	144号住	1	土師器 坏A	(11.3) 4.1 4.1	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	赤色粒子		体部外面墨書
180	〃	2	〃	11.9 — —	体部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	〃	No.16	
180	〃	3	〃	12.3 4.4 4.9	体部手持ヘラ削り	〃	〃	No.14	体部外面墨書
180	〃	4	土師器 皿	12.3 — —		〃	〃	No.19	〃
180	〃	5	〃	12.8 5.0 2.8	体部回転ヘラ削り、底部回転糸切	〃	白・赤色粒子	No.10	
180	〃	6	黒色土器 坏	(11.7) — —	内面黒色	にぶい黄橙色	白色粒子	No.5	
180	〃	7	〃	11.8 5.0 4.0	底部回転糸切、内面ミガキ後黒色	〃	〃	No.11	
180	〃	8	土師器 甕A	(20.2) — —	内外面ハケメ	橙色	雲母	No.18	
180	〃	9	〃	(24.1) — —	〃	〃	〃	No.21・24	
180	〃	10	土師器 甕C？	(21.9) — —	ロクロナデ	淡黄色	白・黒色粒子	No.19	
180	〃	11	土師器 甕A	— 9.9 —	内外面ハケメ、底部木葉痕	明赤褐色	白色粒子	No.4・6	
180	〃	12	須恵器 甕	— — —	外面叩き	灰色	〃	No.8・9	
180	〃	13	須恵器 凸帯壷	— 13.3 —	外面叩き、凸帯上に耳	褐灰色	〃	No.1	
181	145号住	1	土師器 坏A	(11.9) 4.8 4.2	体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子	No.1	
181	〃	2	土師器 皿	(12.9) (5.2) 3.0	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	赤色粒子	No.3	体部外面墨書
181	〃	3	土師器 甕A	(35.0) — —	内外面ハケメ	にぶい赤褐色	雲母多量		
181	146号住	1	須恵器 坏	11.6 5.8 4.5	底部回転糸切	オリーブ灰色		No.1・2	ほぼ完形 体部外面線刻「大」
181	〃	2	土師器 甕CⅡ	— — —	外面ロクロナデ、かすかな叩き	橙色		No.7	
181	147号住	1	土師器 坏A	(11.2) — —	体部手持ヘラ削り	明赤褐色	赤色粒子	No.16	
181	〃	2	土師器 小型甕A	(14.2) — —	内外面ハケメ	赤褐色	雲母	竈内 No.11	
181	〃	3	土師器 甕A	(32.0) — —	〃	明赤褐色	〃	No.15	
181	〃	4	土師器 鉢AⅠ	— 8.4 —	内外面ハケメ、底部木葉痕	赤褐色	〃	No.1・2・8	
181	148号住	1	土師器 坏A	10.4 5.0 4.0	体部手持ヘラ削り、底部回転糸切後、手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子	No.3	
181	〃	2	〃	(10.9) (5.5) 4.0	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃		No.20	
181	〃	3	土師器 皿？	— (6.2) —	体・底部回転ヘラ削り	明赤褐色		No.12	
181	〃	4	土師器 高台坏	— (8.8) —	体・底部回転ヘラ削り、削り出し高台内面暗文	〃	赤色粒子		
181	〃	5	土師器 皿	13.0 5.3 3.0	体・底部回転ヘラ削り	橙色		No.16	
181	〃	6	土師器 蓋A	(16.0) — 4.2	外面回転ヘラ削り	〃	白色粒子	No.2	
181	〃	7	須恵器 高台坏？	— (9.1) —	底部回転ヘラ削り、付高台	灰色	〃	No.17	
181	〃	8	須恵器 蓋A	(13.9) — —		〃	〃		
181	〃	9	土師器 小型甕A	(13.1) 7.3 9.8	内外面ハケメ、底部木葉痕	赤褐色	雲母	No.4	
181	〃	10	〃	(17.0) — —	内外面ハケメ	にぶい赤褐色	〃	No.25・29	
182	〃	11	土師器 甕A	(26.9) — —	〃	赤褐色	〃		
182	〃	12	〃	(26.8) — —	〃	〃	〃	No.14	
182	149号住	1	土師器 坏A	(11.8) 4.6 4.6	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	赤色粒子	No.9	
182	〃	2	〃	(12.0) (4.6) 4.2	体・底部手持ヘラ削り	にぶい赤褐色	やや粗、赤色粒子		
182	〃	3	〃	(12.2) 4.8 4.5	〃	橙色		No.1	体部外面墨書
182	〃	4	土師器 皿	— 4.6 —	〃	〃		No.6	
182	〃	5	〃	— 5.2 —	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃		No.5	底部外面に線刻
182	〃	6	甲斐型黒色土器 坏	(17.2) — —	体部手持ヘラ削り、内面暗文、黒色	にぶい橙色		竈内 No.4	
182	〃	7	緑釉陶器 耳皿？	— (6.0) —	全面施釉	淡黄～浅黄橙色			151号住

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
182	149号住	8	灰釉陶器 段皿	— (7.0) —	付高台	灰白色			
182	〃	9	土師器 坏?	— — —		明赤褐色			体部外面墨書
182	〃	10	〃	— — —	内面暗文	橙色			〃
182	〃	11	〃	— — —		〃			〃
182	〃	12	土師器 甕A	— (9.0) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	赤褐色	やや粗 白色粒子	No.10	
182	〃	13	〃	(32.0) — —	内外面ハケメ	〃	〃	竈内	
182	150号住	1	須恵器 坏	(12.8) 7.0 3.5	底部回転糸切、周辺回転ヘラ削り	灰色	白色粒子、小礫	No.4・5	
182	〃	2	〃	13.4 7.4 4.1	〃	〃	〃	No.3・5	
182	〃	3	〃	(14.0) (8.0) 4.2	底部手持ヘラ削り?	灰白色	やや軟質 白色粒子	No.1	外面摩滅し技法が不明
182	〃	4	〃	(14.0) 7.0 4.3	底部回転糸切、周辺回転ヘラ削り	〃	〃	No.2	
182	〃	5	土師器 小型甕C	(13.6) — —	ロクロナデ	内-橙色 外-黄褐色	やや粗 白色粒子、小礫	No.7・15	
182	〃	6	土師器 甕A	(22.0) — —	内外面ハケメ	茶褐色	〃	No.19・22・23・ 26	
182	〃	7	土師器 甕CⅠ	(23.0) — —	内外面ロクロナデ	黄橙	やや粗 小礫	No.9・11	
182	〃	8	土師器 甕CⅡ	(22.0) — —	ロクロナデ、外面上半かすかに叩き	黄橙色	やや粗、白・赤色 粒子、小礫多量	No.9・13～15・ 18	
183	〃	9	〃	(23.0) (11.0) (36.0)	底部回転糸切、外面かすかに叩き ロクロナデ	橙色	〃	No.6～10・12・ 14～16	
183	151号住	1	土師器 坏A	12.4 5.0 4.2	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	赤色粒子	No.2	灯明具、ほぼ完形
183	〃	2	土師器 皿	12.4 (6.0) 2.6	体・底部手持ヘラ削り	黄橙色	〃		
183	〃	3	土師器 小型甕B	12.6 7.2 10.2	体・底部ヘラ削り、内面ナデ	明赤褐色	粗、白・赤色粒子	竈内 No.16・30	
183	〃	4	土師器 甕CⅢ	18.0 — —	内外面ナデ	暗褐色	やや粗、軟質 白色粒子		
183	152号住	1	土師器 坏A	(12.0) (5.0) 4.0	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子		
183	〃	2	〃	(15.8) — —	体部手持ヘラ削り	暗赤褐色	白色粒子	No.3	
183	〃	3	〃	— 4.0 —	体・底部手持ヘラ削り	明赤褐色	やや粗 白・赤色粒子	No.1	
183	〃	4	土師器 皿	(10.0) — 2.1	〃	橙色			
183	〃	5	〃	(12.0) — 2.6	〃	〃			
183	〃	6	緑釉陶器 椀	— — —	内外面施釉	灰白色			
183	153号住	1	土師器 坏A	(11.6) 4.0 4.1	体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.6	
183	〃	2	〃	(11.0) (4.0) (4.3)	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子		体部外面墨書「万」
183	〃	3	〃	(11.0) 4.5 4.5	〃	〃		No.27	
183	〃	4	〃	(11.4) (4.0) 3.6	体・底部手持ヘラ削り	明赤褐色	赤色粒子	No.6	
183	〃	5	〃	11.3 4.4 4.3	〃	橙色		No.2	
183	〃	6	〃	(11.6) 3.8 4.1	〃	明黄褐色		No.40・46	
183	〃	7	〃	(12.0) (4.8) 4.1	〃				
183	〃	8	〃	(11.6) 3.8 4.6	〃	橙色	赤色粒子	No.36	
183	〃	9	〃	(12.0) (4.5) 3.8	〃	〃			
183	〃	10	〃	(12.8) (4.8) 3.7	〃	にぶい黄橙色	赤色粒子	No.30	
183	〃	11	〃	(12.2) (4.4) 4.5	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	明赤褐色		No.41	
183	〃	12	〃	(12.0) (4.2) 4.7	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子		
184	〃	13	〃	(13.1) (4.4) 5.1	〃	〃	〃		
184	〃	14	〃	(14.0) (4.1) 4.6	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	にぶい黄橙色		No.10・38	
184	〃	15	〃	(17.0) (4.6) 5.2	〃	にぶい褐色			
184	〃	16	〃	— (7.0) —	体・底部回転ヘラ削り、内面暗文、 みこみ部十字状暗文	明黄褐色		No.5	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
184	153号住	17	土師器 皿	(11.9) 5.2 3.2	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色			
184	〃	18	〃	(12.2) 4.0 2.3	体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.17	
184	〃	19	〃	(12.4) (5.2) 2.6	〃	〃		No.4	
184	〃	20	〃	(12.6) 3.8 2.2	〃	〃		No.28	底部外面墨書風墨痕
184	〃	21	〃	(12.7) (4.4) 2.2	体・底部回転ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.34	
184	〃	22	〃	(13.2) (4.8) 2.2	〃	〃	〃	No.24	体部外面線刻
184	〃	23	〃	— — —	体・底部手持ヘラ削り				〃
184	〃	24	黒色土器 坏	(12.0) (4.6) 4.0	底部回転糸切、内面黒色	明黄褐色			
184	〃	25	甲斐型黒色土器 坏	(15.0) (4.8) 5.3	体・底部手持ヘラ削り、内面ミガキ黒色	内-灰色 外-にぶい黄橙色		No.11	
184	〃	26	〃	(5.0) — —	〃	橙色			体部外面墨書
184	〃	27	黒色土器 高台皿	— (6.0) —	付高台、内面黒色	浅黄色		No.48	
184	〃	28	黒色土器 椀	— 坏(8.0) —	〃	浅黄橙色		No.1	
184	〃	29	須恵器 長頸壷A	(17.0) (8.3) (8.4)		灰白色		No.14	
184	〃	30	灰釉陶器 椀	(17.0) (8.3) (8.4)	付高台、内面～口縁部外面施釉			No.9	
184	〃	31	〃	(18.4) 8.0 5.6	付高台、内面施釉	内-オリーブ灰色 外-灰白色		No.32	底部外面ヘラ書
184	〃	32	灰釉陶器 長頸壷	— — —	外面施釉	内-灰色 外-オリーブ灰色		No.12・13	
184	〃	33	土師器 小型甕C	(9.4) (4.8) (8.5)	体・底部手持ヘラ削り	内-橙色 外-黄橙色			
184	〃	34	土師器 坏A	— — —	体部手持ヘラ削り				体部外面墨書
184	〃	35	〃	— — —	〃				〃
184	〃	36	土師器 甕A	(31.6) — —	内外面ハケメ	赤褐色		No.21・22	
184	154号住	1	土師器 皿	13.6 4.8 2.3	体・底部手持ヘラ削り	褐色		No.3	
184	〃	2	土師器 甕A	(29.3) — —	内外面ハケメ	暗赤褐色	雲母		
185	155号住	1	土師器 坏A	11.6 4.4 4.6	底部回転ヘラ削り後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	やや粗 赤色粒子	竈内	体部外面墨書
185	〃	2	〃	(14.0) — 4.5	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	にぶい褐色	やや粗 白・赤色粒子	竈内	
185	〃	3	〃	15.0 (7.0) 6.0	体・底部回転ヘラ削り、内面放射状＋ラセン状暗文	明赤褐色	やや粗 赤色粒子	No.20	内面摩滅
185	〃	4	〃	— (6.6) —	底部静止糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃			底部外面墨書
185	〃	5	〃	— 5.0 —	底部静止糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面みこみ部暗文	〃		No.4	
185	〃	6	〃	— 5.0 —	底部静止糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	やや粗 白・赤色粒子	No.1	
185	〃	7	土師器 皿	13.0 5.0 2.8	体・底部回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	にぶい橙色	やや粗 白・赤色粒子	No.21	体部外面墨書「千」
185	〃	8	〃	13.4 5.2 2.9	〃	橙色	やや粗 赤色粒子	No.2	
185	〃	9	〃	14.0 — (2.3)		〃	やや粗	No.25	底部外面墨書
185	〃	10	黒色土器 坏	11.8 5.2 4.4	底部回転糸切、内面ミガキ後黒色	にぶい黄橙色	やや粗 赤色粒子	竈内 No.5・14	
185	〃	11	黒色土器 鉢	(26.0) — —	内面ミガキ後、黒色	〃	粗、軟質 赤色粒子	竈内	片口部欠損
185	〃	12	土師器 甕A	(29.0) — —	内外面ハケメ	にぶい赤褐色	粗、白色粒子、雲母	No.1・8・9・24	
185	〃	13	〃	(27.0) (9.4) —	〃	〃	〃	竈内 No.12・17	
185	157号住	1	土師器 坏D	10.2 7.4 2.8	底部静止糸切	橙色		No.1	灯明具
185	〃	2	土師器 坏B	(14.6) 6.8 4.8	底部ナデ	〃		No.3・7	
185	〃	3	須恵器 坏	(12.8) (7.0) 4.2	底部回転糸切	黄灰色		竈内	
185	〃	4	〃	8.6 — —	体・底部手持ヘラ削り	赤黒色		No.6	151号住
185	〃	5	須恵器 蓋A	14.2 — 2.6	外面回転ヘラ削り	灰色		No.10	完形、転用硯
185	〃	6	須恵器 壷?	— 6.8 —	体・底部回転ヘラ削り	〃		No.2・5	151号住

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
185	157号住	7	土師器鉢B	16.0 8.4 9.0	底部ナデ、体部手持ヘラ削り、内面暗文	黄橙色	やや軟質		
185	〃	8	土師器甕C？	— 10.0 —	ロクロナデ、底部回転糸切	赤褐色	粗	No.12	表面剥離
185	〃	9	土師器甕A	(20.6) — —	内外面ハケメ	白褐色		No.9	
186	158号住	1	土師器坏A	(11.7) (4.0) 3.5	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子		
186	〃	2	〃	(12.7) (6.0) —	〃	にぶい赤褐色	〃		
186	〃	3	甲斐型黒色土器坏	— (6.0) —	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	赤色粒子		底部外面墨書
186	〃	4	須恵器高台坏A？	— 7.6 —	底部回転糸切後、回転ヘラ削り付高台	灰色	白色粒子	No.1	
186	〃	5	土師器坏？	— — —		橙色			底部外面焼成後線刻
186	〃	6	〃	— — —		〃			体部外面墨書
186	159号住	1	土師器坏A	(11.6) (7.0) 3.8	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面みこみ部暗文	〃	白・赤色粒子 雲母		
186	〃	2	〃	(11.0) 6.2 4.5	〃	明赤褐色	白、赤色粒子	No.2	
186	〃	3	〃	(11.2) (6.0) 4.8	体・底部手持ヘラ削り、内面みこみ部暗文	茶褐色	白色粒子、雲母		
186	〃	4	須恵器坏	(12.0) 6.0 4.1	底部回転糸切、周縁部回転ヘラ削り	青灰色	白色粒子	No.6	
186	〃	5	須恵器高台坏A	— 7.5 —	底部回転糸切後、回転ヘラ削り付高台	浅黄色～灰黄色	小礫	No.29	底部外面ヘラ書
186	〃	6	須恵器蓋A	(15.6) — 3.3	外面回転ヘラ削り	青灰色	白色粒子	No.3	
186	〃	7	土師器鉢B	(17.0) — —	体部下半ヘラ削り、口縁部横ミガキ、内面暗文	橙色	〃	No.13・22	
186	〃	8	土師器甕C I	(22.0) — —	ロクロナデ	内面-黄褐色 外面-黒褐色	粗、小礫多量	竈内、No.11・23・24・26	
186	〃	9	〃	(23.0) — —	ロクロナデ	橙色	やや粗 白・赤色粒子	竈内 No.17・30・32	
186	〃	10	土師器小型甕B	(13.6) 7.4 12.0	体部ヘラ削り、底部木葉痕	内面-黄橙色 外面-にぶい橙色	粗 白色粒子、雲母	竈内 No.31	口縁部注口状を呈す
186	〃	11	土師器甕A	(22.0) — —	内外面ハケメ	茶褐色	やや粗、白色粒子 雲母多量	竈内No.34・35・36・37・No.4・14・15	
187	〃	12	〃	(24.0) — —	〃	〃	やや粗、白色粒子 雲母、小礫	竈内、No.9・29・33	
187	〃	13	須恵器鉢A	(34.0) — —	ロクロナデ、体部下半一部ヘラ削り	内面-明赤褐色 外面-褐灰色	小礫	No.25・27	
187	160号住	1	土師器坏A	(12.4) (4.4) 4.1	体・底部手持ヘラ削り	明赤褐色	赤色粒子	No.28	灯明具
187	〃	2	〃	(13.0) (4.0) 2.9	〃	にぶい橙色	〃	No.18	
187	〃	3	〃	(13.2) (4.5) 4.9	〃	橙色	〃	No.16・19	体部外面墨書「民」
187	〃	4	〃	(13.8) 4.4 4.3	〃	にぶい橙色	赤色粒子、小礫	No.17	
187	〃	5	〃	(15.3) (6.0) (4.8)	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	〃		内面剥離
187	〃	6	〃	15.3 5.2 4.9	体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.9・25	
187	〃	7	〃	(17.0) (6.2) (6.0)	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子、軟質	No.12	
187	〃	8	土師器皿	(14.8) 7.0 2.3	体・底部回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	にぶい褐色	赤色粒子		
187	〃	9	甲斐型黒色土器坏	(14.0) (5.0) (4.1)	内面黒色	〃	〃	No.5・33	外面剥離
187	〃	10	須恵器蓋A	— — —	外面回転ヘラ削り	暗灰色	白色粒子	No.38	
187	〃	11	灰釉陶器壷？	— (11.0) —	付高台、外面施釉	灰色		No.27	
187	〃	12	土師器甕A	(31.0) — —	内外面ハケメ	赤褐色	粗 白色粒子、雲母	No.32・33・35	
187	〃	13	〃	(32.0) — —	〃	〃	〃	No.26・37・42・44	
187	〃	14	〃	(36.0) — —	〃	褐色	〃	No.47	
188	〃	15	土師器羽釜A	(21.0) — —	〃	赤褐色	粗 白色粒子、小礫	No.31・33	
188	〃	16	〃	(24.0) — —	内面ナデ	暗褐色	粗、白色粒子 雲母多量	No.22	
188	161号住	1	土師器坏A	(14.4) 5.0 4.6	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	竈内 No.22	体部外面墨書
188	〃	2	土師器皿	13.0 4.0 2.7	〃	〃	白・赤色粒子	No.22	
188	〃	3	緑釉陶器椀	(17.0) — —	内面陰刻花文、内外面施釉	緑色		No.10・11・12・13・15	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
188	161号住	4	土師器 小型甕A	(16.4) — —	外面ハケメ、内面ナデ	にぶい橙色	やや粗、白色粒子 雲母	竈、No.1・4・8・ 20・23	
188	〃	5	土師器 羽釜A	(19.0) — —	〃	〃	やや粗、白色粒子 小礫		
188	162号住	1	土師器 坏A	(11.0) (6.0) 3.8	体・底部回転ヘラ削り、内面かすかな暗文	明橙色	赤色粒子 小礫少量		
188	〃	2	〃	11.5 4.6 4.2	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色		No.7・19・22	
188	〃	3	〃	(12.0) (4.1) 3.7	〃	橙　色	赤色粒子	No.18	
188	〃	4	〃	(12.0) (5.0) 3.8	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	〃	No.5	
188	〃	5	〃	12.0 4.6 4.2	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	明黄褐色		No.11・17・19・ 20	
188	〃	6	〃	(13.0) (3.4) 3.8	体・底部手持ヘラ削り	橙　色	白・赤色粒子	No.26	
188	〃	7	土師器 皿	12.4 4.9 2.8	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	赤色粒子	No.8	完形
188	〃	8	灰釉陶器 長頸壺	— — —	ロクロナデ	灰　色		No.9	
188	〃	9	土師器 甕A	— 9.6 —	内外面ハケメ、底部木葉痕	赤褐色	白・赤色粒子雲母	No.1・16	
188	〃	10	〃	— 9.0 —	〃	暗赤褐色	粗 白色粒子、雲母	竈内 No.1・2・15.23	
189	163号住	1	土師器 坏A	(12・0) — —	体部手持ヘラ削り	橙　色	赤色粒子		
189	〃	2	〃	(11.8) (3.8) 4.3	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色		No.5・10	灯明具
189	〃	3	〃	(14.0) 5.8 5.4	〃	〃	白色粒子	No.8	内外面の荒れ著しい
189	〃	4	甲斐型黒色土器 坏	(15.0) (5.3) 4.6	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	〃		No.12	
189	〃	5	〃	(15.6) (6.0) 5.3	〃	〃		No.16	
189	〃	6	〃	(17.0) 6.0 6.8	〃	〃		No.14	
189	〃	7	土師器 皿	(12.0) —	体部手持ヘラ削り	〃			
189	〃	8	〃	(13.0) — 3.2	体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.9	
189	〃	9	土師器 小型甕A	(15.2) — —	外面ハケメ、内面ナデ	にぶい褐色	やや粗 白色粒子、雲母	No.9	
189	164号住	1	土師器 坏A	(10.0) — —	体部手持ヘラ削り	橙　色		No.8	
189	〃	2	〃	10.8 5.0 4.4	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	白褐色		No.4	
189	〃	3	〃	11.0 5.2 4.1	体・底部手持ヘラ削り、体部暗文	褐　色		No.13	
189	〃	4	〃	(11.2) 5.0 4.4	〃	橙　色			
189	〃	5	〃	11.2 5.0 4.2	体・底部手持ヘラ削り	黄褐色		No.1	
189	〃	6	土師器 高台坏	(15.8) (8.0) 6.6	底部付高台、回転ヘラ削り、体部横ミガキ、内面暗文	赤褐色		No.16・25・26	
189	〃	7	土師器 坏A?	— (6.0) —	底部手持ヘラ削り	橙　色			底部外面焼成後線刻
189	〃	8	須恵器 坏	— 6.8 —	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	灰　色		No.14・17	
189	〃	9	須恵器 高台坏?	— 7.2 —	底部糸切後、付高台	〃		No.10	
189	〃	10	須恵器 蓋A	(17.0) — —	外面回転ヘラ削り	〃		No.3	
189	〃	11	須恵器 横瓶	(11.2) — —	外面叩き	〃	やや粗	No.7	
189	〃	12	土師器 甕A	(24.0) — —	内外面ハケメ	赤褐色	やや粗、雲母	竈内 No.24	
189	〃	13	〃	— 8.6 —	内外面ハケメ、底部木葉痕	暗褐色	やや粗 白色粒子、雲母	No.11	
189	165号住	1	土師器 坏A	— 6.0 —	体・底部手持ヘラ削り、体部ミガキ、内面みこみ部暗文	橙　色		No.7	
189	〃	2	〃	— (9.0) —	〃			No.10	みこみ部にも暗文あり
189	〃	3	須恵器 坏	(12.0) (5.4) (4.5)	底部回転糸切	緑灰色		No.6	
189	〃	4	〃	(13.0) (7.0) 4.0	〃	暗青灰色		No.2	
189	〃	5	須恵器 高台坏A?	(17.2) — —		〃		No.3	
189	〃	6	土師器 甕C?	— — —	ロクロナデ		やや粗	No.9	
190	166号住	1	土師器 坏A	— 4.6 —	体・底部手持ヘラ削り	橙　色	赤色粒子	No.2	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
190	166号住	2	甲斐型黒色土器 坏	(17.2) (6.0) 6.2	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	にぶい橙色	赤色粒子	No.6	
190	〃	3	土師器 小型甕C	(14.0) — —	内外面ナデ	〃	やや粗、赤色粒子	No.4	
190	〃	4	土師器 小型甕A	(17.2) — —	外面ハケメ、内面ハケメ後、ナデ	赤褐色	粗、白・黒色粒子 雲母	No.8	
190	〃	5	土師器 甕A	(27.0) — —	内外面ハケメ	暗褐色	粗 白色粒子、雲母	竈内 No.7	
190	〃	6	〃	(35.0) (9.0) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	暗赤褐色	白色粒子、雲母	竈内 No.10・11	
190	167号住	1	土師器 坏A	11.0 (6.0) 4.4	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	赤褐色		No.4	
190	〃	2	〃	(12.0) 6.1 4.2	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙　色		No.16	体部外面墨書
190	〃	3	〃	12.5 5.5 4.2	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	赤色粒子	竈内 No.31	
190	〃	4	須恵器 坏	11.5 5.5 4.0	底部回転糸切	灰　色	白色粒子	No.2	底部外面に線刻
190	〃	5	〃	(12.0) 6.0 4.1	〃	灰黄色	軟質 白色粒子	No.17	体部外面墨書
190	〃	6	〃	(12.2) 7.0 4.5	〃	灰　色	白色粒子	No.34	底部外面線刻
190	〃	7	須恵器 高台坏A	14.8 7.5 6.2	底部回転ヘラ削り、付高台	〃	白色粒子、小礫	No.1	
190	〃	8	土師器 小型甕C	(12.8) — —	ロクロナデ	にぶい橙色		竈内 No.26	
190	〃	9	土師器 甕A	(24.2) — —	内外面ハケメ	赤褐色	白色粒子 雲母多量	竈内 No.14・30	
190	〃	10	〃	— (9.0) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	暗赤褐色	やや粗、黒色粒子、 白色粒子多量、雲母	No.9・10・32・ 33	
191	169号住	1	土師器 坏A	11.6 4.5 4.0	体・底部手持ヘラ削り	橙　色		No.25	完形 体部外面墨書
191	〃	2	〃	(12.0) (4.3) 4.1	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	赤色粒子		
191	〃	3	〃	(12.6) 4.2 4.1	体・底部手持ヘラ削り	橙　色	白色粒子	No.7	
191	〃	4	〃	12.6 4.4 4.7	〃	にぶい橙色	〃	No.28	
191	〃	5	〃	(12.8) (4.0) 3.9	〃	〃		竈内 No.36	
191	〃	6	土師器 皿	(12.8) (9.0) 2.7	〃	〃	赤色粒子	竈	
191	〃	7	〃	(13.2) (4.8) 2.8	〃	〃	白色粒子	No.21	
191	〃	8	甲斐型黒色土器 坏	(15.2) — —	体部手持ヘラ削り、内面黒色	にぶい黄橙色	赤色粒子	No.27	体部外面墨書
191	〃	9	土師器 甕A	(27.2) — —	内外面ハケメ		やや粗、雲母 白色粒子、小礫	No.41	
191	〃	10	〃	(32.0) — —	〃	暗赤褐色	粗 白色粒子、雲母	No.5・10・11	
191	〃	11	〃	(34.0) — —	〃	〃	〃	No.6	
191	〃	12	須恵器 甕	— 21.0 —	外面叩き、内面ナデ	褐灰色	白色粒子	No.19	
191	170号住	1	土師器 坏B	11.0 6.9 3.5	体・底部ナデ	橙　色	赤色粒子	No.1	
191	〃	2	〃	(13.0) (9.4) 2.7	底部回転ヘラ削り	明赤褐色		No.2	
191	〃	3	〃	(19.8) (8.0) 3.5	〃	橙　色			底部外面線刻
191	〃	4	〃	(19.0) (10.9) 4.8	底部周辺手持ヘラ削り、体部横ミガキ	にぶい橙色	粒子細かい	No.11	
191	〃	5	〃	— 9.0 —	底部ヘラ削り後、体・底部ナデ	橙　色			
191	〃	6	土師器 坏A？	— (6.0) —	体底部ナデ	〃	赤色粒子		底部外面墨書「宅」、線刻
191	〃	7	土師器 坏B	— (9.6) —	底部回転ヘラ削り後、ナデ	〃		No.12	底部外面線刻
191	〃	8	土師器 小型壷A	(8.0) — —		〃	白色粒子		表面剥離
191	〃	9	須恵器 坏	(14.0) (6.4) 4.6	底部ナデ	にぶい橙色	白・赤色粒子		206号住
191	〃	10	土師器 小型甕D	— (6.0) —	外面カキメ、底部木葉痕	〃	赤色粒子	No.10	
191	〃	11	土師器 甕CV	(19.6) — —	外面カキメ	橙　色			205号住
191	〃	12	土師器 甕A	(22.4) — —	内外面ハケメ	〃	白色粒子、雲母	No.4	
191	〃	13	土師器 球胴甕A	(15.8) — —	〃	にぶい褐色	やや粗 赤色粒子	No.3・7	
192	〃	14	土師器 甕B	(22.6) — —	外面ナデ、内面ナデ	にぶい橙色	白色粒子、雲母	竈内 No.21・22	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
192	170号住	15	土師器小型甕C?	— (7.2) —		にぶい橙色	白・赤色粒子	No.17	
192	〃	16	土師器甕A	— (10.0) —	外面ハケメ、底部木葉痕	橙色	〃	No.9	
192	171号住	1	土師器坏A	(12.4) (3.4) 4.4	体・底部手持ヘラ削り	〃		No.21	
192	〃	2	〃	(6.0) — —	体部手持ヘラ削り	にぶい橙色		竈内	
192	〃	3	〃	(13.8) (5.0) 5.2	体・底部手持ヘラ削り	〃		No.2.3	
192	〃	4	土師器皿	(11.2) (6.6) 2.8	底部手持ヘラ削り	橙色		No.23	内面漆付着
192	〃	5	〃	(13.0) (6.0) 3.2	底部回転糸切後、体・底部回転ヘラ削り	〃			
192	〃	6	土師器甕A	(28.0) — —	内外面ハケメ	にぶい橙色	やや粗 白色粒子	No.28	
192	〃	7	〃	(32.0) — —	内外面かすかなハケメ	〃	〃	No.24	
192	〃	8	〃	(31.0) — —	内外面ハケメ	灰褐～黒褐色	〃	No.15	176号住No.10・11・12
192	172号住	1	土師器坏A	(13.2) 8.2 5.6	底部糸切後、体・外面ミガキ、内面みこみ部暗文	橙色		No.2	底部外面線刻
192	〃	2	須恵器坏	(13.6) 6.6 4.7	底部回転糸切	灰白色		竈 No.33	
192	〃	3	〃	(14.0) (10.0) 3.4	底部手持ヘラ削り	灰色	やや粗 小礫	No.41	
192	〃	4	須恵器高台坏B	(13.0) (9.0) 4.4	付高台	灰黄色	白色粒子	No.18	
192	〃	5	須恵器高台坏	— (9.0) —	回転ヘラ削り、付高台	暗灰色	〃	No.1	
192	〃	6	須恵器高坏	— — —	体部回転ヘラ削り	灰白色	小礫	No.23	
192	〃	7	〃	— — —		青灰色		No.21	脚部片
192	〃	8	土師器小型甕C	(18.0) — —	ロクロナデ、体部ヘラ削り	褐色		No.7・28・29・44～50	
192	〃	9	土師器甕C?	(20.0) — —	ロクロナデ	黄褐色		No.20	
193	〃	10	土師器甕CⅡ	(25.0) — 9.2	ロクロナデ、胴部中叩き、底部ヘラナデ	白褐色	雲母	No.9・25～27・30・31・57・60	
193	〃	11	須恵器甕	22.4 — —	外面叩き	にぶい赤褐色		No.5・15・24	170号住、203号住、206号住
193	〃	12	須恵器鉢A	(35.0) — —	〃	灰黄色	白色粒子	No.17・19・35・37・39・42・43・51・52・54・55竈内	体部内面線刻 177号住、209号住竈
193	175号住	1	土師器甕C?	— (9.0) —	底部回転糸切、ロクロナデ	内-にぶい黄橙色 外-褐灰色	粗 白色粒子		
193	〃	2	須恵器甕	(28.0) — —		黄灰色		No.6	
193	〃	3	〃	— — —	外面叩き	灰色		No.9	
193	176号住	1	土師器坏A	(12.5) (4.6) 4.3	体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.6	
193	〃	2	〃	(11.6) — —	体部回転ヘラ削り	にぶい赤褐色			体部外面墨書
193	〃	3	〃	— (4.4) —	底部回転ヘラ削り後、体・底部手持ヘラ削り	内-灰褐色 外—にぶい赤褐色	やや粗 赤色粒子	No.5	
193	〃	4	〃	— (4.0) —	体・底部手持ヘラ削り	にぶい赤褐色		No.14	
193	〃	5	〃	— (6.0) —		内-浅黄橙色 外-橙色		No.3	摩耗のため技法不明、鉢の可能性高い
193	〃	6	甲斐型黒色土器坏	(17.0) — —	体部手持ヘラ削り、内面黒色	にぶい褐色		No.9	
193	〃	7	黒色土器高脚高台坏	— (11.0) —	高台付坏、内面黒色	灰黄褐			171号住
193	〃	8	青磁椀	(19.0) — —	内面陰刻、内外面施釉			No.2	
193	〃	9	土師器小型甕A	(12.0) — —	内外面ハケメ	内-暗赤色 外-明赤弱色	やや粗	No.4	
193	〃	10	〃	(17.0) — —	〃	暗赤褐色	〃	No.15	
194	177号住	1	土師器坏A	(6.0) 5.0 4.1	体・底部手持ヘラ削り	橙色	やや粗、白色粒子	No.30	
194	〃	2	〃	(12.6) 5.0 3.8	〃	〃	やや粗 赤色粒子	No.4	
194	〃	3	〃	(6.5) — —	体部手持ヘラ削り	赤色	赤色粒子		
194	〃	4	〃	(13.0) (5.0) 4.5	体・底部手持ヘラ削り	橙色	〃	No.9	
194	〃	5	〃	(13.2) (4.4) 3.8	〃	明赤褐色	白・赤色粒子	No.30	
194	〃	6	〃	(14.0) — —	体部手持ヘラ削り	赤褐色	赤色粒子	No.1	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
194	177号住	7	土師器坏A	— (4.8) —	底部静止糸切後、体・底部手持ヘラ削り	暗赤褐色		No.31	
194	〃	8	土師器皿	(6.0) 5.0 2.5	底部回転糸切後、体部手持ヘラ削り	橙色	やや粗、赤色粒子	No.2	
194	〃	9	〃	13.0 3.4 2.8	体・底部手持ヘラ削り	〃		No.3	
194	〃	10	〃	(13.4) (4.4) 3.3	〃	〃	赤色粒子	No.22	
194	〃	11	〃	(13.0) (4.4) 2.7	〃	〃	〃	No.23	体部外面墨書
194	〃	12	〃	— (9.0) —	底部回転ヘラ削り	にぶい橙色			底部外面線刻
194	〃	13	土師器？	— — —		〃			底部外面墨書
194	〃	14	甲斐型黒色土器坏	(14.0) (5.0) 5.0	内面暗文、黒色	明黄褐色	粗、白色粒子		表面剥離し技法不明
194	〃	15	黒色土器椀	(12.4) (6.0) 3.3	底部回転糸切後、付高台、内面ミガキ、黒色	灰白色	粗	No.5	
194	〃	16	土師器小型甕C	(13.0) — —	ロクロナデ	明赤褐色	やや粗	No.33	
194	〃	17	土師器小型甕A	16.0 — —	内外面ハケメ	赤褐色	粗 白色粒子、雲母	No.7	
194	〃	18	土師器甕A	(30.6) — —	〃	明赤褐色	〃	No.24・28・34	
194	〃	19	土師器鉢AI？	— (8.0) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	にぶい赤褐色	〃	No.12・13	
194	178号住	1	土師器坏A	(14.5) (5.3) 4.6	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色		No.1	
194	〃	2	土師器皿	(13.0) (8.0) 2.3		橙色			
194	〃	3	土師器甕A	(27.9) — —	外面ヘラナデ、内面ハケメ	〃	雲母		
194	179号住	1	土師器坏B	— (6.6) —	底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	白色粒子	No.20	
194	〃	2	〃	— (11.0) —	体・底部ナデ	〃		No.5	
194	〃	3	須恵器坏	— (8.0) —	体・底部回転ヘラ削り	浅黄橙色	赤色粒子	No.7	
194	〃	4	須恵器蓋A	— (15.8) —		黄灰色	白色粒子	No.3	
194	〃	5	土師器甕CII	23.8 8.9 33.1	ロクロナデ、かすかに叩き、底部回転糸切	にぶい橙色	粗、白色粒子多量	竈内、No.6・8・10・11・12・13・14・15・16・17・18	
195	180号住	1	土師器坏A	(12.0) (5.8) 4.3	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	白・赤色粒子		
195	〃	2	土師器高台坏	(10.4) 5.2 4.5	体・底部回転ヘラ削り、体部ナデ 内面暗文、削り出し高台	〃	〃	No.1	
195	〃	3	土師器小型甕A	(13.0) — —	外面縦横のハケメ、内面ハケメ、指頭圧痕	黄褐色	やや粗 白・赤色粒子	No.9	混入か？
195	〃	4	土師器甕A	— (8.0) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	茶褐色	やや粗、白色粒子 雲母、小礫	竈内、No.2・3・7・8・11・12・16	
195	181号住	1	土師器坏A	(11.9) (4.8) 4.1	体・底部手持ヘラ削り	白褐色			
195	〃	2	土師器皿	(11.8) (4.0) 3.0	〃	橙色			
195	〃	3	〃	(12.4) 4.4 3.5	〃	褐色		竈内	
195	〃	4	〃	(12.6) (5.0) (2.9)	〃	明褐色		No.6	体部外面墨書「子」
195	〃	5	土師器坏A	— 4.6 —	〃	白褐色		No.1	
195	〃	6	土師器皿	— (6.0) —	〃	橙色			底部外面墨書「子」
195	〃	7	〃	11.8 3.2 3.0	〃	〃		No.3	完形、体部外面墨書
195	〃	8	〃	12.4 5.0 2.4	〃	黄褐色		No.4	完形
195	〃	9	〃	12.8 5.0 2.3	体・底部回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	橙色	赤色粒子		
195	〃	10	甲斐型黒色土器坏	(13.4) 5.4 5.2	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	黄褐色		竈内 No.2	
195	〃	11	土師器甕A	(28.4) (10.0) (34.0)	内面ハケメ後ナデ、外面ヘラナデ 底部木葉痕	〃	雲母	竈内、No.5、No.7・8・12・15・16・23	
195	〃	12	土師器小型甕A？	— 7.4 —	外面ヘラ削り、内面ナデ	〃		No.13・14・21	
196	182号住	1	土師器坏B	(14.0) (7.6) 3.1	体・底部回転ヘラ削り	黄橙色	白・赤色粒子		
196	〃	2	〃	(16.0) (10.0) 2.8	底部静止糸切後、回転ヘラ削り	〃	〃	No.1	底部外面線刻
196	〃	3	土師器小型甕B	— 6.5 —	内外面ナデ	黄褐色	粗、白色粒子 雲母、小礫	No.2	
196	〃	4	土師器甕B	— (10.0) —	外面ナデ、内面ハケメ、ナデ、底部木葉痕	にぶい黄褐色	やや粗、白・赤色粒子、雲母	No.4・6	底部にモミ痕？

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
196	183号住	1	土師器 坏	(15.2) (4.8) 3.9	体・底部手持ヘラ削り	にぶい褐色	白・赤色粒子		
196	〃	2	須恵器 蓋A	(14.0) — 2.8	外面回転ヘラ削り	灰色	白色粒子	No.1	
196	184号住	1	土師器 甕B	— (10.0) —	内外面ハケメ、ナデ	にぶい橙色	粗、白・赤色粒子 雲母	No.5	
196	185号住	1	土師器 皿	(13.4) 4.4 2.8	体・底部回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	橙色	やや粗、赤色粒子		
196	〃	2	土師器 皿?	— (5.0) —	底部静止糸切	〃		No.11	底部外面みこみ部に線刻
196	〃	3	黒色土器 坏	11.2 5.0 4.4	底部回転糸切後、ヘラ削り、内面ミガキ、黒色			竈内	
196	〃	4	〃	11.4 5.4 5.1	底部回転糸切、内面ミガキ、黒色	灰白色		No.5	
196	〃	5	〃	11.6 6.0 4.6	〃	〃		竈内	
196	〃	6	〃	12.8 5.4 4.7	底部回転糸切、内面花弁状ミガキ黒色	〃		No.4	
196	〃	7	黒色土器 高台皿	— (5.6) —	底部付高台、内面黒色	にぶい橙色	やや粗、白・赤色粒子	No.1	底部外面墨書「秋」
196	〃	8	灰釉陶器 椀	(15.4) (7.0) 4.0	付高台、内面施釉	灰白色		No.3	
196	〃	9	土師器 坏A	— — —		橙色			体部外面墨書
196	〃	10	土師器 甕B?	— 8.6 —	外面ハケメ、底部木葉痕	橙色	軟質 やや粗	No.9	
196	〃	11	土師器 甕A	30.4 — —	内外面ハケメ	明赤褐色	粗、白色粒子	No.10	
196	〃	12	〃	29.8 — —	〃	にぶい赤褐色	粗、白色粒子、雲母	竈内 No.2・3	
197	186号住	1	土師器 坏A	(11.8) (4.8) 4.7	体・底部手持ヘラ削り	橙色	やや粗、赤色粒子 小礫多量	No.2	
197	〃	2	〃	(12.6) 4.0 4.0	〃	にぶい褐色	白・赤色粒子	竈内 No.14・18	
197	〃	3	〃	(16.0) (6.0) 5.6	〃	橙色	やや粗、白・赤色粒子、小礫	No.5	
197	〃	4	土師器 坏B	(14.0) (11.0) —	底部手持ヘラ削り	〃	白・赤色粒子、雲母		
197	〃	5	甲斐型黒色土器 坏	— (6.0) —	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	白・赤色粒子		
197	〃	6	須恵器 坏	(14.0) (7.2) 4.3	底部回転糸切	灰色	白色粒子、小礫	No.9	
197	〃	7	土師器 小型甕A	(22.0) — —	内外面ハケメ	黒褐色	やや粗、白・赤色粒子、雲母、小礫	竈内 No.10	
197	〃	8	土師器 甕A	(31.0) — —	〃	茶褐色～黒褐色	やや粗、白色粒子 雲母、小礫	No.11	
197	〃	9	〃	— (10.0) —	〃	茶褐色	〃	竈内、No.7・12・13・15・16・17	
197	〃	10	土師器 小型甕A	— (8.6) —	体・底部ハケメ、底部木葉痕	〃	粗、白色粒子 雲母、小礫	No.18	
197	〃	11	須恵器 甕	— — —	外面叩き	灰色	白色粒子	No.8	転用硯
197	187号住	1	土師器 坏A	— 5.6 —	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色		No.1	
197	〃	2	土師器 皿	— (14.2) (6.0) 2.2	体・底部回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	〃			
197	〃	3	青磁 椀	— — —		淡緑色			混入品か
197	〃	4	土師器 甕A	(25.6) — —	内外面ハケメ	茶褐色		竈内	
197	188号住	1	甲斐型黒色土器 坏	(15.0) (5.0) 5.5	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	褐色		竈内 No.2	
197	〃	2	土師器 坏?	— — —		橙色			体部外面墨書
197	〃	3	土師器 甕A	(27.0) — —	内外面ハケメ	茶褐色	雲母	竈内、 No.3・4・6・7・8	
197	〃	4	土師器 鉢AI?	(35.6) — —	〃	白褐色	〃	No.13	
198	189号住	1	土師器 坏A	(11.4) (4.0) 4.0	体・底部手持ヘラ削り	褐色			
198	〃	2	〃	(14.7) 5.0 5.5	〃	淡橙色			
198	〃	3	〃	— 4.0 —	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	褐色			
198	〃	4	土師器 皿	— 4.6 —		〃			体部外面墨書
198	〃	5	黒色土器 坏	12.4 5.4 4.5	底部周辺手持ヘラ削り、内面放射状ミガキ、黒色	〃	白、赤色粒子	No.2	体部スス付着
198	〃	6	〃	(14.4) (6.6) 5.2	底部回転糸切、内面黒色	〃		竈内	
198	〃	7	〃	(14.6) (7.0) 5.4	底部回転糸切、内面ミガキ、黒色	〃		竈内	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
198	189号住	8	甲斐型黒色土器坏	(16.8) (7.0) 6.6	体・底部手持ヘラ削り	褐色		No.5	
198	〃	9	須恵器坏	(11.8) 5.8 4.4	底部回転糸切、底部回転ヘラ削り	灰褐色		No.8	
198	〃	10	須恵器高台坏A?	(14.8) — —		暗灰色		No.7	
198	〃	11	土師器甕A	(29.4) — —	内外面ハケメ	茶褐色	やや粗、雲母	竈内 No.1	
198	191号住	1	土師器坏A	(10.8) (5.0) 4.4	底部回転糸切、体・底部手持ヘラ削り	橙色	やや粗 白・赤色粒子		
198	〃	2	〃	(11.4) 5.2 4.2	底部回転糸切、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃			
198	〃	3	〃	(11.4) (6.0) 5.8	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	にぶい橙色	赤色粒子		
198	〃	4	〃	(12.0) 7.5 4.9	底部静止糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.7	
198	〃	5	〃	(11.6) — —	体部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.15・18	
198	〃	6	〃	(13.0) — —	外面手持ヘラ削り、内面暗文	〃	〃		体部外面墨書
198	〃	7	土師器皿	(13.0) 6.0 2.5	体・底部回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	〃	白・赤色粒子		
198	〃	8	〃	(13.2) 5.1 2.1	〃	〃	赤色粒子	No.5・12	底部外面墨書
198	〃	9	〃	(13.2) 5.8 2.1	〃	明赤褐色		No.6	
198	〃	10	黒色土器椀	16.0 6.8 4.2	付高台(剥離)	橙色	やや粗 白・赤色粒子	No.1	完形(高台欠失)
198	〃	11	須恵器坏	(13.6) 6.4 3.1	底部回転糸切	褐灰色	白色粒子		
198	〃	12	土師器甕A	(24.6) — —	内外面ハケメ	にぶい褐色	粗 白色粒子	No.13	
198	192号住	1	土師器坏A	(12.8) 4.7 4.4	内外面手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.5	
198	〃	2	土師器高台坏	— (7.2) —	底部回転ヘラ削り、削り出し高台内面暗文	〃	〃	No.2	
198	〃	3	須恵器高坏	— — —		灰白色		No.1	
199	193号住	1	土師器坏A	(12.2) — —	内面暗文	橙色		No.8	
199	〃	2	須恵器坏A	(12.0) (6.2) 4.3	底部回転糸切	灰色		No.1	
199	〃	3	須恵器蓋A	(16.4) — —	外面回転ヘラ削り	〃	やや粗 白色粒子	No.3	
199	194号住	1	土師器坏A	(12.6) (4.8) 4.9	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	赤色粒子	No.15	
199	〃	2	〃	(3.2) 5.0 5.5	体・底部手持ヘラ削り?	明黄褐色		No.10	
199	〃	3	〃	— 5.2 —	体・底部回転ヘラ削り	にぶい橙色	白・赤色粒子	No.11	
199	〃	4	土師器皿	(12.0) (3.6) 2.3	底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.13	
199	〃	5	土師器小型甕C	(11.4) — —	ロクロナデ	〃	赤・黄色粒子	No.5	
199	〃	6	土師器甕A	(30.0) — —	内外面ハケメ	明赤褐色	やや粗 白色粒子、雲母	No.3	
199	〃	7	須恵器甕	— — —	外面叩き、内面ナデ	灰色		No.8	転用硯か
199	195号住	1	土師器皿	(13.0) — —		にぶい橙色	赤色粒子	No.2	
199	〃	2	黒色土器坏?	— 5.0 —	底部回転糸切、内面黒色	灰白色	やや粗 白色粒子		
199	〃	3	土師器甕A	(24.0) — —	内外面ハケメ	褐色	粗 白色粒子	No.5	
199	〃	4	〃	(29.0) — —	〃	内-黒褐色 外-にぶい褐色	白色粒子多量 雲母多量		
199	196号住	1	土師器坏A	(12.0) (5.0) 3.8	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	白・赤色粒子	No.1	
199	〃	2	土師器皿	(13.7) 4.5 3.4	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	白色粒子	No.8	
199	〃	3	須恵器高台坏A?	— (7.0) —	底部回転ヘラ削り、付高台	灰色		No.4	
199	〃	4	〃	— (10.4) —	〃	〃	白色粒子	No.6	
199	197号住	1	土師器坏A	(11.3) (6.6) 4.0	底部回転糸切、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色			217号住
199	〃	2	甲斐型黒色土器坏	(14.8) (8.0) 4.9	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	にぶい橙色	白色粒子	No.5	〃
199	〃	3	須恵器坏	12.0 6.7 4.3	底部回転糸切	灰色	白・赤色粒子	No.13	完形
199	〃	4	須恵器高台坏A?	(15.4) (10.6) 5.4		赤灰色	白色粒子	No.2・11	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
200	197号住	5	須恵器 坏	(11.2) (6.0) 4.0	底部回転糸切	灰色	白色粒子	No.11	
200	〃	6	〃	(12.6) 7.0 4.4	〃	〃	〃	No.46・48	
200	〃	7	土師器 小型甕C	(17.6) — —	ロクロナデ	にぶい黄橙色		No.12	
200	〃	8	土師器 甕A	23.2 (9.0) 35.6	内外面ハケメ、底部木葉痕	赤褐色	やや粗 雲母	竈内、No.14～27・30・31・37	217号住
200	〃	9	〃	(24.5) 7.8 37.3	〃	暗赤褐色	粗、白色粒子 雲母多量	竈、No.21・28・29・32・36・42・45・46・50	
200	〃	10	〃	(25.8) (9.0) 37.3	〃	にぶい赤褐色	粗、雲母 白・赤・黒色粒子	竈内、No.28・29・37・38・40・41・43・44	
200	〃	11	土師器 甕B？	A (21.0) — —	外面ナデ	にぶい橙色	やや粗 白色粒子多し	No.7	217号住
200	〃	12	須恵器 壷？	— (16.0) —	外面叩き、ヘラ削り、底部ナデ	灰赤色	白色粒子	No.8・11	217号住No.1
200	198号住	1	土師器 坏A	(15.0) (4.8) 4.8	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	明黄褐色	赤色粒子	No.9	
200	〃	2	〃	(15.0) 5.3 4.8	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	白・赤色粒子	No.10	
201	〃	3	土師器 甕A	(34.0) — —	内外面ハケメ	赤褐色	粗 白色粒子、雲母	No.1	
201	〃	4	〃	— (9.6) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	〃	〃	竈内 No.4・5・16	
201	199号住	1	土師器 坏A	(12.2) (7.5) 4.5	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	明赤褐色			底部外面線刻
201	〃	2	〃	— 7.4 —	体・底部手持ヘラ削り、みこみ部暗文	〃		No.29	底部外面・みこみ部焼成後線刻
201	〃	3	須恵器 坏	(11.6) (7.0) 3.9	底部回転糸切後、回転ヘラ削り	灰色	白色粒子		
201	〃	4	〃	(12.0) 5.0 4.5	底部回転糸切後、手持ヘラ削り	灰色～ 明黄褐色	〃		
201	〃	5	〃	(12.6) 6.4 4.6	回転糸切	灰色	白色粒子、小礫	No.36	
201	〃	6	〃	(13.0) 7.5 4.1	〃	〃	白色粒子	No.11	
201	〃	7	〃	(13.0) (8.0) 4.2	〃	灰白色	白・黒色粒子	No.25	
201	〃	8	〃	13.2 7.0 3.8	〃	〃	白色粒子	No.33	底部外面線刻
201	〃	9	〃	(13.4) 7.0 4.4	〃	灰色	〃	No.35	
201	〃	10	〃	15.0 8.1 4.7	〃	〃	〃	No.2	
201	〃	11	〃	— 6.4 —	〃	浅黄橙色	〃	No.15	底部外面線刻
201	〃	12	須恵器 高台坏A	(15.2) (9.5) 6.4	回転ヘラ削り後、付高台	灰色	〃	No.18・20	
201	〃	13	須恵器 蓋A	— — —	外面回転ヘラ削り	〃		No.16	
201	〃	14	〃	18.5 — —	〃	〃	白色粒子、小礫	No.2・17	
201	〃	15	〃	22.6 — —	〃	〃	白色粒子	No.41・43～45	
201	〃	16	土師器 甕C II	— 9.0 —	底部回転糸切、ロクロナデ、かすかな叩き	内-灰白色 外-にぶい橙色	やや粗、白・赤色粒子、小礫	No.6・42	
201	〃	17	土師器 甕C？	— 10.5 —	底部回転糸切、ロクロナデ	内-灰白色 外-褐灰色	やや粗、小礫 白・赤色粒子		
201	〃	18	須恵器 甕	— — —	ロクロナデ、外面にかすかにハケメ	暗赤褐色	白色粒子	No.30	
201	〃	19	灰釉陶器 長頸壷	— — —	ロクロナデ	灰色		No.24	
202	200号住	1	土師器 坏B	(13.0) (8.8) 3.3	底部静止糸切後、ナデ	橙色	白・赤色粒子 雲母		底部外面焼成後線刻 170・172号住
202	〃	2	〃	(14.0) (10.0) 3.6	底部静止糸切	〃	白・赤色粒子	No.2	
202	〃	3	〃	(16.0) (11.0) 5.8	底部ヘラ削り	〃	〃	No.11	
202	〃	4	須恵器 坏	(14.0) (9.6) 4.6	底部手持ヘラ削り	灰オリーブ色	白色粒子		172・202・206号住
202	〃	5	土師器 小型甕C	— (6.0) —	ロクロナデ、体部手持ヘラ削り	内-黄褐色 外-黒褐色	やや粗、白・赤色粒子、雲母		表面剥離
202	〃	6	〃	(13.2) — —	ロクロナデ	内-黄褐色 外-茶褐色	白色粒子、雲母	No.10	表面剥離 172号住
202	〃	7	土師器 球胴甕B	— — —	外面ヘラ削り 丸底	橙色	〃	No.8・13～15・19・20・24	
202	〃	8	土師器 甕B	— (9.0) —	外面ヘラ削り、内面指頭痕	褐色	やや粗、白・赤色粒子、小礫	No.7	
202	〃	9	土師器 甑	— (14.0) —	内外面ナデ、底部板目状圧痕	橙色	〃	No.21	
202	202号住	1	土師器 鉢A I	(29.0) — —	内外面ハケメ	明黄褐色	やや粗、 白・赤色粒子	竈内 No.2～4	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
202	203号住	1	土師器小型甕C	(16.0) — —	ロクロナデ	内-黄褐色 外-橙色	やや粗 白・赤色粒子	No.4・5	200号住
202	〃	2	土師器甕D	— — —	外面ヘラ削り	橙色	〃	No.15～17	
202	〃	3	土師器甕CⅢ	(22.0) — —	外面ナデ	黄褐色	やや粗、白・赤色粒子、小礫	竈内、No.7・8・10・12・13	172号住
203	204号住	1	土師器坏A	11.4 4.4 3.8	体・底部手持ヘラ削り	褐色		No.5	
203	〃	2	〃	(11.6) 5.0 3.8	〃	白褐色		No.2	体部外面焼成後線刻
203	〃	3	〃	(12.3) 4.4 3.8	〃	浅橙色		竈内 No.2	
203	〃	4	〃	14.3 5.4 4.8	〃	白褐色		竈内 No.2	
203	〃	5	土師器皿	— (4.0) —	〃	褐色		No.10	底部外面焼成後線刻「祝」
203	〃	6	土師器甕A	(28.8) — —	内外面ハケメ	黄褐色	雲母	No.8	
203	205号住	1	土師器皿	(12.0) 4.5 3.6	体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.1	
203	〃	2	土師器甕A	(28.0) — —	内外面ハケメ	茶褐色	雲母	No.7	
203	206号住	1	須恵器坏	(14.0) — —	体部回転ヘラ削り	オリーブ灰色	白・赤色粒子	No.7	
203	〃	2	須恵器蓋A	(17.0) — 4.3	外面回転ヘラ削り	灰色	白色粒子、小礫	No.1・8	
203	〃	3	須恵器短頸壺C	(4.0) — —		褐灰色	白色粒子		
203	〃	4	土師器甕C?	(32.0) — —	ロクロナデ	黄褐色	やや粗 白色粒子、小礫	No.12	内面黒斑、須恵器鉢Aか?
203	207号住	1	土師器坏A	(11.0) 5.0 4.1	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子 雲母	No.14	
203	〃	2	〃	(11.2) 4.2 4.3	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	〃		
203	〃	3	〃	(11.5) 5.8 4.1	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	白・赤色粒子	No.12	
203	〃	4	〃	(11.6) — —	体部手持ヘラ削り	黒褐色	白・赤色粒子 雲母	No.16	体部外面焼成後線刻「北」
203	〃	5	土師器皿	(17.0) — —	体部回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	橙色	〃	No.13	
203	〃	6	黒色土器坏	(13.0) (6.4) 4.7	内面黒色	灰黄色	白・赤色粒子		摩滅激しく技法不明
203	〃	7	土師器坏A?	— (6.1) —	体・底部手持ヘラ削り、ナデ	灰褐色	赤色粒子		底部外面線刻
203	〃	8	土師器皿?	— — —	内面渦巻状暗文?、底部ミガキ	明赤褐色			〃
203	〃	9	土師器甕CV	(23.0) — —	外面カキメ	橙色	やや粗、白色粒子 雲母、小礫		
204	208号住	1	須恵器坏	(12.6) 6.5 4.0	底部回転糸切	〃	白・赤色粒子	No.6・9	
204	〃	2	〃	(12.8) 7.0 4.3	〃	灰色	〃	No.4・7・10	体部黒色物付着 底部外面墨書
204	〃	3	土師器甕CI	(22.0) — —	ロクロナデ	褐色	やや粗 白色粒子、雲母	竈内、No.5・11・12・13・15	
204	209号住	1	土師器蓋A	(20.0) — —		橙色	白・赤色粒子	No.8	
204	〃	2	土師器壺?	— — —	外面叩き	にぶい橙色	軟質 白・赤色粒子	No.5	須恵器か
204	〃	3	土師器甕CIV	(20.8) — —	内外面とも縦ハケメ	灰褐色	粗、白色粒子、雲母	竈内 No.1・2・3・4・9	
204	210号住	1	土師器坏A	(11.1) (5.0) 4.1	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	赤色粒子	No.4	
204	〃	2	〃	(10.6) 5.0 4.1	体・底部手持ヘラ削り	〃	白色粒子	No.3	底部外面焼成後線刻
204	〃	3	土師器皿	— (6.0) —	体・底部回転ヘラ削り	〃	〃	No.9	
204	〃	4	須恵器高台坏?	— (9.0) —	底部回転ヘラ削り、付高台	褐色	〃	No.2	
204	〃	5	土師器小型甕C	(17.4) — —	ロクロナデ	橙色	〃	No.14・24	
204	〃	6	土師器甕CII	(25.6) — —	ロクロナデ、外面叩き	〃	〃	No.21	
204	〃	7	土師器甕A	(26.5) — —	内外面ハケメ	褐色	粗、白色粒子 雲母	No.9	
205	211号住	1	土師器坏A	(12.2) (7.8) 5.3	体・底部ミガキ、内面みこみ部暗文	橙色	白・赤色粒子	No.1	底部外面墨書
205	〃	2	土師器坏D	(9.8) (5.1) 3.0	底部糸切、体部手持ヘラ削り	にぶい橙色	異質、やや粗 白色粒子		灯明具
205	〃	3	土師器高台坏	— (7.8) —	底部回転ヘラ削り、付高台、内面みこみ部暗文	橙色	赤色粒子		底部外面みこみ部線刻
205	〃	4	土師器坏A?	— — —		にぶい橙色			底部外面線刻

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
205	211号住	5	須恵器坏	(6.5)	底部回転糸切	灰色	白色粒子	No.11	
205	〃	6	須恵器高台坏?	(8.2)	底部回転ヘラ削り、付高台	〃	〃	No.8	
205	〃	7	土師器甕A	(29.2)	内外面ハケメ	明赤褐色	雲母	No.10・16・17・19・20	
205	212号住	1	土師器坏A	(10.8) 5.8 3.9	底部回転糸切、体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子 雲母	No.12	
205	〃	2	〃	(11.0) 7.2 4.4	〃	〃	〃	No.7	
205	〃	3	〃	(8.0)	底部回転糸切後、回転ヘラ削り削り出し高台、内面みこみ部暗文	〃	〃	No.4	
205	〃	3	土師器高台坏	(8.0)	底部回転糸切後、回転ヘラ削り削り出し高台、内面みこみ部暗文	〃	〃	No.4	
205	〃	4	須恵器坏	(11.0) (6.0) 3.7	底部回転糸切	灰色	白色粒子	No.11	
205	〃	5	〃	(12.0) (7.5) 4.2	底部回転ヘラ削り	〃	赤色粒子、小礫	No.9	
205	〃	6	〃	(12.0) 6.0 4.0	底部回転糸切	灰白色	白色粒子	No.8	
205	〃	7	土師器蓋A	(17.0)	外面回転ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子 雲母	No.10	
205	〃	8	須恵器蓋A	(13.6)	〃	灰赤色	砂粒	No.5	219号住
205	〃	9	〃	(18.0) 3.6	〃	灰色	白色粒子	No.17	
205	213号住	1	土師器皿	(12.8) (5.8) 2.7	体・底部回転ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.2	
205	〃	2	須恵器甕		外面叩き	灰色	黒色粒子	No.1	転用硯
205	214号住	1	土師器坏A	(11.0) (3.4) 4.2	体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子 小礫		溝、体部外面墨書
205	〃	2	土師器皿	(12.0) (5.0) 2.6	〃	〃	白・赤色粒子 小礫		〃
205	〃	3	〃	(16.4) 3.4	体部手持ヘラ削り、内面放射状暗文	〃	白・赤色粒子	No.1	
205	〃	4	須恵器高台坏C	(17.2) (9.0) (7.2)	底部回転ヘラ削り、付高台	灰赤色	赤色粒子、小礫	No.15	208号住
206	〃	5	須恵器高台坏?		外面回転ヘラ削り、輪状のつまみ(欠損)	灰色	白・赤色粒子	No.2	転用硯
206	〃	6	土師器小型甕B	11.8 6.5 6.8	内外面ナデ	黄褐色	やや粗、白・黒色粒子、雲母	No.6	内面に籾の圧痕あり
206	〃	7	土師器甕CV		外面カキメ、叩き	茶褐色	やや粗、白・赤色粒子、雲母	No.11	
206	〃	8	土師器甕CⅢ	(24.0)	内外面ヘラナデ	橙色	小礫	No.3・9	
206	〃	9	土師器甕C?		外面細かいハケメ、内面縦ナデ	〃	白・黒・赤色粒子	No.5	
206	〃	10	土師器甕B	5.5	内外面ナデ、底部木葉痕	黄橙色	粗、白色粒子	竈内、No.4・7・8・11・12	
206	215号住	1	土師器皿	11.9 4.4 2.6	体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子	No.7	
206	〃	2	〃	(12.0) 5.2 2.2	体・底部回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	〃	赤色粒子	No.9	
206	〃	3	〃	12.9 5.3 2.4	〃	〃	赤色粒子	No.1	完形、体部外面墨書「万」
206	〃	4	甲斐型黒色土器坏	11.3 5.6 4.9	体・底部回転ヘラ削り、削り出し高台、内面黒色	浅黄橙色	やや軟質		
206	216号住	1	土師器坏A	10.6 5.7 4.1	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色		No.9	内面に黒斑
206	〃	2	〃	(11.0) (5.6) 4.4	〃	〃		No.5	
206	〃	3	土師器高台坏	(16.0) (6.8) 5.6	底部削り出し高台、内面暗文	〃	赤色粒子		
206	〃	4	土師器鉢D?	(8.0)	体・底部回転ヘラ削り、内面ミガキ	〃	やや粗	No.6	黒色土器鉢か?
206	〃	5	須恵器高台坏?	(8.0)	底部回転糸切後、回転ヘラ削り、削り出し高台	灰色	小礫	No.17	
206	〃	6	須恵器短頸壷	(9.4) 10.6 16.8	ロクロナデ、底部回転糸切後、付高台	外面-赤灰色 内面-灰赤色	〃	No.7・11・14・15・20	
207	〃	7	土師器甕A	(25.0)	内外面ハケメ	茶褐色	やや粗、雲母多量	No.10・21・23・24	
207	〃	8	〃	(26.0)	〃	〃	〃	竈内 No.22・29	214号住
207	〃	9	〃		〃	黒褐色	〃	竈内、No.10・28・31・32	
207	〃	10	〃	(9.0)	内外面ハケメ、底部木葉痕	茶褐色	やや粗	No.23・24・25	
207	217号住	1	須恵器坏	(11.8) 6.4 3.9	底部回転糸切	オリーブ灰色	白・赤色粒子 軟質	No.3	
207	〃	2	土師器甕B?	(9.7)	底部木葉痕、体部ヘラ削り	黄褐色	やや粗 白色粒子、小礫	No.8	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
207	218号住	1	土師器坏A	(12.0) 5.5 3.7	底部回転糸切	にぶい黄褐色	白・赤色粒子 雲母	No.17	体部下半スス付着
207	〃	2	〃	(18.0) (5.6) 6.0	体・底部手持ヘラ削り	橙　色	白・赤色粒子	No.13	
207	〃	3	土師器皿	(12.0) 6.0 2.7	底部回転糸切	黄橙色	軟質 白・赤色粒子	No.12	
207	〃	4	〃	(12.6) 6.0 2.7	底部回転糸切	褐　色	白・赤色粒子 雲母	No.2	
207	〃	5	〃	(13.0) 4.5 2.6	体・底部手持ヘラ削り	にぶい褐色	やや粗、白・赤色粒子、小礫	No.9	
207	〃	6	土師器坏A	(12.0) — —	〃	橙　色	白・赤色粒子		体部外面墨書
207	〃	7	〃	(12.0) — —		〃			体部外面墨書
208	〃	8	灰釉陶器長頸壷	(14.0) (9.0) (33.0)	付高台、ロクロナデ、外面上半施釉	灰　色		竈内 No.5・6・10・11	
208	〃	9	土師器甕A	(34.0) (9.0) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	暗褐色～黒褐色	やや粗、白色粒子 雲母、小礫	竈内、No.3・4・18・19・20・21	
208	219号住	1	土師器坏A	10.6 5.0 4.4	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙　色		No.7・23	
208	〃	2	〃	(11.3) (6.4) 4.5	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	赤色粒子	No.3	
208	〃	3	〃	(11.2) 4.9 4.5	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃		No.9	
208	〃	4	〃	(11.5) (6.7) 3.9	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り内面暗文	〃	赤色粒子	No.1	底部外面線刻
208	〃	5	土師器皿	15.5 7.3 2.9	底部糸切後、手持ヘラ削り	明褐色	〃	No.13	
208	〃	6	土師器蓋A	(15.2) — 3.8		明赤褐色		No.22	
208	〃	7	須恵器坏	(11.5) (6.2) 3.5	底部回転糸切	灰　色	白色粒子		
208	〃	8	〃	(11.8) (6.4) 3.1	〃	〃	〃	No.24	
208	〃	9	〃	11.9 6.0 4.6	〃	灰白色	〃	No.12	
208	〃	10	須恵器高台坏A	(14.4) (8.0) 5.9	底部削り出し高台	赤灰色	〃	No.25	
208	〃	11	須恵器蓋A？	— — —		灰　色	〃	No.16	
208	〃	12	土師器甕CV	— 9.0 —	ロクロナデ	橙　色	〃	竈内 No.8・17～20	218号住No.15
208	〃	13	土師器 —		内面に細い布目痕	にぶい橙色	白色粒子、小礫		器種不明
208	〃	14	〃		〃	〃	〃		220号住
208	〃	15	〃		〃	〃	〃		288号住
208	220号住	1	須恵器坏	— (7.2) —	底部回転ヘラ削り	浅黄橙		No.6	
208	〃	2	須恵器高台坏A？	— (11.6) —	付高台	灰　色	黒色粒子	No.7	
208	〃	3	土師器甕A	(26.8) — —	内外面ハケメ	明赤褐色	雲母	No.11	212号住
209	221号住	1	土師器坏A	(12.0) 6.0 4.3	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	黄褐色	白色粒子、雲母	No.9	
209	〃	2	〃	(12.0) (6.0) 4.1	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り内面暗文	橙　色	〃		
209	〃	3	〃	— (8.0) —	体・底部手持ヘラ削り、内面みこみ部暗文	内-黄橙色 外-橙色	赤色粒子、雲母		底部外面墨書「宅」と線刻
209	〃	4	須恵器坏	(13.0) (8.0) 3.5	底部回転糸切、外周回転ヘラ削り	灰　色	白・赤色粒子		
209	〃	5	灰釉陶器壷？	— — —	上半部施釉	〃	白色粒子	No.1	
209	〃	6	土師器甕A	(25.0) (9.0) (36.4)	内外面ハケメ	茶褐色	雲母	No.3～6・12・13・15～19	
209	222号住	1	土師器坏A	(13.0) (5.0) 4.3	体・底部手持ヘラ削り	内-にぶい橙色 外-黒褐色	白・赤色粒子 雲母	竈内	
209	〃	2	〃	(15.0) 5.5 4.7	〃	暗褐色	白・赤色粒子	No.4	
209	〃	3	〃	(14.6) (6.0) 5.7	〃	内-暗褐色 外-にぶい橙色	やや粗 白・赤色粒子	竈内	
209	〃	4	〃	(15.0) (5.8) 4.7	〃	橙　色	白色粒子	No.13・17	体部外面墨書
209	〃	5	土師器坏B	— (8.0) —	板目状圧痕、手持ヘラ削り	黄橙色	白・赤色粒子	No.9	
209	〃	6	土師器皿	(12.8) 5.3 2.7	体・底部手持ヘラ削り	橙　色	〃	竈内	
209	〃	7	〃	(13.0) — —	体部手持ヘラ削り	にぶい橙色 ～黒褐色	〃	竈内	
209	〃	8	〃	(16.0) — —	体部回転ヘラ削り	黄橙色	やや粗 白・赤色粒子		

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
209	222号住	9	土師器 高台坏	— (6.2) —	底部静止糸切、回転ヘラ削り、削り出し高台、みこみ部暗文	橙色	白・赤色粒子		底部外面墨書「宅」
209	〃	10	甲斐型黒色土器 坏	(15.0) 5.0 5.8	体・底部手持ヘラ削り、 内面束状暗文（４単位）	〃	〃	竈内 No.4・5	体部外面焼成後刻書「伴」
209	〃	11	土師器 甕A	(23.0) (8.8) —	外面ハケメ、内面ハケメ、ナデ、底部木葉痕	黄褐色	やや粗 白色粒子、雲母	竈内 No.20	226号住
209	223号住	1	土師器 坏A	(10.4) (3.4) 3.9	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	白・赤色粒子 雲母		
209	〃	2	〃	(12.0) (3.4) 3.7	体・底部手持ヘラ削り	黄橙色	やや粗 白・赤色粒子		
209	〃	3	〃	(11.6) 3.4 4.5	〃	にぶい橙色	白・赤色粒子	No.31	
209	〃	4	〃	(12.2) 3.7 4.4	〃	〃	白・赤色粒子 雲母	No.37・39	
209	〃	5	〃	(12.2) 4.3 4.8	〃	〃	白・赤色粒子	No.30	
209	〃	6	〃	(14.0) 5.8 5.5	〃	〃	軟質、やや粗、白・赤色粒子、雲母	No.26・28・33	体部外面線刻
209	〃	7	土師器 皿	12.0 3.4 2.9	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子 雲母	竈内 No.3・4	
209	〃	8	〃	(12.6) 5.4 2.6	体・底部手持ヘラ削り	〃	軟質、赤色粒子、小礫		
210	〃	9	〃	(13.4) (5.2) 2.7	体・底部回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	〃	白・赤色粒子 小礫	No.11	
210	〃	10	〃	(12.6) 4.6 2.3	〃	〃	白・赤色粒子		
210	〃	11	黒色土器 坏	(13.0) 5.5 4.0	底部回転糸切、内面黒色	灰白色	やや粗、赤色粒子 雲母、小礫	No.16	
210	〃	12	甲斐型黒色土器 坏	(14.0) 5.4 5.2	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	にぶい黄橙色	白・赤色粒子	No.9	
210	〃	13	須恵器 短頸壷C	(6.0) — —	ロクロナデ	灰色	白色粒子	No.20	
210	〃	14	須恵器 長頸壷?	(11.0) — —	〃	赤灰色	白・赤色粒子	No.17	
210	〃	15	須恵器 壷?	— (12.2) —	体・底部回転ヘラ削り、付高台	灰色	小礫	No.1	
210	〃	16	土師器 小型甕D	(13.0) — —	外面カキメ、内面ナデ	にぶい褐色 ～黒褐色	やや粗、白・赤色粒子、小礫	No.21	
210	〃	17	土師器 小型甕A	— 5.5 —	外面細かいハケメ、内面ナデ、底部木葉痕	暗褐色	やや粗、白色粒子 雲母、小礫	No.7	
210	〃	18	土師器 甕A	(29.0) (10.0) (36.0)	内外面ハケメ、底部木葉痕	褐色	やや粗、白・赤色粒子、雲母、小礫	竈内、No.4・5・6・29・32・35・36・38・40・41	
210	224号住	1	土師器 坏A	10.6 6.0 3.8	底部回転糸切、内面暗文	明赤褐色	赤色粒子	No.22	
210	〃	2	〃	(11.6) 5.0 4.1	体・底部手持ヘラ削り	〃	〃		
210	〃	3	甲斐型黒色土器 坏	(15.9) (5.0) 4.4	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	〃	〃		
210	〃	4	土師器 皿	(12.8) (4.0) 2.0	体・底部回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	橙色	〃		
210	〃	5	土師器 坏A	— (5.0) —	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	〃		底部外面墨書「万」
210	〃	6	〃	— (5.0) —	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	白色粒子		体部外面墨書
210	〃	7	土師器 小型甕A	(16.0) (10.0) 13.6	内外面ハケメ、底部木葉痕	にぶい赤褐色	粗 白色粒子、雲母	竈内、No.9・11・17・18・19・21・26・29	
210	〃	8	土師器 甕A	(30.0) — —	内外面ハケメ	明赤褐色	〃	竈内 No.8・9・34	
211	225号住	1	土師器 坏B	— (10.0) —	底部外周手持ヘラ削り、体・底部ナデ	橙色			
211	〃	2	〃	(14.4) (10.0) 3.1	底部手持ヘラ削り	にぶい橙色			
211	226号住	1	土師器 坏A	11.0 4.9 3.7	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	赤色粒子	No.23	体・底部外面墨書「介」
211	〃	2	〃	11.9 4.5 3.6	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.6・8	
211	〃	3	〃	(12.4) 4.5 4.2	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り	〃	〃	No.12	
211	〃	4	〃	(12.6) 4.5 4.4	体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.3	
211	〃	5	土師器 皿	12.2 5.0 2.3	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り	〃	〃	No.19	完形
211	〃	6	土師器 坏A	— 4.2 —	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	〃		
211	〃	7	〃	— 5.0 —	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	〃	No.16	
211	〃	8	甲斐型黒色土器 坏	(14.7) (6.6) 5.0	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	橙色	白色粒子、異質	No.10	
211	〃	9	土師器 坏A	(12.6) — —	内面暗文	橙色			体部外面焼成後線刻
211	〃	10	土師器 皿?	— — —					底部外面みこみ部焼成後の線刻

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
211	226号住	11	須恵器甕?	— (13.0) —	外面ナデ	褐色	白色粒子	No.2	
211	〃	12	土師器甕A	(36.0) — —	内外面ハケメ	にぶい橙色	粗 赤色粒子、雲母	No.7	
211	227号住	1	土師器坏A	(11.6) 4.1 4.5	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子		423号住
211	227号住	2	〃	(11.8) 4.4 4.3	底部糸切、体部手持ヘラ削り	〃		No.20	体部外面墨書「民」
211	〃	3	〃	11.8 4.0 4.2	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	赤褐色		No.107	灯明具、完形 体部外面墨書「民」
211	〃	4	〃	11.8 4.3 4.0	体・底部手持ヘラ削り	淡褐色		No.48・49	ほぼ完形
211	〃	5	〃	(11.6) (4.4) (3.8)	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	暗褐色		No.28・30	
211	〃	6	〃	11.4 (3.4) 4.1	体・底部手持ヘラ削り	褐色		No.97・102・104	口縁部内外面にスス付着
211	〃	7	〃	(11.2) 4.8 3.7	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	淡褐色		No.9	
211	〃	8	〃	(12.6) (4.0) 3.8	体・底部手持ヘラ削り	褐色		No.3	
211	〃	9	〃	12.2 4.8 4.4	〃	〃		No.95・99・102・104	ほぼ完形
211	〃	10	〃	13.2 4.0 4.4	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい褐色		No.42	
211	〃	11	〃	(12.6) (3.2) 4.7	〃	淡茶褐色		No.13	
211	〃	12	〃	13.2 5.0 4.2	体・底部手持ヘラ削り	黒色～褐色		竈内 No.9・4・103	
211	〃	13	〃	(13.4) (4.0) 4.3	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.11	
211	〃	14	〃	13.6 5.6 4.7	〃	暗褐色、内外面共一部黒変		No.110・111	
211	〃	15	〃	(14.0) 5.4 4.8	〃	褐色		No.14	
211	〃	16	〃	(13.8) (5.4) 4.6	〃	橙色		No.108	
211	〃	17	〃	(14.0) — —		褐色		No.93	
211	〃	18	〃	— 4.4 —	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	黒色～暗褐色			
211	〃	19	〃	17.0 6.5 6.3	〃	淡橙色		No.80・109	
211	〃	20	〃	(17.2) (6.0) (5.9)	底部手持ヘラ削り	白褐色		竈内	内外面剥離
211	〃	21	〃	18.0 6.4 6.4	体・底部手持ヘラ削り	暗褐色		No.99・103・104・106	器面の剥離が著しい
211	〃	22	土師器皿	12.0 4.5 2.4	〃	褐色		No.43・62	
211	〃	23	〃	12.3 4.3 2.6	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	暗褐色			
211	〃	24	〃	12.8 5.4 2.7	底部糸切後、手持ヘラ削り	赤褐色		No.1	
212	〃	25	甲斐型黒色土器坏	12.1 4.4 4.3	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	黒色		No.94・100	外面も黒色
212	〃	26	〃	14.9 4.8 5.7	体・底部手持ヘラ削り、内面放射状暗文＋らせん状暗文、黒色	赤褐色		No.51・52・53・54	
212	〃	27	〃	(16.4) 6.0 6.8	体・底部手持ヘラ削り、みこみ部らせん状内面らせん状＋放射状暗文、内面黒色	黄褐色		No.44・45	
212	〃	28	〃	(16.6) — —	体部手持ヘラ削り、内面黒色	白褐色		No.31	
212	〃	29	土師器鉢AⅡ	21.5 8.5 7.9	外面ハケメ、内面ナデ、底部木葉痕	橙色	白・赤色粒子	竈前灰中	423号住 425号住
212	〃	30	土師器坏A	— (6.0) —	底部糸切後、手持ヘラ削り	褐色			底部外面墨書
212	〃	31	〃	— — —		橙色			体部外面墨書
212	〃	32	土師器小型甕C	— 7.3 —	内外面ロクロナデ、底部回転糸切	〃	粗、白色粒子	No.3	423号住
212	〃	33	〃	— 8.6 —	〃	〃	〃		〃
212	〃	34	土師器小型甕B	(15.6) 8.8 (18.0)	外面ヘラ削り、内面ナデ	暗褐色		No.17・18・36・37・38・40・41・63	
212	〃	35	土師器小型甕A	(13.2) 6.5 (9.8)	内外面ハケメ、底部木葉痕	〃	やや粗、雲母	No.12・19	
212	〃	36	〃	(17.2) (8.0) 14.3	〃	〃	〃	No.91・132	
212	〃	37	土師器甕A	(25.8) — —	内外面ハケメ			No.86	
212	〃	38	〃	(28.8) — —	〃	茶褐色	やや粗、雲母多量	No.131	
212	〃	39	〃	20.0 — —	〃	赤褐色	白色粒子、雲母	No.34・109・121・123	423号住竈前灰中

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
212	227号住	40	土師器甕A	(30.6) — —	内外面ハケメ	赤褐色	やや粗、雲母多量	竈内 No.112・130	423号住竈前灰中
213	〃	41	土師器羽釜A	(22.4) — —	外面ハケメ、内面かすかなハケメ指頭痕	褐色	やや粗		
213	〃	42	〃	— — —	〃	橙色	粗、白・赤色粒子 雲母		423号住竈前灰中
213	228号住	1	土師器坏A	(12.4) (4.2) 4.0	体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子	No.7・8	
213	〃	2	〃	(12.0) — —	体部手持ヘラ削り	〃	〃	No.6	
213	〃	3	土師器皿	(12.0) 3.6 2.6	体・底部手持ヘラ削り	明赤褐色	赤色粒子		
213	〃	4	〃	(12.4) (5.0) 2.6	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	〃	No.1	
213	229号住	1	土師器甕A	(31.0) — —	内外面ハケメ	暗赤褐色	粗、白色粒子 雲母	No.2	
213	230号住	1	土師器坏A？	12.6 7.4 3.9	底部静止糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.1	完形、灯明具、内外面剥離
213	〃	2	須恵器高台坏A	(18.0) (11.0) 5.7	底部回転ヘラ削り、付高台	灰色	白・黒色粒子	No.14	
213	〃	3	土師器小型甕C	(15.6) — —	ロクロナデ	橙色	粗、白色粒子	No.12	
213	231号住	1	土師器坏A	(12.4) 6.0 4.1	体・底部手持ヘラ削り	黄橙色	白・赤色粒子		
213	〃	2	須恵器坏	(12.0) (7.0) 3.7	底部回転糸切	オリーブ灰色	白色粒子		
213	232号住	1	〃	— 9.7 —	底部回転ヘラ削り	灰色	〃	No.1	
213	〃	2	土師器甕C？	— 9.7 —	ロクロナデ	橙色	〃	竈内 No.2・3	
213	233号住	1	土師器坏A	(12.4) 4.4 4.1	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	白・赤色粒子	No.26	
213	〃	2	〃	12.0 4.6 4.0	〃	黄橙色	〃	No.22	
213	〃	3	〃	12.4 4.4 4.0	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り	褐色	〃	No.16	灯明具
213	〃	4	〃	12.2 4.2 4.1	体・底部手持ヘラ削り	橙色	〃	No.30	灯明具 体部外面墨書「民」
213	〃	5	〃	(12.0) 5.0 4.2	底部回転糸切	〃	〃	No.37	
213	〃	6	〃	(12.8) (6.0) 3.8	底部回転糸切後、体部手持ヘラ削り	〃	〃	No.5	
213	〃	7	〃	(17.2) 7.4 6.2	〃	〃	〃	No.28	
213	〃	8	土師器皿	(12.4) (4.0) 2.3	〃	〃	〃	No.20	
213	〃	9	〃	(13.0) 4.4 2.7	〃	黄橙色	〃	No.46	
213	〃	10	〃	(13.0) (4.8) 2.7	〃	橙色	〃	No.18	体部黒斑
214	〃	11	土師器鉢AⅠ	(37.0) (9.0) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	黄褐色	やや粗 白色粒子、雲母	No.2・3・13・35・38	
214	〃	12	土師器甕	(29.4) (11.8) (32.0)	〃	茶褐色	〃	竈内、No.3・6・8・10・12・13・40・43・44	
214	〃	13	須恵器坏	(11.4) (5.6) 3.3	底部回転糸切	青灰色	白色粒子、小礫		
214	〃	14	〃	— (7.0) —	〃	灰白色	白色粒子	No.24	
214	〃	15	須恵器鉢B？	— (8.0) —	〃	灰褐色 ～灰色	白色粒子、小礫	No.1	
214	〃	16	緑釉陶器皿	— (8.0) —	付高台、ナデ、全面施釉	緑	白色粒子	No.23・27	
214	〃	17	須恵器甕	— (13.0) —	外面叩き、内面ナデ、底部ナデ	淡黄色 ～灰色	やや粗、小礫多量		
214	234号住	1	土師器坏A	(12.2) 5.6 4.1	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	竈内	
214	235号住	1	土師器坏B	(11.8) (7.4) 2.8	底部ナデ	〃	〃		
214	〃	2	〃	(14.0) (10.2) 4.0	底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	〃	No.13	底部外面線刻
214	〃	3	〃	(14.6) 9.7 5.9	底部回転糸切後、ナデ、外周手持ヘラ削り	橙色	〃	No.5	〃
214	〃	4	土師器高台坏	(13.2) 8.6 3.8	底部糸切後、付高台、内面みこみ部暗文	〃	〃	No.10	〃
214	〃	5	土師器小型壺A	(8.0) — —	外面ミガキ	〃			
214	〃	6	須恵器高台坏A？	(17.0) — —		灰色	白色粒子	No.4	
214	〃	7	須恵器鉢？	— 8.2 —	底部回転糸切、外周ヘラ削り	灰白色	白・黒色粒子	No.17	
215	〃	8	土師器甕CⅢ	(21.5) — —	内外面ナデ	にぶい橙色	白・赤色粒子	No.31	

（法量は口径・底径・器高の順、一は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
215	235号住	9	土師器甕D	(22.8) — —	内外面ナデ	にぶい橙色	白色粒子	竈内 No.37	
215	〃	10	土師器甕CⅢ	(24.9) — —	外面ロクロナデ、削り	橙色	赤色粒子	No.33	
215	〃	11	土師器甕B	— (24.9) —		浅黄橙色	粗、白色粒子	竈内 No.32・34	
215	236号住	1	土師器坏	(5.8) 7.0 4.0	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	やや粗	No.2・3・6	
215	〃	2	〃	(12.0) (6.0) (4.5)	〃	明赤褐色		No.5	
215	〃	3	〃	(12.0) — —	体部手持ヘラ削り、内面暗文	にぶい赤褐色		竈内 No.7	
215	〃	4	須恵器蓋A	16.8 — 3.1	外面回転ヘラ削り	灰色	白色粒子	竈内、No.8・9・10・11	
215	〃	5	土師器坏A	— — —		黒褐色	やや粗 長石	竈内	底部外面線刻
215	237号住	1	土師器坏A	11.8 4.0 4.4	体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子	No.2	
215	〃	2	〃	12.3 5.1 4.2	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.12	
215	〃	3	〃	13.4 4.8 5.2	体・底部手持ヘラ削り	〃	〃		215号住
215	〃	4	〃	14.4 4.8 5.3	〃	〃	白・赤色粒子		〃
215	〃	5	土師器皿	11.8 7.4 2.8	底部手持ヘラ削り		白色粒子	No.1	
215	〃	6	〃	(12.8) (4.6) 3.2	体・底部手持ヘラ削り	橙色	やや粗、赤・白色粒子	No.1・15	215号住竈
215	〃	7	黒色土器坏	13.7 5.3 5.1	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	にぶい橙色	粗、赤・白色粒子	No.9・10・23	内外面摩耗し、技法は定かではない、215号住竈
215	〃	8	甲斐型黒色土器坏	(14.6) — —	体部手持ヘラ削り、内面黒色	〃	赤色粒子	No.7	
215	〃	9	灰釉陶器椀	(14.2) 6.8 5.0	付高台、内外面施釉			No.21・22	215号住
215	〃	10	須恵器壷?	— (14.0) —	外面叩き、底部ナデ	灰色	粗 白色粒子	No.14	
215	〃	11	土師器甕A?	(31.0) 9.2 35.2	外面ハケメ、内面ハケメ、ナデ、指頭痕	褐色	やや粗 雲母	竈内、No.2・3・11・25・29・30	
216	238号住	1	土師器坏A	10.5 5.0 4.1	体・底部手持ヘラ削り	浅黄橙色	白色粒子	No.30	
216	〃	2	〃	11.8 4.4 4.1	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.1・5	体部外面墨書「万」
216	〃	3	〃	11.7 5.1 4.2	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	白色粒子	No.26	
216	〃	4	〃	11.9 4.4 4.4	〃	明赤褐色	白・赤色粒子	No.39	体部外面墨書「万」
216	〃	5	〃	12.8 4.9 4.4	体・底部手持ヘラ削り	橙色	〃	竈内 No.26・38	
216	〃	6	〃	13.3 5.3 4.6	〃	〃	赤色粒子	No.23	
216	〃	7	土師器皿	10.7 4.0 2.7	体・底部回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	〃	白・赤色粒子	No.15	
216	〃	8	〃	12.3 4.4 2.7	体・底部回転ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.9	体部外面「万」墨書 底部外面「万」線刻
216	〃	9	〃	12.6 5.1 3.1	〃	にぶい橙色	〃	No.3	
216	〃	10	〃	12.9 6.5 2.2	体・底部手持ヘラ削り	橙色	〃	No.33・34	
216	〃	11	〃	13.3 4.3 3.3	体・底部回転ヘラ削り	浅黄橙色	白・赤色粒子	No.47	
216	〃	12	黒色土器坏	11.6 5.8 4.3	底部回転糸切、内面ミガキ、黒色	にぶい黄橙色	白色粒子	No.39	
216	〃	13	黒色土器高台皿	12.3 5.7 2.7	底部回転ヘラ削り、付高台、黒色	浅黄橙色	赤色粒子	No.22	
216	〃	14	黒色土器椀	— 6.5 —	付高台、回転ヘラ削り	にぶい橙色	白色粒子	No.32	
216	〃	15	土師器小型甕C	9.2 4.7 6.5	ロクロナデ、底部回転糸切	橙色		No.6	
216	〃	16	土師器鉢AⅠ	(44.1) — —	内外面ハケメ	明褐色	雲母	竈内 No.20・40・41	
216	239号住	1	土師器坏A	(12.0) 5.2 3.9	体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.4～6	外面摩滅する
216	〃	2	〃	(14.0) (4.4) 5.6	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り			No.7	体部外面線刻「大」
216	〃	3	〃	(14.8) 4.6 4.8	体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.2・3・5	
216	〃	4	甲斐型黒色土器坏	(14.4) 4.8 4.8	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	にぶい褐色		No.10	
216	〃	5	〃	(16.0) (5.0) 5.1	〃	にぶい橙色		No.1・2	
216	〃	6	土師器甕A	(24.0) — —	内外面ハケメ	にぶい褐色	粗、白色粒子 雲母	No.9	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
217	240号住	1	土師器坏A	(11.6) 5.0 4.0	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	黄橙色		No.1	
217	〃	2	〃	(11.6) 3.8 4.4	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子多量	No.42	
217	〃	3	〃	12.2 3.2 4.0	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り	褐色		No.11～13	
217	〃	4	〃	12.4 4.8 4.2	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	淡橙色		No.3・4・10	
217	〃	5	〃	(12.4) 4.2 (4.2)	体・底部手持ヘラ削り	灰黄褐色		No.18	
217	〃	6	〃	14.4 6.2 4.9	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.6・7	
217	〃	7	〃	(16.4) 5.6 5.8	体・底部手持ヘラ削り	〃		No.5	
217	〃	8	〃	(12.0) — —	体部手持ヘラ削り	淡橙色		No.10	
217	〃	9	土師器皿	12.0 3.8 3.2	体・底部手持ヘラ削り	白褐色	赤色粒子多量	No.9・14	底部外面墨書
217	〃	10	〃	12.2 4.7 3.1	〃	淡褐色		No.3・4	
217	〃	11	〃	(11.6) 3.8 2.7	体・底部回転ヘラ削り	赤褐色		No.45	
217	〃	12	〃	(11.8) 3.2 2.5	体・底部手持ヘラ削り	暗褐色		No.38	
217	〃	13	〃	(11.8) — (2.7)	〃	褐色		No.11	
217	〃	14	土師器坏B	(14.6) (12.0) 2.9	底部～底部外周手持ヘラ削り、内面みこみ部ミガキ	〃		No.25	
217	〃	15	甲斐型黒色土器坏	(15.6) 5.4 5.3	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	暗赤褐色		No.34	
217	〃	16	〃	(15.6) (3.6) 5.8	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面ミガキ後暗文、黒色	淡黄褐色		No.8・25	
217	〃	17	〃	17.0 5.4 6.4	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文黒色	〃		No.17・20・21	
217	〃	18	黒色土器鉢	(21.8) — —	内面黒色	淡黄橙色		No.28	
217	〃	19	〃	(23.0) — —	外面一部ヘラ削り、内面ミガキ後、黒色	明赤褐色		No.43	番号20と同一の可能性高い
217	〃	20	〃	— (10.0) —	体・底部回転ヘラ削り、削り出し高台、内面ミガキ後、黒色	赤褐色			番号19と同一の可能性高い
217	〃	21	〃	(29.4) — —	内面黒色	淡黄褐色		No.32	
217	〃	22	黒色土器坏	— 6.6 —	底部回転糸切、内面黒色	黄灰色		No.30	
217	〃	23	灰釉陶器段皿	— 6.2 —	付高台	灰白色		No.48	
217	〃	24	土師器甕A	(30.6) — —	外面ハケメ、内面ナデ	赤褐色	やや粗 白色粒子、雲母	No.26・29・31・49	
217	〃	25	土師器小型甕C	10.4 — —	ロクロナデ	淡黄褐色		竈内 No.37	
217	241号住	1	土師器坏A	— 5.6 —	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り内面暗文	橙色		No.4	
217	〃	2	須恵器甕	— (18.0) —	外面叩き	暗灰色	やや粗	No.3	
217	〃	3	土師器甕B	(16.2) — —	内外面ヘラナデ	暗赤褐色	粗、白色粒子 雲母多量	No.1	
218	242号住	1	土師器坏C	9.6 — 4.1	底部手持ヘラ削り、内外面ナデ	明黄褐色		No.3	体部外面にシワ
218	〃	2	土師器坏B	(14.0) 9.5 3.7	底部静止糸切後、手持ヘラ削り、内面ミガキ	黄橙色	白・赤色粒子	No.11・12	底部外面線刻 23・226号住
218	〃	3	土師器甕CV	23.2 7.0 33.0	外面カキメ、かすかな叩き目、内面ナデ、底部ナデ	褐色	やや粗 白・赤色粒子	竈内 No.7	
218	〃	4	〃	25.4 — —	外面カキメ、内面ナデ	明赤褐色	白色粒子、雲母	No.14	
218	〃	5	土師器小型甕B	(16.0) — —	内外面ナデ	〃	やや粗、白色粒子多量	竈内	
218	〃	6	〃	— (9.0) —	底部・内外面ナデ	暗赤褐色	粗、白色粒子、雲母	竈内 No.7	表面剥離
218	〃	7	〃	— (10.0) —	内外面ナデ	赤褐色		竈内	
218	〃	8	土師器甕A	(32.6) — —	外面ハケメ、内面ナデ	明褐色	やや粗 白色粒子、雲母	竈内、No.9・12・13・15・17・19・23	
218	243号住	1	土師器坏A	11.6 4.2 4.4	体・底部手持ヘラ削り	褐色		No.26	
218	〃	2	〃	(11.8) (4.0) 4.5	〃	橙色		No.12	
218	〃	3	〃	(11.6) (4.6) 3.7	〃	〃		No.7	
218	〃	4	〃	12.2 4.9 4.5	〃	黄褐色		No.10	
218	〃	5	〃	(12.0) 4.8 4.1	〃	白褐色		No.27・31	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
218	243号住	6	土師器坏A	(12.7) (5.6) 4.5	体・底部手持ヘラ削り	褐色		No.57	
218	〃	7	〃	(13.2) (4.8) 5.4	〃	淡褐色			
218	〃	8	〃	(14.0) 4.6 4.6	〃	橙色		No.43	
218	〃	9	黒色土器鉢	(23.2) — —	内面黒色	褐色	やや粗	No.14	内外面摩耗激しく技法は定かではない
219	〃	10	甲斐型黒色土器坏	— (6.4) —	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文黒色	赤褐色		No.39	
219	〃	11	〃	(16.6) — —	内面ミガキ後、暗文、黒色	褐色		No.34	表面剥離
219	〃	12	黒色土器鉢	— (8.0) —	体・底部回転ヘラ削り、内面ミガキ	橙色		No.58	外面剥離
219	〃	13	灰釉陶器皿	14.9 6.6 2.9	底部回転ヘラ削り、付高台	灰色		No.30	
219	〃	14	土師器？	— — —		褐色			体部外面墨書
219	〃	15	須恵器甕	(21.4) — —	ロクロナデ	暗赤褐色		No.42	
219	〃	16	〃	25.0 — —	〃	オリーブ黒～灰色		No.16	
219	〃	17	土師器甕A	(29.8) (9.0) (34.2)	外面上半ハケメ、下半ナデ、内面ナデ	黄褐色	雲母	No.15・35・37・38・47・50	
219	〃	18	〃	(28.0) — —	内外面ハケメ	〃	雲母	No.33・55・56	
219	〃	19	須恵器甕	— — —	外面叩き	灰褐色		No.13	転用硯、周縁一部磨り
219	244号住	1	土師器坏A	(10.9) (7.0) 4.4	底部糸切後、ナデ、体部ミガキ、ナデ、内面暗文	褐色		No.32・33	
219	〃	2	〃	— (9.8) —	底部回転ヘラ削り、ミガキ、内面みこみ部ミガキ	橙色		竈内	体部外面墨書 底部外面線刻
219	〃	3	〃	— (8.0) —	体・底部手持ヘラ削り、内面みこみ部暗文	黄褐色		No.45	
219	〃	4	須恵器坏	(13.9) (8.0) 4.0	底部回転糸切	灰白色		No.34	
219	〃	5	〃	— 7.4 —	〃	〃		No.30	
219	〃	6	須恵器高台坏?	— (10.0) —	底部糸切後、回転ヘラ削り、付高台	灰色		No.18	
219	〃	7	須恵器鉢?	(8.6) — —	ロクロナデ	暗灰色～灰褐色		No.49	
219	〃	8	須恵器蓋A	(13.4) — —	外面回転ヘラ削り	暗灰色		No.56	
219	〃	9	須恵器壷?	— (12.6) —	付高台	灰色		No.43	
220	〃	10	須恵器甕	(37.6) — —	ロクロナデ	暗紫灰色		No.7	
220	〃	11	土師器甕CⅡ	(25.0) — —	ロクロナデ、かすかな叩き	褐色	やや粗 白色粒子	No.19～24・26	
220	〃	12	〃	— — —	〃	黄橙色	やや粗 白色粒子、小礫	竈内、No.4・6・13・50	
220	245号住	1	甲斐型黒色土器坏	(12.0) (5.8) 4.6	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	橙色	やや粗 白色粒子	No.3	
220	〃	2	〃	(14.6) — —	体部手持ヘラ削り、内面黒色	にぶい黄橙色	赤色粒子	No.1・2	
220	〃	3	土師器高坏	— — —	脚部はヘラ削りにより面取り	にぶい橙色	白色粒子	No.4	脚部片
220	246号住	1	土師器坏A	12.5 4.2 4.2	体・底部手持ヘラ削り	明赤褐色	赤色粒子	No.1・2	体部外面墨書
220	〃	2	土師器甕A	(27.2) — —	内外面ハケメ	暗赤褐色	やや粗、焼成不良 白色粒子、雲母		
220	247号住	1	土師器坏A	13.1 (5.6) 4.0	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.3	
220	〃	2	〃	— — —	底部回転糸切	〃		No.7	体部外面墨書
220	〃	3	土師器皿	7.0 — 2.1	体部手持ヘラ削り	〃			
220	〃	4	灰釉陶器椀	7.4 3.4 4.7	底部回転糸切、付高台、内外面施釉（つけがけ）	灰色		No.1	
220	〃	5	灰釉陶器長頸壷	7.0 — —	ロクロナデ、施釉	〃			
220	〃	6	土師器甕A	16.0 — 8.0	内外面ハケメ	暗赤褐色		No.4	
220	〃	7	土師器羽釜A	26.4 — —	内外面ハケメ	橙色	雲母、小礫多量	No.5	
221	248号住	1	土師器坏A	(9.8) (7.0) 4.4	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り、内面暗文	白褐色		No.40・41	
221	〃	2	〃	(10.8) 6.2 4.4	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面みこみ部暗文	褐色		No.1～3	
221	〃	3	土師器高台坏	— (7.6) —	底部糸切後、回転ヘラ削り、削り出し高台、内面みこみ部暗文	明褐色		No.25	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
221	248号住	4	須恵器坏	(11.4) 6.8 4.3	底部回転糸切	緑灰色		No.17	
221	〃	5	〃	(12.6) (6.8) 3.9	底部回転糸切、体部一部ナデ	明緑灰色	白色粒子	No.7・12・13	
221	〃	6	須恵器高台坏A	15.3 10.0 7.0	付高台	緑灰色	〃	No.33・35・36・38	
221	〃	7	須恵器高台坏?	— 8.2 —	底部糸切後、回転ヘラ削り、付高台	暗緑灰色		No.51	
221	〃	8	須恵器甕	— — —	外面叩き			No.32	
221	〃	9	〃	— — —	〃			No.54・55・57・62	
221	〃	10	〃	— — —	〃			No.52・53	
221	〃	11	土師器小型甕C	— 7.2 —	〃	暗白褐色	やや粗 白色粒子多量	No.6・9・10	表面荒れ
221	〃	12	土師器甕C?	— 8.6 —	底部回転糸切	褐色	粗 白色粒子多量	No.23	
221	〃	13	土師器甕CⅠ	(24.0) (8.0) 34.0	ロクロナデ	明赤褐色	やや粗 白色粒子	No.15・16・20・21・34,43～48	
221	〃	14	土師器甕C?	— 7.6 —	底部回転糸切、ロクロナデ	明褐色	やや粗 小礫	No.22	
221	〃	15	土師器甕A	(22.8) — —	内外面ハケメ	茶褐色	やや粗 雲母	竈内 No.26・63	
221	〃	16	土師器甕CⅡ	— — —	ロクロナデ、叩き	内-白褐色 外-明赤褐色	やや粗 白色粒子多量	竈内 No.59・60	
221	249号住	1	土師器小型甕A	(15.0) — —	外面ハケメ、内面ナデ	茶褐色	やや粗、白色粒子 雲母		222号住No.3
221	〃	2	土師器甕A	(34.0) — —	内外面ハケメ	〃	やや粗 白色粒子		222号住No.2
222	250号住	1	土師器坏A	11.0 5.4 3.9	底部糸切、体部手持ヘラ削り	橙色			
222	〃	2	〃	12.0 5.2 4.2	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色			
222	〃	3	〃	11.2 (4.4) 3.9	〃	褐灰色～にぶい橙色	赤色粒子		
222	〃	4	〃	12.0 (4.6) (4.3)	〃	浅黄橙色			
222	〃	5	〃	16.5 6.0 5.1	〃	橙色	赤色粒子	No.11	
222	〃	6	土師器皿	13.2 5.4 2.4	体・底部回転ヘラ削り	〃	〃		
222	〃	7	〃	15.0 — —		〃			
222	〃	8	黒色土器坏	13.8 5.6 4.6	底部回転糸切、内面黒色	にぶい黄橙色			
222	〃	9	土師器甕B	24.0 — —	外面ナデ、内面ハケメ	橙色～褐灰色		No.2	
222	251号住	1	土師器坏A	12.0 4.8 4.0	体・底部手持ヘラ削り	にぶい赤褐色	やや粗 白・赤色粒子	No.23	
222	〃	2	土師器鉢?	(20.0) — —	〃	橙色	やや粗	No.15	黒色土器鉢か?
222	〃	3	〃	(21.0) 8.1 9.0	底部回転糸切	にぶい橙色	〃	No.24	底部荒れ、黒色土器鉢か?
222	〃	4	黒色土器坏	12.6 5.2 4.1	底部糸切、内面ミガキ後黒色	明褐灰色	〃	No.16	
222	〃	5	甲斐型黒色土器高台坏	(16.0) (8.6) (5.4)	体・底部回転ヘラ削り、削り出し高台、内面ミガキ状暗文	にぶい橙色	やや粗 白・赤色粒子	No.6	
222	〃	6	黒色土器鉢	— (11.4) —	底部回転糸切、内面黒色	〃	やや粗		
222	〃	7	灰釉陶器長頸壷?	— — —	肩部施釉	灰色	〃		
222	〃	8	土師器甕A	(30.0) — —	内外面ハケメ		粗 白色粒子、雲母	No.14	
222	〃	9	〃	(30.0) — —	〃	明赤褐色	粗、白色粒子、雲母		
222	252号住	1	土師器坏B	(14.9) (7.5) 5.0	体部内外面暗文、底部ナデ	橙色			
222	〃	2	須恵器甕	— — —	外面叩き	灰色	黒色粒子	No.1	
223	253号住	1	土師器坏A	(13.3) 5.4 4.6	体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子	No.3	
223	〃	2	〃	13.8 5.6 4.8	〃	〃	〃	No.2・14・18	
223	〃	3	〃	(14.3) (5.0) 4.9	〃	〃	赤色粒子	No.4・5	
223	〃	4	土師器皿	(12.3) (3.6) 2.2	〃	〃	赤色粒子	竈内 No.4	
223	〃	5	甲斐型黒色土器坏	14.3 5.3 4.4	体・底部手持ヘラ削り、内面束状の放射状暗文、黒色	〃	白・赤色粒子	竈内	体部外面墨書
223	254号住	1	土師器皿	(14.6) (6.6) 2.8	体・底部回転ヘラ削り	〃			

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
223	254号住	2	土師器 皿	15.4 (6.2) 3.2	体・底部回転ヘラ削り、内面放射状暗文	橙色	赤色粒子	No.2	
223	255号住	1	土師器 皿	(11.7) 6.3 2.8	底部回転ヘラ削り	にぶい橙色	白色粒子	No.1	
223	〃	2	土師器 小型甕A	(11.8) — —	外面ハケメ、内面ナデ	〃	雲母	竈内	
223	〃	3	土師器 甕A	(27.4) — —	内外面ハケメ	明赤褐色	〃	No.2	
223	〃	4	土師器 竈形土器	(23.5) — —	内外面ハケメ	にぶい橙色	白色粒子	竈内 No.4	
223	256号住	1	土師器 坏A	— (5.0) —	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	褐色		No.3	
223	〃	2	甲斐型黒色土器 坏	(13.6) (5.0) 5.5	体・底部ヘラ削り、内面黒色	〃		No.2	体部外面線刻
223	〃	3	土師器 甕A	— (10.8) —	内外面ハケメ	暗褐色	やや粗、雲母少量	No.4・5・7・8・11	
223	257号住	1	須恵器 蓋A	(11.4) — (3.0)	外面回転ヘラ削り	赤褐色		No.1	
224	258号住	1	須恵器 高台坏A?	(14.2) — —		暗灰色		No.10	
224	〃	2	〃	— 8.6 —	底部糸切後、付高台	〃		No.9	
224	〃	3	土師器 円筒土器?	— — —	ロクロナデ	橙色	粗、白色粒子多量	No.8	
224	259号住	1	土師器 坏A	(12.0) 5.0 3.3	体・底部手持ヘラ削り	褐色		No.2	
224	〃	2	〃	(11.8) (5.0) 3.5	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	やや粗、白色粒子	No.11・12	
224	〃	3	〃	13.4 4.8 4.4	〃	〃	やや粗、小礫	No.1	
224	〃	4	〃	13.4 4.5 4.5	体・底部手持ヘラ削り	〃	やや粗、砂粒	No.8・13	
224	〃	5	〃	14.0 4.7 5.0	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃		No.3・12	
224	〃	6	土師器 甕A	(28.0) — —	内外面荒いハケメ	暗褐色	やや粗、雲母	No.15	
224	〃	7	土師器 竈形土器	(33.6) (34.8) 25.6	内外面ハケメ、内面指頭痕	赤褐色	粗、白・黒色粒子 雲母	竈内、No.7・8・ 9・10・14	
224	260号住	1	土師器 坏A	12.4 8.0 5.0	底部ヘラ削り後ナデ、体部手持ヘラ削り、内面みこみ部暗文	明褐色		No.4	底部外面線刻
224	〃	2	甲斐型黒色土器 高台坏	— (8.0) —	底部回転ヘラ削り、削り出し高台	淡褐色			底部外面線刻
224	〃	3	須恵器 坏	(10.8) (7.0) 3.8	底部回転糸切	灰黄色			
224	〃	4	〃	12.8 6.0 4.1	〃				
224	〃	5	〃	13.4 7.0 3.9	底部回転糸切、外周回転ヘラ削り	灰黄褐色		No.3	
224	〃	6	〃	13.6 7.7 4.0	底部回転糸切	灰白色		No.1	
224	〃	7	〃	(13.8) 7.8 4.1	〃	灰色		No.2	
224	〃	8	須恵器 高坏	— — —	ロクロナデ	灰白色	やや粗 白・黒色粒子	No.6	脚部片
224	〃	9	土師器 小型甕C	(13.2) — —	〃	褐色	粗 白色粒子、小礫	No.9・10	
225	〃	10	土師器 甕CⅠ	— — —	〃	黄褐色	粗、白色粒子 小礫多量	No.8	
225	〃	11	土師器 甕A	— (9.0) —	内外面ハケメ、底部周辺ヘラ削り	淡橙色	やや粗、白色粒子	No.11	
225	261号住	1	土師器 坏A	10.0 5.0 3.8	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色		No.31	内面にスス、灯明具か
225	〃	2	〃	10.6 4.6 4.3	〃	〃		No.29	
225	〃	3	〃	11.4 5.4 3.7	〃	〃		No.37	
225	〃	4	〃	(11.6) (6.0) 3.3	体・底部手持ヘラ削り	灰白色		No.42	
225	〃	5	土師器 高台坏	— 7.8 —	底部削り出し高台	にぶい橙色		No.28	
225	〃	6	〃	— (8.0) —	〃	橙色	赤色粒子	No.38	
225	〃	7	土師器 皿	— (7.0) —	体・底部回転ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.32	
225	〃	8	須恵器 坏	(10.8) (6.0) 4.7	底部糸切	灰色			
225	〃	9	土師器 甕A	(24.0) — —	内外面ハケメ	赤褐色	粗 黒色粒子、雲母	No.6・8	
225	〃	10	〃	(23.0) — —	〃	褐色	粗 白色粒子、雲母	No.48・50	
225	〃	11	〃	(25.0) — —	〃	暗赤褐色	粗	No.3	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
225	261号住	12	土師器甕A	(30.0) —	内外面ハケメ	明赤褐色	粗 白色粒子、雲母	No.37	
225	〃	13	〃	(3.8)	体・底部ハケメ、底部木葉痕	褐色	〃	No.33	
225	〃	14	〃	9.0 —	〃	暗赤褐色	〃	No.18	
225	〃	15	土師器甕C？	— —	ロクロナデ	にぶい橙色	粗、白・赤色粒子	No.10	
225	〃	16	灰釉陶器長頸壷	— —	外面施釉	灰色		No.126	
225	〃	17	土師器円筒土器	— —	外面ナデ	橙色	粗、白色粒子	No.2・20	
226	263号住	1	土師器坏A	17.4 —	内外面暗文	明黄褐色			
226	〃	2	土師器甕CⅣ	— —	ロクロナデ、一部ハケメ	灰オリーブ色			
226	〃	3	土師器羽釜A	14.8 —	内外面ハケメ	にぶい褐色	白色粒子、雲母		
226	264号住	1	土師器坏A	12.3 4.0 3.7	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤・白色粒子	No.3	
226	〃	2	〃	12.4 3.8 4.1	体・底部手持ヘラ削り	内-にぶい褐色 外-橙色		No.27	
226	〃	3	〃	12.8 3.6 3.6	底部糸切、体部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.28	
226	〃	4	〃	12.8 4.2 3.9	〃	にぶい橙色		No.10	灯明具
226	〃	5	〃	14.4 4.4 4.5	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.2	みこみ部線刻
226	〃	6	土師器皿	12.6 3.4 2.7	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	明黄褐色		No.8・21・26	
226	〃	7	〃	12.7 4.2 2.4	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.14・15	
226	〃	8	〃	13.4 4.2 2.7	〃	明黄褐色	〃	No.11・12	
226	〃	9	〃	12.4 —	体部手持ヘラ削り	橙色	〃	No.1	
226	〃	10	〃	13.0 —		内-暗褐色 外-橙色			
226	〃	11	土師器甕C？	21.0 —	内外面ナデ	にぶい黄橙色	白色粒子	No.24	
226	〃	12	土師器甕A	10.0 —	外面ハケメ、底部木葉痕、内面指頭痕	褐色	〃	No.25	
226	〃	13	須恵器甕	16.8 —	外面叩き	内-暗灰赤色 外-灰赤色		No.30	
226	265号住	1	土師器坏A	(13.2) —	内面みこみ部暗文	橙色	赤色粒子	No.17・18	
226	〃	2	須恵器坏	(8.1) —	底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	白色粒子	No.12	
226	〃	3	須恵器高坏	— —		褐灰色	〃	No.5	脚部片
226	〃	4	土師器円筒土器	— —	ロクロナデ	橙色	やや粗 白色粒子	No.1～3	
226	266号住	1	土師器坏A	(12.0) —	体部手持ヘラ削り	にぶい橙色		No.36	
226	〃	2	〃	(11.8) —	〃	〃		No.33	
226	〃	3	〃	(5.0) —	体・底部手持ヘラ削り	〃		No.24・25	底部外面線刻
226	〃	4	土師器皿	(13.0) (6.6) 2.8	底部回転糸切後削り	〃	白・赤色粒子	No.34	
227	〃	5	黒色土器坏	(14.0) (7.4) 4.2	体・底部回転ヘラ削り、内面黒色	浅黄橙色	白色粒子	No.39	
227	〃	6	〃	(18.0) —	内面黒色	にぶい橙色		No.30	
227	〃	7	灰釉陶器皿	(14.2) (7.0) 3.3	付高台、内面施釉	灰白色		No.37	
227	〃	8	〃	(14.6) (7.0) 2.6	〃	〃		No.4	
227	〃	9	土師器小型甕A	(16.0) —	内外面ハケメ	灰褐色	やや粗 雲母	No.16	
227	〃	10	土師器小型甕D	(15.8) —	外面カキメ、内面ロクロナデ	にぶい橙色		No.15・19	
227	〃	11	須恵器甕	— —	外面叩き	灰色	白色粒子	No.11	転用硯
227	267号住	1	土師器坏A	5.8 —	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	淡褐色		No.5	
227	〃	2	須恵器坏	(10.8) (5.6) 4.0	底部回転糸切	灰黄色			
227	〃	3	〃	(11.8) 6.6 4.8		淡黄褐色		No.4	外面摩耗
227	〃	4	〃	(11.8) — 3.7		暗青灰色		No.12	器形歪む

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
227	267号住	5	須恵器 高台坏A?	(13.8) — —		暗灰色	白色粒子多量		262号住
227	〃	6	〃	(14.8) — —		暗青灰色			
227	〃	7	須恵器 長頸壷	(12.8) — —		灰黄色			
227	〃	8	土師器 甕C?	— (7.0) —	底部回転糸切	黄褐色	やや粗 白・黒色粒子	No.8	外面剥離
227	〃	9	土師器 甕B?	— (8.6) —	底部木葉痕	褐色	粗 白色粒子、小礫	No.13	
227	〃	10	土師器 鉢?	— (12.0) —		〃	粗 小礫		
227	〃	11	須恵器 甕	— — —	外面叩き、内面青海波			No.1・2	
227	268号住	1	須恵器 坏	(13.4) (7.0) 4.5	底部回転糸切	暗灰色		No.2	
227	〃	2	〃	(6.2) — —	〃	灰色		No.15	
227	〃	3	〃	(7.4) — —		淡黄褐色			土師質
227	〃	4	須恵器 蓋A	15.8 — 4.2	外面回転ヘラ削り	暗灰色	やや粗	No.1・6・10	
227	〃	5	須恵器 鉢B	17.6 8.2 14.3	底部回転糸切、ロクロナデ	内-黄橙色 外-淡黄橙色	やや粗、軟質	No.4・7・8・9	外面剥離
227	〃	6	土師器 小型甕C	(8.8) 5.8 9.1	〃	黄橙色	粗、白色粒子 不良	No.5	〃
227	〃	7	〃	10.2 6.8 11.0	〃	〃	粗、白色粒子	No.7	
227	〃	8	土師器 甕CI	(23.8) — —	ロクロナデ	淡橙色	やや粗、白色粒子	竈内、No.2・11・12・19・20	
228	269号住	1	須恵器 蓋A	(14.2) — 2.9		灰色	白色粒子	竈内	
228	〃	2	土師器 甕CI	— — —	ロクロナデ	にぶい橙色	白・赤色粒子	No.7	
228	270号住	1	土師器 坏A	(12.3) 4.0 4.1	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	竈内 No.6	
228	〃	2	〃	11.8 — —	体部手持ヘラ削り	褐色		No.3・7	
228	〃	3	土師器 皿	12.2 4.0 2.3	体・底部手持ヘラ削り	〃		竈内	
228	〃	4	〃	12.4 5.4 2.7	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.1・2	
228	〃	5	土師器 甕A	— 9.2 —	内外面ハケメ、底部木葉痕	暗褐色	やや粗、雲母	竈内 No.20・21	
228	〃	6	土師器 竈形土器	— — —		暗赤褐色	やや粗、雲母多量	No.14	
228	271号住	1	須恵器 高台皿	— (17.0) —	付高台、盤状	灰色、灰褐色		No.2	
228	〃	2	須恵器 蓋A	13.8 — 3.1	外面回転ヘラ削り	青灰色		No.1	完形
228	272号住	1	須恵器 坏	(12.5) 7.0 4.1	底部糸切	灰色		No.2・3	
228	〃	2	〃	— (6.2) —	〃	灰黄褐色		No.7	
228	〃	3	〃	(12.4) — —		浅黄橙色			
228	〃	4	〃	(12.8) — —		灰色	白色粒子		
228	〃	5	〃	(12.8) — —		青灰色		No.4	
228	〃	6	須恵器 甕	— (14.0) —	外面叩き、内面ナデ、底部ナデ	内-黄褐色 外-灰黄色		No.6	
228	273号住	1	土師器 坏A	(12.6) (7.4) 4.3	底部糸切、外周手持ヘラ削り、内面暗文	橙色			
228	〃	2	須恵器 坏	(12.9) (7.0) 4.7		灰黄色			
228	〃	3	土師器 甕C?	— (21.0) —	ロクロナデ	橙色	やや粗、白色粒子	No.9	
229	274号住	1	土師器 坏A	(12.6) 4.4 4.0	体・底部手持ヘラ削り	黄橙色	赤色粒子多量	No.3	
229	〃	2	〃	(13.2) 4.8 3.4	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	異質		320号住
229	〃	3	〃	(16.6) (5.2) 5.3	体・底部手持ヘラ削り	黄橙色		No.11	
229	〃	4	土師器 皿	(13.0) (4.0) 2.2	〃	橙色			
229	〃	5	甲斐型黒色土器 坏	(13.8) (6.0) 5.5	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	〃	異質		
229	〃	6	灰釉陶器 皿	(14.6) 6.6 2.7	付高台、内外面施釉	灰白色		No.9	内面赤色顔料付着
229	〃	7	土師器 小型甕A	(17.4) 8.4 (14.2)	内外面ハケメ、底部木葉痕	赤褐色	やや粗、雲母多量	竈内、No.2・10・13・14	273号住、24号溝

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
229	274号住	8	土師器甕A	(36.0) — —	内外面ハケメ	暗褐色		No.21	
229	〃	9	土師器甕CⅣ	— — —	外面ハケメ、ヘラ削り、内面縦ハケメ	黄橙色	やや粗 白・黒色粒子	No.8	
229	275号住	1	土師器坏A	13.2 5.0 4.0	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	褐色	やや粗	No.5・6・36	
229	〃	2	〃	(12.2) 4.8 4.0	〃	黄褐色		No.48	
229	〃	3	〃	12.4 4.4 4.0	体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.25	
229	〃	4	〃	13.0 (4.2) 3.8	〃	白褐色		No.26・31・35	
229	〃	5	〃	(14.2) 4.4 5.2	〃	橙色	やや粗	No.19・20	
229	〃	6	土師器皿	(13.2) (5.0) 3.0	〃	〃	やや粗、白色粒子	No.27	
229	〃	7	〃	13.2 3.6 2.5	〃	〃		No.24	
229	〃	8	〃	(12.8) (3.4) 2.8	〃	黄褐色		No.11	
229	〃	9	甲斐型黒色土器坏	(14.6) (4.5) 4.8	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	〃		No.29・31・34	
229	〃	10	〃	14.2 (4.8) 4.9	体部手持ヘラ削り、底部糸切、内面黒色	黄橙色	赤色粒子	No.30・32	
229	〃	11	〃	(17.2) (6.6) 4.9	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	橙色		No.28	
229	〃	12	須恵器坏	— 6.2 —	底部糸切	灰色		No.13	みこみ部線刻（ヘラ書か）
229	〃	13	土師器甕A	(31.6) — —	内外面ハケメ	暗褐色	雲母	No.46	
229	〃	14	灰釉陶器皿	— 7.6 —	付高台、内面施釉	白灰白色		No.1	
229	〃	15	須恵器鉢B	(18.2) — —	ロクロナデ	褐灰色		竈内 No.33	
229	276号住	1	土師器坏B	(12.8) (8.0) 3.7	底部ヘラ削り	橙色			
229	〃	2	土師器高台坏	(13.8) (7.9) 4.7	底部糸切後、回転ヘラ削り、付高台	〃			
229	〃	3	須恵器坏	(10.8) 6.0 3.0	底部回転ヘラ削り	灰色			
229	〃	4	〃	(12.8) 7.0 3.7	底部糸切	〃		No.20	311号住
230	〃	5	須恵器高台坏B	(12.3) (8.8) 3.2	底部回転糸切り、付高台	暗灰黄色	やや粗		
230	〃	6	〃	(13.4) (10.0) 3.2	〃	灰白色			
230	〃	7	〃	(13.6) (11.0) 3.1	付高台	灰色			
230	〃	8	須恵器高台坏A	(16.8) 11.2 5.2	底部回転ヘラ削り、付高台	暗青灰色		No.3・17	
230	〃	9	須恵器高台坏?	— (10.0) —	〃	青灰色	白色粒子多量	No.16	
230	〃	10	須恵器蓋A	(13.6) — —	外面回転ヘラ削り	暗赤褐色		No.29	
230	〃	11	須恵器高坏	— — —	ロクロナデ	橙色		No.4	脚部片
230	〃	12	土師器甕C?	(22.0) — —	〃	白褐色			
230	〃	13	土師器小型甕C	(21.0) — —	〃	〃		No.25	
230	〃	14	土師器甕CⅢ	(23.4) (7.4) —	ロクロナデ、外面ヘラ削り、内面指頭痕、底部ヘラ削り	浅黄橙色		No.1・13	
230	〃	15	土師器甕CⅠ	(23.2) (9.0) —	ロクロナデ、底部ヘラ削り	橙色		No.8・22・23	
230	278号住	1	須恵器坏	(10.6) (5.6) 3.9	底部糸切	灰色			
230	〃	2	〃	(10.8) 6.2 3.4	〃	白灰色		No.13・17	焼成やや不良
230	〃	3	〃	(11.0) (6.0) 4.9		青灰色			
230	〃	4	〃	(11.6) 4.8 3.8	底部回転糸切	褐灰色		No.8	
230	〃	5	〃	(11.8) 7.0 3.9	〃	灰褐色			
230	〃	6	〃	— 6.4 —	底部糸切	暗灰色		No.7	
230	〃	7	〃	— (5.8) —	〃	褐色		No.2	
230	〃	8	須恵器蓋A	(15.4) — —	外面回転ヘラ削り	青灰色		No.6	
230	〃	9	〃	(16.6) — —	〃	にぶい赤褐色			

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
231	278号住	10	土師器甕B	(24.0) — —	外面ヘラ削り、内面ナデ	黄橙色	白色粒子、雲母	No.5	
231	〃	11	須恵器甕	(38.0) — —	ロクロナデ	黒色		No.1	
231	279号住	1	土師器坏A	— (7.0) —	底部ヘラ削り	橙色			底部外面線刻
231	〃	2	須恵器坏	— 6.3 —	底部糸切	灰黄色		No.1	焼成不良
231	〃	3	須恵器蓋A	13.6 — 3.4	外面回転ヘラ削り	暗緑灰色	白色粒子多量	No.6	完形
231	〃	4	〃	(14.0) — —	〃	緑灰色		No.7	
231	〃	5	土師器円筒土器	— — —	外面ヘラ削り、叩き	褐色	やや粗 白色粒子、小礫	竈内 No.9・10	甕CIIの可能性もあり
231	280号住	1	須恵器坏	(13.4) (8.0) 4.4	底部糸切	白灰色		No.3	
231	〃	2	須恵器高台坏?	— (8.0) —	底部回転ヘラ削り、付高台	暗緑灰色		No.1	
231	282号住	1	土師器高台坏	— (9.0) —	底部削り出し高台、体部横ミガキ内面みこみ部ミガキ	橙色		No.15	
231	〃	2	土師器皿	(12.3) 3.0 3.1	体・底部手持ヘラ削り	〃		No.1	体部外面墨書
231	〃	3	甲斐型黒色土器坏	(14.8) 5.4 4.9	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	〃		No.2	
231	〃	4	須恵器坏	12.2 6.8 4.6	底部糸切	灰白色		No.5	
231	〃	5	〃	— 7.4 —	〃	〃		No.7	みこみ部焼成後線刻
231	〃	6	土師器甕CII	(20.4) (8.2) (36.0)	ロクロナデ、外面叩き			竈内、No.4・9・10・12	
231	283号住	1	土師器坏A	(15.0) 5.2 4.9	体・底部手持ヘラ削り	褐色		竈内	
231	〃	2	土師器皿	(12.0) 4.0 2.3	〃	橙色			体部外面墨書
231	〃	3	〃	(11.3) — —		〃			〃
231	〃	4	土師器坏A	— — —		〃			〃
231	〃	5	甲斐型黒色土器坏	(12.8) (4.0) (5.1)	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	褐色			
231	〃	6	〃	(13.0) (4.0) 5.2	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文黒色	〃			体部外面墨書
232	284号住	1	土師器坏A	(12.2) 4.2 4.0	体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.1	
232	〃	2	〃	(16.0) (6.0) 4.3	〃	褐色		No.3	
232	〃	3	〃	(14.6) — —	体部手持ヘラ削り	〃		No.4	
232	〃	4	土師器坏B	(16.0) — —	底部手持ヘラ削り	橙色			混入か?
232	〃	5	黒色土器坏	(11.0) (5.0) 4.1	底部糸切、内面黒色	〃			
232	〃	6	甲斐型黒色土器坏	(14.0) 5.0 4.9	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	〃		No.4・5	
232	〃	7	土師器甕A	(30.4) — —	内外面ハケメ	褐色		No.7	
232	285号住	1	土師器皿	(12.0) (3.6) 2.2	体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子		295号住
232	〃	2	〃	(12.8) 4.8 2.7	〃	〃	やや粗、赤色粒子	No.8・9	
232	〃	3	〃	(13.6) (5.0) 2.6	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り	〃	白・赤色粒子		295号住
232	〃	4	土師器甕CIV	(25.0) — —	外面ハケメ後、削り内面縦ハケメ横ハケメ	にぶい黄橙色	やや粗、白・赤色粒子、雲母、小礫		〃
232	〃	5	土師器甕CII	— — —	ロクロナデ、外面叩き	茶褐色	〃		〃
232	〃	6	土師器甕A	32.0 — —	内外面ハケメ	黒褐色	粗 白色粒子、雲母	竈内、No.18・21・24・26	
232	〃	7	〃	(31.6) — —	〃	暗赤褐色	〃	竈内、No.13・14・18・23	299号住
232	〃	8	土師器羽釜A	19.8 8.0 20.3	外面ハケメ、内面ハケメ、ナデ、指頭痕	褐色	粗、白色粒子		
232	〃	9	須恵器甕	— — —	外面叩き	灰色		No.10	転用硯
233	286号住	1	土師器坏A	(12.2) (3.6) 3.8	体・底部手持ヘラ削り	橙色			
233	〃	2	〃	(12.5) 4.4 4.1	〃	褐色			224号住
233	〃	3	〃	12.0 5.0 3.6	〃	白褐色		No.43	
233	〃	4	〃	12.0 3.6 4.1	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.39	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
233	286号住	5	土師器坏A	(14.2) (5.4) 4.7	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	暗赤褐色		No.23	
233	〃	6	〃	(14.2) (5.4) 5.6	〃	黄褐色			
233	〃	7	土師器皿	(12.2) (5.4) 2.5	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色			
233	〃	8	〃	12.2 2.7 2.6	〃	淡橙色		No.21	
233	〃	9	〃	(12.6) 4.0 2.4	体・底部手持ヘラ削り	橙色			
233	〃	10	〃	12.6 4.0 2.3	〃	〃		No.16	
233	〃	11	〃	(12.6) (4.0) 1.9	体・底部回転ヘラ削り、内面みこみ部らせん状暗文	〃			体部外面墨書
233	〃	12	〃	— (4.6) —	体・底部手持ヘラ削り	〃			〃
233	〃	13	〃	— (6.0) —	〃	〃			体部外面から底部にかけて墨書
233	〃	14	甲斐型黒色土器坏	(12.6) 5.4 4.3	体・底部手持ヘラ削り、内面束状暗文みこみ部らせん状暗文、黒色	褐色		No.42	
233	〃	15	〃	(14.7) (5.0) 5.1	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	〃			
233	〃	16	〃	(14.5) 5.0 5.2	〃	にぶい橙色		No.41	
233	〃	17	〃	(16.8) (6.4) 7.0	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文、みこみ部渦巻状暗文、黒色	橙色			
233	〃	18	〃	(17.8) (5.0) 5.9	体・底部手持ヘラ削り、内面みこみ部暗文、黒色	〃			
233	〃	19	〃	— (5.0) —	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	〃		No.46	
233	〃	20	〃	— (6.0) —	底部回転糸切、内面ミガキ、黒色	褐色	白色粒子 堆積岩、小礫	No.4	体部外面焼成後線刻
233	〃	21	須恵器壷?	— (12.0) —	底部スダレ状圧痕、外面叩き、ナデ、内面ナデ	青灰色		No.45	
233	〃	22	須恵器凸帯壷	— — —	肩部に凸帯、外面叩き	〃		No.12	
233	〃	23	土師器小型甕A	(17.8) (7.4) 13.9	内外面ハケメ、底部木葉痕	黒褐色	白色粒子、雲母		
233	〃	24	土師器甕A	(31.0) (8.0) —	〃	赤褐色	雲母	No.4・17	
234	〃	25	〃	(28.8) — —	内外面ハケメ	暗褐色	白色粒子、雲母	No.44	
234	〃	26	〃	(28.0) — —	〃	橙色	雲母少量	No.2・18・19・26・28・36・38	
234	〃	27	〃	(28.6) — —	〃	赤褐色	白色粒子、雲母	No.25・29・30・32	
234	287号住	1	土師器坏A	12.0 4.6 4.5	体・底部手持ヘラ削り	浅黄橙色	異質	No.3	灯明具
234	〃	2	〃	(11.8) (4.6) 4.5	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子		
234	〃	3	土師器皿	(12.4) (3.8) 2.6	体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.12	
234	〃	4	〃	13.0 4.2 2.9	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.6	
234	〃	5	灰釉陶器皿	— 6.7 —	付高台	内-灰オリーブ色 外-灰白色		No.12	
234	〃	6	土師器甕C?	— — —	ロクロナデ	橙色		No.3・5	
234	288号住	1	土師器坏A	(11.0) 5.5 3.9	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	明赤褐色	赤色粒子		
234	〃	2	〃	(11.0) 5.6 4.0	〃	にぶい橙色		No.30	底部外面焼成後線刻
234	〃	3	〃	11.2 6.2 4.2	底部回転糸切後、底部のみ手持ヘラ削り、内面暗文	〃	白・赤色粒子 異質	No.49・51・53	
234	〃	4	〃	(11.5) 5.8 4.5	底部回転糸切後、体・底部回転ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.55	底部外面墨書「主」
234	〃	5	〃	(12.0) 5.5 4.2	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り内面暗文	にぶい橙色	〃	No.47	
234	〃	6	〃	— 6.4 —	体・底部手持ヘラ削り、内面みこみ部暗文	橙色	〃	No.3	底部外面墨書
235	〃	7	土師器坏B	(13.0) (8.4) 3.2	底部回転糸切後、手持ヘラ削り	にぶい橙色		No.57	
235	〃	8	土師器坏A	— (8.0) —	体・底部手持ヘラ削り、内面みこみ部暗文	赤褐色			底部外面線刻・墨書
235	〃	9	土師器高台坏	— (8.5) —	体・底部回転ヘラ削り、削り出し高台、内面暗文		赤色粒子	No.17	底部外面線刻
235	〃	10	土師器皿	15.2 — —		にぶい橙色			
235	〃	11	〃	(16.0) 7.2 3.2	底部回転糸切後、体・底部回転ヘラ削り、内面放射状暗文	橙色	赤色粒子	No.27・28	
235	〃	12	〃	(17.0) — —	体部回転ヘラ削り、内面暗文	にぶい橙色		No.52	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
235	288号住	13	土師器 皿	— (7.6) —	体・底部回転ヘラ削り、内面みこみ部渦巻状暗文	内-橙色 外-にぶい橙色	赤色粒子	No.21	底部外面墨書「長」
235	〃	14	須恵器 坏	(11.6) (6.6) 3.4	底部回転糸切	灰色	白色粒子		
235	〃	15	〃	11.8 5.8 3.9	〃	褐灰 にぶい橙色	白・赤色粒子	No.60	
235	〃	16	〃	(12.6) 6.4 4.2	〃	灰色	白色粒子	No.38	
235	〃	17	〃	(12.0) 5.4 4.3	底部回転糸切後、手持ヘラ削り	〃	〃	No.12	
235	〃	18	〃	— 7.0 —	〃	〃	〃	No.36	底部外面ヘラ書
235	〃	19	〃	— (6.9) —	底部回転糸切	〃	〃	No.44	
235	〃	20	須恵器 高台坏?	— (8.8) —	付高台	内-褐灰色 外-灰色	〃	No.59	
235	〃	21	〃	— (8.0) —	底部回転糸切後、回転ヘラ削り付高台	灰色	〃	No.45	
235	〃	22	須恵器 甕	(22.0) — —	外面叩き	橙色	〃	No.31・41・50	
235	〃	23	〃	— — —	〃	灰色	〃		転用硯
235	〃	24	土師器 円筒土器	(10.8) — —	輪積み、ロクロナデ	明赤褐色	粗、白色粒子、小礫多量	竈内 No.25・29	
235	〃	25	土師器 甕CI	(28.0) — —	ロクロナデ	内-浅黄橙色 外-灰黄褐色	やや粗、白・赤色粒子、小礫	No.1・32	
235	〃	26	土師器 甕CV	(22.0) — —	〃	にぶい橙色	粗 白色粒子、小礫	No.4	
235	〃	27	土師器 甕D	(25.0) — —	外面ヘラ削り、内面ナデ	〃	やや粗 白色粒子、雲母	No.26・33	
236	290号住	1	土師器 坏A	(11.4) 3.2 4.7	体・底部手持ヘラ削り	浅黄橙色	白色粒子、異質	No.4・5・7	体部外面墨書
236	〃	2	〃	(14.0) (6.0) (5.6)	底部糸切後手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子		
236	〃	3	〃	(14.0) — —	体部手持ヘラ削り	〃	白色粒子、異質		
236	〃	4	〃	(14.0) — —	〃	にぶい橙色	やや粗		体部外面墨書
236	〃	5	土師器 皿	12.8 5.2 2.3	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り	橙色		竈内	
236	〃	6	〃	(12.2) (5.0) 2.3	体・底部手持ヘラ削り	淡橙色			
236	〃	7	〃	— (6.0) —	〃	にぶい橙色	赤色粒子		底部外面墨書「丈」
236	〃	8	黒色土器 坏	(12.2) 5.6 4.8	底部回転糸切、内面ミガキ、黒色	淡赤橙色		No.9	体部外面墨書「子」、歪み大
236	〃	9	甲斐型黒色土器 坏	(14.0) (5.4) (4.6)	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	橙色	赤色粒子	No.2	
236	〃	10	〃	— 6.0 —	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色			
236	〃	11	土師器 小型甕A	16.0 — —	内外面ハケメ	〃	粗 白色粒子、雲母	No.3	
236	〃	12	土師器 甕A	(36.0) — —	外面ハケメ、内面ナデ	〃	〃	No.6	
236	291号住	1	土師器 坏A	(11.0) (3.6) 3.9	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.29	
236	〃	2	〃	(12.0) (5.1) 4.1	〃	にぶい橙色	白・赤色粒子	No.13・16	
236	〃	3	〃	(12.0) (3.8) 3.9	〃	にぶい黄橙色	赤色粒子		灯明具
236	〃	4	〃	(12.0) 3.5 3.8	〃	にぶい橙色	〃	No.18・19	
236	〃	5	〃	(12.0) (5.4) 3.5	〃	〃	白色粒子	No.3	
236	〃	6	〃	(12.4) 4.4 4.1	〃	橙色	赤色粒子	No.9	
236	〃	7	〃	(12.8) 4.4 4.1	〃	明赤褐色	白・赤色粒子	No.17	灯明具
236	〃	8	〃	(13.0) (4.5) 4.3	〃	〃	〃		
236	〃	9	〃	(14.8) 4.5 4.6	〃	にぶい橙色	赤色粒子多量	No.14・22・23・24	
236	〃	10	土師器 坏B	(14.0) (9.0) 3.2	〃	〃			底部外面線刻 混入品か
236	〃	11	土師器 皿	(13.2) 5.9 2.6	〃	橙色	白・赤色粒子	No.2・26	
236	〃	12	〃	(13.2) 5.7 1.9	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.8	体部外面墨書「介」
236	〃	13	〃	12.8 4.6 2.5	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	〃	No.42	完形
236	〃	14	〃	(13.2) (5.2) 2.9	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	〃	No.27	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
236	291号住	15	黒色土器坏	(13.3) 5.6 4.3	底部回転糸切、内面ナデ、黒色		白色粒子	No.25	
236	〃	16	灰釉陶器壷?	— (9.2) —	付高台	灰色		No.30	
236	〃	17	土師器甕A	(36.0) — —	内外面ハケメ	赤褐色	白色粒子多量 雲母	No.4	
236	〃	18	須恵器甕	(34.0) — —	ロクロナデ	灰色	白色粒子	No.12	
237	292号住	1	土師器坏A	(11.6) (4.0) 4.4	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	白・赤色粒子 小礫	No.30・31・43	
237	〃	2	〃	(11.8) 5.0 4.4	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	黄橙色	〃	No.1	
237	〃	3	〃	(12.0) 4.0 4.3	〃	橙色	白・赤色粒子	No.8	
237	〃	4	〃	(11.6) (4.0) 4.4	体・底部手持ヘラ削り、内面束状暗文	〃	〃	No.7	体部外面墨書「毛」
237	〃	5	〃	(13.6) 5.0 4.4	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	〃	No.2	
237	〃	6	〃	(13.1) 4.9 5.0	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.30	灯明具
237	〃	7	土師器高台坏	— 7.0 —	体・底部回転ヘラ削り、削り出し高台	内-黄橙色 外-橙色	〃	No.48	
237	〃	8	土師器皿	(13.0) 5.8 2.6	体・底部回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	橙色	〃	No.40・46・47	
237	〃	9	〃	(13.0) (5.0) (2.8)	底部回転糸切	〃	やや粗、異質、白・赤色粒子、小礫	No.34	体部外面墨書「万」
237	〃	10	黒色土器坏	(12.0) 5.0 4.0	底部回転糸切、内面ミガキ、黒色	灰黄色	白色粒子、雲母 小礫	No.37	
237	〃	11	〃	(13.0) 5.7 4.2	〃	黄橙色	白・赤色粒子 雲母、小礫	No.38	
237	〃	12	灰釉陶器椀	(13.6) 7.5 4.6	体・底部回転ヘラ削り、付高台、内外面施釉	灰白～緑		No.32	293号住
237	〃	13	須恵器甕	— — —	外面叩き	内-灰白色 外-灰色	白色粒子	No.23	転用硯
237	〃	14	〃	— — —	〃	灰色	白色粒子、小礫	No.13	〃
237	293号住	1	土師器坏A	(10.0) (5.4) 4.1	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	白色粒子	No.78	
237	〃	2	〃	(10.0) 5.4 4.0	〃	黄橙色	白・赤色粒子 小礫	No.92	
237	〃	3	〃	(10.4) 5.2 4.5	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	やや粗、異質、白・赤色粒子、小礫	No.116・117	
237	〃	4	〃	(10.4) 5.5 3.7	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	白・赤色粒子	No.79	
237	〃	5	〃	(10.4) (5.0) 4.8	体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子 小礫	No.140・147・ 148	
237	〃	6	〃	(10.3) 4.8 3.9	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	〃	No.146	
237	〃	7	〃	11.2 3.9 3.8	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	黄橙色	白・赤色粒子	No.76	完形
237	〃	8	〃	(11.1) (4.4) 3.7	体・底部手持ヘラ削り	〃	白色粒子		
237	〃	9	〃	(11.0) (5.0) 4.2	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	白・赤色粒子	No.73	
237	〃	10	〃	(11.0) (5.2) 3.6	〃	〃	〃	No.6	
237	〃	11	〃	(11.0) 6.0 4.2	〃	〃	白・赤色粒子 小礫	No.7	
237	〃	12	〃	10.8 5.1 4.2	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	白色粒子	No.134	完形
237	〃	13	〃	(11.0) 5.0 3.8	〃	〃	白・赤色粒子	No.55・200	
237	〃	14	〃	(11.2) 6.0 4.3	〃	〃	白・赤色粒子 雲母	No.85	
237	〃	15	〃	11.2 4.2 4.2	〃	黄橙色	白・赤色粒子 雲母、小礫	No.8	体部外面墨書「木」
237	〃	16	〃	(11.0) 5.5 4.5	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	白・赤色粒子	No.132・172	底部外面焼成後線刻
237	〃	17	〃	(11.4) 5.3 4.0	〃	〃	〃	No.80	
237	〃	18	〃	(11.4) 4.8 4.2	〃	にぶい橙色	やや粗、 白・赤色粒子	No.99・137・ 173	
237	〃	19	〃	11.4 4.6 3.9	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子 小礫	No.81	完形、灯明具
237	〃	20	〃	(11.6) 6.3 4.2	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	白・赤色粒子	No.10	
237	〃	21	〃	(11.8) (4.0) 4.6	体・底部手持ヘラ削り	〃	白・赤色粒子 小礫	No.38・39	
237	〃	22	〃	(11.6) 5.5 3.8	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	白色粒子	No.9	
237	〃	23	〃	(11.8) 4.0 4.9	体・底部手持ヘラ削り	黄橙色	白・赤色粒子	No.15・27	421号住

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
238	293号住	24	土師器 坏A	(11.8) 4.4 4.7	体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子	No.52・54	
238	〃	25	〃	(12.0) 4.2 4.5	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	やや粗、白・赤色粒子、小礫	No.60	316号住
238	〃	26	〃	(12.0) (5.3) 3.4	体・底部手持ヘラ削り	黄橙色	白色粒子	No.3	
238	〃	27	〃	(12.0) (4.2) 4.8	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	にぶい橙色～黒褐色	白・赤色粒子小礫	No.198	316号住
238	〃	28	〃	(12.6) (5.0) 4.5	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子	No.75	
238	〃	29	土師器 高台坏	— (8.0) —	体・底部回転ヘラ削り、削り出し高台、内面暗文	黄橙色	〃	No.74	
238	〃	30	土師器 皿	(12.6) 5.0 2.5	体・底部回転ヘラ削り	にぶい橙色	〃	No.51・56	
238	〃	31	土師器 皿	(13.0) (5.2) 2.6	体・底部回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	〃	〃	No.37	底部外面墨書
238	〃	32	〃	(13.8) 6.6 2.4	体・底部回転ヘラ削り	橙色	〃	No.98・174・175	
238	〃	33	〃	(13.6) 6.4 2.7	底部回転糸切後、体・底部回転ヘラ削り	〃	やや粗、白・赤色粒子、小礫	No.139	
238	〃	34	〃	(14.0) 6.0 2.5	体・底部回転ヘラ削り	〃	やや粗、異質、白・赤色粒子、小礫	No.110・112・113	
238	〃	35	〃	(12.6) 6.7 2.5	〃	〃	白・赤色粒子	No.169・187	灯明具
238	〃	36	土師器 坏A	(12.0) — —	体部手持ヘラ削り	〃	白色粒子、雲母	No.89	体部外面墨書
238	〃	37	〃	— (4.6) —	体・底部手持ヘラ削り	〃	白色粒子	No.5	底部外面墨書「木」
238	〃	38	〃	— (6.0) —	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	白・赤色粒子雲母	No.155	底部外面墨書
238	〃	39	土師器 蓋A	(16.0) — (4.0)	外面回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	〃	白・赤色粒子	No.203	外面墨書「木」
238	〃	40	甲斐型黒色土器 坏	(15.0) (5.5) (6.0)	体・底部手持ヘラ削り、みこみ部らせん状暗文、内面暗文、黒色	にぶい褐色	白・赤色粒子小礫	No.40	413号住
238	〃	41	〃	(15.6) (6.0) 5.3	体・底部回転ヘラ削り、内面暗文	黄橙色	白・赤色粒子	No.36	
238	〃	42	〃	(15.0) (6.0) 5.6	体・底部回転ヘラ削り、内面暗文ミガキ、黒色	橙色	白・赤色粒子雲母	No.41	
238	〃	43	〃	— 5.5 —	体・底部回転ヘラ削り、内面束状暗文みこみ部らせん状暗文、黒色	〃	白・赤色粒子	No.201	
238	〃	44	黒色土器 椀	— 7.0 —	底部回転糸切、付高台、内面黒色	オリーブ灰	白色粒子、雲母	No.68	
238	〃	45	須恵器 坏	11.6 6.0 4.3	底部回転糸切	灰色	白色粒子、小礫	No.88	
238	〃	46	須恵器 高台坏?	— 7.3 —	底部糸切後付高台	〃	やや粗、白色粒子小礫少量	No.142	
238	〃	47	須恵器 壷?	— (7.0) —	底部付高台	〃	白色粒子	No.128	
238	〃	48	須恵器 甕	— (20.0) —	外面叩き、回転ナデ	褐灰色	白色粒子、小礫	No.82	
238	〃	49	土師器 小型甕C	(11.0) 5.0 9.5	底部回転糸切、ロクロナデ	暗褐色	やや粗、白・赤色粒子、雲母、小礫	No.44・48・70・77・171	
238	〃	50	土師器 小型甕A	(13.0) — —	内外面ハケメ	茶褐色	やや粗、白色粒子雲母、小礫	No.87	
238	〃	51	土師器 甕A	(26.0) (9.0) (37.5)	内外面ハケメ、底部木葉痕	〃	やや粗、白色粒子雲母	竈内、No.65・143・149・167・168	
239	〃	52	〃	(26.0) — —	内外面ハケメ	〃	やや粗、白色粒子雲母、小礫	No.66・202	
239	〃	53	土師器 甑	— (18.0) —	内外面ナデ	明褐色	やや粗白色粒子、小礫	No.95	
239	〃	54	土師器 小型壷B	(3.2) 5.5 7.7	ロクロナデ、底部手持ヘラ削り	褐色	白・赤色粒子	No.83	
239	〃	55	須恵器 甕	— — —	外面叩き	褐灰色	白色粒子、小礫	No.77	転用硯
239	294号住	1	土師器 皿	(11.5) (7.1) —	体部回転ヘラ削り	明赤褐色	白・赤色粒子	竈内	
239	〃	2	甲斐型黒色土器 坏	(15.1) — —	体部手持ヘラ削り、内面ミガキ、暗文、黒色	橙色	〃	No.13	
239	295号住	1	須恵器 坏	11.4 (7.0) 3.3	体部手持ヘラ削り	浅黄橙色	〃	No.67	完形、灯明具
239	〃	2	〃	(12.0) (6.2) (4.5)	底部回転糸切	青灰色			
239	〃	3	〃	(12.0) (6.0) 4.5	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り	緑灰色		No.68	
239	〃	4	〃	13.6 8.5 3.7	底部回転ヘラ削り	灰白色	白・赤・黒色粒子多量	No.65	焼成やや不良
239	〃	5	〃	(14.1) (8.0) 3.9	底部手持ヘラ削り	明オリーブ灰色			
239	〃	6	〃	— 7.4 —	底部回転糸切	〃		No.61	
239	〃	7	土師器 甕CⅣ	— — —	内外面縦ハケメ	灰黄色	やや粗、白・赤色粒子、雲母、小礫	No.60	360号住

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
239	296号住	1	土師器坏A	10.6 5.4 4.4	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	赤色粒子	No.16・17・18	
239	〃	2	〃	(11.0) 5.0 4.1	体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.19・20	
239	〃	3	〃	(9.8) — —	体部手持ヘラ削り	にぶい橙色	白色粒子	No.22	
239	〃	4	〃	(13.8) — —		橙色	白・赤色粒子	No.11	
239	〃	5	〃	(5.0) —	体・底部手持ヘラ削り	〃	白色粒子	No.10	
239	〃	6	土師器皿	(14.0) (5.4) 2.6	体・底部回転ヘラ削り、内面放射状暗文	〃	白・赤色粒子	No.9	
239	〃	7	〃	— (6.0) —	〃	〃	白色粒子	No.4	
239	〃	8	土師器蓋A	(15.6) — —		〃	〃	No.5	
239	〃	9	〃	(16.8) — —		〃	〃	No.2	
239	〃	10	須恵器坏	— (6.0) —	底部回転糸切	灰白色	白・黒色粒子	No.15	
239	〃	11	須恵器蓋A	(13.8) — —	外面回転ヘラ削り	灰色	白色粒子	No.24	
239	〃	12	土師器甕A	(23.7) (8.5) 33.0	内外面ハケメ、底部木葉痕	明赤褐色	〃	No.13・16・25・26・29	
240	297号住	1	土師器坏A	(12.6) — —	体部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.2	
240	〃	2	須恵器高台坏A	(16.9) (12.2) 5.7		灰色	白色粒子		
240	298号住	1	土師器皿	(13.9) 4.0 3.0	体・底部手持ヘラ削り	橙色	〃		
240	〃	2	土師器甕A	(33.7) — —	内外面ハケメ	褐色	白色粒子、雲母	No.1	
240	299号住	1	土師器坏A	11.8 4.3 3.4	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子	No.31	体部外面墨書
240	〃	2	〃	(11.5) 5.0 4.0	体部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.15	内面タール状付着物
240	〃	3	〃	(12.0) (4.0) 4.8	体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子 やや軟質	No.9・13・14・15	灯明具
240	〃	4	〃	(13.1) (4.0) 4.2	体部手持ヘラ削り	にぶい赤褐色	白色粒子	No.18	体部下半～底部剥離
240	〃	5	〃	(13.5) — —		橙色	白・赤色粒子	No.12	
240	〃	6	甲斐型黒色土器坏	(14.5) (4.1) 5.5	体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.4	
240	〃	7	土師器甕A	(25.0) — —	外面ハケメ、内面ナデ	〃	白色粒子、雲母	No.16・26・27	
240	〃	8	土師器小型甕B?	— (6.0) —		〃	〃		
240	300号住	1	土師器坏A	(12.0) 6.0 3.7	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	やや粗、白色粒子	No.16	器形歪む
240	〃	2	〃	(15.0) 6.0 4.9	〃	灰白色	粗、白色粒子	No.9	焼成悪く、歪み大きい
240	〃	3	土師器皿	(13.6) (4.4) 2.4	体・底部手持ヘラ削り	明赤褐色	やや粗 白・赤色粒子	No.1	
240	〃	4	須恵器高台坏?	— 9.5 —	底部回転ヘラ削り、付高台	橙色	白色粒子		A21B24
240	〃	5	須恵器蓋A	14.7 — 2.8	外面回転ヘラ削り	灰色		No.8.9	
240	〃	6	灰釉陶器壷?	— (6.6) —	底部付高台、底部下半回転ヘラ削り、施釉	灰白色	白色粒子	No.6	
240	〃	7	土師器小型甕A	(17.4) — —	内外面ハケメ	暗赤褐色	粗、白色粒子、雲母	No.4・5	
240	301号住	1	土師器皿	11.6 5.4 2.9	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	やや粗、白色粒子異質	No.5	
240	〃	2	土師器坏A	14.4 5.6 4.5	体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.15	
240	〃	3	〃	14.2 5.3 4.0	〃	〃	〃	No.11・12・15・18	
240	〃	4	〃	16.2 (8.0) (5.0)	体部手持ヘラ削り	白褐色	〃	No.2	
240	〃	5	土師器皿	12.4 4.6 2.4	体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.20	
240	〃	6	甲斐型黒色土器坏	18.0 — —	体部手持ヘラ削り、内面黒色	白褐色		No.16	
240	〃	7	土師器坏?	— — —					体部外面墨書
240	〃	8	土師器甕A	29.8 — —	内外面ハケメ	褐色	粗、雲母	No.9	
241	302号住	1	土師器坏A	(10.2) 5.0 4.0	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	白・赤色粒子 雲母	No.4	
241	〃	2	〃	(11.0) (4.4) 4.2	〃	〃	〃	竈内	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
241	302号住	3	土師器坏A	(11.0) 5.3 4.2	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	白・赤色粒子	No.55・56・57	
241	〃	4	〃	(11.2) (5.0) 4.1	底部回転糸切後、わずかに手持ヘラ削り	黄橙色	〃	No.36	
241	〃	5	土師器皿	(14.0) (7.0) 2.1	体・底部回転ヘラ削り、内面放射状暗文	橙色		No.53	
241	〃	6	〃	(14.0) (6.0) 2.4	体・底部回転ヘラ削り	〃		No.38・72	
241	〃	7	〃	(12.0) (5.4) 2.6	体・底部手持ヘラ削り	黄橙色	白・赤色粒子	No.77	
241	〃	8	〃	15.4 6.8 2.8	体・底部回転ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子、小礫	No.39・40	
241	〃	9	黒色土器坏	(12.6) 6.0 4.4	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	黄褐色	小礫	No.69・70・71	
241	〃	10	黒色土器高台皿	— 6.5 —	底部糸切後、付高台、内面ミガキ黒色	〃黄褐色	白色粒子、小礫	No.6	
241	〃	11	灰釉陶器壷?	— 10.0 —	底部糸切後、回転ヘラ削り、付高台	オリーブ灰色	白色粒子	No.7・8	
241	〃	12	須恵器蓋A	(18.8) — —	外面回転ヘラ削り	灰白色	白色粒子、小礫		
241	〃	13	土師器高台坏	— 7.2 —	体・底部回転ヘラ削り、削り出し高台	橙色	赤色粒子	No.34	底部外面墨書「主」
241	〃	14	須恵器甕	— — —	外面叩き、内面ナデ	内-灰色 外-暗褐色	白色粒子、小礫	No.46・64	
241	〃	15	土師器甕A	(28.0) — —	内外面ハケメ	茶褐色	やや粗、雲母多量	No.60・67	
241	〃	16	土師器小型甕A	— (7.0) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	内-茶褐色 外-黒褐色	雲母多量	No.3	
241	303号住	1	土師器坏A	(12.0) 4.7 4.7	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	白・赤色粒子		
241	〃	2	〃	(12.0) 4.4 4.2	底部回転糸切、体・底部手持ヘラ削り	黄橙色	〃	No.15	
241	〃	3	〃	(14.0) (5.5) 5.7	体・底部手持ヘラ削り	橙色	〃		体部外面墨書
241	〃	4	土師器皿	(12.8) (5.0) 2.6	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り	〃	やや粗、白・赤色粒子、小礫		
241	〃	5	甲斐型黒色土器坏	(14.0) 4.7 4.7	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	にぶい橙色	白・赤色粒子	No.21・22	
241	〃	6	灰釉陶器壷?	— — —	ロクロナデ、外面施釉	オリーブ灰色	白色粒子	No.13	
241	〃	7	土師器小型甕A	— (7.3) —	外面ハケメ、内面ナデ、底部木葉痕	茶褐色	粗、白色粒子 雲母、小礫	竈内 No.16	
241	〃	8	土師器甕A	(29.0) — —	内外面ハケメ	〃	やや粗、白色粒子 雲母、礫	竈内 No.2・4	
242	〃	9	〃	(26.6) — —	〃	〃	〃	竈内、No.30・32・34・35・36・37・38	337号住
242	〃	10	土師器羽釜A	(27.0) — —	外面ハケメ、内面指頭痕	内-黄褐色～黒褐色 外-にぶい褐色	〃	No.3・8・9・10・11・13・41	
242	304号住	1	土師器坏A	(11.0) 4.6 4.0	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子		231号住 体部外面墨書「万」
242	〃	2	〃	(11.1) (6.0) 4.4	〃	〃	赤色粒子 焼成軟質		231号住
242	〃	3	〃	(12.0) 3.4 5.4	〃	にぶい黄橙色		No.35	
242	〃	4	〃	(12.0) (4.5) 4.0	〃	橙色	やや粗	No.22・24	
242	〃	5	〃	(12.4) (4.5) 4.3	底部糸切、体部かすかな手持ヘラ削り	黄橙色	異質 やや粗、小礫	No.21	
242	〃	6	〃	(13.0) (4.2) 3.7	体・底部手持ヘラ削り	橙色	小礫	No.26	
242	〃	7	土師器皿	(12.4) 4.5 2.6	〃	〃	赤色粒子、小礫多量	No.9	
242	〃	8	〃	(13.0) 4.5 2.8	〃	〃	小礫	No.25	体部外面墨書
242	〃	9	〃	(15.0) (6.6) 2.6	体・底部回転ヘラ削り	にぶい橙色	やや粗		
242	〃	10	土師器坏A	— — —					体部外面墨書
242	〃	11	〃	— — —	内面みこみ部暗文			No.29	底部外面墨書「宅」、線刻
242	〃	12	須恵器坏	(12.0) (6.4) 3.7	底部回転糸切、体部回転ヘラ削り	青灰色	砂粒		
242	〃	13	須恵器長頸壷?	(17.4) — —	ロクロナデ	緑灰色		No.32	
242	〃	14	須恵器壷?	— (17.0) —	外面叩き、内面ナデ、底部周辺ヘラ削り	灰色		No.30・33	
242	〃	15	土師器甕A	(30.0) — —	内外面ハケメ	褐色	やや粗 白色粒子、雲母	No.31	
242	〃	16	〃	— (10.0) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	黄褐色	やや粗	No.15・17・20	
242	305号住	1	土師器坏A	(14.0) (6.0) (5.9)	体・底部手持ヘラ削り	橙色	やや粗、赤色粒子 小礫多量	No.10・13	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
242	305号住	2	土師器甕C?	(8.0)	底部回転糸切	にぶい橙色	白色粒子	No.6	
242	〃	3	灰釉陶器壷?	(11.0)	底部付高台	灰色		No.5	317号住
242	〃	4	土師器甕A	(30.0)	内外面ハケメ	茶褐色	やや粗	竈内、No.1・7・8・9・10・12	
243	306号住	1	須恵器坏	(12.4) 6.5 4.8	底部回転糸切	灰色	やや粗	竈内 No.5・7	
243	〃	2	土師器小型甕C	(15.0) 8.0 13.9	底部静止糸切、周辺ナデ	にぶい橙色	やや粗、小礫多量	No.6・10・11	
243	〃	3	〃	(12.4)	ロクロナデ	〃	〃	竈内 No.1・4・10	
243	307号住	1	土師器皿	(12.0) 2.0	体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子		
243	〃	2	須恵器坏	(6.0)	底部回転糸切	灰色	白色粒子	No.1	
243	〃	3	〃	(6.0)		にぶい黄橙色	〃	No.2	
243	〃	4	須恵器甕		外面叩き	灰色	〃	No.3	
243	〃	5	土師器甕CⅢ?	(30.0)	内外面ナデ	明赤褐色	白・黒色粒子 雲母	No.7・13	
243	〃	6	土師器甕A	(30.2)	内外面ハケメ	赤褐色	白・赤色粒子 雲母	No.9・18	
243	〃	7	〃	(9.0)	内外面ハケメ、底部木葉痕	〃	白色粒子、雲母	No.21・22・23	
243	308号住	1	土師器坏A	(11.0) 5.7 3.9	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色		No.4	
243	〃	2	〃	(11.1) 5.0 (4.7)	体・底部手持ヘラ削り	にぶい赤褐色		No.3	灯明具
243	〃	3	〃	(11.3) 5.0 4.1	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	にぶい橙色			
243	〃	4	土師器皿	(13.6) (6.4) 1.7	体・底部回転ヘラ削り	〃		No.2	
243	〃	5	土師器鉢AⅠ	(34.0)	内外面ハケメ	にぶい赤褐色		No.1	
243	309号住	1	土師器坏A	(11.0) (4.0) 4.5	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	赤色粒子		
243	〃	2	〃	(12.0) (6.0) 4.5	〃	〃	〃	No.24	
243	〃	3	〃	(13.0) (8.0) 5.0	〃	淡黄色	〃	No.8	304号住
243	〃	4	〃	(8.0)	〃	橙色		No.2	
243	〃	5	土師器皿	(18.0)	体部回転ヘラ削り、内面らせん状暗文	〃	赤色粒子	竈内	
243	〃	6	須恵器坏	(11.2) 5.8 4.2	底部回転糸切	灰色			No.1、焼成やや軟
243	〃	7	〃	(12.8) 6.2 3.9	〃	灰白色	小礫多量	No.4	304号住
244	〃	8	〃	(13.2) (7.0) 3.4	〃	灰色	小礫	No.9	
244	〃	9	〃	(13.0) (7.6) 4.2	〃	緑灰色		No.12	
244	〃	10	〃	6.5	〃	灰色	小礫	No.37	
244	〃	11	須恵器蓋A	18.0 4.4	外面回転ヘラ削り	〃	〃	No.19・38・43	
244	〃	12	須恵器甕	(38.0)		暗赤灰色		No.10	
244	310号住	1	土師器坏A	(12.5) 3.7	体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子	No.14	
244	〃	2	〃	(13.6) (4.7) 3.8	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	明褐色	赤色粒子	竈内 No.21	
244	〃	3	〃	(13.4) (3.8) 4.5	体・底部手持ヘラ削り、内面沈線状暗文	明赤褐色	白・赤色粒子		291号住
244	〃	4	〃	(13.6) 5.9 4.3	体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.2	
244	〃	5	〃	(14.2) (5.4) 3.5	〃	赤褐色	〃	No.19・20	灯明具
244	〃	6	〃	(14.2) (5.0) (4.5)	〃	明赤褐色	赤色粒子	竈内	
244	〃	7	〃	(15.6) (6.0) 4.8	〃	〃	〃	No.11	
244	〃	8	甲斐型黒色土器坏	(14.0)	内面黒色	橙色	白色粒子		体部外面墨書
244	〃	9	黒色土器椀?		底部回転糸切、付高台	褐色	〃	No.18	
244	〃	10	緑釉陶器皿?	7.0	底部回転ヘラ削り、付高台、内外面施釉	淡緑色	〃		
244	〃	11	土師器小型甕A	(16.6) (7.2) 14.8	外面ハケメ、内面ナデ	明赤褐色	雲母	No.4・7	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
244	310号住	12	土師器鉢AⅠ	(31.0) — —	内外面ハケメ	暗赤褐色	白・黒色粒子、雲母	No.15	
244	311号住	1	須恵器坏	(11.4) (6.4) 4.0	底部回転糸切	灰白色		No.10	
244	〃	2	須恵器角坏	(9.0) (5.0) 4.0	体部角付	褐白色	白色粒子	No.13	
244	〃	3	須恵器鉢B	(19.0) 8.6 13.7	ロクロナデ、底部回転糸切	灰色	〃		
244	〃	4	土師器甕CⅣ	(26.0) — —	外面縦・横ハケメ、内面横ハケメ	にぶい橙色	白色粒子少量	No.2	
244	313号住	1	土師器坏A	(12.4) (7.4) 5.1	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り 体部横ナデ、内面みこみ部暗文	橙色	赤色粒子	No.4・14・26	底部外面線刻
244	〃	2	〃	(13.0) (8.0) 5.0	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	赤色粒子	No.4	
244	〃	3	〃	(13.0) (8.0) (5.0)	体部ナデ、手持ヘラ削り、内面暗文	〃	赤色粒子	No.41	
244	〃	4	甲斐型黒色土器高台坏	— (8.0) —	底部回転ヘラ削り、削り出し高台 内面みこみ部暗文	〃	赤色粒子	No.19	
244	〃	5	須恵器坏	(13.0) 8.5 3.7	底部回転糸切後、手持ヘラ削り	灰色	白色粒子	竈内 No.3・7	
244	〃	6	〃	(14.0) 8.5 4.5	底部糸切後、手持ヘラ削り	〃	白色粒子	No.16・18・23	
244	〃	7	〃	(14.0) 7.5 4.3	底部回転糸切	〃	小礫	No.40	
245	〃	8	須恵器高台坏A	(16.6) 9.0 6.4	底部回転ヘラ削り、付高台	灰白色	白色粒子	No.28・29・38	
245	〃	9	須恵器蓋A	14.5 — 4.0	外面回転ヘラ削り	〃	白色粒子	No.1・6	
245	〃	10	須恵器短頸壷C	(8.0) — —	ロクロナデ	灰色	小礫		
245	〃	11	須恵器鉢B	(21.0) (9.0) 13.0	ロクロナデ、底部回転糸切	緑灰色	小礫	No.24・25	
245	〃	12	土師器小型甕C	(18.0) (10.0) —	〃	橙色	やや粗、小礫	No.17・38	
245	〃	13	土師器甕CⅡ	(33.6) — —	外面一部叩き	〃	やや粗、礫多量	竈内、No.5・25・31・32・35・36・37・39・45	361号住
245	〃	14	土師器甕CⅠ	— (9.0) —	底部木葉痕、ロクロナデ	にぶい橙色	やや粗、小礫多量	竈内 No.2・20・27	
245	〃	15	土師器甕A	(24.0) (10.0) (33.0)	底部ヘラ削り、体・底部ハケメ、体部一部回転ヘラ削り	茶褐色	やや粗 白色粒子	No.10・11・21・32・34・44	328号住
245	314号住	1	土師器坏A	12.8 5.0 3.9	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	明黄褐色	赤色粒子	No.3・4・31・32	
245	〃	2	〃	14.6 5.5 4.7	体・底部手持ヘラ削り	浅黄橙色	粗	No.8・9・10	
245	〃	3	〃	14.2 5.0 4.7	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り	にぶい黄褐色	やや粗		
245	〃	4	土師器皿	12.0 4.3 2.9	体・底部手持ヘラ削り	明黄褐色		No.2	
245	〃	5	〃	12.4 4.6 2.9	〃	〃		No.7	
245	〃	6	〃	12.8 2.7 2.5	〃	にぶい黄橙色	赤色粒子	No.43	343号住
245	〃	7	〃	12.6 5.4 2.6	〃	橙色		竈内 No.49	388号住
245	〃	8	〃	12.4 4.8 2.6	〃	明黄褐色	やや粗	No.43	灯明具
245	〃	9	黒色土器坏	— (5.6) —	底部回転糸切			No.21	
245	〃	10	灰釉陶器皿	18.6 — 2.8	底部回転ヘラ削り、足付、内面施釉（はけ塗り）	灰白色		No.7・15	318号住
245	〃	11	灰釉陶器壷?	— (13.0) —	体・底部施釉			No.6.10	
245	〃	12	土師器甕A	(28.8) — —	内外面ハケメ	褐色～褐灰色	粗		
246	315号住	1	土師器坏A	11.0 4.8 4.5	体・底部手持ヘラ削り	褐色	赤色粒子	No.6・7	体部外面墨書
246	〃	2	〃	(11.6) (5.0) 4.2	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	灰黄褐色	赤色粒子多量	No.26	
246	〃	3	〃	11.8 4.9 4.0	〃	橙色	やや粗 白・赤色粒子	No.17	灯明具
246	〃	4	〃	(12.8) (5.8) 4.1	〃	〃		No.40	体部外面墨書
246	〃	5	〃	(10.9) — —	体部手持ヘラ削り、内面暗文	暗褐色		No.19	
246	〃	6	〃	(12.0) — —	体部手持ヘラ削り	橙色		No.20	
246	〃	7	〃	(13.8) — —	体部手持ヘラ削り、内面暗文	褐色			体部外面墨書
246	〃	8	土師器高台坏	— (7.6) —	底部削り出し高台、内面暗文	橙色		No.48	
246	〃	9	土師器皿	(12.0) 3.6 2.3	体・底部回転ヘラ削り	褐色		No.13	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
246	315号住	10	土師器 皿	12.4 4.0 2.1	体・底部回転ヘラ削り	淡橙色	やや粗 赤色粒子多	No.15・16	
246	〃	11	〃	12.9 5.0 2.3	底部糸切後、体・底部回転ヘラ削り	橙　色	赤色粒子多量	No.8・12	
246	〃	12	〃	(14.4) 5.6 2.6	体・底部回転ヘラ削り、内面放射状暗文	赤褐色		No.42・43	
246	〃	13	〃	(12.9) — —	体部回転ヘラ削り	褐　色		No.30	
246	〃	14	土師器 坏?	— (8.6) —	底部糸切後、ヘラ削り	白褐色			底部外面線刻
246	〃	15	土師器 皿	— (4.8) —	体・底部回転ヘラ削り	褐　色		No.22	
246	〃	16	土師器 坏A	— (4.6) —	底部糸切後、手持ヘラ削り、内面暗文	暗褐色			底部外面線刻
246	〃	17	〃	— — —		褐　色			体部外面墨書
246	〃	18	〃	— — —		〃			〃
246	〃	19	甲斐型黒色土器 坏	(16.8) (8.6) 6.0	体・底部回転ヘラ削り、内面放射状、らせん状暗文、みこみ部暗文	橙　色		No.27	
246	〃	20	黒色土器 坏	(14.8) — —	内面ミガキ、黒色、外面上半黒色	褐　色	やや粗 雲母、小礫	No.11	
246	〃	21	甲斐型黒色土器 坏	(20.2) — —	体部回転ヘラ削り、内面ミガキ、黒色	赤褐色		No.46・56	
246	〃	22	黒色土器 坏	— (6.0) —	底部回転糸切、内面ミガキ、黒色	白褐色	やや粗	No.38	
246	〃	23	須恵器 壷?	— — —	ロクロナデ	灰　色		No.3	
246	〃	24	須恵器 甕	— — —	外面叩き	灰白色		No.37・41	
246	〃	25	土師器 小型甕A	(16.4) — —	内外面ハケメ	赤褐色	やや粗、白・黒色粒子、雲母多量	No.53・58・60	
246	〃	26	土師器 甕A	(27.6) — —	〃	茶褐色	〃	No.57	
246	〃	27	〃	(27.2) — —	〃	赤褐色	〃	竈内、No.14・49・54・55・61・63	
246	〃	28	〃	— (8.8) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	〃	〃	No.56	
246	〃	29	〃	— (8.4) —	〃	褐　色	粗、白・黒色粒子 雲母	No.31	
246	316号住	1	土師器 坏A	(12.0) 4.6 4.1	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	赤色粒子		灯明具
246	〃	2	〃	12.4 4.3 4.7	体・底部手持ヘラ削り	橙　色	〃	No.3	
246	〃	3	〃	— 5.0 —	体・底部回転ヘラ削り	明赤褐色	白・赤色粒子	No.11	
246	〃	4	土師器 皿	12.8 7.0 3.0	体・底部手持ヘラ削り	橙　色	赤色粒子	No.4	
246	〃	5	〃	(12.6) 5.0 2.5	体・底部回転ヘラ削り	〃	白・赤色粒子	No.6	
246	〃	6	〃	(13.3) (6.0) 2.1	〃	〃	赤色粒子		体部外面墨書
246	〃	7	土師器 甕C?	— 7.0 —	底部静止糸切	にぶい黄橙色	白・赤色粒子	No.2	
246	〃	8	土師器 坏?	— — —		橙　色	〃		体部外面墨書
247	317号住	1	土師器 甕CⅣ	(22.0) — —	外面縦ハケメ、内面縦・横ハケメ	にぶい橙色	やや粗 白色粒子、雲母	No.5	
247	〃	2	土師器 甕CⅠ	— — —		にぶい黄橙色	白・赤色粒子 雲母	No.4・8・11	
247	318号住	1	土師器 坏A	(12.6) (8.0) 5.0	体・底部手持ヘラ削り、体部ミガキ内面、みこみ部暗文	黄橙色		No.14	底部外面墨書・線刻 412号住
247	〃	2	〃	(15.0) (4.8) 5.5	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	赤色粒子	No.33	
247	〃	3	甲斐型黒色土器 坏	(15.2) (5.0) 6.1	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	褐　色	〃	No.22	
247	〃	4	須恵器 坏	(12.0) (6.4) 3.8	底部回転糸切、外周回転ヘラ削り	灰黄色			412号住
247	〃	5	須恵器 高台坏A	(16.6) (10.0) 6.4	底部回転ヘラ削り、付高台	内-にぶい黄橙色 外-灰黄褐色		No.51	〃
247	〃	6	須恵器 蓋A	(19.4) — —	外面回転ヘラ削り	灰黄色		No.2	412号住、338号住竈
247	〃	7	須恵器 壷?	— 15.0 —	底部付高台	灰　色	白色粒子、小礫	No.24	
247	〃	8	須恵器 甕	— (14.0) —	外面叩き、内面ナデ	灰白色	〃	No.53	
247	〃	9	灰釉陶器 壷?	— (7.0) —	体・底部回転ヘラ削り、付高台	灰　色		No.7	
247	〃	10	土師器 甕A	(32.0) — —	内外面ハケメ、底部木葉痕	茶褐色	やや粗	No.23・48	
247	〃	11	土師器 羽釜A	(19.0) — —	外面ハケメ、内面ナデ	〃	小礫、雲母		

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
247	319号住	1	土師器 皿	(13.2) (4.5) 2.8	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.3	体部外面線刻「祝」
247	〃	2	土師器 高台坏	— (9.0) —	底部回転ヘラ削り、付高台	内-にぶい赤褐色 外-褐色	礫	No.1	
247	〃	3	須恵器 坏	12.0 7.0 3.8	底部回転糸切	灰白色	白色粒子	No.7	
247	〃	4	〃	(14.0) (7.8) 3.8	〃	〃	〃		
247	〃	5	須恵器 高台坏A?	— 9.9 —	底部回転糸切、回転ヘラ削り、付高台	黄灰色	〃	No.2	
247	〃	6	須恵器 蓋A	— (14.0) —		灰色	〃	No.20	高坏の可能性あり
247	〃	7	須恵器 壷?	(21.5) — —		黄灰色	〃	No.4	
247	〃	8	土師器 甕CⅡ	— — —	外面叩き	淡黄色	やや粗 白色粒子、雲母	No.25	
247	〃	9	土師器 羽釜A	(24.8) — —	内面ハケメ	灰褐色 ～橙色	やや粗 白・赤色粒子	No.26	
248	320号住	1	土師器 坏	(13.0) (4.2) 4.0	体・底部手持ヘラ削り	橙色	やや粗		
248	〃	2	〃	(14.6) — —	体部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.3	
248	〃	3	土師器 皿	(13.4) (4.4) 3.0	体・底部手持ヘラ削り	〃	やや粗、赤色粒子	No.1	
248	321号住	1	土師器 小型甕C?	— 5.2 —	底部回転糸切	〃	粗	No.17	
248	〃	2	土師器 皿	(12.8) (3.0) 2.5	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色		No.14	
248	〃	3	〃	(13.0) (5.0) 2.9	〃	橙色		No.13	
248	〃	4	〃	— 4.0 —	〃	にぶい橙色		No.7	
248	〃	5	〃	— 5.7 —	底部回転糸切後、体・底部回転ヘラ削り	〃		No.10	
248	〃	6	甲斐型黒色土器 坏	(14.0) (6.0) 4.9	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	橙色		No.2・3・4	
248	〃	7	〃	(15.0) 6.0 4.7	〃	にぶい橙色		No.11	
248	〃	8	黒色土器 高台皿?	— (6.1) —	底部回転糸切、付高台、内面黒色	淡黄色		No.12	
248	〃	9	須恵器 坏	(13.0) (6.1) 4.5		灰色		No.16	
248	〃	10	須恵器 高台坏A	(12.4) (5.4) 5.0		淡黄色		No.16	
248	〃	11	土師器 小型甕C	(12.6) — —	ロクロナデ	にぶい黄橙色		No.9	
248	322号住	1	土師器 坏?	— (9.0) —	底部糸切後、手持ヘラ削り	黄橙色	やや粗 白・赤色粒子	No.4	
248	323号住	1	土師器 坏A	12.2 4.8 3.7	体・底部手持ヘラ削り	橙色	やや粗	No.8	
248	〃	2	〃	12.0 4.5 3.1	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	黄褐色	〃	No.2・6	
248	〃	3	〃	12.4 4.1 4.0	体・底部手持ヘラ削り	橙色	やや粗、白色粒子	No.6	
248	〃	4	〃	(13.0) 4.8 3.4	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	やや粗 白・赤色粒子	No.9・10	
248	〃	5	〃	13.4 4.8 4.3	体・底部手持ヘラ削り	褐色		竈内 No.11	
248	〃	6	〃	(13.8) — —		暗褐色	やや粗	No.12	
248	〃	7	土師器 小型甕A	(15.0) — —	外面ハケメ、内面ナデ	暗茶褐色	粗 白色粒子、雲母	No.7	
248	324号住	1	土師器 坏	(6.0) (4.0) 3.8	体・底部手持ヘラ削り	にぶい赤褐色		竈内	
248	〃	2	〃	(13.0) (5.0) 4.4	〃	黄橙色		竈内	
248	〃	3	〃	(12.6) 3.8 3.3	〃	明褐色	赤色粒子	No.31	
248	〃	4	土師器 皿	(12.6) 5.0 2.3	〃	橙色		No.19・22・39	
248	〃	5	黒色土器 坏	(16.0) (6.2) 5.3	底部回転糸切、内面黒色	明褐灰色		No.26・28・30	
248	〃	6	甲斐型黒色土器 坏	(16.0) (6.2) 4.9	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色		No.28	
248	〃	7	黒色土器 坏	— (6.0) —	底部回転糸切、内面黒色	にぶい橙色	やや粗	No.1	
248	〃	8	土師器 坏?	— — —		橙色			体部外面墨書
248	〃	9	須恵器 甕	— — —	外面叩き	赤褐色 ～灰色		No.20	
248	〃	10	灰釉陶器 椀	(19.0) — —	内面施釉	灰白色		No.32	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
248	324号住	11	土師器甕A	(27.0) — —	外面ハケメ	橙色	やや粗 白色粒子、雲母	No.2	
249	〃	12	土師器羽釜A	(15.0) — —	内外面ハケメ	赤褐色	やや粗、白・赤色粒子、雲母	No.10	
249	〃	13	〃	(22.0) — —	〃	暗赤褐色	粗、白・赤色粒子 雲母	No.9	
249	325号住	1	土師器坏A	14.4 (5.5) (8.0)	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	白・赤色粒子 雲母	No.12	
249	〃	2	土師器坏D	(11.0) (6.6) 2.6	底部板目状圧痕、外周回転ヘラ削り	黄褐色	やや粗、白・赤色粒子、雲母		灯明具
249	〃	3	黒色土器坏	(19.0) (7.0) (7.0)	内面ミガキ後、黒色	黄橙色	やや粗、白・赤色粒子、雲母、小礫	竈内	
249	〃	4	須恵器坏	(13.0) 8.0 3.6	底部手持ヘラ削り	灰色	白色粒子	No.18	
249	〃	5	〃	(13.0) (8.5) 4.0	底部回転糸切、周辺回転ヘラ削り	茶褐色 ～灰色	〃		
249	〃	6	〃	(13.0) (7.4) 3.6	底部手持ヘラ削り	青灰色	白色粒子、小礫	No.4	
249	〃	7	〃	(13.6) (8.0) 3.8	底部回転糸切	灰色	やや粗 白色粒子、小礫		
249	〃	8	〃	(14.0) 6.7 4.1	〃	灰白色	〃		
249	〃	9	〃	(14.0) (8.4) 4.0	底部静止糸切、外周・底部周辺回転ヘラ削り	灰色	安山岩片 白色粒子、小礫		331号住
249	〃	10	〃	(14.0) 8.8 4.3	底部手持ヘラ削り	〃	白色粒子		
249	〃	11	須恵器蓋B	(12.8) — 3.6	外面回転ヘラ削り	〃	白色粒子、小礫	No.36・37	
249	〃	12	須恵器長頸壷	— — —		〃	白色粒子	No.2	
249	〃	13	土師器甕C？	(7.4) —	底部周辺ヘラ削り	橙色	やや粗、白・赤色粒子、小礫	No.29	
249	〃	14	土師器甕B	(23.0) — —	外面ヘラ削り	赤褐色	粗、白色粒子、小礫	No.3・6・7・13・14	
249	〃	15	須恵器長頸壷B	— — —	体部下半ヘラ削り	灰色	白色粒子	No.31・40	
249	〃	16	須恵器鉢A	(30.0) — —	外面叩き	灰色～ 灰白色	〃	No.8・19・20	305・325・328・331・407号住
249	〃	17	須恵器甕	— — —	頸部外面櫛歯状刺突文	オリーブ灰色	〃	No.27	
249	〃	18	須恵器鉢？	— (10.0) —	底部回転糸切	灰色	白色粒子、小礫	No.9	
249	326号住	1	土師器坏A	(11.8) 5.0 4.3	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	白色粒子	No.35	体部外面墨書「子」
249	〃	2	〃	(12.6) 4.6 4.4	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	〃	竈内	
249	〃	3	〃	(15.6) 5.2 (5.0)	〃	にぶい赤褐色	粗、白色粒子	No.1	
249	〃	4	〃	(15.4) — —	体部手持ヘラ削り	〃	やや粗 白・赤色粒子		
250	〃	5	〃	— (4.6) —	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色		竈内 No.7	
250	〃	6	土師器皿	12.6 4.7 2.8	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.18	歪み大きい
250	〃	7	〃	(13.6) 5.0 (2.3)	体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.36	灯明具
250	〃	8	甲斐型黒色土器坏	(17.8) 6.6 6.7	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	にぶい橙色	やや粗	No.22	片口
250	〃	9	土師器小型甕A	(16.0) — —	内外面ハケメ	〃	白色粒子	No.3	
250	327号住	1	土師器坏A	11.9 5.4 4.4	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色		No.4	
250	〃	2	〃	15.4 — —	体部手持ヘラ削り	〃		No.16	
250	〃	3	土師器甕A	(33.8) — —	内外面ハケメ	褐色	粗、雲母	竈内 No.3	
250	328号住	1	土師器坏A	(11.9) (7.0) 3.5	体・底部ミガキ、内面暗文	明橙色			
250	〃	2	〃	(12.2) 7.0 4.0	底部回転糸切	黄褐色	やや粗	No.5	
250	〃	3	〃	— 9.4 —	体部手持ヘラ削り	褐色			
250	〃	4	須恵器坏	11.9 7.0 4.2	底部回転糸切、周辺回転ヘラ削り	灰色	白色粒子	No.2	
250	〃	5	〃	12.8 6.4 4.2	底部回転糸切	灰白色		No.10	底部外面線刻
250	〃	6	〃	(13.4) (10.6) 3.8	底部手持ヘラ削り	灰黄褐色		No.11	
250	〃	7	須恵器高台坏A	(15.0) (10.0) 6.4	底部付高台	灰白色		No.16	
250	〃	8	須恵器甕	(22.6) — —		紫灰色	白・黒色粒子	No.1	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
250	329号住	1	須恵器坏	12.6 7.0 4.1	底部回転糸切	黄灰色	白色粒子	No.3	
250	〃	2	須恵器壷?	— (10.0) —	底部周辺ヘラ削り	灰色		No.4	35掘立、ピット5
250	330号住	1	土師器坏A	(11.0) (5.0) 4.3	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	赤色粒子	No.1	
250	〃	2	〃	(13.0) (6.0) 4.1	体・底部手持ヘラ削り	赤褐色	〃		
250	〃	3	土師器高台坏	(15.0) (8.0) —		橙色	〃		体部外面線刻
250	〃	4	土師器坏	— 6.0 —	体・底部手持ヘラ削り	〃	〃		
250	〃	5	土師器皿	(14.2) (7.4) 2.5	体・底部回転ヘラ削り	〃	〃	No.11	
250	〃	6	〃	(16.0) (7.0) 2.6	〃	〃		No.3・9	体部上半黒色付着物
250	〃	7	須恵器坏	(12.0) (7.0) 3.8	底部回転糸切	灰色	やや粗		
250	〃	8	土師器甕A	(23.0) — —	内外面ハケメ	赤褐色	粗、白・赤色粒子 雲母	No.17	
250	〃	9	〃	— 8.0 —	内外面ハケメ、底部木葉痕	暗赤褐色	粗、白色粒子 雲母	No.12	
251	〃	10	須恵器凸帯壷	— — —	外面叩き、肩部凸帯	灰色		No.10	頸部ヘラ書
251	〃	11	須恵器甕	— — —	頸部外面ハケメ	暗紫灰色	白色粒子	No.6	
251	〃	12	土師器円筒土器	10.0 — —	外面ナデ、内面指頭痕	橙色	粗、白・赤色粒子	No.19	
251	331号住	1	土師器蓋A	(12.0) — 2.5	外面回転ヘラ削り	〃	白・赤色粒子 雲母	No.3	317号住
251	〃	2	須恵器坏	— — 4.4	底部回転糸切、手持ヘラ削り	青灰色	白・赤色粒子	No.1	
251	〃	3	須恵器甕?	— (13.0) —		内-灰白色 外-青灰色		No.4	
251	〃	4	土師器小型甕C	(16.0) 8.4 15.0	底部回転糸切	褐色	粗、小礫	竈内 No.6	
251	〃	5	土師器甕CⅡ	(21.6) — —	外面叩き	〃	やや粗 白・赤色粒子	No.8	317号住
251	332号住	1	土師器坏	12.5 4.6 4.0	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	明赤褐色	赤色粒子	No.1	
251	〃	2	灰釉陶器皿	15.0 7.9 3.5	底部回転ヘラ削り、付高台、内外面施釉(つけがけ)	〃	白色粒子	No.4	
251	〃	3	土師器甕A	(31.6) — —	内外面ハケメ	〃	白色粒子、雲母	No.6	
251	〃	4	〃	(28.5) (8.5) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	赤褐色	粗、白色粒子 雲母	竈内 No.7・8・9	
251	333号住	1	土師器坏B	(13.2) (9.0) 3.1	底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子		
251	〃	2	〃	(14.0) (9.0) (3.7)	〃	にぶい橙色	〃		外面褐色(塗彩か)
251	〃	3	〃	— 9.2 —	底部糸切後、手持ヘラ削り、みこみ部ミガキ	橙色	赤・黒色粒子	No.4	
252	334号住	1	土師器坏A	(11.8) (7.6) 5.1	体部手持ヘラ削り、内面暗文	〃			
252	〃	2	須恵器坏	(12.4) 6.4 3.7	底部回転糸切	オリーブ灰色	白色粒子	No.3	
252	〃	3	〃	— (6.8) —	〃	灰色	〃	No.4	
252	335号住	1	土師器坏A	(16.6) — —	体部手持ヘラ削り	橙色	やや粗 赤色粒子多量		
252	〃	2	土師器坏B?	(17.8) (10.0) 5.4	底部手持ヘラ削り	明橙色	赤色粒子多量	No.13・19	
252	〃	3	土師器高台坏	16.4 8.6 7.2	底部ヘラ削り、削り出し高台、内面みこみ部ミガキ	褐色		No.11	
252	〃	4	土師器皿	(11.8) 3.0 2.5	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	茶色	赤色粒子多量	No.12・13	
252	〃	5	〃	12.5 4.0 3.0	体・底部手持ヘラ削り	橙色	〃	No.1・30	
252	〃	6	〃	(12.4) 5.0 2.2	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	褐色	〃	No.15	
252	〃	7	〃	(12.8) (4.4) 2.6	体・底部手持ヘラ削り	橙色	〃		
252	〃	8	土師器鉢C	19.2 10.8 8.5	底部糸切ヘラ削り後、ナデ	明褐色		No.17	内面にスス状付着物 334号住
252	〃	9	須恵器坏	(13.8) (7.2) 3.4	底部回転ヘラ削り	黄灰色	赤色粒子、小礫	No.4	
252	〃	10	土師器?	— — —		橙色			底部外面線刻
252	〃	11	〃	— — —		明褐色			〃
252	〃	12	〃	— — —		明黄褐色			〃

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
252	335号住	13	土師器 小型甕B	— 6.2 —	底部ヘラ削り、内面ナデ	橙色～褐色	やや粗 白色粒子多量	No.10	
252	〃	14	〃	— 7.0 —	内外面ハケメ	明褐色	〃	No.18	
252	336号住	1	須恵器 高台坏?	— (9.2) —	底部回転ヘラ削り、付高台	灰黄色		No.1	
252	〃	2	土師器 甕A	— (8.0) —	内外面ハケメ	にぶい赤褐色	やや粗	No.2	
252	〃	3	土師器 ?	— — —		にぶい黄橙色			底部外面墨書
252	337号住	1	土師器 坏A	(11.0) 4.8 4.7	底部糸切後、体・底部暗文	橙　色	赤色粒子	No.5	
252	〃	2	〃	(13.3) (5.0) (4.3)	〃	淡黄色		No.18	
252	〃	3	〃	(12.3) (4.4) 3.3	体・底部手持ヘラ削り	橙　色	赤色粒子	No.6	
252	〃	4	〃	(11.8) (5.4) 4.8	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃			
252	〃	5	土師器 皿	(11.9) (4.2) (2.1)	体・底部手持ヘラ削り	〃			
252	〃	6	甲斐型黒色土器 坏	— (4.0) —	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	橙色～ にぶい橙色		No.11	366号住
252	〃	7	須恵器 高台坏A	(15.3) (8.4) 6.6	回転ヘラ削り、付高台	外－灰色 内－橙色		No.3	
252	〃	8	須恵器 蓋A	(10.8) — (3.0)	外周回転ヘラ削り	外-浅黄色 内-灰色		竈内 No.19	
252	〃	9	〃	(16.0) — (3.7)	〃	赤灰色		No.12	
252	〃	10	土師器 坏?	— — —					体部外面線刻
252	〃	11	〃	— — —					底部外面黒書
252	〃	12	〃	— — —					体部外面墨書
252	〃	13	土師器 小型甕A	(14.0) — —	内外面ハケメ	明赤褐色		No.17	
252	〃	14	須恵器 甕	— — —	外面叩き			No.13	転用硯
252	〃	15	〃	(29.6) — —	ロクロナデ	暗青灰色		No.8	
253	338号住	1	土師器 坏A	(13.0) 5.0 4.4	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙　色		竈内 No.22・25	
253	〃	2	〃	(14.0) 6.0 4.1	底部回転糸切	〃	小礫	No.21	
253	〃	3	〃	14.0 5.3 4.5	〃	〃	赤色粒子 小礫多量	No.5	体部外面墨書「完」 完形
253	〃	4	土師器 皿	(12.0) 3.4 1.8	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃		No.28	
253	〃	5	〃	(13.0) (4.6) 2.4	体・底部手持ヘラ削り	褐　色		竈内 No.51	
253	〃	6	須恵器 坏?	— — —					底部外面線刻
253	〃	7	黒色土器 坏	17.0 — —	内面ナデ、体部上半黒色	黒褐色		No.23	内外面黒色
253	〃	8	緑釉陶器 椀	(16.0) 7.6 5.2	体・底部回転ヘラ削り、付高台、口縁部輪花状、内外面施釉	緑　色		No.12	
253	〃	9	灰釉陶器 段皿	(18.0) — —	体部回転ヘラ削り、内外面施釉				
253	〃	10	土師器 竈形土器	(25.0) (27.0) 25.0	内外面ハケメ	暗褐色	やや粗	No.43・44・45・ 47・49	
253	〃	11	〃	(25.0) — —	〃	茶褐色	〃	No.7・18・34・ 35・37・50	
253	〃	12	〃	— — —	〃	〃		竈内 No.36・47	
253	〃	13	〃	(12.0) — —	〃	〃		No.17・40	
254	〃	14	土師器 羽釜A	(24.0) — —	〃	〃	やや粗	竈内,No.6・17・20・ 33・39・41・46	
254	〃	15	〃	(22.0) — —	〃	暗赤褐色		竈内、No.16・ 31・38・46	
254	〃	16	須恵器 鉢B	(22.0) — —		灰　色		No.13	
254	339号住	1	土師器 皿	(10.6) 3.0 2.3	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り		赤色粒子、小礫	No.4・5	
254	〃	2	土師器 小型甕A	(17.0) (8.0) (15.0)	内外面ハケメ、底部木葉痕	黒褐色	やや粗、雲母	No.5・6	354号住
254	〃	3	土師器 甕A	(30.0) — —	内外面ハケメ	褐　色	〃	No.2	
254	340号住	1	土師器 坏D	(9.6) (6.0) 4.0		にぶい橙色	やや粗 白色粒子、雲母	No.1	
254	〃	2	土師器 坏A	— (4.1) —	底部糸切、体部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子		

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
254	340号住	3	土師器坏B?	(16.0) — —		浅黄橙色	小礫	No.8	
254	〃	4	土師器甕CⅡ	(22.0) — —	ロクロナデ、外面叩き	〃	やや粗、雲母	No.5	
254	341号住	1	土師器坏A	(9.4) (5.0) 4.3	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色		No.4	
254	〃	2	土師器坏?	— (6.0) —	底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	赤・白色粒子	No.11	
254	〃	3	須恵器坏	(13.2) 7.4 3.8	底部回転糸切	灰白色		No.12	319号住
254	〃	4	〃	(14.0) (7.0) 3.3	底部回転糸切後、手持ヘラ削り	黄灰色	白色粒子 安山岩片	No.20	
254	〃	5	〃	— (8.0) —	底部回転糸切	灰白色		No.7	
254	〃	6	須恵器高台坏A?	(13.4) — —		〃	白色粒子	No.3	
254	〃	7	須恵器蓋A	(10.8) — 3.0	外面回転ヘラ削り	灰色	〃	No.26	内面転用硯 完形
254	〃	8	土師器小型甕C	(14.0) — —	ロクロナデ	にぶい橙色		No.27	
254	〃	9	〃	— (7.0) —		内-にぶい橙色 外-橙色	やや粗 白色粒子	No.25	
254	〃	10	土師器甕CⅡ	(24.0) — —	ロクロナデ、外面叩き	橙色	白色粒子	No.1	
255	343号住	1	土師器坏A	(12.0) (4.9) 4.8	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	赤色粒子	No.4	
255	〃	2	〃	12.4 5.5 4.0	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	白・赤色粒子	No.15・29	
255	〃	3	〃	(12.4) (4.8) 4.0	〃	橙色	赤色粒子		
255	〃	4	〃	12.0 4.8 4.1	〃	にぶい橙色	〃	No.25	
255	〃	5	〃	(12.7) (5.5) 4.5	〃	橙色	白色粒子	No.23	
255	〃	6	〃	(11.2) 4.1 5.3	〃	〃	白・赤色粒子	No.22	
255	〃	7	〃	(13.6) (6.0) 3.9	〃	にぶい橙色		No.11	
255	〃	8	〃	(14.0) (6.2) 5.0	〃	橙色	白色粒子	No.24	
255	〃	9	〃	(11.9) — —	体部手持ヘラ削り	にぶい褐色		No.17	
255	〃	10	〃	(14.3) — —	〃	明赤褐色	赤色粒子	No.17	
255	〃	11	〃	— 4.3 —	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃		No.10	
255	〃	12	土師器皿	11.7 4.6 2.8	体・底部手持ヘラ削り	黄橙色	やや粗 白色粒子	No.18	
255	〃	13	〃	12.3 4.7 2.3	体・底部回転ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子	No.13	
255	〃	14	〃	(12.5) (4.3) 2.1	体・底部手持ヘラ削り	明赤褐色	〃	No.19	
255	〃	15	〃	(12.5) (8.5) —	体部回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	橙色	赤色粒子	No.31	
255	〃	16	黒色土器坏	(14.0) (7.0) 4.5	底部回転糸切、内面黒色	にぶい黄橙色	赤・黒色粒子	No.5	灯明具
255	〃	17	土師器甕A	(34.0) — —	内外面ハケメ	にぶい赤褐色	雲母	No.26	
255	〃	18	〃	(25.8) — —	外面ハケメ、内面ナデ	赤褐色	白色粒子、雲母	No.14	
255	344号住	1	土師器坏A	(12.0) (4.0) 4.3	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	明褐色	赤色粒子	No.4	
255	〃	2	土師器蓋A	— — —	内面暗文	橙色	〃	No.10	
255	〃	3	須恵器坏	(12.0) (6.8) 4.0	底部回転糸切	灰色	白色粒子	No.1	
255	〃	4	土師器甕A	29.0 — —	内外面ハケメ	赤褐色	粗 白色粒子、雲母	No.9	
255	〃	5	土師器甕CⅡ	— — —	外面かすかな叩き	橙色	粗、白色粒子	No.7	
255	345号住	1	土師器坏A	13.0 4.6 4.5	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り	赤褐色	赤色粒子		
255	〃	2	〃	15.0 5.0 5.3	体・底部手持ヘラ削り	橙色	やや粗、 赤色粒子	No.13	歪み大
255	〃	3	甲斐型黒色土器坏	15.0 (5.6) 5.4	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	にぶい橙色		No.12	
255	〃	4	〃	(15.0) (5.0) 5.6	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	暗褐色			歪み大
255	〃	5	土師器甕A	(30.0) — —	内外面ハケメ	暗赤褐色	粗、白色粒子 雲母		
255	〃	6	〃	(29.0) — —	〃	明赤褐色	〃	竈内 No.10	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
256	345号住	7	土師器甕A	(32.0) —	内外面ハケメ	にぶい褐色	粗、白色粒子 雲母	竈内 No.2	
256	〃	8	〃	7.0 —	内外面ハケメ、底部木葉痕	褐色	〃	No.5	
256	〃	9	〃	(4.0) —	底部木葉痕	暗褐色	粗 白・赤色粒子	No.21	
256	346号住	1	土師器坏	11.9 4.8 4.3	体・底部手持ヘラ削り	褐色		竈内 No.16	
256	〃	2	〃	(12.2) 4.0 4.0	〃	〃		No.18	体部外面墨書
256	〃	3	〃	(14.6) —	内面暗文	黄橙色		No.21	
256	〃	4	土師器皿	(12.6) — —	体部手持ヘラ削り	橙色		No.14	
256	〃	5	土師器甕	(25.4) —	内外面ヘラナデ	黄橙色	やや粗 白色粒子、雲母	No.11	
256	〃	6	〃	(28.6) —	内外面ハケメ	灰黄褐色	〃	No.13	
256	〃	7	土師器竈形土器	(30.0) (30.0) (35.0)	〃	暗褐色	やや粗、雲母多量 白色粒子	竈内 No.6・7	
257	347号住	1	土師器坏	(14.4) 5.2 5.3	底部糸切、体部手持ヘラ削り	褐色		No.3・8	
257	〃	2	土師器甕	(26.2) —	内外面ハケメ	赤褐色	やや粗、雲母多量 白・黒色粒子	No.3・4	
257	348号住	1	土師器坏	(13.8) 5.6 5.0	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色		No.4・5	
257	〃	2	〃	4.0 —	〃	〃		No.1	体部外面墨書
257	〃	3	〃	4.0 —	〃	橙色		No.11	
257	〃	4	〃	4.6 —	〃	〃		No.6	
257	〃	5	土師器皿	(12.0) (6.0) 2.4	体部回転ヘラ削り	〃			
257	〃	6	〃	(12.6) (5.0) 2.2	体・底部回転ヘラ削り	〃		No.3	
257	〃	7	〃	(13.0) (9.7) 2.2	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	やや粗	No.7	
257	〃	8	須恵器甕	— —	外面叩き	灰色	白色粒子	No.2	転用硯
257	349号住	1	土師器坏	(14.4) 9.2 4.9	底部回転ヘラ削り	橙色	〃	No.4	
257	〃	2	灰釉陶器壷	11.4 —	底部付高台	暗灰黄色		No.1	底部外面ヘラ書
257	〃	3	土師器甕	(21.2) — —	内外面ナデ	にぶい黄橙	やや粗	No.5	
257	〃	4	〃	— — —	ロクロナデ、外面カキメ	明赤褐色	やや粗 白色粒子	No.3	
258	350号住	1	土師器皿	12.0 4.8 2.8	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.2	体部下半炭化物付着
258	〃	2	土師器甕	(30.0) —	内外面ハケメ	赤褐色	やや粗 白色粒子、雲母	No.1	
258	351号住	1	土師器坏	14.1 9.4 5.4	体・底部手持ヘラ削り	橙色		竈内 No.10	
258	〃	2	須恵器坏	(12.8) —	体部回転ヘラ削り	黄褐色		No.16	
258	〃	3	〃	(5.1) —	底部静止糸切、底部外周手持ヘラ削り	灰色		No.15	
258	〃	4	土師器甕	(9.0) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	黄橙色	やや粗 白・黒色粒子	No.14	
258	〃	5	〃	(15.2) —	ロクロナデ	暗褐色	粗、小礫多量	竈、No.2・4・7・19・22・24	
258	〃	6	〃	(39.6) —	ロクロナデ、外面かすかな叩き	褐色	やや粗 白色粒子、小礫	No.8・9	
258	352号住	1	土師器坏	4.0 —	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.1	
258	〃	2	土師器甕	(29.0) — —	内外面ハケメ	明黄褐色	やや粗	No.2	
258	353号住	1	土師器坏	11.8 4.4 3.0	体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.2	
258	〃	2	〃	12.4 (5.0) 4.1	体・底部手持ヘラ削り	〃		竈内	
258	〃	3	〃	14.6 5.4 4.9	底部糸切、体部手持ヘラ削り	〃		竈内 No.3	
258	〃	4	土師器甕	29.0 — —	内外面ハケメ	〃	やや粗、雲母	No.1	
258	354号住	1	土師器坏	12.0 4.8 4.4	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子 やや粗	No.8	
258	〃	2	〃	13.6 5.0 3.5	体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.12・13	
258	〃	3	〃	14.0 5.4 5.4	〃	内-灰黄褐色 外-にぶい黄褐色		No.3	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
258	354号住	4	甲斐型黒色土器 坏	14.0 (4.4) (5.8)	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	明黄褐色		竈内	
258	〃	5	須恵器 坏	12.0 7.0 4.0	底部糸切	オリーブ灰色		No.2	
258	〃	6	土師器 甕A	27.0 — —	内外面ハケメ	明赤褐色	やや粗	竈内	
258	〃	7	須恵器 甕	29.0 — —	外面櫛描波状文	内-灰白色 外-オリーブ灰色		No.4	
259	355号住	1	土師器 甕	(32.0) — —	ロクロナデ	にぶい橙色	白色粒子	No.4	
259	356号住	1	土師器 坏	(11.2) (6.2) 4.2	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り	橙　色			
259	〃	2	〃	6.6 —	底部回転糸切	〃	赤色粒子	No.5	底部外面墨書「中」
259	〃	3	須恵器 坏	(14.0) — —		黄灰色	白色粒子	No.2	
259	〃	4	〃	(16.0) — —		灰　色	〃	No.10	
259	〃	5	須恵器 蓋	— — —	外面回転ヘラ削り	淡黄色	やや粗 白色粒子	No.8	
259	〃	6	須恵器 壷	(9.2) —	底部回転ヘラ削り、付高台	灰白色		No.6	
259	〃	7	土師器 甕	(8.0) —	底部回転糸切	にぶい橙色	やや粗 白色粒子	No.11	
259	〃	8	〃	(28.6) — —	内外面ハケメ	にぶい赤褐色	やや粗 雲母	No.12	
259	357号住	1	土師器 坏	11.6 3.8 4.5	体・底部手持ヘラ削り	白褐色		No.12・13	
259	〃	2	〃	15.0 5.2 5.4	〃	褐　色	赤色粒子多量	No.4	
259	〃	3	〃	(12.4) —	体部手持ヘラ削り	橙　色	〃	No.11	
259	〃	4	〃	(14.8) —	〃	黄褐色			
259	〃	5	〃	4.8	体・底部手持ヘラ削り	黄橙色		No.6	内外面剥離
259	〃	6	土師器 皿	11.3 6.7 2.5	底部手持ヘラ削り	橙　色	白・赤色粒子 やや粗	No.9	完形
259	〃	7	黒色土器 鉢?	(22.7) —	内面黒色	淡褐色			
259	〃	8	灰釉陶器 皿	6.4 —	付高台	灰　色		No.8	
259	〃	9	土師器 甕	(11.4) —	外面ヘラナデ、内面ハケメ	暗褐色	粗、雲母		
259	〃	10	〃	(15.8) 9.2 14.5	内外面ハケメ、底部木葉痕			No.3・21	
259	〃	11	〃	9.2 —	〃	暗褐色	やや粗、雲母	No.2	内面タール状
259	358号住	1	土師器 坏	13.2 8.8 3.1	底部ヘラ削り、ナデ	淡橙色		No.3・5	
259	〃	2	〃	(17.4) (10.0) 4.8	底部ヘラ削り、ミガキ、内外面みこみ部ミガキ	〃		No.25	
259	〃	3	〃	— (10.0) —	内外面、みこみ部ミガキ	〃		No.8	
259	〃	4	〃	— (8.0) —		橙　色		No.22	
259	〃	5	須恵器 坏	(12.6) (5.0) 4.1	底部糸切、周辺手持ヘラ削り	暗灰色		No.1	
259	〃	6	土師器 甕	(23.4) —	外面ヘラ削り、内面ナデ	褐　色	やや粗 白・赤色粒子	No.14	
260	359号住	1	土師器 坏	(13.8) (5.0) 3.8	体・底部手持ヘラ削り	灰褐色		No.6	
260	〃	2	〃	— 5.3 —	底部回転糸切	灰白色		No.5	
260	〃	3	土師器 甕	31.0 —	内外面ハケメ	にぶい橙色	白色粒子	竈内	
260	360号住	1	土師器 坏	(10.5) 6.0 3.4	底部静止糸切、体部手持ヘラ削り	〃	〃	No.7	内面上半部黒色付着物
260	〃	2	土師器 甕	(18.0) (7.5)	底部回転糸切、ロクロナデ	〃	やや粗 白色粒子	No.3・8・13	
260	〃	3	〃	(23.0) — —	ロクロナデ	橙　色	白色粒子	No.2	
260	361号住	1	土師器 坏	— 5.4 —	底部削り出し高台、内面みこみ部暗文	淡橙色		No.3	底部外面墨書「宅」
260	〃	2	須恵器 坏	(12.4) (6.7) 3.6	底部回転糸切	暗青灰色	小礫	No.13	
260	〃	3	〃	(13.2) (7.8) 3.9	〃	灰白色		No.14	
260	〃	4	土師器 甕	— 8.4 —	底部回転糸切	淡橙色	やや粗 白色粒子	No.4	
260	〃	5	〃	(23.6) — —	内外面ハケメ	褐　色	粗、小礫	No.10	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
260	361号住	6	土師器甕	— — —	外面叩き	白褐色	粗、小礫	No.7・9・17・18	須恵器鉢Aか?
260	362号住	1	土師器甕CI	— — —		橙色	粗、白色粒子 小礫多量	竈内 No.2・3・5・8	
260	363号住	1	須恵器長頸壷C	— 4.6 —	底部静止糸切	暗灰色		竈	
260	〃	2	須恵器甕	(43.0) — —		暗青灰色			
261	364号住	1	土師器坏A	(11.8) 4.0 4.3	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色			
261	〃	2	〃	12.2 4.0 3.9	〃	〃		No.25	灯明具 体部外面墨書「介」
261	〃	3	〃	(12.4) 5.2 3.6	体・底部手持ヘラ削り	褐色		No.2	
261	〃	4	〃	(12.6) — —	体部手持ヘラ削り	茶褐色		No.8	
261	〃	5	土師器皿	(12.0) 3.8 2.6	体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.19	体部外面墨書「介」
261	〃	6	〃	12.0 4.3 2.5	〃	淡橙色	やや粗 白色粒子	No.17	
261	〃	7	〃	(12.4) (3.6) 2.4	〃	橙色		No.22	
261	〃	8	〃	(12.3) (3.8) 2.3	〃	黄褐色		No.11	
261	〃	9	甲斐型黒色土器坏	(16.6) 6.5 5.2	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	暗褐色			
261	〃	10	灰釉陶器皿	(13.4) — —	内面施釉	灰白色			
261	〃	11	灰釉陶器長頸壷?	— — —	外面上半施釉	灰色		No.13	
261	〃	12	土師器甕A	(28.2) — —	内外面ハケメ	暗褐色	雲母	No.24	
261	〃	13	土師器鉢AI	(38.0) — —	〃	暗茶褐色	やや粗、雲母	No.3・15	
261	365号住	1	土師器坏A	12.4 3.0 4.3	体・底部手持ヘラ削り	内-にぶい橙色 外-橙色	赤色粒子	竈内	灯明具
261	〃	2	土師器皿	12.0 — 2.0	〃	橙色	〃	竈内	
261	〃	3	甲斐型黒色土器坏	16.0 (4.6) 5.4	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	にぶい黄橙色		No.3	364号住、366号住
261	〃	4	土師器甕A	(30.0) — —	内外面ハケメ	赤褐色	やや粗	No.5	
261	〃	5	〃	(33.2) — —	〃	にぶい橙色		No.18	
261	〃	6	土師器羽釜A	24.0 — —	〃	明赤褐色		No.7・16	
261	〃	7	土師器甕A?	— 9.6 —	〃	橙色	やや粗	No.19	
261	366号住	1	甲斐型黒色土器坏	(12.8) (4.2) 4.5	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	褐色		No.6	
261	〃	2	須恵器甕	(40.0) — —		暗灰色		No.4	
262	367号住	1	土師器坏	12.0 4.6 4.3	体・底部手持ヘラ削り	褐色		No.2	
262	〃	2	土師器皿	(12.2) 3.6 2.2	〃	〃			283号住
262	368号住	1	土師器坏	(13.6) 4.0 4.2	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	茶褐色		No.3	
262	〃	2	灰釉陶器椀	(14.2) 7.0 3.9	底部糸切、付高台、内外面施釉	灰白色		No.1・2	
262	369号住	1	土師器皿	(12.4) 4.0 2.3	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色			
262	〃	2	甲斐型黒色土器坏	(13.0) 4.8 4.1	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	褐色			体部外面墨書
262	370号住	1	土師器坏A	12.7 8.2 4.8	底部糸切後、手持ヘラ削り、体部外面ミガキ、内面暗文	にぶい橙色		No.9	完形 体部外面線刻「山」
262	〃	2	黒色土器坏	(15.2) 8.3 5.0	底部手持ヘラ削り、内面ミガキ	〃	白色粒子、小礫	No.13	
262	〃	3	須恵器坏	12.1 5.1 4.1	底部手持ヘラ削り	灰色	白・赤色粒子	No.1	完形
262	〃	4	〃	(13.4) 7.1 4.1	底部回転糸切	〃	白色粒子、小礫	No.11・12	
262	〃	5	〃	14.0 7.7 4.1	〃	〃	〃	No.10	完形
262	〃	6	〃	(14.6) 7.5 4.2	〃	灰白色	白色粒子	No.2・18	底部外面焼成後線刻
262	〃	7	〃	(15.6) 9.4 3.9	底部手持ヘラ削り	灰黄色	やや粗 白・赤色粒子	No.4	
262	〃	8	土師器小型甕A	(14.1) 9.0 13.4	内外面ヘラナデ、底部木葉痕	暗赤褐色	粗、白色粒子	No.15	
262	〃	9	須恵器甕?	— 14.1 —	外面叩き、底部ヘラ削り	内－赤灰 外－暗灰	白色粒子	No.3・18・19	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
262	370号住	10	須恵器甕?		外面叩き	灰褐色	白色粒子、小礫	No.8・14	
263	371号住	1	土師器坏A	6.4 — —	内面みこみ部暗文	褐色		No.2	底部外面墨書「宅」
263	〃	2	須恵器壷?	(7.6) — —	底部付高台	灰白色		No.1	
263	〃	3	土師器甕	(28.0) 9.4 36.1	内外面ハケメ、底部木葉痕	茶褐色	やや粗	No.1	
263	372号住	1	土師器坏A	(14.0) (9.4) 5.1	内面暗文	にぶい橙色	赤色粒子		
263	〃	2	土師器鉢B	(18.2) 8.4 12.1	底部手持ヘラ削り、外面ヘラ削り内面みこみ部暗文	〃	〃	No.11	
263	〃	3	土師器甕C?	(24.4) — —	ロクロナデ	橙色	やや粗 白・赤色粒子	No.19	
263	〃	4	須恵器坏	(12.2) 6.0 4.3	底部回転糸切	にぶい黄橙色	白色粒子	No.9	
263	〃	5	〃	(13.6) 7.3 4.1	〃	灰色	〃	No.12	
263	〃	6	〃	(13.0) (7.0) 4.1	回転ヘラ削り	〃	〃		
263	〃	7	〃	(14.2) (8.0) 4.1	底部回転糸切後、手持ヘラ削り	〃	〃	No.6	
263	〃	8	須恵器高台坏B	(13.0) (9.1) 3.3	底部回転糸切後、回転ヘラ削り付高台	〃		No.8	
263	〃	9	須恵器高台坏?	(8.9) — —	底部回転ヘラ削り、付高台	〃	白色粒子	No.16	
263	〃	10	須恵器甕	(11.4) — —	外面叩き、底部ヘラ削り	灰白色	白・赤色粒子	No.3・5・7・14・18・20	372号住
264	373号住	1	土師器甕CⅡ	(9.0) — —	底部糸切、ロクロナデ、外面叩き	淡褐色	粗、白色粒子	No.1・3・4・5・6・7	〃
264	374号住	1	土師器小型甕A?	(14.0) — —	外面ハケメ、ヘラナデ、内面ハケメ	にぶい赤褐色	白色粒子	No.2・11	
264	〃	2	土師器球胴甕A	— — —	外面カキメ	明赤褐色	〃	No.3・7・12	
264	〃	3	土師器甕CV?	(36.0) — —	〃	にぶい橙色	白色粒子、雲母	No.1・5・6・7・8・9・10	376号住　鉢か?
264	375号住	1	土師器坏B	(11.6) (7.5) 3.0	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子		
264	〃	2	土師器甕B	(26.6) — —	内外面ナデ	にぶい橙色	粗、白色粒子	竈内 No.1・3	3と同一
264	〃	3	〃	(10.0) — —	内外面ナデ、底部木葉痕	〃	〃		2と同一
265	376号住	1	須恵器坏	(13.7) (8.1) 3.8	底部回転糸切	黄灰色	白色粒子		
265	〃	2	土師器甕A	(30.6) — —	内外面ハケメ	明赤褐色	白色粒子、雲母	竈内、No.3・7・8・12・14	
265	〃	3	〃	(22.7) (9.0) —	〃	〃	白色粒子、雲母	竈内、No.2・5・9・10・11	
265	377号住	1	土師器坏A	12.4 7.6 4.6	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色		No.33	
265	〃	2	〃	12.6 7.8 5.2	体・底部回転ヘラ削り、内面みこみ部暗文	〃	赤色粒子	No.20	ほぼ完形
265	〃	3	須恵器坏	(13.3) 7.0 4.2	底部回転糸切	明オリーブ灰色		No.28	
265	〃	4	〃	14.5 7.4 4.3	〃	〃		竈内 No.7・27	
265	〃	5	須恵器高台坏A	15.6 10.0 6.0	底部回転ヘラ削り、付高台	オリーブ灰色		No.25・26・27	
265	〃	6	須恵器高坏	— — —		橙色			脚部片
265	〃	7	須恵器鉢B	— — —	ロクロナデ	外-青灰色 内-暗青灰色		No.19	
265	〃	8	〃	8.0 — —	底部回転糸切	青灰色		No.34	
265	〃	9	土師器甕CⅠ	(24.0) 9.4 (35.0)	底部回転糸切、ロクロナデ	外-にぶい黄橙色 内-明黄褐色		竈内、No.3・22・23・32・35・38	372号住
265	〃	10	須恵器甕	— — —	外面叩き、内面青海波、ヘラ削り	青灰色		No.2・5・9・14・15	
266	378号住	1	須恵器坏	(12.0) 6.2 4.1	底部回転糸切	灰白色		No.6	
266	〃	2	須恵器高台坏A	(14.0) 8.6 5.8	底部回転糸切、付高台	〃	白色粒子	No.10	底部外面墨書
266	〃	3	土師器甕CⅡ	(22.0) — —	ロクロナデ、外面叩き	橙色	粗、白色粒子	竈内 No.1・20	
266	〃	4	土師器甕CⅠ	(22.0) — —	ロクロナデ	にぶい橙色	やや粗 白色粒子、小礫	No.9・12・13・15・16・19・21	
266	〃	5	須恵器甕	(21.8) 12.4 30.6	外面叩き、内面あて具痕、底部圧痕	暗灰色	小礫	No.4	体部は完存
266	〃	6	須恵器甕	(44.0) — —	外面櫛歯状刺突文	灰黄褐色		No.3	
266	379号住	1	土師器坏A	11.0 6.7 3.9	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	赤色粒子	No.4	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
266	379号住	2	土師器坏A	11.1 5.0 4.5	底部回転糸切、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	赤色粒子		
266	〃	3	土師器高台坏	(14.2) 8.2 7.8	底部回転ヘラ削り、削り出し高台	〃	〃	No.1・10	
266	〃	4	土師器皿	(16.0) (10.2) 2.2	体部回転ヘラ削り	浅黄橙色	〃		
266	〃	5	〃			橙色			体部外面墨書
266	〃	6	土師器小型甕A	(9.8)	内外面ハケメ	にぶい赤褐色	白色粒子		
266	〃	7	土師器甕A	(23.6)	〃	明赤褐色	白色粒子、雲母	竈内 No.6・9	
266	〃	8	〃	(28.6)	〃	にぶい赤褐色	赤色粒子		
267	〃	9	須恵器甕	(51.6)	外面叩き		白色粒子	No.17	
267	381号住	1	土師器坏B	13.6 8.0 3.5	底部静止糸切後、手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子	No.4	底部外面線刻
267	〃	2	〃	(14.3) (10.7) 3.0		〃	赤色粒子	No.1	底部外面線刻
267	〃	3	土師器甕B	(20.0)	内外面ナデ	灰褐色	白色粒子		
267	382号住	1	土師器鉢D	(36.0)		橙色	白色粒子 やや粗	No.1	
267	383号住	1	土師器坏A	8.0	体・底部手持ヘラ削り、内面みこみ部暗文	〃	赤色粒子	No.21	
267	〃	2	須恵器坏	(12.2) 7.0 3.8	底部回転糸切	灰白色	軟質		
267	〃	3	〃	(12.0) (7.0) 3.3	〃	灰色	白色粒子	No.9	
267	〃	4	〃	(13.0) 6.3 4.1	底部静止糸切後、外周手持ヘラ削り	〃	〃	No.8・22	
267	〃	5	〃	(13.0) 6.8 3.7		〃	〃	No.8	
267	〃	6	〃	(13.6) 7.2 4.7	底部回転糸切	灰白色	〃	No.1・3・13	
267	〃	7	〃	(13.6) 7.0 4.3	〃	〃	軟質	竈内 No.33	
267		8	〃	(13.6) 6.9 4.7	〃	〃	白色粒子	No.5・6	
267	〃	9	〃	(9.0)	〃	〃	軟質	No.24	
267	〃	10	土師器小型甕C	(13.8) 7.8 12.4	底部回転糸切、ロクロナデ	浅黄橙色	〃	No.2・10・16・14・18	
267	〃	11	土師器甕CⅠ	(23.0) (9.0)	〃	にぶい橙色	粗、白色粒子 軟質	竈内、No.27・28・29・34・36・37	
268	384号住	1	土師器坏	(11.1) (4.6) 3.5	体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子	No.25	体部外面墨書「万」
268	〃	2	〃	(12.0) (5.0) 3.7	〃	〃	赤色粒子		〃
268	〃	3	〃	(12.0) (6.0) 4.0	〃	〃	〃	No.22	
268	〃	4	須恵器甕	(50.1)	外面櫛描波状文	内-黄灰色 外-灰白色	白色粒子	No.7	
268	385号住	1	土師器皿	9.2 4.0 2.7	底部回転糸切	にぶい黄橙色	白・赤色粒子	No.2	
268	〃	2	須恵器坏	(12.7) (7.4) 4.0	〃	灰色	白色粒子	No.14	412号住
268	〃	3	灰釉陶器椀	14.9 6.7 5.6	底部付高台	灰白色	白色粒子、軟質	No.1・3	
268	〃	4	須恵器鉢C	(17.4)		灰黄褐色	白色粒子	No.4・6	
268	387号住	1	土師器坏B	16.1 10.7 5.1	底部手持ヘラ削り、ミガキ、体部みこみ部暗文、ミガキ	橙色		No.5・6	
268	〃	2	須恵器坏	13.1 7.0 3.8	底部回転糸切	明オリーブ灰色 灰色		No.4	
268	389号住	1	土師器坏A	(12.2) 3.6 4.8	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り	橙色		No.13	
268	〃	2	〃	(13.8) 5.0 5.0	体・底部手持ヘラ削り	内-にぶい黄橙色 外-橙色		No.4	
268	〃	3	〃	13.4 5.4 5.1	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り	にぶい黄橙色			
268	〃	4	〃	(14.6) (5.2) 5.0	体・底部手持ヘラ削り	灰黄褐色	赤色粒子	竈内 No.9	
268	〃	5	土師器甕A	23.0	内外面ハケメ	にぶい黄橙色 橙色	やや粗、雲母	竈内 No.6・15	
268	390号住	1	土師器坏A	(12.0) (5.0) 4.3	体部手持ヘラ削り	にぶい橙色	白色粒子		375号住
268	〃	2	須恵器高台坏B	(13.2) (8.0) 3.9	底部回転糸切、付高台	灰褐色		No.1	
268	〃	3	土師器甕CⅡ	(22.0)	外面叩き	にぶい橙色	やや粗 白色粒子、雲母	竈内 No.2	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
268	391号住	1	土師器 皿	12.2 5.6 3.1	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子	No.4	
268	〃	2	須恵器 高台坏B	(13.4) (8.8) 4.0	底部回転糸切後、回転ヘラ削り、付高台	赤灰色	白色粒子、雲母	No.3	
268	〃	3	須恵器 坏?	(15.1) — —		にぶい赤褐色	白色粒子		
268	〃	4	灰釉陶器 皿	(13.0) (6.6) 3.0	底部回転ヘラ削り、付高台、内外面施釉	灰白色	黒色粒子	No.1	
268	〃	5	土師器 竈形土器	— — —	内外面ハケメ	赤褐色	やや粗 白色粒子、雲母	No.2	
269	392号住	1	土師器 坏A	11.6 4.8 3.5	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子、やや粗 軟質、異質	竈内 No.1・3	
269	〃	2	〃	(11.7) (4.7) 4.0	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	明赤褐色	白・赤色粒子	No.3	
269	〃	3	〃	(12.4) (4.6) 4.0	体・底部手持ヘラ削り	橙色	異質、やや粗 白色粒子	No.2・3	
269	〃	4	土師器 皿	(12.5) (3.0) 2.2	〃	〃	白・赤色粒子	No.7	
269	〃	5	緑釉陶器 耳皿	— 5.0 —	底部回転糸切、内外面施釉	緑色		No.8	
269	393号住	1	縄文土器 深鉢	— 13.0 —	縄文			No.1	縄文前期末か
269	394号住	1	縄文土器 深鉢	(31.6) (11.6) (46.0)	沈線、縄文底部網代	暗褐色	粗、白色粒子、小礫、安山岩片多量		称名寺式 421号住
269	395号住	1	須恵器 坏	(10.9) (6.4) 4.5		浅黄色	赤色粒子 焼成軟質	No.17	全体磨滅し技法は不明
269	〃	2	須恵器 蓋A	(18.1) — —		灰白色	黒色粒子	No.16	
269	〃	3	土師器 甕C?	— — —	ロクロナデ	明赤褐色	やや粗 白色粒子	No.14・24	
269	〃	4	須恵器 甕	(47.8) — —		暗赤灰色	白色粒子	No.11	
270	〃	5	土師器 甕CV	(20.2) (9.8) —	ロクロナデ	にぶい橙色	やや粗、白色粒子、 焼成やや軟質	竈内、No.2・5・10・ 15・20・21・23	
270	396号住	1	土師器 坏B	(11.4) (8.0) 3.6	底部ヘラ削り、ナデ	〃	赤色粒子		
270	〃	2	須恵器 坏?	— (6.7) —	底部回転糸切	灰白色	白色粒子	No.1	
270	〃	3	須恵器 短頸壷	9.6 — —		灰色	〃	No.9	
270	〃	4	土師器 小型甕C	(15.6) (8.9) (16.5)	ロクロナデ、底部回転糸切	にぶい橙色	粗、白色粒子多量		焼成やや不良
270	〃	5	土師器 甕CI	(19.7) — —	ロクロナデ	にぶい橙色	粗 白色粒子多量	No.3・5・6	
270	〃	6	土師器 小型甕A	(11.4) (8.2) 14.7	外面ハケメ、内面ナデ、底部木葉痕	明赤褐色	〃	No.4・7・8	
270	〃	7	弥生 壷	— — —	外面ハケメ、櫛描文	褐灰色	白色粒子	No.2	
270	397号住	1	土師器 坏A	— (3.8) —	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子 焼成やや軟質	No.3	
270	〃	2	土師器 甕A	(32.0) — —	内外面ハケメ	明赤褐色	やや粗 白色粒子、雲母	No.9	
270	〃	3	〃	(32.0) — —	〃	〃	〃	No.8	
270	〃	4	〃	(26.0) — —	〃	橙色	白色粒子	No.4・5・6	
271	398号住	1	須恵器 坏	12.8 7.6 4.3	底部回転糸切	淡黄色			
271	〃	2	〃	— 7.0 —	〃	灰色		No.1	底部外面焼成後線刻
271	〃	3	須恵器 蓋A	19.0 — —	外面回転ヘラ削り	〃		No.21	
271	〃	4	須恵器 甕	— — —	外面叩き	外-暗青灰色 内-灰色		No.19	
271	〃	5	須恵器 鉢B	(20.0) — —	ロクロナデ	灰褐色		No.32	焼成やや不良
271	〃	6	須恵器 鉢A	(29.8) — —				No.17	298号住
271	〃	7	須恵器 壷?	— 16.0 —	外面叩き	外-赤灰色 内-灰オリーブ色		No.7・29・35・ 36	
271	〃	8	土師器 甕CI?	(22.0) — —		橙色		No.30・38	
271	399号住	1	須恵器 坏	(11.9) (7.0) 3.1	底部回転糸切	青灰色		No.1	
271	400号住	1	土師器 坏A	14.3 5.0 5.7	体・底部手持ヘラ削り	橙色	黒色粒子	No.1・2	347号住
271	〃	2	〃	12.8 4.8 4.9	〃	〃		No.5	
271	〃	3	土師器 皿	12.6 3.4 2.5	〃	〃	赤色粒子	No.1	
271	〃	4	甲斐型黒色土器 坏	16.6 5.6 5.7	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	〃		No.8・10	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
271	400号住	5	土師器甕A	(29.0) — —	内外面ハケメ	明黄褐色		No.9	
271	401号住	1	土師器坏A	12.8 — —		にぶい赤褐色			
271	〃	2	土師器小型甕E	(18.2) — —		橙色	白色粒子		
271	402号住	1	土師器坏A	13.0 4.4 4.3	体・底部手持ヘラ削り	〃	白・赤色粒子	No.3・4	
271	〃	2	〃	— 4.1 —	〃	〃	赤色粒子	No.1	
271	〃	3	土師器皿	(11.7) 4.2 2.5	〃	明赤褐色	白・赤色粒子	竈内	
271	〃	4	土師器小型甕A	(19.5) — —	内外面ハケメ	赤褐色	白色粒子、雲母		
271	〃	5	土師器甕A	34.0 — —	〃	にぶい赤褐色	〃	竈内	
272	403号住	1	土師器坏A	(13.0) (4.0) 4.5	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.2	
272	〃	2	土師器皿	12.5 4.5 2.3	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	〃	No.1	
272	〃	3	土師器坏A?	— — —					底部外面墨書
272	〃	4	〃	— — —					体部外面墨書
272	404号住	1	土師器甕B	— 10.0 —	底部回転糸切、外面ヘラ削り	にぶい赤褐色	白色粒子		
272	〃	2	土師器球胴甕?	— (10.3) —	内外面ナデ、底部木葉痕	明褐色	〃	竈内	
272	405号住	1	土師器坏A	(11.8) — —	体部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子	No.1	
272	〃	2	須恵器高台坏?	— 7.8 —	底部回転ヘラ削り、付高台	青灰色	白色粒子	No.4	
272	〃	3	土師器坏A?	— (11.7) —	体部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子		体部外面線刻「山」
272	406号住	1	土師器坏A	— (13.0) —		〃	赤色粒子		須恵器か
272	〃	2	〃	— (14.0) —	体部手持ヘラ削り	〃		竈内	
272	〃	3	〃	— (5.0) —	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい褐色	赤色粒子	〃	
272	407号住	1	須恵器壺?	— (16.4) —		にぶい黄橙色		No.6	
272	408号住	1	縄文土器深鉢	(25.4) 7.5 25.0	外面ヘラナデ、底部ミガキ	暗褐色	白色粒子 雲母、小礫		4号埋甕
272	〃	2	〃	— (10.0) —	底部網代痕	にぶい黄橙色	やや粗 白色粒子		
272	〃	3	〃	— (33.0) —	外面櫛歯状沈線	〃	粗、白色粒子 小礫		417号住
272	〃	4	縄文土器鉢	— (24.4) —	外面縄文	明黄褐色	粗、白色粒子 雲母		
272	〃	5	〃	— — —	外面ナデ	にぶい褐色	粗、白色粒子	No.10	
273	409号住	1	土師器坏A	(12.0) 4.4 4.1	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色		No.17	
273	〃	2	〃	(12.0) (4.6) 3.9	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃		No.32	
273	〃	3	須恵器蓋A	(21.0) — —		〃		No.4	
273	〃	4	土師器甕A	(30.4) — —	内外面ハケメ	〃	やや粗	No.3・29	
273	〃	5	〃	— (9.4) —	内外面ハケメ、底部木葉痕	にぶい赤褐色	〃	No.23・25	
273	〃	6	須恵器凸帯壺	— — —	外面叩き、肩部凸帯	灰色		No.1	
273	410号住	1	須恵器坏	— (6.4) —	底部回転糸切	灰白色	白・黒色粒子		
273	〃	2	土師器甕CⅠ	(13.7) 7.4 22.0	底部回転糸切、ロクロナデ	にぶい橙色	粗 白・赤色粒子	竈内 No.4・9	
273	411号住	1	土師器坏A	12.6 (5.4) 4.2	体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.1	
273	〃	2	〃	— (11.4) —	体部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子	竈内	
273	〃	3	〃	— (4.4) —	体・底部手持ヘラ削り		〃	No.2	
273	412号住	1	土師器坏A	(12.2) (4.6) 3.9	体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子	No.2	
273	〃	2	〃	(13.0) (9.0) 4.0	底部回転ヘラ削り、内面・みこみ部暗文	〃	〃		底部外面線刻
273	〃	3	〃	— (7.8) —	底部静止糸切後、底部ヘラ削り	黄橙色	〃	No.47	底部外面焼成後線刻
273	〃	4	土師器坏D	— (12.0) —		〃	やや粗 赤色粒子、小礫		脚か?

（法量は口径・底径・器高の順、一は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
273	412号住	5	須恵器坏	(11.0)		灰黄色	白色粒子		
273	〃	6	〃	(12.0)	底部周辺手持ヘラ削り	灰色	白・赤色粒子	No.24	灯明具
273	〃	7	〃	(13.0) (6.5) 3.5	底部回転糸切	灰オリーブ色	白・赤色粒子、小礫	No.40	338号住
273	〃	8	〃	(13.0) 6.5 3.5	〃	淡黄色	白色粒子、小礫	No.12	
273	〃	9	〃	(13.4) (8.0) 3.7	〃	灰白色	白色粒子		
273	〃	10	〃	(14.0) (8.2) 4.4	〃	灰色	白色粒子、小礫		
273	〃	11	〃	(14.0) (10.6) 3.7	底部回転糸切、外周・周辺回転ヘラ削り	〃	白色粒子		
273	〃	12	〃	(15.0) (7.8) 4.5	底部回転糸切	灰白色	白色粒子、小礫	No.39・42	
273	〃	13	須恵器蓋A	(13.4)	外面回転ヘラ削り	青灰色	白色粒子	No.37	
273	〃	14	〃	(14.0) 3.5	〃	灰色	白色粒子、小礫	No.46	
273	〃	15	〃	(15.6) 4.0	〃	青灰色	〃		
273	〃	16	〃	(17.4) 4.2	〃	黄灰色	やや粗、白色粒子	No.54	417・421号住
274	〃	17	〃	(18.6) 3.9	〃	灰色	白色粒子	No.4	318号住
274	〃	18	〃	(21.0)	〃	〃	白色粒子、小礫		318・417号住
274	〃	19	土師器小型甕C	(14.0) (7.5)	底部回転糸切	橙色	〃	No.11	表面剥離 338・421号住
274	〃	20	土師器小型甕B	(11.0) (7.0)	底部木葉痕、内外面ナデ	外-黒褐色 内-黄褐色	粗、白色粒子	No.6・17	
274	〃	21	土師器小型甕C	(7.4)	底部回転糸切、内外面ナデ	にぶい橙色	やや粗 赤色粒子、小礫	No.45	
274	〃	22	土師器甕CⅠ	(20.0) (9.0) 35.1	底部静止糸切、ロクロナデ	黄褐色	粗、小礫多量	竈内、No.5・9・10・13・14・31	318・338号住
274	〃	23	土師器球胴甕A	8.4	内外面ハケメ、底部木葉痕	黒褐色～黄褐色	やや粗、白色粒子 雲母、小礫	No.30・48	
274	〃	24	須恵器甕	(41.0)	外面波状文	灰黄褐色	白色粒子	No.51	338号住
274	〃	25	〃	(36.0)		灰色	〃	No.38	
274	〃	26	須恵器壷?	(12.0)	底部回転ヘラ削り、付高台、外面叩き	暗灰色	白色粒子、小礫	No.32	318・338号住
274	〃	27	〃	(8.0)	底部付高台	灰色	やや粗 白色粒子、小礫	No.56	
274	〃	28	〃	(13.0)	底部回転ヘラ削り、付高台	〃	白色粒子	No.29	
274	413号住	1	土師器坏A	(12.4) (5.1) (3.3)	体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子		
274	〃	2	〃	(15.8) (6.9) 5.2	体・底部回転ヘラ削り	〃	白色粒子		
274	〃	3	土師器皿	12.3 5.4 2.6	〃	〃	白・赤色粒子	No.1	
274	〃	4	黒色土器椀	7.0	底部付高台、内面ミガキ黒色	にぶい黄橙色	白色粒子	No.8	
274	〃	5	土師器坏?			橙色			底部外面墨書
274	414号住	1	土師器坏A?	(8.0)	体・底部手持ヘラ削り	〃		No.15	
274	〃	2	〃	7.6	底部回転糸切、周辺回転ヘラ削り	にぶい黄橙色		No.8	
274	〃	3	須恵器坏	(7.0)	底部回転糸切	灰白色		No.28	
274	〃	4	〃	7.0	底部糸切、ナデ	〃		No.22	
274	〃	5	須恵器高台坏B	13.8 7.9 3.1	底部付高台	青灰色		No.18	
274	〃	6	灰釉陶器平瓶			灰白色		No.29	混入か
275	〃	7	土師器甕CⅠ	26.4	ロクロナデ	外-にぶい褐色 内-にぶい黄橙色		No.9	
275	〃	8	土師器甕A	10.8	内外面ハケメ	明赤褐色	やや粗	No.16	
275	〃	9	須恵器甕?	22.4		外-明青灰色 内-紫灰色		No.20	
275	〃	10	〃	(14.6)	外面叩き	外-暗青灰色 内-青灰色		No.12・21	
275	415号住	1	土師器竈形土器	(29.0)	内外面ハケメ	暗褐色	白・赤色粒子 雲母		
275	416号住	1	土師器坏A	6.2	底部糸切、体部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	赤色粒子	No.4	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
275	416号住	2	須恵器坏	12.0 (6.0) 4.2	底部回転糸切	浅黄色			
275	〃	3	須恵器蓋A	18.8		灰色		No.16	
275	〃	4	須恵器壷	9.8	底部回転糸切、付高台	外-暗灰色 内-灰赤色		No.5・6・7・11	
275	〃	5	須恵器壷?	14.0	外面叩き	外-暗青灰色 内-紫灰色		No.8	
275	〃	6	須恵器甕		〃	浅黄色		竈内、No.2・9・10・12・14	
276	417号住	1	縄文土器深鉢	(24.4) 10.5 31.4	底部網代痕、外面沈線文	にぶい橙色	白・赤色粒子 小礫多量		
276	〃	2	〃	(27.0)	口縁部環状把手、微隆起線文、縄文	黒褐色	白・赤色粒子 雲母、小礫		
276	〃	3	〃		微隆起線文、縄文	茶褐色	赤色粒子 雲母、小礫		
276	〃	4	〃		〃	にぶい黄褐色	白色粒子、小礫		
276	〃	5	〃		微隆起線文、沈線、縄文	黄褐色	雲母、小礫		
276	〃	6	〃		〃	にぶい黄褐色	白色粒子、小礫		
276	〃	7	〃		沈線、縄文	にぶい黄橙色	〃		
276	〃	8	〃		微隆起線文、沈線、縄文	黄褐色		炉内	
276	〃	9	〃		微隆起線文、縄文	〃	白・赤色粒子 小礫	炉内	
276	〃	10	〃		〃	〃	粗、赤色粒子 雲母、小礫		
276	418号住	1	土師器皿	(14.2) 3.1	体部回転ヘラ削り	橙色			
276	〃	2	須恵器壷?	7.0	外面叩き	青灰色		No.1	
276	419号住	1	土師器坏A	(11.3) 4.5 4.3	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	灰白色	やや粗	No.1	
276	〃	2	土師器高台坏	(14.0) 7.7 5.2	底部回転糸切り、削り出し高台	浅黄橙色	〃	No.2	
276	420号住	1	土師器坏A	(10.4) (5.4) 3.8	〃	〃		No.3	
276	〃	2	〃	(5.4)	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り内面暗文	橙色	赤色粒子	No.7	みこみ部線刻
276	〃	3	須恵器坏	(11.0) 6.4 3.8	底部回転糸切	灰黄色	白色粒子	No.5	
276	〃	4	須恵器蓋A	(16.8) 3.3	外面回転ヘラ削り	灰色	〃	No.1	
276	〃	5	土師器小型甕C	(13.1) 7.2 11.7	底部回転糸切、ロクロナデ	にぶい黄橙色	やや粗 白色粒子	No.13	
276	〃	6	土師器甕A	(8.2)	内外面ハケメ、底部木葉痕	にぶい赤褐色	〃	No.2	
276	421号住	1	縄文土器深鉢	(49.0)	縄文、沈線文	明黄褐色	白色粒子多量 礫	No.8・10・11・14	
276	〃	2	〃	(30.0)	沈線文、ハ字文	茶褐色	白色粒子、雲母 小礫	No.16	293号住No.16
277	〃	3	〃	(16.0)	沈線文	暗褐色	やや粗、白色粒子 雲母、小礫	No.19	
277	〃	4	〃		沈線文、櫛歯状ハ字文	にぶい褐色	白色粒子、雲母	No.17	
277	〃	5	〃	(30.0)	沈線文	暗褐色	やや粗、白・赤色 粒子、雲母、小礫	No.1	
277	〃	6	〃		沈線文、櫛歯状文	〃	赤・黒色粒子 小礫	No.5	
277	〃	7	〃		沈線文、ハ字文	黄褐色	やや粗 小礫、雲母	No.2	
277	〃	8	〃		〃	〃	やや粗、赤色粒子 雲母、小礫	No.6・9	
277	〃	9	土師器坏A	(12.0) 5.6 4.3	底部回転糸切後、体部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子		混入
277	〃	10	須恵器坏	(10.8) (5.6) 3.5	底部回転糸切				〃
277	〃	11	〃	(11.9) (5.2) 4.0	〃	灰白色			〃
277	〃	12	土師器坏?		内面暗文				体部外面墨書、混入
277	〃	13	〃						底部外面墨書「松」、混入
277	〃	14	灰釉陶器長頸壷		把手付				把手部、混入
277	422号住	1	土師器坏B	(12.1) (7.1) 3.4	底部ヘラ削り、ナデ	橙色	赤色粒子		底部外面・みこみ部線刻
277	〃	2	土師器坏A	(7.8)	底部静止糸切後、ヘラ削り、ナデ内面みこみ部暗文	〃	〃		底部外面線刻

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
277	422号住	3	須恵器 坏	(13.8) — —		灰白色	白色粒子		
277	〃	4	〃	(14.6) (9.0) 3.7	底部ナデ	〃	〃		
277	〃	5	須恵器 蓋A	(18.0) — —		灰　色	〃		
277	〃	6	土師器 小型甕C	(11.8) — —	ロクロナデ	明黄褐色	〃		
277	423号住	1	土師器 甕CⅠ	(19.0) — —	〃	橙　色	粗、白色粒子	竈内 No.1	
277	〃	2	〃	(21.0) — —	〃	〃	〃	竈内	
277	〃	3	土師器 円筒土器	— — —	外面叩き	〃	粗、白・赤色粒子 やや軟質		
277	424号住	1	須恵器 坏	(11.0) — —		オリーブ灰色		竈内	
277	425号住	1	須恵器 蓋A	(18.0) — —		緑灰白色			

第２節

掘立柱建物址出土土器

第４表　掘立柱建物址出土土器観察表

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（　）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
278	２号掘立	1	須恵器鉢A	28.0 — —	外面叩き	内－灰赤色 外－赤灰色	白色粒子	No.1	
278	10号掘立	2	土師器坏A	11.0 5.4 4.2	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子		完形、底部外面墨書「木」、灯明具
278	〃	3	〃	(11.7) 6.7 5.3	底部糸切後ナデ、体部手持ヘラ削り	にぶい黄橙色	〃		ピット
278	〃	4	〃	(11.4) (8.2) 4.5	体・底部手持ヘラ削り、内面みこみ部暗文	〃			ピット
278	〃	5	〃	(7.0) —	底部回転糸切	〃	赤色粒子	No.39	
278	〃	6	須恵器高台坏A	(11.0) (6.2) 4.6	底部回転ヘラ削り、付高台	灰色	白色粒子	No.11	A23B24
278	〃	7	須恵器坏	(12.0) — —		にぶい橙色	〃	No.28	
278	〃	8	〃	8.0 —	底部回転糸切	にぶい黄橙色	白・赤色粒子	No.3	
278	〃	9	須恵器蓋A	(14.7) — —	外面回転ヘラ削り	橙色	白色粒子		ピット
278	〃	10	〃	(18.9) — —	〃	灰色	白・赤色粒子	No.35	
278	〃	11	須恵器甕	(24.8) — —		暗褐色	白色粒子	No.9	
278	〃	12	須恵器長頸壷?	4.8 — —		灰色	〃	No.40	壷Gか
278	〃	13	須恵器壷	— — —		〃	〃	No.16・18・22・31	ピット
278	11号掘立	14	土師器皿	(18.8) — —	内面渦巻状暗文	明褐色	〃	No.2	
278	〃	15	須恵器坏	6.6 —	底部回転糸切	灰白色	〃	No.1	
278	17号掘立	16	土師器甕A	(28.0) —	内外面ハケメ	明赤褐色	〃	No.14	
278	18号掘立	17	須恵器高台坏B	(12.9) (9.8) 3.7	底部付高台	褐灰色	〃	No.1	
278	21号掘立	18	土師器皿	(10.0) —	底部回転ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.2	
278	〃	19	須恵器蓋A	(14.6) — —	外面回転ヘラ削り	灰色	白・黒色粒子	No.1	
279	28号掘立	20	甲斐型黒色土器坏	(10.7) (5.2) 4.0	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文、黒色	橙色	赤色粒子	No.2	
279	31号掘立	21	土師器坏A	(12.0) — —	体部手持ヘラ削り	灰色			85号住
279	〃	22	〃	(13.0) — —	〃	橙色			〃
279	〃	23	〃	5.2 —	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子		〃
279	35号掘立	24	黒色土器坏	(11.6) (5.4) 4.2	底部手持ヘラ削り、内面黒色	黄褐色	やや粗 白色粒子、雲母		ピット、外面剥離
279	〃	25	甲斐型黒色土器坏	(15.7) —	体部手持ヘラ削り、内面黒色	橙色	やや粗		ピット
279	38号掘立	26	土師器坏A	(11.8) 6.0 4.3	底部糸切後、ナデ、体部手持ヘラ削り、内面、みこみ部暗文	赤褐色		No.1	体部外面、底部外面墨書「十」
279	51号掘立	27	土師器皿	12.0 2.8 2.6	体・底部手持ヘラ削り	橙色		No.1	完形、歪みあり
279	〃	28	〃	12.4 4.0 2.6	〃	〃		No.2	

第３節

土坑出土土器

第５表　土坑出土土器観察表

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（　）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
280	１号土坑	1	縄文晩深鉢	(50.0) — (40.5)	口縁部一条の沈線、外面はヘラ削り後ナデ	灰褐色	白色粒子		２と合わせ口で埋置
280	〃	2	〃	(40.0) 9.0 3.8	口縁部一条の沈線、内外面ヘラナデ、ヘラ削り、底部ナデ	明灰褐色	白色粒子、雲母		

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
280	3号土坑	3	縄文晩深鉢	(34.0) — —	内外面ヘラナデ、ヘラ削り	黄褐色	粗、安山岩片多量 白・赤色粒子、雲母	No.1・2・3	
280	4号土坑	4	土師器坏A	(11.0) (5.2) 4.4	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	5号土坑No.5	
280	〃	5	須恵器坏	(11.8) 6.0 4.1	底部回転糸切	にぶい橙色 褐灰色		5号土坑No.1	
280	〃	6	須恵器高台坏A	(17.0) — —		灰色	白色粒子	5号土坑No.3	
280	〃	7	須恵器長頸壷?	— — —	ロクロナデ	〃	〃	5号土坑No.10	
280	〃	8	土師器円筒土器	(13.0) —	底部木葉痕、外面ヘラ削り、内面ナデ	にぶい赤褐色	粗 白色粒子多、小礫	5号土坑No.6	
280	〃	9	土師器鉢AI	(29.4) 7.5 17.4	底部木葉痕、内外面ハケメ	褐色	粗、白・黒色粒子 雲母	5号土坑 No.7・9	
280	5号土坑	10	縄文前深鉢	(25.5) 10.5 37.8	縄文	にぶい褐色	小礫、白・黒色粒子、雲母	7号土坑 No.1・6	
281	6号土坑	11	〃	(29.0) —	口縁部押引竹管文、渦巻文、胴部縄文、押引竹管文	暗褐、橙色	やや粗 白色粒子、雲母	8号土坑 No.1・2・3・4・7	十三菩提式
281	〃	12	〃	(22.0) (10.2) (15.1)	縄文、押引竹管文、押圧文	にぶい赤褐色	粗、雲母・白色粒子多量、赤色粒子	8号土坑No.5	〃
281	〃	13	〃	(13.4)	縄文、底部外周に押圧	〃	やや粗、白色粒子 黒色粒子多量	8号土坑 No.1・10	〃
281	〃	14	〃		縄文	暗褐色	やや粗 白・赤色粒子	8号土坑No.9	種子圧痕
281	22号土坑	15	土師器坏A	(3.8)	底部糸切後、手持ヘラ削り	橙色		135号土坑	底部外面墨書「木」
281	39号土坑	16	須恵器高台坏?	8.8	底部回転糸切り、付高台	灰色		142号土坑 No.2	
281	〃	17	須恵器鉢A	—	外面叩き	灰白色		142号土坑 No.1	
281	36号土坑	18	灰釉陶器皿	(7.6)	付高台、内面施釉	オリーブ灰色		17号土坑No.1	
281	〃	19	土師器竈形土器	25.6 29.6 29.5	内外面ハケメ	赤褐色 黒褐色		17号土坑 No.5～12	

第4節

単独埋甕出土土器

第6表　単独埋甕出土土器観察表

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
282	1号埋甕	1	縄文・中深鉢	(11.1)	沈線文、縄文、底部ナデ	褐色	白・赤色粒子	A23B28	底部穿孔(径2.5cm)
282	2号埋甕	2	〃	(11.0)	隆線、縄文、底部ナデ	にぶい褐色	白色粒子、小礫	A22・23B28	体部内面線刻、底部穿孔(径3.5cm)
282	〃	3	〃	(34.0) 4.5	縄文、底部網代	にぶい黄褐色	白・赤色粒子、小礫	〃	2の内部から出土
282	3号埋甕	4	〃	(38.0) 5.5 50.6	微隆起線文、縄文、底部ナデ	にぶい橙色	白色粒子、小礫		

第5節

溝址出土土器

第7表　溝址出土土器観察表

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
283	1号溝	1	土師器坏A	(11.8) (3.8) 3.3	体部手持ヘラ削り	にぶい黄橙色	白色粒子多量	No.6	
283	〃	2	〃	(11.6) (6.0) 2.9	体・底部手持ヘラ削り	赤褐色		No.1	
283	〃	3	〃	(12.2) (5.0) 3.9	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	No.7	
283	〃	4	灰釉陶器皿	(14.0) (7.6) 3.1	付高台、内外面施釉	灰白色		No.5	
283	〃	5	灰釉陶器椀	(7.9) —	底部回転ヘラ削り、付高台	〃		No.3	
283	4号溝	6	土師器坏A	10.3 (6.0) 3.9	内面暗文	橙色			

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
283	5号溝	7	須恵器高台坏B	(12.3) (7.7) 3.7	底部回転ヘラ削り、付高台	青灰色			
283	〃	8	縄文土器深鉢	10.0					混入
283	7号溝	9	土師器皿	(8.8) (5.0) 2.2	底部回転糸切	黄灰色			
283	〃	10	土師器皿?	(13.0) (9.0) 2.7	底部回転ヘラ削り	橙色			
283	〃	11	〃	(17.0)		〃			
283	11号溝	12	須恵器坏	(10.8) (6.0) 3.8	底部回転糸切	灰色	白色粒子		
283	〃	13	〃	7.6	底部回転糸切後、手持ヘラ削り	黄灰色	やや粗、白色粒子	No.6	
283	〃	14	須恵器壷?	7.4	底部回転糸切	灰色	白・黒色粒子	No.2	
283	〃	15	須恵器長頸壷?	20.0	ロクロナデ				
283	〃	16	須恵器凸帯壷		外面叩き、肩部突帯	灰色	白色粒子	No.7	四耳壷か
283	〃	17	縄文土器深鉢		竹管文	にぶい赤褐色	〃	No.9	諸磯b式か
283	〃	18	〃		縄文、竹管文	〃	〃	〃	〃
283	14号溝	19	須恵器坏	7.0	底部回転糸切	にぶい黄橙色			
283	15号溝	20	土師器坏A	(11.9) (6.0) 3.8	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、暗文	橙色	赤色粒子	(旧)22溝	
283	〃	21	土師器皿	(11.5) (4.9) 2.0	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	〃	〃	
283	〃	22	須恵器坏	(13.5) 10.0 4.8	底部回転ヘラ削り、内面ミガキ	褐色	白・赤色粒子	〃	
283	〃	23	縄文土器深鉢	(36.0)	ヘラ削り後、沈線文	黄褐色	白・黒、赤色粒子 小礫	〃	堀之内式
284	16号溝	24	土師器坏A	(11.2) 5.2 4.2	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色		(旧)20溝	
284	〃	25	須恵器坏	(13.0) (4.0) 4.2	底部回転糸切	オリーブ灰色	やや粗、白・黒色粒子	(旧)20溝 No.18	
284	〃	26	土師器甕CⅣ	29.0	外面かすかなハケメ、内面ナデ	にぶい橙色	やや粗、白・赤色粒子	(旧)20溝 No.41	
284	〃	27	縄文土器深鉢	15.0	沈線文	黒褐色	黒・白色粒子	(旧)20溝 No.10	堀之内式
284	〃	28	〃		縄文			(旧)20溝	
284	〃	29	〃		条痕文(晩期)	にぶい橙色	粗	(旧)20溝 No.24	
284	17号溝	30	土師器皿	7.8 4.8 2.2	ナデ	〃	粗、雲母	(旧)19溝 No.1	
284	〃	31	〃	5.0		にぶい褐色	白色粒子 安山岩片	(旧)19溝 No.2	
284	〃	32	土師器皿	(14.0)		〃	白色粒子	(旧)19溝	体部外面墨書
284	〃	33	灰釉陶器皿	6.4	付高台、外面施釉	にぶい黄橙色	白色粒子	(旧)19溝 No.3	
284	〃	34	青磁皿	(17.8)	沈線文			(旧)19溝	
284	20号溝	35	土師器坏B	(14.8) (10.0) 4.0	底部手持ヘラ削り、内面暗文状ミガキ	にぶい橙色	赤色粒子	(旧)26溝	
284	〃	36	須恵器坏	(11.8) (8.6) 3.2	底部回転ヘラ削り	にぶい黄色	白色粒子	〃	

第6節

畝状遺構出土土器

第8表　畝状遺構出土土器観察表

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
284	2号畝	1	土師器坏A	5.0	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	白色粒子		体部外面墨書
284	〃	2	〃	(9.0)	みこみ部暗文	明赤褐色			底部外面線刻(焼成後)
284	〃	3	〃	10.0		にぶい橙色			〃
284	〃	4	〃			橙色			体部外面墨書「万」
284	〃	5	土師器甕A	(29.0)	内外面ハケメ	にぶい赤褐色	粗、白・黒色粒子、雲母		

第７節

溝状遺構出土土器

第９表　１号溝状遺構出土土器観察表

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
285	１号溝状遺構	1	土師器坏Ａ	(10.6) (6.4) 3.9	体・底部回転ヘラ削り	橙　色	やや硬質	No.120	
285	〃	2	土師器坏Ｃ	(11.4) (5.2) 4.0	体・底部手持ヘラ削り、内外面ハケメ状のナデ	淡黄色	異質、雲母、長石、赤色粒子やや多い		
285	〃	3	土師器坏Ａ	(10.8) (6.0) 4.6	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙　色		No.34	
285	〃	4	〃	(11.2) (6.0) 4.0	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	浅黄色		No.47	
285	〃	5	〃	(12.0) (6.4) 4.1	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙　色			
285	〃	6	〃	(11.7) 5.0 4.7	体・底部手持ヘラ削り	〃			
285	〃	7	〃	(11.7) (5.6) 4.0	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子		
285	〃	8	〃	(15.0) (4.4) 4.8	〃	〃	〃		
285	〃	9	〃	(16.0) — —		〃			
285	〃	10	土師器小型壷C?	— 4.4 —		〃		No.26	鉢か
285	〃	11	土師器坏Ａ	— (5.4) —	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色			
285	〃	12	土師器高台坏	— (15.1) —	底部～周辺回転ヘラ削り、付高台みこみ部放射状ミガキ	橙　色		No.52・53	
285	〃	13	〃	— (7.8) —	体・底部回転ヘラ削り	〃	赤色粒子	No.41	
285	〃	14	〃	— 6.0 —	付高台	〃	〃		
285	〃	15	土師器蓋Ａ	— — —	内外面渦巻状暗文			No.48	
285	〃	16	〃	— — —	外面回転ヘラ削り			No.19	
285	〃	17	土師器高坏	— — —				No.257	脚部片
285	〃	18	〃	— — —	外面ナデ	橙　色	赤色粒子		
285	〃	19	甲斐型黒色土器坏	— 6.8 —	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面黒色				
285	〃	20	土師器甕CV?	(30.0) — —	ロクロナデ、カキメ	橙　色	白色粒子	No.13	
285	〃	21	土師器甕Ｂ	(12.7) — —	内外面ナデ	〃	白・赤色粒子	No.4.5	
285	〃	22	須恵器坏	(11.0) 5.2 3.9	底部回転糸切	明褐灰色	白色粒子	No.176	
285	〃	23	〃	(11.6) 6.6 3.6	〃	灰白色			
285	〃	24	〃	11.2 6.6 4.2	〃	淡黄色	赤色粒子	No.29	
285	〃	25	〃	(11.4) 6.4 4.7	体・底部手持ヘラ削り	灰　色		No.27	
285	〃	26	〃	(12.4) (6.4) 3.7		〃			
285	〃	27	〃	(12.6) — 3.7		灰黄褐色	白・赤色粒子	No.70	
285	〃	28	〃	(13.2) 7.2 3.1	底部回転糸切後、外周手持ヘラ削り	灰　色	白色粒子	No.57	
285	〃	29	〃	(13.0) 8.0 3.8	底部手持ヘラ削り	青灰色	白色粒子	No.65	
285	〃	30	〃	(13.0) (6.6) 4.1	底部回転糸切	灰　色			
285	〃	31	〃	(13.8) (8.8) 3.9	底部回転ヘラ削り	〃	やや粗、白色粒子		
285	〃	32	〃	— 6.8 —	底部回転糸切	〃	やや粗、白・赤色粒子		
285	〃	33	須恵器高台坏Ｂ	— 5.0 —	底部手持ヘラ削り	〃		No.115	
285	〃	34	〃	12.4 8.8 3.2	底部回転糸切り、付高台	浅黄色	やや粗、白・赤色粒子	No.69	
285	〃	35	〃	(7.2) (9.4) 4.0	〃	灰　色		No.30	
285	〃	36	須恵器高台坏Ａ	(17.2) 10.4 6.0	〃	灰白色	白色粒子	No.341・342・343	
285	〃	37	須恵器高台皿	(21.0) (15.4) 4.4	〃	灰　色	白・黒色粒子	No.142	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
285	1号溝状遺構	38	須恵器 鉢D	(18.0) — —	ロクロナデ、鉄鉢形	にぶい黄橙色			
285	〃	39	須恵器 蓋A	(21.0) — —		褐灰色	白色粒子	No.228・315	
285	〃	40	〃	— — —	外面回転ヘラ削り	紫灰色	白色粒子少量	No.286	
285	〃	41	須恵器 蓋C	— — —	〃	にぶい赤褐色	白色粒子		
285	〃	42	須恵器 鉢B	(17.8) 8.5 11.2	底部回転糸切、ロクロナデ	灰黄色	〃	No.140・141	
286	〃	43	〃	(18.1) — —		灰　色	白・黒色粒子		
286	〃	44	〃	(18.0) — —		〃	白色粒子		
286	〃	45	須恵器 鉢A	(27.0) — —	外面叩き	オリーブ灰色	やや粗 白色粒子	No.125	
286	〃	46	須恵器 甕	(31.8) — —	ロクロナデ	灰　色	〃	No.226	
286	〃	47	〃	(38.0) — —	２段の櫛歯状刺突文	灰白色		No.28・172	
286	〃	48	〃	(48.0) —	３段の櫛描波状文	暗灰色		No.159・193・195・196・197・212・215・217・218・220・244・251・252・254・280・332	
286	〃	49	〃	(21.5) — —	〃	灰白色		No.28・199	
286	〃	50	〃	(48.2) — —		黄灰色	白色粒子		
287	〃	51	〃	— — —	外面叩き	灰　色	〃	No.275	
287	〃	52	〃	— — —	外面叩き、内面青海波	にぶい褐色	白・黒色粒子		
287	〃	53	〃	— — —	外面叩き	褐灰色	白・赤色粒子	No.157・158・187	
287	〃	54	〃	— (12.0) —		灰　色	白・黒色粒子		別の甕片が底部に付着
287	〃	55	〃	— — —	外面叩き（叩き目が特殊文様）	〃	〃	No.39	
287	〃	56	須恵器 壷?	(22.0) — —	外面叩き	灰赤色	白色粒子	No.150・227	
287	〃	57	〃	(20.0) — —		灰　色	〃	No.336	
287	〃	58	須恵器 凸帯壷?	— — —	外面叩き、底部に凸帯、内面ハケメ	〃	白・赤色粒子		凸帯付
287	〃	59	〃	(22.0) (13.0) —	外面叩き、肩部に凸帯、耳	褐灰色	白色粒子	No.51・117・135・138	凸帯付四耳壷
288	〃	60	須恵器 円面硯	— (18.0) —	長方形の透かし	黒褐色	〃		脚部片
288	〃	61	灰釉陶器 椀	(12.6) (6.6) 3.7	付高台、内外面施釉	灰白色			
288	〃	62	〃	(14.7) 7.1 5.0	〃	暗灰黄色	白色粒子	No.112	
288	〃	63	緑釉陶器 椀	(15.0) — —	内外面施釉	緑　色			
288	〃	64	灰釉陶器 椀	— (7.2) —	付高台、内面施釉	灰白色			
288	〃	65	灰釉陶器 皿?	— (7.6) —	付高台	〃			
288	〃	66	灰釉陶器 椀	— (7.6) —	付高台、内外面施釉	浅黄色			
288	〃	67	灰釉陶器 皿	(16.7) (7.8) 3.1	付高台、内外面施釉（つけかけ）	明緑灰色～オリーブ灰色			
288	〃	68	〃	— 7.0 —	付高台、内面施釉	灰　色			
288	〃	69	灰釉陶器 短頸壷	— (4.9) —		灰白色		No.75	
288	〃	70	灰釉陶器 耳　皿	— (8.0) 5.4	釉ほとんどなし	灰オリーブ色			
288	〃	71	〃	— 4.4 —	外面施釉	〃			
288	〃	72	灰釉陶器 蓋	7.0 — —		灰　色			
288	〃	73	灰釉陶器 長頸壷	11.7 — —		オリーブ灰色		No.37	
288	〃	74	〃	(12.0) — —		明オリーブ灰色			
288	〃	75	灰釉陶器 壷?	— (7.8) —	付高台	灰白色			
288	〃	76	〃	— (15.9) —	〃	明オリーブ灰色			
288	〃	77	〃	— — —	外面施釉	外面—オリーブ灰色 内面—明青灰色			
288	〃	78	土師器 高台坏	(15.1) 9.7 6.6	底部糸切後、体・底部回転ヘラ削り、削り出し高台、内外面みこみ部暗文	橙　色		No.53	底部外面墨書「宅」

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
288	1号溝状遺構	79	土師器坏A	— — —		褐色			体部外面墨書
288	〃	80	〃	— — —		〃			〃
288	〃	81	〃	— — —		〃			〃
288	〃	82	〃	— — —		橙色			〃
288	〃	83	土師器坏A?	— — —	体部手持ヘラ削り	〃			〃
288	〃	84	〃	— — —	〃	〃			〃
288	〃	85	〃	— — —	体・底部手持ヘラ削り	〃			〃
288	〃	86	〃	— — —	〃	白褐色			〃
288	〃	87	土師器皿	— (3.6) —	〃	褐色	白色粒子多量		〃
288	〃	88	土師器坏A?	— (9.0) —	底部手持ヘラ削り	橙色			底部外面墨書
288	〃	89	〃	— — —		〃			底部外面墨書「宅」
288	〃	90	土師器高台坏	— (7.8) —	体・底部回転ヘラ削り、削り出し高台、みこみ部暗文	褐色			底部外面墨書「宅」?
288	〃	91	土師器坏A	— (7.0) —	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、みこみ部暗文	橙色			底部外面墨書「宅」
288	〃	92	〃	— (7.6) —	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃			底部外面墨書「宅」?
288	〃	93	〃	— — —	底部ミガキ	〃			底部外面墨書
288	〃	94	〃	— — —	体・底部手持ヘラ削り	〃		No.200	底部外面墨書「万」
288	〃	95	〃	— (7.0) —	底部糸切後、体・底部みこみ部暗文	〃			底部外面墨書
288	〃	96	土師器皿?	— — —	底部手持ヘラ削り みこみ部暗文	〃			底部外面墨書「家」
288	〃	97	〃	— — —	体・底部回転ヘラ削り	〃			底部外面墨書「中」
288	〃	98	土師器坏A	— (4.6) —	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	褐色			底部外面墨書、薄い
288	〃	99	〃	— (6.0) —	〃	橙色			底部外面墨書
288	〃	100	〃	— (6.0) —	体・底部手持ヘラ削り、内面みこみ部暗文	白褐色			〃
288	〃	101	土師器?	— — —	底部糸切後回転ヘラ削り	橙色			〃
288	〃	102	〃	— — —		〃			底部外面墨痕?
288	〃	103	〃	— — —	みこみ部暗文	〃			底部外面墨書
288	〃	104	〃	— — —	底部手持ヘラ削り	褐色			底部外面墨書「丙」
289	〃	105	土師器高台坏	— — —	底部削り出し高台	橙色			底部外面墨書
289	〃	106	須恵器高台坏?	9.2 9.2 —	底部回転ヘラ削り、付高台	灰色	やや粗、白色粒子		〃
289	〃	107	須恵器坏	— 6.0 —	底部手持ヘラ削り	灰白色	やや粗、白・赤色粒子、やや軟質		底部外面墨書「宅」?
289	〃	108	土師器高台坏	— (8.2) —	底部糸切後、体・底部回転ヘラ削り、削り出し高台、内面みこみ部暗文	褐色		No.166	底部外面線刻
289	〃	109	土師器坏A	— (6.0) —	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色			〃
289	〃	110	〃	— (4.2) —	〃	褐色			みこみ部焼成後線刻
289	〃	111	〃	— (7.8) —	底部手持ヘラ削り	白褐色			底部外面線刻
289	〃	112	〃	— (7.0) —	体・底部手持ヘラ削り	橙色			〃
289	〃	113	〃	— (8.0) —	〃	〃			〃
289	〃	114	〃	— (11.6) —	体・底部手持ヘラ削り、みこみ部暗文	〃			底部内外面線刻
289	〃	115	〃	— (7.0) —	体・底部手持ヘラ削り	〃			底部外面線刻
289	〃	116	土師器高台坏	— (7.4) —	体・底部回転ヘラ削り、削り出し高台、内面みこみ部暗文	〃			〃
289	〃	117	〃	— (7.8) —	底部静止糸切後、回転ヘラ削り、削り出し高台、内面みこみ部暗文	〃			〃
289	〃	118	土師器?	— (7.4) —	体・底部手持ヘラ削り、ナデ	白褐色			〃
289	〃	119	〃	— — —	底部糸切後、手持ヘラ削り	にぶい赤褐色			〃

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
289	1号溝状遺構	120	土師器？	— — —	底部手持ヘラ削り、みこみ部暗文(ミガキ)	橙色			底部外面線刻
289	〃	121	〃	— — —	底部手持ヘラ削り	褐色			〃
289	〃	122	〃	— — —	底部ナデ	白褐色			みこみ部線刻
289	〃	123	土師器坏A	— (5.2) —	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	黄褐色			底部外面ヘラ書
289	〃	124	土師器？	— — —	底部ミガキ、みこみ部暗文(ミガキ)	橙色			底部外面線刻
289	〃	125	〃	— — —	底部静止糸切後、手持ヘラ削り	褐色			底部外面焼成後線刻
289	〃	126	〃	— — —	底部ナデ、みこみ部暗文	白褐色			底部外面線刻
289	〃	127	〃	— — —	みこみ部暗文	褐色			底部外面焼成後線刻、焼成前沈線
289	〃	128	土師器皿	— — —	底部静止糸切後、回転ヘラ削りみこみ部暗文	橙色			底部外面線刻
289	〃	129	土師器？	— — —	底部糸切後、手持ヘラ削り、ナデ	〃			底部外面焼成後線刻
289	〃	130	〃	— — —		〃			底部外面線刻
289	〃	131	〃	— — —	底部ナデ	〃			底部外面焼成後線刻
289	〃	132	〃	— — —	底部回転ヘラ削り	〃			底部外面線刻、皿か
289	〃	133	〃	— — —	底部静止糸切後、手持ヘラ削り	〃			〃
289	〃	134	〃	— — —	〃	にぶい橙色			〃
289	〃	135	〃	— — —	底部ヘラ削り	橙色			みこみ部線刻
289	〃	136	須恵器坏	— 7.4 —	底部回転糸切	灰色		No.3・4・5	底部外面線刻
289	〃	137	須恵器高台坏?	— — —	底部回転ヘラ削り、付高台	褐灰色			転用硯か、底部外面ヘラ書
289	〃	138	灰釉陶器長頸壷	(12.8) — —	ロクロナデ	浅黄色		No.191・255・256・309	頸部ヘラ書

第10表　2号溝状遺構出土土器観察表

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
290	2号溝状遺構	1	土師器坏D	(8.6) 5.6 3.6	底部木葉痕、体部ナデ	にぶい黄橙色	やや粗	No.149	灯明具
290	〃	2	土師器坏A	10.8 5.4 4.1	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色	赤色粒子	No.112	完形
290	〃	3	土師器蓋A	18.0 — 4.1	内面渦巻状暗文、外面回転ヘラ削り	にぶい橙色	〃		
290	〃	4	土師器甕C？	— 8.5 —	底部回転糸切	にぶい黄橙色	白色粒子	No.163	
290	〃	5	土師器高台坏	(11.2) (8.0) 3.4	底部回転ヘラ削り、付高台、内外面ミガキ	浅黄色			
290	〃	6	須恵器坏	(11.0) (6.0) 3.5	底部回転糸切	灰色	白色粒子	No.118	
290	〃	7	〃	11.2 5.8 3.6	〃	褐灰色	〃	No.159	
290	〃	8	〃	(12.0) (7.0) 3.9	〃	灰白色			
290	〃	9	〃	(12.0) 6.2 3.9	〃	〃		No.155	
290	〃	10	〃	(12.0) 7.6 4.9	〃	黄灰色	白色粒子	No.129	
290	〃	11	〃	(13.8) 7.0 3.7	〃	灰白色	白色粒子、小礫		
290	〃	12	〃	— (6.0) —	〃	黄灰色		No.117	
290	〃	13	〃	— 6.6 —	〃	オリーブ灰色	白色粒子		
290	〃	14	須恵器高台坏B	11.8 8.2 3.4	底部回転ヘラ削り、付高台	内-灰黄褐色 外-灰色	〃	No.132	
290	〃	15	須恵器高台坏A	(14.0) 8.1 6.2	底部静止糸切後、回転ヘラ削り、付高台	灰色	〃	No.182	
290	〃	16	須恵器高台坏?	— 7.7 —	底部回転ヘラ削り、付高台	黄灰色	〃	No.115	
290	〃	17	〃	— 8.2 —	〃	内-灰色 外-にぶい褐色		No.150	
290	〃	18	〃	— (10.0) —	〃	灰色	白色粒子		
290	〃	19	〃	— (9.6) —	〃	〃	〃		

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
290	2号溝状遺構	20	須恵器 蓋A	(16.4) — 3.2	外面回転ヘラ削り	灰色		No.184	
290	〃	21	須恵器 高坏	— — —	ロクロナデ	〃	白色粒子	No.133	
290	〃	22	須恵器 鉢B	(16.0) — —	〃	にぶい褐色		No.125	
290	〃	23	〃	(17.0) — —	〃	灰色	白色粒子	No.104	
290	〃	24	〃	(16.2) (9.4) 12.4	底部回転糸切、ロクロナデ	〃		No.193	水田、A14B19
290	〃	25	須恵器 甕	— — —	ロクロナデ	暗灰色		No.157	
290	〃	26	須恵器 長頸壷	(8.0) — —	〃	にぶい赤褐色	白色粒子	No.146	
290	〃	27	〃	9.0 — —	〃	オリーブ黒		No.134	
290	〃	28	須恵器 凸帯壷	— 15.0 —	外面叩き、肩部、凸帯、耳	灰色	白色粒子	No.172・173・176	
291	〃	29	須恵器 甕	— — —	外面叩き	〃	〃	No.93・94・107 No.130・147	
291	〃	30	〃	(45.0) — —	〃	内-赤灰色 外-灰色	〃	No.126・135・156 No.169・180・186	水田南
292	〃	31	土師器 皿	16.8 4.5 3.5	体・底部回転ヘラ削り、内面放射状暗文	橙色	赤色粒子	No.102	底部外面墨書「木」
292	〃	32	土師器 坏A?	— — —	内面暗文	にぶい橙色			体部外面墨書
292	〃	33	〃	— — —	体部手持ヘラ削り、内面暗文	〃			〃
292	〃	34	須恵器 坏?	— — —		灰白色			底部外面墨書
292	〃	35	土師器 小型甕C	— — —	ロクロナデ	明褐灰色	やや粗、ややもろい、白色粒子		人面墨書、35～38は同一個体
292	〃	36	〃	— — —	〃	〃	〃		〃
292	〃	37	〃	— — —	〃	〃	〃		〃
292	〃	38	〃	— — —	〃	〃	〃		〃
292	〃	39	土師器 ?	— — —	〃	〃	〃		〃
292	〃	40	須恵器 坏	(10.8) (6.4) 3.5	底部静止糸切後、体・底部手持ヘラ削り	灰色	白色粒子	No.189	体部外面墨書「稲」
292	〃	41	〃	(11.0) (5.0) 3.8	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り	〃	白色粒子		底部外面墨書
292	〃	42	須恵器 坏	11.6 6.8 3.7	底部回転糸切	灰白色	小礫	No.155	体部外面墨書「久」 みこみ部線刻
292	〃	43	〃	(12.0) 6.0 4.5	〃	灰色			体部外面墨書
292	〃	44	〃	(12.0) (7.0) 3.2	底部手持ヘラ削り	灰白色	白色粒子		底部外面墨書「吉」
292	〃	45	〃	(12.0) — —		オリーブ灰色	白色粒子、小礫		体部外面墨書「吉」
292	〃	46	〃	— — —		黄灰色	白色粒子		体部外面墨書
292	〃	47	〃	— — —		内—灰褐色 外—黄灰色			〃
292	〃	48	〃	— (5.4) —		灰色			底部外面墨書
292	〃	49	〃	— (5.5) —	底部回転糸切	黄灰色	白色粒子		底部外面墨書「宅」?
292	〃	50	〃	— 6.0 —	〃	灰白色			底部みこみ部墨書
292	〃	51	〃	— (6.0) —	〃	灰色	白色粒子	No.171	底部外面墨書「宅」?
292	〃	52	〃	— 6.6 —	底部回糸切り	〃	〃		底部外面墨書
292	〃	53	〃	— 6.8 —	〃	褐灰色			体部外面、底部外面墨書
292	〃	54	〃	— — —	〃	灰色			体部外面墨書
292	〃	55	〃	— — —	付高台(欠)	褐灰色			〃
292	〃	56	〃	— — —		にぶい黄橙色			底部外面墨書
292	〃	57	須恵器 高台坏?	— 8.7 —	底部回転糸切、付高台	にぶい赤褐色	白色粒子	No.170	底部外面墨書「主」
292	〃	58	〃	— 8.9 —	底部回転ヘラ削り、付高台	にぶい黄橙色		No.153	底部外面墨書
292	〃	59	土師器 坏A	— (7.0) —	底部回転糸切、内面暗文	にぶい褐色			底部外面ヘラ書
292	〃	60	須恵器 坏	— 6.3 —	底部回転糸切	灰色	白色粒子	No.167	〃

第11表　３号溝状遺構出土土器観察表

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
293	３号溝状遺構	1	土師器 坏B	14.0 (10.4) 3.7	底部糸切後、手持ヘラ削り	にぶい橙色		No.13	
293	〃	2	黒色土器 坏	14.0 5.7 5.3	体・底部回転ヘラ削り、内面横ミガキ、黒色	〃		No.15	
293	〃	3	須恵器 椀	(8.6) 5.7 5.4	付高台	灰色	白色粒子	No.14	

第８節

性格不明ピット群出土土器

第12表　性格不明ピット群出土土器観察表

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
296	２号ピット	1	土師器 坏A	(11.4) (6.0) 3.6	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り、内面暗文	橙色		No.1	
296	333号ピット	2	〃	12.2 4.2 3.6	体・底部手持ヘラ削り	褐色		No.1	完形、体部外面墨書「介」
296	〃	3	〃	(18.0) — —	体部手持ヘラ削り	〃		No.2	
296	242号ピット	4	〃	— (5.6) —	底部回転糸切、体部手持ヘラ削り、内面、みこみ部暗文	明赤褐色		No.2	
296	５号ピット	5	土師器 皿	(12.6) 4.2 2.5	体・底部手持ヘラ削り	灰褐色			
296	４号ピット	6	〃	(13.0) (3.4) 2.5	〃	褐色			
296	333号ピット	7	〃	— (6.0) —	〃	橙色		No.2	
296	242号ピット	8	須恵器 坏	— (5.6) —	底部回転糸切	明赤褐色		No.1	
296	１号ピット	9	須恵器 蓋A	— — —	外面回転ヘラ削り	赤褐色		No.2	
296	３号ピット	10	〃	(16.4) — —		灰黄色		No.1	

第９節

奈良・平安時代以外出土土器

第13表　奈良・平安時代以外出土土器観察表

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
297	２号配石	1	縄文・後 深鉢	(17.0) — —	口縁部沈線文、頸部隆帯文	褐色	やや粗	白・赤色粒子	No.10
297	〃	2	〃	(31.6) — —	口縁部沈線文	〃	やや粗、白色粒子 雲母	No.14	〃
297	〃	3	〃	(26.0) — —	縄文	〃	やや粗 白色粒子	No.1	
297	〃	4	縄文・後 鉢	(14.0) — —	無文	〃	粗 白・赤色粒子、礫	No.8	
297	4号配石	5	縄文・中 深鉢	— (12.7) —	沈線文、櫛歯状沈線文、脚付(円孔あり)	にぶい橙色 褐灰色	やや粗白・赤色粒子		曽利Ⅳ～Ⅴ式
297	表　採	6	縄文・前 深鉢	— — —	沈線文、結節浮線文、円形貼付文	灰褐色	白色粒子		諸磯Ｃ式
297	279号住	7	〃	— (11.0) —	〃	茶褐色	雲母	No.3	〃
297	表　採	8	〃	— — —	山形口縁、結節文、貼付文、円孔	黄褐色	白・黒色粒子、小礫		十三菩提式
297	〃	9	縄文・中 深鉢	— — —	隆帯文、沈線文	明褐灰色	白色粒子		井戸尻式
297	A18B26	10	〃	— — —	沈線文、ハの字状、沈線文	褐色	やや粗、白・赤・黒色粒子、小礫		曽利Ⅴ式
297	181号住	11	〃	— (7.8) —	脚付(円孔あり)	赤褐色	やや粗、白色粒子 雲母	No.3	
297	表　採	12	〃	— — —	隆帯、沈線文、縄文	にぶい褐色	白色粒子		中期末
297	A22B30	13	〃	— — —	沈線文、縄文	黒褐色	やや粗	No.14	
297	〃	14	縄文中～ 後初、深鉢	— — —	〃	褐色		No.16	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
297	表採	15	縄文後深鉢	— — —	沈線文、刺突文	黒褐色	白色粒子		
297	318号住	16	〃	(14.0) (7.0) 15.0	沈線文	灰黄褐色		No.25・55	加曽利B式 412号住、417号住
297	27号住	17	〃	(22.0) — —	〃	〃	白色粒子		曽谷式併行
297	97号住	18	縄文晩深鉢	— — —	〃	黒褐色	安山岩片、黒色粒子多量		18～20は同一個体、96号住No.2、清水天王山式
297	〃	19	〃	— — —	〃	〃	〃		清水天王山式
297	96号住	20	〃	— — —	〃	〃	〃	No.4	〃
297	10号溝	21	縄文晩～弥生、深鉢	(29.0) — —	条痕文、口唇部押圧文	黄褐色～明赤褐色	粗、白・黒・赤色粒子、小礫	(旧)10溝 No.1～5	
297	271号住	22	縄文晩浅鉢	(16.0) — —	浮線文	褐色			外面朱塗り
298	A20B26	23	弥生前壷	— — —	沈線文	にぶい黄褐色	やや粗、白色粒子雲母、小礫	No.1	口縁部紛失(調査中)
298	242号住	24	弥生中壷	— — —	外面ハケメ、簾状文、内面ミガキ	灰黄褐色	白色粒子		弥生中期前半
298	A20B27	25	土師器S字甕	(13.0) — —	外面ハケメ、内面ナデ	茶褐色	やや粗、白色粒子雲母、小礫	No.1	
298	1号溝状遺構	26	縄文前鉢	(16.0) — —	沈線文、縄文、ミガキ	にぶい赤褐色	白・赤色粒子		諸磯b式
298	〃	27	縄文前深鉢	— — —	沈線文、縄文	〃	白色粒子		〃
298	〃	28	縄文中深鉢	— — —	沈線文、条線文	黄褐色	やや粗、白・赤色粒子、雲母、小礫		曽利Ⅳ～Ⅴ式
298	〃	29	〃	6.2 — —	沈線文、ハの字文	黄橙色	白・赤色粒子、雲母		曽利Ⅴ式、脚付
298	〃	30	〃	— — —	隆線文、縄文	にぶい橙色	白色粒子	No.339	
298	〃	31	縄文後深鉢	— — —	沈線文、縄文	にぶい褐色	白・赤色粒子	No.3	
298	〃	32	〃	— — —	〃	〃	〃	No.23	
298	〃	33	〃	— — —	〃	褐灰色	白色粒子		
298	〃	34	〃	— — —	〃	灰褐色	白色粒子、雲母		
298	〃	35	〃	— — —	〃	黄褐色	白・赤色粒子、雲母、小礫		堀之内式
298	〃	36	〃	— — —	隆線文、沈線文	暗褐色	白色粒子	No.354	〃
298	〃	37	〃	— — —	沈線文	褐灰色	〃	No.11	
298	〃	38	〃	— — —	沈線文、縄文	にぶい黄褐色	〃		
298	〃	39	縄文後注口	2.5 — —		にぶい橙色	白・赤色粒子	No.45	注口部片
298	〃	40	縄文後深鉢	— — —	沈線文、列点文	灰黄色	白色粒子、雲母小礫	No.225	
298	2号溝状遺構	41	縄文前深鉢	(33.0) — —	竹管文、縄文、突起	にぶい褐色	白色粒子		
298	〃	42	縄文中深鉢	(15.0) — —	沈線文、条線文	褐灰色	白色粒子、雲母	No.141	A14B19
298	〃	43	弥生後深鉢	— — —	櫛描波状文	黒褐色	白色粒子		
298	〃	44	〃	— — —	〃	明褐灰色	〃		
298	〃	45	〃	— — —	〃	灰黄褐色	〃		
298	〃	46	土師器S字甕	15.0 8.0 —	外面ハケメ	にぶい黄橙色			
299	〃	47	縄文晩鉢	— — —	口縁部文様帯、浮線網状文	褐灰色	白・赤色粒子		
299	〃	48	〃	— — —	〃	にぶい橙色	白色粒子		
299	〃	49	〃	— — —	〃	〃	白・赤色粒子、雲母		孔1
299	〃	50	〃	— — —	浮線網状文	〃	白色粒子		
299	〃	51	〃	— — —	〃	黒褐色	白・赤色粒子		
299	〃	52	〃	— — —	〃	明褐灰色	白色粒子、雲母		
299	〃	53	〃	(24.0) — —	〃	褐灰色	白色粒子		孔2
299	〃	54	〃	— — —	〃	灰褐色	〃		
299	〃	55	〃	— — —	〃	褐灰色	〃		

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
299	2号溝状遺構	56	縄文晩鉢		浮線網状文	にぶい橙色	白・赤色粒子、雲母		
299	〃	57	〃		〃	褐灰色	白色粒子		
299	〃	58	〃		〃	〃	〃		
299	〃	59	〃		〃	灰褐色	白・赤色粒子		
299	〃	60	縄文晩壷?		沈線文	褐灰色	白色粒子		
299	〃	61	縄文晩鉢		〃	明褐灰色	白・赤色粒子		
299	〃	62	縄文晩深鉢	(40.0)	口縁部稜、無文帯、条痕文	灰褐色	粗、白・赤色粒子	No.15・95・115	A14B19No.15
299	〃	63	〃		口縁部1本沈線	褐灰色	白色粒子、雲母		
299	〃	64	〃		〃	〃	白・赤色粒子		
299	〃	65	〃		口縁部内外1本沈線	にぶい黄橙色	白色粒子		
299	〃	66	〃	(53.0)	口縁部1本沈線	明褐灰色	〃		
299	〃	67	〃	(30.0)	口縁部2本沈線、無文帯条痕文	にぶい橙色	〃		
299	〃	68	〃	(37.0)	〃	褐灰色	白色粒子、雲母		
299	〃	69	〃	(34.0)	口縁部2本沈線	にぶい橙色	白・赤色粒子		
299	〃	70	〃	(54.0)	〃	〃	白色粒子		
299	〃	71	〃		〃	褐灰色	〃		
299	〃	72	〃		〃	灰黄褐色	白色粒子		
299	〃	73	〃	(32.0)	〃	褐灰色	やや粗白色粒子		
299	〃	74	〃	(44.0)	〃	にぶい橙色	白色粒子、雲母		
299	〃	75	〃		〃	褐灰色			
299	〃	76	〃		口縁部2本、内面1本沈線	〃	白・赤色粒子		
299	〃	77	〃		〃	灰褐色	〃		
299	〃	78	〃		口縁部内外2本沈線	褐灰色	白色粒子		
299	〃	79	〃		口縁部、3本沈線	〃	〃		
299	〃	80	〃		口縁部3本、内面2本沈線	にぶい橙色	〃		
299	〃	81	〃	(16.0)	口縁部内外3本沈線	にぶい褐色	白・赤色粒子		
299	〃	82	〃		口縁部4本沈線	にぶい橙色	白色粒子、雲母		
299	〃	83	〃		口縁部4本沈線文	灰褐色	白色粒子		
299	〃	84	〃		〃	にぶい橙色	白・赤色粒子		
299	〃	85	〃		口縁部5本、内面4本沈線	褐灰色	白色粒子		鉢か
299	〃	86	〃		無文帯、条痕文	明褐灰色	〃		肩部片
300	〃	87	〃	(30.0)7.8	口縁部3本沈線、条痕文	上-褐灰色下-暗灰色	やや粗白色粒子	No.113・127	補修孔1
300	〃	88	〃		口縁部沈線7本以上、条痕文	明褐灰色	白・赤・黒色粒子小礫		
300	〃	89	〃		条痕文、雷文	灰黄褐色	白色粒子		
300	〃	90	〃		条痕文、竹管文	明褐灰色	〃		
300	〃	91	〃		〃	褐灰色	〃		
300	〃	92	〃		条痕文(貝殻状)	明褐灰色	〃		
300	〃	93	縄文晩皿	13.4 4.5 4.3	口縁部2本沈線	黄灰色	やや粗ややもろい		
300	〃	94	縄文晩深鉢?	(32.0)	口縁部巾広沈線、かすかな条痕?	灰黄褐色	白色粒子、雲母		
300	〃	95	縄文晩深鉢	(42.0)	口縁部押圧文、無文帯状痕文	褐灰色	やや粗、やや軟質白色粒子、雲母		A14B19No.31～33
300	〃	96	〃	(22.0)	〃	にぶい橙色	やや粗白色粒子		2号水田サブトレ

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
300	2号溝状遺構	97	縄文晩深鉢	(46.0) —	口縁部押圧文	にぶい橙色	白色粒子		
300	〃	98	〃	—	〃	灰褐色	白色粒子、雲母		
300	〃	99	〃	—	〃	〃	〃		
300	〃	100	〃	—	〃	褐灰色	白色粒子		
300	〃	101	〃	—	〃	明褐灰色	〃		
300	〃	102	〃	—	〃	褐灰色	〃		
300	〃	103	〃	—	〃	にぶい橙色	〃		壷か
300	〃	104	〃	(52.0) —	〃	褐灰色	〃		
300	〃	105	〃	—	〃	灰褐色	〃		
300	〃	106	〃	(53.0) —	〃	にぶい橙色	白・赤色粒子		
300	〃	107	〃	—	〃	にぶい黄褐色	白色粒子		
300	〃	108	〃	—	口縁部押圧文、稜	灰褐色	白・赤色粒子		
300	〃	109	〃	—	〃	褐灰色	白色粒子、雲母		
300	〃	110	〃	—	口縁部小波文、3本沈線	灰黄褐色	〃		
301	〃	111	〃	(45.0) —	口縁部小波状文、稜、無文帯、条痕文	褐灰色	やや粗、やや軟質 白色粒子、雲母	No.194	
301	〃	112	〃	(48.0) —	口縁部、小波状文、無文	〃	やや粗、白色粒子 雲母		
301	〃	113	〃	—	〃	黒褐色	白色粒子		
301	〃	114	〃	—	〃	灰褐色	〃		
301	〃	115	〃	(42.0) —	口縁部押圧文、条痕文	褐灰色	〃		
301	〃	116	〃	(28.0) —	〃	黒褐色	白色粒子、やや軟質		
301	〃	117	〃	21.0 (7.0) —	〃	灰黄褐色	やや粗、白色粒子 小礫		A14B19No.9・10・43
301	〃	118	縄文晩壷	(17.0) —	〃	にぶい黄橙色 にぶい褐色	白・赤色粒子		A14B19No.25
301	〃	119	〃	(11.0) 4.8	〃	褐灰色	やや粗、やや軟質 白色粒子、雲母		A14B19No.5
301	〃	120	縄文晩深鉢	—	〃	〃	白色粒子		
301	〃	121	〃	—	〃	にぶい黄橙色	〃		
301	〃	122	〃	—	〃	灰褐色	白・赤色粒子		
301	〃	123	〃	—	口縁部押圧文、沈線2本、条痕文	〃	白色粒子、雲母		
301	〃	124	〃	—	口縁部小波状文、条痕文	褐灰色	白色粒子		
301	〃	125	〃	(26.0) —	〃	灰褐色	〃		
301	〃	126	〃	(30.0) —	口縁部押圧文帯2本、条痕文、内面条痕文	にぶい褐色	やや粗		
301	〃	127	〃	(17.0) —	口縁部押圧文、凸帯2本	灰褐色	やや粗、やや軟質		
301	〃	128	〃	—	〃	〃	白・赤色粒子		
301	〃	129	〃	—	〃	にぶい橙色	白色粒子		
301	〃	130	〃	—	把手(円形竹管文)、押圧凸帯文 内面条痕文	〃	白・赤色粒子		
301	〃	130	〃	—	押圧文、凸帯	にぶい赤褐色	白色粒子		
301	〃	132	〃	—	〃	にぶい橙色	白・赤色粒子		
301	〃	133	〃	—	〃	灰褐色	白色粒子		
302	〃	134	〃	—	条痕文	にぶい褐色	〃		
302	〃	135	〃	—	〃	明褐灰色	やや粗 白色粒子		
302	〃	136	〃	—	〃	にぶい橙色	白・赤色粒子		
302	〃	137	〃	—	〃	にぶい褐色	〃	No.190	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
302	2号溝状遺構	138	縄文晩深鉢	(30.0) — —		にぶい褐色	やや粗、やや軟質 白色粒子		補修孔1
302	〃	139	〃	(25.0) — —		灰褐色	やや粗 白色粒子		
302	〃	140	〃	(28.0) — —		にぶい黄橙色	〃		
302	〃	141	〃	— — —		内-にぶい褐色 外-褐灰色			No.143
302	〃	142	〃	— — —		明褐灰色	白・赤色粒子		
302	〃	143	〃	(32.0) — —		灰褐色	〃		
302	〃	144	〃	— — —		にぶい褐色	白・赤色粒子、雲母		
302	〃	145	〃	(16.0) — —		褐灰色	白色粒子		
302	〃	146	縄文晩鉢	— 5.5 —		〃	〃		
302	〃	147	〃	— (8.0) —		〃	やや粗 白色粒子		
302	〃	148	縄文晩深鉢	— (7.0) —	底部楕円形	明褐灰色	〃		
302	〃	149	〃	— (7.0) —	底部網代痕	灰褐色	やや粗 白色粒子、雲母		
302	〃	150	〃	— (10.0) —	〃	にぶい褐色	やや粗 白色粒子		
302	〃	151	〃	— (8.0) —	底部網代痕、外面条痕文	にぶい橙色	白色粒子		
302	〃	152	〃	— (10.5) —	〃	明褐灰色	やや粗、やや軟質 白色粒子		
302	〃	153	〃	— (11.0) —	条痕文	〃	〃		
302	〃	154	〃	— (6.0) —	〃	にぶい褐色	やや粗 白色粒子		
302	〃	155	〃	— (13.0) —	〃	明褐灰色	白色粒子		
303	2号水田	156	縄文晩鉢	34.0 (8.5) 11.6	無文、外面ミガキ	灰褐色	〃	No.28・29	孔2、2号水田下、2号河道No.137 A14B19、2号水田水路
303	〃	157	〃	15.0 6.0 4.7	口縁部2本の沈線文、小波状文	褐灰色	白色粒子、やや軟質	No.27	孔2、2号河道No.131
303	〃	158	〃	(22.0) (6.0) 9.9	口縁部3本の沈線文、大波状文	〃	やや粗、やや軟質 白色粒子	No.30	A14B19
303	〃	159	〃	(21.0) — —	口縁部キザミ文	黄褐色	〃	No.8	
303	〃	160	〃	(42.0) — —	口縁部押圧文、条痕文	淡黄色 灰白色	白・赤色粒子		
303	〃	161	〃	(36.0) — —	口縁部稜、無文帯、条痕文	にぶい褐色	〃	No.9	
303	〃	162	弥生前壺	— — —	口縁部、押圧文、押圧凸帯文、条痕文、内面条痕文	にぶい橙色	やや粗、白・赤色粒子、雲母	No.19	
303	〃	163	縄文晩深鉢	— — —	条痕文、稲妻文	明褐灰色	白・赤色粒子、雲母	No.39	
303	〃	164	〃	— — —	〃	褐灰色	白色粒子		
303	〃	165	〃	— — —	条痕文	にぶい赤褐色	白色粒子、雲母		モミ状圧痕
304	4号溝状遺構	166	縄文晩鉢	— — —	口縁部、波状文、沈線文3本	にぶい橙色	白色粒子		
304	〃	167	縄文晩深鉢?	— — —	口縁部、沈線2本、内面1本沈線	明褐灰色	〃		
304	〃	168	縄文晩鉢?	— — —	5本の沈線	褐灰色	〃		
304	〃	169	縄文晩深鉢	— — —	9本以上の沈線、条痕文	にぶい橙色	〃		
304	〃	170	〃	(28.0) — —	口縁部押圧文、無文帯、条痕文	褐灰色	〃		
304	〃	171	〃	(52.0) — —	口縁部押圧文、稜	にぶい赤褐色	白・赤色粒子、雲母		
304	〃	172	〃	— — —	〃	にぶい橙色	白色粒子、雲母		
304	〃	173	〃	— — —	口縁部押圧文、無文帯、条痕文	にぶい褐色	やや粗 白色粒子		
304	〃	174	〃	— — —	押圧凸帯文、条痕文	褐灰色	やや粗、やや軟質 白色粒子		
304	〃	175	〃	(30.0) — —	条痕文	灰褐色	白色粒子		
304	〃	176	〃	— — —	〃	灰黄褐色	白色粒子、雲母		
304	〃	177	〃	— — —	条痕文、稲妻文	灰褐色	白色粒子		
304	2号水田サブトレ	178	〃	— — —	無文	にぶい橙色	白・赤色粒子		

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
304	2号水田サブトレ	179	縄文晩深鉢	— — —	条痕文	褐灰色	白色粒子		
304	〃	180	〃	— — —	〃	にぶい橙色	〃		
304	〃	181	縄文晩鉢?	(20.0) — —	口縁部1本沈線	褐灰色	〃		
304	2号水田下	182	縄文晩深鉢	— — —	口縁部1本沈線、稜	〃	白色粒子、雲母		
304	〃	183	〃	— — —	口縁部内外1本沈線	明褐灰色	白色粒子		
304	〃	184	〃	— — —	口縁部押圧文、1本沈線	灰褐色	白・赤色粒子		
304	〃	185	〃	— — —	口縁部押圧文	にぶい橙色	白色粒子		
304	〃	186	〃	— — —	口縁部、波状文、稜、無文帯	〃	白・赤色粒子		
304	〃	187	〃	— — —	無文帯、条痕文	灰褐色	白色粒子		
304	〃	188	〃	— — —	条痕文、沈線文	褐灰色	〃		
304	〃	189	〃	— — —	1本以上の沈線文	明褐灰色	白・赤色粒子		
304	〃	190	〃	— — —	沈線文	にぶい橙色	〃		
304	〃	191	縄文晩壷?	— (2.4) —	内面条痕文	〃	白色粒子		
304	〃	192	縄文晩深鉢	— 11.0 —	条痕文、ヘラ削り	〃	粗、やや軟質 白色粒子多量		
304	A14B19	193	縄文晩鉢	— — —	浮線網状文	〃	白色粒子		
304	〃	194	〃	— — —	〃	褐灰色	〃		
304	〃	195	縄文晩深鉢	(53.6) — —	口縁部1本沈線	にぶい褐色	〃		
304	〃	196	〃	(24.0) — —	〃	にぶい橙色	〃		
304	〃	197	〃	— — —	口縁部2本、内面1本沈線	明褐灰色	〃		
304	〃	198	〃	— — —	口縁部内外2本沈線	灰黄褐色	〃		
304	〃	199	〃	— — —	口縁部2本沈線、条痕文	灰褐色	〃		
304	〃	200	〃	— — —	口縁部6本以上沈線	にぶい橙色	〃		
305	〃	201	〃	(19.4) — —	口縁部外反、無文帯、荒い条痕文	灰褐色	やや粗 白色粒子	No.56	
305	〃	202	縄文晩壷	(13.0) — —	口縁部押圧文、条痕文	にぶい橙色	やや粗、やや軟質 白色粒子	No.26	
305	〃	203	縄文晩深鉢	(21.0) — —	〃	灰褐色	やや粗	No.22	
305	〃	204	〃	— — —	〃	にぶい褐色	白色粒子、雲母		
305	〃	205	〃	— — —	口縁部押圧文、無文	にぶい橙色	白色粒子		
305	〃	206	〃	— — —	口縁部波状文、条痕文	灰褐色	やや粗、軟質 白色粒子		
305	〃	207	〃	— — —	〃	〃	白色粒子		
305	〃	208	〃	— — —	条痕文	にぶい橙色	白・赤色粒子		
305	〃	209	縄文晩皿	(12.0) (4.0) 2.7		赤灰色	白・赤色粒子、雲母		
305	〃	210	縄文晩深鉢	50.0 — —	口縁部押圧文、無文帯、条痕文	にぶい橙色	やや粗、やや軟質 白色粒子	No.56	
305	〃	211	〃	40.0 — —	〃	〃	〃	No.1・3	
305	〃	212	〃	— — —	無文帯、条痕文	にぶい褐色	白色粒子	No.2・56	
305	〃	213	〃	— — —	〃	〃	やや粗 白色粒子	No.58	
306	〃	214	〃	— — —	〃	灰褐色	〃	No.38	
306	〃	215	〃	— — —	条痕文	褐灰色	やや粗、白色粒子 やや軟質	No.27	
306	〃	216	〃	— — —	無文、ナデ	灰褐色	白色粒子	No.6・8・1	
306	〃	217	〃	(7.0) — —	条痕文	〃	やや粗 白色粒子		水田南
306	〃	218	〃	(14.4) — —	底部網代痕	内-褐灰色 外-にぶい橙色	粗 白色粒子	No.69	

第10節

遺構外出土土器

第14表　遺構外出土土器観察表

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
294	A21B28	1	土師器皿	(10.0) (4.6) 2.3	底部回転糸切	橙色	やや粗、白・赤色粒子		
294	〃	2	〃	(11.0) (7.4) 2.3	〃	にぶい橙色	〃		
294	A17B27	3	土師器坏A	(10.6) 5.0 4.6	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	褐色	白・赤色粒子		
294	A21B23	4	〃	(11.4) (6.0) 4.6	〃	橙色	白色粒子、雲母小礫		
294	A24B21	5	〃	(11.8) (6.4) 4.4	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	〃	白・赤色粒子		
294	A21B25	6	〃	(12.0) 4.6 4.1	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	黄褐色	白・赤色粒子、小礫		
294	A21B29	7	〃	12.0 4.0 4.5	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	白・赤色粒子		灯明具
294	〃	8	〃	(13.0) (4.0) 4.7	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい褐色	白・赤色粒子、小礫		
294	A25B27	9	〃	(13.4) (9.0) 3.1	体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子		
294	表採	10	〃	13.0 4.0 4.3	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	赤色粒子		
294	A21B29	11	〃	(14.0) (5.0) 3.4	体・底部手持ヘラ削り	〃	白・赤色粒子、小礫		
294	〃	12	〃	(13.8) 4.4 4.8	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	白・赤色粒子		
294	〃	13	〃	(14.0) (3.8) 5.5	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	橙色	〃		
294	A21B26	14	〃	(14.8) (6.0) 4.9	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	〃		
294	A21B30	15	〃	(15.0) (10.0) 3.0	底部静止糸切後、手持ヘラ削り	橙色	白色粒子		
294	A22	16	土師器高台坏	(15.5) (6.8) 6.1	底部回転ヘラ削り、削り出し高台	〃	白・赤色粒子		
294	A21B23	17	土師器皿	(12.2) (4.0) 2.7	底部回転糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	〃		
294	A20B29	18	〃	(13.0) (6.2) 2.6	体・底部回転ヘラ削り、内面渦巻状暗文	黄褐色	〃		
294	A20B27	19	〃	(13.4) (4.0) 2.7	体・底部手持ヘラ削り	にぶい褐色	白・赤色粒子、雲母、小礫		
294	A19B26	20	土師器壷A	(17.0) — 4.5	外面暗文	橙色	白色粒子、雲母		
294	A18B26	21	黒色土器坏	(14.0) 7.0 5.6	底部回転糸切、内面ミガキ、黒色	灰白色	白色粒子、小礫		
294	A21B25	22	甲斐型黒色土器坏	(15.0) (6.0) 4.4	体・底部手持ヘラ削り、内面黒色	にぶい橙色	やや粗、白・赤色粒子、小礫		
294	A21B29	23	〃	(15.0) (5.0) 5.2	〃	橙色	やや粗、白色粒子小礫		
294	〃	24	〃	(16.0) (6.6) 6.7	〃	にぶい橙色	白・赤色粒子		
294	A23B26	25	土師器小型甕B	— 6.0 —	ナデ	〃	やや粗、白・赤・黒色粒子	No.1	
294	A21B25・26	26	土師器球胴甕?	— (4.0) —	球胴	橙色	白・赤色粒子、雲母、小礫		表面剥離
294	A20B27	27	〃	(7.0) — —	胴部に孔(燃成前)	にぶい橙色	白色粒子、雲母		香炉か?
294	A24B27	28	土師器甕	(20.0) — —	ロクロナデ	黒褐色	やや粗、安山岩片花崗岩片、雲母		
294	A25B21	29	須恵器坏	(11.6) (6.0) 4.2	底部回転糸切	灰オリーブ色	やや良、白・赤色粒子、小礫		
294	A21B28	30	〃	(12.6) (6.0) 4.3	〃	灰色	白色粒子、小礫		
294	A25B16	31	〃	(13.4) 7.5 4.1	〃	オリーブ灰色	白・赤色粒子、小礫		
294	A21B29	32	〃	(13.6) (10.0) 3.3	底部ナデ	にぶい黄色	〃		
294	A20B26	33	〃	(15.0) (8.6) 4.2	底部回転糸切後、外周～周縁回転ヘラ削り	灰色	白色粒子		
294	A21B28	34	〃	(16.0) (8.0) 4.3	底部回転糸切	〃	白色粒子、小礫		
294	A23B28	35	〃	— 6.4 —	〃	青灰色			
294	A20B27	36	〃	— (7.0) —	底部回転ヘラ削り	黄灰色			
294	A20B29	37	〃	— 7.2 —	底部回転糸切	〃			

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
294	A18B24	38	須恵器 高台坏A	(13.6) 8.9 6.3	底部回転ヘラ削り、付高台	灰色	白色粒子、小礫		
294	A25B28	39	〃	(16.6) (10.0) 5.6	体・底部回転ヘラ削り、削り出し高台	〃	白色粒子、小礫		
294	A24 B27・28	40	〃	(17.0) (11.0) 7.0	体・底部回転ヘラ削り、付高台	〃	〃		
294	A23B29	41	須恵器 坏?	(13.4) — —		青灰色			
295	A24B23	42	須恵器 蓋A	(10.4) — 2.7		灰色	白色粒子、小礫		
295	A24B27	43	〃	(13.6) — 3.4	外面回転ヘラ削り	灰褐色	〃		
295	A24B23	44	〃	(16.2) — 3.4	〃	にぶい褐色	〃		
295	A22B28	45	〃	— — —	〃	青灰色	白色粒子		
295	A23B24	46	〃	(14.0) — —		〃			
295	A22B25	47	〃	(16.2) — —		暗青灰色			
295	A20B23	48	須恵器 高坏	(19.4) — —		灰色			
295	A22B27	49	〃	(21.2) — —		暗灰色			
295	A22B28	50	須恵器 壷?	(19.6) — —		灰色			
295	〃	51	〃	(19.8) — —	ロクロナデ	暗灰色			
295	A23B24	52	須恵器 甕	(24.8) — —	〃	灰色			
295	A22B27	53	〃	(37.8) — —	〃	黄灰色			
295	A22B27	54	須恵器 平瓶	— (9.0) —	底部回転ヘラ削り	白灰色			
295	A25B24	55	須恵器 壷?	— (4.4) —	底部回転糸切、付高台	暗灰色			
295	A20B26	56	灰釉陶器 椀?	— (6.6) —	付高台	オリーブ灰色	白色粒子		
295	A21B24	57	〃	— (9.0) —	付高台、内外面施釉	灰白色	〃		
295	A21B24	58	緑釉陶器 皿	(13.0) — —	内外面施釉	黄緑色			小破片のため、口径は不明
295	A22B27	59	灰釉陶器 皿	— (6.8) —	付高台、内外面施釉	灰色	白色粒子		
295	A23B25	60	〃	— (7.0) —	〃	灰白色	〃		
295	A23B25	61	緑釉陶器 段皿	— (7.0) —	付高台、全面施釉	内面-緑色 外面-灰白色			
295	A20B27	62	灰釉陶器 段皿	— (7.0) —	付高台、内面施釉	灰白色			
295	〃	63	灰釉陶器 蓋	(13.0) — —		灰色	白色粒子		
295	A20B19	64	陶器 小型壷	— (4.0) —	底部回転糸切、外面鉄釉	釉-黒色 地色-灰色			
295	A22B25	65	陶器 皿	(10.4) (6.0) 2.1	底部回転ヘラ削り、内外面鉄釉	にぶい黄褐色			
295	表採	66	陶器 壷	— — —	竹管文	灰オリーブ色	白色粒子		渥美
295	A23B26	67	須恵器 円面硯	— — —	長方形の透かし	褐灰色	白色粒子、小礫		脚部片
295	A27B22	68	〃	(10.0) — —	〃	灰色			
295	A27B25	69	〃	(10.8) — —	長方形の透かし、円形貼付	〃	白色粒子		
295	A25B15	70	須恵器 転用硯	— — —	外面叩き	青灰色	〃		
295	A22B28	71	土師器 坏A	(12.0) — —	内面暗文	橙色	白・赤色粒子		体部外面墨書
296	A23B26	72	〃	(12.0) — —		〃	白・赤色粒子、小礫		〃
296	A21B29	73	〃	— — —	体部手持ヘラ削り	黄褐色	白・赤色粒子、雲母		〃
296	〃	74	〃	— — —		茶褐色	白色粒子		体部内面墨書
296	A21B27	75	土師器 皿	(13.0) — 2.7	体・底部手持ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子、小礫		体部外面墨書
296	A23B27	76	土師器 坏A	— (4.4) —	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り	〃	白・赤色粒子		底部外面墨書「木」
296	〃	77	〃	— (4.5) —	底部糸切後、体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	褐色	〃		底部外面墨書
296	A22B28	78	〃	— (5.0) —	体・底部手持ヘラ削り、内面暗文	黄橙色	〃		底部外面墨書「木」

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
296	A23B26	79	土師器皿?	— — —	底部回転糸切	褐色	白色粒子		底部外面墨書
296	A23B27	80	〃	— — —	底部回転ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子		〃
296	A23B25	81	〃	— — —	体・底部手持ヘラ削り	〃	白・赤色粒子、小礫		体部外面墨書
296	表採	82	土師器坏B	— (9.0) —	底部回転ヘラ削り	〃			底部外面墨書「万」
296	A24B21	83	土師器坏A	(11.2) (6.6) 4.3	体・底部手持ヘラ削り	にぶい橙色	白・赤色粒子、雲母		底部外面焼成後線刻
296	A21B28	84	土師器皿?	— — —	体・底部回転ヘラ削り	橙色	白色粒子、小礫		底部外面ヘラ書
296	〃	85	〃	— (8.0) —	底部手持ヘラ削り	黄褐色	白色粒子、雲母		底部外面焼成後線刻
296	〃	86	〃	— — —	〃	橙色	白・赤色粒子		〃
296	A21B29	87	〃	— (8.0) —	〃	黄橙色	〃		〃
296	〃	88	〃	— — —	〃	茶褐色	〃		〃
296	A18B27	89	須恵器坏	(11.4) 5.7 3.7	底部回転糸切	灰オリーブ色	白・赤色粒子、小礫	No.1	体部外面焼成後線刻
296	A25B27	90	須恵器蓋	(17.4) — (4.4)	外面回転ヘラ削り	灰色	白色粒子、小礫		〃
296	A23B27	91	須恵器壺	— — —	ロクロナデ	灰オリーブ色			外面ヘラ書

第11節

石器および石製品

第15表　宮ノ前遺跡出土石器および石製品観察表

（法量は長軸長・短軸長・厚さの順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	種別	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	石材	重量(g)	出土位置	備考
307	287号住	1	石錐	3.4 3.0 0.6	1.9×0.5cmの長方形孔、裏面4箇所に2ヶづつの孔	青緑色	蛇紋岩	13.6	No.1	ほぼ完形、巡方
307	211号住	2	不明	5.0 3.2 0.5	硯か、裏面に線刻	黄白色	凝灰岩	13.3		
307	134号住	3	水晶	9.4 — 3.2	結晶、加工なし	白色	水晶	102.3	No.1	
307	210号住	4	不明	4.9 — 2.9	砲弾状、片面に穿孔	黄白色	花崗岩類(アプライト)	49.4	No.18	軟質、完形
307	169号住	5	碁石状石製品	2.0 — 0.6		黒色	砂岩	3.4		完形
307	345号住	6	紡錘車	4.0 — 1.2	孔径0.6cm	黒褐色	結晶片岩	32	No.20	完形
307	16号溝	7	紡錘車	4.4 — 0.8		黄白色	緑色凝灰岩	11.0		
307	231号住	8	玉状石製品	1.8 1.5 0.9	両面穿孔、孔径0.9～0.2cm	灰白色	灰白色軽石	1.7	No.4	軟質
307	307号住	9	不明	2.0 0.7 0.6	全面磨き	黒色	頁岩	1.0		
307	420号住	10	不明	6.0 3.8 2.6	3.5×3cm、深さ0.5cm大の円形の凹み、裏面に穿孔	白黄色	灰白色軽石	35		軟質
307	68号住	11	柱状石製品	32.0 20.5 15.0	加工痕あり	灰褐色	デイサイト	1200		
307	223号住	12	柱状石製品	31.8 19.8 15.2	〃	灰黄色	〃	10500		
308	31号住	13	砥石	7.2 3.7 2.4	磨面４面、細かい擦痕	灰褐色	凝灰岩	57		
308	45号住	14	〃	8.2 4.8 2.4	磨面４面、やや太い擦痕	黄褐色	〃	14		完形
308	89号住	15	〃	4.2 3.0 2.4	磨面４面	〃	〃	23	No.9	
308	100号住	16	〃	5.2 5.3 3.4	〃	灰白色	花崗岩類(アプライト)	129	No.7	やや粗
308	176号住	17	〃	6.5 4.0 4.1	磨面4～5面	明褐灰色	砂岩	171	No.7	
308	179号住	18	〃	22.0 12.0 11.4	置き砥、太い擦痕、磨面8面以上	灰色	安山岩	2390	No.9	粗
308	187号住	19	〃	9.0 5.5 3.7	磨面2面、やや太い擦痕	灰褐色	〃	320	No.3	
308	191号住	20	〃	6.2 4.5 2.3	磨面4面	灰黄色	凝灰岩	64		
308	215号住	21	〃	7.0 4.2 3.0	磨面5面	白褐色	〃	129	No.8	やや粗

（法量は長軸長・短軸長・厚さの順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	種別	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	石材	重量(g)	出土位置	備考
308	210号住	22	砥石	3.7 3.0 1.2	磨面4面、1面には凹状溝	灰色	砂岩	22		やや粗
309	218号住	23	〃	10.0 3.3 2.5	〃	灰白色	凝灰岩	116	No.7	完形
309	220号住	24	〃	4.6 3.8 1.8	磨面4面、1面には凹状溝	灰黄色	花崗岩類	45	No.5	粗
309	250号住	25	〃	6.0 4.1 2.8	磨面4～5面	〃	白色軽石	39		粗、アカコスリ状
309	261号住	26	〃	5.5 3.0 2.4	磨面4面、細かい擦痕	灰褐色	凝灰岩	54	No.44	
309	285号住	27	〃	5.9 5.7 1.6	磨面5面、細かい擦痕	灰黄色	〃	80		
309	309号住	28	〃	15.8 10.0 4.1	磨面4面、細かい擦痕	黄褐色	〃	1170	No.40	
309	313号住	29	〃	3.3 3.0 2.0	磨面5面	黄灰色	〃	27		やや粗
309	321号住	30	〃	5.5 3.8 1.7	磨面4面	〃	〃	47		
309	325号住	31	〃	9.0 4.0 2.7	磨面3面、細かい擦痕	黄橙色	〃	127		完形
309	327号住	32	〃	4.0 6.4 2.7	磨面4面、側面に太い筋状擦痕	黄灰色	〃	69		
309	331号住	33	〃	6.4 3.4 1.7	磨面4面、細かい擦痕	灰黄色	〃	49		
309	309号住	34	〃	5.2 4.0 1.3	磨面5面、やや太い擦痕	橙色	〃	40		
309	343号住	35	〃	5.0 2.9 1.0	磨面4面	灰黄色	〃	27		
309	7号溝	36	〃	10.0 4.0 3.0	磨面4面、端部に太く深い擦痕	白灰色	花崗岩類	207	No.3	
309	1号溝状遺構	37	〃	3.8 3.2 0.9	磨面4面、端部に擦切痕	黒灰色	凝灰岩	17		
310	342号住	38	俵編石器	10.0 6.0 3.5	自然石利用	青灰色	安山岩	331	No.2	
310	〃	39	〃	10.3 5.2 2.6	〃	〃	〃	252	No.3	
310	〃	40	〃	10.5 4.2 4.4	〃	灰褐色	〃	259	No.4	
310	〃	41	〃	10.3 5.0 3.8	〃	紫灰色	〃	284	No.5	
310	〃	42	〃	10.1 5.0 4.2	〃	青灰色	〃	272	No.6	
310	〃	43	〃	8.0 5.2 3.2	〃	紫灰色	〃	232	No.7	
310	〃	44	〃	10.5 6.0 2.7	〃	青灰色	〃	259	No.8	
310	〃	45	〃	9.1 5.4 3.0	〃	紫灰色	〃	207	No.9	
310	〃	46	〃	9.4 5.2 3.4	〃	灰色	〃	253	No.10	
311	〃	47	〃	10.2 6.0 2.7	〃	青灰色	〃	297	No.11	
311	〃	48	〃	9.8 6.8 3.0	〃	黒青灰色	〃	282	No.12	
311	〃	49	〃	9.0 5.0 2.2	〃	灰褐色	砂岩	175	No.13	
311	〃	50	〃	10.8 4.4 4.0	〃	灰色	安山岩	227	No.14	
311	309号住	51	磨石	19.8 6.6 5.1	稜端部に敲打痕	暗青灰色	〃	1003	No.39	
312	195号住	52	打製石斧	17.0 9.6 3.1	先端刃部磨耗、側縁刃潰し稜部欠損、片面のみ自然面を残す	緑黒色	砂質粘板岩	601		
312	210号住	53	〃	12.4 5.2 2.2	先端一部欠損、側縁一部刃潰し稜部磨耗	〃	粘板岩	149		
312	264号住	54	〃	18.4 7.0 2.5	両端欠損、側縁一部刃潰し	灰黄色	泥質ホルンフェルス	344		
312	328号住	55	〃	13.8 4.6 1.9	側縁刃潰し	青灰色	粘板岩	154		ホルンフェルス化、完形
312	334号住	56	〃	12.6 4.4 1.2	側縁一部刃潰し	暗緑灰色	〃	94	No.5	完形
312	421号住	57	〃	7.4 9.2 2.7	片面に自然面、両面磨耗、先端欠損	灰黄色	安山岩	184	No.3	
312	4号配石	58	〃	10.6 6.8 2.0	〃	〃	〃	189	No.2	
312	〃	59	〃	10.0 6.4 1.5	後部欠損、先端稜部磨耗	暗緑灰色	粘板岩	118	No.4	
312	〃	60	〃	23.4 5.8 6.0	板状、節理に沿ってうすくする周縁は欠けやすく全体にもろい	緑黒色	千枚岩	110	No.3	
312	〃	61	〃	28.4 7.6 0.8	〃	〃	〃	231	No.3	
312	2号溝状遺構	62	〃	12.4 4.0 1.2	片面に自然面、側縁刃潰し	暗青灰色	砂質粘板岩	69		完形

（法量は長軸長・短軸長・厚さの順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	種別	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	石材	重量(g)	出土位置	備考
312	2号溝状遺構	63	打製石斧	10.2 5.0 0.8	先端部斜行、磨耗、側縁刃潰し、後部欠損	暗青灰色	粘板岩	55		
312	〃	64	〃	9.6 3.0 1.0	先端部尖り、磨耗	オリーブ黄色	砂岩	32		破片の可能性あり
312	13号土坑	65	〃	13.0 4.4 1.1	先端部潰れ	緑黒色	粘板岩	78		完形
312	A21B27	66	〃	12.2 5.4 2.3	側縁刃潰し	暗青灰色	〃	183		〃
312	〃	67	〃	12.8 5.8 1.0	先端部、斜行、くびれ	黄灰色	〃	97		ホルンフェルス化、全体に軟化
312	〃	68	〃	13.0 8.0 2.5	先端部斜行、くびれ、くびれ部に刃潰し、先端潰れ	灰色	〃	265		完形
312	2号水田東トレンチ	69	〃	12.0 4.7 1.5	側縁部刃潰し、先端稜部磨耗著しい	緑灰色	〃	118		ほぼ完形
312	A21B25	70	〃	15.8 10.2 1.6	先端部斜行、くびれ、側縁部刃潰し	灰色	砂質粘板岩	300		完形
312	A22B27	71	〃	18.4 9.2 2.0	側縁部刃潰し、先端部潰れ、磨耗、先端部やや斜行	暗緑灰色	粘板岩	351		〃
312	A23B23	72	〃	17.2 6.0 2.3	側縁部刃潰し	緑黒色	〃	321		ホルンフェルス化、完形、全体軟化
312	A23B27	73	〃	18.4 11.0 3.4	後部欠損、くびれ、側縁刃潰し著しい	黄灰色	ホルンフェルス	802		
312	A27B27	74	〃	18.2 10.0 2.9	片面に自然面残る、側縁刃潰し先端部磨耗	緑黒色	粘板岩	547		完形
313	408号住	75	凹石	11.8 7.2 4.8	両面に凹み、自然礫、やや軟質	灰白色	デイサイト	431	No.12	〃
313	417号住	76	〃	13.6 6.7 4.9	側面整形、両面磨耗、凹み、両端やや磨耗	黄灰色	安山岩	733	No.1	〃
313	7号溝	77	〃	15.8 10.8 9.3	4面に凹み、自然礫、やや軟質	灰黄色	デイサイト	1504	No.8	平安以降か 完形
313	4号配石	78	〃	9.4 5.3 3.2	両面に凹み、自然礫	暗灰色	安山岩	144	No.5	完形
313	A19B25	79	〃	10.4 8.8 7.1	両面凹み、両面、周縁やや磨耗自然礫か	灰白色	〃	481		完形
313	A19B24	80	〃	11.4 8.0 4.7	両面凹み、側縁にも浅い凹み、敲打痕（側面整形か）	〃	〃	538		〃
313	A22B27	81	〃	16.1 7.6 3.5	両面に2ヶづつの凹み、側縁に敲打痕（側面整形か）、やや磨耗	灰褐色	〃	548		〃
313	A19B24	82	〃	13.0 9.2 4.1	両面に2ヶづつの凹み、周縁整形	にぶい黄橙色	〃	537		〃
313	211号住	83	磨石	9.8 8.5 4.5	自然礫、片面やや磨耗	灰黄色	〃	412	No.12	〃
313	394号住	84	〃	7.2 3.8 1.9	全体磨耗、硬質	オリーブ灰色	礫岩	58		土器研磨具か、完形
313	408号住	85	〃	9.0 7.0 3.5	全面磨耗、硬質、重量感あり	暗オリーブ灰色	砂岩	307	No.1	完形
313	A19B25	86	〃	7.2 4.8 4.5	部分的に敲打痕、全体的に磨耗	黄灰色	花崗岩類	193		〃
314	5号配石	87	石棒	21.4 13.6 12.7	先端平担、全面研磨	灰白色	安山岩	4820	No.1	後部欠損
314	〃	88	〃	18.0 14.4 13.0	先端研磨、体部敲打、後端部分的に研磨	〃	〃	5200	No.2	
314	〃	89	〃	11.4 6.0 7.7	両端欠損、後端部分的に研磨、体部研磨	灰色	〃	1020		
314	417号住	90	〃	10.8 — 8.8		黄灰色	デイサイト	980		6号配石
314	2号溝状遺構	91	〃	6.9 7.7 6.4	先端部打痕、後部欠損、体部研磨	〃	〃	550		緑色変質した石材
314	A17B25	92	〃	10.0 9.4 11.2	両端部欠損、体部敲打	灰白色	〃	2060		〃
314	137号住	93	石剣	12.5 3.2 2.0	全面研磨、断面楕円形	オリーブ灰色	結晶片岩	137.5	No.2	両端欠損
314	A23B22	94	石冠	7.2 5.0 4.7	全体研磨	灰白色	安山岩	134.5		表面赤色化（被熱）、破損
314	412号住	95	不明	14.4 11.2 11.5	石冠状、全面敲打	灰色	〃	1860		154土坑
314	A18B26	96	石錘	12.0 4.7 1.2	両端切目（研磨）	暗緑灰色	粘板岩	120.5	No.2	両面磨耗 完形
314	244号住	97	〃	13.0 4.5 2.2	両端打ち欠き	灰オリーブ色	砂岩	191.5		完形
314	210号住	98	〃	6.8 4.2 1.0	〃	灰色	〃	35.4		〃
315	220号住	99	凹石	21.4 20.2 9.4	自然礫、片面中央に凹み1ヶ（径6.6cm、深さ1.5cm）、内面磨耗	〃	安山岩	5500		平安か、両面に小孔があるが、自然のものか
315	1号河道	100	〃	14.5 12.9 5.2	自然礫、片面中央に凹み1ヶ（径5.5cm、深さ1.3cm）	〃	〃	1200		平安か
315	7号溝	101	〃	18.0 14.8 7.0	自然礫、片面中央に凹み1ヶ（径6.5cm×5.5cm、深さ1.1cm）、敲打痕	〃	〃	2690		〃
315	A23B28	102	〃	19.2 16.6 7.6	自然礫、片面中央に凹み1ヶ（径8cm、深さ2cm）	灰褐色	〃	3020		〃
315	表採	103	〃	10.2 9.2 6.8	自然礫、片面中央に凹み1ヶ（径5.5cm、深さ1.4cm）、内面磨耗	灰白色	〃	800		〃

（法量は長軸長・短軸長・厚さの順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	種別	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	石材	重量(g)	出土位置	備考
315	160号住	104	磨製石斧	9.5 4.5 3.2	全面敲打、先端部研磨、後端部打痕	緑灰色	緑色岩	230		完形
315	323号住	105	〃	16.0 5.1 1.4	全面研磨、片刃状	灰黄褐色	蛇紋岩類	210		〃
315	2号溝状遺構	106	〃	11.4 5.9 3.7	全面敲打、研磨、後端部打痕	暗灰黄色	緑色岩	367		刃部欠損、欠損後打痕あり
315	A21B27	107	〃	9.9 4.2 1.9	全面研磨	緑灰色	緑色岩?	134		装着部はミガキが弱い、完形
316	218号住	108	石皿	28.0 18.8 10.7	脚2ヶ、敲打により作り出す	灰白色	デイサイト	7060		2/3の破片
316	〃	109	〃	18.4 27.3 9.8		灰色	安山岩	5850		1/2の破片
316	394号住	110	〃	11.3 21.5 7.0		〃	〃	2120		破片
316	4号配石	111	〃	14.3 9.0 5.7	縁を作り出す	〃	〃	557		破片、破損部を磨り石として利用する
316	A21B25	112	〃	28.4 10.9 5.7	両面使用、孔があく	灰白色	デイサイト	2390		1/3の破片
316	A19B26	113	〃	22.4 15.3 3.0		灰色	安山岩	2260		完形
316	表採	114	〃	35.1 22.6 9.2		灰黄色	〃	11150		〃
316	〃	115	〃	37.0 28.3 17.5	石皿の未製品	灰褐色	〃	20200		〃
316	〃	116	〃	38.2 28.5 12.3		灰色	〃	23400		〃
317	79号住	117	蜂ノ巣石	21.2 21.4 14.4	自然礫、2面に凹み	〃	〃	9100	No.4	
317	84号住	118	〃	22.0 20.0 14.2	〃	〃	〃	6100	No.23	
317	205号住	119	〃	21.8 15.0 9.8	自然礫、1面に凹み	〃	〃	5600		
317	408号住	120	〃	20.4 16.3 11.0	〃	灰色	〃	4100	No.2	
317	〃	121	〃	24.2 19.3 15.7	自然礫、2面に凹み	オリーブ灰色	〃	4940	No.5	
317	〃	122	〃	19.4 14.0 10.1	〃	灰白色	〃	3850	No.4	
317	2号配石	123	〃	18.3 13.8	〃	灰色	〃	2950	No.22	
318	〃	124	〃	28.0 19.4 12.9	〃	黄褐色	〃	10800	No.21	
318	〃	125	〃	26.9 19.5 10.4	〃	灰色	〃	7750	No.23	
318	〃	126	〃	20.9 16.2 14.1	〃	灰白色	デイサイト	5200	No.15	
318	〃	127	〃	22.7 15.8 11.5	〃	〃	〃	2650	No.25	
318	412号住	128	〃	19.5 16.0 11.7	〃	青灰色	安山岩	3450	154号土坑 No.1	
319	A16B25	129	〃	20.0 18.1 9.8	〃	灰色	〃	5000	No.1	
319	A17B26	130	〃	16.5 13.4 10.2	〃	〃	〃	2250	No.1	
319	A18B26	131	〃	22.6 15.7 13.9	〃	〃	〃	5000	No.3	
319	A18B20	132	〃	19.5 15.1 9.2	〃	〃	〃	2550	No.1	
319	A21B27	133	〃	17.8 13.9 8.7	〃	黄灰色	〃	2800	No.2	
319	〃	134	〃	23.1 18.5 12.7	〃	灰色	〃	6300	No.4	
319	A21B26	135	〃	22.5 18.5 13.3	〃	黄灰色	〃	6400	No.2	
320	A21B27	136	〃	22.2 21.5 13.3	〃	灰白色	〃	7150	No.3	
320	表採	137	〃	18.2 16.4 7.8	〃	〃	〃	3050		
320	A22B27	138	〃	21.0 18.3 8.4	〃	灰色	〃	3250		
320	408号住	139	丸石	21.7 20.8 15.3	自然礫	〃	〃	8500	No.3	
320	6号住	140	石鏃	3.5 2.0 0.6	無茎、大型、側縁は鋸歯状	茶褐色	チャート	2.96	No.5	完形
320	A21B21	141	〃	2.0 1.8 0.4	無茎	黒色	黒曜石	0.91		〃
320	47住	142	〃	2.4 1.7 0.4	無茎、側縁は鋸歯状	〃	〃	0.73		
320	229住	143	〃	1.7 1.7 0.3	無茎、片面に自然面を残す	〃	〃	0.79		完形
320	57住	144	〃	1.4 1.0 0.2	無茎、微小	灰色	〃	0.28		〃

（法量は長軸長・短軸長・厚さの順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	種別	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	石材	重量(g)	出土位置	備考
320	39住	145	石鏃	3.2 1.8 0.5	有茎、側縁は鋸歯状	黒色	黒曜石	1.47		
320	11溝	146	〃	3.2 2.0 0.4	有茎	〃	〃	1.76		
320	〃	147	〃	2.3 1.5 0.4	有茎、側縁は鋸歯状	〃	〃	1.02		完形
320	152住	148	〃	2.1 1.7 0.4	〃	暗灰色	〃	0.94		
320	107住	149	〃	1.6 1.4 0.3	有茎、両面に大きな剥離面を残す	黒色	〃	0.46	竈	
320	A19B26	150	不明	3.1 1.4 0.5	釣針状	茶褐色	チャート	2.87		
320	222住	151	石匙	2.7 1.4 0.9	全体に磨耗	黒灰色	黒曜石	5.31		完形
320	11溝	152	〃	3.4 2.3 0.6		黒色	〃	3.61		〃
321	368号住	153	台石	41.3 34.8 10.2	自然礫、両面に磨耗	灰色	安山岩	24500		
321	表採	154	石臼	24.0 11.8 11.6	穀臼（上臼）	〃	〃	3800		破片
321	〃	155	〃	32.8 17.3 14.2	〃	〃	〃	8950		〃
321	〃	156	〃	31.2 12.8 10.4	穀臼（下臼）	〃	〃	6100		〃
321	〃	157	〃	26.4 19.5 10.7	穀臼（上臼）	〃	〃	5600		〃

第12節

土製品

第16表　宮ノ前遺跡出土瓦観察表

（法量は長軸長・短軸長・厚さの順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	種別	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
322	343号住	1	平瓦	— — 1.9	凸面格子叩き 凹面布目、桶板痕	青褐色	黒色粒子		敷島町天狗沢瓦窯址と同一叩き
322	2号土坑	2	〃	— — 1.2	凹面、布目、桶板痕	灰白	黒・白色粒子 安山岩片		凸面剥離 宮ノ前第2遺構と同一
322	3号溝	3	〃	— — 1.5	凸面　縄叩き 凹面　布目	灰褐	〃		宮ノ前第2遺跡と同一

第17表　宮ノ前遺跡出土ミニチュア土器観察表（奈良・平安）

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
322	141号住	1	手捏ね坏	(10.2) 5.2 4.5	底部木葉痕、体部手持ヘラ削りナデ	橙色	白色粒子	No.50	
322	157号住	2	手捏ね坏状	(4.8) (5.0) 2.0	ナデ	白褐色	粗		
322	158号住	3	〃	(6.0) — —	〃	にぶい橙色	白色粒子 軟質		
322	162号住	4	〃	(4.6) (3.6) 3.9	〃	にぶい黄橙色	やや粗 白色粒子		
322	172号住	5	〃	5.0 4.5 3.2	〃	褐色		No.11	
322	〃	6	〃	(6.0) 5.2 4.6	底部木葉痕、ナデ	〃	雲母	No.12	
322	200号住	7	〃	4.0 2.0 3.6	ナデ	黄褐色	粗、石英、雲母、小礫	No.16	
322	235号住	8	〃	— 4.6 —	〃	にぶい黄橙色	粗、白・黒色粒子	No.18	
322	〃	9	〃	6.4 5.0 4.2	底部木葉痕、ナデ	橙色	粗、白色粒子	No.14	口縁部外面黒色変化
322	244号住	10	〃	5.2 4.0 3.5	〃	褐色	やや粗	No.41	
322	249号住	11	〃	(6.0) — —	ナデ	黄褐色	やや粗、白・赤色粒子、雲母		
322	〃	12	〃	5.6 3.8 4.0	〃	灰白色		No.1	
322	〃	13	〃	(4.2) 3.2 2.9	〃	褐色	粗、赤・白色粒子 石英	No.1	
322	288号住	14	〃	(3.6) (3.0) 2.8	〃	にぶい黄橙色	白色粒子		
322	303号住	15	〃	— (2.6) —	〃	黄褐色	白色粒子、石英 雲母		

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
322	304号住	16	手捏ね坏状	3.4 — 2.4	ナデ	黄褐色	やや粗	No.1	
322	325号住	17	〃	— 3.2 —	〃	〃	やや粗、白・赤色粒子	No.1	
322	341号住	18	〃	(4.8) 4.0 2.9	〃	にぶい橙色	やや粗	No.16	
322	343号住	19	〃	3.1 2.4 2.9	〃	〃			
322	11号溝	20	〃	4.3 3.5 3.9	〃	橙色	やや粗、白色粒子	No.3	完形
322	1号溝状遺構	21	〃	(6.0) (3.5) 5.2	底部板状圧痕、ナデ	にぶい橙色	白・赤色粒子	No.42	
322	〃	22	〃	(7.0) — 4.1	ナデ	〃	〃	No.43	
322	A20B26	23	〃	(4.0) (3.2) 2.8	〃	黄褐色	粗、石英、雲母、小礫		

第18表　宮ノ前遺跡出土土錘観察表

（法量は長軸長・短軸長・厚さの順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	種別	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	重量(g)	出土位置	備考
323	10号住	1	土錘	7.9 3.1 0.7	紡錘形、表面に筋状の圧痕	にぶい橙色	白色粒子	81.1	No.18	完形、磨耗なし
323	30号住	2	〃	3.3 1.8 0.5		橙色	白色粒子 石英、岩片	7.3	No.13	磨耗
323	〃	3	〃	4.2 1.7 0.45		にぶい橙色	白・黒色粒子	11.1	No.6	両端磨滅、欠損
323	〃	4	〃	4.2 2.2 0.5		灰色	白・黒色粒子	16.2	No.3	磨耗
323	〃	5	〃	4.6 1.4 0.3		灰褐色	白・赤色粒子	11.9	No.2	磨耗、片減り
323	〃	6	〃	3.9 1.9 0.4		赤褐～灰色	白色粒子	15.2	No.1	両端縁部、胴部磨耗
323	〃	7	〃	4.5 2.0 0.3		灰褐色	白色粒子	15.3	No.17	磨耗
323	〃	8	〃	5.0 2.1 0.5		〃	白・黒色粒子	20.8	No.2	〃
323	〃	9	〃	4.2 1.6 0.4		にぶい橙色	白・赤色粒子	9.5	No.14	磨耗、端部一部欠損
323	〃	10	〃	4.2 2.0 0.4		灰褐色	白色粒子	16.2	No.10	磨耗
323	〃	11	〃	3.8 1.5 0.4		にぶい橙色	安山岩片	7.0	No.4	磨耗、端部欠損
323	〃	12	〃	3.6 1.8 0.3		灰褐色	白・赤色粒子	12.1	No.15	端部欠損、磨耗
323	〃	13	〃	3.4 1.9 0.6		〃	白・黒色粒子	8.8	No.9	磨耗、端部欠損
323	〃	14	〃	4.5 1.6 0.4		褐色～黒色	赤色粒子	10.2	No.5	磨耗
323	〃	15	〃	4.2 1.9 0.4		灰褐色	白色粒子 花崗岩片	13.3	No.8	〃
323	〃	16	〃	5.0 2.1 0.4		灰褐色～黒色	白・黒色粒子	20.7	No.11	〃
323	35号住	17	〃	4.6 1.7 0.4		にぶい褐色	白色粒子	11.5	No.16	端部欠損、磨耗なし
323	40号住	18	〃	4.3 1.9 0.45	両端面ヘラ削り	灰褐色	〃	17.6		磨耗
323	42号住	19	〃	5.0 2.2 0.4	胴部一部ヘラ削り	橙色	白・赤色粒子多量、やや粗	20.2	No.19	磨耗なし
323	50号住	20	〃	5.6 1.9 0.4		灰褐色	白・赤色粒子	22.8	No.12	磨耗
323	62号住	21	〃	4.1 2.0 0.4		〃	白・黒色粒子、長石	14.0	No.3	両端欠損、磨耗
323	〃	22	〃	4.5 1.5 0.45		〃	白・赤色粒子	10.2	No.4	磨耗、やや片減り
323	〃	23	〃	4.9 2.0 0.45		灰白色～黒色	白・黒色粒子	18.1	No.7	磨耗、端部欠損
323	63号住	24	〃	4.4 2.0 0.4		にぶい橙色	白・赤・黒色粒子、やや粗	14.1	No.6	磨耗、胴部剥離
323	69号住	25	〃	5.4 2.2 0.4		灰色	白色粒子	24.2		磨耗、やや片減り
323	87号住	26	〃	3.6 1.8 0.4		黒褐色	〃	13.6	No.3	円筒状、やや磨耗
323	120号住	27	〃	3.8 1.7 0.6	胴部指頭痕	灰褐色	〃	12.7	No.5	円筒状、磨耗なし
323	〃	28	〃	4.6 1.7 0.65	胴部・両端面ヘラ削り	橙色	〃	14.5	No.1	磨耗なし
323	255号住	29	〃	4.8 1.6 0.45		明橙色	〃	9.4	No.3	磨耗、両端欠損
323	293号住	30	〃	3.9 1.6 0.4		〃	〃	8.3		〃

（法量は長軸長・短軸長・孔径の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	種別	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	重量(g)	出土位置	備考
323	310号住	31	土錘	3.4 1.7 0.6		褐色	白・赤色粒子岩片、やや粗	7.3	No.17	磨耗、両端欠損
323	318号住	32	〃	3.7 1.9 0.6	胴部・両端面ヘラ削り	にぶい橙色	白・赤色粒子	13.2		円筒状、磨耗なし
323	364号住	33	〃	4.6 2.1 0.55	両端面ヘラ削り、胴部指頭痕	黄褐色	白色粒子	20.2	No.29	〃
323	409号住	34	〃	6.3 1.7 0.4		〃	〃	15.3	No.20	磨耗
323	10号掘立	35	〃	4.3 2.2 0.45		暗褐色～黒色	白色粒子	21.9		円筒状、磨耗
323	〃	36	〃	3.7 2.1 7.5		〃	〃	17.7		〃
323	〃	37	〃	3.6 2.1 0.5		〃	〃	17.4		やや磨耗
323	11号溝	38	〃	4.4 2.0 0.4		灰褐色～赤褐色	〃	19.6	No.1	磨耗
323	1号溝状遺構	39	〃	2.5 2.2 0.6		にぶい褐色	安山岩片	10.6		半分欠損、やや磨耗、円筒状
323	表採	40	〃	4.1 1.7 0.5		灰褐色	白色粒子	13.3		両端欠損、磨耗

第19表　宮ノ前遺跡出土羽口観察表

（法量は長軸長・短軸長・孔径の順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	種別	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
323	86号住	1	ふいご羽口	— 6.5 1.8	指頭痕	灰褐色～赤褐色	長石、石英、雲母多量、粗	No.2	先端発泡
323	105号住	2	〃	— 7.5 2.1		〃	密、白色粒子	No.12・13	
323	〃	3	〃	— 5.7 2.2		〃	岩片、白色粒子多量		先端やや発泡
323	317号住	4	〃	— — —		〃	白色粒子	325住No.1	破損面も黒色
323	330号住	5	〃	— — —		橙色	〃		
323	A21B23	6	〃	— — —		灰白色～橙色	安山岩片、長石多量、粗		先端発泡
323	A21B26	7	〃	— — —		赤～橙色	白色粒子		先端発泡、ガラス質

第20表　宮ノ前遺跡出土耳栓観察表

（法量は径・厚さの順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	種別	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	重量(g)	出土位置	備考
324	384号住	1	耳栓	4.2 2.3		灰褐色～赤褐色	安山岩片多量、粗	38	No.13	完存
324	4号配石	2	〃	3.3 1.6	ナデ	灰褐色	白色粒子	13	No.6	〃
324	A18B26	3	〃	3.2 1.7	〃	黒褐色	白色粒子雲母	15		〃

第21表　宮ノ前遺跡出土土製円板観察表

（法量は径・厚さの順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	種別	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	重量(g)	出土位置	備考
324	20号住	1	土製円板	3.7 0.7	無文	黄褐色	白・黒色粒子	13.7		周縁は細かい打ち欠き
324	25号住	2	〃	4.0 0.9	刺突文(曽利式か)	〃	〃	15.1		周縁は荒い打ち欠き
324	47号住	3	〃	3.3 0.8	無文			11.7		〃
324	58号住	4	〃	3.8 0.8	〃	暗褐～橙色	白・黒色粒子多量	13.6	No.1	〃
324	100号住	5	〃	3.8 1.0	〃	褐色	白・黒色粒子	18.4		周縁磨耗
324	170号住	6	〃	2.2 0.4	甲斐型坏底部片	橙色	白・赤色粒子	2.0		周縁研磨
324	180号住	7	〃	3.3 0.7	無文	黄白色～黒色	赤・白色粒子、雲母	9.1		周縁磨耗
324	182号住	8	〃	4.4 1.2	沈線文(曽利Ⅴ式)	褐色～黄褐色	黒・白色粒子	30.2		〃
324	218号住	9	〃	4.0 0.7	無文	暗褐色～赤褐色	〃	12.5		周縁一部磨耗
324	251号住	10	〃	4.1 0.8	沈線文(堀之内式か)	灰色～黄褐色	白・黒色粒子	14.7		
324	288号住	11	〃	3.5 1.1	無文	黄褐色～灰褐色	黒・白色粒子、粗	17.8		周縁磨耗
324	384号住	12	〃	3.3 0.8	〃	明赤褐色	白色粒子雲母			

（法量は径・厚さの順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	種　別	法　量 (cm)	技法・形態の特徴	色　調	胎　土	重量 (g)	出土位置	備　　考
324	408号住	13	土製円板	4.7 1.0	沈線文(後期か)	灰褐色	白色粒子	28.1		周縁一部磨耗
324	4号配石	14	〃	3.4 0.8	無文	黄褐色～黒褐色	〃	11.0		周縁全体をていねいに磨く、片面全体が剥離
324	2号溝状遺構	15	〃	3.6 1.2	縄文(中期末か)	灰褐色～褐色	白・赤・黒色粒子多量、粗	17.1		
324	〃	16	〃	4.0 0.8	無文(晩期か)	灰褐色	白・黒色粒子	12.6		周縁一部磨耗
324	〃	17	〃	4.3 0.9	条痕文(晩期)	黒褐色～黒色	〃	20.9		〃
324	〃	18	〃	3.3 0.7	無文	灰褐色	白・赤色粒子	7.9		周縁部全体が斜めに磨耗
324	〃	19	〃	4.3 0.8	〃	黄橙色～黒色	〃	18.2		隅丸方形
324	〃	20	〃	5.5 0.9	条痕文(晩期)	黒褐色	白色粒子	29.9		隅丸方形、周縁一部磨耗
324	〃	21	〃	5.8 0.9	〃	橙　色	白・黒色粒子多量	31.7		周縁一部磨耗
324	〃	22	〃	5.6 0.9	〃	明褐色～黒褐色	白・赤色粒子、雲母	33.4		周縁荒い打ち欠き
324	〃	23	〃	6.4 0.8	〃	黒褐色	白・黒色粒子	40.7		〃
324	A19B26	24	〃	2.8 0.8	無文	黄褐色	〃	8.1		周縁全体磨耗
324	A20B27	25	〃	3.6 0.6	沈線文(晩期)	灰褐色	〃	10.5		隅丸方形
324	〃	26	〃	4.2 0.9	無文	黄褐色	白色粒子	19.5		周縁一部磨耗
324	〃	27	〃	3.2 0.9	沈線文	暗褐色	白・黒色粒子	11.2		周縁ほぼ全体磨耗
324	A21B22	28	〃	3.2 0.7	沈線文(条痕か)	灰褐色	〃	7.6		周縁は荒い打ち欠き
324	A22B26	29	〃	3.6 1.2	沈線文	明褐色	白・黒色粒子、石英	18.1		周縁全体磨耗
324	A22B28	30	〃	4.7 1.1	列点文(曽利式か)	灰褐色	白・黒色粒子	24.2		周縁荒い打ち欠き、裏面剥離
324	〃	31	〃	3.4 1.0	無文	赤褐色～黄褐色	〃	14.3		周縁全体磨耗
324	A23B20	32	〃	4.0 0.8	〃	黄褐色～黒色	〃	17.2		周縁荒い打ち欠き
324	A23B21	33	〃	3.5 0.9	〃	灰褐色	〃	12.3		〃
324	〃	34	〃	3.4 0.6	沈線	黄褐色	〃	8.5		口縁部片
324	〃	35	〃	4.0 0.7	無文	黄褐色～灰褐色	白色粒子	12.2		鋭角に打ち欠く
324	〃	36	〃	3.2 0.8	〃	明黄褐色	白・黒色粒子	9.9		
324	〃	37	〃	3.4 0.7	〃	灰褐色～赤褐色	〃	9.1		不整円形
324	〃	38	〃	4.1 0.8	〃	灰黄色	白・黒色粒子、石英	18.7		
324	〃	39	〃	3.9 0.7	〃	赤褐色	荒い長石石英粒子	13.2		鋭角に打ち欠く
324	〃	40	〃	3.0 0.8	〃	黒褐色	安山岩片長石片	9.2		〃
324	〃	41	〃	3.2 0.7	〃	黒　色	白色粒子	7.7		
324	A23B21	42	〃	3.7 0.7	〃	明褐色	白・黒色粒子	11.9		
324	A23B22	43	〃	4.5 1.8	〃	灰褐色	白色粒子雲母多量	19.1		
324	A23B29	44	〃	4.6 1.1	〃	赤褐色～黒色	安山岩片黒色粒子	26.7		周縁一部磨耗

第22表　宮ノ前遺跡出土土製蓋観察表

（法量は径・厚さの順、—は計測不能、（ ）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器　種	法　量 (cm)	技法・形態の特徴	色　調	胎　土	出土位置	備　　考
325	161号住	1	蓋	6.0 3.0	ナデ、横に孔	にぶい黄橙色	やや粗、白色粒子		ほぼ完形
325	300号住	2	〃	7.4 2.1	1対の孔	暗褐色	粗、石英		〃
325	A20B26	3	〃	7.1 1.5	2孔1対	黄褐色	やや粗、石英、小礫	No.2	〃
325	〃	4	〃	(14.0) 4.7	横に孔、ナデ	褐　色	粗、石英、赤色粒子、小礫		
325	A21B27	5	〃	5.0 3.5	2孔1対	〃	白・黒色粒子	No.1	完形

第23表　宮ノ前遺跡出土ミニチュア土器観察表(縄文時代)

(法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、(　)は推定値)

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
325	2号溝状遺構	6	手捏ね	(9.0) (6.0) 4.5	ナデ	灰褐色	白色粒子、雲母		
325	2号配石	7	〃	— 2.8 —	縄文	にぶい黄橙色	粗、白色粒子	No.9	
325	2号水田	8	〃	— — —	内面黒色	にぶい橙色	白・赤色粒子	No.17	
325	A14B19	9	〃	3.5 0.8 1.8	ナデ	にぶい褐色	白色粒子、やや粗	No.67	

第24表　宮ノ前遺跡出土その他土製品観察表

(法量は長軸長・短軸長・厚さの順、—は計測不能、(　)は推定値)

挿図番号	出土地点	番号	種別	法量(cm)	技法・・形態の特徴	色調	胎土	出土位置	備考
325	7号溝	10	不明	4.3 2.0 0.8	孔を3ヶもつ	明赤褐色			
325	A23B24	11	〃	4.5 2.2 1.0	孔を1ヶもつ(焼成前穿孔)	黄褐色	白・黒色粒子、小礫		
325	A23B28	12	土偶	5.7 2.3 1.6	左腕片、3本沈線による指の表現	にぶい褐色	粗、白色粒子、石英、小礫、雲母		
326	78号住	13	焼成粘土柱	33.5 12.6 10.5	ナデ	暗黄褐色	岩片、小礫、白色粒子多量		
326	119号住	14	〃	26.5 16.4 11.2	〃	〃	〃		

第13節

木　製　品

第25表　宮ノ前遺跡出土木製品一覧表

※(　)は現存値

挿図番号	出土地点	番号	種類	法量(mm)			備考	実測No.
				長さ	幅	厚		
327	2号溝状遺構	1	皿	復元口径220	高 17	2～5	かなり脆く、大きく3片に分かれる。底部内面に削り痕がみられる。	62
327	2号溝状遺構	2	皿	—	高 (11)	2	非常に脆い。全体に薄手のつくりである。底部内面にわずかだが削り痕がみられる。	57
327	2号溝状遺構	3	皿	—	高 (10)	5	かなり脆い。底部内面にわずかだが削り痕がみられる。	115
327	2号溝状遺構	4	円形曲物	径 175	63	12	蓋板の周縁には段をめぐらす。側板は1列4段で内綴じ。4箇所で結合。桜皮残る。	50
327	2号溝状遺構	5	円形曲物	径 152	—	6	底板のみ残存。木釘による結合痕が3箇所にみられる。あと数箇所あると思われるが不明。	49
327	2号溝状遺構	6	円形曲物	推定径160	—	6	底板の約⅓ほど残。3箇所にほぼ均等な間隔で釘による結合痕がみられる。	58
327	2号溝状遺構	7	円形曲物	径 181	高 (15)	9	側板が一部残。蓋板も一部欠損するがほぼ残。周縁は低い段をめぐらす。3箇所で側板との結合孔が認められ桜皮も残存する。	48
327	2号溝状遺構	8	円形曲物	径 175	—	10	底板のみ残。側板の結合方法は釘結合。釘孔はほぼ均等に5箇所認められる。内面が黒変している。	36
327	2号溝状遺構	9	円形曲物か	推定長径145	133	2～3	底板のみ残。非常に脆く5つの破片から成り立つ。木釘の結合痕は1箇所のみ確認。円形というより楕円形曲物かもしれない。内面には何らかの工具痕がみられる。	109
327	3号溝状遺構	10	円形曲物	推定径170	—	4	底板のみ残。非常に脆く4つの破片から成り立つ。周縁は低い段をめぐらすが、残存するのはわずか。側板との結合孔も不明瞭。	159
328	2号溝状遺構	11	円形曲物	推定径108	—	1～6	底板か。非常に脆く、木釘痕、皮紐孔などは認められず結合方法は不明。	59
328	2号溝状遺構	12	円形曲物	推定径175	—	8	底板だろう。わずかな破片のため木釘孔などは認められず。厚手のつくりである。	56
328	2号溝状遺構	13	蓋板	推定径124	—	7	周縁を面取りしている。粗雑なつくりで内面にこげめがみられる。	60
328	2号溝状遺構	14	円形曲物	(165)	(51)	3	側板のみ。下半部も存在するが、上半部のみ実測。端部とその内側2箇所を綴じ、1列2段以上の内綴じである。桜皮も残る。内側端部にケビキが入れられる。	189
328	2号溝状遺構	15	折敷	(576)	(151)	5～10	約½残存。底板のみ。楕円形を呈すると思われ、周縁は段を目ぐらす。側板の結合には桜皮を用い、その結合孔が3箇所みられる。そのうち2箇所で桜皮残存。	101
328	2号溝状遺構	16	折敷	(186)	(202)	3～6	約⅓残存。底板のみ。非常に脆く6つ以上の破片から成る。周縁は低い段をめぐらす。側板との結合のための結合孔が2箇所みられる。いずれも桜皮が残る。長方形を呈すると思われる。	52
328	2号溝状遺構	17	折敷	(364)	(111)	9	約⅓以上残。3つに割れている。上下両端がかすかに磨り減る。段はもたず、木釘による側板の結合と思われるが木釘痕などは不明。	70
329	2号溝状遺構	18	瓢箪柄杓	(396)	7～13	7～13	身部の瓢箪は柄の装着部周辺以外ほとんど欠損。柄部は丸棒状で先端にいくにしたがい細くなる。	63
329	2号溝状遺構	19	柄	405	16	13	柄杓の柄部だろう。角棒状。やや脆い。	72
329	2号溝状遺構	20	柄	(296)	23	20	柄杓の柄部だろう。丸棒状。	122
329	2号溝状遺構	21	柄	300	18	8	柄杓の柄部だろう。丸棒状。	73
329	2号溝状遺構	22	柄	(285)	20	20	柄杓の柄部だろう。丸棒状。刻みが2箇所程度みられる。	66
329	2号溝状遺構	23	柄	(244)	8～10	8～11	柄杓の柄部だろう。角棒状	136

※(　)は現存値

挿図番号	出土地点	番号	種類	法量（mm）			実測No.	備考
				長さ	幅	厚		
329	2号溝状遺構	24	柄	(236)	9～23	8～21	柄杓の柄部だろう。断面形は楕円形を呈し、丸棒状。	135
329	2号溝状遺構	25	柄	(255)	9～15	15	柄杓の柄部だろう。断面形は正三角形状を呈す。	88
329	2号溝状遺構	26	柄	(208)	15～25	23	柄杓の柄部だろう。面取りを施し、断面形は八角形を呈する。	123
329	2号溝状遺構	27	柄	(190)	12	10	柄杓の柄部だろう。身部方向の先端の断面形状は円形を呈すが、握部は台形状を呈す。	40
329	2号溝状遺構	28	柄	(194)	11	7	柄杓の柄部だろう。断面形は楕円形を呈す。	182
329	2号溝状遺構	29	柄	(185)	10	6	柄杓の柄部だろう。断面形は方形を呈す。	46
329	2号溝状遺構	30	柄	(115)	16	16	柄杓の柄部だろう。断面形は円形を呈す。	144
329	2号溝状遺構	31	柄	(175)	20	14	柄杓の柄部だろう。断面形は方形を呈す。	203
329	2号溝状遺構	32	柄	(135)	14	13	柄杓の柄部だろう。断面形は円形を呈す。	137
329	2号溝状遺構	33	柄	(185)	15～18	11～13	柄杓の柄部だろう。断面形は楕円形。	39
329	2号溝状遺構	34	柄	(108)	16	14	柄杓の柄部だろう。断面形は楕円形。	198
329	2号溝状遺構	35	横櫛	縦幅 34	横幅 (68)	厚さ 2.5～6	長方形を呈すると思われ肩部に丸みをもつ。つくりは丁寧で歯はやや粗い。歯の切り通し線は背の上縁の曲線に沿っている。	55
329	2号溝状遺構	36	糸巻	(61)	(33)	6	糸巻の横木の一部だろう。板の中央を幅広くのこし両端を棒状に削り出したタイプのものだろう。	105
330	2号溝状遺構	37	馬鍬	(340)	48	75	馬鍬の台木片。非常に脆く、4つ以上の破片から成る。	102
330	2号溝状遺構	38	馬鍬	(184)	52	57	台木の一部。非常に脆いが、表面は丁寧に削っている。	51
330	2号溝状遺構	39	横槌	全長 275 柄部 160	身部 46 柄部 20	身部 45 柄部 20	身と柄が明瞭に分かれているが、身部はその使用が激しくかなり中央部が窪んでいる。	119
330	2号溝状遺構	40	柄	(330)	21～33	22	鎌の柄と思われる。柄元を欠く。まっすぐな握りで柄尻はやや幅広に削り残している。全体の仕上げは粗く、断面形は方形を呈す。	106
330	2号溝状遺構	41	柄	(289)	23	13	鎌の柄の未製品と思われる。全体に粗く削っている。断面形は長方形を呈す。	61
331	2号溝状遺構	42	用途不明	97	(65)	21	熊手状に歯をもつ。歯の間隔は粗い。柄を装着するためか孔が穿れている。農耕具の一種であろうか。	87
331	2号溝状遺構	43	斎串	167	28	4	完存。上端部は圭頭状を呈する。扁平な薄板状。	31
331	2号溝状遺構	44	斎串	182	12	7	完存。上端部は圭頭状を呈する。立体的。	11
331	2号溝状遺構	45	斎串	217	14	7	完存。上端部は圭頭状を呈する。立体的。	32
331	2号溝状遺構	46	斎串	(51)	15	4	上端部の一部のみ残存。圭頭状を呈する。扁平な薄板状。	35
331	2号溝状遺構	47	斎串	(77)	13	5	下半部欠損。上端部は圭頭状を呈する。薄板状。	166
331	2号溝状遺構	48	斎串	(103)	15	5	下端部欠損。上端部は圭頭状を呈する。薄板状。	34
331	2号溝状遺構	49	斎串	(107)	13	7	下端部欠損。上端部は圭頭状を呈する。薄板状。	14

※（ ）は現存値

挿図番号	出土地点	番号	種類	法量（mm）			備考	実測No.
				長さ	幅	厚		
331	2号溝状遺構	50	斎串	(141)	17	4	下端部欠損。上端部は圭頭状を呈する。薄板状。	33
331	2号溝状遺構	51	斎串	(137)	10	6	下端部欠損。上端部はやや不明瞭ながら圭頭状を呈す。やや立体的。	21
331	2号溝状遺構	52	斎串	(153)	9	3	側辺一部欠損。上端部は一方のみ斜めに削り落とす。やや立体的。	12
331	2号溝状遺構	53	斎串	179	9	7	ほぼ中間で破損する。上端部は一方のみ斜めの削り落とし。	22
331	2号溝状遺構	54	斎串	211	14	10	側辺と下端部が一部欠損。上端部は一方のみ斜めの削り落とし。立体的。	192
331	2号溝状遺構	55	斎串	292	17	14	完存。上端部は不明瞭だが、一方のみ斜めの削り落とし。立体的。	37
331	2号溝状遺構	56	斎串	(347)	11	4	下端部を欠損。上端部は不明瞭だが、圭頭状もしくは斜めに切り落としている。やや立体的。	68
332	2号溝状遺構	57	斎串	189	20	8	完存。上端部の2箇所に切り込みを入れる。立体的。	9
332	2号溝状遺構	58	斎串	(171)	5	5	下端部欠損。上端部の1箇所に切り込みを入れる。立体的。	165
332	2号溝状遺構	59	斎串	(131)	12	10	下半部欠損。上端部の1箇所に切り込みを入れる。立体的。	201
332	2号溝状遺構	60	斎串	313	12	9	ほぼ完存。上端部の1箇所に切り込みを入れる。立体的。	2
332	2号溝状遺構	61	斎串	(240)	14	7	下半部欠損。上端部と側辺部の2箇所に切り込みを入れる。薄板状。	164
332	2号溝状遺構	62	斎串	282	9	7	完存。上端部の1箇所に切り込みを入れる。下端部にこげめがみられる。立体的。	1
332	2号溝状遺構	63	斎串	332	10	8	完存。上端部は不明瞭ながら圭頭状に削り、側辺部の1箇所に切り込みを入れる。下端部が炭化する。立体的。	3
332	2号溝状遺構	64	斎串	336	11	9	完存。切り込みなどはみられない。下端部が炭化する。立体的。	4
332	2号溝状遺構	65	斎串	(308)	10	7	上端部と下端部の側辺を欠損。切り込みなどはみられない。立体的。	5
332	2号溝状遺構	66	斎串	(442)	12	4	上端部欠損。切り込みなどはみられない。薄板状。	67
332	2号溝状遺構	67	斎串	(163)	8	6	上半部欠損。立体的。	10
332	2号溝状遺構	68	斎串	(157)	9	7	上半部欠損。立体的。	20
332	2号溝状遺構	69	斎串	182	10	6	完存。上端部は圭頭状に削り落としたようにみえる。立体的。	8
332	2号溝状遺構	70	斎串	(183)	12	7	両端の側辺わずかに欠損。側辺に切り掛け状のものがみられる。立体的。	23
332	2号溝状遺構	71	人形か	153	29	10	完存。上端部近くの両側辺にえぐりを入れている。全体に丁寧なつくりで各稜はきちんと面取りしている。人形かどうか定かでない。立体的。	30
333	2号溝状遺構	72	棒状木製品	192	17	9	下端部が炭化。	191
333	2号溝状遺構	73	棒状木製品	164	15	9	下端部が炭化。	170
333	2号溝状遺構	74	棒状木製品	167	8	3	下端部が炭化。薄板状	15
333	2号溝状遺構	75	棒状木製品	(182)	9	5	下端部が炭化。	43

※(　)は現存値

挿図番号	出土地点	番号	種類	法量(mm)			備考	実測No.
				長さ	幅	厚		
333	2号溝状遺構	76	棒状木製品	(131)	8	8	下端部が炭化。	133
333	2号溝状遺構	77	棒状木製品	141	10	8	下端部が炭化。上端部は斜めに削られているようである。斎串かもしれない。	13
333	2号溝状遺構	78	棒状木製品	133	17	12	下端部が炭化。	171
333	2号溝状遺構	79	棒状木製品	119	17	15	下端部と上端部の裏面が炭化する。	173
333	2号溝状遺構	80	棒状木製品	(119)	10	18	下端部が炭化。	163
333	2号溝状遺構	81	棒状木製品	(146)	17	6	下端部が炭化。	167
333	2号溝状遺構	82	棒状木製品	(123)	11	5	下端部が炭化。	174
333	2号溝状遺構	83	棒状木製品	(124)	14	6	下端部が炭化。薄板状。	172
333	2号溝状遺構	84	棒状木製品	(129)	10	9	下端部が炭化。	28
333	2号溝状遺構	85	棒状木製品	(140)	14	9	下端部が炭化。	26
333	2号溝状遺構	86	棒状木製品	(147)	11	10	下端部のやや広い範囲が炭化する。	27
333	2号溝状遺構	87	棒状木製品	(168)	14	12	下端部が炭化。	140
333	2号溝状遺構	88	棒状木製品	(171)	16	9	下端部が炭化。	139
333	2号溝状遺構	89	棒状木製品	(110)	11	3	下端部が炭化。	168
333	2号溝状遺構	90	棒状木製品	(135)	8	4	下端部が炭化。	196
333	2号溝状遺構	91	棒状木製品	(92)	9	4	下端部が炭化。	175
333	2号溝状遺構	92	棒状木製品	(93)	9	4	下端部が炭化。	176
333	2号溝状遺構	93	棒状木製品	(78)	18	10	下端部が炭化。	179
333	2号溝状遺構	94	棒状木製品	(49)	9	4	下端部が炭化。	190
333	2号溝状遺構	95	棒状木製品	(50)	12	8	下端部が炭化。	177
333	2号溝状遺構	96	棒状木製品	(58)	13	5	下端部が炭化。	178
333	2号溝状遺構	97	棒状木製品	(145)	13	7	上端部が炭化。	189
333	2号溝状遺構	98	棒状木製品	(86)	10	7	上端部が炭化。	157
333	2号溝状遺構	99	棒状木製品	(65)	20	13	上端部が炭化。	156
334	2号溝状遺構	100	棒状木製品	98	10	8	上下端部が炭化。	180

※（ ）は現存値

挿図番号	出土地点	番号	種類	法量（mm）			備考	実測No.
				長さ	幅	厚		
334	2号溝状遺構	101	棒状木製品	126	10	10	上下端部が炭化。表面も散在的に炭化する。断面円形。	194
334	2号溝状遺構	102	棒状木製品	(149)	14	7	上下端部が炭化。	134
334	2号溝状遺構	103	棒状木製品	(158)	16	11	上下端部が炭化。	132
334	2号溝状遺構	104	棒状木製品	(163)	13	8	上下端部が炭化。	155
334	2号溝状遺構	105	棒状木製品	185	10	12	上下端部が炭化。	131
334	2号溝状遺構	106	棒状木製品	246	8	7	上下端部が炭化。	18
334	2号溝状遺構	107	棒状木製品	(241)	16	8	側辺部の一部を欠損。	7
334	2号溝状遺構	108	棒状木製品	316	15	9	上下端部の一部を欠損。	42
334	2号溝状遺構	109	棒状木製品	143	9	5	側辺部の一部を欠損。	17
334	2号溝状遺構	110	棒状木製品	(110)	13	6	下端部を丁寧に削っている。	151
334	2号溝状遺構	111	棒状木製品	(146)	16	10	上下端部を欠損。	184
334	2号溝状遺構	112	棒状木製品	(172)	14	7	上半部を欠損。	193
334	2号溝状遺構	113	棒状木製品	(143)	19	9	上半部を欠損。表面に削りの痕跡がみられる。	146
334	2号溝状遺構	114	棒状木製品	(125)	10	6	上半部を欠損。	181
334	2号溝状遺構	115	棒状木製品	(157)	9	4	薄板状で脆い。	24
334	2号溝状遺構	116	棒状木製品	(156)	13	3	薄板状。	160
334	2号溝状遺構	117	棒状木製品	(128)	11	9	上下端部を欠損。	169
334	2号溝状遺構	118	棒状木製品	(138)	9	6	上下端部を欠損。やや脆い。	195
334	2号溝状遺構	119	棒状木製品	(150)	12	12	上下端部を欠損。断面形は円形を呈す。	202
334	2号溝状遺構	120	棒状木製品	(140)	11	8	上下端部を欠損。	138
334	2号溝状遺構	121	棒状木製品	(159)	9	5	下半部の一部を欠損。	25
334	2号溝状遺構	122	棒状木製品	(186)	11	5	上下端部を欠損。	142
334	2号溝状遺構	123	棒状木製品	(170)	14	5	上下端部を欠損。	142
334	2号溝状遺構	124	棒状木製品	(152)	15	8	上下端部を欠損。	197
335	2号溝状遺構	125	棒状木製品	(242)	14	4	上下端部を欠損。薄板状。	45

※（ ）は現存値

挿図番号	出土地点	番号	種類	法量（mm）			備考	実測No.
				長さ	幅	厚		
335	2号溝状遺構	126	棒状木製品	(223)	11	3	薄板状。両端部を欠損。	162
335	2号溝状遺構	127	棒状木製品	(199)	10	7	破損が著しい。	19
335	2号溝状遺構	128	棒状木製品	(157)	9	8	上半部を欠損。	124
335	2号溝状遺構	129	棒状木製品	(155)	10	9	上端部を削る。下半部を欠損。	90
335	2号溝状遺構	130	棒状木製品	(168)	8	6	下半部を欠損。	152
335	2号溝状遺構	131	棒状木製品	(147)	11	9	下半部を欠損。	145
335	2号溝状遺構	132	棒状木製品	(130)	18	5	下半部を欠損。	183
335	2号溝状遺構	133	棒状木製品	(360)	26	14	下半部を欠損。欠損が著しく上半部は裂けている。	112
335	2号溝状遺構	134	棒状木製品	(215)	21	19	下半部を欠損る	185
335	2号溝状遺構	135	棒状木製品	(102)	13	5	上半部を欠損。薄板状。	153
335	2号溝状遺構	136	棒状木製品	(245)	9	7	両端部を欠損。	6
335	2号溝状遺構	137	棒状木製品	176	6	5	上端部を欠損。下端部が炭化。	16
335	2号溝状遺構	138	棒状木製品	(130)	5	5	両端部を欠損。	29
335	2号溝状遺構	139	棒状木製品	164	5	3	上端部を欠損。	154
335	2号溝状遺構	140	棒状木製品	62	13	6	両端部を削り整えている。	84
335	2号溝状遺構	141	板状木製品	(242)	30	8	上半部の一部を欠損。下端部は炭化している。薄板状。	38
335	2号溝状遺構	142	板状木製品	(328)	21	3	下半部を欠損。やや脆い。薄板状。	82
335	2号溝状遺構	143	板状木製品	(524)	22	9	上端部を欠損。5つの破片から成る。やや脆い。下端およびその周辺が炭化している。	148
336	2号溝状遺構	144	丸木弓	(110)	—	20	一方の端部は欠損。もう一方の端部には両面を削り出し柄状の弭をつくる。全体に非常に脆い。いくつかの破片から成る。	121
336	2号溝状遺構	145	丸木弓?	(255)	—	17	両端部を欠損。	140
336	2号溝状遺構	146	丸木弓?	(455)	—	24	両端部を欠損。	111
337	2号溝状遺構	147	杭	522	32	26	ほぼ完存。断面形は方形を呈し、4面に加工痕がみられる。下端は鋭く尖らせている。	128
337	2号溝状遺構	148	杭	502	43	32	下端部の一部を欠損。加工痕もわずかながらみられる。	47
337	2号溝状遺構	149	杭	(466)	40	38	下端部の一部を欠損。表面には樹皮が残る。両端部は削りを加えている。	129
337	2号溝状遺構	150	杭	(360)	46	41	上半部を欠損。表面には樹皮が残る。下端部は削って鋭く尖らせている。	150

※(　)は現存値

挿図番号	出土地点	番号	種類	法量（mm）			備考	実測No.
				長さ	幅	厚		
337	2号溝状遺構	151	杭	(228)	46	31	上半部を欠損。表面は樹皮を取り除いた程度。下端部は削りを加えている。同箇所が炭化している。	41
337	2号溝状遺構	152	杭	(225)	67	55	上半部を欠損。表面には加工痕が残り、下端部は炭化している。	75
337	2号溝状遺構	153	杭	(338)	44	27	上半部を欠損している。表面は樹皮を取り除いた程度。下端部は削りによって尖らせている。	100
337	2号溝状遺構	154	杭?	165	60	59	非常に短いものである。杭かどうか定かではない。表面には樹皮が残る。上端と下端には削り痕がみられることからこれで完結するものだろう。	97
337	2号溝状遺構	155	杭?	136	38	38	非常に短いものである。154と同様杭かどうか定かではない。表面に樹皮が残り、上端と下端に削り痕がみられる。	127
338	2号溝状遺構	156	杭	725	71	70	下端部の一部を欠損。全体に加工痕がみられる。	104
338	2号溝状遺構	157	杭?	(494)	75	45	樹皮が残る杭状の断片である。散在的に加工痕がみられる。	80
338	2号溝状遺構	158	部材	(860)	51	40	片方の端部を欠損。断面形は長方形を呈し、丁寧に整形されている。残存する端部には削り出しによって枘がつくられる。	103
338	2号溝状遺構	159	用途不明	300	52	25	非常に丁寧につくられている。各々の稜には面取りを施す。やや裾広がりの長方形を呈し、一方の端部は枘状に削り細めている。	71
339	2号溝状遺構	160	板状木製品	(438)	(208)	24	厚い板状のもので両面に刀痕らしきものが散見できる。俎板だろうか。	199
339	2号溝状遺構	161	板状木製品	(470)	50	10	表面に3～5㎜四方の方形の小孔が多数みられる。何かの部材だろうか。	191
339	2号溝状遺構	162	板状木製品	(224)	(50)	5.5	薄板の断片。曲物の底板だろうか。	54
339	2号溝状遺構	163	板状木製品	(211)	(50)	5	薄板の断片。曲物の底板だろうか。	125
339	2号溝状遺構	164	板状木製品	(220)	(42)	4	薄板の断片。用途不明。	161
339	2号溝状遺構	165	板状木製品	(215)	(24)	2	薄板の断片。表面に削り痕がみられる。	89
339	2号溝状遺構	166	板状木製品	(140)	(44)	2	薄板の断片。曲物の底板だろうか。	83
339	2号溝状遺構	167	板状木製品	(272)	22	6	薄板で棒状を呈す。特に加工された痕跡はみられない。	76
339	2号溝状遺構	168	板状木製品	(202)	(36)	5	薄板の断片。	81
339	2号溝状遺構	169	板状木製品	(242)	(16)	3	薄板の断片。	78
339	2号溝状遺構	170	板状木製品	(176)	(25)	3	薄板で脆い。何かの底板か。	92
339	2号溝状遺構	171	板状木製品	(143)	(25)	8	薄板の断片。	187
339	2号溝状遺構	172	板状木製品	(168)	(29)	5	薄板の断片。	116
339	2号溝状遺構	173	板状木製品	(145)	(48)	8	薄板の断片。	117
339	2号溝状遺構	174	板状木製品	(92)	(28)	3	薄板の断片で用途不明。	91
339	2号溝状遺構	175	板状木製品	(160)	(28)	4	上端部はおそらく圭頭状を呈すると思われる。斎串だろうか。	79

※（ ）は現存値

挿図番号	出土地点	番号	種類	法量（mm）			備考	実測No.
				長さ	幅	厚		
339	2号溝状遺構	176	板状木製品	(320)	(90)	12	やや大きめの断片である。表面に3～5㎜四方の小孔がみられる。何かの部材だろうか。	94
340	2号溝状遺構	177	板状木製品	(327)	(39)	8	板材の断片。用途不明。	53
340	2号溝状遺構	178	板状木製品	(265)	(40)	9	板材の断片。用途不明。	77
340	2号溝状遺構	179	板状木製品	(267)	(31)	13	板材の断片。用途不明。	158
340	2号溝状遺構	180	板状木製品	(238)	(14)	9	薄板の断片。曲物の底板だろうか。	65
340	2号溝状遺構	181	板状木製品	(235)	(11)	6	薄板の断片。曲物の底板だろうか。	110
340	2号溝状遺構	182	板状木製品	(203)	(19)	11	やや厚めの板材の断片。用途不明。	188
340	2号溝状遺構	183	板状木製品	(131)	(19)	8	板材の断片。用途不明。	96
340	2号溝状遺構	184	板状木製品	(86)	(22)	10	板材の断片。用途不明。	130
340	2号溝状遺構	185	角棒状木製品	(345)	35	20	表面に削り痕がみられる。何かの部材か。	108
340	2号溝状遺構	186	角棒状木製品	(157)	26	12	表面に削り痕がみられる。何かの部材か。	147
340	2号溝状遺構	187	角棒状木製品	(244)	27	18	表面に削り痕がみられる。何かの部材か。	141
340	2号溝状遺構	188	角棒状木製品	(250)	42	16	角材の断片。用途不明。	85
340	2号溝状遺構	189	角棒状木製品	(309)	26	13	表面に削り痕がみられる。何かの部材か。	44
340	2号溝状遺構	190	角棒状木製品	(240)	37	22	角材の断片。用途不明。	99
340	2号溝状遺構	191	板状木製品	(58)	(36)	7	板材の断片。用途不明。	126
340	2号溝状遺構	192	板状木製品	(122)	(40)	5	薄板の断片。用途不明。	95
340	2号溝状遺構	193	角棒状木製品	(178)	31	33	表面に削り痕がみられる。何かの部材か。	107
340	2号溝状遺構	194	角棒状木製品	(135)	20	18	角材の断片。用途不明。	200
340	2号溝状遺構	195	角棒状木製品	(93)	50	38	角材の断片。用途不明。	86
340	2号溝状遺構	196	角棒状木製品	(92)	26	15	角材の断片。用途不明。	204
341	2号溝状遺構	197	角棒状木製品	(315)	76	38	角材の断片。用途不明。	120
341	2号溝状遺構	198	板状木製品	(290)	(80)	17	板材の断片。用途不明。	114
341	2号溝状遺構	199	板状木製品	(296)	(90)	19	板材の断片。用途不明。	113
341	2号溝状遺構	200	角棒状木製品	(247)	78	67	角材の断片。用途不明。	98
341	2号溝状遺構	201	板状木製品	(134)	(78)	19	板材か角材の断片。用途不明。	118

第14節

金　属　製　品

第26表　宮ノ前遺跡出土金属製品一覧表

※(　)は現存値

挿図番号	出土地点	番号	種　類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	出土位置	備　考
342	3住	1	釘	(82)	8	5	覆土	鉄製。ほぼ完存。
342	3住	2	釘	70	7	6	覆土	鉄製。ほぼ完存。
342	3住	3	釘か	(82)	6	6	覆土	鉄製。頭部欠。
342	3住	4	鏃	鏃身部(32) 篦被部(18) 基　部(31)	26	鏃身部 4 篦被部 5.5 茎　部 5	覆土	鉄製。茎部一部欠。鏃身部は両丸造で長三角形呈す。篦被は存在したと思われる。
342	3住	5	斧	75	38	4	竈前面 ほぼ床直	鉄製。着装部は袋状。折り返しは全周しない。
342	6住	6	鑿か	42	7	2	覆土	鉄製。先端がやや扁平で鑿状を呈する。
342	6住	7	鏃か	51	4.5	3	覆土	鉄製。鏃の茎部か。
342	6住	8	鉸具	(35)	(36)	4	覆土	鉄製。鉸具の刺金だろう。
342	9住	9	棒状鉄製品	(25)	5	3.5	竈内	鉄製。折れ曲がる。
342	21住	10	鑿か	(52)	15	2	覆土	鉄製。頭部を欠。
342	16住	11	釘	108	7	5.5	覆土	鉄製。完存。
342	18住	12	釘	(60)	5	2	覆土	鉄製。ほぼ完存だが、くの字状に折れ曲がる。
342	18住	13	棒状鉄製品	(62)	5	2.5	覆土	鉄製。何かの茎部か
342	21住	14	刀子	(60)	8	3	覆土	鉄製。切先および茎部欠。
342	21住	15	鎌	(114)	34	5.5	覆土	鉄製。切先、装着部を欠く。錆のためやや膨張する。
342	22住	16	鏃	鏃身部 52 頸　部(19)	15	鏃身部 2 頸　部 3.5	竈脇 ほぼ床直	鉄製。篦被不明瞭。鏃身部は両丸造で長三角形を呈す。逆刺はない。茎部欠。
342	25住	17	釘	(39)	5	5	覆土	鉄製。脚部欠。
343	31住	18	刀　子	160	12	2.5	覆土	鉄製。ほぼ完存。刀部の摩耗著しい。茎部全体に木質残る。
343	31住	19	刀　子	95	13	4	覆土	鉄製。切先および茎部を一部欠。
343	33住	20	斧	74	37	2	東壁寄り ほぼ床直	鉄製。ほぼ完存。着装部は袋状。折り返しは全周しない。
343	35住	21	鏃	鏃身部 79 頸　部(7)	9	4	覆土	鉄製。片丸造鑿箭式の鏃と思われる。頸部は欠失し棘の有無は不明。
343	35住	22	棒状鉄製品	(48)	6	6	覆土	鉄製。紡錘車の紡軸か。
343	36住	23	刀　子	(51)	11	3.5	覆土	鉄製。身部および茎部の一部欠。

※(　)は現存値

挿図番号	出土地点	番号	種　類	長　さ (㎜)	幅 (㎜)	厚　さ (㎜)	出土位置	備　考
343	36住	24	鏃	鏃身部 (53)	(23)	2	覆土	鉄製。鏃身部のみ残。長三角形を呈し、両丸造。
343	37住	25	釘か	(65)	8	8	覆土	鉄製。頭部欠。
343	37住	26	筒状銅製品	(56)	10	1.5	覆土	銅製。筒状を呈するが用途不明。
343	45住	27	鏃	鏃身部(40) 頸　部(44)	21	鏃身部－ 頸　部3	覆土	鉄製。全体に錆りため膨張が著しい。鏃身部の形態も不明瞭。
343	48住	28	鋲	(30)	4	3	ほぼ床直	鉄製。脚先欠。脚部途中で折れている。
343	49住	29	釘	(90)	7	8	竈 崩落土内	鉄製。ほぼ完存するが、脚部先端が折れ曲がる。
343	50住	30	鎌	(59)	17	2	覆土	鉄製。刃部の一部のみ残存。
343	51住	31	釘	(47)	7	3	覆土	鉄製。頭部と脚部先欠。
343	59住	32	肘金具	(45)	31	6	覆土	鉄製。頭部が環状を呈する。
343	63住	33	刀　子	(67)	8	1.5	覆土	鉄製。茎部欠。
343	65住	34	苧引金具	45	61	3.5	ほぼ床直	鉄製。脚部の両端に木質残る。刃は摩耗のためかあまり鋭くない。
344	69住	35	鏃か	75	6	5.5	覆土	鉄製。両端が釘状に尖る。
344	69住	36	棒状鉄製品	37	4.5	5	覆土	鉄製。鏃の茎部か。
344	71住	37	刀　子	(94)	15	3.5	覆土	鉄製。切先欠。欠損がやや著しい。
344	71住	38	棒状鉄製品	(42)	6.5	5	覆土	鉄製。釘の脚部か鏃の茎部
344	75住	39	釘	(53)	8	6	覆土	鉄製。脚部欠。
344	75住	40	不　明	(15)	(12)	9	覆土	鉄製。用途不明。
344	78住	41	鎌	(95)	25	2	覆土	鉄製。切先欠。刃部は消耗して、欠けている。装着角度111°。
344	83住	42	釘	(122)	8	8	覆土	鉄製。頭部、脚部先欠。頭部も一部欠。
344	86住	43	刀　子	(63)	9	2	覆土	鉄製。切先、茎部欠。
344	87住	44	鉸　具	(32)	(39)	7	覆土	鉄製。刺金だろう。
344	99住	45	釘	(124)	7	5	覆土	鉄製。頭部欠。
344	99住	46	刀　子	130	15	4	覆土	鉄製。未製品と思われ、刃もついていない。
344	100住	47	刀　子	(121)	17	3	覆土	鉄製。切先欠。
344	100住	48	鑢　子	(93)	7	3	覆土	金銅製。全体に鍍金を施すが剥落が激しい。100住に伴うものではない。

※（ ）は現存値

挿図番号	出土地点	番号	種　類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	出土位置	備　考
344	100住	49	刀　子	(41)	9	2.5	覆土	鉄製。茎部だと思われる。
344	104住	50	刀　子	100	7	3	覆土	鉄製。錆のため形態が不明瞭。
344	105住	51	斧	(85)	33	5	覆土	鉄製。刃部欠。着装部は袋状。木質が残る。折り返しは全周しない。
344	105住	52	刀　子	(29)	5	2	覆土	鉄製。茎部だろう。
344	107住	53	刀　子	(52)	7	3	覆土	鉄製。茎部だろう。
345	111住	54	刀　子	(102)	11	3	覆土	鉄製。切先、茎部欠。
345	113住	55	紡錘車	(280)	5	5	北壁寄り床直	鉄製。紡錘である。
345	113住	56	棒状鉄製品	(46)	5	5	覆土	鉄製。紡錘車の紡軸か。
345	113住	57	棒状鉄製品	(44)	4	4	覆土	鉄製。鏃の茎部か。
345	114住	58	刀　子	(76)	8	3.5	覆土	鉄製。身部の一部を欠く。
345	115住	59	板状鉄製品	(43)	13	5	覆土	鉄製。用途不明。
345	115住	60	鎌	200	40	5	覆土	鉄製。折れ曲がった状態で出土。刃部は欠けて消耗が激しい。装着角度111°。
345	122住	61	鏃か	(43)	8	3	覆土	鉄製。鑿箭式と思われ、鏃身部が短い。篦被部に木質が残る。
345	132住	62	鏃	鏃身部46.5 篦被部 37 茎　部 (9)	14	鏃身部 2 篦被部 4 頸　部 3	覆土	鉄製。茎部一部欠。鏃身部は長三角形を呈し、両丸造。篦被はやや長い。
345	137住	63	斧	(100)	40	5	覆土	鉄製。刃部から折れ曲がる。着装部は袋状。折り返しは全周しない。
345	138住	64	鏃	鏃身部 30 篦被部 27 茎部 (18)	36	鏃身部 4 篦被部 5 頸　部 4	覆土	鉄製。茎部が一部欠。鏃身部は正三角形を呈し、両丸造。
345	138住	65	鏃	鏃身部 41 頸　部(24)	23	鏃身部 3 頸　部 2	覆土	鉄製。茎部が一部欠。方頭斧箭式。
346	141住	66	円　鏡	径 約83	—	縁部 3.5	覆土	銅製。本住居に伴うものではないと思われる。縁はやや厚く外傾し、内部は細い線によって分けられ単圏である。文様およびその構成は不明。
347	143住	67	鎌	155	17	4	覆土	鉄製。ほぼ完存。刃部はかなり細い。装着角度129°。
347	144住	68	棒状鉄製品	(46)	20	20	覆土	鉄製。用途不明。
347	146住	69	棒状鉄製品	(50)	6	5	南壁際床直	鉄製。鏃の茎部か。
347	152住	70	刀　子	(80)	11	4	覆土	鉄製。茎部を欠。
347	153住	71	棒状鉄製品	(56)	7	6	覆土	鉄製。釘の脚部か。
347	158住	72	鑿か	(41)	17	5	ほぼ床直	鉄製。楔状。頭部を欠。
347	158住	73	刀　子	(44)	5.5	2	覆土	鉄製。身部を欠。

※(　)は現存値

挿図番号	出土地点	番号	種　類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	出土位置	備　考
347	159住	74	刀　子	(61)	6	2	覆土	鉄製。身部を欠。
347	159住	75	棒状鉄製品	(69)	7	6	覆土	鉄製。釘の脚部か。
347	160住	76	環	20	23	4	床面近く	銅製。表面の剥落が著しい。完存。
347	160住	77	棒状鉄製品	(46)	7	4	床面近く	鉄製。刀子の茎部か。
347	160住	78	鑢子用金具か	74	17	—	覆土	鉄製。頭部は環状を呈する。木質等は残存せず。
347	161住	79	刀　子	308	34	6	竈脇 床面近く	鉄製。ほぼ完存。茎部に小孔を穿つ。
347	161住	80	刀　子	(55)	16	4	覆土	鉄製。錆のため膨張。
347	163住	81	棒状鉄製品	43	5	3	覆土	鉄製。何かの茎部だろう。
347	169住	82	刀　子	(65)	14	4.5	床直	鉄製。身部の一部と茎部を欠。
347	169住	83	棒状鉄製品	(38)	5	3.5	覆土	鉄製。何かの茎部か。
348	173住	84	釘	85 (61)	8 6	6 5	覆土	鉄製。2本の釘が錆着。1本は完存。もう1本は脚尻欠。
348	173住	85	鎌	58	23	2	覆土	鉄製。切先のみ残存。
348	177住	86	棒状鉄製品	(77)	7	7	覆土	鉄製。断面は方形に近い楕円形。紡軸か。
348	179住	87	釘	(66)	7	5	覆土	鉄製。脚部先を欠。
348	179住	88	刀　子	(48)	7	3	ほぼ床直	鉄製。身部を欠。
348	184住	89	鏃	鏃身部 24 篦被部 39 茎　部(9)	27	鏃身部 5 篦被部 4 茎　部 3	覆土	鉄製。茎部を一部欠。鏃身部は錆のため少し膨張。正三角形を呈し、両丸造。篦被部はやや長め。
348	203住	90	刀　子	88	8	3.5	覆土	鉄製。錆のため全体にやや膨張している。
348	210住	91	棒状鉄製品	(75)	6	5	床面近く	鉄製。紡軸の一部か。
348	210住	92	棒状鉄製品	(51)	8	4.5	床面近く	鉄製。釘の脚部か。
348	212住	93	刀　子	(78)	7	2.5	覆土	鉄製。茎部を欠。
348	212住	94	釘	(125)	8	7	覆土	鉄製。完存するが、脚尻が曲がる。
348	218住	95	刀　子	(37)	8	3	覆土	鉄製。茎部の一部のみ残。
348	225住	96	棒状鉄製品	(56)	5	4	覆土	鉄製。紡軸の一部か。
348	226住	97	刀　子	(78)	8	2.5	覆土	鉄製。茎部を一部欠。
348	227住	98	苧引金具	32	73	4	床面近く	鉄製。脚部と身部の一部に木質が残る。刃部は鋭い。

※(　)は現存値

挿図番号	出土地点	番号	種　類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	出土位置	備　考
348	227住	99	刀　子	(145)	13	5	床面近く	鉄製。身部を½程欠。
348	227住	100	紡錘車	(271)	紡輪径 51	紡軸 4 紡輪 3	床面近く	鉄製。紡軸は所々で欠損している。
349	230住	101	紡錘車	径 57	軸孔径 5	3	床面近く	鉄製。紡輪。縁辺を所々欠く。
349	235住	102	板状鉄製品	(39)	8	2.5	竈内	鉄製。刀子の茎部か。
349	238住	103	半月形穂摘具	(93)	19	1.5	覆土	鉄製。薄く細長い板状のもの。孔が穿れる。
349	243住	104	刀　子	(95)	12	5	覆土	鉄製。切先と茎部の一部を欠く。錆のため全体にやや膨張気味。
349	243住	105	刀　子	(103)	13	7	覆土	鉄製。身部を欠。錆のため全体に膨張する。
349	244住	106	釘	122	7	5.5	ほぼ床直	鉄製。完存。やや湾曲する。
349	244住	107	釘	119	7	5	ほぼ床直	鉄製。完存。
349	244住	108	釘	118	5	4	ほぼ床直	鉄製。完存。
349	244住	109	刀　子	51	13	3	ほぼ床直	鉄製。茎部のみ残。錆のため全体に膨張している。
349	247住	110	釘	122 (50)	7 8	5 6	覆土	鉄製。2本の釘が錆着。うち1本は完存。もう1本は脚部がわずかに残。湾曲する。
349	250住	111	刀　子	(82)	14	3	覆土	鉄製。切先と茎部の一部を欠。
349	251住	112	釘	(101) (71) (79)	7 7 6	7 6 6	覆土	鉄製。3本の釘が錆着。頭部や脚部先を欠。湾曲する。
349	271住	113	刀　子	(184)	22	5	覆土	鉄製。茎部をわずかに欠くが、ほぼ完存。錆のためやや膨張。
349	274住	114	釘	(43)	5	5	覆土	鉄製。脚部先を欠。
349	278住	115	刀　子	(67)	13	5	床面近く	鉄製。身部と茎部先を欠。錆のためやや膨張する。
349	282住	116	棒状鉄製品	(51)	6	5	覆土	鉄製。紡軸か。
349	287住	117	棒状鉄製品	(39)	7.5	7	覆土	鉄製。紡軸か。
349	287住	118	銙帯金具	(37)	(32)	2	覆土	銅製。鉈尾。表金具。縁部は面取りしている。
350	288住	119	刀　子	(129)	18	6	覆土	鉄製。茎部先を欠く。錆のため膨張している。
350	288住	120	刀　子	74	11	3	覆土	鉄製。ほぼ完存。
350	288住	121	鏃	(98)	11	5	覆土	鉄製。箆被部と茎部が残。錆による痛みが激しい。
350	288住	122	板状鉄製品	(44)	17	3	覆土	鉄製。用途不明。
350	288住	123	棒状鉄製品	(24)	(15)	5	覆土	鉄製。何かの茎部が曲がったものか。

※(　)は現存値

挿図番号	出土地点	番号	種　類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	出土位置	備　考
350	292住	124	棒状鉄製品	(69)	5.5	4	床面近く	鉄製。鏃の茎部か釘の脚部だろう。
350	293住	125	刀　子	(46)	10	5	床面近く	鉄製。茎部。錆のため膨張する。
350	293住	126	刀　子	(78)	13	4.5	覆土	鉄製。身部を欠く。錆のため膨張している。
350	293住	127	刀　子	(46)	10	5	覆土	鉄製。茎部。錆のため膨張している。
350	294住	128	刀　子	(61)	19	3	床面近く	鉄製。切先を欠く。茎部は欠いて折れ曲がっている。
350	298住	129	棒状鉄製品	(59)	5	4	覆土	鉄製。何かの茎部か。
350	301住	130	鎌	150	25	4.5	床面近く	鉄製。ほぼ完存。装着角度112°。
350	302住	131	刀　子	(131)	13	4	床直	鉄製。何箇所かで折れ欠損する。錆のため膨張している。
350	302住	132	刀　子	(92)	16	5	覆土	鉄製。切先と茎部を欠く。錆のため膨張している。
350	302住	133	ピン状銅製品	(76)	—	2	覆土	銅製。断面は円形。用途不明。
350	302住	134	刀　子	(82)	12	3	覆土	鉄製。茎部先を欠く。わずかに木質残る。
350	304住	135	鋤か鍬	(148)	26	15	床面近く	鉄製。片側耳部のみ残。袋状を呈する。
350	307住	136	刀　子	(101)	15	6.5	覆土	鉄製。切先と茎部先を欠く。錆のため膨張している。
351	311住	137	刀　子	132	13	6	カマド前面床直	鉄製。身部で折れ欠損。錆のため膨張が著しい。
351	314住	138	刀　子	(40)	11	3	覆土	鉄製。茎部の一部。
351	315住	139	刀　子	(42)	10	3	ほぼ床直	鉄製。身部の一部。
351	318住	140	釘	(65)	5	5	覆土	鉄製。脚部先を欠く。
351	318住	141	刀　子	復元値 135	15	4.5	覆土	鉄製。完存するが、茎部から折れ曲がっている。
351	318住	142	鏃	鏃身部 44 篦被部 29 茎　部(30)	42	鏃身部 3 篦被部 6.5 茎　部 4	覆土	鉄製。茎部を少し欠く。鏃身部は腸刺が発達した正三角形を呈し、両丸造。
351	318住	143	棒状鉄製品	(46)	5	2.5	覆土	鉄製。何かの茎部か。
351	321住	144	刀　子	(48)	9.5	2.5	覆土	鉄製。身部か。
351	331住	145	刀　子	(30)	10	3.5	覆土	鉄製。身部か。
351	335住	146	鏃	鏃身部 44 篦被部 19 茎　部(24)	30	鏃身部 4 篦被部 4 茎　部 4	覆土	鉄製。茎部を一部欠く。鏃身部は長三角形を呈し、両丸造。
351	354住	147	刀　子	(56)	8	2.5	覆土	鉄製。身部だろう。
351	356住	148	棒状鉄製品	(58)	7.5	6	床面近く	鉄製。釘の脚部だろう。

※(　)は現存値

挿図番号	出土地点	番号	種　類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	出土位置	備　考
351	370住	149	釘	(149) (153)	7 8	5.5 6.5	ほぼ床直	鉄製。2本の釘が錆着。うち1本は折れ曲がる。ともに脚部先を欠く。
351	375住	150	棒状鉄製品	(51)	9	5	竈 崩落土内	鉄製。釘か。
351	375住	151	刀　子	(27)	5	2	竈内	鉄製。茎部だろう。
351	377住	152	棒状鉄製品	(126)	7	4	ほぼ床直	鉄製。何かの茎部だと思われるが、用途不明。
351	379住	153	鏃	鏃身部 29 篦被部 25 茎　部 31	35	鏃身部 3 篦被部 4 茎　部 4	竈 崩落土内	鉄製。茎部を一部欠く。鏃身部は正三角形を呈し、両丸造。
351	382住	154	棒状鉄製品	(130)	5	3	覆土	鉄製。何かの茎部だと思われるが用途不明。縁部が叩かれているようだ。
351	385住	155	紡錘車	径 (34)	軸孔 10	2	床直	鉄製。破損が著しい。軸孔も大きく広がってしまっている。
351	395住	156	棒状鉄製品	(33)	5	1	覆土	鉄製。刀子の茎部か。
351	410住	157	棒状鉄製品	(40)	5.5	4.5	覆土	鉄製。紡軸か。
351	412住	158	棒状鉄製品	(69)	5	4	覆土	鉄製。釘の脚か。
351	416住	159	鏃	篦被部(54) 茎　部(15)	9	篦被部 4.5 茎　部 4	覆土	鉄製。鏃の篦被部～茎部である。錆のため膨張している。
351	421住	160	肘金具	(56)	31	9	覆土	鉄製。頭部は環状を呈す。脚部先は欠失し頭部から折れ曲がる。
352	10堀立	161	鎚鉋状鉄製品	(100)	9	5	掘り方 覆土	鉄製。先端は叩きつぶされているのか、やや扁平である。錆のため膨張している。
352	25掘立	162	門金具	90	50	5	掘り方 覆土	鉄製。U字形を呈し、中位やや下半からL字形に曲がる。
352	25掘立	163	釘	(89)	7	6	掘り方 覆土	鉄製。完存するが中位下半から折れ曲がる。
352	25掘立	164	釘	(74)	6	6	掘り方 覆土	鉄製。脚部先を欠く。
352	26掘立	165	紡錘車	径44	軸孔5×4	2.5	掘り方 覆土	鉄製。紡軸である。
352	33掘立	166	釘	(82)	6	4	掘り方 覆土	鉄製。頭部を欠く。S字状に湾曲している。
352	33掘立	167	釘	98	6	5	掘り方 覆土	鉄製。完存。
352	48掘立	168	鍋　脚	(105)	30～37	17～19	掘り方 床面近く	鉄鋳物。断面形は内側がやや内湾する三角形を呈す。脚先は欠く。
352	7溝	169	鏃	鏃身部 22 篦被部(33)	(25)	鏃身部 5 篦被部 5	覆土	鉄製。形部を欠く。錆のため膨張している。逆刺の有無は不明。
352	7溝	170	紡錘車	(17.7)	紡輪径45	紡軸 4 紡輪 5	覆土	鉄製。紡軸の両端を欠く。
352	7溝	171	環頭釘	(76)	12.5	8.5	覆土	鉄製。脚部欠。
352	7溝	172	棒状鉄製品	(51)	15	18	覆土	鉄製。用途不明。
352	11溝	173	棒状鉄製品	(46)	6	5	覆土	鉄製。何かの茎部か。

※(　)は現存値

挿図番号	出土地点	番号	種　類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	出土位置	備　考
352	11溝	174	刀　子	(31)	6	3.5	覆土	鉄製。茎部だろう。
352	11溝	175	棒状鉄製品	(50)	6	5	覆土	鉄製。何かの茎部か。
352	11溝	176	棒状鉄製品	(37)	3	2	覆土	鉄製。鏃の茎部か。
352	11溝	177	筒状鉄製品	(30)	12	1	覆土	鉄製。用途不明。
352	11溝	178	棒状鉄製品	(86)	9	8	覆土	鉄製。釘か。
352	13溝	179	鏃	鏃身部 33 篦被部 28 茎　部(16)	25	鏃身部 3.5 篦被部 6 茎　部 4	覆土	鉄製。篦被部は棘状を呈す。鏃身部は五角形を呈し平造である。
352	13溝	180	棒状鉄製品	(39)	6.5	6	覆土	鉄製。釘の脚部先か。
353	1溝状	181	棒状鉄製品	(68)	12	10	覆土	鉄製。釘か。
353	1溝状	182	棒状鉄製品	(60)	15	7	覆土	鉄製。用途不明。
353	A14B25 グリッド	183	棒状鉄製品	(43)	8.5	8	—	鉄製。何かの茎部か。
353	A18B23 グリッド	184	棒状鉄製品	(77)	8.5	6	—	鉄製。湾曲する。用途不明。
353	A19B26 グリッド	185	釘	(38)	9	9	—	鉄製。脚部欠。
353	A19B27 グリッド	186	棒状鉄製品	(41)	6	5	—	鉄製。何かの茎部が折れ曲がったものか。
353	A20B21 グリッド	187	釘	(61)	3	3	—	鉄製。ほぼ完存するがへの字状に曲がる。頭部～脚部にかけて木質残る。
353	A20B24 グリッド	188	釘	91	9	7	—	鉄製。ほぼ完存。
353	A20B27 グリッド	189	棒状鉄製品	(69)	10	8	—	鉄製。先端はやや扁平に鑿状を呈する。何らかの工具だろう。
353	A19B26 グリッド	190	釘	110	11	8	—	鉄製。完存
353	A21B23 グリッド	191	不　明	(37)	(34)	5	—	鉄製。三角形の板状を呈すが、用途不明。
353	A21B29 グリッド	192	鏃	鏃身部 (24) 篦被部 (62) 茎　部 (20)	22	鏃身部 3.5 篦被部 7 茎　部 5	—	鉄製。鏃身部・篦被部・茎部をそれぞれ一部欠く。
353	A22B30 グリッド	193	板状鉄製品	(75)	17	3	—	鉄製。縁部を折り曲げ断面形はU字状を呈す。瓢箪状の穿孔をもつ。何かの留金だろうか。
353	A24B26 グリッド	194	環	径28～30	7	12	—	鉄製。完存。
353	A29B17 グリッド	195	釘	(89)	10	9	—	鉄製。ほぼ完存するが、頭部は脚部から折れる。
353	A29B17 グリッド	196	釘	(52)	9	8	—	鉄製。脚部先を欠く。頭部も脚部から折れる。
353	A24B16 グリッド	197	銭　貨	径23.4	—	—	—	熙寧元寶か。ほぼ完存。摩滅著しい。初鋳1068年。北宋。
353	A24B28 グリッド	198	銭　貨	径22.0	—	—	—	紹聖通寶か。ほぼ完存。摩滅著しい。初鋳1094年。南宋。
353	表　採	199	銭　貨	径23.0	—	—	—	開元通寶。完存。初鋳621年。唐。

第 5 章

各　　節

生産域（埋没旧河道内）の調査

第１節

宮ノ前遺跡の地形環境分析

高　橋　　学　（立命館大学・地理）

はじめに

近年、水田遺構や畠と考えられる畝状遺構など生産遺跡の調査が増えるにつれ、考古学とその隣接科学との関わりがより密接になってきたといえる。これまでの集落遺跡や埋葬遺跡に生産遺跡の調査が加わることによって、考古学は単なる遺物学、遺構学から脱し、「人間の生活」を研究する科学になりつつあるといえよう。

地形環境分析は環境考古学、なかでもジオアーケオロジーの観点から自然環境と人間活動との関わりを明らかにすることを目的として考案された分析方法である（第８図参照）。この分析は、過去の自然環境を復原し、その上で土地利用・土地開発や災害について考えようとするものであり、地形域環境分析、地形面環境分析、地形帯環境分析、微地形環境分析、極微地形環境分析の５段階のサブアナリシスから構成されている。今回報告する宮ノ前遺跡のような一集落規模の遺跡の場合、特に微地形環境分析が重要な役割を果たす。

地域の概観

さて、甲府盆地の北西に位置する韮崎地域を巨視的に見ると、わが国で最も地質構造が複雑なところということができる。それは、ここが東北日本と西南日本を分ける地質学上の境界線である糸魚川―静岡構造線（フォッサマグナ）にあたっていることによる。この地質的弱線には、富士山をはじめ八ヶ岳など多くの火山が分布している。

このような地質特性は人間の生活に大きく関与していることが知られている。たとえば、糸魚川―静岡構造線は別名大地溝帯とも呼ばれていることからも判るように帯状の谷をなしており、太平洋側と中部山岳地域そして日本海側とを結ぶ回廊として重要な交通路となってきたのである。釜無川に沿ってはＪＲ中央線や国道20号線が、また、塩川に沿っては、甲府と佐久を結ぶ国道141号線が延びている。前者は官道の信州往還、そして後者は脇往還であり、韮崎はその分岐点の宿場町として近世以降に発達した。

塩川は、関東山地の金峰山（標高：2,598m）に発する本谷川と瑞牆山（みずかきやま：標高2,230m）に源を持つ釜瀬川が合流した河川であり、八ヶ岳（標高：2,899m）から流れ落ちる須玉川を合わせて南東流し、韮崎市南部で釜無川に注ぐ。その流域長は37km、流域面積385km²を計る。

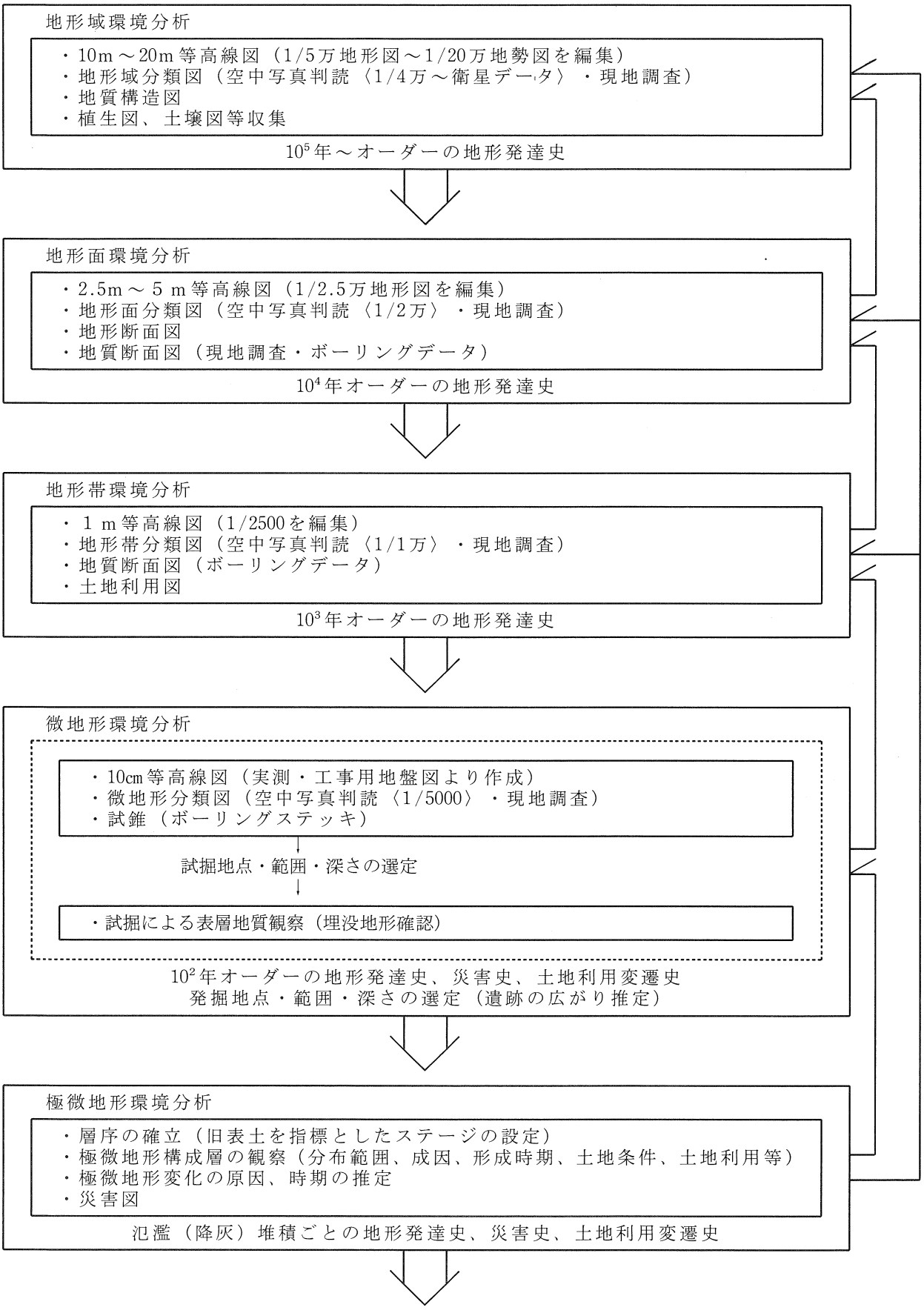
韮崎以北においては、塩川と釜無川とは比高70～80m、延長約30kmの七里岩台地と呼ばれる丘陵によって境されている。この七里岩台地は、八ヶ岳の泥流によって構成されており、頂部の平坦面には過去の履歴を物語る小円丘が特徴的に発達している。戦国時代に武田勝頼が築いた新府城は、この小円丘とその周囲の開析谷をうまく利用して造られた城である。

七里岩台地と茅ヶ岳（標高：1,704m）とに挟まれた塩川は、幅1,000m程の谷底平野を形成している。この谷底平野のうち南部の地域は、かつて「藤井庄五千石」（甲斐国志）と呼ばれたところであり、現在は水田としての土地利用が卓越している。

宮ノ前遺跡は、この藤井平のほぼ中央部、鳥居集落の西側に位置しており、韮崎市立韮崎北東小学校の建設に先立ち韮崎市遺跡調査会によって調査された。

塩川流域の地形面・地形帯環境分析

「藤井平」は、従来、塩川の形成した氾濫原と位置づけられてきた。確かに、この場所は広義の氾濫原面として形成されたとする従来の説は成因としては誤りではない。しかしながら、地形環境分析によれば、この氾濫原面は少なくとも新旧２面の時期を異にする地形面の集合体と考えられる。すなわち、現在の塩川の流路に沿って、



第８図　地形環境分析の方法と手順

見かけ上50cm～100cmの比高を持つ崖が存在し、この崖の下は文字どおり氾濫原面となっているが、崖の上においては塩川の氾濫がおよばなくなっている。いいかえれば、既に形成過程から破壊過程に入り旧氾濫原面（段丘面）となっているのである。ただし、この地形面が段丘面と化したのは、後に詳述するように、平安時代あるいはそれ以降のことであり、瀬戸内海沿岸平野における完新世段丘Ⅱ面に対比される。この地形面上には条里型土地割の水田が展開している。他方、現氾濫原面は、旧河道や中州などの微地形の不規則な土地割となっている。

さて、塩川は霞堤あるいは、信玄堤と呼ばれる不連続堤によって流路が人工的に固定されている。霞堤は、降雨などによって増水があった場合、堤防の不連続部分から上流側に向かい水を逆流させ勢いを弱める役割を果たす治水方法である。この治水方法が有効に作用するのは、地形の傾斜が急である場合、あるいは完新世段丘面と現氾濫原面が区別できる場合であり、そのふたつの条件をいずれも満足させており、地域の特徴に適合した治水方法といえる。

塩川の形成した現氾濫原面および完新世段丘Ⅱ面は、第９図に示したように幅の狭い扇状地帯である。したがって、湧水のある藤井平の南端を除き、河川の水は地下に浸透してしまい水不足に陥り易い。完新世段丘Ⅱ面上では特にその傾向が著しい。

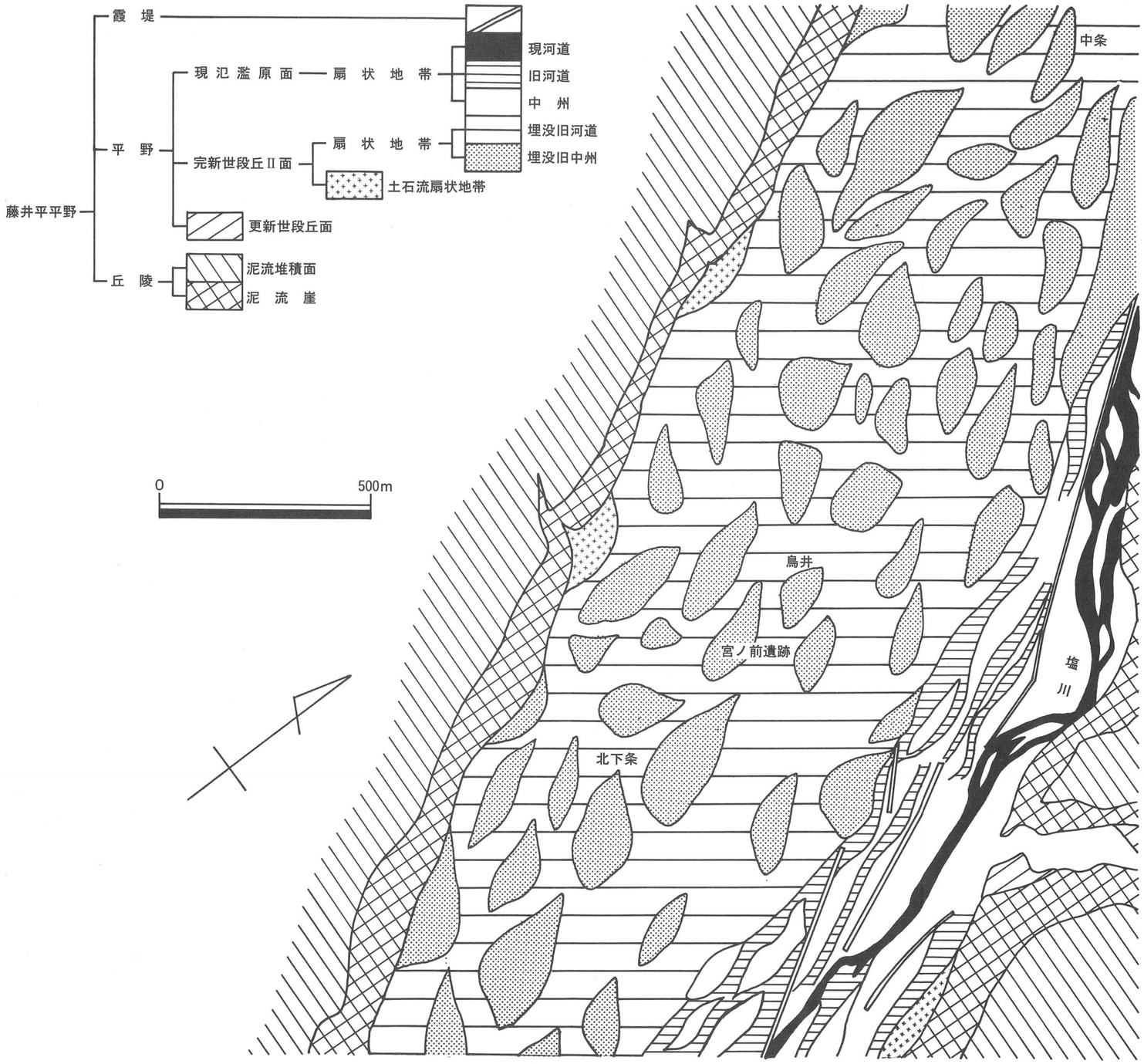
藤井平平野の微地形環境分析

微地形分析を実施した場合、条里型土地割の水田が展開し、比較的平坦な完新世段丘Ⅱ面・扇状地帯は、さらに細かく分類される[1)]。

第９図に示したように、現在は地表面下に埋没した微地形（以下、埋没微地形と呼ぶ）がみとめられる。すなわち、かつての塩川の流路が藤井平をまるで網目をかけたように流下するのである。また、流路と流路の間は中州となっている。前者をここでは埋没旧河道と呼び、後者を埋没旧中州と称することにする。埋没旧中州は、長軸がおよそ250m、短軸は約150m程度の規模のものが多い。

今回、発掘調査された宮ノ前遺跡の大部分は、埋没旧中州に位置していた。調査開始以前には水田として利用されていたこの場所は、平安時代には集落の立地する微高地として機能していた。当時ここは巨礫で構成された中州であったのである。そして、その後、微高地としての機能を失ない水田となったのである。同様な微地形環境を示すところは、藤井平において他にも多数みとめられる。たとえば、昭和62年度に韮崎市教育委員会によって発掘調査され奈良・平安時代の集落が確認された前田遺跡（韮崎市教育委員会1988）、昭和63年度に調査され縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の集落の存在が明らかになった後田遺跡（韮崎市教育委員会1989）など、これまでに藤井平において知られている集落遺跡のほとんどが埋没旧中州と深い関わりにある。すなわち、藤井平は、奈良・平安時代まではあちらこちらに集落の立地した中州が点在する景観を示していたのである。現在に生きる我々が通常目にするのは、水田から集落（住宅）へといった土地利用の変化であり、その反対の場合はほとんどない。ところが平安時代には、集落（住宅）から水田へといった地目の転換が生じていたのである。しかも、この傾向はこの地域にかかわらず、筆者がこれまでおもに調査してきた瀬戸内海沿岸の平野では極めて一般的にみとめられるのである。現在、水田として土地利用されているところから集落の遺構や墓などが発掘調査によって検出される場合のほとんどは、埋没した自然堤防や中州と関係している。いいかえれば、少なくとも古代以前の地形環境は現在と大きく異なっており、復原という手順を踏まえることなく土地利用について検討する事は危険といえよう。

ところで、1960年代以降における都市への人口集中と住宅不足が顕著になる以前においては、土地利用は微地形と密接に関わっていた。このため、微地形の状況を把握することは、土地利用のあり方を知ることでもあった。したがって、埋没微地形の状況を知ることによって、過去における土地利用上の様々な問題解決の糸口が発見できる可能性がある。たとえば、発掘調査が実施される以前に埋没微地形の様相が明らかになっていれば、これから発掘する場所がどのような土地利用であったか推定することができる。集落の中心近くを調査する場合と、その縁辺を調査する場合、あるいは水田などの生産域を調査する場合では、準備作業や発掘手順に様々な違いがで



第９図　藤井平平野　微地形分類図

てこよう。また、埋没微地形の状態を知ることは、過去に発掘調査の終了してしまった遺跡においても、そこから得られたデータの解釈に有効と考えられる。現地表面における遺跡の表面採集結果から遺跡の中心と考えられていた場所が集落の縁辺で、本当の集落の中心部分は遺跡の推定地から外れていることも、これまでしばしばあった。しかし、このようなミスは微地形環境分析によって防ぐことができる。さらに、ある集落に隣接する集落の存在が明らかになることで、集落間の関係を考えることもできよう。これまで拠点集落と呼ばれていた遺跡についても、このような観点から再検討の必要がある。はたして拠点集落と呼ばれている遺跡は本当に拠点であったのか、あるいは、たまたま調査された遺跡の中で優位な遺跡であったに過ぎないのかが問題となる。

埋没微地形を把握することは、集落遺跡にとって意味があるだけではない。埋没旧河道や埋没後背湿地の状況から水田域の広がりについて検討し、米の生産量などについてもポテンシャルを推定できる可能性がある。これまで、単位面積あたりの生産量にかかわる検討はなされてきているものの、上記のような観点はほとんど触れられてはいないのではなかろうか。

宮ノ前遺跡の微地形変化と土地開発

宮ノ前遺跡の集落は、微地形環境分析の結果、藤井平の他の集落遺跡と同様に扇状地帯・埋没旧中州上に立地していた。今回の調査では８世紀から11世紀にかけての竪穴住居や掘立柱建物が多数検出されている。また、発掘された範囲のほぼ全域にわたり条里型土地割を反映したと考えられる溝址が、N14°W方向およびそれに直交する方向に延びていた。これらの溝址は１町（60歩：およそ109m）およびそれをN倍、あるいは1/N倍した間隔で整然と展開しており、集落の中を貫通しているために住居址と複数箇所で切り合い関係が認められ、掘削時期を推定することができる。

まず、N14°W方向の溝址と住居址の関係に注目してみよう。N14°Wの方向性を持つ溝として、西から東に向かい溝址11，７，８，９，10がある。また、わずかに方向を異にする溝址14，13がある。この方向に延びる溝は、ほとんどの住居址を破壊して掘削されている。この中で最も新しい時期に属するものとして、宮ノ前X期（10世紀後半）の住居址がある。宮ノ前遺跡では11世紀まで住居址が存在したが、これらは溝との切り合い関係を確かめることができなかった。以上のことから、N14°W方向に延びる溝は10世紀後半より後に掘削されたものであることが判明する。

次に、溝と溝との距離に目を向けよう。これらの溝のうち、９号溝址と10号溝址、13号溝址と14号溝址、さらには７号溝址と８号溝址は、その平面プランから道路の側溝である可能性が指摘できる。７号溝址と９号溝址ないし10号溝址との距離は、およそ1/5町（12歩：約21m）、11号溝址と８号溝址も1/5町の間隔がある。そして、９号溝址あるいは10号溝址と14号溝址ないし13号溝址とは、およそ2/5町（24歩：約42m）離れて位置している。遺跡の東側の規格性と西側のそれとの間には、７号溝址、８号溝址の部分でズレが生じており、開発プロセスを考える上で注目される。

次に、東西に延びる溝について検討してみよう。東西に延びる溝のうち16号溝址は、多くの住居址と切り合い関係にあり、掘削時期を検討するために好都合である。この溝は、宮ノ前Ⅵ期（９世紀第２四半紀中心）に属する住居址241より新しく、宮ノ前Ⅶ期（９世紀第３四半紀中心）の住居址157、196、207より古いとみられている。すなわち、９世紀後半以前にいったん溝の掘削が行われたものの、比較的短期間に機能しなくなった可能性が高い。この16号溝址と６号溝址とはおよそ１町（60歩：109m）の距離があり平行している。また、これを２等分した半町（30歩：約54.5m）の位置には12号溝址が存在する。さらに、６号溝址と12号溝址の間隔を２等分する1/4町のところには５号溝址が東西に延びる。そして、これと同じ距離を６号溝址から北の方向にとったところには１号溝址が掘削されている。このように東西方向の溝は、共通したプランによる規格性を持つ可能性が高い。

さて、以上のことを総合すると、次のような仮説を立てることが可能であろう。すなわち、宮ノ前遺跡の埋没旧中州においては、９世紀後半以前に条里型土地割に基づく東西方向の溝が掘削されたが、その試みは成功しなかったか、成功したとしても何らかの理由で短期間の間に機能を失った。この時期には、今回発掘調査した宮ノ

前遺跡のほとんどの範囲は集落として土地利用されていた。そして、10世紀後半以降になって、N14°Wの方向性を持つ溝が掘削され、道路が設置された。そして、10世紀後半以降になると集落は衰退が始まり、11世紀にはほとんど消滅した。そして、その後、全面的に条里型土地割に基づく水田景観が成立したことになる。

このような現象は、古代における藤井平の地形環境の変貌と考え合わせてみると興味深い。すなわち、東西方向に延びる溝が掘削された頃（９世紀後半以前）には、宮ノ前遺跡付近はまだ塩川の氾濫原面であり、地下水位も高く、潅漑用水も比較的容易に得られたものと思われる。また、わずかな河川の増水でも塩川の流路は変化した。中州、旧河道といった微形地がまだ明瞭であり、土地条件はこれを反映していた。ところが、10世紀後半になると塩川の河床低下により完新世段丘Ⅱ面の段崖が形成され、宮ノ前遺跡付近の地形環境は大きく変化した。地下水位は低下し、潅漑用水は引水が困難になった。洪水の危険性は低下したものの、水不足のため耕地の経営にはさまざまな工夫を必要としたであろう。場合によっては、耕地が荒廃し荒野に帰した可能性すらある。このことは、10世紀後半以降、宮ノ前遺跡の集落が衰退し始めた要因のひとつかもしれない。この状態を打破するために設置されたのが、N14°Wの方向の溝や道路である。その時期については、10世紀後半を遡ることはないが今のところ明確ではない。河床低下のため従来の地点からは潅漑用水の取水が困難であるために、上流側に取水口を設ける必要があった。このため、段丘崖の形成以前のように東西方向に延びる溝では機能が十分に果たせないため、N14°W方向の溝が用水路として重要になった。いわば、再開発として条里型水田が開発されたのである。そして、この水田景観は、完新世段丘Ⅱ面の段丘崖によって洪水にほとんど遭うことなく、現在まで継続してきたものと考えられるのである。

ところで、調査範囲の西端付近には、初期型の水田址が存在する可能性が考えられた。ここでは、試掘によって15面の地表面が確認され、そのうち残存状態が良好でプラント・オパール分析の結果からも水田の可能性が指摘された４面めの旧地表面（４a）と14面めの地表面（14a）とが発掘調査された。その結果、４a上面からは条里型土地割を示す水田址が検出された。（図版編第129図参照）。また、14a上面からは不定型小区画水田が発見された（図版編第129図参照）。このうち１号水田址と名付けられた４a上面の遺構は、平安時代後期に属すると考えられている。これに対し、２号水田址とされた14aの上面の遺構は、弥生時代前期中葉から後葉の間に位置づけられている。

１号水田址の時期は、９世紀の第２四半期から10世紀前半に最盛期をむかえた宮ノ前遺跡の集落が急速に規模を縮小する時期に対応している。おそらく、この段階に藤井平に広く展開していた中州、網状の河道および旧河道といった微地形が埋没し、現在見るようなほぼ平坦な状態に至った可能性が高い。

他方、２号水田址の段階においては、場所によって土地条件に大きな差が存在しており、水田が開発できるところは極めて限られていた。すなわち、微起伏の存在する段階において水田耕作が可能であったのは、扇状地帯・旧河道あるいは中州のうち相対的に低い縁辺部分に限られていたのである。この部分は面積が狭いものの潅漑用水が得易く、しかも水管理が容易という利点がある。しかしながら、旧河道はしばしば洪水の際に河道と化すことがある欠点も持っていた[2)]。

以上、検討してきた宮ノ前遺跡における微地形変化と土地開発について概略を整理すると次のようになる。

１）２号水田址は微起伏の顕著な段階に旧河道に開発された水田であり、水田に水をはるために起伏にあわせて３～11㎡と狭い面積に小さく区画されている。このため、水田のプランは不定形になっている。水田が営まれた時期は弥生時代前期中葉から後葉にあたる条痕文系土器が、そして水田を埋没させる洪水砂層には、波状文を持つ弥生時代中期後葉から後期前葉の土器が含まれていた。また、水田耕土の^{14}C年代は2670±80y.B.P.（N－5747）、2190±80y.B.P.（N－5748）の値が得られている。

２）旧河道部分は少なくとも10回におよぶ洪水による埋積と水田の復旧あるいは再開発を繰り返した。この結果、起伏は徐々に減少し、平坦化していった。

３）中州上では条里型土地割との関わりが深い東西方向の溝が掘削された。この段階ではまだ塩川の河床は低下しておらず、段丘化後と比較すれば、藤井平は潅漑条件に恵まれていたと考えられる。溝の掘削は住居址との

切り合い関係からおよそ９世紀後半以前と考えられる。

４）中州上では８世紀第１四半期から住居址が営まれる様になり、８世紀第２四半期頃から10世紀前半にかけて集落が最盛期をむかえた。そして、10世紀後半には、急速に集落を構成する住居の数が減少した。

５）旧河道部分において１号水田址が開発される段階には、かなり起伏がなくなっており、規格を意識した水田がつくれるようになった。N14°Wの溝が掘削され宮ノ前遺跡付近は現在みるような条里型土地割の水田となったものと考えられる。

６）塩川の河床低下により藤井平が完新世段丘Ⅱ面となったことで、塩川本流の洪水による地層の堆積が顕著でなくなった。このため、藤井平の条里型土地割は、現在にまで継承されることになった。本流性の洪水による被害を受けにくくなった一方で、完新世段丘Ⅱ面上では、地下水位の低下や潅漑条件の悪化が生じた可能性が高い。段丘化した時期は、平安時代まで機能した溝が本流性とみられる砂礫によって埋積されていることから、それ以降のことと判断される。

７）完新世段丘Ⅱ面の形成により、現氾濫原面では塩川の洪水による被害が増加し、顕著な旧河道や自然堤防が形成された。人工的に築造された霞堤は、単に洪水を防ぐと言うよりは、現氾濫原面を河床として機能させ洪水流の力を減少させることで、完新世段丘Ⅱ面の段丘崖を侵食から守るためのものであった可能性が高い。

おわりに

甲府盆地およびその周辺の地形環境分析は、ようやく緒についたところである。今後、データを集積することで環境を考慮した、より精度の高い地域史を編むことが必要であろう。また、臨海平野あるいは西南日本との比較によって、この地域の地域性を明らかにしていく必要があると考えられる。

参考文献および註

高橋　学（1991）「土地を選ぶ水田」季刊考古学　37
高橋　学（1990）「遺跡発掘のための地形環境分析」帝京大学山梨文化財研究所報　10
韮崎市教育委員会（1988）『前田遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
韮崎市教育委員会（1989）『後田遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
平野　修・外山秀一（1990）「弥生時代前期の水田址」帝京大学山梨文化財研究所報　10

１）一般に、モノクロ空中写真では、地下水位が低く乾燥しやすい場所が淡いトーンに、反対に湿った土地は濃いトーンとして写る。たとえ、微地形が地表面下に埋もれてしまって、現在の土地割や小字名などには影響を与えていない場合であっても、土地の乾湿の状態がソイルマークとして読みとることができるのである。

２）筆者は地形環境と土地利用の関わりといった観点から日本列島における初期の水田耕作を２時期に分けて考えている。このうち第１段階は、宮ノ前遺跡でみとめられるような扇状地帯・旧河道に水田が開発される段階である。この時期の水田耕作は、ちょうどパイロット事業のような位置づけが考えられるのである。他方、弥生時代前期末から中期前半に三角州帯・後背湿地に本格的に水田開発が開始したのが第２段階である。第１段階と第２段階の間には、扇状地帯における完新世段丘Ⅰ面の形成と三角州帯における三角州帯の急速な拡大といった地形環境の変貌が存在する。しかしながら、縄文時代晩期と弥生時代前期の間には、このような地形環境の変化はみとめられていない点注意が必要である。

第２節

宮ノ前遺跡出土の縄文時代晩期末葉から弥生時代中期初頭の土器群

中　山　誠　二　（山梨県埋蔵文化財センター）

本節では宮ノ前遺跡南西部の埋没旧河道から発見された２号水田の直下および直上にあたる層から検出された土器群と、微高地上から検出された縄文晩期末葉から弥生時代中期初頭に至る土器について若干の検討を加えてみたい。

該期の土器の中には、浅鉢形土器、深鉢形土器、甕形土器、壷形土器、蓋形土器、小型の手捏ね土器の６種類の器種が存在する。これらは、中部地方に成立した浮線文土器群と東海地方に発達した条痕文土器群の２つの系譜に大別される。しかし、いくつかの器種についてはそのいずれに系譜がたどれるか、判断できない土器を含んでいる。そこで、分類にあたっては、まず形態的特徴を重視して器種分類を行ない、次に各部位の特徴の差、文様構成、器面調整の違いをもとに細分を行なっていきたい。

深鉢形土器と甕形土器は一般に煮沸形態として一括される場合が多いが、該期の壷形土器の中には煮沸の痕跡をもつものが知られ、機能的に未分化であることが指摘されている(1)。したがって、ここでは純粋に形態的な分類にとどめ、口縁部から頸部のくびれの有無をもって甕と深鉢の分類を行なう。

また、本遺跡出土土器の壷形土器と甕形土器の中には、その境界の不明瞭な資料がいくつか存在する。同時期の条痕文土器の分類を行なった愛知県麻生田大橋遺跡では、その目安として胴部最大径に対する口径比が0.7を超えるものを甕、0.7以下のものを壷としてとらえている(2)。本遺跡では、壷に該当するものの数が少なく、境界設定を行なう際の統計的なデータが不足しているため、麻生田大橋遺跡の分類基準に従っておきたい。

１　土器の分類

(1)鉢形土器（図版編第297～306図参照）

鉢Ａ　底部から口縁部にかけてほぼ直線的に開く浅鉢。口縁端部の特徴からいくつかに細分される。底部はやや上げ底となるものが多い。

Ａ１　口縁部が平縁。(209)

Ａ２　口縁内外に数条の平行沈線文をめぐらす。(85･93)

Ａ３　口縁部に山形小突起をめぐらしたような口外帯を有する。(156)

Ａ４　口縁部に口外帯、口縁下に平行沈線をめぐらす。(158)

Ａ５　口縁部直下から浮線による匹字文・網状文を施す。(53･55)

鉢Ｂ　底部からやや内湾する浅鉢。

Ｂ１　口縁下に沈線をめぐらす。(181)

Ｂ２　口縁に口外帯、口縁下に平行沈線をめぐらす。(157)

Ｂ３　口縁下に浮線網状文を施す。(54)

鉢Ｃ　やや内湾した胴部を持ち、口縁直下が縊れ、口縁端部が外反する浅鉢。この種の浅鉢は口外帯および胴部に浮線文を特徴とする。(22･47～50･166･193･194)

鉢Ｄ　胴部が内湾し、最大径部分に浮線文を施す鉢。(52)

鉢Ｅ　やや内湾口縁をもつ無文の鉢。(145)

鉢Ｆ　胴部が内湾し、肩部が「く」字状に屈曲する浅鉢。

⑵蓋形土器（図版編第325図参照）

蓋　円形の湾曲した蓋。摘みはなく、円形の小孔が２つづつあけられる。（３）

⑶深鉢形土器（図版編第297～306図参照）

深鉢Ａ　くびれ部をもたずほぼ直線的に口縁部にかけて開く深鉢。胴部はヘラ削りによる調整痕をそのまま残す。

Ａ１　口縁部が平縁。(139･142･144･178)

Ａ２　口縁端部に山形の小突起を有する。(140)

深鉢Ｂ　肩部でやや屈曲する深鉢。胴部全体にヘラ削りがなされる。(138・143)

深鉢Ｃ　口縁部がやや外反する深鉢で、口縁端部に山形突起を有する。口縁直下からヘラ状工具による条線が施される。(125)

深鉢Ｄ　口縁部がやや外反する深鉢で、口縁端部に刻みをめぐらす。(159)

深鉢Ｅ　くびれ部をもたずほぼ直線的に口縁部にかけて開く深鉢。胴部に（細密）条痕を施す。口縁下に沈線をもたないもの（Ｅ１）と平行沈線をもつもの（Ｅ２）がある。(176･182･199･208)

深鉢Ｆ　口縁下に太い凹線をめぐらし、胴部に条線をほどこす。(94･196)

深鉢Ｇ　口縁端部に指頭または工具による押圧文風の刻みをめぐらす、条痕文系の深鉢。(115～117･120～124･160･203)

⑷甕形土器（図版編第297～306図参照）

甕Ａ　頸部がくびれ、肩部に稜をもつ粗製甕で、大半は頸部を無文帯とし、肩部以下をクシ状工具等で（細密）条痕文を施す。胴部破片の中には細密条痕文を地紋に稲妻状沈線が描かれるものがあるが、これらは主に本類に含まれると考えられる。

口縁端部の形態から６つに細分される。

Ａ１　口縁端部が外反し、折り返し口縁状を呈する。(62･201)

Ａ２　口縁部が比厚し、幅広の帯状の口縁をなす。(161)

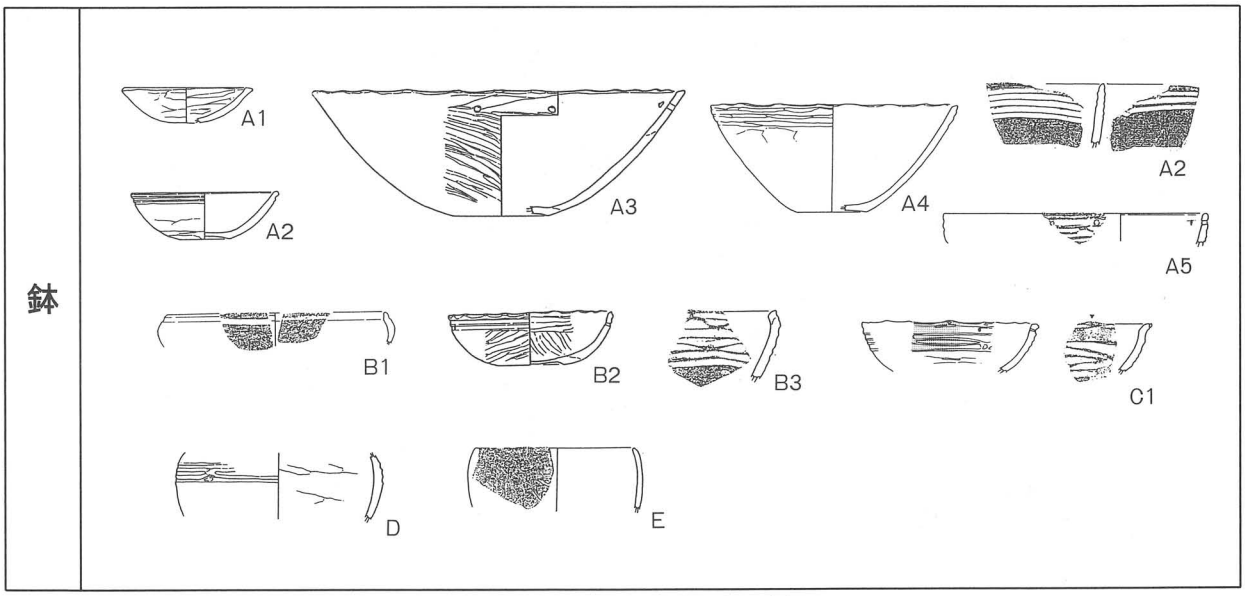
Ａ３　口縁下に幅広の凹線が１条から数条めぐる。(63･64･67～75･77･79･82～84･195)

Ａ４　口縁部が比厚し、端部に口外帯が施される。(111･186)

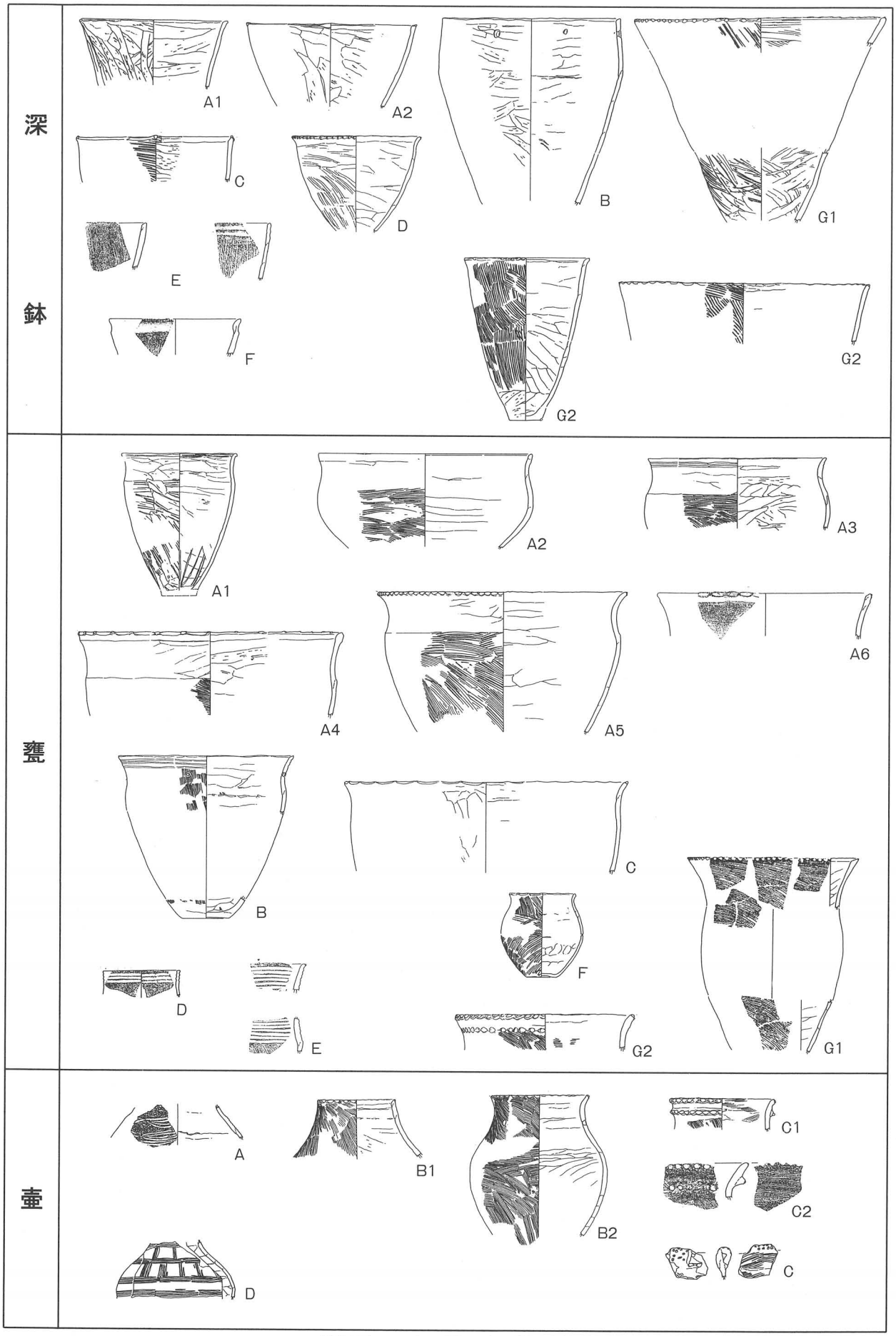
Ａ５　口縁端部に指頭または工具による圧痕風の刻みがめぐる。(95～107･109･171～173･185･205･210･211)

Ａ６　口縁端部に長円形の刻みをめぐらし、口縁下に凹線をもつ。(108･110)

甕Ｂ　頸部くびれ部に無文帯をもたず、口縁下から直接（細密）条痕文が施される。口縁には平行沈線がめぐる。(87)



第10図　土器分類（1）


深鉢
A1
A2
B
G1
C
D
E
F
G2
G2
甕
A1
A2
A3
A4
A5
A6
B
C
F
D
E
G2
G1
壷
A
B1
B2
C1
C2
C
D

第11図　土器分類(2)

甕C　頸部が緩やかにくびれ肩部が稜をなさない粗製甕。口縁端部に口外帯を有し、胴部はヘラ調整のみが残る。(112～114)

甕D　頸部がくびれ、肩部が稜をなす半精製甕で、口縁部内外に沈線がめぐる。頸部は無文で残す。(76・78・80・81・167・183・197・198)

甕E　頸部がくびれ、肩部が稜をなす半精製甕で、口縁から肩部に平行沈線がめぐる。(88・169・189・200)

甕F　胴部最大径が口縁部より大きくなる条痕文系の甕。口縁部に口外帯を有し、その直下から条痕が全面に施される。(119・170)

甕G　頸部は緩やかにくびれ、肩部に稜をもたない条痕文系甕。口縁端部に刻みがめぐり、外面全体に条痕文が施される。

G1　口縁端部に刻みを有する。(21・204・206)

G2　口縁端部および口縁下に刻み目帯を有する。(126)

(5)壷形土器（図版編第297～306図参照）

壷A　沈線文化した網状文を胴部に施す。(60・61)

壷B　口縁端部に押圧文風の刻みをめぐらす条痕文系壷。口縁部が内傾するもの（B1：202）とやや外反し頸部にくびれを有するもの（B2：118）がある。また、肩部に刻み目突帯をもつ土器群（131～133）もこのタイプに属すると考えられる。

壷C　口縁部に刻みをもつ2条の突帯をめぐらす条痕文系の壷。橋状把手をもつものもある。(127～130・162)

C1　口縁部がわずかに外反するが、頸部がほぼ直立する。(127～129)

C2　頸部から口縁部にかけて大きく外反する。(162)

壷D　肩部から胴部にクシ状工具による平行沈線文や四角形の区画文などの文様帯をもつ壷。(23)

(6)小型手捏ね土器（図版編第325図参照）

半球状の小型捏ね土器。(9)

2　編年的位置づけ

(1)各器種の特徴と類例

ここでは、各器種の形態および文様構成等に関する特徴をあげ、他の遺跡と比較検討を行ないながら、編年的位置づけをしたい。

鉢系列の土器は、大きくは5つに分類され、鉢A～鉢Cの浅鉢、鉢Dと鉢Eのやや内湾した深みの鉢がみられる。

まず、器形的な特徴は、肩部が屈曲し眼鏡状の隆帯をもつタイプの浅鉢は一点もなく、底部から口縁部にかけて直線的（あるいはやや内湾気味）に立ち上がるものが多い。鉢C類の頸部のくびれもわずかで、頸部無文帯の幅も狭い。

口縁部分は平縁または山形の小突起が連続したような口外帯をもつものがほとんどで、口縁下に平行沈線や浮線文を施す。この浮線文の文様パターンは、浮線網状文または変形工字文と呼ばれるもので、網状の結節点から三分岐（58）ないし四分岐（59・193・194）する文様も見られる。これらの浅鉢は、山梨県中道遺跡[3]、同県金生遺跡第7群2類土器[4]、長野県氷遺跡第1群土器[5]、同県御社宮司遺跡晩期第Ⅱ群土器[6]、静岡県駿河山王遺跡[7]などに多くみとめられる。

蓋は、2対の小孔を対称にもち、湾曲した形態を示す。この時期小型の壷などには、やはり小孔があけられたものが見られることから、それらと対になるものと考えられる。

深鉢は、形態的には7つに細分されるが、器面調整の特徴からは器面全体をヘラ削りするだけの粗製深鉢、繊維束などによる細密条痕を施す深鉢、クシ状工具による条幅の大きな条痕を施す深鉢の3種類に大別される。

細密条痕文系の深鉢・甕には、胴部に稲妻状の沈線が垂下するものもみられ（89・90・163・164・177・188）、氷Ⅰ

式の特徴を示している。

甕形土器は、肩部有段の氷式系の甕と条痕文系の甕に大きく分類される。

肩部に稜をもち頸部無文帯を特徴とする甕Ａは、口縁部の形態にバリエーションをもちいくつかに分類される。同時期の遺跡で特徴的な口縁端部に口外帯をもつＡ４タイプは比較的少なく、指頭または工具による押圧文風の刻みをもつＡ５・Ａ６タイプが多く認められる。これらの特徴が氷Ⅰ式の甕の口外帯からの変化であるのか、条痕文系土器の刻み目突帯部からの影響によるものか現時点では判断できないが、いずれにしろそれ以降の甕の口縁部刻み目の手法に連続した特徴として注目される(8)。この甕Ａ５類の類例は、長野県御社宮司遺跡、石行遺跡(9)などにわずかに見られるが、これらの２遺跡および氷遺跡１群土器では、口縁端部刻み目よりむしろ口外帯あるいは平行沈線文をめぐらす甕が主体であり本遺跡とは異なった傾向を示す。この差異が時期差によるものか、地域差によるものか、今後類例を待って検討していく必要があろう。

また、同類の甕で口縁下に平行沈線をめぐらした甕Ａ３類は、甕Ｄ類と比べ沈線が幅広となる傾向を示す。

甕Ｄ類は口縁内外の平行沈線文を特徴とする半精製甕であるが、これらは氷Ⅰ式の後半には普遍的に見られるタイプである。甕Ｅ類は、頸部無文帯を残さず平行沈線文が幾重にもめぐらされるもので、長野県長畑遺跡(10)の甕や石行遺跡の壷に同様の手法を見ることができる。

深鉢Ｇ類および甕Ｆ・Ｇ類は、条痕文系土器群に属すもので、器面に施された条痕は氷系のものと比べ概して粗く、クシ状工具を利用して施文している例が多い。この内、やや新相を示す甕Ｇ１類をのぞいてすべて２号水田下層から出土しており、他の氷系土器群と共伴している。同様の共伴現象は長野県氷遺跡に見られる。永峯光一氏はこれらを第３群土器として扱い、その多くを２群土器と共に氷Ⅱ式土器に比定されるとしたが(11)、これは層位的な根拠に基づく時期差というよりも型式学的な分類をてがかりとするものであった。

本遺跡出土の条痕文系深鉢および甕は、①条痕施文に貝殻を使用していない点、②端部の面取りが見られず刻みないし口外帯風の長円形の凹みをめぐらす点、③樫王式に特徴的な砲弾形の深鉢が認められない点などで、その起源地である東海西部地方の深鉢・甕系列の土器群とは相当変化し、突帯をもつ広口壷と同様に在地化していると考えられる。

したがって、宮ノ前遺跡の土器群は、西日本突帯文土器の流れから成立した東海地方西部の条痕文土器が、浮線文土器の後半期になって中部地方に入りこみ、独自の展開をみせていく時期のものと理解される。これに続く水神平式並行の時期には、条痕文土器は土器構成の主体をなし、浮線文土器中に見られた深鉢や甕の特徴を形骸的に残しながら変化していく。

壷形土器は、沈線文化した網状文をもつものと、条痕文系の２つのタイプに大きく分類される。

壷Ａとした沈線網状文をもつ壷はわずかに２点のみであるが、文様構成は網の結節点から四分岐するもので、本遺跡鉢Ｃ類や金生遺跡27号住で見られた浮線文壷の文様に通じるものである。

中部地方の浮線網状文はこれまで東北地方大洞Ａ式に並行関係が求められていたが、近年の研究では大洞Ａ′式段階にも浮線文が残ることが明らかにされている。本遺跡で同一層準から浮線と沈線の２つの手法による網状文が検出されたことは、これらの同時期性を考える上で興味深い。また、その後の条痕文土器の影響によって、本県には沈線文化した変形工字文系土器が東北地方や北陸東部ほど発達しないが、その中でも数少ない資料といえる。

条痕文系の壷は、Ｄ類をのぞいては胴部に文様はなく、単一方向に斜行する条痕文が施されるのみである。条痕の施文工具は、二枚貝と考えられるものはなく、クシ状工具または植物繊維の束などによる。

口縁端部に刻みをめぐらし、口縁直下から条痕文を施した壷Ｂは、形態的には麻生田大橋遺跡Ⅱｂ～Ⅱｃ期の壷に類似する(12)。中部地方では、荒神沢遺跡（142）で出土している壷(13)と類似するが、宮ノ前遺跡では突帯をもたず、口縁端部の刻みのみとなる点やや古相を示すのであろうか。

２重突帯を特徴とする壷Ｃは、設楽博己氏によって「在地型の突帯文壷」として注目されたものであり(14)、条痕文土器の起源地である東海西部地方よりむしろその影響を受けた中部から関東地方に多く認められる土器で

ある。このタイプの壷には、橋状把手がつくものもあり、長野県篠ノ井遺跡群[15]、塩崎遺跡群[16]等に類例が求められる。また、肩部に有刻の突帯をもつ破片（131～133）は、樫王式期～水神平式期の条痕壷にもしばしば散見することのできる特徴である。

⑵宮ノ前遺跡の土器群

さて、以上のような検討を通して宮ノ前遺跡出土の該期土器群について編年的位置づけを行ないたい。

本遺跡出土土器が、系譜的には在地の浮線文土器群と東海西部系の条痕文土器群の２つにたどれることは明白であるが、その両者がそれぞれの編年の中でどこに位置づけられるかが問題となる。

①浮線文系土器群

中部地方を中心に分布する浮線文土器群が、３つの時期に区分されることは、中村五郎[17]、設楽博己[18]、石川日出志[19]氏らによっておこなわれ、従来東北地方大洞Ａ式に単純に並行すると考えられていたものの中で、新相を示すものは大洞Ａ′式段階に降ることが明らかにされた。これらの仮説は、その後の御社宮司遺跡や石行遺跡等の資料の追加や女鳥羽川式段階をつなぐ一津遺跡[20]などの資料の補完によって、さらに確かなものとなってきている。中沢道彦氏は、浮線文土器群を女鳥羽川段階、離山段階、氷式段階に区分し、その前半期を氷式から分離する立場をとっている[21]。では、宮ノ前遺跡の土器群はどのような編年的位置に置かれるであろうか。

宮ノ前遺跡の浮線文土器群は、類例が長野県石行遺跡、御社宮司遺跡、氷遺跡に多く求められたように、氷Ⅰ式の最新相の第３段階ともいえる内容をもつと考えられ、第１～２段階に比定される古相の土器群は全く見られない。特に甕の中で口縁端部に押圧風の刻みがめぐるタイプのものは、他遺跡ではあまり発達をみないが、本遺跡では数量的に目立った存在となっている。これがそれ以降の弥生土器に受け継がれていく手法のひとつと考えると、氷式の甕の変容を考える上でも重要である。

氷Ⅰ式の新相段階に対比される例は本県ではこれまで金生遺跡や中道遺跡の一部などわずかであったが、本遺跡の浮線文土器はこの中でも質量共に良好な資料といえる。

②条痕文系土器群

条痕壷Ｂ、甕Ｆは口径が胴部最大径に比べ小さく、口縁端部の刻みを特徴とし、前にのべたように東海地方馬見塚式～樫王式のものと近い。

「在地型突帯文壷」とされた壷Ｃの内、Ｃ１（No.127・128）は口縁部がほとんど外反せず、水神平式というよりむしろ樫王式期の壷の影響下に在地化されたと考えられ、金生遺跡17住出土の貝殻条痕をもつ広口壷と類似している。これに対し、Ｃ２（No.162）は口縁部が大きく外反する突帯壷で、県内でも柳坪Ａ遺跡や金の尾遺跡などの広口壷に共通する特徴を有する。壷Ｃは、編年的には樫王式から水神平式並行期に位置づけられるが、Ｃ１がＣ２に比べ、形態的に古い様相を示していることは、２号水田の時期決定を行なう際にも重要視される。

甕Ｇ１類のNo.21と壷Ｄ類のNo.23は、その他の同系列の土器と比べやや新出の様相をもっており、弥生時代前期後葉から中期初頭に比定される。これらは出土地点が奈良～平安時代集落をのせる微高地上にあり、水田址の上下層から出土した土器とは層位的連続性はもたないが、当時の集落がこの微高地上の未調査地区にも展開した可能性も示唆する。

以上のことから、本遺跡出土の東海西部系の条痕文土器は、縄文晩期最終末～弥生時代前期にわたる２、３型式の間に対比される土器群であることが理解される。

③県内および中部日本での編年的位置

該期の宮ノ前遺跡出土土器群は、大きくは２つの時期に分離することができると考える。一つは、２号水田下層と４号溝状遺構から出土した浮線文土器群とそれに伴う条痕文系土器群で、ここではこれを「宮ノ前１期」と呼んでおきたい。また、２号水田の上部と微高地上から出土した条痕文系土器は、量的には非常に少ないが、文様や形態的特徴から１期とは分離し、「宮ノ前２期」とする。

宮ノ前１期の土器群は、他遺跡との対比資料を通して見た場合、氷Ⅰ式新相を示すことは前述した。該期の条

痕文系土器は、東海地方西部では馬見塚式から樫王式に対比される時期と考えられる。宮ノ前２期の土器群は、１期の条痕文土器よりも明らかに新しい様相を示しており、弥生時代前期後葉の水神平式並行期に対比される「苅谷原・柳坪式」[22]の範疇に位置づけられるが、微高地上出土の壷（No.23）と甕（No.21）は２号水田上部出土土器よりやや新しくなる可能性もあろう。

それでは、宮ノ前遺跡の該期の土器群は県内ならびに中部日本地域でどのような編年的位置づけがなされるであろうか。第27表によって表してみたい。この表は、中部日本地域を中心に日本列島の縄文時代晩期から弥生時代中期初頭の土器型式または様式をⅠ～Ⅷ期にわけ、その対比関係を大まかに示したものである。先の検討を通して、宮ノ前１期はⅥ期の段階に、２期はⅦ期を主体とする段階におくことができよう。

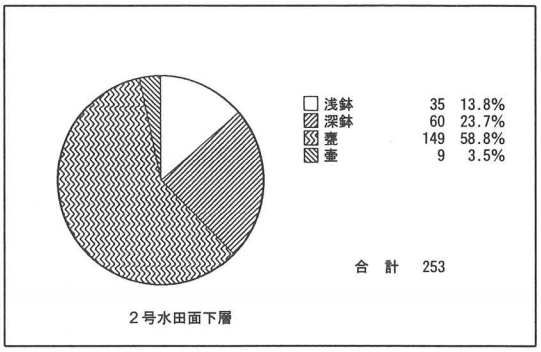
3　土器組成

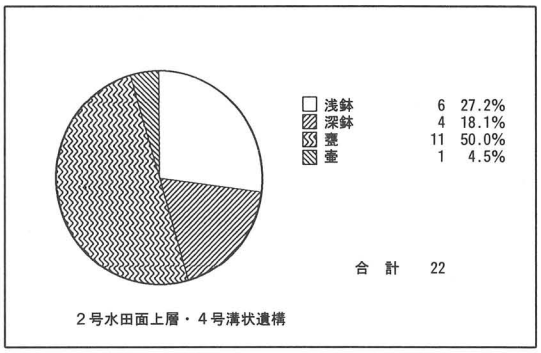
出土土器は２号水田下層に比定されるものが多く、その上面および４号溝状遺構内の出土遺物が少ないため、単純に数量的な比較はできないが、客観的な数値のみをあげておく。

時期	西日本		中部日本							東北	
			東海		中部高地		北陸		関東		
	九州	畿内	愛知	静岡	長野	山梨	新潟	石川		南部	中北部
Ⅰ	広田 大石	滋賀里Ⅰ	寺津 吉胡BⅠ	清水天王山 下層b中層a	岡ノ峯 大花	中谷	矢津	八日市新保Ⅱ 御経塚Ⅲ	安行３a	大洞B	
Ⅱ	古閑	滋賀里Ⅱ	本刈谷	清水天王山 中層b	佐野Ⅰa 茶臼山	豆塚 中谷	細池 松葉	中屋Ⅰ	安行３b	大洞BC	
Ⅲ	宮の本 礫石原	滋賀里Ⅲ	稲荷山	清水天王山 上層a	佐野Ⅰb 上の平	中谷 尾咲原	朝日	中屋Ⅱ	安行３c	大洞C１	
Ⅳ	山ノ寺 夜臼Ⅰ	滋賀里Ⅳ 口酒井 船橋	西之山 馬見塚F地点 五貫森	上皆戸	佐野Ⅱ 山ノ神	金生A29住 鵜の島 金生A2号配	上野原	下野	安行3d 前浦 杉田Ⅱ 殿内BⅢ	大洞C２	
Ⅴ	夜臼Ⅱ 板付Ⅰ	長原 畿内第Ⅰ様式古	馬見塚D地点 下り松	山王	女鳥羽川 樋口五反田 離山 氷Ⅰ(古・中)	鵜の島 金生 中道	鳥屋１ 藤橋 鳥屋２a	長竹	杉田Ⅲ 殿内BⅣ 姥山Ⅴ 千網	下谷地平C	山王Ⅵ 大洞A
Ⅵ	板付Ⅱa	畿内第Ⅰ様式中	樫王	浜松向山 山王 (見性寺)	氷Ⅰ(新) 御社宮司 荒神沢	宮ノ前１ 金生A17住	鳥屋２b	柴山出村 (古)	姥山Ⅵ 殿内BⅤ 荒海 千網 御山 押手	墓料	大洞A' 砂沢
Ⅶ	板付Ⅱb	畿内第Ⅰ様式新	水神平	姫宮 見性寺	針塚 林里 苅谷原	柳坪A16住 宮ノ前２ 金の尾	緒立(A群) 村尻	柴山出村 (新)	御山 女方 四十坂 沖Ⅱ 平沢同明 上久保	御代田	青木畑 山王Ⅲ
Ⅷ	城ノ越	畿内第Ⅱ様式	岩滑	丸子 佐渡 渋沢	横山城 新諏訪町	米倉山 生出山山頂	緒立 (条痕文) 村尻	外	堂山 岩櫃山 三ヶ木 女方	鳥内	寺下囲 鱸沼

第27表　縄文晩期～弥生中期初頭の型式および遺跡対応表
（外山秀一・中山誠二 1992「日本における稲作の開始と波及」『植生史研究』第９号に加筆修正）

２号水田下に比定される宮ノ前１期の土器は、口縁部破片から総数253点が存在し、浅鉢が35点（13.8%）、深鉢60点（23.7%）、甕149点（58.9%）、壷９点（3.5%）である。また、２号水田面上層および４号溝状遺構からは器形が判断できる22点の内、浅鉢が６点（27.2%）、深鉢が４点（18.2%）、甕が11点（50.0%）、壷が１点（4.5%）であるが、これらの土器は型式的には宮ノ前１期と２期に分離される内容をもつ。いずれにしても、全体の中で、甕・深鉢が占める割合が非常に多く、続いて浅鉢、壷の順となる。





第12図　土　器　組　成

全体数が多い２号水田下層のデータを他遺跡と比較してみると、本県金生遺跡１７号住居址と近い数値を得ている。金生遺跡のデータでは、205点の土器片中、深鉢158点（77%）、甕９点（4.3%）、浅鉢35点（17.0%）、壷２点（１%）である[23]。

また、本遺跡の条痕文系土器の出現率を見ると２号水田下では未だに10%強の数値が出ているにすぎない。このことは、条痕文系土器が主体となる柳坪遺跡などとは対称的で、浮線文土器文化の中に東海西部系の条痕文土器が流入し、短期間にその比率が逆転していく様子をよく示している。

４　２号水田の時期決定

宮ノ前遺跡２号水田は、概報等で記述してきたようにいくつかの根拠を以て「弥生前期水田」と判断される[24]。その大きな根拠のひとつに２号水田面の上下の層から出土した土器が重要な時期決定の鍵を握ることは言うまでもない。前項と内容的に重複する部分もあるが、本項ではこの点に焦点を当てて記述したい。

図示された資料の内、２号水田の直下層から検出されたものは、No.47～No.155・No.182～No.218、２号水田直上層ならびに水田面を切る４号溝状遺構から検出されたものは、No.156～No.181である。

２号水田の上下および水田面をきる４号溝状遺構から出土している浮線文系土器は、型式学的には同一のもので、これらを２つに分離する根拠はなく、前項の考察の中で宮ノ前１期に対比される。これらは広義の氷Ｉ式のなかでも新相に属し、東海地方の樫王式、東北地方の大洞Ａ′式に並行すると考える。他方、条痕文系土器の内、２号水田下のものは上記の浮線文土器群と共伴するもので、樫王式期から水神平式の古い時期に対比される一群と判断され、浮線文土器との編年とも大きなずれはない。したがって、第27表ではこれらをⅥ期においた。

水田面の下限を示す資料として重要なのは、No.162の条痕文壷で、２号水田面直上から出土している。この土器は２号水田下で出土した同系列の土器と比べ新相を示しており、前項では宮ノ前２期とした。他遺跡の類例から弥生時代前期後葉の苅谷原・柳坪式期に位置づけられ、第27表ではⅦ期においた。

したがって、この埋没旧河道に堆積した旧地表面の土壌化→水田の経営→４号溝状遺構の掘削→洪水砂による水田面の被覆の過程は、１～２型式内のきわめて短い時期にあったと読み取ることができる。

出土土器から判断するかぎり、２号水田は第27表のⅥ期～Ⅶ期に対比される弥生時代前期中葉から後葉に営まれたと考えるのが現在のところもっとも妥当と考えられ、主体とする土器からその上限は、縄文文化の伝統を強く残す浮線文文化の最終段階（第27表のⅥ期）に及んでいる可能性が高い。このことは、本遺跡２号水田下の土器や近接する中道遺跡の土器胎土からイネの機動細胞プラント・オパール分析が検出されたことからも検証することができる。この点の詳細については、第３節の外山氏の分析に譲りたい。

註

(1) 佐藤由紀男 1985 「静岡県三ヶ日町殿畑遺跡出土の土器について（下）」『古代文化』37-1 pp.17～26

(2) 安井俊則 1991 「麻生田大橋遺跡出土の条痕文系土器」『麻生田大橋遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター pp.124～150

(3) 韮崎市教育委員会 1986 『金山遺跡・下木戸遺跡・中道遺跡』 pp.1～51

(4) 山梨県教育委員会 1989 『金生遺跡Ⅱ』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第41集 pp.1～270

(5) 永峯光一 1969 「氷遺跡の調査とその研究」『石器時代』9 pp.1～54

(6) 長野県教育委員会 1982 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市その５』 pp.1～250

(7) 富士川町教育委員会 1975 『駿河山王』 pp.1～138

(8) 本遺跡深鉢Ｇ２類、甕Ｄ類のように、逆に条痕文甕に口外帯から変化したと考えられる長円形の凹がめぐる例がある。このような例は山梨県鵜の島遺跡、神奈川県堂山遺跡などで認められ、刻み目の甕と混在する。谷口肇 1990 「「堂山式土器」の再検討」 神奈川考古26 pp.63～97

(9) 松本市教育委員会 1987 『松本市赤木山遺跡群Ⅱ』 pp.1～232

(10) 大町市教育委員会 1991 『長畑・清水氏館跡』。中沢道彦 1991 「長野県の概要」『東日本における稲作の受容』第Ⅲ分冊 pp.172～175

(11) 註(5)と同じ。

(12) 前掲註(2)に報告された土器の34（SZ24）、74（SZ47）、124（SZ82）、137（SZ90）の壷に類似する。

(13) 駒ヶ根市教育委員会 1979 『荒神沢遺跡』 pp.1～130

(14) 設楽博己 1985 「関東地方の〈条痕文〉土器－西部東海系条痕文土器を中心として－」『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』 pp.293～386
この種の壷は、長野県福沢遺跡、うどん坂Ⅱ遺跡、石行遺跡、山梨県柳坪遺跡、金の尾遺跡、寺所遺跡、金生遺跡、埼玉県四十坂遺跡、神奈川県中屋敷遺跡、平沢同明遺跡、二宮森遺跡、群馬県沖Ⅱ遺跡、岩櫃山遺跡、東京都椙山神社遺跡、霧ヶ丘遺跡、田原遺跡、多摩ニュータウン206遺跡、新潟県村尻遺跡、茨城県女方遺跡などに類例がある。

(15) ５号土壙出土壷は、橋状把手とはならないが、２重突帯を連結する把手状の部分が５ヶ所見られる。長野市教育委員会 1990 『篠ノ井遺跡群Ⅲ』 pp.1～52

(16) 土壙57出土の壷。長野市教育委員会 1986 『塩崎遺跡群Ⅳ』 pp.1～244

(17) 中村五郎 1982 『畿内第Ⅰ様式に並行する東日本の土器』 pp.1～42

(18) 設楽博己 1982 「中部地方における弥生土器の成立過程」信濃34-4 pp.87～129

(19) 石川日出志 1985 「中部地方以西の縄文晩期浮線文土器」信濃37-4 pp.152～168

(20) 大町市教育委員会 1990 『一津』 pp.1～119

(21) 中沢道彦 1991 「長野県の概要」『東日本における稲作の受容』第Ⅲ分冊 pp.150～216

(22) 中村友博 1988 「苅谷原・柳坪式を設定して条痕文土器を体系化すること」『〈条痕文土器〉文化をめぐる諸問題－縄文から弥生－』資料編Ⅱ・研究編 pp.111～115

(23) 中山誠二 1985 「甲斐における弥生文化の成立」山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター『研究紀要』２ pp.43～78。ただし、金生遺跡の深鉢の中には、本遺跡の分類甕Ｄに対比されるものを含んでいる。

(24) 平野修・外山秀一 1990 「弥生前期の水田址－山梨県韮崎市宮ノ前遺跡－」帝京大学山梨文化財研究所報10 pp.2～3

第３節

宮ノ前遺跡におけるプラント・オパール分析

外　山　秀　一　（帝京大学山梨文化財研究所）

Ⅰ．はじめに

甲府盆地北西部を南流する塩川の右岸地域には、完新世段丘Ⅱ面が発達している[1)]。通称藤井平とよばれるこの段丘面は、その東に茅ヶ岳からつづく丘陵地と塩川、西に岩屑流からなる韮崎台地を配し、人々の居住環境としてはきわめて恵まれたところとなっている。

現在、主に水田として利用され一見低平にみえるこの地域には、空中写真を判読すると、自然堤防状や中州状の微高地や、旧河道などの埋没した微地形が確認される[2)]（写真１）。埋没微高地は紡垂状あるいは塊状に点在し、藤井平でこれまでに確認された集落址の全てが、こうした微高地上にのる[3)]。他方、埋没旧河道は微高地を取り巻くように帯状に連続するが、そこでは生産域の存在が推定されるのである。

『甲斐国志』の巻之四十七に「穴山ヨリ南ミ小田川・駒井・坂井・中条・下条・韮崎等ノ数村ヲ里人ハ藤井ノ庄五千石ト云ヮ〈中略〉藤井渠ヲ穿ツ水利自在ヲ得テ夏時ハ水田トシ冬ハ陸田トナス且ッ諸村ノ末ニ居リ余水聚ッ来ルヲ以テ田地殊ニ肥饒ナリ」と記されるように[4)]、藤井平は古来豊饒の地であった。

この藤井平に位置する中道遺跡では籾殻圧痕土器が出土し、またかかる土器の胎土分析の結果イネのプラント・オパールが検出された[5)]。この土器は弥生時代前期前葉に比定されており、当地域における稲と稲作の開始と波及を探る貴重な資料となった。こうした稲作の問題を解決するうえにおいても、同段丘面上の埋没旧河道の堆積物は重要な鍵を握っているといえる。

今回調査・分析の対象とした宮ノ前遺跡では、埋没微高地上に平安時代を中心として423軒の集落址や掘立柱建物址をのせ、加えて条里関係の遺構の検出をみている[6)]。他方、遺跡の西から南西部にかけて連続する埋没旧河道においては、水田址の存在が示唆された。

そこで、当遺跡では、埋没旧河道をきるトレンチで採取した土壌試料のプラント・オパール定量分析と出土した土器の胎土分析を実施し、土地条件の変化と土地利用の違い、稲作の問題について検討した。

写真１　宮ノ前遺跡周辺の空中写真（国土地理院 1/1万）

Ⅱ．地層の堆積状況と試料の採取

試掘調査では、東西のトレンチを設定して地層の堆積状況と埋没した微地形の分布状況を検討した。その結果、埋没した旧河道と河道内の中州状の微高地、さらに東側には集落址をのせる自然堤防状の微高地が確認された。そこでは、数層の土壌層とともに畦状遺構、さらに鋤痕、人と動物の足跡などが検出されている[7]。

プラント・オパール分析用の試料は、トレンチの西側よりＡ～Ｃの３地点において採取した（第13図）。各地点の地層の堆積と遺物の出土状況は、以下のとおりである。

１）Ａ地点

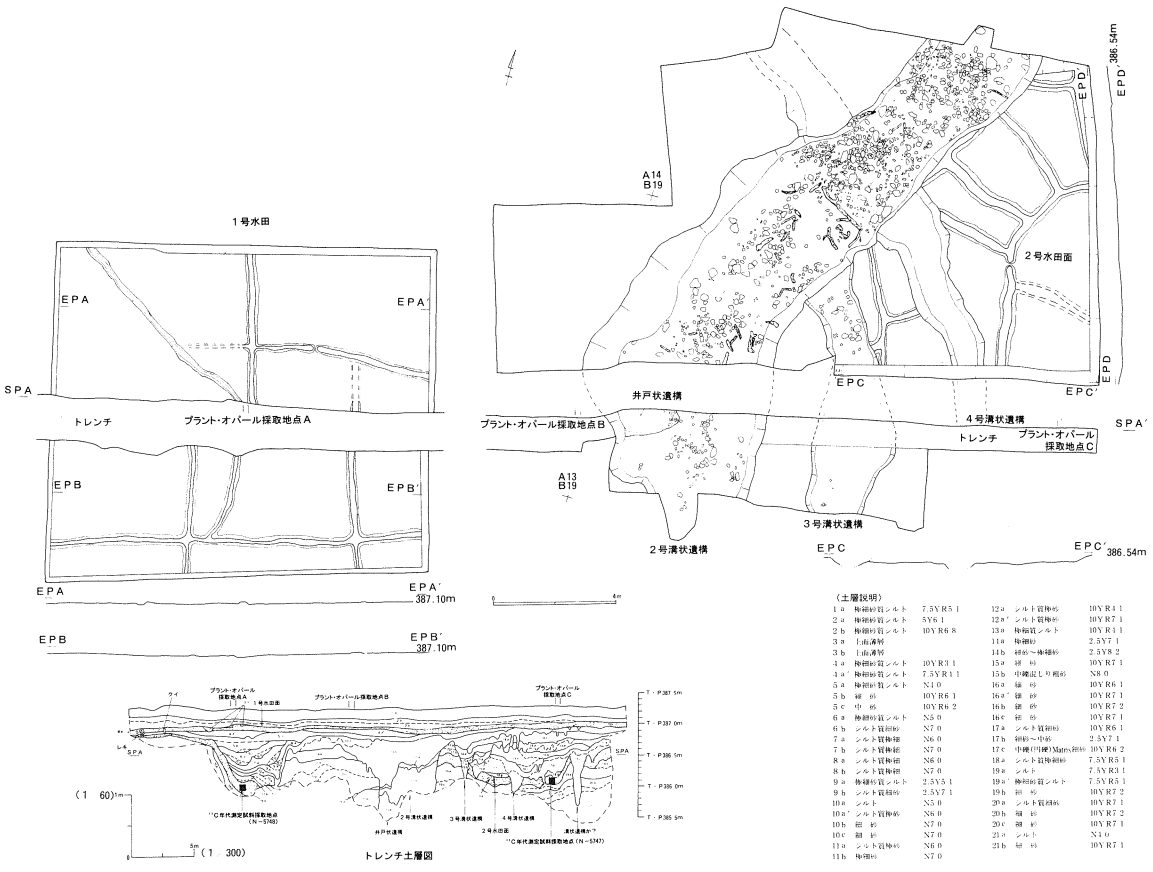
Ａ地点は、埋没旧河道の西側の部分をしめる。地表面下約130cmまでの地層は、１a層～15a層の21層に細分されるが、それらは主にシルト質細砂を主体とする下位層と砂質シルトで構成される上位層とからなる。そのうち２a層～14a層まで計19試料を採取した。なお、14a層の^{14}Ｃ年代測定結果は、2190±80yB.P.（N-5748）である。また、４層と５層からは奈良～平安時代の土器が出土し、２層以浅が中世以降の堆積物とみられる[8]。

２）Ｂ地点

Ｂ地点は、埋没旧河道内の中州状微高地の縁辺部にあたる。地表面下約110cmまでの地層は、１a層～10a層の13層に分けられ、下位より細砂層、シルト質細砂層、極細砂質シルト層の堆積状況を示している。そのうち２a層～９b層より10試料を採取した。当地点では、４a層中で土器が一片確認されたのみで、時期を特定できる遺物の出土はみられない。

３）Ｃ地点

Ｃ地点は、埋没旧河道の東側の部分であるが、地表面下約140cmまでの地層は、１a層～15a層までの11層に分けられる。地層の堆積状況は、下位より砂礫層、シルト質細砂層、細砂～中砂層、極細砂質シルト層である。そのうち３a層～14b層より８試料を採取した。14b層中からは浮線文系土器と一部条痕文系土器が、また14a層上面からは条痕文系土器が出土している。なお、14a層の^{14}Ｃ年代測定の結果、2670±80yB.P.（N-5747）の値が得られている。また、上位の９b層中には弥生時代中期後葉～後期前葉の波状文を施す土器片が挟在する[9]。



（土層説明）

1a	極細砂質シルト	7.5YR5/1	12a	シルト質極砂	10YR4/1
2a	極細砂質シルト	5Y6/1	12a'	シルト質極砂	10YR7/1
2b	極細砂質シルト	10YR6/8	13a	極細質シルト	10YR4/1
3a	上面凍解		14a	極細砂	2.5Y7/1
3b	上面凍解		14b	細砂～極細砂	2.5Y8/2
4a	極細砂質シルト	10YR3/1	15a	細　砂	10YR7/1
4a'	極細砂質シルト	7.5YR1/1	15b	中礫混じり粗砂	N8/0
5a	極細砂質シルト	N1/0	16a	細　砂	10YR6/1
5b	細　砂	10YR6/1	16a'	細　砂	10YR7/1
5c	中　砂	10YR6/2	16b	細　砂	10YR7/2
6a	極細砂質シルト	N5/0	16c	細　砂	10YR7/1
6b	シルト質細砂	N7/0	17a	シルト質細砂	10YR6/1
7a	シルト質極細	N6/0	17b	細砂～中砂	2.5Y7/1
7b	シルト質極細	N7/0	17c	中礫(円礫)Matrix細砂	10YR6/2
8a	シルト質極細	N8/0	18a	シルト質極細砂	7.5YR5/1
8b	シルト質極細	N7/0	19a	シルト	7.5YR3/1
9a	極細砂質シルト	2.5Y5/1	19a'	極細砂質シルト	7.5YR5/1
9b	シルト質細砂	2.5Y7/1	19b	細　砂	10YR7/2
10a	シルト	N5/0	20a	シルト質細砂	10YR7/1
10a'	シルト質極砂	N6/0	20b	細　砂	10YR7/2
10b	細　砂	N7/0	20c	細　砂	10YR7/1
10c	細　砂	N7/0	21a	シルト	N3/0
11a	シルト質極砂	N6/0	21b	細　砂	10YR7/1
11b	極細砂	N7/0			

第13図　試料採取地点　（図版編 第129図）

Ⅲ．分析の方法

１）定量分析

定量分析法による試料の処理は、藤原（1976）[10]に基づき、絶対乾燥－重量測定・仮比重測定－ガラス・ビーズの混入－ホモジナイザーによる分散－ストークス法による細粒物質の除去－乾燥の順序でおこない、オイキット液によりプレパラートを作成した。プラント・オパールの分類学的検討は、400倍ないし600倍の偏光顕微鏡下で、主にイネ科の機動細胞プラント・オパールの形態分類に基づいておこなった。

そして、検出されたガラス・ビーズ（約300個）とプラント・オパールとの比率から、試料１ｇあたりの各プラント・オパールの個数ならびに総数を求めた。さらに、イネ、ヨシ属、ウシクサ族ならびにタケ亜科の機動細胞プラント・オパールについては、地上部全ての重さ（乾物重）を層厚１㎝・面積10aあたりの検出量で示した。なお、タケ亜科の分類については、主に杉山・藤原（1986）[11]、杉山（1987）[12]によった。

分析の結果を、図14－ａ・ｂ・ｃのＡ（検出数）とＢ（検出量）に示す。

２）土器胎土分析

分析の方法は、藤原（1981）[13]に従い、グラインダーによる土器表面の研磨－超音波装置による試料の洗浄－吸水・軟化－細砕－超音波装置による細流物質の分散－乾燥－重液分離－乾燥の順序でおこない、オイキット液によりプレパラートを作成した。そして、400倍ないし600倍の偏光顕微鏡下で、イネの機動細胞プラント・オパールを中心に検出した。

Ⅳ．結果

１）Ａ地点（第14図－a・第15図－a）

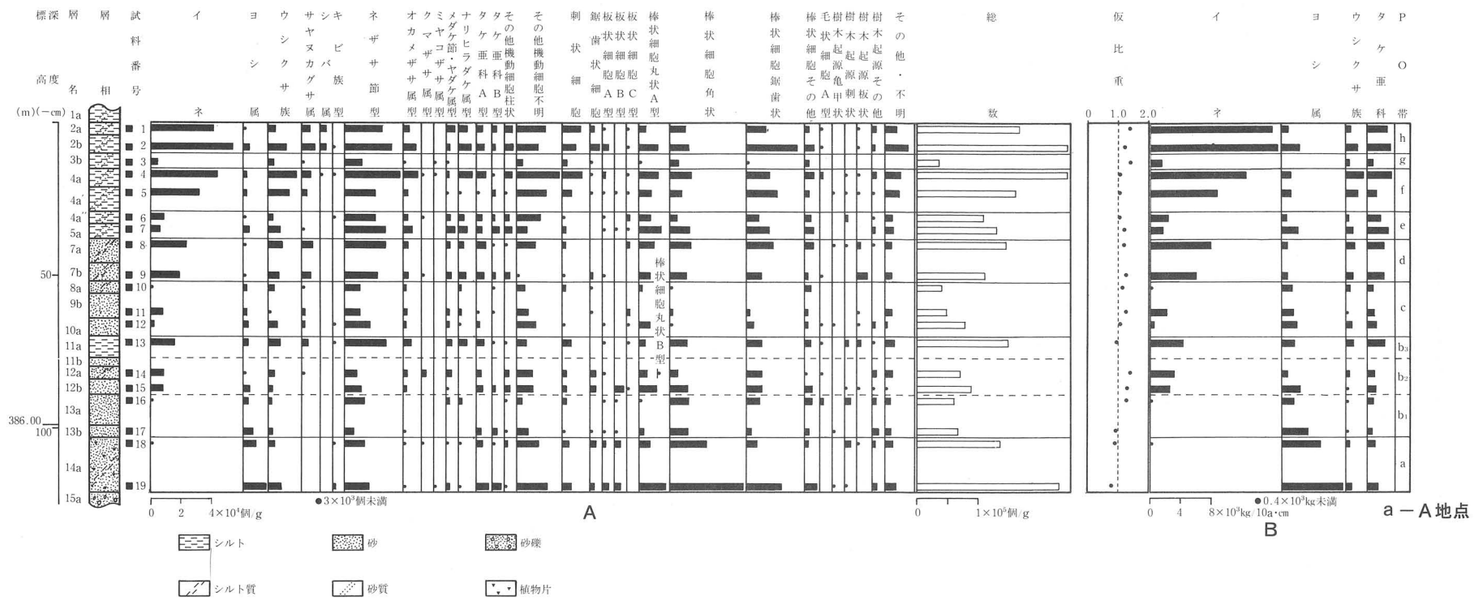
分析の結果は、地層の堆積状況によく対応している。その層位的産状に基づいてプラント・オパール群集帯は下位よりa～h帯の８帯に区分され、さらにb帯はb_1～b_3帯に細分される。イネとヨシ属の検出量の変化に注目すると、a帯で高出現したヨシ属はb帯では減少し、かわってイネが増加傾向を示す。そうしたなかで、b_1帯とc帯、e帯、g帯でイネの減少がみられる。

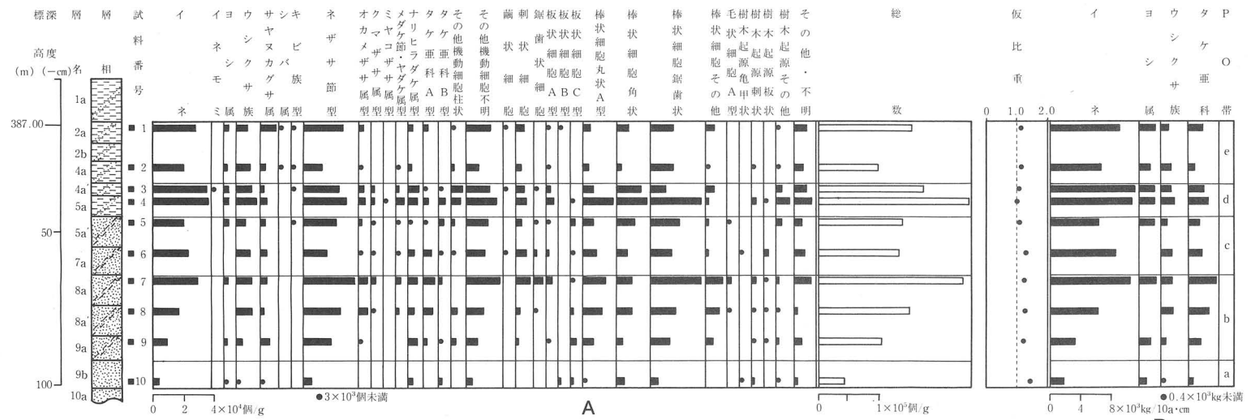
２）Ｂ地点（第14図－b・第15図－b）

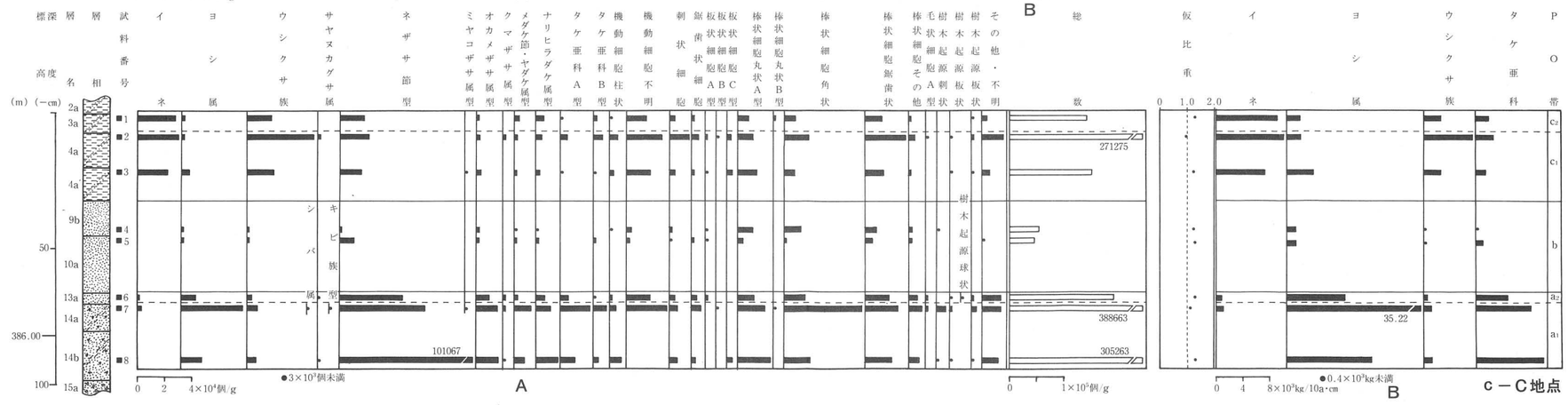
プラント・オパール群集帯は、下位よりａ～e帯の５帯に区分される。a帯では全般的に検出量は少ないが、b帯の上部になるに従いイネを始めとして検出総数と量が増す。c帯ではイネの僅かな減少がみられるものの、その後は安定した出現傾向を示す。d帯になるとイネを始めとして全般的に増加する。e帯の試料２では、c帯と同様に一時的な減少をみるが、試料１では回復する。

３）Ｃ地点（第14図－c・第15図－c）

プラント・オパール群集帯は、下位よりａ～c帯の３帯に分けられ、さらにa帯はa_1帯とa_2帯、c帯はc_1帯とc_2帯の２亜帯にそれぞれ細分される。a帯層準のシルト質細砂層では、ヨシ属とネザサ節を始めとするタケ亜科に代表され検出総数も多い。とりわけ、ヨシ属がa_1帯上部の試料７でピークを示す。その後、a_2帯になるとヨシ属が急減するとともに、検出数の減少がみられる。また、a_1帯の試料７とa_2帯の試料６で僅かではあるが、イネが検出される。b帯層準になると地層は細砂～中砂に変わり、検出総数と量は急減する。c帯層準の極細砂質シルト層では、全般的に増加し、とりわけイネが安定した出現傾向を示す。また、c_1帯の試料２ではウシクサ族が一時的に増加する。c_2帯になると、検出数は減少するが、イネの出現傾向には変わりはない。







第14図　プラント・オパール分析結果

層名	試料番号	時代※	PO帯	特徴	土地条件（試料採取地点およびその近辺）	地形変化
2a	1	鎌倉以降	h	イネ・検出数の急増	安定、比較的低湿	後背低地
2b	2					
3b	3		g	イネ・検出数の急減	不安定	
4a	4	平安・奈良？	f	イネ・検出数の増加	安定、比較的低湿	
4a′	5					
4a″	6		e	イネの減少	やや不安定、比較的低湿	
5a	7					
7a	8		d	イネ・検出数の増加	やや安定、比較的低湿	河道跡の埋積
7b	9					
8a	10		c	イネ・検出数の減少	やや不安定、比較的低湿	
9b	11					
10a	12					
11a	13		b_3	イネ・検出数の増加	やや安定、比較的低湿	
12a	14		b_2	イネの増加		
12b	15					
13a	16		b_1	ヨシ属・検出数の減少		
13b	17					
14a	18	弥生前期	a	全般的に検出数多い ヨシ属の高出現	安定、低湿	河道底
	19					

第15図－a　プラント・オパール分析結果　A地点（外山1990を一部修正）（＊時代は包含された土器の編年による）

層名	試料番号	時代	PO帯	特徴	土地条件（試料採取地点およびその近辺）	地形変化
1a	1		e	検出数の減少	やや安定、比較的低湿	後背低地
4a	2					
4a′	3		d	イネ・検出数の増加	安定、比較的低湿	
5a	4					
5a′	5		c	安定した出現 検出数の減少	やや安定、比較的低湿	中州状の微高地 河道跡の埋積
7a	6					
8a	7		b	イネ・検出数の増加	徐々に安定、比較的低湿	
8a′	8					
9a	9					
9b	10		a	全般的に検出数少ない	不安定	

第15図－b　プラント・オパール分析結果　B地点

層名	試料番号	時代※	PO帯	特徴	土地条件（試料採取地点およびその近辺）	地形変化
3a	1		c_2	検出数の減少	やや安定、比較的低湿	後背低地
4a	2		c_1	イネ・ウシクサ族・検出数の増加	安定、比較的低湿	
4a′	3					
9b	4	弥生後期？	b	ヨシ属・タケ亜科・検出数の減少	不安定	河道跡の埋積
10a	5					
13a	6		a_2		やや安定、比較的低湿	河道底
14a	7	弥生前期	a_1	ヨシ属の急増 全般的に検出数多い	安定、低湿	
14b	8					

第15図－c　プラント・オパール分析結果　C地点（※時代は包含された土器の編年による）

Ⅴ．考察

1）土地条件と土地利用

分析の結果、Ａ地点とＣ地点では埋没旧河道、またＢ地点では埋没中州状の微高地においてプラント・オパールの検出状況を把握したが、ここでは各地点の地形の変化に伴う土地条件や土地利用の違いについてさらに検討する。

Ａ地点の河道底では、ヨシ類の生育するやや低湿な環境から、その後稲の栽培される状況へと変わる。これは、低湿な状況にあった河道底の埋積の過程で水田が営まれたことを示すものである。なお、イネのプラント・オパールの出現し始める14a層の^{14}Ｃ年代測定の結果は、2190±80yB.P.（N-5748）である。

その後、河道内は徐々に埋積を受けたとみられ、地層の堆積状況に応じてプラント・オパールの出現傾向の細かな変化が認められる。すなわち、b_1帯とc帯、g帯にみられるように検出総数と量の減少する層準があり、土地条件が一時的に不安定になったことがわかる。このうち、g帯層準は鎌倉時代までの時期にあたるが、３b層の一時的な堆積後土壌化することなく２層の堆積をみる。そして、中世以降になるとＡ地点での土砂の堆積は少なくなり、安定した状況が続いたとみられる。こうした土地条件のなかで、稲の栽培は継続された。

Ｂ地点では、Ａ地点と同様にプラント・オパールの増減の繰り返しがみられることから、旧河道内への度重なる地層の堆積とそれに伴う中州状の微高地の形成があったとみられる。また、そこでは全層を通じてイネが検出されており、河道の埋積過程においてもこうした僅かな微高地の縁辺を利用して稲が栽培されていたようである。

Ｃ地点では、その西側に埋没した自然堤防状の微高地があり、そこでは河道底とほぼ同時期の条痕文系土器が出土している[14]。a帯にみられるヨシ属の高出現とネザサ節を始めとするタケ亜科の検出は、こうした近辺の微地形とそこでの土地条件の状況を示しているとみられる。また、a帯の14a層層準で僅かながらイネが検出され、発掘調査では、同層の上面において、弥生前期中葉～後葉に位置づけられる水田址（２号水田址）が発掘された。なお、同層の^{14}Ｃ年代測定の結果は、2670±80yB.P.（N-5747）である。

水田はその後細砂～中砂層で埋積され、不安定な土地条件となる。さらに、上位のc帯層準になると検出総数と量が増加して安定するが、こうした状況はＡ・Ｂの両地点においても同様にみられる。なお、c帯ではウシクサ族が一時的に増加することから、近辺にやや高燥な土地条件のあったことが推定されるが、これは東側に平安時代の集落址をのせる微高地があり、その影響を少なからず受けたとみられる。

このように、Ｃ地点ではa帯とb帯、b帯とc帯においてそれぞれプラント・オパールの出現傾向に大きな違いがあり、またそれは地層の堆積状況と対応することから、各層準に堆積時期の違いと環境の変化のあったことが伺われる。

こうして、平安時代まで安定と不安定を繰り返してきた土地条件は、その後Ａ地点のg帯でみられるように一時的な土砂の堆積を伴う不安定な時期を経て安定してゆく。完新世段丘Ⅱ面の形成は古代末とされる[15]。段丘化することでやや高燥化するが、そこに水利潅漑システムが導入されるならば土地生産性は高くなる[16]。

当遺跡では平安時代中期の住居址群をきって、現在の条里区画の方向に沿う形で水路と考えられる溝状遺構が検出されている。つまり、それまで居住域であったところに、その後水路を通さなければならなかった環境の変化ならびに人為的要因のあったことが考えられるのである。遺跡から検出された溝状遺構とＡ地点のh帯にみられるイネの急増は、このことを示しているのかもしれない[17]。

また、これまでの発掘調査で明らかになった遺跡数の変化をみると、段丘面上では平安時代に10を数えたものがその後１遺跡に減少する[18]。これは、中世以降の人々の居住環境と段丘面の開発という視点でとらえる必要があり、地形の変化が土地条件や土地利用、人々の居住環境の変化をもたらしているといえよう[19]。

2）水田址の発掘とその時期

当遺跡では、Ａ～Ｃ地点のイネの検出状況に基づいて、遺存状態の良好なＡ地点の４a層とＣ地点の14a層の上面で水田址を発掘した。前者は、定形の中区画の水田址で、平安時代の後半にあたると考えられる（１号水田址）。

他方後者は、前述したように地表面下約120cmから検出された不定形小区画の水田である。

２号水田址は、調査面積の制約を受け、東西約８ｍ、南北約11ｍの狭い範囲で確認された。西側の部分は９世紀前半まで機能したと思われる溝状遺構（２号溝状遺構）によって削剥されている。また、南北に走る溝状遺構（４号溝状遺構）によっても水田面は一部掘り込まれているが、地層の切り合い関係や出土土器の時期などを検討したところ、４号溝状遺構と水田址との時間差はみられない。

水田址は、以前河道であった所が流路が変更したために水たまりとなり、そうした湿地を利用してつくられたものである。したがって、各水田の区画は狭い範囲のなかで地形にかなり制約を受けた形状となっている。調査範囲内では８面の水田址が確認されたが、形態はいずれも小区画の不定形をなす。

ところで、水田址の時期を決定する際に、いつ埋ったかが絶えず問題とされる。水田址を埋積した地層が土器を包含している場合、最も新しい土器の時期でその水田址の下限が決定される。その際、当時の土地条件が安定し、水田として地表面であった時期の長さに応じて、水田址の時期との間隙は大きくなる。

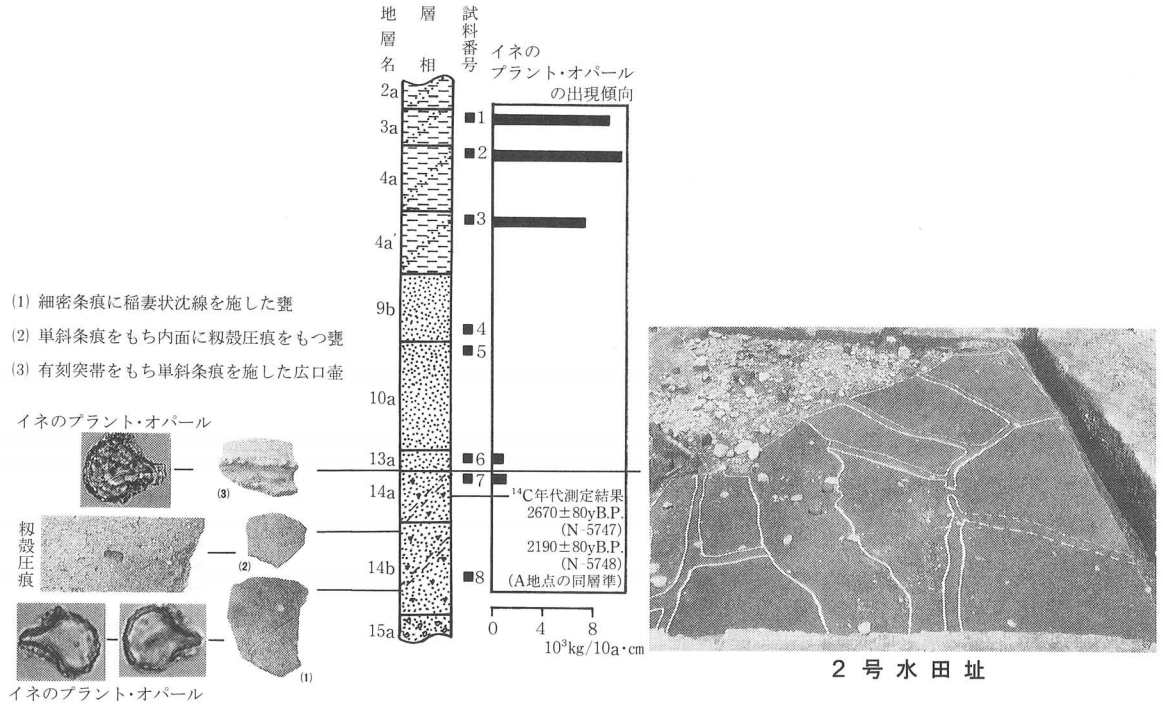
ところが実際は、この土器包含層が水田址の時期決定の際の重要な要素となっているのである。土器包含層の場合、その編年をもって地層の時期が決定されることが少なくないが、土器の時期と地層のそれとは必ずしも一致しない。従来、こうした包含層を対象としてプラント・オパール分析がおこなわれ、水田の時期が決定されてきた[20]。

土器は遺構面に伴う場合にその時期（編年）の有効性を高めるが、水田は本来土器を残さないところであり、それが時期決定を困難にする要因としてあげられる。水田に限らず、生産址の時期決定にはこうした難しい側面を伴う。

水田址の時期決定においては、水田層や水田面から出土した木器や大型植物遺体、水田土壌などの^{14}Ｃ年代測定値、また水田層ならびにその上位と下位層中から出土した土器や籾痕土器の型式編年上の位置づけなどの情報が集まり、さらにこうした諸条件の一致をみなければならない[21]。

そこで、当遺跡では以下の点に留意して、２号水田址の時期を決定した（第16図）。

１．水田層の下層より、浮線文系土器（氷Ｉ式第３段階新相）[22]を主体とし、一部条痕文系土器（樫王式～水神平式古段階）が出土し、前者の一片に籾殻の圧痕が確認された。また水田址上面より条痕文系土器（水神平式



第16図　イネ資料の出土状況（Ｃ地点）

期）が出土し、さらに水田面を掘り込む４号溝状遺構内では水田層下層と同時期の土器が出土している。水田層の上層と下層には、ともに前述の時期に比定される土器以外の土器群を全く含んでおらず、その他の土器とは層位的な関係をもたない。このことから、層位と土器の編年との間に対応関係をみいだすことができる。

２．編年された時期に稲が存在したかを検討するために、土器胎土分析をおこなった。対象とした試料は、水田層の下層より出土した(1)細密条痕に稲妻状沈線を施した氷Ｉ式第３段階（弥生時代前期前葉）の甕と、(2)単斜条痕をもち内面に籾殻圧痕をもつ甕（同前葉）、さらに水田址上面より出土し、(3)口縁の下に有刻突帯をもち単斜条痕を施した広口壷（同後葉）の３点である。その結果、３試料全てからイネのプラント・オパールが検出された。

３．水田層ならびに同層準の地層について^{14}Ｃ年代測定を依頼した結果、2670±80yB.P.（N-5747）と2190±80yB.P.（N-5748）の年代値が得られた。

以上の諸点から、水田址の時期は弥生時代前期中葉～後葉の間と考えられるが、編年された土器の下限をとって、ここでは前期後葉に位置づけることにしたい。このうち、浮線文土器が系譜的に在地の土器群にたどれる[23]とするならば、水田が営まれた時期もしくはそれ以前に、この地に稲が存在していたことになる。

このように、イネの情報は浮線文系土器群や条痕文系土器群とともにここ山梨に伝わっており、甲府盆地の一部ではすでに弥生時代前期に水稲農耕を受容していたことが明らかになった[24]。

同時期における東日本のイネに関する資料は、けっして少なくない。岐阜、静岡、神奈川、埼玉、茨城を除く各地で、籾痕土器や炭化米・籾・稲藁、さらには土器胎土中のイネのプラント・オパールなどの検出例がすでに報告されている[25]。これに対し、前期の水田址に関する情報は、青森県の砂沢遺跡[26]と当遺跡で得られているのみである。このように、稲と稲作技術の波及に時間的なズレのあることがわかる。前述したように、水田址の時期決定に問題を残すものの、同様の傾向はわが国の各地においてもみられることを筆者等は示唆した[27]が、こうした稲作農耕文化を構成する諸要素の波及時期と各地での稲作農耕の開始の問題は、新たな視点にたって再考する時期にきているといえる。

Ⅵ．おわりに

当遺跡においては、Ａ～Ｃの３地点において、プラント・オパール分析を実施し、土地条件と土地利用、稲作の開始の問題を検討した。

各地点の分析結果は、微地形や地層の堆積状況に対応したプラント・オパールの出現傾向を示した。そして、河道内では中州が形成されるとともに、それが埋積される過程において稲が栽培された。

稲作の開始当初は、こうした旧河道などの微凹地を利用して稲が栽培されていたとみられ、当時の生産域の多くは完新世段丘Ⅱ面の埋没旧河道内に存在することが推定される。ここ藤井平においても、そうした遺構はその後の削剥を受けることなく、埋没しているに違いない。

また、当遺跡における弥生前期の水田址の発掘は、東日本の稲作の開始とその波及の時期などの問題を考えるうえで今後重要な位置づけがなされるであろうし、土器編年による時代区分と稲作農耕文化との関係を再検討する意味においても貴重な資料といえる。

山梨における稲作の開始と波及の時期については、数少ない資料から結論づけることはできないが、現在県内の縄文時代晩期～弥生時代前期の土器の胎土分析を進めており、こうした成果を踏まえたうえで改めて検討することにしたい。

註）

１）高橋 学　本報告 第５章 第１節

２）空中写真にみられるやや白いトーンの部分が埋没微高地で、それを取り巻くように細長く分布するやや暗いトーンの部分が埋没旧河道にあたる。

3）山下孝司（1989）『後田遺跡－県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所

4）佐藤八郎・佐藤森三校訂（1970）『大日本地誌大系45 甲斐国志 第２巻』雄山閣

5）a外山秀一（1988）「中道遺跡から出土した縄文土器のプラント・オパール胎土分析」帝京大学山梨文化財研究所報 第６号

b設楽博己・外山秀一・山下孝司（1989）「山梨県中道遺跡出土の籾痕土器」考古学ジャーナル 第304号

6）平野 修・外山秀一（1990）「弥生前期の水田址－山梨県韮崎市宮ノ前遺跡－」帝京大学山梨文化財研究所報 第10号

7）帝京大学山梨文化財研究所 平野 修・櫛原功一・宮澤公雄の各氏のご教示による。

8）前掲７）

9）前掲５）

10）藤原宏志（1976）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－」考古学と自然科学 ９号

11）杉山真二・藤原宏志（1986）「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－」考古学と自然科学 19号

12）杉山真二（1987）「タケ亜科植物の機動細胞珪酸体」富士竹類植物園報告 31号

13）藤原宏志（1981）「プラント・オパール分析法の基礎的研究（4）－熊本地方における縄文土器胎土に含まれるプラント・オパールの検出」考古学と自然科学 14号

14）中山誠二　本報告 第５章 第２節

15）高橋 学（1990）「地形環境からみた条里遺構年代決定の問題点」条里制研究 第６号

16）藤井平には藤井堰や穴山亀石堰と称する堰が開削されており、安定した土地条件と水利潅漑システムの整備といった稲作に適した条件がこの地には整っていたといえよう。

17）外山秀一（1990）「プラント・オパール分析からみた歴史時代の土地条件－香川・林町遺跡（仮称）、山梨・宮ノ前遺跡、滋賀・光相寺遺跡・吉地薬師堂遺跡を例に－」前掲15）

18）前掲３）

19）前掲17）

20）従来のプラント・オパール分析と水田址の発掘、そしてその時期決定については、拙稿（1991）において、それらの問題点を指摘し、今後の分析と水田址の発掘のあり方について模索した。
外山秀一（1991）「プラント・オパール分析と水田址の発掘」帝京大学山梨文化財研究所報 第14号

21）外山秀一・中山誠二（1990）「中部日本における稲作農耕の起源とその波及（序論）－プラント・オパール土器胎土分析法による試み－」帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第３集

22）当遺跡から出土した土器について、その後詳細な編年的位置づけがおこなわれた。その結果、氷Ｉ式（古段階）の甕は氷Ｉ式第３段階の新相と変更された。前掲14）

23）前掲14）

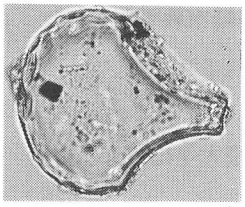
24）外山秀一（1991）「身洗沢遺跡の立地環境と稲作」山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター『研究紀要』７

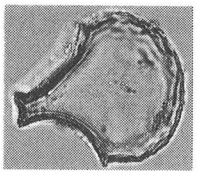
25）a前掲21）

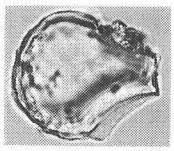
b外山秀一・中山誠二（1992）「日本における稲作の開始と波及」植生史研究 第９号

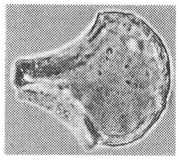
26）村越 潔（1988）「砂沢遺跡の水田址」日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会『日本における稲作農耕の起源と展開－資料集－』

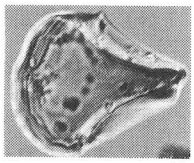
27）前掲21）、25）b

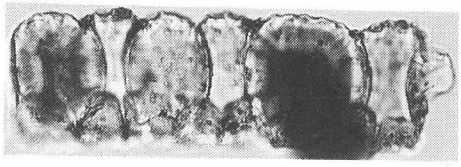

1

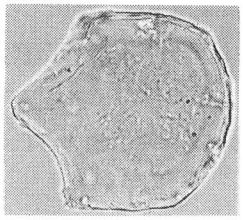

2

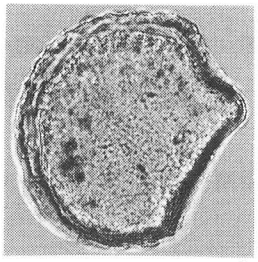

3

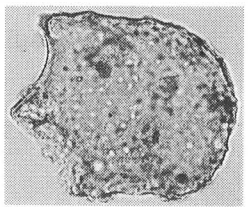

4

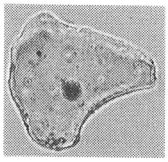

5

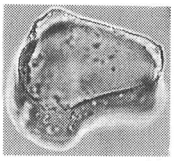

6

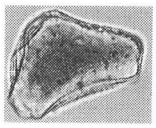

7

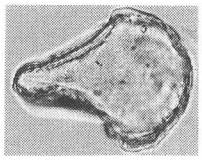

8

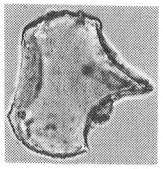

9

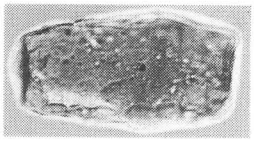

10

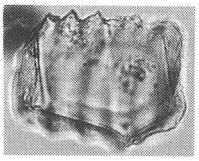

11

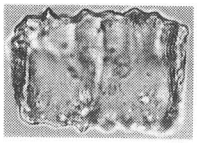

12

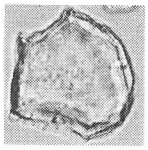

13

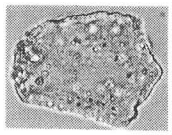

14

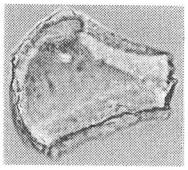

15

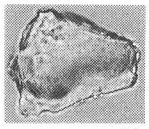

16


17

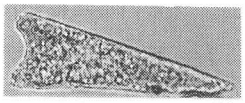

18

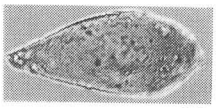

19

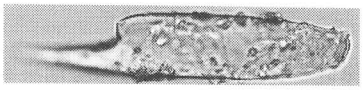

20

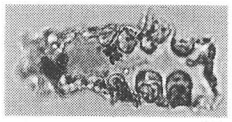

21

22

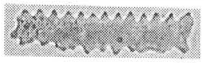

23

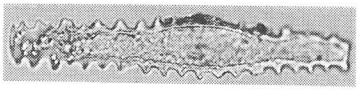

24

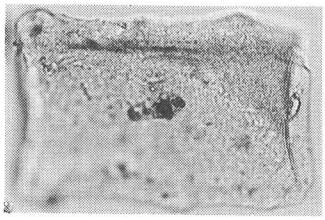

25

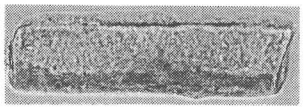

26

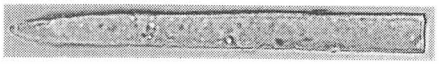
27

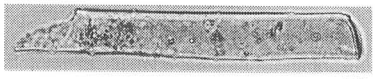

28

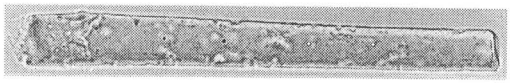

29


30


31


32

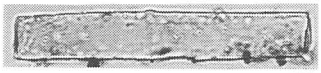

33


34

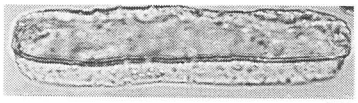
1～5 イネ　6 イネ塊状　7～9 ヨシ属　10～12 ウシクサ族　13 サヤヌカグサ属
14 シバ属　15 キビ族型　16･17 ネザサ節型　18 オカメザサ属型　19 クマザサ属型
20 メダケ節・ヤダケ属型　21 ナリヒラダケ属型　22 繭状細胞　23～25 刺状細胞
26～29 鋸歯状細胞　30･31 板状細胞Ｃ型　32～34 棒状細胞丸状Ａ型

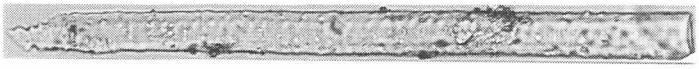
（1･2 ×400、その他 ×200）

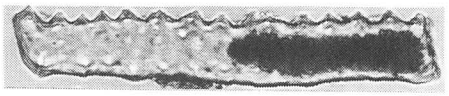
写真２　プラント・オパール


35

36


37

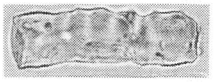

38

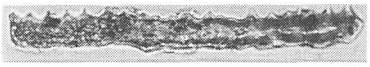

39

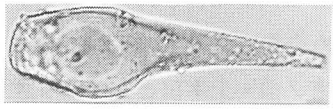
40

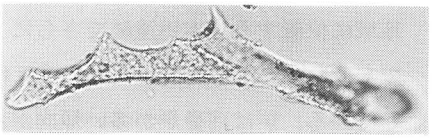
41

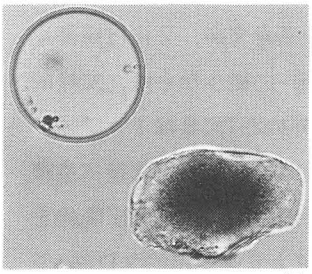
42

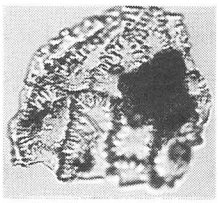

43

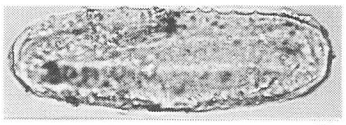

44


45

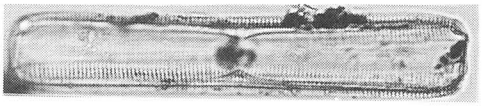

46

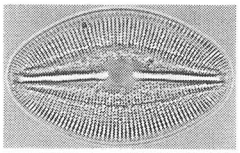

47

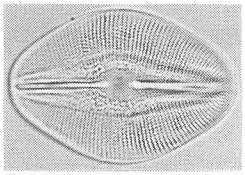

48

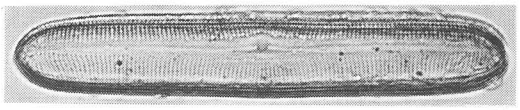

49

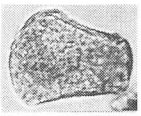
50


53


51

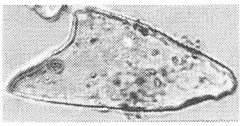

52

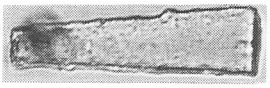

54

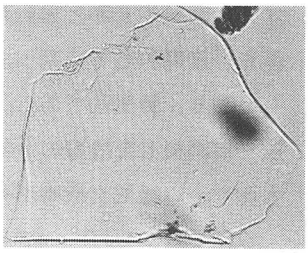

55

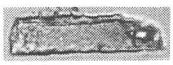
56

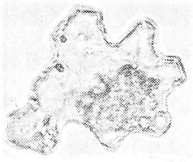
57


58

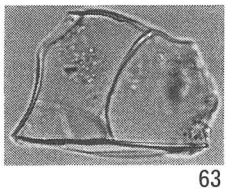

59


64


60


61

62


63

35 棒状細胞丸状Ａ型　36 棒状細胞丸状Ｂ型　37 棒状細胞角状　38～44 棒状細胞鋸歯状
45 毛状細胞　46 樹木起源刺状　47 不明・プラントオパール　48･49 不明　50 動物珪酸体
51～54 珪藻　55 ウシクサ族　56･57 クマザサ属型　58 刺状細胞　59 棒状細胞角状
60 棒状細胞鋸歯状　61 樹木起源その他　62 不明　63･64 火山ガラス　(55～64 土器胎土分析)
(36･48･50･63 ×100、その他 ×200)

写真３　プラント・オパール、その他

第４節

宮ノ前遺跡における縄文時代の遺構と遺物

本遺跡では奈良・平安時代の遺構のほかに縄文時代の遺構をいくつか検出した。本節ではその中から主な遺構・遺物を取り上げ、若干の考察を加えてまとめとする。

前期では諸磯b式期の浮線文系土器片があり、c式期から十三菩提式期にかけて土器量の増加がみられる。遺構も393号住、５・６号土坑がある。塩川右岸の低平な藤井平地域が居住域としてはじめて利用されている。この時期は住居数そのものが少なく、甲府盆地では1989年段階の集成でわずか４軒であった（櫛原　1989）。最近藤井平地域に位置する上本田遺跡でさらに１軒の調査事例が報告されている（山下　1992）。住居址の平面形は円形が主であり、柱穴は小規模なものが壁ぎわに数本めぐる例が多く、宮ノ前393号住、上本田７号住もそうした特徴を示している。炉は埋甕炉が多い傾向があるが、宮ノ前・上本田ともにはっきりしていない。６号土坑11・12は、口縁が広く開き口縁部が立ち上がる器形で、縄文地文上に半截竹管文を粘土紐上に施文した結節浮線文を多用し、胴部では縦方向に、口縁～頸部では横方向に数条巡らす。また１には口縁部に粘土紐の渦巻文が、２には頸部に隆線上を連続指押さえした指頭圧隆線が１条存在する。小林謙一氏の分類（小林　1986）に従うならば、文様的にはC2a群（前期末Ⅲ期）であるが、器形的にはD群（前期末Ⅴ期）である。また遺構外の297図８はトロフィー形の波頂部片で、隆線上結節沈線をもち、Ｂ１類（前期末Ⅱ期）に相当する。宮ノ前遺跡に南接する北後田遺跡ではＢ区１号土坑から前期末の土器が出土しており、口縁部・頸部・胴部の３文様帯が明確化し、指頭圧隆線を頸部に、半截竹管文による鋸歯文・渦巻文・レンズ状文を描いたもので、宮ノ前６号土坑よりも後出的なD群（前期末Ⅴ期）である。また上本田遺跡では三角印刻をもつB2b類（前期末Ⅳ期）がある。このように藤井平地域が前期末に居住域あるいは生活域として利用されたひとつの理由として氾濫原の安定化が予想される。また河川流域に食料を求めて生活基盤を置いた可能性も高く、石器組成などを検討してみる必要があろうが、本遺跡では良好な資料に恵まれていない。

中期では421号住があり、炉周辺から中期末、曽利Ⅴ式期の土器が出土している。中期後半の状況に関しては第２章第２節で述べたとおり、中期後半でも曽利Ⅳ式期をピークとした住居数の増加が知られている。421号住の土器は、中期でも最終末の土器群である。住居の規模が不明確で土器の混在も考えられるが、一応時期的にまとまった資料となっている。１～８のうち、１が縄文地文、２・３・７・８が連続ハの字状沈線文、４・６が櫛歯状刺突による連続ハの字状文である。連続ハの字状沈線文はやや疎で、長くのびた形となっている。文様モチーフは┌状区画をもつ４のほか、区画線が２本の閉じた沈線に変化した２・３・５が主体的で、また1は縦区画線をもたず、区画線の変形と思われるＪ字文をもち、後期初頭との並行関係も予想される土器である。中期末の区画文消滅後、後期称名寺式期へと移行する漸移的な段階と考えられる。１～３は口縁部の横位二重沈線がU字状に変化しており、特徴的である。曽利Ⅴ式土器の変遷は、枠状区画がある段階、弧線文・縦区画線に変化した段階、区画文が消失した段階の３細分が可能である（櫛原　1989）が、421号住の資料は曽利Ⅴ式Ⅱ段階に位置付けられるもので、口縁部文様帯が弧線化した土器群としてⅡ段階の中でもより新しい位置付けが可能であろう。

後期では394号住、408号住、417号住がある。394号住は称名寺式土器を埋設したピットを炉と考えて、それを中心に配石の見られた範囲を住居としたが、土器周辺に焼土がほとんどなく、称名寺式期の住居として認定できるかどうか曖昧である。土器は２段の区画内に逆Ｊ字文を縦位に配列し、沈線間に縄文を充填したもので、器面の粗いナデが顕著である。408号住は円形に浅く掘り窪め、壁に横長の礫を縁石として部分的に連続して並べたものである。炉は不明で、住居に近接して存在した埋甕を住居出入り口部に伴う屋内埋甕と判断した。この時期の住居址は最近須玉町上ノ原遺跡で数多く検出し、縁石の外側に接してピットが並ぶ住居形態が一般的であることがわかっており、本住居址の場合、縁石外周付近での柱穴確認が不十分であったことが反省される。住居址内出土土器によれば堀之内１式新期であるが埋甕がやや古手の器形を示しており、住居址と埋甕との関連についても

明確とはいいがたい。堀之内式期に県内では出入り口部埋甕を伴うような住居はほとんど知られておらず、上ノ原遺跡でも確認されていない。417号住は方形石囲炉とその前方に位置する配石土坑を一体のものと考え、柄鏡形住居と判断したものである。土坑中には完形土器が斜位に、住居側に傾いて検出された。このような出入り口部に配石を伴う例に県内では境川村金山遺跡、一の沢西遺跡２号住がある。土器は埋甕以外は微隆起線文土器で、口縁部に一条の微隆起線を貼付し、胴部には縦区画文、渦巻文のモチーフを沈線により描くもの（３・５～８）、微隆起線文で描くもの（２・９・10）がある。１の埋甕は口縁部に微隆起線文を一条巡らせ、胴部にはＪ字文を上下に向かい合わせて配している。縄文充填はなく、地文は無文のままという特異な土器である。器形およびＪ字文の縦位配列は称名寺式的モチーフであり、称名寺式の模倣形態と思われる。

そのほか422号住は敷石住居で、412号住の竈調査時に確認されたものであるが、炉と思われる石囲いの東側に敷石を施している。土器は皆無であり、時期は不明である。

遺構外土器には以上のほかに堀之内２式、後期後半（第297図17）、晩期前半（18～20）がある。晩期末以降では２号溝状遺構を中心に豊富な土器が出土しており、本章第２節、中山氏の考察を参照されたい。

遺物には打・磨製石斧、石皿、磨石、凹石、石棒、石冠、石剣、蜂ノ巣石、丸石、石鏃、耳飾りなどがある。石器の石材は打製石斧に粘板岩、石皿・磨石・凹石・蜂ノ巣石に安山岩が多く使用されている。粘板岩、安山岩はともに塩川の河川敷や遺跡の立地する段丘面に無数に存在する礫である。凹石の中には通常よりも大きく深い凹みを有するものがある（99～103）。凹石は通常片手にもつことができる程度の大きさで、楕円形で２面の使用面に凹みがみられるのに対し、大きな凹みを有するタイプは大型・円形で凹みが直径６～８㎝、深さ１～1.5㎝程度もあり、凹みは片面のみが多い。１点だけ住居内出土例があり、奈良・平安時代以降の所産であろうと考えている。類例は北後田遺跡Ｂ区32号住（平安か）などにあるが、住居址内検出例はまだ少なく、この種の石器に対する関心も低い。想像が許されるならば胡桃を割るための台石ではないだろうか。胡桃に関しては、平城宮大膳職跡出土木簡に「（甲斐国）山梨郡雑役胡桃子一古」と記された荷札があり、甲斐国では雑役の中男作物として貢納されたことがよく知られている。身だけとしたのか、あるいは油にして運搬したのか定かでないが、いずれにしても堅い殻を割る必要性があり、こうした石器が使用されたと考えたい。耳飾り（第324図１～３）は同形・同文で、おそらく堀之内式期の所産とみられる。中期後半以降後期前半代には耳飾りがほとんどなく、安行Ｉ式期以降増加する傾向にあり、これらの耳飾りは後期以降の装飾性豊かな耳飾りの初現的な資料といえる。

参考文献

櫛原功一　1989　「縄文時代の住居形態と集落－甲府盆地を中心として－」『山梨考古学論集』II　山梨県考古学協会

櫛原功一　1989　「Ⅳ．縄文時代中期末土器群及び集落研究史概説」「八ヶ岳南麓地域とその周辺地域の縄文時代中期末土器群の胎土分析」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第１集

小林謙一　1986　「中部・西関東地方における縄文時代前期末葉～中期初頭の土器群について」『小黒坂南遺跡群』境川村教育委員会・境川村カントリークラブ予定地内埋蔵文化財発掘調査会

山下孝司　1990　『北後田遺跡』　韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所

山下孝司　1992　『上本田遺跡』　韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所

第５節

宮ノ前遺跡における奈良・平安時代の土器・陶器

ここでは宮ノ前遺跡の多種多様な土器・陶器類を概観し、流れを見てゆきたい。手順としてはまず土器・陶器の種別ごとに器種分類する。次に時期設定の指標となる坏の変遷を追って段階・時期を設定する。そして住居資料の中から良好な例を抜き出し器種構成を検討して、個々の器種についても器形・法量や技術的な変化を探る。最後に近年の研究成果をもとに各時期に年代観を与えてみようと思う。

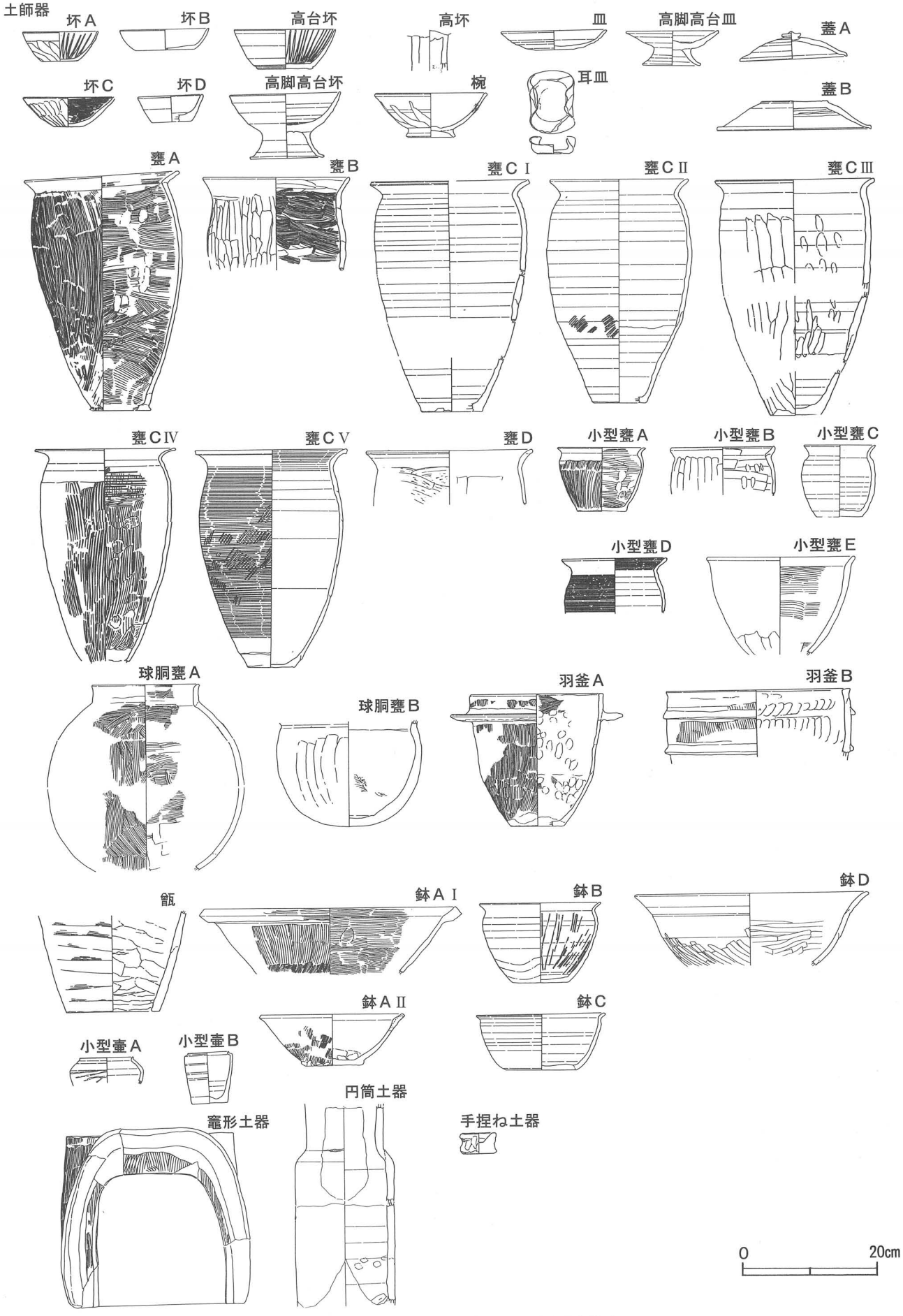
(1) 器種の分類（第17・18図）

土器・陶器類は、土師器、黒色土器、甲斐型黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、奈良三彩の７種に分けられる。黒色土器・甲斐型黒色土器も土師器ではあるが、黒色土器は内面にミガキ調整を加えたうえで黒色処理したものであり、甲斐型黒色土器も内面の暗文を多用するなど技術的な特徴がある。したがって土師器とは区別して取り扱うこととする。なお同一器種でも器形が異なり用途の相違が予想される場合には、アルファベットでＡ・Ｂ・Ｃ……と付記し、さらに調整技法が異なる場合、明らかな法量差が認められる場合にはローマ数字でⅠ・Ⅱ・Ⅲ……と付記して分類する。

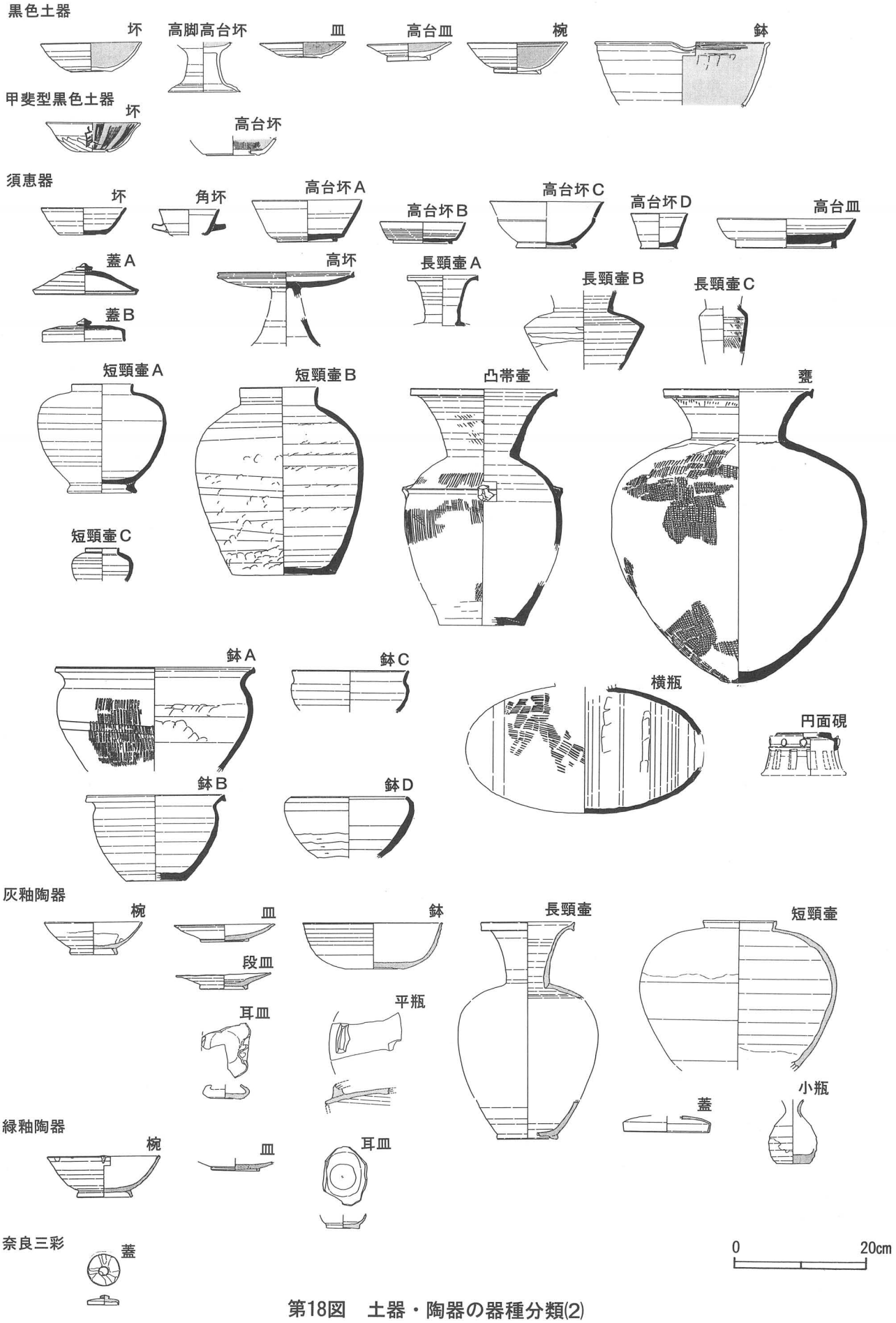
種　別	器　種	特　　徴
土師器	坏　A	無高台の坏で、「甲斐型坏」とよばれる一群の坏を主体とする。甲斐型坏とは赤色粒子を含む良質な胎土を示し、内面暗文や体・底部外面の手持ちヘラ削りを技術的な特徴とするものである。まれに回転ヘラ削り調整されたものもある。1983年に坂本美夫氏、末木健氏、堀内真氏により３期７小期の変遷案が提起され（坂本ほか　1983）、1992年の甲斐型土器研究グループによる研究集会でもその変遷過程は大筋において支持されている（甲斐型土器研　1992）。
	坏　B	無高台、盤状の坏。器高が低く、底径が大きい。内外面にミガキを加えるものがある。
	坏　C	無高台で、非ロクロ調整。内面にはハケメ状のナデ調整を行う場合がある。
	坏　D	小型で、底・体部無調整。ほとんど灯芯痕をもつことから、灯明具として作られたらしい。
	高台坏	底部に削り出し、ないしは貼り付けによる高台をもち、体部外面下半、高台部側面を回転ヘラ削り調整する。甲斐型坏と同じ胎土である。
	高脚高台坏	末広の高い高台をもつ。椀類の高台がのびた形態である。
	高　坏	脚部片のみで、全形は不明。脚部にはラッパ状に広がる円筒状のものと面取りしたものがあるが、前者は須恵器かもしれない。
	椀	坏に高台を付けた形態。
	皿	無高台の皿で、口縁形態や内面の暗文など細部は甲斐型坏と同じ変化を示す。甲斐型坏と同じ胎土である。
	耳　皿	無高台。灰釉耳皿の模倣と思われる。出土量は少ない。
	高脚高台皿	末広がりの高い高台をもつ皿。
	蓋　A	須恵器蓋と同じ形態で、甲斐型坏と同じ胎土である。
	蓋　B	皿状の蓋で、削り出しによる環状つまみをもつ。口縁端部は蓋と同様に小さな立ち下がりがある。ここでは一応蓋としたが、皿の可能性もある。
	甕　A	口縁部が短く屈曲した長胴甕で、内面横ハケメ、外面縦ハケメ調整を行い、内面には指頭痕が残る。「甲斐型甕」とよばれている一群の甕を主体とし、金色雲母を多く含んだ胎土に特徴がある。底部には木葉痕をもつことが多い。「甲斐型甕」は、保坂康夫氏により口縁形態が薄口縁型→厚口縁型→末広口縁型へと変化することが指摘されている（保坂　1989）。
	甕　B	内外面ナデ調整を行う。口縁部は緩やかに外反する。非ロクロ整形のため、歪みがある。ハケメ調整風のナデも存在する。
	甕　C　Ⅰ	ロクロ調整のままの長胴甕。破片では甕ＣⅡとの区別が難しい。
	甕　C　Ⅱ	ロクロ調整を行い、外面中央付近に軽く外面タタキ調整を加える。内面には対応する当て具痕は見られない。
	甕　C　Ⅲ	ロクロ調整を行い、さらに外面ナデ調整を加える。

種別	器種	特徴
土師器	甕 C Ⅳ	ロクロ調整を行い、さらにハケメ調整を加える。内面にハケメ調整を施す場合、縦方向に行っていることが多い。ナデやハケメ調整を併用することもある。
	甕 C Ⅴ	カキメ（註1）状を呈すロクロ調整を行う。
	甕 D	外面にヘラケズリ調整を行い、器壁を薄くしている。いわゆる武蔵型甕。
	小型甕 A	内外面にハケメ調整を施し、甕Aと同一技法である。大・中・小3種類に分けられる。
	小型甕 B	甕Bと同一技法で、内外面ナデ調整を行う。
	小型甕 C	ロクロ調整で、外面をナデもしくはヘラ削り調整するものがある。
	小型甕 D	ロクロ調整により外面にカキメをもつ。
	小型甕 E	口縁部が短く直立し、口が大きく開く。
	球胴甕 A	球胴で小さな底部をもち、口縁部は短く直立する。内外面はハケメ調整後、ナデ調整を加える。
	球胴甕 B	小型で底部は丸底。外面はナデ。1例のみ。
	羽釜 A	口縁部下に鍔をもつ。甕Aと同じく内外面ヘラケズリ調整を行う。
	羽釜 B	2条の鍔状の凸帯をもつ。1例のみであり類例もなく、甑の可能性もある。
	甑	底部付近の破片資料しかなく、全体像は不明。長胴甕に似た形態で、底部はそっくり抜けている。
	鉢 A Ⅰ	口径が大きく開いた平底の鉢で、甕と同じく短い口縁部がある。内外面の調整、胎土は甲斐型甕と同じ。口縁部形態の変化についても甲斐型甕と同じであるとの指摘がある（保坂和 1992）。
	鉢 A Ⅱ	鉢AⅠを小型化したもの。調整技法などもほぼ同じである。
	鉢 B	平底で胴部は丸く張り、口縁部は緩やかに開きやや長くのびる。胎土は甲斐型坏と同じで内面に暗文を施す例がある。
	鉢 C	平底で、底部がやや大きく箱状を呈し、口縁部が短く屈折する。胎土は甲斐型坏と同じで調整、内面の暗文も同じように施す例がある。
	鉢 D	広口で、器体部の傾きも大きく、口縁部の屈折は緩やかである。
	小型壷 A	薬壷状を呈し、丸い体部から口縁部が短く立ち上がる例、立ち上がりがほとんどない例がある。
	小型壷 B	平底で筒状を呈し、蓋受け状の短い立ち上がりがある。1例のみである。
	竈形土器	円筒状の体部を½ほど開口し炊き口を設け、その周囲に冂状の庇を貼り付けている。体部側面には円形の孔を開けている。胎土は甲斐型甕と同一である。「置き竈」とも呼称されている。
	円筒土器	全形のわかる資料はないが、円筒形で片方の端部が丸瓦のように玉縁状をなしている。おそらくソケットのようにつなぐための構造であろう。体部にタタキ調整を行う例がある。
	手捏ね土器	臼状、坏状、椀状がある。内外面荒いナデ調整が行われ、指頭痕を残す例がある。
黒色土器	坏	平底で、内面にはナデ・ミガキ調整を行った後、黒色処理が行われている。外面のナデ調整も甲斐型坏にくらべて顕著である。少数ながら内外面に黒色処理を施した例もある。胎土は甲斐型坏と大きく異なる。
	高脚高台坏	坏底部に長い高台をつけたもので、1例のみ。
	皿	無高台で、内面に黒色処理を施す。類例は少ない。
	高台皿	貼り付け高台をもち、内面に黒色処理を施す。
	椀	貼り付け高台をもち、内面に黒色処理を施す。
	鉢	無高台の大型の鉢で、内面に黒色処理を施し、片口をもつことがある。
甲斐型黒色土器	坏	土師器坏A（甲斐型坏）と器形・外面調整技法・胎土は同じであるが、内面に放射状暗文とらせん状暗文を併用したり、ミガキ調整を行い、黒色処理を行っている。内外面黒色処理した例もある。
	高台坏	土師器高台坏を内面黒色処理した例である。
須恵器	坏	無高台で、ロクロ調整が行われている。底部は回転ヘラ切り、回転糸切によって切り離し、手持ちヘラ削り調整する場合、しない場合などがあり、底部調整の違いを変遷の指標とした分析が行われている。
	角坏	無高台坏で、体部下半に一対の角状突起をもつ。
	高台坏 A	高台のある身深の坏。蓋Aと組み合う。
	高台坏 B	高台のある身浅の坏。蓋Aと組み合う。

種別	器種	特徴
須恵器	高台坏C	体部が湾曲し、稜をもつ。
	高台坏D	小さなコップ状で、高台をもつ。出土量は少ない。
	高台坏E	丸味をもった底部で、高台よりも底がでる。全形は不明で、蓋の可能性もある。
	高台皿	高台を持つ皿。出土量は少ない。
	蓋A	高台坏に伴う坏蓋。弓なりにはらんだ天井部中央に宝珠ないしは円盤状のつまみをもつ。端部には短い立ち下がりがある。天井部上半には回転ヘラ削り調整が行われる。
	蓋B	短頸壷の蓋。端部の立ち下がりが長く、天井部は平坦である。宝珠状のつまみをもつ。
	高坏	蓋Aを逆にしたものに高脚を付けた形態を示す。口縁端部は短く直立する。脚部は末広で、窓などの装飾はない。
	長頸壷A	高台をもち、体部は球胴でラッパ状の長い頸部がつく。口縁部には面をもつ。把手をもつものがある。
	長頸壷B	全形は不明であるが、屈曲した肩部を示し、頸部はラッパ状である。1例のみ。
	長頸壷C	平城宮分類でいう「壷G」。本遺跡では破片資料のみ。無高台で、屈曲した肩部をもつ細身の体部にラッパ状の頸部がつくと思われる。伊豆方面で窯跡が見つかっているので、搬入品であろうと思われる。畿内では長岡京期を中心に発見例が多く、年代を知る手がかりとなる。
	短頸壷A	球胴で高台をもち、短く直立した立ち上がりをもつ。蓋Bと組み合うと思われる。
	短頸壷B	無高台で、短く直立した立ち上がりをもつ。出土量は少ない。
	短頸壷C	小型で薬壷状を呈す。出土量は少ない。
	凸帯壷	いわゆる凸帯付四（二）耳壷。無高台で、丸い肩部に断面三角形の凸帯を1条巡らし、2～4個の耳を貼付している。耳には上方からの刺突があることが多い。頸部はラッパ状で、口縁部に面をもつ。外面にはタタキ調整が行われる。長野県に多く、山梨県内でも北巨摩地方に多いほか、盆地中央部でも小破片が散見されている。
	甕	底部は平底または丸底。丸味のある胴部にハの字状に開いた口縁部をもつ。外面は叩き、内面はナデが多い。小型～大型がある。
	鉢A	広口で大型。肩部は緩やかに内湾し、口頸部は短く外反する。体部外面にタタキ調整を行うものがある。底部はおそらく平底。
	鉢B	広口で小型。ロクロ調整が行われる。
	鉢C	広口で小型。口縁は直立ぎみである。
	鉢D	鉄鉢状を示し、キャリパー状に内湾する。体部下半は回転ヘラ削り調整が行われる。
	横瓶	楕円球胴に短い口頸部がつく。体部はタタキ調整。出土量は少ない。
	円面硯	3点ほど見つかっている。縁をもつ円面部から末広の高脚をもち、脚部には長方形の窓がある。
灰釉陶器	椀	高台には角高台、三日月高台、三角高台が、また釉掛け方法には刷毛塗り、漬け掛けがあり、美濃編年のK14・K90・O53・H72号各窯式及び同段階の搬入品である。
	皿	高台は椀と同じである。
	段皿	皿の中央に段がある。
	耳皿	無高台。
	鉢	無高台で、椀よりも口径が大きい。
	長頸壷	須恵器長頸壷Aと同形。
	短頸壷	須恵器短頸壷Aと同形と思われる。
	蓋	短頸壷の蓋。径が小さく、天井部は平らで口縁端部には立ち下がりがある。
	小瓶	無高台で、体部は丸く口頸部は細い。
緑釉陶器	椀	口縁部を4ヵ所ほど内側に押さえた輪花椀がある。また体部内面に沈線で花弁を描いた陰刻花文もみられる。
	皿	高台あり。
	耳皿	無高台。
奈良三彩	蓋	小壷の蓋で外面に白・黄・緑の3色による塗り分けが行われている。1例のみ。



第17図　土器・陶器の器種分類(1)



第18図　土器・陶器の器種分類(2)

⑵　土師器坏の変遷

①土師器坏Ａの変遷（第19図）

土師器坏Ａの中で主体となる、いわゆる甲斐型坏については、坂本氏らにより口縁部形態、器体部整形、暗文、底部整形の分析に基づく時期設定が示され（坂本ほか　1983）、その後山下孝司氏が整理している（山下　1986）。山下氏は甲斐型坏の変遷について、まず底径と口径の法量変化から８期の段階を設定した。そして整形・調整技法変化と各段階の対応を検討したうえで、Ⅰ・Ⅱ期に成立した甲斐型坏の特徴ある技術要素がその後消失していく状況を追い、結果的には坂本氏の成果に合致することを確認している。

ここでは従来の研究成果を踏まえ、住居址出土資料の中から良好な資料を抜き出して形態・技法・法量などから画期を見い出し、段階設定について検討した結果、甲斐型坏の８段階の変遷を想定した。また手持ちヘラ削りを行わない甲斐型坏以降の坏類についても取り上げ、２段階を設定し、全体で土師器坏Ａの10段階細分とした。宮ノ前遺跡の土師器は甲斐型坏が中心をなすので、甲斐型坏の変遷が決まると甲斐型坏以前と以後、という視点に立って土器群の全体的な流れを把握することができる。

［土師器坏Ａ　１段階］

器壁が全体に厚く、重量感がある。大型で箱状を呈し、口径15cm、底径９～10cm、高さ６cmほどである。底部は静止ないし回転糸切り、手持ちヘラ削り後にヘラミガキを行う。内面・見込み部には細密な放射状暗文を丹念に施す。

235号住：３は口径14.6cm、底径9.7cm、高さ5.9cm。底部は静止糸切り後、外周から体部下半にかけて手持ちヘラ削りし、丸く仕上げている。暗文は細密。外面のヘラミガキははっきりしない。

［土師器坏Ａ　２段階］

底部は約８～９cmと大きく、静止ないしは回転糸切り、手持ちヘラ削り後にヘラミガキを施す。体部外面は底部に近いところを手持ち横ヘラ削りし、その上から波状ないしは横ヘラミガキをおこなう。内面・見込み部には放射状暗文を施す。暗文は細密で、暗文端部が花弁状にならないものが多い。口縁部は直立し、尖る。口径は約13～14cm、高さは5cm前後であるが、小型例もある。

172号住：１は内面・見込み部ともに細密な放射状暗文を施し、体部外面に不鮮明ながら波状のミガキを施しているようである。底部は静止？糸切り後手持ちヘラ削りを行い、全面ヘラミガキをする。口径13.2cm、底径8.2cm、高さ5.6cm。

260号住：１は口径12.4cm、底径８cm、高さ５cm。暗文は細密。外面のヘラケズリは横方向で、はっきりしない。ヘラミガキもよくみえない。

325号住：１は口径14.4cm、底径８cm、高さ5.5cm。体部外面にかすかなヘラミガキ、底部近くには横ヘラ削り、内面には細密暗文がみられる。

370号住：１は内面・見込み部ともにかすかな放射状暗文があり、体部外面には不鮮明であるがヘラミガキを施す。底部は回転糸切り後手持ちヘラ削りをするが、ヘラミガキについてはよくわからない。口径12.7cm、底径8.2cm、高さ4.8cm。

372号住：１は内面には細密暗文、見込み部ははっきりしない。底部にはかすかにヘラミガキ。口径14cm、底径9.1cm、高さ5.1cm。

383号住：１は底径８cmで、底部のヘラミガキはかすかにあるようだ。暗文は細密。体部・見込み部境にはヘラミガキ調整を行う。

412号住：２は底部を回転ヘラ削り後ヘラミガキ、内面・見込み部に幅広の暗文を施す。体部外面はよくわからない。口径13cm、底径９cm、高さ４cm。

［土師器坏Ａ　３段階］

底部のヘラミガキがほとんどなくなり、体部のヘラミガキはかすかに残る程度。下半には斜め手持ちヘラ削りが行なわれる。暗文は前段階同様、内面・見込み部に施されるが、暗文間の隙間が広がり、端部は花弁状になり

つつある。底径７～８cm、口径12～13cmと縮小化する。高さは５cm前後である。

199号住：１は口径12.2cm、底径7.5cm、高さ4.5cm。底部へラミガキはなく、体部へラミガキもかすかである。暗文は疎。２は底径7.4cmで見込み部に細密暗文を施し、底部にはへラミガキがかすかにみられ、１段階の特徴がある。

313号住：１は底部回転糸切り後、手持ちへラ削り。体部外面にかすかな横へラミガキ。口径12.4cm、底径7.4cm、高さ5.1cm。２は体・底部ともにへラミガキがない。口径13cm、底径8cm、高さ5cm。３は体部外面にかすかな横へラミガキがある。口径13cm、底径８cm、高さ５cm。

［土師器坏Ａ　４段階］

口径・底径の縮小化が進み、口径約11cm、底径約6cm、高さ４cm前後となる。体部のへラミガキはなくなる。暗文は内面・見込み部に施される。体部の暗文は一筆描き的な花弁状である。

93号住：１は口径11.1cm、底径6.3cm、高さ4.3cmで、暗文は体部内面だけである。

138号住：１は口径10.5cm、底径6.1cm、高さ4.8cm。２は口径11cm、底径6.8cm、高さ3.9cm。

159号住：１は口径11.6cm、底径７cm、高さ3.8cm、２は口径11cm、底径6.2cm、高さ4.5cm、３は口径11.2cm、底径6cm、高さ4.1cmで、それぞれ内面・見込み部に暗文を施す。

248号住：１は口径9.8cm、底径7cm、高さ4.4cm、２は口径10.8cm、底径6.2cm、高さ4.4cm。

［土師器坏Ａ　５段階］

前段階までは底部から器壁が直立気味に立ち上がる箱状であったが、この段階以降は器壁が斜めにのびて開く器形となり、器体部の外傾が顕著になる。口径は11cm前後と前段階と変わらないが底径は５cm前後となり、底径が口径の½程度と縮小化が著しい。高さは４cm前後である。見込み部の暗文は消滅する。内面の暗文は存続するが、同時にまったく暗文をもたない例が共伴する。

13号住：１は口径11.2cm、底径5.3cm、高さ4.2cm。２は口径11.4cm、底径5.6cm、高さ4.5cm。３は口径14cm、底径７cm、高さ5.4cmで、口径・底径ともに大きい。体部外面には２と同一墨書文字があり、使用時期は同じと思われる。

21号住：７点図示している。口径は10～12cmで、11cm台が５例ある。底径は4.4～6cmで、５cm台が４例である。高さは3.7～4.4cmで、４cm付近に集中する。暗文のない坏が２点ある。

111号住：７点図示しているが、口径は10.4～11.1cmで11cmが４点ある。底径は4.8～６cmで５cm付近が多く、高さは3.8～4.7cmで4cm台前半が多い。内面に暗文を施さない坏が２点ある。

130号住：５点図示。口径10.6～12.8cmで10cm後半台が４例、底径4.8～5.6cmで５cmが３例、高さ3.9～4.6cmで４cm台が４例である。暗文のない坏が２例ある。

207号住：４点図示した。口径11～11.6cm、底径4.2～5.8cm、高さ4.1～4.3cmで、暗文のない坏が１例ある。

261号住：４点図示。口径は10～11.6cm、底径は4.6～６cm、高さは3.3～4.3cmで、３cm台が３例である。暗文のない坏が１点ある。

293号住：坏Ａは31点図化しているが、口径は10～12.4cmで11cm付近が多い。底径3.9～6.3cmで５cm付近が多い。また高さ3.4～4.8cmで４cm前後が多い。体部内面に暗文をもつものが17点、もたないものが12点で、同一器種でありながら暗文を施さない坏も多く存在する。

302号住：４点図示。口径10.2～11.2cmで11cm台が３例、底径は4.2～５cm、高さは４～5.3cmで４cm台前半が３例である。暗文のない坏が１点ある。

［土師器坏Ａ　６段階］

さらに底部が縮小し口径の½以下となり、底径４cm前後が多い。器体部の傾きは一層大きくなる。内面に暗文を施す。外面・内面見込み部にロクロナデ調整痕が残る場合が多い。

70号住：８点図示。口径10.4～12.6cmで12cm台が３例、底径は4.2～5.6cmで５cm台が４例、高さは3.7～4.8cmで４cm台前半が４例ある。暗文のない坏が１点あり、斜めへラ削りが施されていない。在地的な坏であろう。

110号住：８点図示。口径10.2～11.2cmで10cm台が５例、底径は4～5.6cmで４cm台が４例、高さは3.7～4.5cmで3.7～4.2cmが７例ある。暗文のない坏が１点あるが、器壁の厚さや器形が本来の甲斐型坏ではない。

292号住：６点図示。口径11.6～13.1cmで11cm後半台が３例、13cm台が２例ある。底径は４～５cmで４cmが３例ある。高さは4.3～５cmですべて4.3～4.4cmが５例である。暗文のない坏が１点ある。

315号住：７点図示。口径11～12.8cmで11cm台が３例、底径は4.8～5.8cm、高さは４～4.5cmですべて４cm台前半である。暗文のない坏が２点ある。

［土師器坏Ａ　７段階］

内面暗文が消滅する。口唇部がわずかに外反し玉縁化するものが主体的である。法量は口径11～12cm、13～14cm、16～17cmの３種があり、器種が分化する。底部は回転糸切り後、手持ちヘラ削りをする。

４号住：５点図示。口径11.4～13cm、底径は3.7～4.6cm、高さは4.1～4.4cm。

32号住：３点図示。口径12～16cmで、口径12cm、14cm、16cmが各１例づつある。底径は５～７cm、高さは4.1～5.7cmで、口径が大きいほど各部位の数値も少しづつ大きい。口径16cmのものは底部回転糸切り未調整で、体部外面の調整も行っていない。

68号住：６点図示。口径12～17cmで、12cmが３例、14cmが１例、17cmが１点であり、３種の法量による器種分化がある。底径は４～５cm、高さは4.1～5.3cmで、口径12cmは高さ４cm台、14cmは高さ５cm台である。

153号住：16点図示。口径11～17cmで、11cm台が７点、12cm台が５点、13～14cm台が２点、17cmが１点である。このうち口径12cm、14cm、17cmの各１例に内面暗文がある。底径は3.8～4.8cmで、底径4.5cm以下が11例を数える。高さは3.6～5.2cmで、３cm後半台が４例、４cm台が９例、５cm台が１例である。

243号住：８点図示。口径11.6～14cmで、13～14cmは２例。底径は４～5.6cmで４cm台が７例ある。高さは3.7～5.4cmで、4.5cm以下が６例である。

250号住：５点図示。口径11～16.5cmで11～12cm台が４例、底径は4.4～６cm、高さは3.9～5.1cmで口径11～12cmのものは高さ4.3cm以下である。

［土師器坏Ａ　８段階］

口縁が隆玉縁化する。口径が12cm前後、14cm前後、17cm前後の３種に分化している。体部下半・底部には手持ちヘラ削りが施される。

227号住：21点図示。口径11.2～18cmで11～12cm台が10例、13～14cm台が７例、17～18cm台が３例である。底径は3.2～6.5cmで、口径11～12cm台は４cm前半台が多く、口径13～14cm台は５cm台が、口径17～18cm台は６cm台が多い。高さは3.7～6.4cmで、口径11～14cm台は４cm台が多く、口径17～18cm台は６cm台が多い。

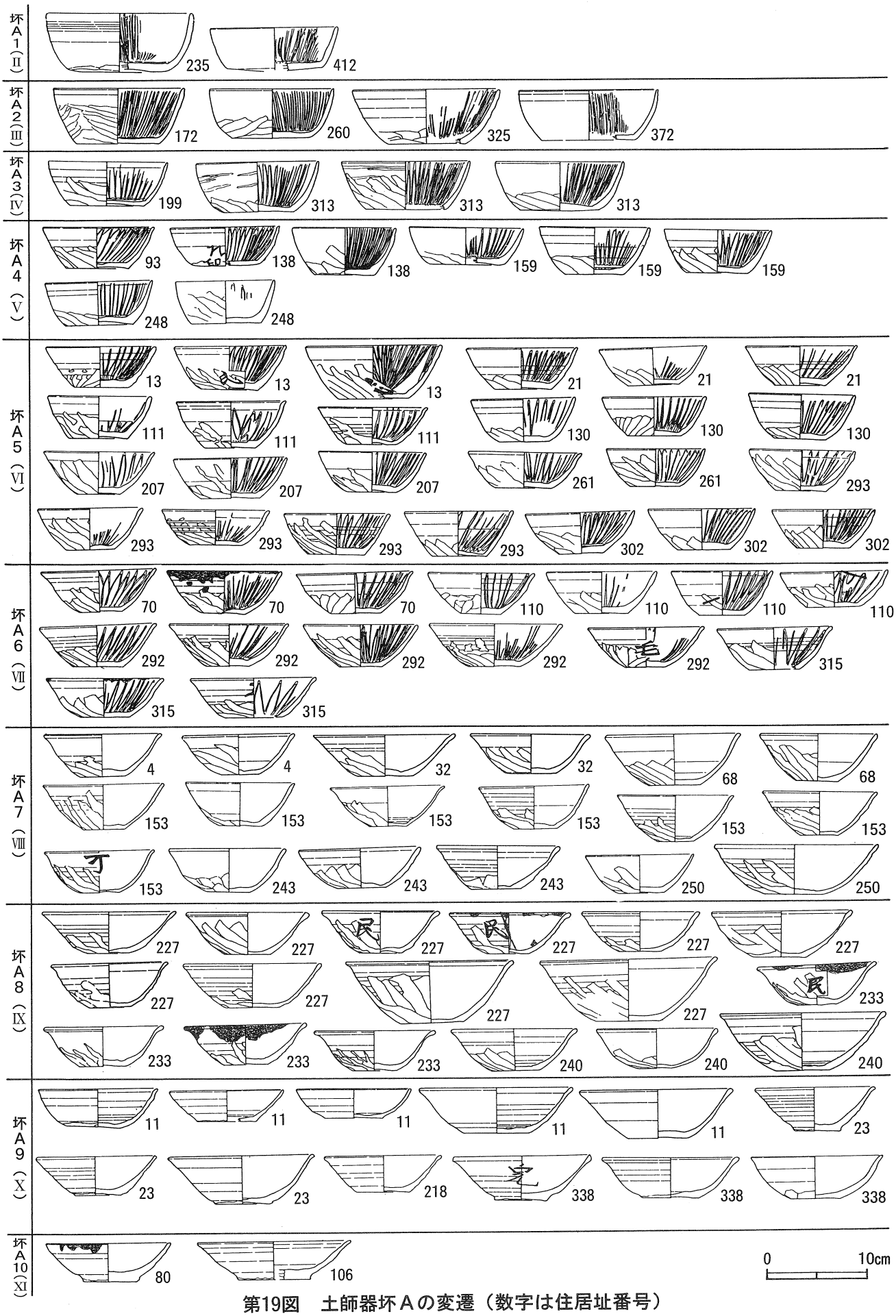
233号住：７点図示。口径12～17.2cmで、12cm台は６例、17cm台は１例。底径は4.2～7.4cm。高さは3.8～6.2cmで口径12cm台は3.8～4.2cm、17cm台は6.2cmである。口径12cm台のものは全体に口縁部の反りが大きい。

240号住：８点図示。口径11.6～16.4cmで、11～12cm台は６例、14cm台、16cm台は各１例。底径は3.2～5.6cmで、口径11～12cm台の底部は3.2～５cm、口径14cm台は6.2cm、16cm台は5.6cmである。高さは3.7～5.4cmで口径11～14cm台高さは４cm台が多く、口径16cm台は5.8cmである。

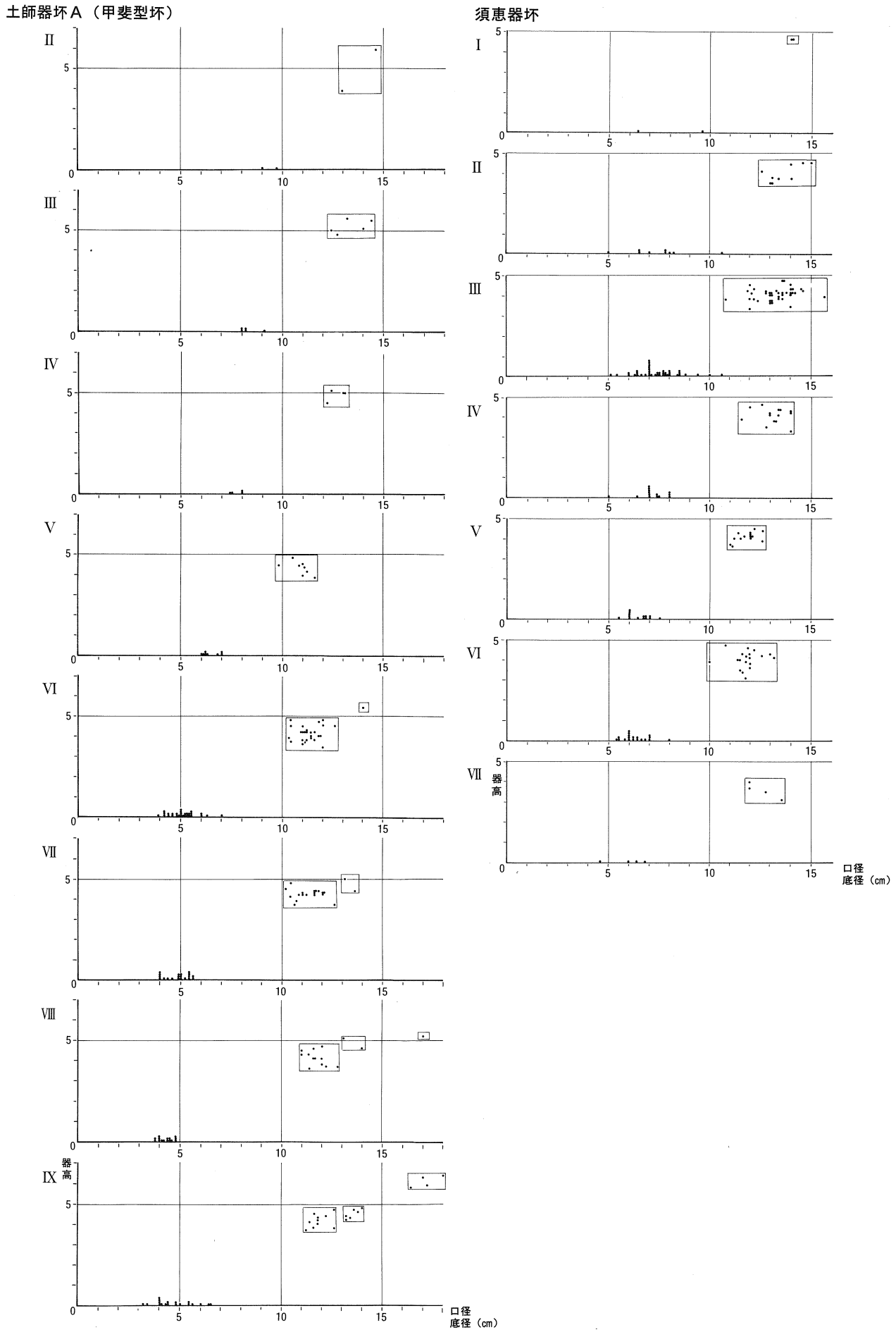
［土師器坏Ａ　９段階］

原則的には体部・底部の手持ちヘラ削り調整がなくなり、未調整となる。口縁部は隆玉縁のものが減り、玉縁的なものが多い。この段階以降を甲斐型坏と区別するのが通常である。しかし手持ちヘラ削り以外の技法は甲斐型坏と同様で、技術的な系譜を甲斐型坏に求めることができる。

11号住：器壁、底部は前段階同様に薄い。図示したのは７点で、この中に底部と底部外周～体部下部を手持ちヘラ削りするものが２点ある。それらの手持ちヘラ削りは横方向で、体部にはほとんど及ばず、８・９段階の中間的な資料であるが、確実に体・底部の未調整化へ向かいつつあるのでこの段階に含めておく。ほかに第８段階の坏を１点含んでいる。口径11.6～15.8cmで11～12cm台が４例、13～15cm台は３例。８段階の坏も15cm台である。底径は６～7.6cmで、前段階までと比べ、手持ちヘラ削りを行わない分だけ径が大きくなったとも思われる。高さ



第19図　土師器坏Ａの変遷（数字は住居址番号）



第20図　土師器坏Ａ（甲斐型坏）と須恵器坏の法量変遷（器高／口径及び底径分布）

は３～５cmで、３cm代が４例と器高の低いものが多い。

23号住：９点の坏が図示してあるが、うち６点は８段階の資料である。本段階の坏は３点で、口径11.5～14.4cm。11cm台２例、14cm台１例であり、器種分化が認められる。底径は4.5～5.7cm。高さは４～５cm。口縁部に前段階の隆玉縁の名残がある。ほかの８段階の坏はすべて口径が13～14cmである。

218号住：２点（１・２）図示している。１は口径12cm、底径5.5cm、高さ3.7cm。２は口径18cmの第８段階の坏である。

338号住：３点（１・２・３）図示。口径13～14cm、底径５～６cm、高さ4.1～4.5cmで、全体に大きい。１は体部下部・底部を手持ちヘラ削りする。３は底部が厚く台状を呈しつつあり、次の段階への過渡的な様相がある。おそらく技法的にはロクロ水挽きによる成形であろう。

［土師器坏Ａ　10段階］

器高が低い皿状となる。底部、器壁は厚く、ロクロ水挽きによって粘土塊から連続的に作り上げており、器壁は底部から口縁部へかけて徐々に厚みを減じている。この段階になると資料点数が少なくなり、法量分化ははっきりしない。

80号住：２は口径12.6cm、底径5.2cm、高さ3.9cm。底部は回転糸切り後、ナデを行う。３は口径13.5cm、底径5.8cm、高さ4.6cm。底部は回転糸切り未調整である。

106号住：２は口径15.6cm、底径7.2cm、高さ3.9cm。底部はナデを行う。

②土師器坏Ｂの変遷

甲斐型坏出現以前に位置付けられる、いわゆる盤状の坏を主とする土師器については、まず1983年に坂本美夫氏らによる奈良時代の土器編年で4細分の試案が提示された（坂本ほか　1983）。それは次のようなものであった。

Ⅰ期：体部下半に稜の痕跡があり、以下を手持ちヘラ削りする。共伴する須恵器坏は底部全面を回転ヘラ削りする。８世紀第１四半期。

Ⅱ期：底部端に丸味を持つ大きな平底を呈する盤状のもの。体部下半から底部にかけて小刻みなヘラ削り。ヘラミガキや暗文をもつものも少数あり。内外面に入念なヘラミガキのなされた器高の深い坏あり。８世紀第２四半期。

Ⅲ期：盤状で、底部端が角ばって口縁部へ至る。底部は静止又は回転糸切り後、周辺、あるいは全面ヘラ削りする。ヘラミガキ、暗文もあり。８世紀第３四半期。

Ⅳ期：径が縮小し、身は深くなる。内面に横位のヘラミガキ。須恵器坏は回転糸切り後周辺をヘラ削りする。８世紀第４四半期。

その後山下孝司氏が底部調整に着目して坂本編年の検討を行っている（山下　1989）。これらの研究は底部調整（整形）の観察にもとずくものであるが、年代観を含め再考の余地があると思われる。ここでは坏内外面の暗文状ヘラミガキ調整が甲斐型坏出現に結び付く技術であろうと考え、暗文状ヘラミガキの有無で坏Ｂを検討し、２段階細分を行った。宮ノ前遺跡には坏Ｂの資料は多いとは言えず、やや大雑把な細分である点は否めない。

［土師器坏Ｂ　１段階］

底部は主に回転ヘラ切りによる切り離し後、手持ちヘラ削り、回転ヘラ削りを行う。体部は直線的に大きく傾き、口縁部は広がる。体部外面はナデ調整によって平滑で、ロクロナデ痕はない。内外面に横ミガキ調整を行うものがある。口唇部は尖る。

170号住：盤状の坏は6点図示している（１～５・７）。１は口径11cm、底径6.9cm、高さ3.5cm。底部は手持ちヘラ削り？後、ナデ。体部外面～底部周縁にかけてはナデを行い、角部は丸い。内面は横ミガキ。２は口径13cm、底径9.4cm、高さ2.7cm。底部は回転ヘラ削り。体部内外面にミガキ調整はない。３は口径17.8cm、底径８cm、高さ3.5cm。体部下半に稜があり、底部と底部周辺は手持ちヘラ削りが行われる。４は口径19cm、底径10.9cm、高さ4.8cm。底部は回転ヘラ切り後に手持ちヘラ削りを行っているようだ。また底部周縁の角部は少しだけヘラ削りされる。内面は丹念な横ミガキ。外面にも横ミガキがある。５は底径9cm。内外面にミガキはない。７は底径9.6cm。

回転ヘラ削りが認められる。

［土師器坏Ｂ　２段階］

１段階と器形は同様であるが、底部は静止糸切り後、手持ちヘラ削りが多く、内外面・見込み部に暗文状のヘラミガキを施す。そのほかに、口径が大きく底部の厚い、重量感のある坏があり、器形的・技法的に坏Ａ第１段階との共通点が多い。

126号住：１は口径17.7cm、底径9.8cm、高さ5.3cm。底部から周辺部にかけて手持ちヘラ削りを行い、角部は丸味をもつ。体部外面はナデの後、縦方向の暗文。内面には不鮮明な暗文状の横ヘラミガキ、見込み部には暗文状の放射状ヘラミガキがある。

141号住：７点図示。口径13.8～15cm、底径は7.6～10cm、高さは2.9～3.5cmで同じような器形を示している。底部から体部にかけて丸く、内外面に横方向の暗文を施し、見込み部に放射状のヘラミガキを施す例が多い。１は口径14cm、底径7.6cm、高さ3.3cmで、底部は静止糸切り後、周辺～体部下半を手持ちヘラ削りする。内外面かすかな横ヘラミガキ、見込み部は放射状ヘラミガキ。２は口径13.8cm、底径9.6cm、高さ3.2cm。底部は静止糸切り後、周辺～体部下半をヘラ削りする。内外面・見込み部にかすかなヘラミガキがある。３は口径14.6cm、底径10.6cm、高さ3.2cm．体部内面・見込み部に暗文状ヘラミガキがあるが、外面にはない。底部は手持ちヘラ削り。４は口径14.9cm、底径11cm、高さ3.5cm。内外面・見込み部にかすかなヘラミガキ。底部は手持ちヘラ削り。５は口径15cm、底径10cm、高さ2.9cm。底部は手持ちヘラ削り。内外面・見込み部に暗文状ヘラミガキがある。７は底径10.2cmで、底部は手持ちヘラ削りで、内外面ともにミガキはない。

235号住：１・２は坏Ｂ、３は坏Ａ１段階である。１は口径11.8cm、底径7.4cm、高さ2.8cm。底部は手持ちヘラ削り。２は口径14cm、底径10.2cm、高さ４cm。底部は手持ちヘラ削り。３は口径14.6cm、底径9.7cm、高さ5.9cm。底部は静止糸切り後、周縁部を手持ちヘラ削り。内面には細密暗文。

252号住：１は口径14.9cm、底径7.5cm、高さ５cm。底部から周辺部にかけてヘラ削りおよびナデを行い、丸く滑らかである。体部外面はナデの後、縦方向の暗文。内面には放射状暗文。見込み部は不明である。底部は厚い。

328号住：１は口径11.9cm、底径７cm、高さ3.5cm。内面放射状暗文、外面横方向の暗文。

358号住：４点図示。１は口径13.2cm、底径8.8cm、高さ3.1cm。静止糸切り後、手持ちヘラ削り。２は口径17.4cm、底径10cm、高さ4.8cm。内外面に不鮮明な横ヘラミガキ、見込み部に放射状ヘラミガキ。底部～周辺部を手持ちヘラ削りする。３は底径10cm。底部・体部外面にナデ。見込み部は放射状ヘラミガキ。４は底径８cm。底部は手持ちヘラ削り。内外面にヘラミガキはない。

387号住：１は口径16.1cm、底径10.7cm、高さ5.1cm。底部から周辺部にかけて手持ちヘラ削り・ナデを行い、角部には丸味をもつ。体部外面はナデの後、縦方向の暗文。内面にはかすかな横ヘラミガキ、見込み部には暗文状の放射状ヘラミガキを施す。底部は厚く重量感がある。

③宮ノ前遺跡の時期設定

土師器坏Ａ・Ｂの段階を基軸に、宮ノ前遺跡の時期設定を行なうが、土師器坏Ａの10段階の変遷で甲斐型坏出現以降の段階を設定しているので、ここでは坏Ｂと坏Ａの変遷がどのようにつながるか検討する必要がある。

坏Ｂ２段階では、坏Ａ１段階の大型の坏が387号住で伴出している。また坏Ｂ２段階では、坏の内外面や見込み部にナデ調整の後、暗文または暗文状ヘラミガキがなされるものがあるが、技術的には坏Ａ１段階に結びつく。また器形や、底部・器壁の厚さもよく似ている。したがって坏Ｂ２段階と坏Ａ１段階がほぼ同一段階にあると考えたい。以上により坏Ａ・Ｂの変遷を11段階で捉えることができ、他の器種構成をふくめた宮ノ前遺跡の土器群全体の変遷を11期で考えていく。時期設定は次のとうりである。

宮ノ前Ⅰ期……土師器坏Ｂ１段階

宮ノ前Ⅱ期……土師器坏Ｂ２段階・土師器坏Ａ１段階

宮ノ前Ⅲ期……土師器坏Ａ２段階

宮ノ前Ⅳ期……土師器坏Ａ３段階

宮ノ前Ⅴ期……土師器坏Ａ４段階
宮ノ前Ⅵ期……土師器坏Ａ５段階
宮ノ前Ⅶ期……土師器坏Ａ６段階
宮ノ前Ⅷ期……土師器坏Ａ７段階
宮ノ前Ⅸ期……土師器坏Ａ８段階
宮ノ前Ⅹ期……土師器坏Ａ９段階
宮ノ前Ⅺ期……土師器坏Ａ10段階

⑶　各器種の変遷（第23図）

土師器

［**坏Ｃ**］

器形にも変化があるようだが、出土例が少ないので住居址出土例を掲げるに止める。

Ⅰ～Ⅱ期：51号住では外面ナデ、内面横ハケメ調整した坏が１点ある（１）。同じ住居址出土の甕Ｂと内外面ともに同一の調整技法である。１号溝状遺構でも、時期は不明であるが内面にハケメ調整した坏がある（２）。

Ⅱ期：242号住では、非ロクロ調整の坏があり（１）、体部外面に縦ジワが入る。底部は手持ちヘラ削りであり、内面にハケメはない。Ⅲ期以降では未確認である。

［**坏Ｄ**］

Ⅰ期：157号住１は口径10.2cm、底径7.4cm、高さ2.8cmで皿状（坏Ｄ１）。底部は静止糸切りで外面の調整はない。灯明具。340号住１は口径9.6cm、底径６cm、高さ４cmで坏状（坏Ｄ２）。外面調整はない。段階は不明であるが２号溝状遺構１もＤ２で340号住１に類似し、灯明具としての使用痕がある。

Ⅱ期：412号住４は口縁部が曲線を描いて開く皿状である（坏Ｄ３）。

Ⅲ期：211号住２は底部糸切り未調整。口径9.8cm、底径5.1cm、高さ３cmでＤ１。灯明具。325号住２は口径11cm、底径6.6cm、高さ2.6cmでＤ１。底部は静止糸切り、外周回転ヘラ削り。体部調整なし。灯明具。

Ⅵ期：114号住４がある。412号住４に類似した灯明具。

Ⅶ期以降では未確認であるが、通常の坏や皿の灯明具への転用が一般化し、坏Ｄは消滅したのであろう。甲府市桜井畑遺跡Ａ区では１号掘立柱建物址でこの種の土師器が多数出土した（中山　1990）。報告書では「小型坏Ａ・Ｂ」に分類し、Ａ６点、Ｂ３点はいずれも灯明具として使用されている。宮ノ前Ⅴ期に併行する。

［**高台坏**］

高台坏については保坂康夫氏が内湾型、外傾型、扁平型の３種類に分類し、８世紀前半代、盤状坏と出現を同じくすること、内湾型から外傾型への変遷などを整理した（保坂　1992）。また高台の特徴としての「削り調整高台」を指摘している。

Ⅰ期：不明。

Ⅱ期：235号住に器高の低い高台坏がある（４）。口径13.2cm、底径8.6cm、高さ3.8cm。付け高台で内面見込み部に放射状暗文がある。１号溝状遺構78は保坂氏のいう内湾型で外面縦方向の暗文、内面横方向の暗文、見込み部は放射状暗文。体・底部回転ヘラ削り後、削り出し高台。口径15.1cm、底径9.7cm、高さ6.6cm。335号住３もⅡ期であろう。口径16.4cm、底径8.6cm、高さ7.2cm。削り出し高台。内面横・見込み部放射状ミガキ。

Ⅲ期：260号住に甲斐型黒色土器の高台坏がある。

Ⅳ期：313号住に甲斐型黒色土器の高台坏がある。100号住１も小型ではあるがこの時期であろう。口径10.8cm、底径6.5cm、高さ4.9cm。164号住６は混入資料であるが、外面に横ミガキを加えているので、この時期であろう。口径15.8cm、底径８cm、高さ6.6cm。

Ⅴ期：248号住３がある。

Ⅵ期：６号住２がある。口径15.3cm、底径8.5cm、高さ5.9cm。体部回転ヘラ削り、削り出し高台。111号住８は

口径15.4cm、底径8.7cm、高さ6.5cm。体部回転ヘラ削り、削り出し高台。216号住も外傾型で、口径16cm、底径6.8cm、高さ5.6cm。体部回転ヘラ削り、削り出し高台。379号住３は口径14.2cm、底径8.2cm、高さ7.8cm。内面に暗文がない。ほかに293号住にもある(29)。216・293号住例の高台部は、体部下の角部を斜めに回転ヘラ削りして作り出している。

Ⅶ期：113号住３。外傾型で、口径16.6cm、底径7.4cm、高さ5.5cm。体部回転ヘラ削り、削り出し高台。180号住２は小型で、外面に横ナデがある。口径10.4cm、底径5.2cm、高さ4.5cm。ほかに292号住７、315号住８がある。

［高脚高台坏］

Ⅸ期に82号住１などが出現する。

［高坏］

100号住５は円筒状の脚部片（Ⅳ期）、245号住３は縦に面取りをした脚部片である。

［椀］

９号住３は大型の甲斐型坏に高台をつけたかたちで、灰釉陶器の模倣であろう。口径17cm、底径7.4cm、高さ6.6cm。Ⅸ期。

［皿］

Ⅵ期：13号住８、39号住６、54号住４、102号住２、107号住３、114号住５、130号住６、207号住５、219号住５、288号住10～13、293号住30～35、296号住６・７、302号住５・６、309号住５、330号住５・６、379号住４などがある。口径は12.6～18cmで14～16cm台が多い。底径は5～10.2cmで６～７cm台が多い。高さは2.1～3.2cmで２cm台後半が多い。底部を回転糸切り後、底部～体部を回転ヘラ削りする。ただし219号住５は回転ヘラ削りをしていない。器形は体部から口縁部が屈折して開き、外面に稜をもつ。灰釉陶器の稜皿に似た器形である。内面および見込み部には渦巻き状暗文、らせん状暗文、放射状暗文を施すものがあり、無暗文もある。その数は、ここにあげた住居址の集計では、渦巻き－４、らせん－１、放射－６、無暗文－12で、暗文のある皿とない皿はほぼ同数である。

Ⅶ期：16号住２、25号住７、27号住６、28号住４、46号住１、113号住４～６、116号住３、124号住２、139号住９～12、155号住７～９、185号住１、187号住２、191号住７～９、196号住２、223号住８～10、238号住７～11、292号住８・９、315号住９～13などがある。口径・底径とも前段階よりも小さくなり、口径は10.7～14.4cmで12～13cm台がほとんどである。底径は3.1～6.6cmで４～５cm台が多い。高さは前期とほぼ同じで、2.1～3.4cmで２cm台後半が多い。体底部の調整はほとんどは回転ヘラ削りであるが、38点中４点が手持ちヘラ削りであった。器形は体部から口縁部への屈曲が弱くなり、緩やかに連続的になる。外面の稜も弱い。暗文は、渦巻き－18、放射－１、無暗文－19で、暗文がある比率は５割、そのほとんどが渦巻きである。瀬田正明氏は、皿の暗文のあり方を山梨県内でみたところ、甲斐Ⅸ期（宮ノ前Ⅶ期）以降、渦巻き暗文は全県下にみられるが、放射状暗文はほぼ峡東地方に限られることを明らかにした（瀬田　1992）。宮ノ前遺跡でもそのとうりであった。

Ⅷ期：４号住６、31号住１～４、68号住７、115号住３・４、144号住５、152号住４・５、153号住17～22、162号住７、181号住４・７～９、194号住４、226号住５、270号住３・４、286号住７～11、290号住５・６、291号住11～14、304号住７～９、314号住４～８、316号住４～６、324号住４、343号住12～15、348号住５～７、367号住２、400号住３などがある。口径は10～15cmで12cm台が74%となり、口径の縮小化が一段と進む。底径と高さは前期とほぼ同じで、底径は2.7～9.7cmで４～５cm台が多く、高さは1.9～３cmで２cm台後半が多い。体・底部調整は回転ヘラ削り14に対し、手持ちヘラ削りは44で、76%が手持ちヘラ削りとなる。回転ヘラ削りのものに暗文をもつものがあり、渦巻き－４、らせん－１があるが、坏Ａと同様に暗文の消失化は著しい。器形は、内面がわずかに屈曲して立ち上がるものと底部から連続的に立ち上がるものがあり、外面の稜線は不明確になる。口縁部は玉縁となる。

Ⅸ期：10号住８～12、17号住３、18号住７～９、19号住６～８、24号住３、35号住７～９、38号住６・７、45号住４～６、58号住３・４、62号住３、69号住４～６、74号住３～５、83号住２～５、84号住10、105号住６、120

号住１・２、133号住２・３、161号住２、163号住７・８、169号住６・７、177号住８～11、227号住22～24、228号住３・４、233号住８～10、240号住９～13、264号住６～８、275号住６～８、287号住３・４、301号住１・５、323号住２・４、364号住５～８、365号住２、402号住３、403号住２などがある。口径は6～16.5cmで12・13cm台が９割近くをしめる。前段階よりも若干口径が大きくなっているが、これは口縁部の隆玉縁化の影響であろう。底径は2.6～９cmで３～４cm台が多く全体の85%であり、前期より小型化する。高さは２～3.7cmで２cm台後半が多い。暗文は完全に消失し、内面はなめらかに立ち上がり、体部が屈曲するものはない。口縁部は坏Ａと同じく隆玉縁化する。体部下半は手持ちヘラ削りを基本とする。底部はほとんどが回転糸切り後、手持ちヘラ削りであるが、80例中10ほど糸切りのままの未調整があった（24号住３、38号住６、45号住４、74号住５、83号住２、177号住８、233号住８～10）。次の時期以降の手持ちヘラ削りの省略化が始まっている。

Ｘ期：この時期になると、坏と皿の区別が困難になる。11号住５・10・11、218号住３～５、338号住４・５がある。口径は11～13.3cm、底径は3.4～６cm、高さは1.8～2.7cm。口径はほとんど前段階と変わらない。口縁部は隆起玉縁～玉縁を呈す。体部下半の手持ちヘラ削りはまだ半数程度に残っているが、共伴する坏Ａをみると完全になくなっている。また手持ちヘラ削りが残っている例でも、218号住５のように削りの長さが短くなっている。体底部未調整のものは底径が大きい傾向があり、11号住10は底径5.8cm、218号住３・４はともに６cmである。

Ⅸ期：口径が小さくなり、前期までの器形とは断絶がある。80号住１は口径10cm、底径5.2cm、高さ2.2cm。胎土には雲母などが入り、甲斐型坏とは異質になっている。385号住１は口径9.2cm、底径４cm、高さ2.7cm。両者とも回転糸切り未調整である。体部にくらべ底部が厚くなり、成形技法の変化が予想される。

［**耳皿**］

133号住４は底部回転糸切り未調整。口径9.5cm、底径５cm、高さ1.4～2.4cm。形態は灰釉耳皿の模倣であろう。Ⅸ期。

［**高脚高台皿**］

80号住６・７などⅨ期に出現する。

［**蓋Ａ**］

Ⅴ・Ⅵ期に存在し、しかも出土量は少ない。山梨県内の分析では、甲斐Ⅶ期（宮ノ前Ⅴ期）に数は少ないが出現し、Ⅷ・Ⅸ期（宮ノ前Ⅵ・Ⅶ期）に盛行するようである（猪股　1992）。

Ⅴ期：212号住７は上半部回転ヘラ削りで、外面にミガキ様の渦巻き状暗文がある。口径17cm。端部は短い立ち下がりがある。

Ⅵ期：13号住10、54号住５・６、107号住４、219号住６、293号住39、296号住８・９がある。口径15.2～18cmで高さは3.8～4.4cm。上半部は回転ヘラ削りが行われ、内面に渦巻き状暗文をもつものがある（54号住５、107号住４、293号住39）。端部はいずれも短い立ち下がりがある。つまみは擬宝珠状（54号住６）、扁平な擬宝珠（293号住39）、中央突起（293号住６）がある。

［**蓋Ｂ**］

５号住１のみである。口径23.2cm、つまみ径9.6cm、高さ4.4cm。つまみ部は削り出しによる。端部は短い立ち下がりがある。本例は時期不明であるが、甲府市桜井畑遺跡では甲斐Ⅸ期（宮ノ前Ⅷ期）に類例が存在する（坂本ほか　1989）。

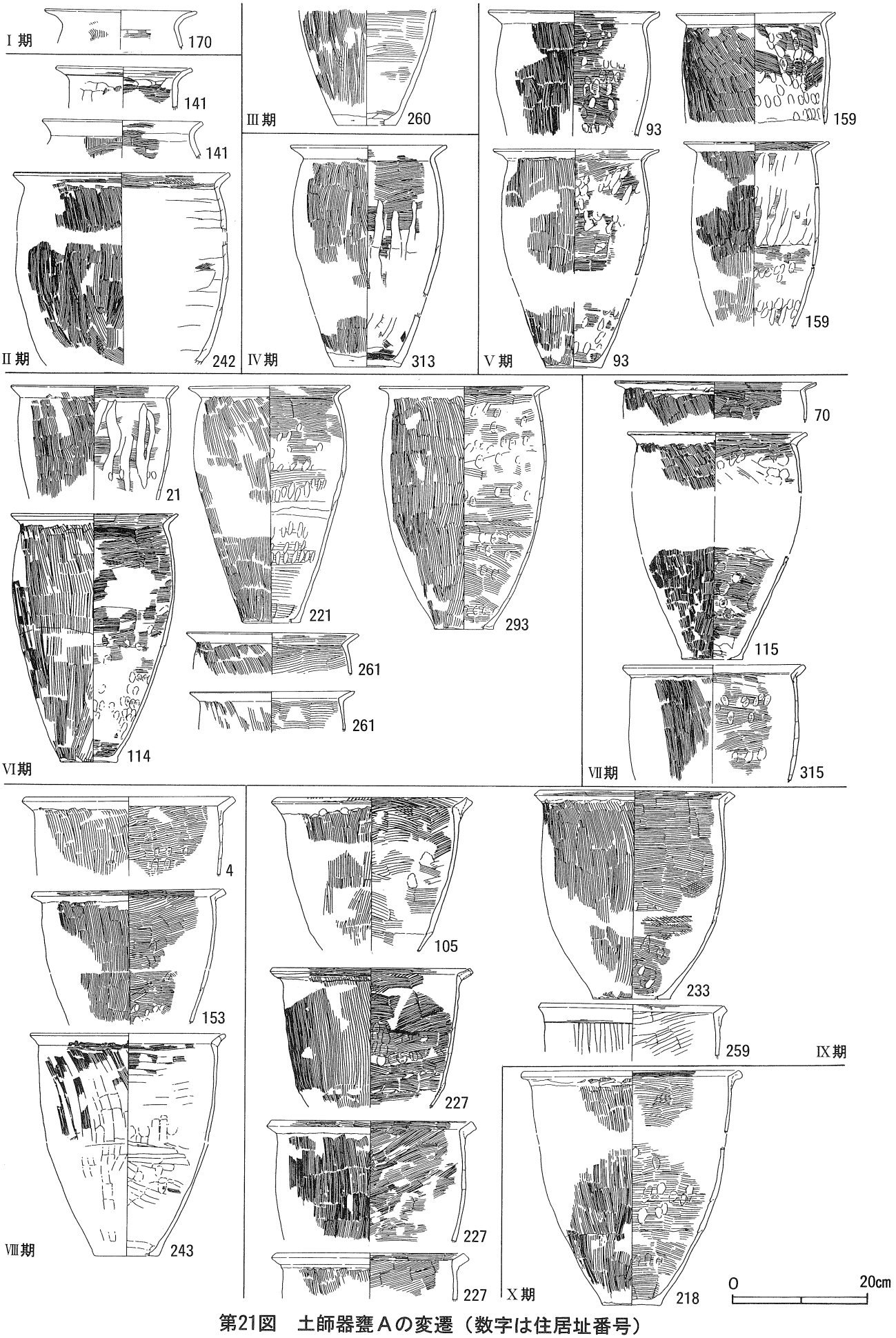
［**甕Ａ**］

Ⅰ期：141号住８は器壁は厚く、口縁は長い。

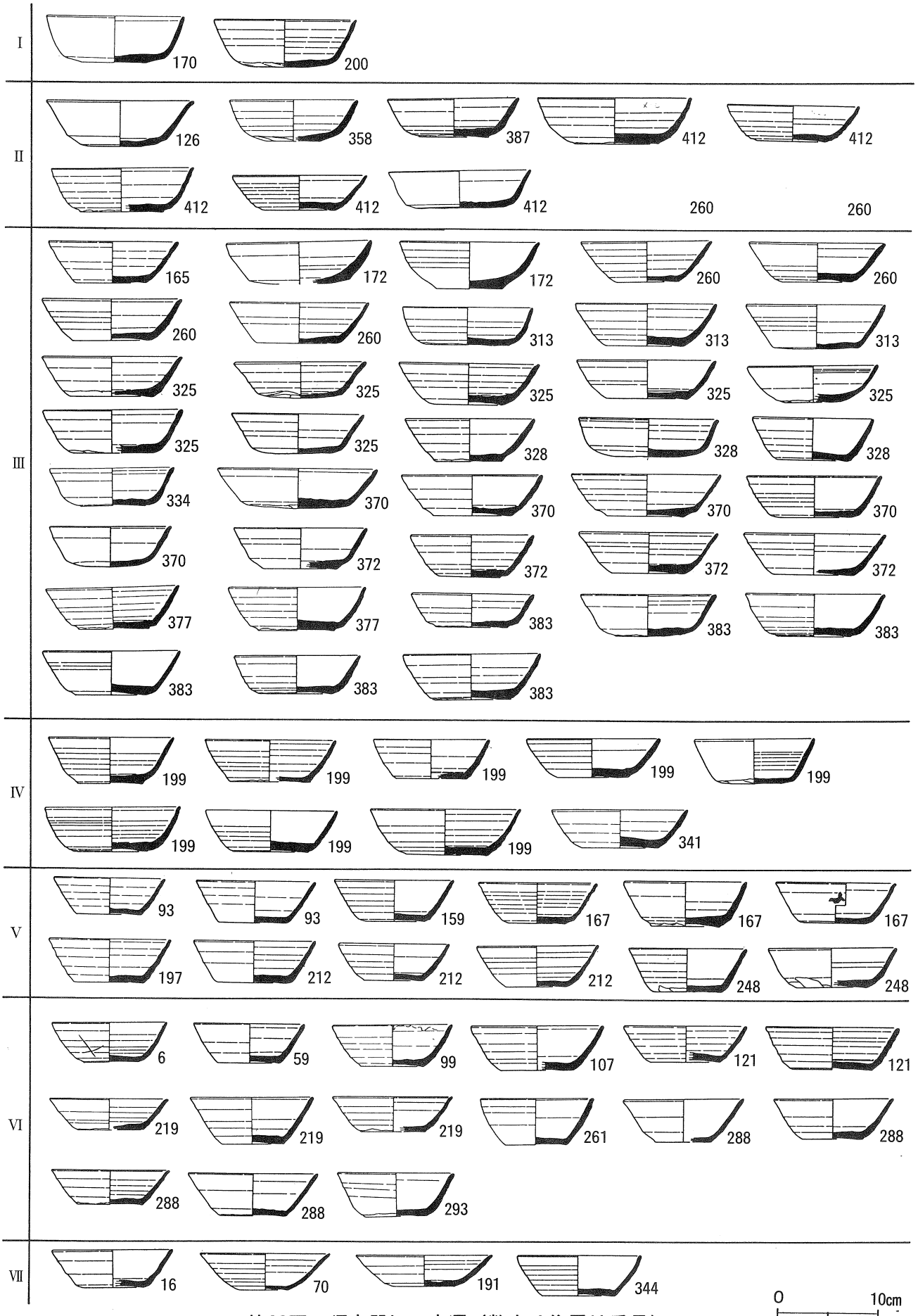
Ⅱ期：242号住８は器壁～口縁部まで厚めに作られている。外面、内面口縁部ハケメ。

Ⅲ期：甕Ａはほとんどない。260号住11は内面横ハケ、外面縦ハケをもち、体部下部を横ヘラ削りする。器壁は厚い。209号住３はロクロ成形の甕ＣⅣであるが、外面縦ハケ、内面縦ハケ、一部横ハケで、甲斐型甕の調整技法を示している。

Ⅳ期：資料が増加し、313号住15を典型とする。Ⅲ期とほとんど同じであるが、器壁が厚く、口縁はやや長い。底部はヘラ削り。体部下部は横ヘラ削り。内面は横ハケの後、縦方向のナデ。口縁部の内面屈折部は丸い。



第21図　土師器甕Ａの変遷（数字は住居址番号）



第22図　須恵器坏の変遷（数字は住居址番号）

Ⅴ期：93号住６・７では器壁が薄くなりつつあり、内面の指頭痕が顕著となる。甲斐型甕のかたちが出来上がる。口縁部の屈曲部は前期同様に丸く、薄口縁である。体部下部の横ヘラ削りはない。159号住11では内面に縦ナデが行なわれている。

Ⅵ期：21号住12は内面に縦ナデをもつ。薄口縁で短くなる。261号住では口縁部が「く」の字状に屈曲する。293号住51では胴部中央やや上に胴部最大径をもち、胴が緩やかにはらんだ器形である。

Ⅶ期：Ⅵ期とほぼ同じである場合（70号住など）と、やや厚い場合（315号住など）がある。後者では口縁部の長さも短くなっている。内面の縦ナデはない。

Ⅷ期：厚口縁となり、口唇部に面を取り、横ハケメ調整する。厚口縁は、口縁部下面に口縁部と同じくらいの厚みをもつ粘土紐を貼りつけ、器壁の倍程度の厚さとしている。４・153・243号住に好例がある。

Ⅸ期：口縁部をさらに厚くし、口縁部から体部へと緩やかなカーブを描いて推移する、末広口縁となる。口唇部の面は幅が広くなり、器壁の３倍程度を示すこともある。体部下半に接合帯があり、器体の傾きが変化している。また体部上半は前段階までは内湾ぎみであったが、湾曲が弱まって直線的になり、直立ないしやや開く器形である。器高は全形を知る資料はないが、短くなっているようだ。227・233号住に好例がある。259号住では口縁部と体部がほとんど一体となり、ハケメも幅広になっている。

Ⅹ期：218号住では極端な末広口縁の例がある。内外面の調整技法は前期までと変化なし。

Ⅺ期：106号住に甕底部があるが、外面は無文のようである。内面は横ハケメ。

［**甕Ｂ**］

Ⅰ期：51号住２は体部は内湾し、口縁部は緩やかに開く（甕Ｂ１）。３は体部が直線的に開きながら口縁部が外反する甕（甕Ｂ2）がある。両者とも外面縦ナデ、内面横ナデ状のハケ調整を行っている。

Ⅱ期：141号住に甕Ｂ１がある。器形的にはⅠ期と変わらない。235号住の11は底部片である。241号住にも甕Ｂ１がある。

［**甕ＣⅠ**］

Ⅱ期に出現し、Ⅵ期まで存続する。

Ⅱ期：276号住にある。276号住では甕ＣⅢも存在する。

Ⅲ期：377号住にある。口唇部は面取りをする。378号住・383号住にもある。

Ⅳ期：150号住７は口唇部に面取りがある。同一住居内から甕Ａ・甕ＣⅡも出ている。313号住14は、体部下をヘラ削りする。

Ⅴ期：159号住８は口唇部に面取りがあり、９にはない。208号住でも面取りタイプがある。248号住13は面取りタイプで、口径24cm、底径８cm、高さ34cm。

Ⅵ期：59号住、137号住、288号住などがある。口縁部は薄く、口唇部が丸い。

［**甕ＣⅡ**］

Ⅲ期：41号住４は胴部下半の接合帯部分を斜めに、疎らに叩いている。口径21cm、底径7.7cm、高さ34cm。底部は回転糸切り。172号住は角口縁で、胴中～上半に疎らな叩き。179号住５は胴下半と上半の２ヶ所の大きな接合帯付近を中心にかすかな叩きがある。口径23.8cm、底径8.9cm、高さ33.1cm。底部は回転糸切り。244号住11は角口縁で、胴上半～口縁部にかけて叩きをもつ。282号住にもある。

Ⅳ期：150号住では２点ある。8は口唇部が丸く、胴部上半に疎らに叩き。口縁部は薄く長く、くの字外反する。９は角口縁で、胴下半と上半に疎らに叩き。接合帯付近には叩きがないようだ。66号住にもある。

Ⅶ期：210号６は胴上部に叩きをもち、口縁部は短い。344号住にもある。

［**甕ＣⅢ**］

65号住４、203号住３、276号住14などがあり、276号住14はⅡ期である。ナデは体部外面のみに行われ、内面はロクロ目上に指頭痕を残す。

［甕CⅣ］

42号住３は口縁部まで叩き後、外面胴部を縦ナデ、内面口縁部下を横ハケメ、以下を縦ハケメ調整する。口径24.8cm、底径9.5cm、高さ36.5cm。170号住11は、体部内外面カキメ。口縁部は緩やかに外反。Ⅰ～Ⅱ期。209号住３は、体部外面縦ハケメ、内面縦ハケメ後に口縁部下を横ハケメ。295号住は内外面縦ハケメ。Ⅱ期。285号住４は体部外面縦ハケメ後、縦ヘラ削り、内面縦ハケメ後、横ハケメ。311号住４は外面縦ハケメ後、上半部を横ハケメ、内面横ハケメ。361号住５は外面縦ハケメ、内面口縁部以下を横ハケメ。Ⅱ～Ⅲ期。

［甕CⅤ］

114号住11は体部外面にカキメをもつ。口縁部は薄く、緩やかに外反する。Ⅵ期。141号住11は体部外面、口縁部内面をカキメ、体部内面を横ナデ。角口縁。Ⅱ期。207号住9は外面カキメ。Ⅵ期。242号住３は角口縁の甕で、外面・内面口縁部付近カキメ後、中央付近を叩き。口径23.2cm、底径７cm、高さ33cm。底部はナデ。Ⅱ期。349号住４は外面カキメ後、叩き。Ⅱ期。395号住５は外面上半にカキメ。

［甕D］

235号住９は器壁が非常に薄く、口縁部が緩やかに外反する。内面はナデ。Ⅱ期。288号住27は体部外面斜めヘラ削り、内面横ナデ。Ⅵ期。358号住６はⅡ期。

［小型甕A］

Ⅲ期：370号住８は口径14.1cm、底径９cm、高さ13.4cmで、外面および口縁部内面にかすかなハケメのあるナデ調整が行われる。Ⅰ～Ⅱ期と思われる396号住６も器形・調整が類似する。口径11.4cm、底径8.2cm、高さ14.7cm。底径は大きく、筒状である。

Ⅵ期：148号住９は口径13.1cm、底径7.3cm、高さ9.8cm。10は口径17cm。293号住50は口径13cm。379号住６は口径9.8cmと小さい。すべて内外面ハケメ調整。頸部のくびれがやや強い。この時期以降、小型甕Aは大・中・小の３種に分化するらしく、そうした傾向はⅨ期に至りはっきりとする。

Ⅶ期：70号住14は口径13cm、底径6.4cm、高さ10.1cm。口縁部が短く、底部が小さくなる。頸部のくびれは弱くなる。

Ⅷ期：176号住９は口径12cm。10は口径17cm。286号住23は口径17.8cm、底径7.4cm、高さ13.9cm。口縁部は厚みを増し、端部に面をもつ。

Ⅸ期：10号住17・18、24号住６、28号住６、35号住13、45号住11、74号住10、86号住３、227号住35・36、274号住７、310号住11、357号住10などがある。口径11～17.4cm、底径５～9.2cm、高さ13.5～16.4cmであり、口径11cm、高さ10cm程度のもの、口径14～16cm、高さ13～14cm程度のもの、口径17cm、高さ15～16cm程度のものの３種があるようだ。内面をナデ調整とするものが３例あり（10号住17・18、310号住11）、また内面上半をナデとするものもある（28号住６）。口縁部は厚く、短い。

［小型甕B］

29号住３は体部が丸く、内湾して口縁部が外反する。214号住６は椀状。Ⅰ～Ⅱ期か。ほかに159号住10（Ⅴ期）がある。底部には木葉痕。

［小型甕C］

Ⅱ期：200号住５・６は体部が丸く、頸部のくびれが強い。口縁部は丸く外反する。

Ⅲ期：172号住８・９、383号住10がある。頸部のくびれはやや弱まる。

Ⅳ期：66号住５・６、138号住20、313号住12などがある。口径11.4～18cm、底径７～10cm、高さ10.3～17cm程度。口径11～14cm、高さ10～12cmほどのものと、口径18cm、高さ17cmの２種に分けられる。口縁部は短い。底部は回転糸切り未調整。

Ⅴ期：167号住８は口径12.8cm。

Ⅵ期：293号住49は口径11cm、底径５cm、高さ9.5cm。420号住５は口径13.1cm、底径7.2cm、高さ11.7cm。

Ⅶ期：238号住７は口径9.2cm、底径4.7cm、高さ6.5cm。極小である。

Ⅷ期：68号住13は口径13cm。153号住33は口径9.4cm、底径4.8cm、高さ8.5cm。体部下部・底部を手持ちヘラ削りする。

Ⅸ期：18号住15は口径11cm。体部外面を手持ちヘラ削りする。227号住34は口径15.8cm、底径8.8cm、高さ18cm。外面はヘラ削り。

Ⅹ期：11号住19は口11.6cm、底径６cm、高さ9.6cm。体部下半・底部を手持ちヘラ削りする。胎土は甲斐型坏に類似する。頸部のくびれはたいへん弱い。

［小型甕Ｄ］

カキメをもつ小型甕は数少ない。

Ⅱ期：170号住10は底径６cm、底部に木葉痕あり。

Ⅶ期：25号住19は口径12cm。

Ⅷ期：31号住６は底径９cm。やや大きい。

［球胴甕Ａ］

141号住16は小さな底部、直立ぎみに開いた大きな口縁部をもち、口縁部～胴部上半外面に横ハケメ、下半に縦ナデ、縦ハケメ、内面に横ナデ、横ハケメ。口径33.5cmと大型である。Ⅱ期。170号住13は、体部外面横～縦ハケ、内面横ハケ、ナデ。Ⅰ期。ほかに374号住２がある。底部は丸底で、外面横位カキメ状。

［球胴甕Ｂ］

200号住７はＡに較べて小型・厚手で、頸部の開きが大きく、調整技法も異なる。Ⅰ期。

［羽釜Ａ］

Ⅷ～Ⅹ期に存在し、ほとんどがⅨ期のものである。鍔部は薄く長いものから、断面三角形状で厚くなっていく傾向がある。外面縦ハケ、内面横ハケを基本とするが、Ⅸ期には内面を縦ナデする例、ハケメを省略する例などがある。

Ⅷ期：324号住12は口径15cmと小さい。13は口径22cmで、甕Ａに比べると小さい。口縁部はやや内湾気味に直立し、角口縁である。鍔端部に面をもち、ハケ調整する。

Ⅸ期：17号住５、18号住16、38号住13、45号住13、84号住15、89号住６、105号住13、119号住４、160号住15・16、161号住５、247号住７、285号住８、303号住10、318号住11、365号住６などがある。口縁部は内湾するもののほかに直立、直線的に弱く外反するものが主体的である。17号住５は内面無文、38号住13は口縁部内面を横ハケ、以下を縦ナデする。また外面下部を縦ナデ後、縦ハケ。160号住16は内外面ナデ。161号住５は内面横ナデ。303号住10は内面無文、指頭痕。鍔部はやや上向きのものが多い。

Ⅹ期：338号住14・16は鍔部が少し上を向き、端部が丸い。体部への接着面が広く、断面三角形状である。

［甑］

200号住９は底部片で、内外面横ナデ。Ⅰ～Ⅱ期。293号住53も底部片。Ⅵ期。

［土師器鉢ＡⅠ］

Ⅶ～Ⅸ期に存在。口径は31～44.1cmで、30cm台後半が多い。口縁部に変化がある。

Ⅶ期：238号住16は口径44.1cm。口縁部の外反は緩い。

Ⅷ期：308号住5は口径34cm。口縁部は薄く、長い。前段階よりも反りが大きい。

Ⅸ期：35号住12は口径44cm。口縁部は厚く、端面にハケ調整が行われている。45号住９は口径39cm。口縁部外面はくびれが弱く、甕Ａでいうところの末広口縁である。内面に上半に横ナデ。58号住６は口径38.1cm。口縁部は厚い。233号住11は口径37cm。口縁部は薄い。310号住12は口径31cm。口縁部は厚い。364号住13は口径38cm。末広口縁である。体部中央に接合帯があり、大きく屈折する。

［鉢ＡⅡ］

Ⅸ期に限られるようである。36号住４は口径20cm、底径8.6cm、高さ6.9cm。内面はナデ。口縁部のくびれは弱い。Ⅸ期。227号住29は口径21.5cm、底径8.5cm、高さ7.9cm。内面はナデ。口縁部のくびれはたいへん弱い。Ⅸ期。

［鉢B］

Ⅲ～Ⅵ期に存在。数は少ない。

Ⅲ期：372号住２は口径18.2cm、底径8.4cm、高さ12.1cm。内面放射状暗文。

Ⅴ期：159号住７は口径17cm。内面放射状暗文。頸部外面に横ミガキ。体部下半を手持ちヘラ削り。

Ⅵ期：59号住８は口径20cm、底径8.7cm、高さ11cm。体部内面に放射状暗文。口縁部は緩やかに外反する。頸部外面に横ミガキ。体部下半を手持ちヘラ削り。

［鉢C］

157号住７は口径16cm、底径8.4cm、高さ９cm。内面放射状暗文。Ⅲ期以前。335号住８は口径19.2cm、底径10.8cm、高さ8.5cm。内面に暗文はない。Ⅱ期。

［鉢D］

68号住14は口径36cm。内面横ナデ、外面下半ヘラ削り。Ⅷ期。

［小型壷A］

170号住８、235号住５、ほかにA20B27グリッド27がある。

［小型壷B］

293住54のみ。

［竈形土器］

Ⅷ～Ⅹ期に存在し、Ⅸ期に最も多い。形態の変化に乏しく、差異を見いだし難い。外面縦ハケ、内面横ハケを基本とする。

Ⅷ期：346号住７のほか、270号住６の鍔部片がある。

Ⅸ期：43号住１、63号住10、255号住４、259号住７のほか10号住19、36号住10がある。このうち255号住４は鍔部下側から体部にかけて、鍔に沿ってハケメ調整している。

Ⅹ期：338号住10・11・12・13がある。

［円筒土器］

Ⅵ期を中心とするが、それ以前の資料もある。Ⅶ期以降はみられない。

Ⅲ～Ⅳ期：265号住４は内外面ロクロナデ。423号住３は外面に疎らな叩きを行い、隆帯が巡る。玉縁部（ソケット部）の段差であろう。

Ⅵ期：107号住11は玉縁部と思われる。外面は縦ヘラ削りを行う。261号住17は内外面ナデ。288号住24は玉縁部であるが、段差が小さく、浅い窪みとなっている。330号住も玉縁部である。

［手捏ね土器］

第322図に集成した。Ⅰ～Ⅸ期まで、23点があるが、１は非ロクロ調整の坏（坏D）とみたほうがよいだろう。いずれも手捏ねで、内外面にはナデ。底部もナデであるが、６・９・10は木葉底である。Ⅰ～Ⅳ期では臼状を主とし、口径は４～６cmである。５・６は172号住出土で、２個がならんで出土した。Ⅵ～Ⅸ期では口径３cm程度と小さい。形態は坏状である。

須恵器

［坏］

Ⅰ期：170号住９、200号住１がある。口径は14cm、底径6.4～9.6cm、高さ4.6cm。底部はヘラ切り後、手持ちヘラ削りをする。体部の立ち上がりがきつい。

Ⅱ期：126号住２、358号住５、387号住２、412号住５～12などがある。口径は11～15cm、底径５～10.6cm、高さ3.5～4.5cm。底部は回転糸切り後全面手持ちヘラ削り－１、外周手持ちヘラ削り－２、外周回転ヘラ削り－１、回転糸切り後未調整がある。

Ⅲ期：この時期は非常に多い。165号住３・４、172号住２・３、260号住３～７、313号住５～７、318号住４、325号住４～10、328号住４～６、334号住２、370号住３～７、372号住４～７、377号住３・４、383号住２～８、

などがある。口径は10.8～15.6cmで、13～14cmが多い。底径は5.1～10.6cmで、７～８cmが多い。高さは3.3～4.7cmである。底部は回転糸切り未調整－24、回転（静止）糸切り後全面手持ちヘラ削り－10、外周回転ヘラ削り－５であった。器形には体部が直線的に開くものが目立つ。

Ⅳ期：150号住１～４、199号住３～10、341号住３・４などがある。口径は11.6～15cmで、前期同様に13～14cmが多い。底径は５～８cmで７cm台が多く、縮小化の傾向がある。高さは3.3～4.6cmである。底部は回転糸切り未調整－７、回転糸切り後手持ちヘラ削り－３、外周回転ヘラ削り－４であった。

Ⅴ期：93号住２・３、159号住４、167号住４～６、197号住３・５・６、212号住４～６、248号住４・５などがある。口径11～12.6cmで12cm前後を中心とする。底径は5.5～7.6cmで、６cm台が多く縮小化がすすむ。高さは3.6～4.5cm。底部は回転糸切り未調整－12、外周回転ヘラ削り－２であった。

Ⅵ期：６号住３、59号住６、99号住５・６、107号住５・６、121号住２、167号住４、219号住７～９、261号住８、288号住14～17、293号住45、330号住７などがある。法量は口径・底径は前段階とほぼ同様であるが、高さがやや低くなったために体部の傾斜が弱くなる。口径は10～13.2cmで12cm後半台を中心とし、底径は5.4～８cmで、６cm台が多い。高さは3.1～4.7cmで、３cm台の資料が増える。底部は回転糸切り未調整。

Ⅶ期：資料が大変少なくなる。16号住３、70号住11、344号住３がある。口径は12～12.8cm、底径は4.6～6.8cm、高さは3.5～４cm。底部は回転糸切り未調整のみ。

Ⅸ期の233号住には坏がある（13）。口径11.4cm、底径5.6cm、高さ3.3cmで、器形はⅦ期と変わらない。混入品と考えておきたい。

［**角坏**］

311号住２のみ。口径９cm、底径５cm、高さ４cmで体部下半に２cmほどの角状突起が水平に付く。Ⅳ～Ⅴ期。

［**高台坏Ａ**］

Ⅲ～Ⅵ期まで存在する。底部は基本的には回転ヘラ削り後、付け高台である。

Ⅲ期：318号住５は口径16cm、底径（高台径）10cm、高さ6.4cm。377号住５は口径15.6cm、底径10cm、高さ６cm。底径が10cmと大きいのが特徴である。高台は外側に踏張った形である。

Ⅳ期：199号住12、313号住８などがある。口径15.2～16.6cm、底径９～9.5cm、高さ6.4cm。313号住８は体部内外面にロクロナデを行い、ロクロ目を平滑にしている。高台は外側への張り出しが弱く、角高台状である。

Ⅴ期：159号住５、167号住７、248号住６などがある。口径14.8～15.3cm、底径7.5～10cm、高さ6.2～７cm。底径がやや縮小する。高台は角高台が多い。

Ⅵ期：54号住７、114号住７、121号住３、137号住４・５、337号住７がある。口径14～16.4cm、底径7.5～11.2cm、高さ5.2～７cm。底径が縮小し、傾きがやや大きくなる。高台は54号住７のように回転ヘラ削り後、高台を付け、再び高台外側側面を回転ヘラ削りにより調整するものがあり、角高台を呈する。

［**高台坏Ｂ**］

Ⅱ・Ⅴ期にあるが、それ以前にも存在すると思われる。

Ⅱ期：276号住５～７は口径12.3～13.6cm、底径8.8～11cm、高さ3.1～3.2cm。

Ⅲ期：172号住４は口径13cm、底径９cm、高さ4.4cm、372号住８は口径13cm、底径9.1cm、高さ3.3cm、９は底径8.9cmで、底面が高台よりも突出する。

Ⅳ期：100号住136など。

Ⅴ期：138号住15・16は口径12.1・12.6cm、底径7.1・8.5cm、高さ4cm・4.9cm。Ⅱ期にくらべ器高が高く底径が小さい。

［**高台坏Ｃ**］

214号住４のみ。214号住はⅡ期からⅨ期までの資料が混在しているが、Ⅱ期であろう。搬入品の可能性がある。

［高台坏D］

３号溝状遺構３のみ。口径8.6cm、底径5.7cm、高さ5.4cm。

［高台坏E］

１号溝状遺構41にある。甕として実測したが坏であろう。Ⅰ期か？　214住５も高台皿かもしれない。

［高台皿］

271号住１、１号溝状遺構17がある。皿というよりは高台坏の盤状タイプであろう。

［蓋A］

Ⅲ～Ⅵ期に多く、その前後の段階にも存在するらしい。Ⅷ期以降には伴わないと思われる。端部の立ち下がり、つまみ部に変化が認められる。調整技法は天井部上半に回転ヘラ削りがみられる。器種分化はⅢ・Ⅳ期に顕著である。口径15～６cmのものは高台坏Aに、12～３cmのものは高台坏Bに、18～21cmのものは高坏、または鉢Bに伴うものであろう。

Ⅱ期：81号住３は口径13.4cm。

Ⅲ期：244号住８は口径13.4cm。412号住では13～18の６点のまとまった資料がある。口径13.4～21cmで、13～15cmと17～21cmの大小２種に分化しているようだ。端部はいずれも直に立ち下がり、天井部との境は鋭い稜をなす。つまみには擬宝珠状（14・16・17）と円盤状（15）がある。

Ⅳ期：112号住８は口径17cm。つまみは擬宝珠状。199号住13はつまみが小さい。199号住14は口径18.5cm。立ち下がりは短い。313号住９は口径14.5cm。318号住６は口径19.4cm。341号住７は口径10.8cm。小型である。

Ⅴ期：138号住17・18は口径13.1cm、16.1cm。立ち下がりが短くなる。18のつまみは小さく高い。159号住６は口径15.6cm。つまみは擬宝珠状であるが低平である。212号住８・９は口径13.6cm、18cm。立ち下がりは短い。236号住４は口径16.8cm。

Ⅵ期：77号住２は口径17.2cm。立ち下がりはさらに短く、つまみは径が大きく低平である。107号住８は口径15.6cm。309号住11は口径18cm。つまみは小さい。337号住8・9は口径10.8cm、16cm。８の立ち下がりは痕跡的である。

Ⅶ期：この段階にはほとんど良好な資料がない。46号住４はつまみが低平。

［蓋B］

325号住11は口径12.8cm。立ち下がり部は高さ２cmで直立し、蓋Aに比べたいへん長い。115号住16や216号住６のような短頸壷に伴うと思われる。

［高坏］

Ⅳ期以前に存在する。全形をうかがうことができる資料がない。

Ⅱ期：良好な資料がない。276号住11があるが、Ⅲ期以降の可能性がある。

Ⅲ期：172号住６・７、260号住８、377号住６がある。いずれも脚部片である。

Ⅳ期：138号住19は口径20.1cm。短く直立した立ち上がりがある。ほかに265号住３がある。

［長頸壷A］

153号住29のほか２号溝状遺構にある（26・27）。また肩部に把手をもつ球胴の27号住13も長頸壷であろう。

［長頸壷B］

325号住15のみ。

［長頸壷C］

130号住８、137号住８はⅥ期。363号住１は底部片で、時期はわからない。

［短頸壷A］

216号住６は球胴の体部にがっしりした高台、直立した口縁部がつく。口径9.4cm、底径10.6cm、高さ16.8cm。Ⅵ期。そのほか、口縁部片ではよくわからないが、396号住３などがある。Ⅰ～Ⅱ期。

［短頸壷B］

115号住16は大きな底部から体部が内湾して立ち上がり、口縁部が直立する。口径11.5cm、底径15.5cm、高さ28.6cm。Ⅷ期。

［短頸壷C］

８号住４は口径5.2cmと小型である。Ⅴ～Ⅵ期。206号住３は口径４cmとさらに小型。Ⅴ期前後。223号住13は口径６cm。第Ⅶ段階。313号住10は口径８cmで、この器種の中では大きい。Ⅳ期。

［凸帯壷］

Ⅵ～Ⅸ期まで存在する。数は少ない。住居址のほかに１号溝状遺構からも出ている（58・59）。

Ⅵ期：59号住12、99号住８は凸帯上の耳部に縦方向に孔が貫通している。耳部は方～長方形で、断面三角形の凸帯に耳部上側がかかるように貼付している。ほかに330号住10があるが、耳部の状況はわからない。

Ⅶ期：409号住６がある。

Ⅷ期：144号住13は二（双）耳と思われる。耳部は粗雑で孔はない。ほかに286号住22がある。

Ⅸ期：133号住８は耳部が粗雑で孔がなく、耳部中央が凸帯にのるように貼付している。

［甕］

Ⅲ期：172号住11、244号住10は口縁部が無文、412号住24は２段のヘラ描き波状文。口径41cmの大甕。378号住５は口縁部に２段の櫛歯状綾杉刺突文。口径44cmの大甕。

Ⅳ期：100号住16は口縁部無文、平底。口径12.2cm、底径7.1cm、高さ16.9cmと小型である。19は丸底。

Ⅴ期：２号住７は口縁部無文、丸底。口径23cm、高さ45cm。

Ⅵ期：22号住４・５はともに口縁部無文、平底。

Ⅶ期：25号住24は口縁部無文、丸底。口径17.4cm、高さ29cm。46号住５は口縁部無文。口径19cm。

Ⅷ期：４号住11は口縁部に４段のヘラ描き波状文。口径41.2cmの大甕。384号住４は口縁部に３段の櫛描き波状文。

このほか１号溝状遺構中に資料がある（45～50）。口縁部は無文（45・46・50）、櫛描き波状文（48）、櫛歯状綾杉刺突文（47・49）としている。２号溝状遺構にも大甕がある（30）。口径45cm。

［鉢A］

Ⅲ～Ⅴ期にあり、数は少ない。Ⅲ期では叩きが行われる。

Ⅲ期：172号住12、325号住16がある。口径は30～35cmと大きい。体部外面に叩きを施す。

Ⅳ期：100号住18はⅢ期に入るかもしれない。外面叩き。

Ⅴ期：159号住13は口径34cmで、体部下半に一部手持ちヘラ削りを行う。

［鉢B］

Ⅳ～Ⅵ期にあり、やはり数は少ない。ロクロナデが行われ、叩きはない。

Ⅳ期：100号住17（Ⅲ期か）、138号住23、313号住11などがある。また口径17.5～21cm、底径8.2～9cm、高さ11～18.3cm。底部は回転糸切り未調整である。口縁部は返りによって面を作っているが、100号住17は短く立ち上がっている。

Ⅴ期：311号住３はⅣ期の可能性もあるが、ここに入れる。口径19cm、底径8.6cm、高さ13.7cm。口唇部は蓋端部のように短く立ち上がる。

Ⅵ期：３号住７・８、21号住10がある。口径20.8～29cmで、口径約20cmと約29cmに器種分化している。底径10.4～15cm、高さ15～17cm。底部はヘラナデを行うものがある（３号住７）。頸部の括れが弱くなり、Ⅳ期に比べ口唇部は作りが単純化する。

［鉢C］

住居址では３号住４（Ⅵ期）があるのみ。体部下半を回転ヘラ削りする。そのほか１号溝状遺構で１点出土している。

［横瓶］

104号住７はⅧ期、164号住11はⅦ期であるが、両者とも混入の可能性が高い。Ⅲ～Ⅳ期の坏を伴っている。

［円面硯］

47号住で脚部（６、おそらく混入品）、１号溝状遺構で脚部（60）、遺構外で円面部２（68・69）、脚部（67）が

出土している。いずれも脚部に長方形の透かしをもつ。遺構外68は口径10cm、69は口径10.8cmで周囲に径１cmのボタン状の円板を２cm程度の間隔で貼付している。

黒色土器

［坏］

Ⅲ期：325号住３、370号住２がある。口径15.2～19cm、底径７～8.3cm、高さ５～７cm。370号住２は内面横ヘラミガキ。底部は手持ちヘラ削り。

Ⅵ期：59号住４・５、207号住６がある。口径13～16cm、底径6.4～7.4cm、高さ4.6～4.7cm。59号住４は体部回転ヘラ削り、底部手持ちヘラ削り、内面横ヘラミガキ。59号住５は底部手持ちヘラ削り、内面横ヘラミガキ。

Ⅶ期：25号住15・16、33号住５、113号住９、155号住10、185号住３～６、223号住11、292号住10・11がある。法量は全体的に前段階よりも縮小し、口径11.2～13cm、底径５～5.5cm、高さ４～5.1cmである。底部は、回転糸切り未調整を基本とし、まれに手持ちヘラ削り調整を行うものがある（185号住３）。内面は上半を横に、下半を放射状にヘラミガキすることが多い。

Ⅷ期：４号住７、31号住５、115号住５・６、251号住４、324号住５がある。口径11.8～17.2cm、底径4.6～6.2cm、高さ3.7～６cmである。口径12cm前後のもの、16～17cm前後のものの２種に分化する。底部は回転糸切りであるが、まれに手持ちヘラ削りするものがある（４号住７）。内面は放射状にヘラミガキをするものが多い。

Ⅸ期：34号住２・３、38号住８、63号住５、189号住５～７がある。口径12.4～16cm、底径5.4～6.6cm、高さ4.5～5.4cmで２種の分化が認められる。体部が丸く立ち上がり、口縁部は上方にのびる。内面のヘラミガキがないものがある。

Ⅹ期：11号住13～15がある。口径12.4～16cm、底径5.4～6.6cm、高さ4.5～5.4cmで、引き続き器種分化があるある。14は回転糸切り後、体底部を手持ちヘラ削りする。口縁部は緩やかに大きく開き、内面のヘラミガキはほとんどない。

［高台皿］

Ⅶ期とⅨ期に存在するので、Ⅶ～Ⅸ期にあると考えておく。

Ⅶ期：46号住３、238号住13がある。口径12.3～13.6cm、底径5.7～７cm、高さ2.7～2.9cm。口縁部がやや反り気味に開く。

Ⅸ期：34号住５～８、63号住7がある。口径12.3～13cm、底径5.6～7.5cm、高さ2.4～３cmで、Ⅶ期のものと変化はない。

［高脚高台坏］

176号住７。高さ６cmほどの高台がつく。

［皿］

11号住17のみ。口径13cm、底径5.4cm、高さ2.4cm。底部は回転糸切り未調整。Ⅹ期。

［椀］

Ⅶ期：191号住10は口径16cm、底径6.8cm、高さ4.2cm。体部が大きく開いて外反する。

Ⅷ期：68号住８は口径14cm、底径7.2cm、高さ5.5cm。体部は丸く立ち上がる。

Ⅸ期：34号住４、63号住６、69号住７、119号住２、177号住15などがある。口径12.4～20cm、底径6～9.2cm、高さ3.3～6.5cm。内面上半を横ミガキにするもの（63号住６、177号住15）、上半を横、下半を放射状ミガキにするもの（34号住４）がある。またミガキ後に暗文を施すものが1点だけある（69号住７）。

Ⅹ期：11号住16は口径14.6cm、底径7.4cm、高さ５cm。体部は直線的に開く。

［鉢］

Ⅶ期：155号住11は片口をもつ。口径26cm。

Ⅷ期：243号住12は回転ヘラ削り。

Ⅸ期：240号住18～20がある。19・20は同一個体と思われるが、胴部下半を回転ヘラ削りし、削り出し高台をつ

くる。口縁部内面に横ヘラミガキ、下半を放射状ヘラミガキ。

甲斐型黒色土器

［坏］

Ⅳ～Ⅸ期に存在。Ⅵ期に回転ヘラ削りが多いこと、体部内面に束とらせんを組合せた暗文が出現すること、Ⅵ・Ⅶ期に暗文上に横ヘラミガキを施す例が多いこと、Ⅷ・Ⅸ期にも少数ではあるが暗文坏が存在することなどが特徴である。

Ⅳ期：138号住６は口径10cm、底径6.5cm、高さ4.3cmで、通常の坏に内面黒色処理を施している。

Ⅵ期：293号住40～43は、口径15～15.6cm、底径5.5～６cm、高さ5.3～６cmで、通常の坏よりも大きい一群をなす。体底部は手持ちヘラ削り－１、回転ヘラ削り－３である。口縁部は玉縁状。内面暗文は、見込み部らせん状、体部内面に束状暗文－２、放射状暗文－２である。暗文の上半に横ヘラミガキを施す例がある。

Ⅶ期：149号住６、223号住12、315号住19・21などがある。口径14～20.2cm、底径5.4～8.6cm、高さ5.2～６cm。回転ヘラ削りを行うものに223号住12、315号住19がある。暗文がないものもある。315号住19の体部内面の暗文は束状とらせん状を組合せたもの。暗文上にヘラミガキ。

Ⅷ期：115号住７、153号住25、181号住10、226号住８、239号住４・５、286号住14～18、345号住３・４、354号住４、400号住４がある。口径12.6～17.8cmで14cm台が５、16～17cm台が５で、通常の土師器坏の器種分化と対応している。底径4.4～6.6cm、高さ4.3～７cm。回転ヘラ削りはなく、ほとんどが手持ちヘラ削りとなる。暗文のあるものは13例中４で、286号住14には見込み部らせん状、体部内面放射状暗文。286号住17は見込み部渦巻状、体部内面放射状暗文。ほかは放射状暗文である。このように暗文が減少するとともに、内面の横ヘラミガキもほとんどなくなる。黒色土器の内面と異なり、黒色処理前のミガキは甲斐型黒色土器坏にはほとんどないのが特徴である。

Ⅸ期：15号住10・12、19号住9、23号住10、26号住３、28号住２、36号住５、45号住７・８、58号住５、74号住６、133号住５、163号住４～６、177号住14、189号住８、222号住10、227号住25～28、240号住15～17、253号住５、275号住９～11、284号住６、299号住６、303号住５、326号住８、364号住９、365号住３などがある。口径12.1～18cmで、14～17cm台がほとんどである。底径3.6～７cm、高さ4.3～6.8cm。口縁部形態は通常の坏とほとんど同じ。暗文は35点中７点と、少ないが確実に存在する。束状－２、放射状－３、体部内面束状＋らせん－１、体部内面束状＋らせん、見込み部らせん状－１。このうち240号住16・17は器壁が厚く、内面ミガキ後に放射状暗文を施し、口縁部形態が異なる。内外面黒色土器もある（227号住25）。

［高台坏］

313号住４（Ⅳ期）、70号住10（Ⅶ期）、215号住４（Ⅷ期）がある。

灰釉陶器

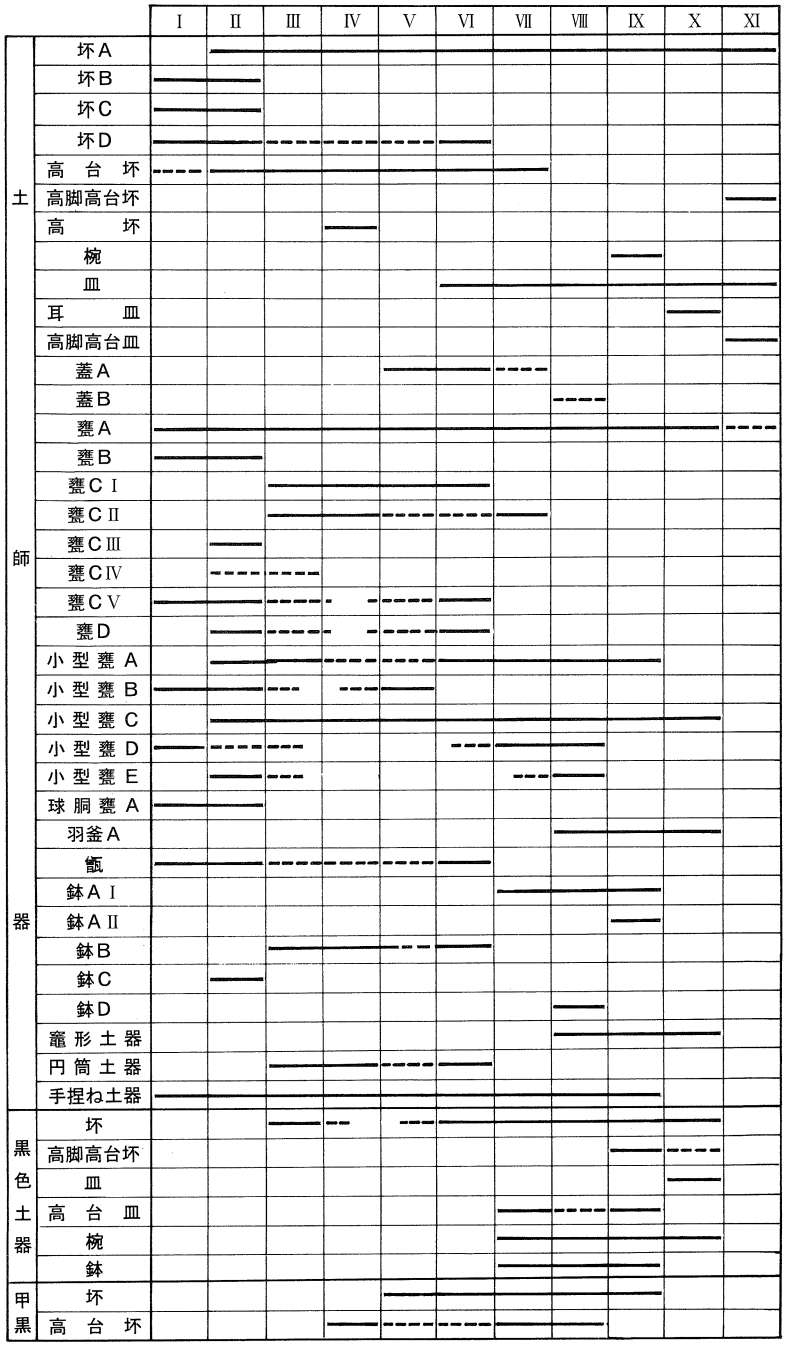
Ⅶ～Ⅸ期に存在する。灰釉陶器は、施釉方法、高台形態など製作技法的には黒笹14号窯段階（K14）、黒笹90号窯段階（K90）、折戸53号窯段階（O53）、東山72号窯段階（H72）に分類することができる（註２）。製作地は瀬戸美濃系が主体である。各窯期の椀の特徴を簡単に述べるならば、K14－釉は内面全面に流し掛け、角高台、K90－釉は刷毛塗り、三日月高台、口唇部は玉縁、O53－釉は漬け掛け、三角高台、H72－釉は漬け掛け、高台は細長い。

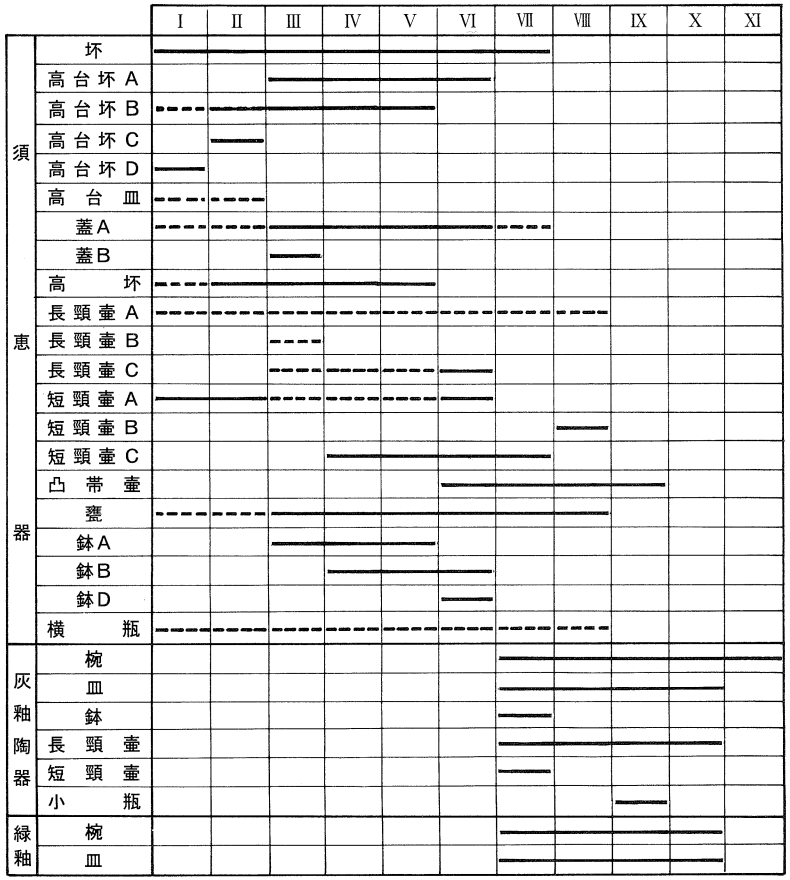
ここでは宮ノ前遺跡の各時期にどのような灰釉陶器が入りこんでいるか見ていく。

Ⅶ期：70号住には鉢（12）、椀（13）、長頸壷？（18）、短頸壷（19）がある。12・13はK14である。292号住12はK14椀である。このようにⅦ期ではK14のみが伴出している。

Ⅷ期：この段階のK14には68号住椀（12）、149号住段皿（８）、153号住椀（31）、266号住皿（８）、314号住脚付段皿（10）がある。またK90には115号住段皿（12）、153号住椀（30）、266号住皿（７）がある。この段階ではK90が伴うようになるとともに、K14も存在し、K14とK90の伴出例も２軒（153号住、266号住）ある。また243号住では混入の可能性があるもののO53の皿（13）がある。

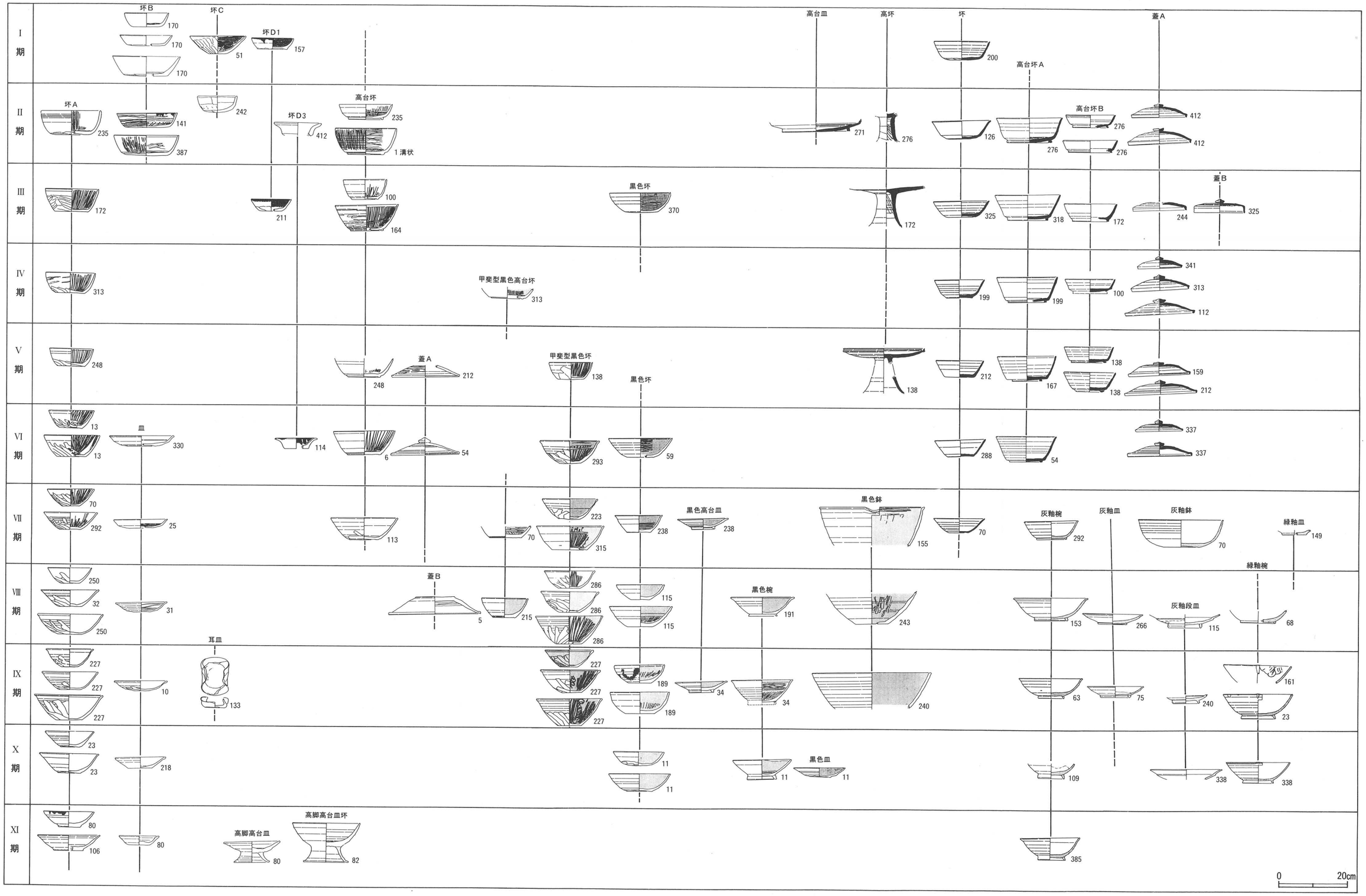
Ⅸ期：K14には34号住椀（11）、47号住皿（３）、63号住椀（９）、105号住段皿（７）、275号住皿（14）がある。





第23図　器種の消長

（破線は想定、「甲黒」は「甲斐型黒色土器」の略）



第24図　土器・陶器の変遷（食器類、「黒色坏」は「黒色土器坏」の略、「甲斐型黒色坏」は「甲斐型黒色土器坏」の略、数字は住居址番号）

I 期
II 期
III 期
IV 期
V 期

甕A
甕B1
甕B2
甕C V
球胴甕A
小型甕D
甕C I
甕C III
甕D
小型甕A
小型甕C
鉢C
甕C II
鉢B
鉢A
鉢B

170
51
51
170
170
170
242
141
276
276
141
235
396
200
141
335
260
377
244
370
172
372
172
313
150
150
138
313
138
93
248
167
159
159
311

0 20cm

第25図－１　土器の変遷（甕・鉢類ほか）(1)

VI 期
VII 期
VIII 期
IX 期
X 期
XI 期

甕C V
甕D
甕C II
小型甕D
鉢B
円筒土器
長頸壺C
鉢A I
鉢D
羽釜A
甕形土器
鉢A II
小型甕A
小型甕C
凸帯壺

0 20cm

第25図－２　土器の変遷（甕・鉢類ほか）(2)

K90には18号住椀（13）、24号住皿（５）、35号住皿（10）、38号住椀（12）、50号住皿（６）、69号住椀（８・９）、240号住段皿（23）がある。O53には17号住皿（４）、35号住皿（11）、237号住椀（９）、274号住皿（６）、287号住皿（５）、332号住皿（２）、368号住椀（２）がある。このようにO53が確実に存在し、同時にK14、K90も依然残存している。

X期：109号住にH72椀が２点ある（３・４）。また338号住ではK14皿（９）がある。

IX期：385号住にH72椀（３）がある。このように少数例ではあるが、X・XI期でH72が伴っている。

緑釉陶器

23号住輪花椀（11）は口径17cmと大ぶりで、全面施釉。高台端面の釉は使用によって磨耗している。外面回転ヘラ削り。釉は刷毛塗り、淡黄緑～淡緑色、はげやすい。輪花はヘラによって縦に押さえている。胎土は灰白色で、やや軟質。猿投系。IX期。68号住椀（12）は全面施釉、胎土は灰白色で、硬質。外面は回転ヘラ削り。149号住皿（７）は無高台で、全面施釉。底部はナデ。釉は淡黄～黄緑で、はげやすい。胎土は黄白色で軟質。VII期。161号住（３）は陰刻花文輪花椀で、輪花は縦長の凹線によって内面に長い縦の稜線を作り出している。胎土は黄灰～灰白色で、軟質。釉は淡黄緑～緑。233号住皿（16）は全面施釉、外面回転ヘラ削り。胎土は須恵器的で青灰色、硬質である。釉着は良好。310号住（10）は椀か皿で、底部裏面を除き施釉。外面は回転ヘラ削り。内面に重ね焼き痕。胎土は灰白色で硬質。釉着は良好。IX期。338号住輪花椀（８）は全面施釉、外面は回転ヘラ削り、外面口唇部下に凹線、見込み部に環状の沈線、輪花は口唇部を押さえた程度である。トチン使用痕。胎土は須恵器的で硬質、青灰色。釉は淡黄緑～緑、刷毛塗り。X期。猿投系か。392号住耳皿（５）は全面施釉。釉は淡黄緑色ではげやすい。底部は回転糸切り未調整。胎土は白色、軟質。VII期。そのほかに10号住皿・椀（14・15）、152号住椀？（６）、１号溝状遺構椀（63）、A21B24グリッド皿（58）、A23B25グリッド段皿（61）がある。

奈良三彩

69号住の小型壷蓋のみである（10）。完形品で、口径4.8cm、高さ1.5cm。全面に施釉があり、つまみ部は淡緑、天井部は３等分した位置に幅５㎜ほどの黄釉線、その両脇を５～７㎜の淡緑釉線、残る部分を白釉で塗り分けて施釉している。また立ち下がり部外側面には淡緑釉を施釉する。裏面には白釉が塗られているが、全体的に釉着は悪く、はげかかっている。外面回転ヘラ削り。胎土は淡黄白色で軟質。

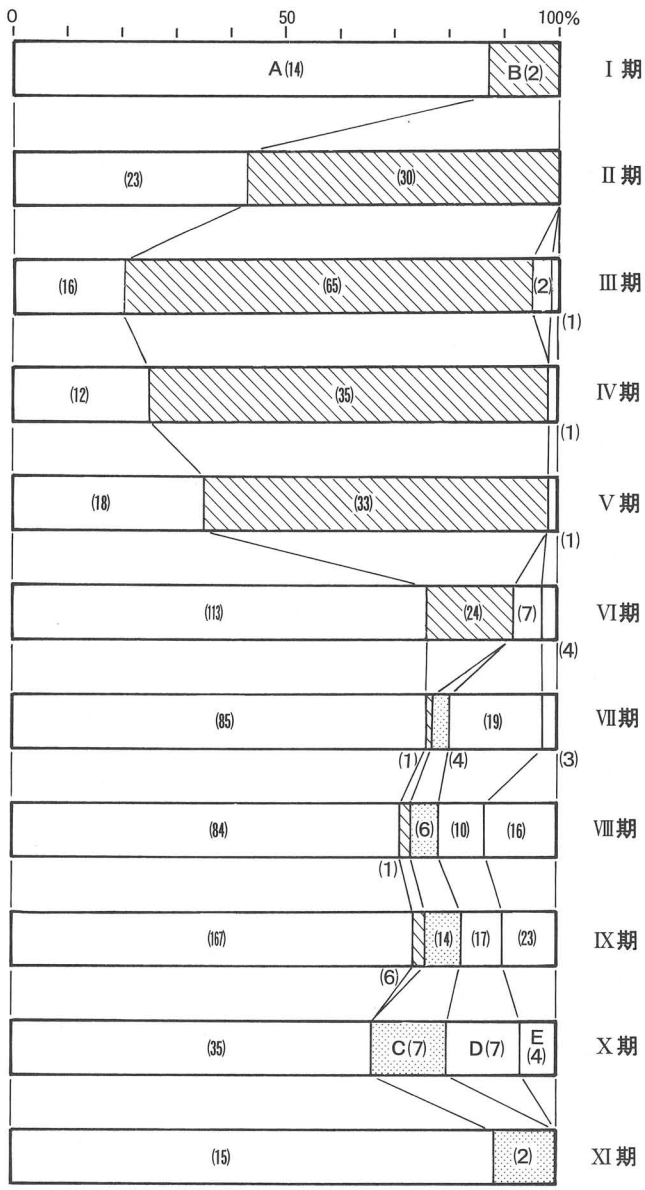
(4) 器種の変遷（第26・27図）

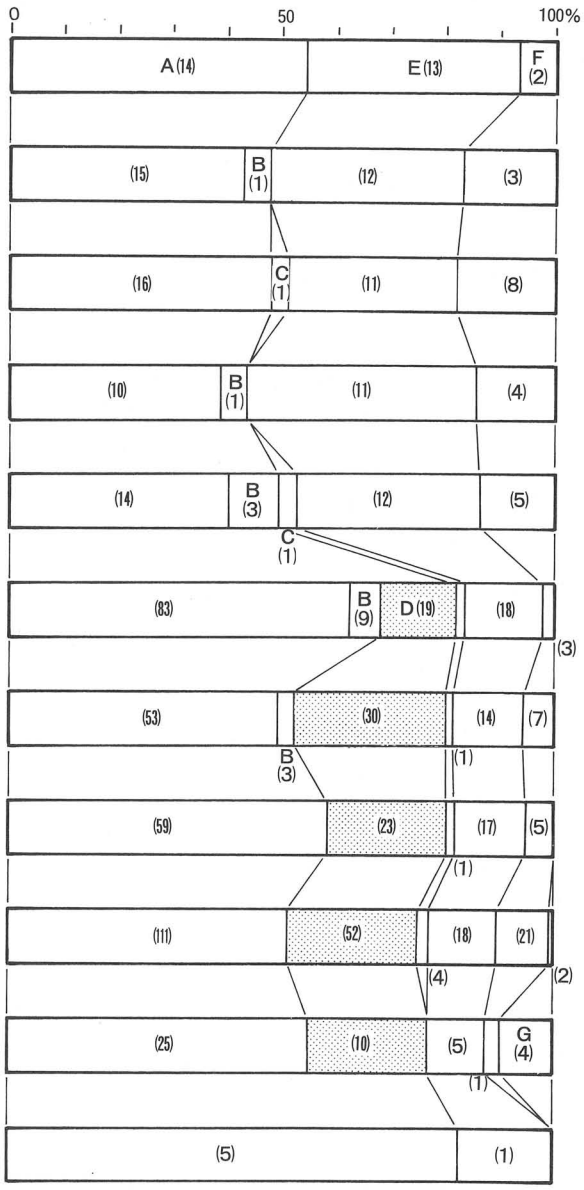
各時期の種別・器種構成がどのような変遷をたどるのか、食器類を中心に、土師器、須恵器、施釉陶器（灰釉・緑釉陶器）、黒色土器、甲斐型黒色土器に大別して分析する。方法としては各時期から良好と思われる住居址資料を抜き出し、坏類（高台坏等を含み、土師器坏Dは灯明具のため除外）、椀、皿類（耳皿を含む）、蓋、高坏について図化した数を集計、その割合の変遷を検討する。明らかな混入品や、墨書土器の小破片は除いたが、前後する時期の資料を混入する場合は計数した。また同時に土師器の器種組成を知るため、主要器種（坏、高台坏および蓋、皿、鉢、甕・羽釜・甑、小型甕、竈形土器）の図化数を数え、割合を調べた。住居址ごとに土器組成・出土量が異なり、遺物量の多い住居址だけを個別に抜き出して時期ごとに比較しても、なかなか各期の全体像を十分に表すことはできないので、少々恣意的ではあるが任意に良好と思われる例を集計した（抽出した住居址については326頁を参照）。

I期：土師器と須恵器のみで、前者が約９割を占め、須恵器は搬入品的なあり方である。ただ住居址自体が少なく、良好な資料に恵まれていないので、大雑把な結果ではある。土師器は５割以上が坏である。

II期：土師器４割、須恵器６割と、須恵器の割合が増加する。しかしI期と同様に良好な資料が少なく土器量自体もIII期以降に較べて少ない。土師器は５割が坏、４割が甕、１割が小型甕である。

III期：住居址数、土器量ともに充実する。須恵器は更に増加し、約８割を占めるようになる。須恵器は量的には主体的であり、在地での生産を十分に想定するに足る割合を示している。また須恵器は器種量も豊富で、坏１種類だけの土師器とは対照的である。土師器は盤状坏の系譜が途絶え、箱状の甲斐型坏が普及しはじめる。しか





第26図　食器類の種別構成（数字は個数）
（A－土師器　B－須恵器　C－施釉陶器
D－黒色土器　E－甲斐型黒色土器）

第27図　土師器の器種構成（数字は個数）
（A－坏　B－高台坏・蓋　C－鉢　D－皿
E－甕・甑・羽釜　F－小型甕　G－竈形土器）

〈集計した住居址〉

I －51・170・200・333
II －126・141・235・252・276・358・387・412
III －172・244・260・325・328・370・372・377・383
IV －100・150・199・313・341
V －93・138・159・167・197・212・248
VI－ 3 ・13・21・59・99・111・130・207・219・288・293・302
VII－25・70・110・155・185・223・238・292・315
VIII－ 4 ・68・153・239・243・286・290・291・324
IX－10・14・18・19・34・35・38・45・63・84・133・160・163・177・189・227・233・237・240・275
X －11・15・23・109・338
XI －80・82・106

しその量は全体の２割程度と少なく、客体的である。わずかに黒色土器や、それを模倣したらしい甲斐型黒色土器が出現する。

Ⅳ期：ほとんど前期と同じではある。しかしわずかに土師器の割合が増加している。器種にも目立った変化はない。土師器は坏がやや減少傾向にある。

Ⅴ期：土師器の割合が増加し３割強を占めているが、Ⅲ・Ⅳ期同様に須恵器優位に変わりはない。土師器の主要器種の割合は前期とほとんど変化がない。高台坏・蓋の割合は坏の¼程度である。

Ⅵ期：須恵器と土師器の割合が逆転し、土師器が約８割を占める。土師器はこの時期から蓋・皿の本格的な生産が始まり、それまでの須恵器の器種に取って代るようになるとともに、土器量そのものも増大するようだ。土師器の坏は増加が著しく、６割以上を占める。また皿や高台坏などを含めた食器の割合は８割程度と多くなり、この傾向がＸ期まで続く。皿の割合は坏の¼程度である。須恵器は主に坏類が残存し、客体的な存在となる。また黒色土器・甲斐型黒色土器が増加傾向を示す。

Ⅶ期：土師器の割合は前期とまったく同じであるが、須恵器が微量ある。黒色土器・甲斐型黒色土器は合わせて約２割存在し、とりわけ黒色土器の増加が著しい。また施釉陶器もわずかではあるが出現する。土師器の皿は割合がやや増加する。

Ⅷ期：土師器の割合は前期とほとんど同じ。黒色土器・甲斐型黒色土器はわずかに増加している。施釉陶器は若干増加する。

Ⅸ期：非常に住居址数が多く、土器の内容も充実している。土師器の割合はⅧ期と同じ。

Ｘ期：やや土師器の割合が減少し、施釉陶器、黒色土器・甲斐型黒色土器の割合が増加しているが、基本的には前期と同様の傾向を示している。

Ⅺ期：黒色土器が消滅し、土師器と施釉陶器のみとなっているが、住居址数が少なく再検討の余地はある。器種組成は大きく変化する。

この変遷を大別すると、Ⅰ期（土師器主体）、Ⅱ～Ⅴ期（須恵器主体）、Ⅵ～Ｘ期（土師器主体、黒色土器、施釉陶器併存）、Ⅺ期（土師器主体）の４大別が可能と思われる。

⑸　各時期の年代（第28図）

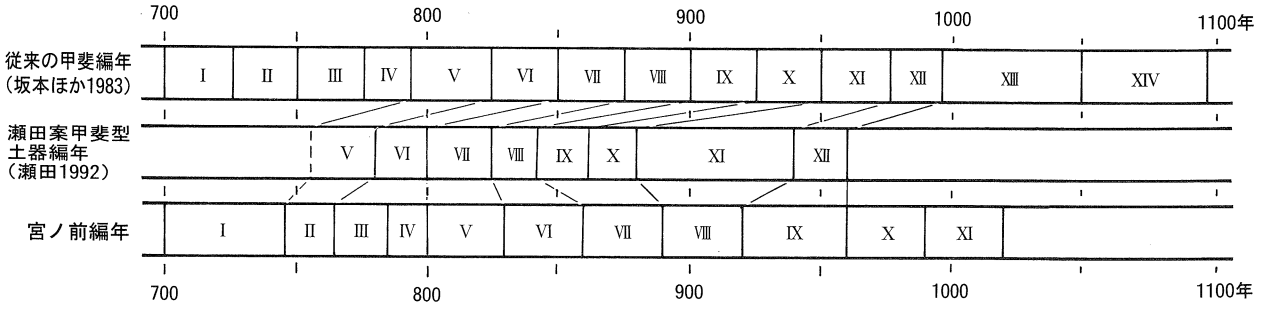
宮ノ前遺跡からは実年代をうかがうことができるような資料は出土していないが、灰釉陶器が併存するⅦ～Ⅺ期については灰釉陶器の窯式編年を援用することができる。ただ灰釉陶器の年代観も研究者間によって開きがあり、近年、出現の年代観をより古く考える傾向にある。したがって従来の甲斐型土器編年で提起された年代観（坂本ほか　1983）との差が次第に大きくなっている現状がある。そうした点に留意しつつ８世紀後半以降の甲斐型土器の年代観を瀬田正明氏は整理している（瀬田　1992）。

瀬田氏の年代推定では、まず平城京二条四坊十一坪井戸から出土した甲斐型土器が「壷Ｇ」や平城京Ⅵ期（長岡京期）と伴出したことから甲斐Ⅵ期（従来の坂本ほか1983の編年案、以下甲斐～期とする）を780年頃に比定した。また式根島吹之江遺跡火山灰下出土資料（小林　1983）を仁和３年（886）年に、富士吉田市西丸尾遺跡の溶岩流下出土資料（堀内　1981）を承平７年（937）頃と考えて、甲斐Ⅺ期を880～940年頃に比定した。また灰釉陶器Ｋ14が甲斐Ⅸ期に出現することからⅨ期を850年頃以降としている。

田尾誠敏氏も甲斐型土器の年代観に言及している。田尾氏は西相模・信濃・駿東地域の土器との比較から甲斐Ⅴ期を８世紀第３四半期に、甲斐Ⅵ期を８世紀第４四半期後半に、甲斐Ⅶ期を９世紀第１四半期に比定している（田尾　1991）。また神奈川県秦野市草山遺跡の草山Ⅸ期が相模国分尼寺金堂基壇面出土土器と同時期と考えられることから、草山Ⅸ期に伴う甲斐Ｘ期は860～890年の年代が与えられるという（田尾　1992）。

瀬田・田尾両氏の指摘を参考にすると、宮ノ前遺跡の各期（以下、宮ノ前～期とする）と従来の甲斐編年との対応関係、および暦年代については次のとおりと考える。宮ノ前Ⅰ期を８世紀前半代にあてておくが、従来は４細分が行なわれていた部分であり、今後さらに細分する必要があろう。宮ノ前Ⅱ期は暗文をもつ盤状坏が主体で、

甲斐Ⅴ期もしくはそれに近い形態の身深の箱坏がわずかに伴う。先の甲斐型土器研究集会の中でも、山下孝司氏が甲斐Ⅴ期直前期の身深の坏に着目し、また同時に韮崎市上本田遺跡８号住例をあげて甲斐Ⅴ期と暗文をもつ盤状坏が伴う例のあることを報告している。甲斐Ⅴ期の坏と外面に縦方向の暗文をもつ坏との共伴例は韮崎市駒井遺跡１号住（保坂　1986）などにあり、また外面縦暗文坏と盤状坏との共伴例も都留市堀之内原遺跡３号住（奈良　1980）などにある。したがって甲斐Ⅴ期と暗文をもつ盤状坏、外面縦暗文坏は同時期の所産と考えられる。甲斐Ⅴ期の年代については議論の余地があり確定してはいないが、甲斐国分寺講堂北地点からは外面縦暗文をもつ大形の盤状坏が出土している（猪股　1990）。国分寺との関連性を重視するならば国分寺創建期以降と思われ、甲斐Ⅵ期が780年頃であるので、甲斐Ⅴ期は740年頃以降780年以前となる。したがって宮ノ前Ⅱ期はおおよそ750年前後となろう。宮ノ前Ⅲ・Ⅳ期は甲斐Ⅵ期であるが、外面斜めヘラ削りがなくヘラミガキが多用される宮ノ前Ⅲ期は平城京例に近く、780年頃ということになる。宮ノ前Ⅳ期は仮に８世紀第４四半期後半としておきたい。宮ノ前Ⅴ・Ⅵ期は甲斐Ⅶ・Ⅷ期で、年代推定の手がかりがない。宮ノ前Ⅶ期が甲斐Ⅸ・Ⅹ期で、田尾氏の指摘によれば甲斐Ⅹ期は860～890年頃とされる。また宮ノ前Ⅷ期は甲斐Ⅺ期であり、瀬田氏の指摘によれば880～940年頃となる。しかし940年頃までとした根拠の西丸尾遺跡については甲斐Ⅺ期というよりは甲斐Ⅻ期であり、甲斐Ⅺ・Ⅻ期が880～940年頃と修正すべきである（註３）。したがって甲斐Ⅺ期の終末を西丸尾遺跡段階以前に遡らせる必要があり、甲斐Ⅺ期、すなわち宮ノ前Ⅷ期を仮に890～920年頃としたい。なお宮ノ前遺跡の時期設定では甲斐Ⅹ期は宮ノ前Ⅶ期に含まれているが、土器の形態上では甲斐Ⅸ期とⅩ期をあえて分ける必要性が感じられないからである。宮ノ前Ⅶ期には灰釉陶器Ｋ14が、また宮ノ前Ⅷ期には灰釉陶器Ｋ90が出現しており、Ｋ14の初現を９世紀前半に、Ｋ90の初現を９世紀末～10世紀初頭に比定する近年の年代観とも齟齬はない。宮ノ前Ⅸ期は灰釉陶器Ｏ53を、また宮ノ前Ⅹ・Ⅺ期は灰釉陶器Ｈ72を伴う時期である。Ｏ53、Ｈ72ともに年代は確定していないが、ここでは前川編年（前川　1984）を参考にＨ72の年代を960～1020年頃とし、宮ノ前Ⅹ・Ⅺ期を仮にその年代幅に収めておきたい。また宮ノ前Ⅸ期は960年以前としておく。以上、従来の編年および年代観と宮ノ前遺跡の時期区分の対応関係を整理したのが第28図である。



第28図　宮ノ前遺跡の年代（案）

註

註１　ロクロなどの回転運動を利用して器面に水平方向の細かな条線を施したものを「カキメ」と呼称する。

註２　灰釉陶器の分類・産地については瀬戸市歴史民俗資料館の藤澤良祐氏にご教示をいただいた。

註３　西丸尾遺跡（堀内　1981）の資料は富士吉田市竜ヶ丘１丁目の溶岩石切り場で戦後発見されたもので、隆玉縁の土師器皿、坏Ａ、甲斐型黒色土器坏、灰釉陶器（光ヶ丘１号窯式段階）、土師器甕、竈形土器などが見つかっている。従来、暗文をもつ土師器坏の存在を根拠に、同遺跡は甲斐Ⅺ期（宮ノ前Ⅷ期）とされていたが（瀬田　1992）、宮ノ前遺跡の分析で暗文坏は甲斐型黒色土器坏に宮ノ前Ⅸ期まで残ることが確認された。したがって、同遺跡の場合、暗文坏は時期決定の指標とならないのではないか。むしろ土師器皿の隆玉縁例、土師器皿の体部下半の手持ちヘラ削りの省略例、底部未調整（回転糸切り未調整）例の存在から甲斐Ⅻ期（宮ノ前Ⅸ期）に下げて考えるべきと思われる。

参考文献

猪股喜彦　1990　『甲斐国分寺跡』　一宮町教育委員会

猪股喜彦　1992　「蓋」『甲斐型土器－その編年と年代－』　山梨県考古学協会

甲斐型土器研究グループ　1992
『甲斐型土器－その編年と年代－』　山梨県考古学協会

小林信一　1987　「土器の編年」『新島本村文化財調査報告第２集　吹之江遺跡』　新島本村教育委員会

坂本美夫・末木　健・堀内　真　1983
「甲斐地域」『神奈川考古（シンポジウム　奈良・平安時代土器の諸問題－相模国と周辺地域の様相－）』第14号　神奈川考古同人会

坂本美夫　中山誠二　1989
『山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第50集　桜井畑遺跡（Ｂ区）』　山梨県教育委員会・山梨県県民生活局

瀬田正明　1992　「皿」『甲斐型土器－その編年と年代－』　山梨県考古学協会

瀬田正明　1992　「甲斐型土器の年代」『甲斐型土器－その編年と年代－』　山梨県考古学協会

田尾誠敏　1991　「甲斐型坏の初相」『東海大学校地内遺跡調査団報告』２　東海大学校地内遺跡調査委員会・東海大学校地内遺跡調査団

田尾誠敏　1992　「相模地方の甲斐型土器覚書」『山梨県考古学協会誌』第５号　山梨県考古学協会

中山誠二　1990　『山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第54集　桜井畑遺跡Ａ・Ｃ地区』　山梨県教育委員会・山梨県商工労働部

奈良泰史　1980　『都留市埋蔵文化財報告第７集　堀之内原遺跡発掘調査報告書』　都留市教育委員会・日本道路公団東京第二建設局

保坂康夫　1986　『山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第18集　駒井遺跡発掘調査報告書』　山梨県教育委員会・山梨県土木部

保坂康夫　1989　「古代の甲斐型甕をめぐって」『甲斐の成立と地方的展開』　角川書店

保坂康夫　1992　「高台付坏」『甲斐型土器－その編年と年代－』　山梨県考古学協会

保坂和博　1992　「甲斐型鉢」『甲斐型土器－その編年と年代－』　山梨県考古学協会

堀内　真　1981　「No.17（02015）西丸尾遺跡」『富士吉田市の遺跡』　富士吉田市・富士吉田市教育委員会

前川　要　1984　「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗博物館研究紀要』Ⅲ　瀬戸市歴史民俗博物館

山下孝司　1986　「奈良時代における甲斐の土器編年－須恵器坏、土師器坏の推移－」『山梨考古学論集』Ⅰ　山梨県考古学協会

山下孝司　1989　「奈良時代における甲斐国の土器推移と史的背景」『山梨考古学論集』Ⅱ　山梨県考古学協会

第６節

宮ノ前遺跡における奈良～平安時代の集落様相

１．住居址について

宮ノ前遺跡の竪穴住居址総数423軒のうち、奈良～平安時代の住居址は417軒検出されている。これら住居址群は埋没微高地上全体に、不明瞭ではあるがいくつかのブロックを形成しながら分布し、集落を営んでいたようである。県営圃場整備事業に先立って韮崎市教育委員会が調査を行った本遺跡に隣接する北後田遺跡Ｂ区(山下1990)の住居址群は、宮ノ前遺跡の住居址群と同じ微高地上にのっており、同じ集落の住居址群である。北後田遺跡の住居址数を加えれば、実に450軒以上の住居がこの埋没微高地上に幾時期かにわたって構築され続けたのである。今回の調査では埋没微高地のほぼ全体を調査したといってよい。一つの集落の全容が宮ノ前遺跡と北後田遺跡で浮かびあがるわけである。ここでは検出された住居址について簡単にふれておきたい。

⑴住居址の構造

本遺跡における奈良～平安時代の住居址は前述のとおりの417軒検出されている。それらは住居址どうし激しく重複した状態で検出されているものが大半で、個々の住居址の遺存状態はあまり良くなく、平面形等不明瞭なものも多々ある。そうした状況をふまえて本遺跡における住居址の基本的な構造とそれに付随する属性を確認しておきたい。

①平面形は大まかに方形と長方形の２種類である。

②検出された住居址のほとんどにはカマドが構築されている。

③柱穴は一部を除いてほとんどみられない。

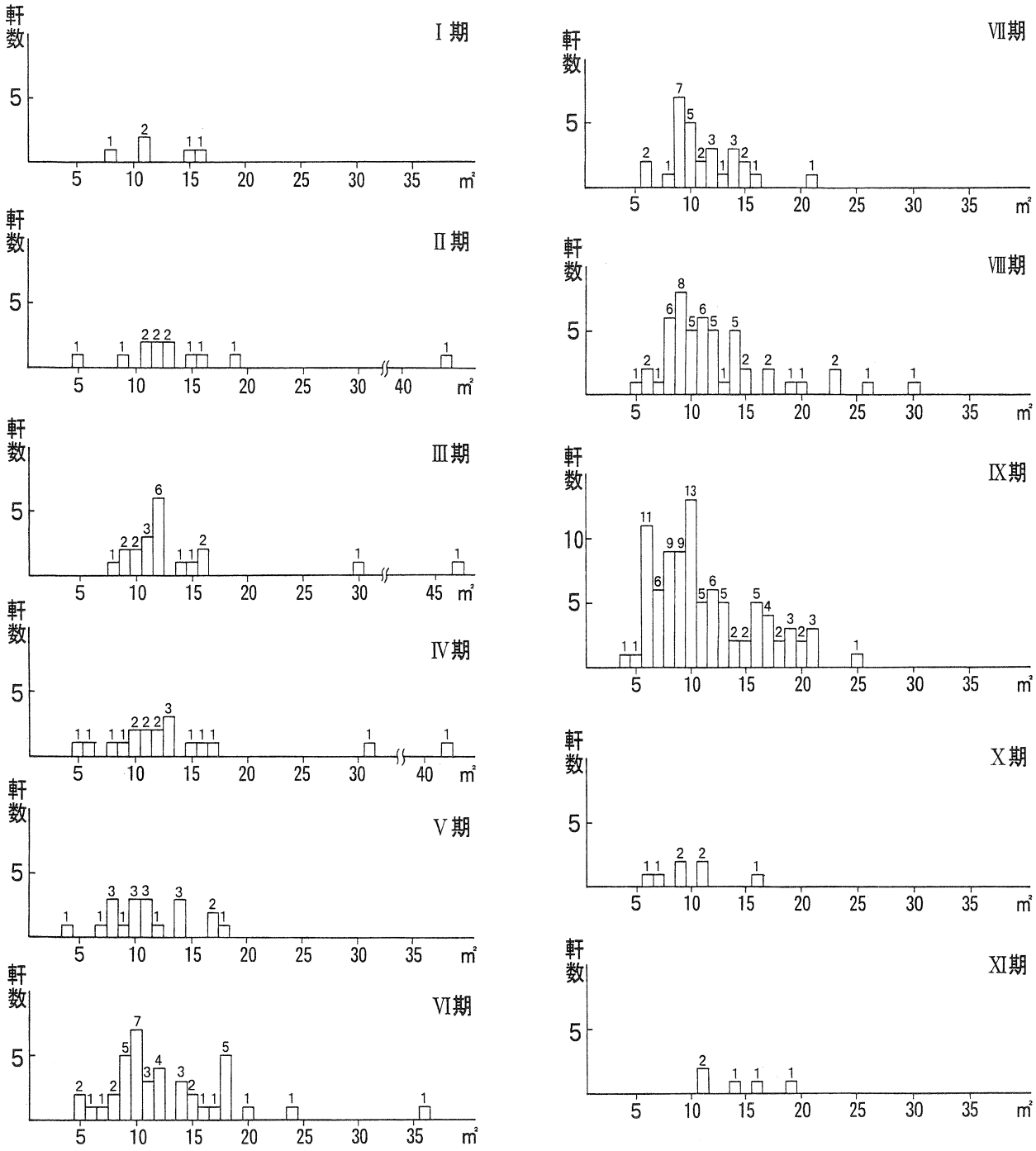
④周溝はカマドと同様にほとんどの住居址に巡っている。

⑤掘り方やいわゆる床下土坑等は住居址間の重複が激しく不明である。

以上が本遺跡における住居址のおおまかな構造とそれに付随する属性である。なお、平面形の名称については住居址の長辺と短辺の長さの差が長辺の長さの10%以内であれば正方形、それ以上であれば長方形とした。

⑵規　模

時期毎の床面積の分布を示したのが第29図である。これらの分布をみると、４㎡以上～10㎡以下の一群と11㎡以上～20㎡以下の一群、21㎡以上の一群が認められる。これらをそれぞれ小形・中形・大形とよびたい。時期毎の状況をみていくと、Ⅰ期は中形が主体的にみられ、平均床面積は10.9㎡である。Ⅱ期も前時期とあまり変わりはないが、40㎡を越す大形住居址が１軒みられ、平均床面積も15.0㎡となっている。Ⅲ期とⅣ期もⅡ期と同じような状況を示しており、両時期ともに30㎡を越す大形住居址が２軒ずつみられ、特にⅢ期には本遺跡の最大規模を誇る412号住(床面積47.1㎡)が存在する。Ⅲ期とⅣ期の平均床面積はそれぞれ14.9㎡と14.4㎡となっている。Ⅴ期も基本的にはⅡ期～Ⅳ期までの状況と変わりはないが、大形住居址がみられないためか、平均床面積も11.6㎡とやや狭くなっている。Ⅵ期になるとやや変化の兆しがみられる。小形と中形の割合がほぼ同じになる状況がみられ、大形住居址も２軒みられる。平均床面積は13.2㎡とややもち直している。Ⅶ期は小形住居址の割合が中形・大形より若干上回るようになる。平均床面積は11.8㎡である。Ⅷ期ではまた中形・大形住居址の割合が小形住居址よりわずかに上回るものの、小形住居址が増加傾向にあることには変わりはない。21㎡以上を越す大形住居址が４軒みられ全時期を通して最も多くなっているにもかかわらず、平均床面積は13.0㎡にとどまっている。Ⅸ期は住居址数が爆発的に増加する時期である。小形住居址の割合が大きくなり、大形住居址も３軒みられるものの、いずれも30㎡以下のものである。平均床面積も11.7㎡と規模の縮小化が著しく、５㎡にも満たない小形住居址もみられる。Ⅹ期は住居址軒数が少ないが、確認された住居址は小形・中形住居址に限られる。平均床面積は10.1㎡と最小値を示す。Ⅺ期も小形・中形住居址のみで、大形住居址はみられない。しかし平均床面積は13.8㎡と縮小傾向が一段落している。



第29図　竪穴住居址の時期別面積分布図

⑶カマドについて

カマドは全時期を通して、各住居址において普遍的にみられるものである。そしてカマドが構築される位置は大きく３つに分類できる。

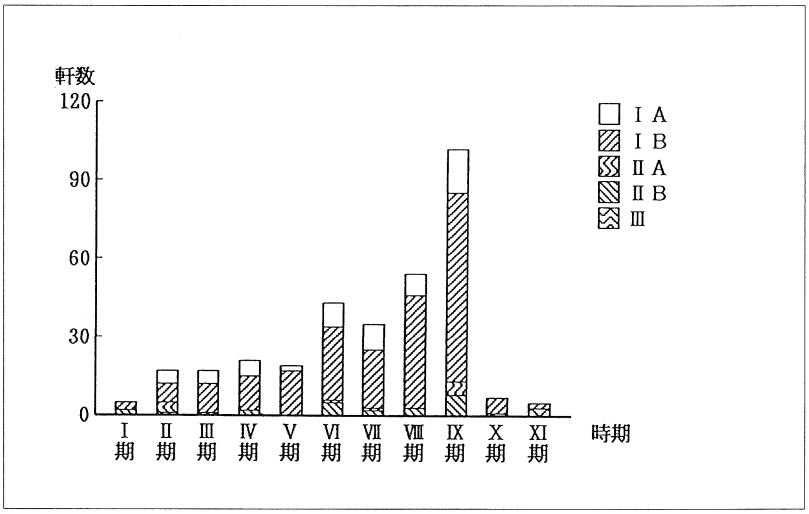
Ⅰ．東壁に構築されるもの

Ⅱ．北壁に構築されるもの

Ⅲ．コーナーに構築されるもの

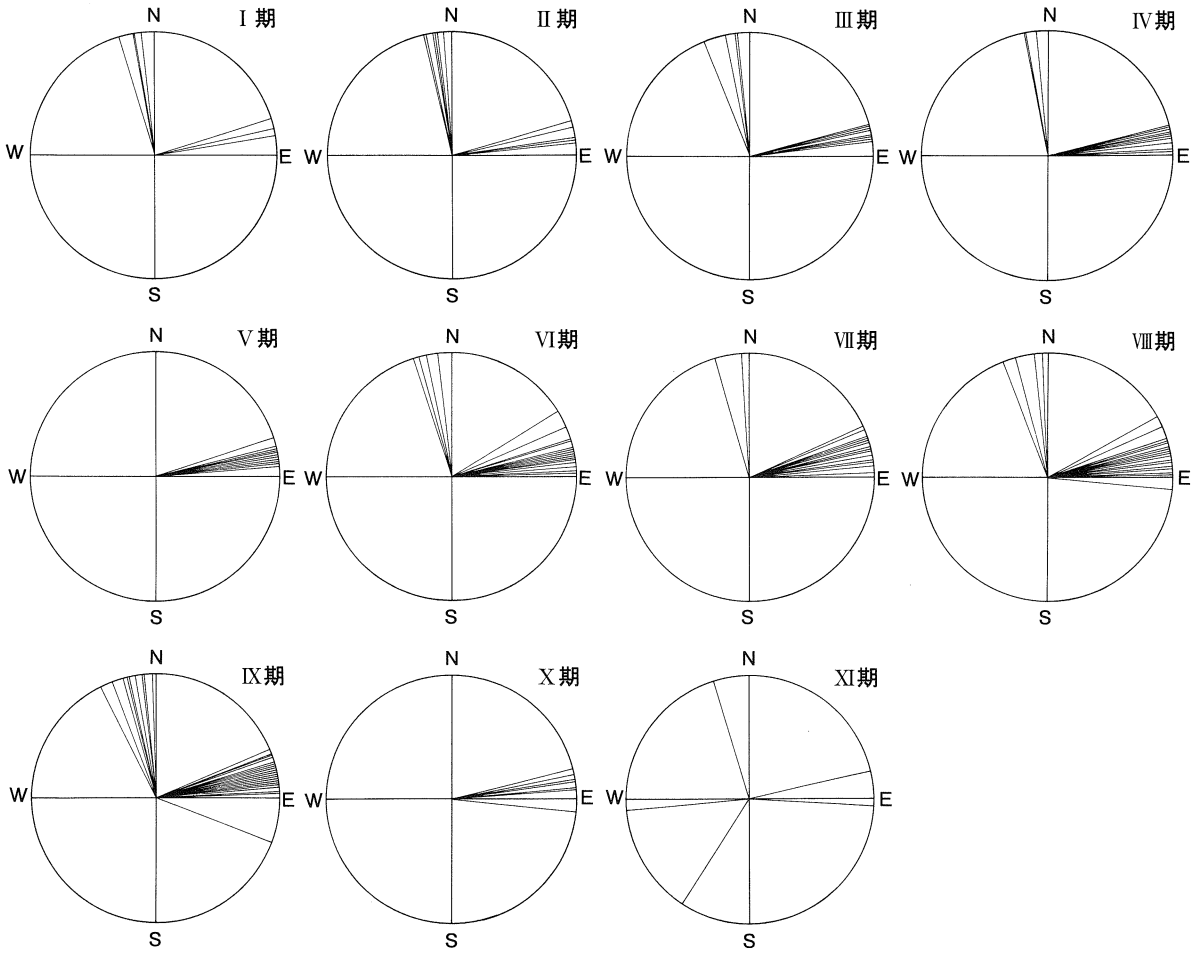
Ⅰ・Ⅱでもさらに両者を細かくみていくと、構築される壁のほぼ中央に位置するもの（A）と、どちらかの壁に寄るもの（B）とに分類できる。これらのなかで最も多いのがⅠBで、他を圧倒している。時期的な状況では、Ⅰ期とⅡ期段階では北壁と東壁にほぼ同数程度構築されていたが、Ⅲ期以降東壁に構築される傾向が強まってい

る。さらに両壁の構築される位置をみた場合、Ⅰ期とⅡ期段階では中央に構築される傾向が強かったのに対し、Ⅲ期以降両壁ともにどちらかの壁に寄る傾向が強まる。X期ではコーナーカマドも出現し、XI期ではコーナーカマドが主流を占めるようになる。カマドの造り替えはほとんどみられず、また、複数のカマドをもつ住居址もみられない。



第30図　時期別にみたカマド位置のありかた

カマドが構築される位置に関連して住居址の主軸方向についてもみてみたい。本報告書では、各住居址のカマドが構築されている壁に直交する方位を主軸方向としている。時期毎の主軸方向を示したのが第31図である。これをみるとカマドが東壁に構築される住居址の場合、Ⅰ期からⅤ期まではややバラツキはみられるも



第31図　竪穴住居址の時期別主軸方向分布図

のの、東へ70～90°の間におさまっている。VI期以降でも同様な範囲におさまるものが多い。しかし全体におけるバラツキが大きくなる傾向もみられ、東へ90°以上もふる住居址もみられる。カマドが北壁に構築される住居址についても同じような傾向がみられる。

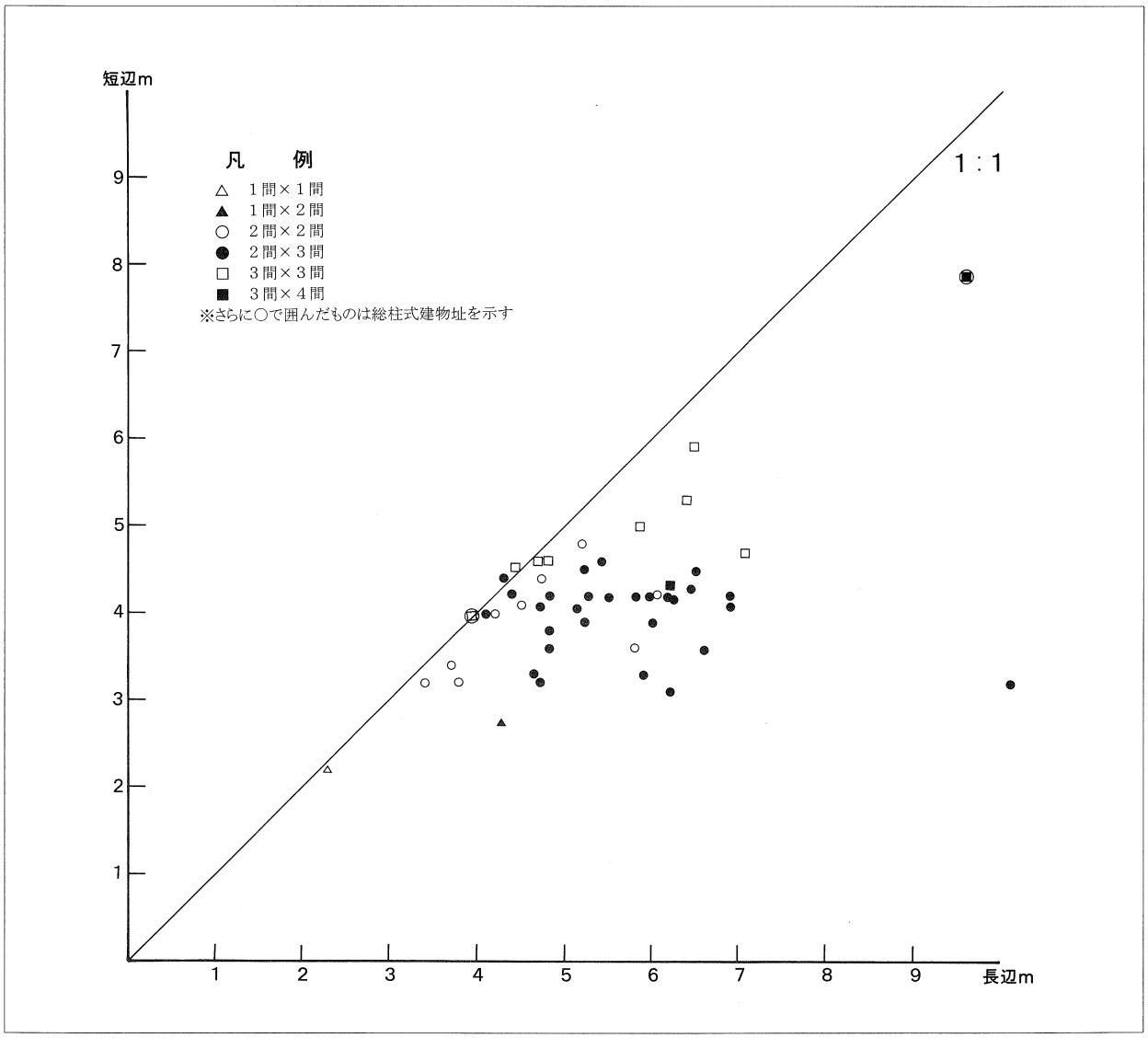
カマドの構造はいわゆる石組みカマドで、袖石や天井石に河川礫を使用し、それを粘土で覆っている。本地域では普遍的にみられる構造である。なかには、本報告書で焼成粘土柱とよんでいる直方体に整形した粘土柱を河川礫とともに袖の芯に用いているものも少数だがみられる。

2．掘立柱建物址について

掘立柱建物址は総数54棟と住居址総数に対する比率は低い。54棟のうち形態や規模等が判明するものは50棟で、これらを中心にみていくこととする。

(1)掘り方

柱穴の掘り方の形態は、方形あるいは矩形を基本とし、坪掘りが主である。いわゆる「溝もち」の掘り方をもつ例も８号掘立柱建物址の１例のみみられる。また、円形あるいは楕円形を基本とするものは、54棟のうち５棟で、すべて坪掘りである。柱痕は比較的明瞭なものが多く柱材が炭化して遺存しているものもみられた（３号掘立)。そして本遺跡で特徴的なのは、この柱痕内に多量の炭化物と焼土ブロックを含んでいることである。こうした柱痕をもつ建物址は１・２・７・10・11・12・20・25・26・27・33・34・35・36・39・42・43・48・52号掘立



第32図　掘立柱建物址の規模

等である。覆土の堆積状況から炭化物や焼土ブロックは自然に流入したというよりも、人為的な可能性が強く、建物の廃棄に伴って柱材を抜き取った後に人為的に充填された可能性が強い。特に10・11号掘立では多量の須恵器片も混入しており、何らかの儀礼等に伴って埋納されたものであろうか。

⑵形態と規模

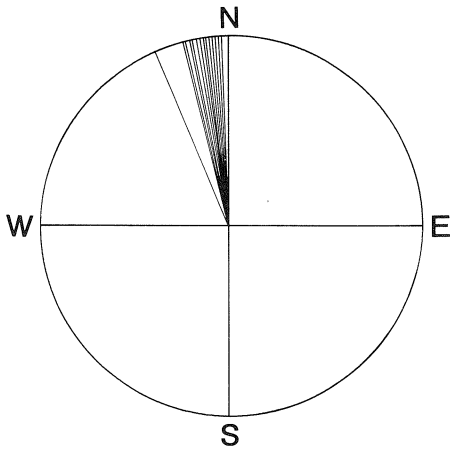
建物址の平面形態をみると、方形タイプと長方形タイプの二種類に分類できる。住居址と同じ基準を適用すると、正方形タイプのものは16棟、長方形タイプのものは34棟みられる。規模は、１間×１間が１棟、１間×２間が１棟、２間×２間が９棟、２間×３間が29棟、３間×３間が８棟、３間×４間が２棟である。構造的には側柱式のものと総柱式ものとに分けられ、側柱式のものが圧倒的に多い状況にある。また、「溝もち」の掘り方をもつ建物址は３間×３間の側柱式の建物址（８号掘立）にみられる。

それらの規模と面積の分布を示したものが第32図である。検出例の多い側柱式の２間×２間、２間×３間、３間×３間の建物址の面積分布をみると、２間×２間の建物址は、10㎡以上から26㎡未満の範囲に分布し、10㎡以上15㎡未満の範囲に分布する一群と、15㎡以上26㎡未満の間に分布する一群の２群に分けられる。平均面積は17.5㎡となっている。２間×３間の建物址は、15㎡以上35㎡未満の間に広く分布し、特に集中することはない。平均面積は22.4㎡となっている。３間×３間の建物址は20㎡以上40㎡未満の間で分布し、20㎡以上25㎡未満の範囲に分布する一群と25㎡以上40㎡未満の範囲に分布する一群の２群に分けられる。平均床面積は27.7㎡となっている。１間×１間、１間×２間、３間×４間の建物址はそれぞれ１棟ずつで、１間×１間の建物址（45号掘立）は本遺跡最小面積のもので、床面積は5.06㎡を測る。１間×２間、３間×４間の建物址の床面積はそれぞれ11.75㎡と26.66㎡を測る。これらのなかで２間×２間、２間×３間、３間×３間の建物址の平均床面積は、住居址のそれからすれば中形～大形の部類にはいるものである。これは掘立柱建物址の機能を考えるうえで重要な手がかりになると思われるが、平均床面積のみならず各期毎の竪穴住居址を含めた建物址の配置や集落構成も含め検討していかなければならないと思われる。

他方、総柱式の建物址は３棟のみで、掘立柱建物址全体を占める割合は低い。規模は２間×２間、２間×３間、３間×４間の規模をもつものが１棟ずつである。２間×２間の建物址（12号掘立）は、平面形が方形を呈し、床面積は15.44㎡を測る。２間×３間の建物址（17号掘立）は、平面形が長方形を呈し、床面積は20.88㎡を測る。３間×４間の建物址（14号掘立）は、平面形が長方形を呈し、床面積は75.36㎡を測る。本遺跡最大規模を誇り、正倉的な建物である。

⑶主軸方向

掘立柱建物址の主軸方向については、長辺・短辺関係なくすべて磁北に対して東西方向に何度振れているかであらわしている。それを示したものが第33図である。全体的にみると西方向へ１～16°の幅をもって振れており、住居址の主軸方向とほぼ同じ傾向を示している。建物址の所属時期については不明な点が多いが、住居址等他の遺構の傾向からすると、時期が降るにつれ、西側へ振る角度がやや大きくなる傾向がみられる。なお、正倉的な建物址である14号掘立柱建物址や全体の様相は不明であるが46号掘立柱建物址はほぼ真北に主軸をとっている。



第33図　掘立柱建物址主軸方向分布図

⑷建替えについて

本遺跡においては掘立柱建物址の建替えが比較的顕著にみられる。７号掘立と12号掘立、９号掘立と30・31号

掘立、10号掘立と16号掘立、11号掘立と21・22・23号掘立等のように数回にわたって同じ場所に建替えを行っている状況がうかがえる。掘立柱建物址は竪穴住居址との重複も比較的少なく、掘立と住居址はその占地にかんしてかなり意識して建てられたように思われる。換言すれば土地規制の強さを物語っているともいえよう。

3．溝址と溝状遺構をめぐる問題

⑴溝址について

溝址と溝状遺構の名称については“溝”ということで同じ意味合いで捉えられそうであるが、ここでは人間の手によって人工的に掘削されたと思われる“溝”を「溝址」、人間の手によって掘削されたものではない溝的な自然流路を「溝状遺構」とよんでいる。

溝址は埋没微高地上において24条検出されている。それらの大半は、奈良～平安時代の住居址を切って構築されている。しかし６号・12号溝址のように住居址等と直接的な重複関係をもたず、新旧関係が不明であったり、16号、18号、19号溝址等のように明らかに住居址に切られたり貼られたりしている溝址も認められる。本遺跡が所在する通称藤井平には条里型土地割が展開し、わずかではあるが「下条」「中条」等の条里との関連を示す地名も残っている。本遺跡で検出された東西南北方向にのびる溝址も条里に関連する遺構の可能性が強い。

注目されるのは、東西に直線的にのびる６号溝址と16号溝址で、両溝の間隔がおよそ109mを測るということである。これは条里型土地割に伴う里界溝の一部である可能性が考えられる。６号溝址は他の遺構との重複関係はなく時期的に不明な部分が多い。16号溝址は東端が１号溝状遺構と連結し、西端も検出された範囲でほぼ完結する溝址である。９～10世紀代の住居址を切って構築されている溝址が多いなかにあって、９世紀半ばおよび後半代の住居址に切られているかあるいは貼られている数少ない溝址の一つでもある。

一方、２条１対で南北方向にのびる７・８号溝址や９・10号溝址は、走行方位をＮ－14～15°－Ｗにとり、ほぼ平行してのびている。溝の間の幅は約1.5～2.0mを測り、溝自体の幅は約0.5～1.5mを測る。断面形はＵ字形を呈し、堆積土の状況からある程度の水が流れていたと思われる。７号溝址は確実に９世紀後半代の住居址を明確に切ってのびており、少なくともそれ以降に構築されたものである。これら２条１対の溝が畦畔の一部であるのかそれとも道路の一部であるのかは、調査開始当初の表土除去の段階で断面確認を怠ってしまったため検証はできていないが、いずれにせよ条里の坪境界や小区画の境界を示す畦畔等に伴う溝址であろう。

このように本遺跡の微高地上で検出された溝址は条里型土地割に伴う可能性が強く、面的に確認された例は山梨県内でもはじめてである。年代的にも９世紀前半代まで遡れる可能性があること、また９世紀後半代以降の溝址であることから、本遺跡周辺の条里型土地割の成立時期が段階的に求められそうである。こうした微高地上にみられる溝址の存在は、洪水等に見舞われやすい埋没旧河道内の稲作・畑作等の耕作地からより安定した微高地上へその耕作地を求めた開発のプロセスの一端をうかがえよう。

⑵溝状遺構について

溝状遺構は計４条検出されているが、そのうちの１条は弥生時代前期の水田址とごく近い段階のもので、ここでは微高地の縁辺を取り巻くように流れる奈良・平安時代の１・２号溝状遺構についてふれてみたい。

溝状遺構は微高地上の溝址とは異なり、人間の手によって掘削されない自然流路的なものである。１号溝状遺構は集落の東縁辺部を、２号溝状遺構は西縁辺部を南北にやや蛇行しながら流下している。１号溝状遺構では先にふれた16号溝址が連結しており、その連結する付近の溝状遺構内に堰状の石列がみられることからこの部分から引水していたと考えられる。２号溝状遺構では同遺構内にて素掘りの井戸状遺構がみられる。

遺物では、１号溝状遺構では木製品の出土はみられなかったが、２号溝状遺構では曲物等の多量の木製品類と獣骨、桃・胡桃等の堅果類の植物遺体が出土している。両溝状遺構ともに共通して出土しているものは多量の墨書土器と線刻土器で、ほぼ完形のもの、破片のもの等さまざまである。特に、２号溝状遺構では人面墨書土器も破片ながら出土し、斎串等の祭祀具も伴出していることから墨書土器等が何らかの祭祀と関係していたと考えられる。例えば２号溝状遺構の墨書土器の文字資料群のなかに「稲」と記された須恵器製坏がみられるが、これは農

耕儀礼や雨乞いに伴う祭祀が行われたことが考えられる。また、井戸状遺構の存在は、旱魃や洪水等の天候異変で、上流域の河川の流路が変更や河床の低下等に伴い溝状遺構内の流量が激減し、井戸を掘らざるをえなかった状況も想定できる。獣骨、桃・胡桃等の堅果類の植物遺体も、単なる食物残滓というよりは、祭祀的な性格が強いと考えられる。

以上のように、埋没微高地上の集落内にみられる溝址とその縁辺をめぐる溝状遺構は、有機的な関連をもって本集落の人々が耕地の拡大のために条里型土地割を段階的に推し進めていった状況がうかがえると同時に、種々の形態をもつ祭祀が行われた人々の精神的な拠り所であったこともうかがわれる。

4．集落の変遷　―竪穴住居址を中心として―

宮ノ前遺跡における出土土器の分析の結果から、奈良～平安時代はⅠ期からXI期までの変遷が辿れることが判明した。その成果を各遺構にフィードバックして宮ノ前遺跡の各期における集落構成（時期別遺構分布）をみていきたい。しかし周知のとおり、このような作業で得られる結果が当時の集落の様相をそのまま反映しているとはいえない。土器一型式の使用期間と竪穴住居址等の遺構の存続期間は必ずしも一致するわけでなく、また、土器資料に乏しい多くの竪穴住居址や掘立柱建物址は、その検討材料から外れてしまうからである。こうした問題も含みつつもここでは、土器資料を伴う竪穴住居址を中心に分析を行い、土器一型式の使用期間と竪穴住居址等の遺構の存続期間がある程度一致すると仮定し、以下に各期における竪穴住居址を中心に列挙し、その変遷をみていきたい。前述の理由から417軒すべてを列挙していないことを予め断っておきたい。また、本遺跡に隣接し同じ埋没微高地上に立地する韮崎市教育委員会調査分の北後田遺跡Ｂ区の竪穴住居址群も含めその分布をみていくことにする。先にもふれたように、北後田遺跡Ｂ区の竪穴住居址群も同一埋没微高地上に立地することから、宮ノ前遺跡の集落址の一部であろう。

以下に各期における竪穴住居址を中心とした遺構を挙げてみたい。

〈宮ノ前Ⅰ期〉

本期では８軒の竪穴住居址と２～３棟の掘立柱建物址がみられる。竪穴住居址は51・55・81・170・182・200・333・404号住居址が該当する。この段階にはすでに埋没微高地東側を流れる１号溝状遺構と西側を流れる３号溝状遺構が存在していた可能性が強い。

〈宮ノ前Ⅱ期〉

本期では17軒の竪穴住居址がみられる。126・129・141・214・225・235・242・252・276・349・358・374・375・381・387・396・404号住居址が該当する。

〈宮ノ前Ⅲ期〉

本期では26軒の竪穴住居址がみられる。41・42・165・172・179・211・244・260・271・282・295・317・325・328・334・340・351・361・370・372・373・377・378・383・390・412号住居址が該当する。

〈宮ノ前Ⅳ期〉

本期も18軒の竪穴住居址がみられる。96・100・112・150・199・217・230・265・268・272・311・313・318・329・341・390・391・398・414号住居址が該当する。

〈宮ノ前Ⅴ期〉

本期では24軒の竪穴住居址がみられる。２・８・65・66・85・93・125・138・142・159・167・193・197・206・208・212・236・248・267・273・278・376・395・410号住居址が該当する。

〈宮ノ前Ⅵ期〉

本期では43軒の竪穴住居址がみられる。３・６・12・13・21・22・39・48・52・54・57・59・76・77・99・102・107・111・114・121・130・137・146・148・207・216・219・221・254・261・288・293・296・302・306・309・330・331・337・356・379・416・420号住居址が該当する。２号溝状遺構はこの段階ではすでにその機能が停止していたようである。

〈宮ノ前Ⅶ期〉

本期では34軒の竪穴住居址がみられる。5・16・25・29・33・37・40・46・70・91・110・113・116・124・128・131・155・164・180・185・187・191・195・196・210・223・231・238・292・307・315・344・392・409号住居址が該当する。

〈宮ノ前Ⅷ期〉

本期では58軒の竪穴住居址がみられる。4・30・32・60・64・68・87・104・115・139・143・144・149・151・152・153・162・176・178・181・186・188・194・215・226・239・243・245・246・250・251・266・270・286・290・291・294・300・304・308・314・316・320・324・327・343・345・346・348・352・354・366・367・384・400・413・418・419号住居址が該当する。

〈宮ノ前Ⅸ期〉

本期では109軒の竪穴住居址がみられる。9・10・14・17・18・19・24・26・27・28・34・35・36・38・45・47・49・50・58・61・62・63・69・71・72・74・78・83・84・86・89・105・109・117・118・119・120・127・132・133・140・145・147・154・158・160・161・163・166・169・171・177・183・189・198・204・205・218・222・224・227・228・233・234・237・240・247・253・255・256・259・264・274・275・282・283・284・285・287・298・299・301・303・305・310・318・321・323・326・332・335・339・347・350・353・357・359・364・365・368・369・385・389・397・401・402・403・406・411号住居址が該当する。

本期は土器様相においても段階的変化属性が捉えにくい時期で、漸移的な変化が捉えられれば、竪穴住居址数も分散できる可能性がある。

〈宮ノ前Ⅹ期〉

本期では7軒の竪穴住居址がみられる。11・15・23・78・109・218・338号住居址が該当する。

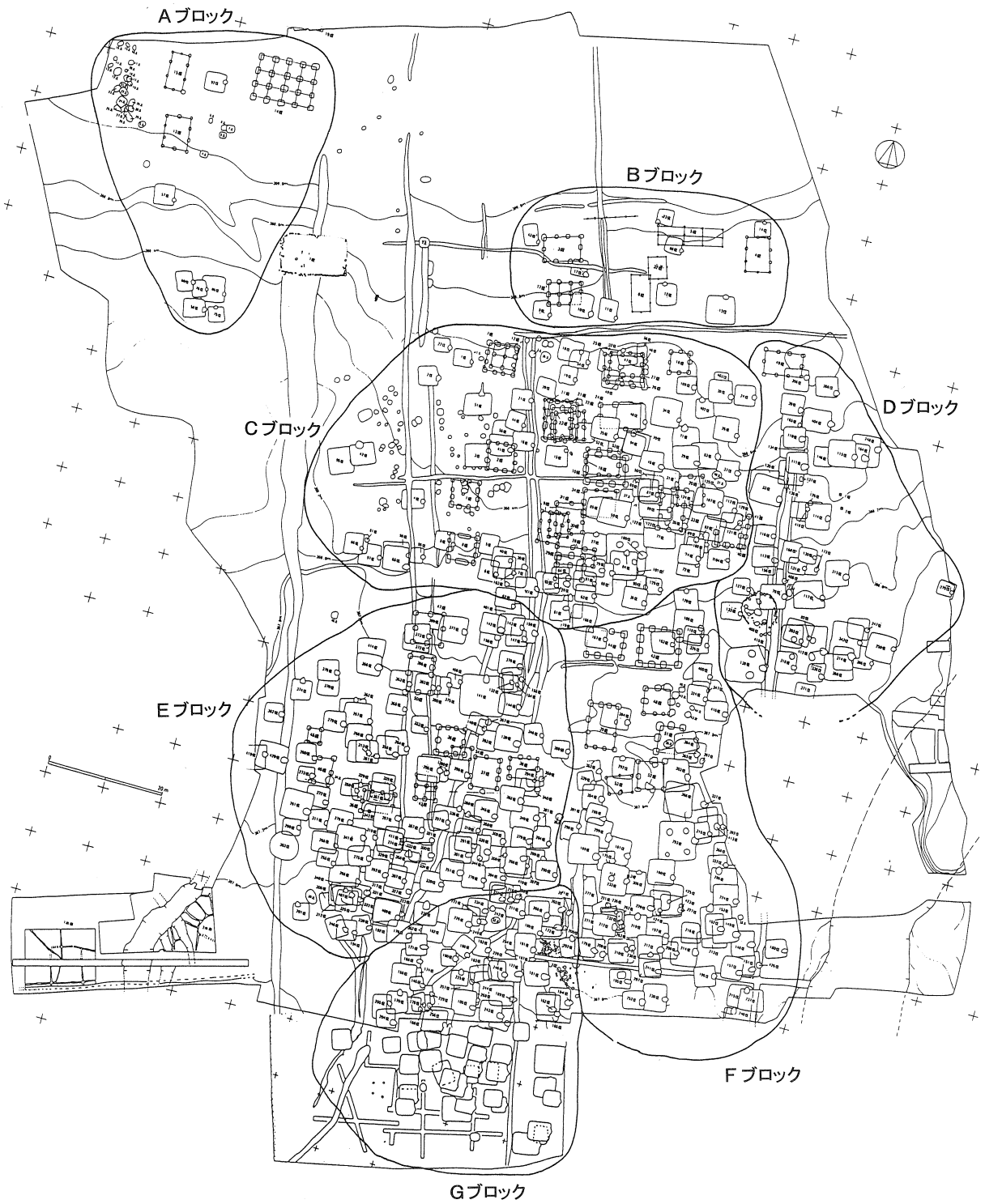
〈宮ノ前Ⅺ期〉

本期では5軒の竪穴住居址がみられる。7・80・82・106・385号住居址が該当する。

以上、宮ノ前Ⅰ期からⅪ期まで、各期に属すると考えられる竪穴住居址を列挙してみた。奈良～平安時代における竪穴住居址総数417軒のうち、ここに挙げた349軒分についてはある程度時期的に判別できたが、残り68軒分については重複のため遺構の破壊が著しかったり、良好な出土遺物資料に恵まれなかった竪穴住居址である。そのため各期ごとにおいて軒数が増加する可能性があることを考慮に入れておかなければならない。

各期ごとの状況を概観する前に本遺跡全体の遺構の分布状況をみてみよう。一見すると遺構どうしの重複が著しくまとまりのつかない状況にみえる。特に竪穴住居址が顕著であるが、しかしよくみると竪穴住居址を中心とした遺構の分布域がおおよそA～Gの7つのブロックに区分できそうである。各ブロックは明瞭に分かれるものではなく、互いに重複している状況である。はたしてそうした分布のまとまりが、いわゆる単位集団的まとまりであって、その各分布域が各単位集団のテリトリーとして捉えられ、土地割りが存在したのかはさらに詳細な分析が必要となってこよう。

各ブロックの分布状況は次のとおりである。Aブロックは本遺跡北西端に位置し、正倉（詳細な所属時期は不明）ともいえるべき大形の掘立柱建物址（14号掘立）がみられる。遺構群はまだ調査区域外に広がるようである。本ブロックは他のブロックとはやや隔絶した感があり、おそらく異なる埋没微高地上に立地するものであろう。Bブロックは埋没微高地の北端に位置し、比較的明瞭に捉えられるブロックである。北側への建物群の広がりはこれ以上みられないようである。Cブロックは埋没微高地のほぼ中央部に位置し、竪穴住居址とともに掘立柱建物址も多くみられるブロックである。Dブロックは埋没微高地の東縁部に位置し、南北に長いブロックである。Eブロックは埋没微高地の中央部のやや南寄りの西縁部に位置し、竪穴住居址がきわめて密集するブロックである。Fブロックは微高地の南東縁に位置し、南北にのびるブロックである。C・Eブロック等と比べると比較的空閑地がみられるが、16号溝址を境とする南側では竪穴住居址の重複が著しい。Gブロックは埋没微高地南端に位置し、前述の北後田遺跡B区の竪穴住居址群を含むブロックである。E・Fブロックそれぞれの境界はやや不



第34図　奈良・平安時代集落の居住ブロック

明瞭である。それでは以下において各期の遺構の分布状況をみてみよう。

《宮ノ前Ⅰ期（８世紀第１四半期中心）》

本期は奈良時代の集落が初めて姿を現わす時期である。前段階の６～７世紀代の遺構や遺物がまったくみられないことからも忽然と現われたといってもよい。埋没微高地の北側（Ｃ・Ｄブロック）と南側（Ｅ・Ｇブロック）に竪穴住居址がみられ、中央部分は空閑地となっている。掘立柱建物址は40・41・49号掘立柱建物址が竪穴住居址との新旧関係から本期にほぼ伴うものと考えられ、９・12・14号掘立柱建物址もその可能性がある。その他の遺構では埋没微高地の東縁と西縁にみられる１・２・３号溝状遺構がすでに存在していた可能性が強い。

《宮ノ前Ⅱ期（８世紀第２四半期中心）》

本期では竪穴住居址数が前期に比べ倍増している。竪穴住居址はＣ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇブロックにみられ、特に南側のＥ・Ｇブロックが分布的に中心となる。Ｅブロックでは、文字資料がまだ少ない当該期にあって、「寺」と記された線刻土器が出土した超大形住居址（141号住）がみられ、住居址の規模や出土遺物等から中核的な住居址であったことがうかがわれる。Ｃブロックでは建物の中心が掘立柱建物址となるようで、竪穴住居址との新旧関係や掘立柱建物址の構造等から同ブロック内西側にみられる１・２・７号掘立柱建物址が本期に伴う可能性が強い。

《宮ノ前Ⅲ期（８世紀第３四半期中心）》

本期は竪穴住居址が26軒で、前期に比べ多少増加するものの目立った増加をみせていない。その分布も前期と同様にＣ～Ｇブロックにみられる。Ｃブロックでは前期において掘立柱建物址の占地場所に竪穴住居址がみられるようになり、掘立柱建物址は同ブロック内の東側に移るようである。しかし中心となる建物址は掘立柱建物であるといえよう。本期に確実に伴う可能性のある建物址は16号掘立柱建物址のみであるが、同ブロック内の時期不明の建物址の多くが本期に伴う可能性がある。ＤブロックとＧブロックでは本期になると、大形住居址（244・412号住）が出現する。

《宮ノ前Ⅳ期（８世紀第４四半期中心）》

本期の竪穴住居址軒数は、前期とほぼ変わらず推移している。その分布はＣ・Ｄ・Ｅ・Ｆブロックにみられ、Ｇブロックには本期では竪穴住居址がみられない。Ｃブロックでは前期に引き続き同ブロック内にて掘立柱建物址群がみられ、本期では新たに大形住居址（100号住）が現われる。Ｅブロックでは大形住居址はみられないものの、竪穴住居址の密集度が他のブロックに比べ引き続き高い。Ｆブロックでは同ブロック内南側の16号溝址に近接した場所に竪穴住居をつくっている。この付近はⅡ期からほぼ踏襲しているかのように、竪穴住居がつくられている。

《宮ノ前Ⅴ期（９世紀第１四半期中心）》

本期は24軒の竪穴住居址がみられ、Ⅱ期からほぼ変わらず推移している。その分布はＣ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇブロックにみられ、Ｃブロックでは７軒の竪穴住居址がみられ、前期より増加傾向にある。そうしたことから本期以前までその建物構成の主流が掘立柱建物だったのが、本期からは反対に竪穴住居が中心となる状況がうかがえる。しかし同ブロック北側の竪穴住居址がみられない場所には、23・27号掘立柱建物址等の掘立柱建物が少なからず存在した可能性も考えられる。Ｄブロックでは大形住居址（138号住）がみられ、Ｆブロックでは１軒程度しかみられず、Ｆブロックについては前期までと同様に、ブロック内南側に竪穴住居がつくられる。Ｅブロックでは同ブロック内南側に２軒ほどみられるが、北側にその分布の中心がみられる。また、本期に38号掘立柱建物址も同ブロックに伴うようであり、これら竪穴住居群の間に掘立柱建物がつくられている。時期不明の36号掘立柱建物址も本期に伴うものかもしれない。Ｇブロックでは前期でみられなかった竪穴住居址が再びみられるようになる。なお、竪穴住居址以外ではＦブロック南側で東西にのびる16号溝址が、竪穴住居址との新旧関係から本期をもってその機能がほぼ停止したと考えられる。

《宮ノ前Ⅵ期（９世紀第２四半期中心）》

Ⅱ期以降、全体の竪穴住居址軒数が20数軒単位で推移してきたが、本期ではその軒数が43軒と以前に比べ倍近くに増加する時期である。その分布はすべてのブロックにおいてみられる。Ａ・Ｂブロックでは本期になっては

じめて竪穴住居がつくられるようになり、それぞれ２軒ずつみられる。Ｃブロックでは12軒の竪穴住居址がみられ、前期から引き続き掘立柱建物から竪穴住居へと建物構成が変化している状況がうかがわれる。ブロック内ほぼ全域にわたって竪穴住居が分布し、同ブロック東側では比較的規模の大きい59・99・107号住居址がやや密集している。Ｄブロックでは前期では１軒だったのが６軒と増加し、南北にほぼ一列に並ぶようにみられる。何らかの土地割が存在したのであろうか。Ｅブロックでは本期においても10軒と、Ⅱ期以降安定した竪穴住居址数を誇っている。本期の竪穴住居址の分布は中央部に空間をもつ環状を呈している。Ｆブロックでは今までまったく竪穴住居が占地されなかった同ブロック中央部付近にはじめて293・337・416号住居址等の竪穴住居がみられるようになる。293・337号住居址はともに大形住居址である。Ｇブロックでは前期において一旦竪穴住居址数が増加したが、本期でまた減少し、２軒程度となる。Ⅳ期以降、同ブロック南側ではまったく住居がみられない。

《宮ノ前Ⅶ期（９世紀第３四半期中心）》

本期では前期において倍増した竪穴住居址の増加傾向は落ち着き、その数は35軒とやや減少しているが、ほぼ横這い傾向とみてよかろう。時期不明の竪穴住居址がまだ本期に伴う可能性がある。再びＡ・Ｂ両ブロックでは竪穴住居址がみられない。Ｃブロックでは前期に引き続き12軒の竪穴住居址がみられ、その分布状況は環状に近い形を呈している。Ｄブロックでは前期から引き続いて同ブロック内中央部分に竪穴住居をつくっている。本期で唯一、大形住居址（33号住）をもつブロックである。Ｅブロックでは前期に比べると、竪穴住居址が減りその分布状況も散漫となる。同ブロックの中心部は大きく空閑となっているが、35号掘立柱建物址が伴う可能性がある。Ｆブロックでは前期にみられた大形住居址は姿を消し、その場所は空閑となっている。その空閑を挟んで中形の竪穴住居址が分布している。Ｇブロックでは本期に入って再び竪穴住居址が増加する兆しがみられる。中形の規模をもつ191・185号住を中心に分布している。

《宮ノ前Ⅷ期（９世紀第４四半期中心）》

本期に属する竪穴住居址は58軒で、再び増加傾向がみられる。Ａ・Ｂ両ブロックでは顕著な変化はみられないものの、Ａブロックでは再び竪穴住居址がみられる。Ｃブロックも前期に比べ若干竪穴住居址の数が減っているものの、大形住居址の68号住址もみられ安定して竪穴住居址がみられる。また、出土遺物の時期から31号掘立柱建物址も伴う可能性が強い。Ｄブロックでは分布域をやや東側に移し南側に大形住居址を配している。Ⅵ期・Ⅶ期では竪穴住居址が隣接した状況でまとまってみられたが、本期ではその状況は崩れている。Ｅブロックでは竪穴住居址が再び急増し、同ブロック内の東側寄りに、南北に三日月状に竪穴住居址がみられる。中形の規模をもつ竪穴住居址が中心で大形住居址は存在しない。密集した状況であり、建替えも頻繁であったことがうかがえる。Ｆブロックでも竪穴住居址の分布域が若干東側に移動し、南北方向に長く分布している。Ｇブロックは前期に引き続き竪穴住居がつくられ、その数も増加している。

《宮ノ前Ⅸ期（10世紀前半中心）》

本期は全期を通じて竪穴住居址の数が最も膨れあがる時期で、その総数は109軒に及んでいる。その一要因としてやや他の時期に比べ年代幅を長く設定しているためかもしれない。竪穴住居址は軒数の多少はあるものの全ブロックにみられる。Ａブロックでは２軒ではあるが、前期から引き続いてみられ、ＢブロックでもⅥ期以降久しぶりに竪穴住居がつくられるようになる。Ｃ～Ｇブロックではそれぞれブロックで竪穴住居址が密集した状況を呈し、中形や小形の住居址が中心で建替えが頻繁に行われている。そのため竪穴住居址の総数109軒を数えるものの、同時存在したものは他の時期よりやや多いとも考えられるが、さほど多くはないと考えられる。

《宮ノ前Ⅹ期（10世紀後半中心）》

本期は劇的に竪穴住居址の数が減少する時期で、前期の一割にも満たない７軒の竪穴住居址を数えるのみである。本期ではじめてコーナーカマドをもつ竪穴住居址が現われる（23号住）。Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅの各ブロックに竪穴住居址が散在した状況でみられ、Ｂ・Ｃ・Ｄの各ブロックに２軒ずつ、Ｅブロックに１軒分布している。Ｅ・Ｆ・Ｇブロックでは特にその減少傾向が著しく、それら３ブロックは本期においては空閑地となっている。

《宮ノ前XI期（11世紀前半中心）》

本期も前期に引き続き竪穴住居址は少ない。本期の竪穴住居址はコーナーカマドのものが多い。C・D両ブロックに計５軒みられ、前期の段階で竪穴住居址がみられたB・E両ブロックからは消えている。ただ、Bブロックでは５・６・32号掘立柱建物址、１号柵列状遺構が伴う可能性がある。E・F・G各ブロックは本期では完全に空閑地となっている。

以上のように、８世紀初頭から11世紀前半にかけての連綿と営まれてきた集落の変遷をⅠ期からIX期に区分し竪穴住居址を中心にみてきた。また、竪穴住居は埋没微高地上にランダムな状況で分布しているのではなく、最低７つのブロックに分かれて分布し、その中で断絶と移動を繰り返していることを垣間見ることができた。

８世紀の初めに突如として出現した集落は、当初８軒程度の竪穴住居と数棟の掘立柱建物でスタートする。それらは埋没微高地の北側と南側に分かれており、最低２つの集団が移り住んできた様子がうかがわれる。８世紀前半代は、律令政府によって口分田不足を補うために「百万町歩開墾計画」「三世一身法」や「墾田永年私財法」等の開墾奨励策が相次いで出されている。おそらく当該期の宮ノ前遺跡の集落もそうした開発を推し進めるために新たに再編された集団が移り住んで営まれた集落と思われる。本遺跡における奈良時代の直前段階である６～７世紀代の遺構および遺物は皆無に等しい状況にあることからも、開墾集団の計画的移住とみてもよかろう。宮ノ前Ⅰ期の段階では竪穴住居の規模にも較差は特にみられず等質的な姿が捉えられる。しかし宮ノ前Ⅱ期の段階になると、Eブロックでは大形竪穴住居が出現し、またCブロックでは掘立柱建物が集中するというように、階層分化の現象が捉えられる。Cブロックにおける掘立柱建物の集中傾向は、およそ宮ノ前Ⅴ期段階まで続き、遺構外ではあるが中央と政治的、文化的に関連を示すような円面硯や三彩陶器等の遺物が出土しており、また、当該期の墨書土器に「宅」と記されたものがみられ、同ブロックの掘立柱建物址群が有力者層の居宅であったことが推測できる。

宮ノ前VI期段階すなわち９世紀第２四半期頃に竪穴住居が前代に比べ倍増する時期が認められた。ここで注意しなくてはならないことは、Fブロックにおける状況である。つまり先に少しふれたが、集落出現段階からほとんどみられなかった竪穴住居が、当該期に突如全体に展開するということである。これは本節３の「溝址と溝状遺構をめぐる問題」の頁でもふれた条里型土地割に伴う溝と考えられる６号溝址と16号溝址が関連していると思われる。前者の溝址はBブロックとC・Dブロックを区切るように東西にのび、後者の溝址はFブロック内を東西にのびており、推測の域をでないが、本ブロックは集落出現段階から水田および畑等の可耕地として意識されてきたブロックであったのではあるまいか。移住当初は洪水の危険をはらんだ低湿な土地（旧河道）のみの開発から、より高度な潅漑システムが必要な高燥な土地（微高地）への開発が試みられようとしていた状況がうかがえる。そしてその開発が条里施工に伴う可能性の強いことが考えられるのである。しかし続く９世紀第３四半期以降、それ以前まで生産域として意識されてきたFブロックに竪穴住居等の遺構群が展開することは、この微高地上の開発に行き詰まった状況が推測される。16号溝址は１号溝状遺構から引水していた可能性があることはすでに述べたが、本集落が立地する埋没微高地の縁辺を流れる１号および２号溝状遺構は、宮ノ前VI期段階を最後にその機能をほとんど失ってしまったようで、主要河川の流路の変更や河床低下、あるいは旱魃によってその水量が著しく低下してしまった状況が考えられる。９世紀半ばにはこうした気候的、地形的な変化が起こったのかもしれない。

条里施行失敗以後も埋没微高地上では、竪穴住居等の建物群が多少の増減を繰り返しつつ推移し集落も安定して営まれている。おそらく引き続き本集落周辺の低湿な土地での開発や耕営を中心に行っていたと思われる。特に、宮ノ前VI期以降、鉄製品のなかで紡錘車など紡織関係遺物が増加する傾向があることから、水田のみならず畑の開拓および耕作も積極的に行っていた状況が推察できる。また、本集落の中核的なブロックであったCブロックでは、宮ノ前Ⅴ期以前、官衙的な掘立柱建物址を中心とする建物構成だったのが、VI期以降大形住居址を中心とする竪穴住居址群を中心とする建物址群に代わっていく。このことは集落内の有力者層の性格の変質を意味しているようにも思われる。そして宮ノ前IX期（10世紀前半）に再び竪穴住居が激増し、全時期を通して最も集落

が拡大する。当該期では超大形住居址はみられないものの、床面積30㎡以下の大形住居址と５㎡以下の小形住居址がみられ、特に小形竪穴住居址の増加が際立っている。両者の規模の較差が顕著となることから、階層分化がさらに進んだことがわかる。これは10世紀以降の律令体制の弛緩に伴い、有力農民層による私的な開発が活発に行われた結果とみることができよう。

続く宮ノ前Ｘ期（10世紀後半）および宮ノ前XI期（11世紀はじめ）になると前述のとおり竪穴住居は激減し、11世紀後半には埋没微高地上では集落が営まれなくなる。宮ノ前Ｘ期・XI期の集落は、竪穴住居址が散在的に分布し、それまでの集団のテリトリーを示すようなブロックはこの段階で消滅したといってよいだろう。竪穴住居址の規模についても宮ノ前Ｉ期のようにあまり較差がなく前代とは異なった集落様相をみせている。おそらく新たな開発のための集団の集落であろう。その新たな開発とは、微高地上に縦横にのびる溝址が物語っているように、条里型土地割をもつ耕地の開発である。この開発の背景には在地領主的な有力者層の出現を想定でき、９世紀中頃にみられた地形的変化が10世紀代に入ってさらに進んだことで土地条件が安定し、洪水をうける危険が減り安定した耕田経営が行えるようになったため、この埋没微高地にも開発の手が及んだことが考えられる。当該期の埋没微高地上にはその新たな開発を指揮する在地領主層の居住を示す痕跡は認められないが、調査区域外にその存在を求めることができよう。

このように２世紀以上にわたりこの集落を維持できたのは、生業面からすれば稲作や畑作を行うためにそれ相当の可耕地が存在したことに他ならない。集落は宮ノ前遺跡の他、周辺に点在する埋没微高地上には、大小の規模の差はあれ、同時代同時期の集落遺跡が複数存在することが近年の発掘調査によって判明している。そうしたなかで開発初期にあたっては先にふれた本遺跡の宮ノ前II～Ⅴ期段階の掘立柱建物址群が示すように本集落には郡および郷レベルで政治的・経済的に密接に結びついた在地の有力者層が存在し、本集落や周辺集落、あるいは耕地の開発・維持・管理にあたっていたと考えられる。本集落遺跡の性格の一端が浮かんでこよう。

〈宮ノ前Ⅰ期〉

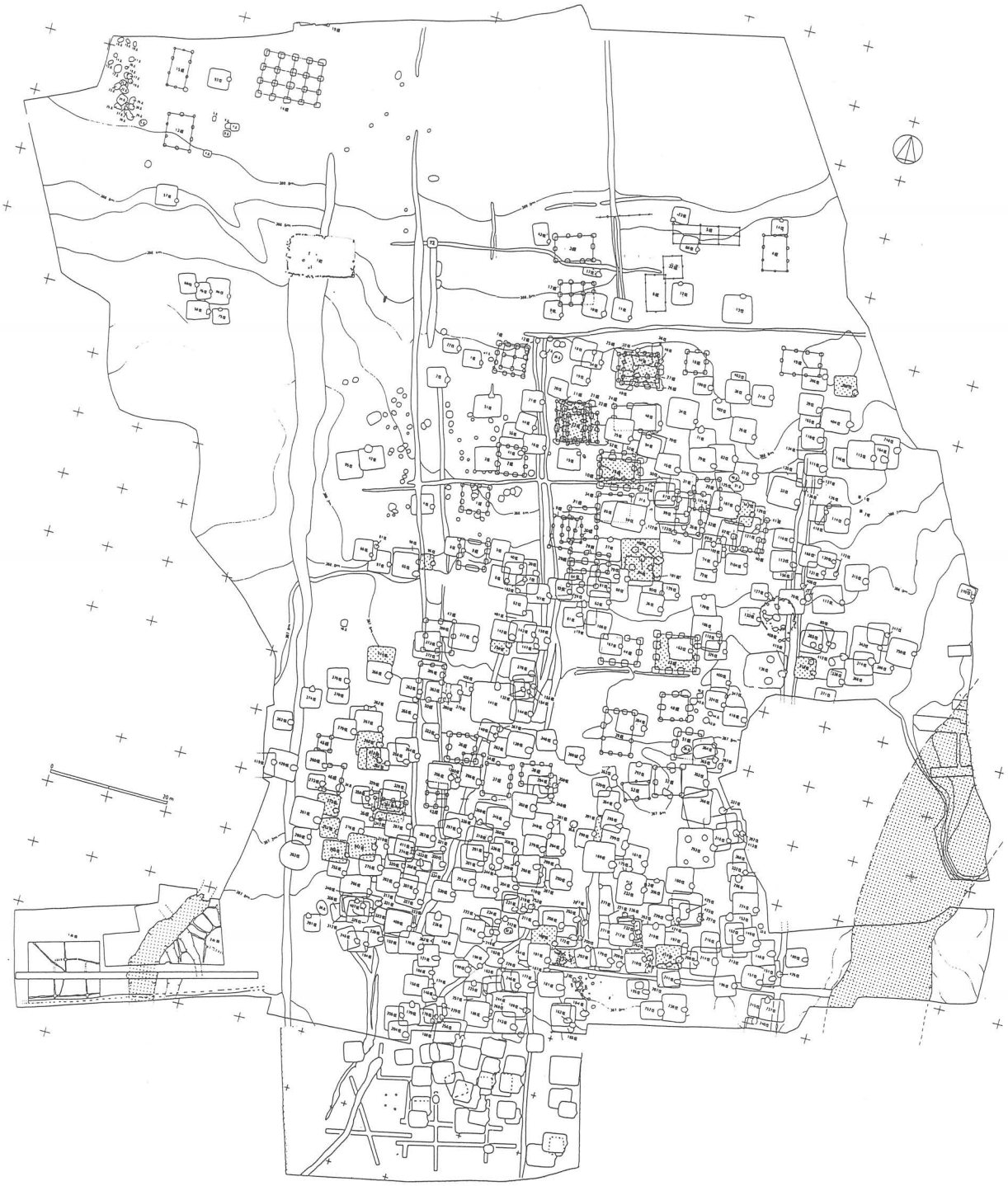
第35図　遺構変遷図(1)

〈宮ノ前Ⅱ期〉

第36図　遺構変遷図(2)

〈宮ノ前Ⅲ期〉

第37図　遺構変遷図(3)

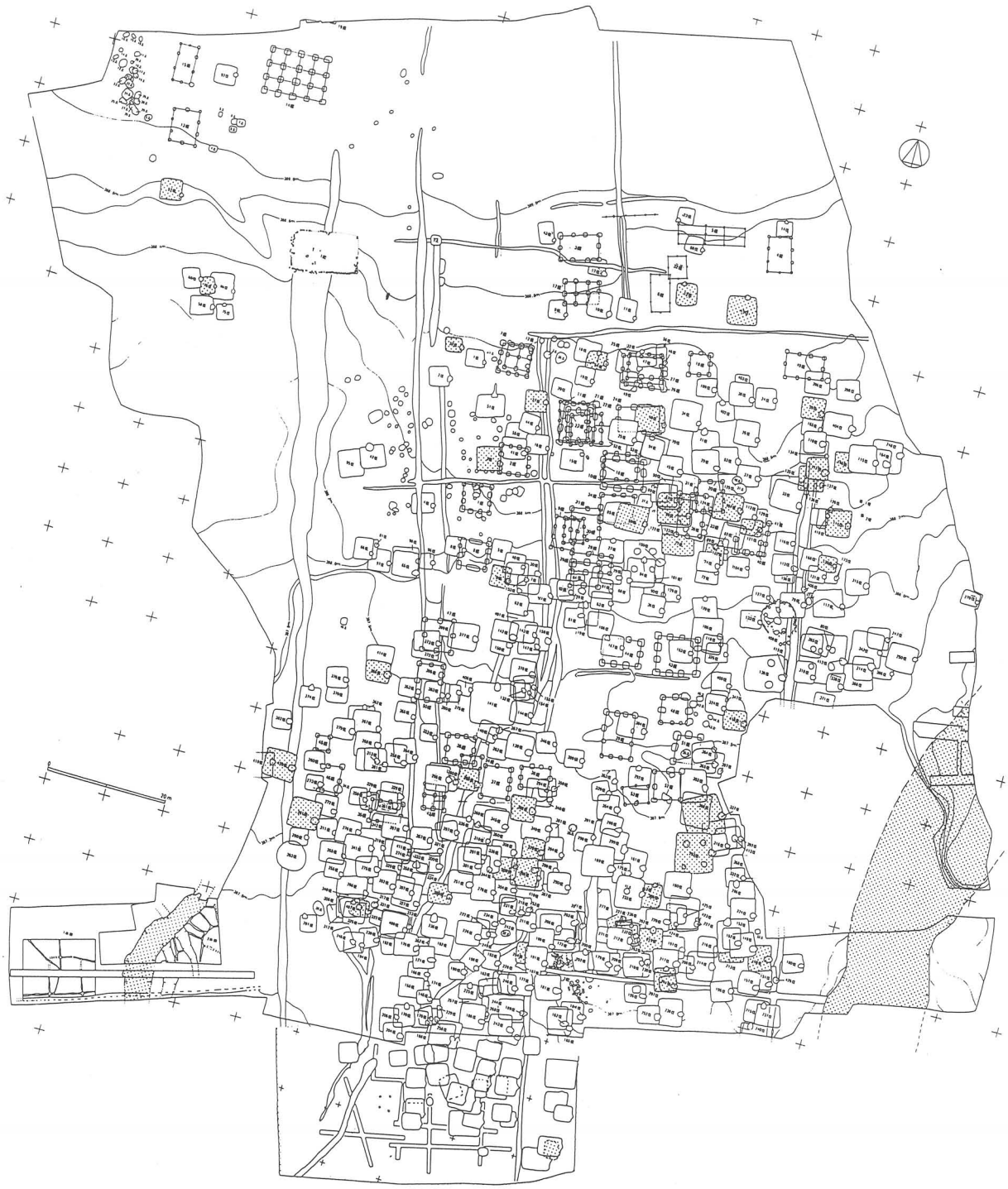


〈宮ノ前Ⅳ期〉

第38図　遺構変遷図(4)

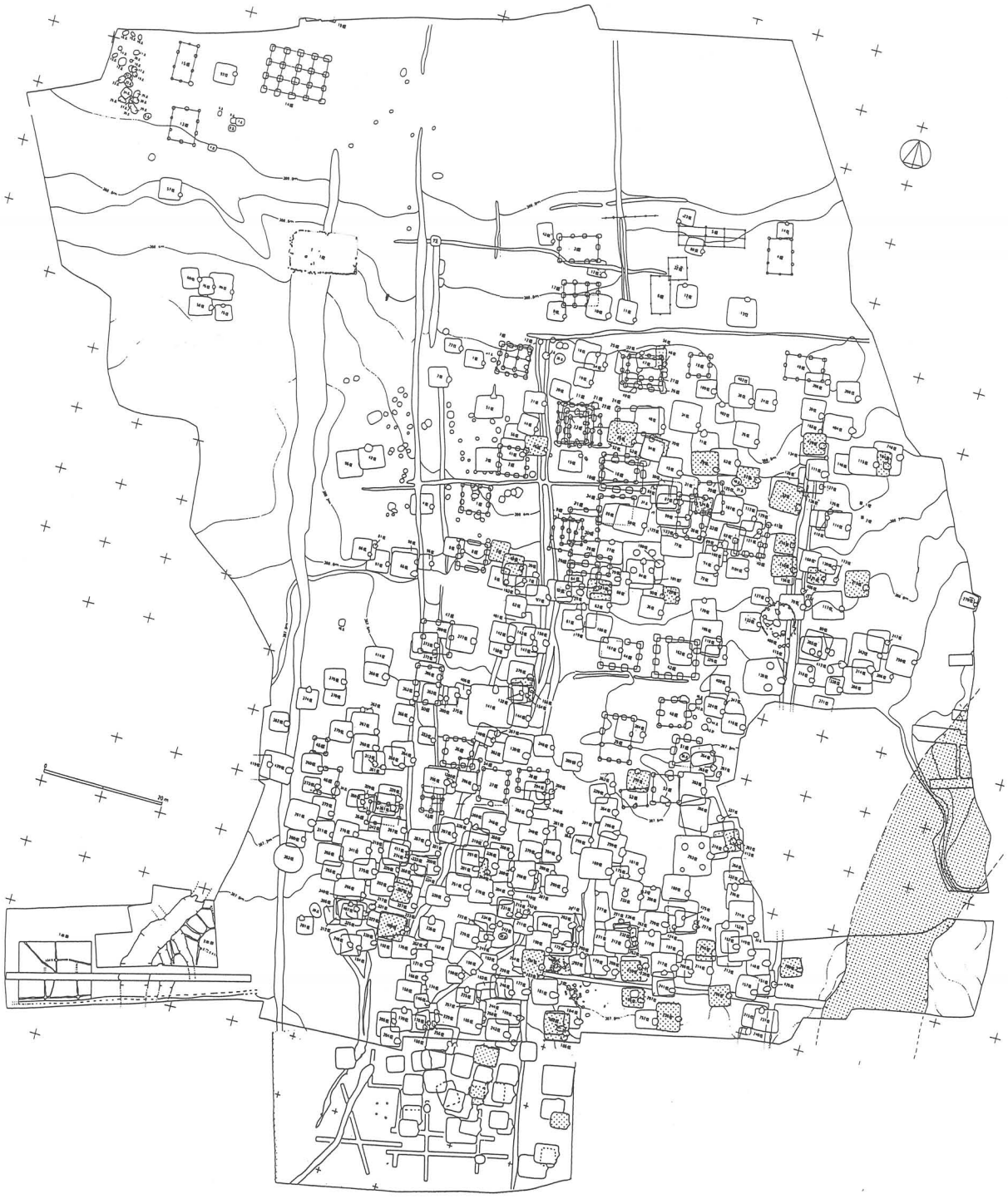
〈宮ノ前Ⅴ期〉

第39図　遺構変遷図(5)



〈宮ノ前VI期〉

第40図　遺構変遷図(6)

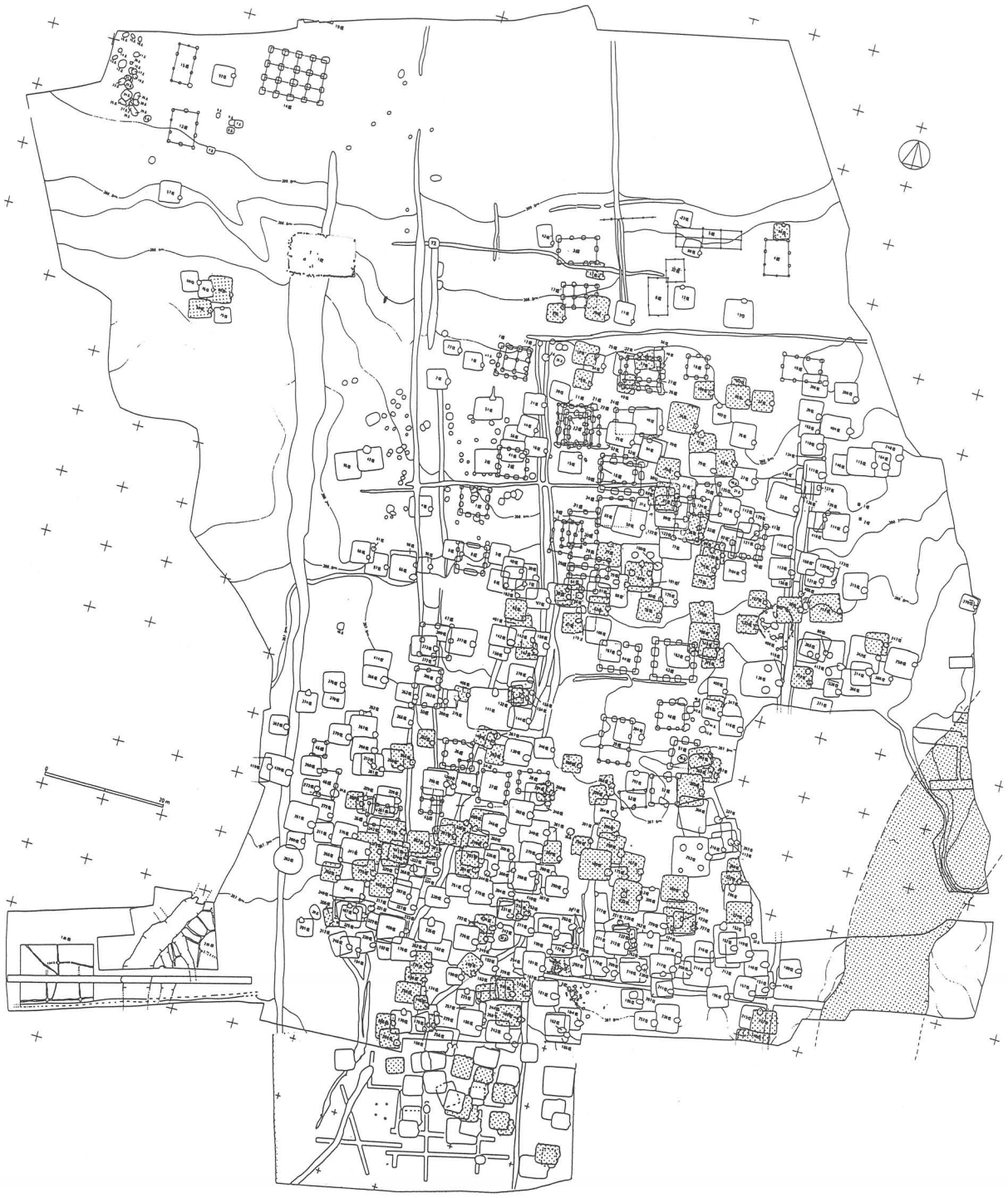


〈宮ノ前Ⅶ期〉

第41図　遺構変遷図(7)

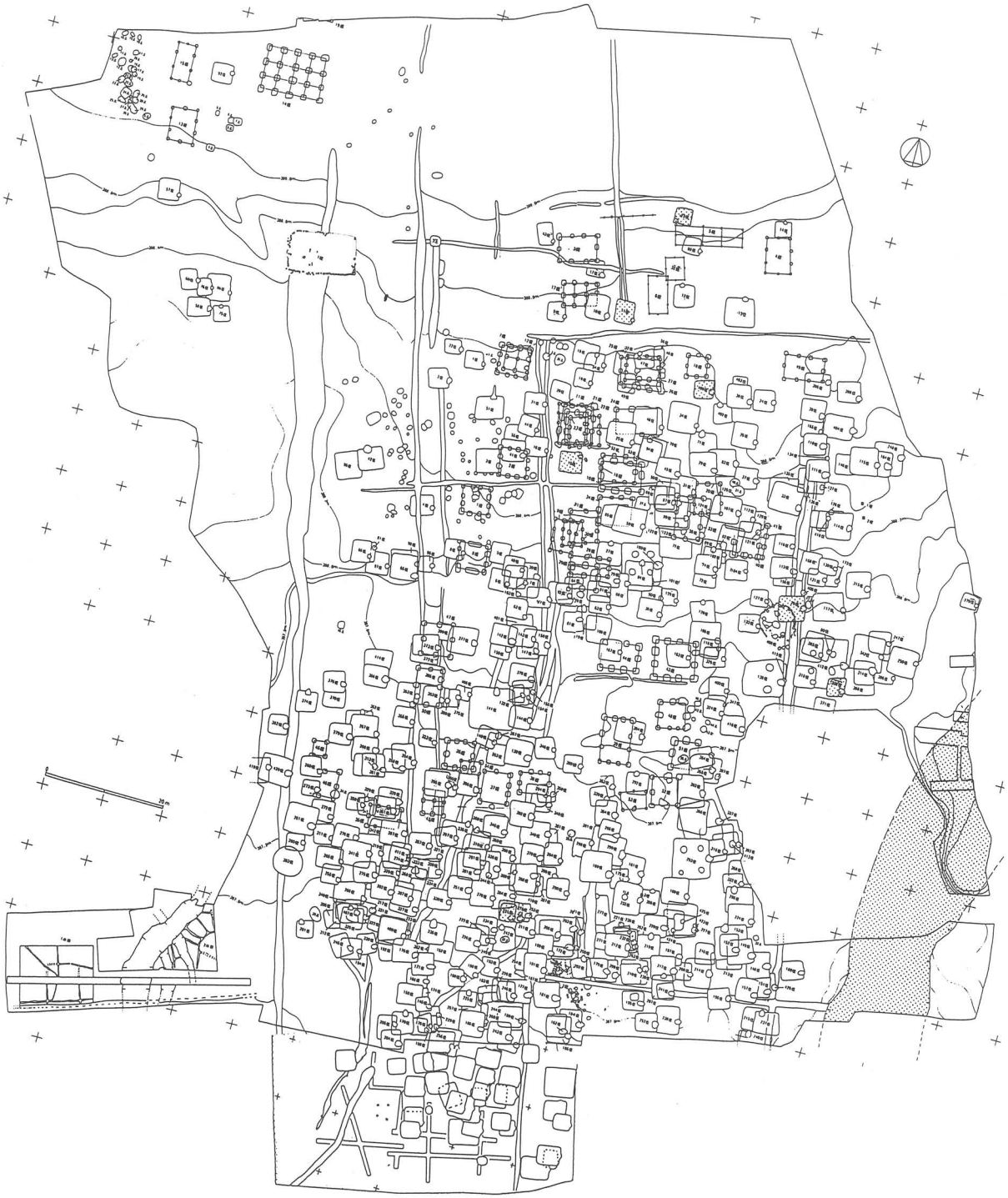
〈宮ノ前Ⅷ期〉

第42図　遺構変遷図(8)



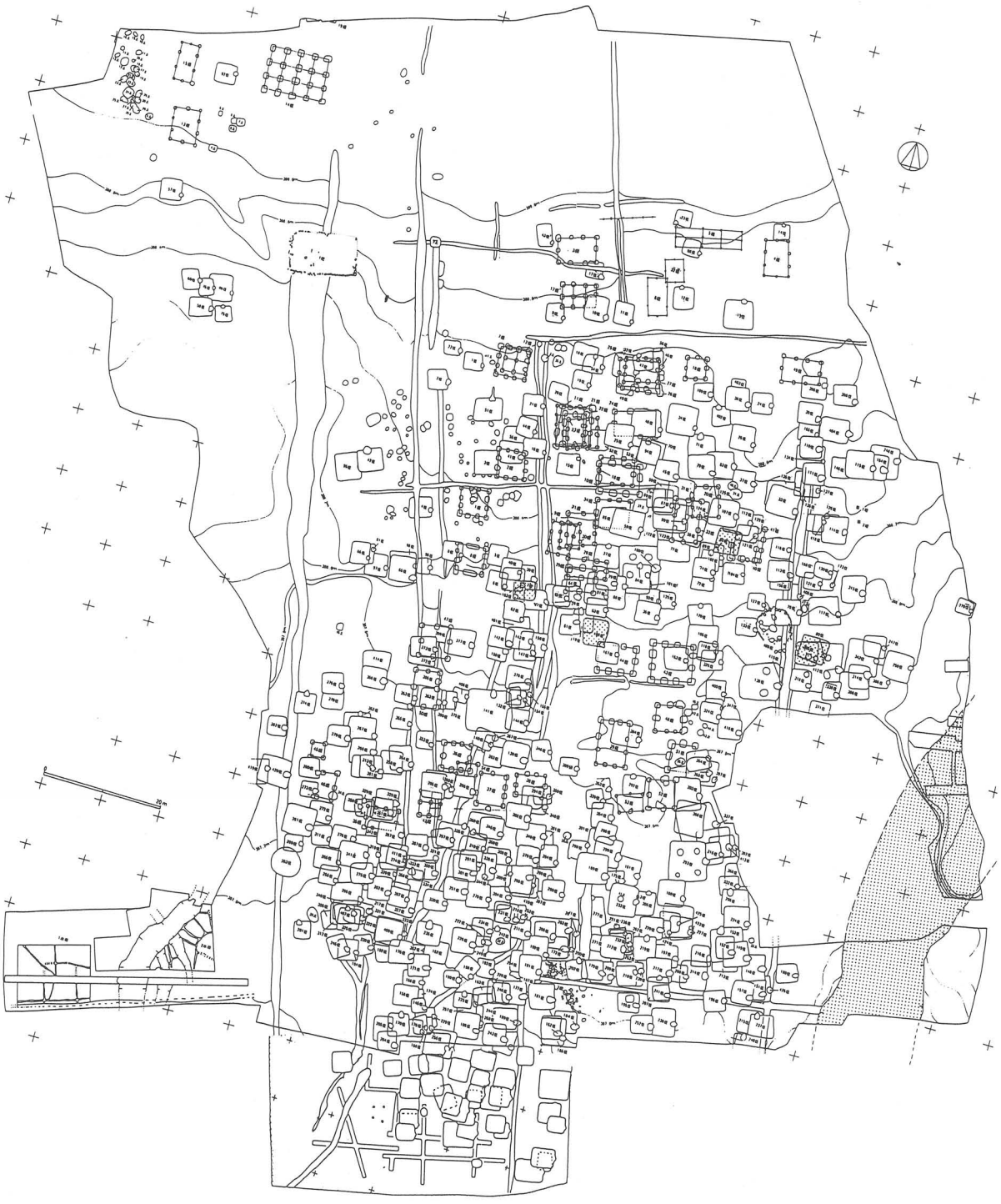
〈宮ノ前Ⅸ期〉

第43図　遺構変遷図(9)



〈宮ノ前X期〉

第44図　遺構変遷図(10)



〈宮ノ前XI期〉

第45図　遺構変遷図(11)

第７節

金属製品と鍛冶関連遺物について

１．金属製品（本文編第26表・図版編第342～353図参照）

宮ノ前遺跡からは遺構内外から総数199点に及ぶ金属製品が出土し、そのうち住居址出土のものが160点、掘立柱建物址出土のものが８点、溝址出土のものが12点、溝状遺構出土のものが２点、遺構外出土のものが17点となっている。金属の素材は鉄製が圧倒的に多く、そのほとんどが鍛造品であるが、１点のみ鋳造品がみられる。そして鉄製品以外では銅製品があり、鑷子１点（鍍金を施す）、円鏡１点、環１点、銙帯１点、ピン状の製品が１点、筒状製品が１点、銭貨が３点みられる。鍛造の鉄製品では刀子52点、鑿３点、鎚鉾状製品１点、鎌７点、半月形穂摘具１点、鍬か鋤１点、斧４点、鏃19点、苧引金具２点、紡錘車６点、釘39点、鋲１点、肘金具２点、閂金具１点、鑰子用金具？１点、鍱１点、鉸具２点、環状製品１点があり、その他、何らかの製品の一部と思われる棒状製品42点、板状製品４点、筒状製品１点がみられ、不明鉄製品も２点みられる。鋳造品では鍋脚が１点みられる。また、鍛冶関連遺物として鉄滓が遺構内外から総数51点、羽口が７点出土している。

(1)　鉄製品

(a)農具

農具としては鋤か鍬１点、鎌７点がみられるのみである。また、神奈川県向原遺跡（清水ほか　1983）において報告されている半月形穂摘具と思われる板状鉄製品も１点みられる。鋤か鍬という表現は、耳部の破片であるため両者の可能性をもっているためである。出土遺構はⅧ期に属すると思われる304号住である。鎌は21・50・78・115・143・173・301号住からそれぞれ１点ずつ出土している。形態を知り得るのは78・115・143・301号住出土のもので、78号住出土のものは、全長約10cm、幅約2.5cmを測る小形品で、身全体が湾曲する。刃部と着装部の区別はあまり明確ではなく、刃部は消耗し細かく欠けている。115号住のものは出土時は折れ曲った状態で錆で覆われ板状を呈していた。保存処理段階でＸ線撮影により鎌であることが判明し、復元を行っている。全長約20cm、幅４cmを測る。身全体が大きく彎曲し、刃部と着装部の区別が明確ではない。身中央部がやや幅広となり、刃部は消耗のため細かく欠けている。143号住出土のものは全長約15.5cm、幅1.7cmを測り、身の背部が折り返し部から直線的にのび、刃部は研ぎ減りのためか幅が狭い。そのため着装部との区別は明確である。301号住出土のものは、全長約15cm、幅2.5cmを測り、身全体が緩やかに湾曲し、着装部から刃部先端にいくにしたがい細くなる。刃部と着装部との区別は143号住出土のものに比べ明確ではない。

半月形穂摘具は238号住でみられる。両端が欠損しているため全体の様相は不明であるが、その可能性があることを指摘しておきたい。残存長9.5cm、幅19cmを測り、薄い板状を呈し、径0.18～0.2cmの孔が穿たれる。刃部と思われる側面がやや外彎する。孔は着柄のために穿たれたものだろう。

(b)工具

工具としては刀子、斧、鑿、鎚鉾状製品がみられる。刀子は本遺跡出土鉄製品のなかで最も多くみられるもので、鉄製品全体の約27％を占めている。42軒の住居址から51点、溝址から１点出土している。その多くは欠損品や錆による膨張、研ぎ減り等から、本来の形状を知り得るものは少ない。しかし、本遺跡出土の刀子を関の有無から大まかに分類すると次のとおりになる。

ⅰ：無関のもの。ⅱ：片関のもの。ⅲ：両関のもの。

ⅰに属するものに104・226号住出土資料、ⅱに属するものに21・63・111・212・227・288・293・314・315号住出土資料、ⅲに属するものに31・36・71・86・99・100・114・161・203・243・250・271・278・294・302・307・311号住出土資料等が挙げられる。全長は完存のもので約12cm前後のものが最も多い。２点ではあるが全長約19cmを測る271号住出土のもの、全長約30cmを測る161号住出土のものがあり、わずかながら大形品もみられる。

斧は３・33・105・137号住からそれぞれ１点づつ、計４点出土している。いずれも着装部が袋状を呈する有袋鉄斧の

小形品で、全長７～10cm、刃幅3.3～４cmを測る。105号住出土資料には木質が残り、137号住出土資料は刃部が折れ曲っている。小形のため木材の伐採用というよりは、「手斧」的な機能が考えられよう。鑿は６・15・158号住から１点ずつ出土しているが、欠損品ため全体の形状を知り得るものはなく鑿としての断定も難しいところである。鎚鉋状製品は１点だけみられ、10号掘立から出土している。先端が狭い三角形状を呈している。

(c)紡織具

ここでは紡織具として苧引金具、紡錘車をとり挙げたい。苧引金具は民俗事例から麻皮を剥ぐ道具として捉えられるもので、両端が曲った鎹に似た形状を呈するものである。山梨県内では韮崎市所在の前田遺跡（山下　1988）と中田小学校遺跡（山下　1985）、北巨摩郡武川村所在の宮間田遺跡（平野　1988）からそれぞれ１点ずつ出土しているだけで、出土例はまだ少ない。本遺跡では65号住と227号住から１点ずつ、計２点出土している。65号住出土資料は、身の全長6.1cm、幅4.5cmを測り身幅が広く、両肩には木質が残っている。227号住出土資料のものは、身の全長7.3cm、幅3.2cmを測り身幅が狭く、身部の一部と両肩に木質が残っている。

紡錘車は完存のもの、紡軸のみのもの、紡輪のみのもの全て合わせて６点出土している。116・227・230・385号住、26号掘立、７号溝址からそれぞれ１点ずつ出土している。他にも棒状鉄製品としているなかにも紡軸の一部と思われるものもあり、点数的にはもう少し増える可能性はある。また、鉄製の他に石製の紡錘車も345号住と16号溝址から１点ずつ出土している。紡輪の径は3.4～5.7cmを測り、小形と大形の二者が存在するようである。糸の種類によって鉄製と石製との間に使い分けがあったかどうかは定かでないが、227号住では、紡錘車の他に苧引金具が共伴していることから、麻糸を中心に使用されていたと思われる。

(d)建築金具

建築金具としては釘、閂金具、鎹、肘金具、鏁子用金具がみられる。釘は本遺跡では刀子につぐ出土量を誇り、39点出土している。いずれも角釘で、頭部をやや叩きのばし、曲げているタイプのものがほとんどである。長さは完存のもので７cm前後のものと、15cm前後ものとの２タイプみられるようである。48号住出土で鋲としたものが１点あるが、これも広義の意味でいけば釘の範疇に入るものである。やはり頭部を叩きのばし、曲げている。長さは短く約３cmを測る。釘が出土している遺構は住居址が多い。しかし出土数は各住居址ごと１点か２点で、多くても３号住や244号住のように３点程度で非常に少なく、建築金具としたものの、果たして建築関係に使用されたものかどうかは疑わしく感じられる。そして閂金具と鎹はそれぞれ１点ずつ出土しているが、前者は25号掘立の掘り方内、後者は69号住の覆土内から出土している。肘金具は59号住と421号住からそれぞれ１点ずつ出土している。肘金具は頭部が環状となっており、環の外径は約3.1cmを測る。鏁子用金具は160号住から１点出土している。この肘金具や鏁子用金具は建築物の戸締まり用に使用されたかどうかは不明で、箱や櫃に使用された可能性もあり、また、肘金具は馬具の一部である可能性も考えられる。

(e)武具

武具としては鏃が19点出土している。棒状鉄製品としているなかにも鏃の茎部のと思われるものもあるため、総数としてはもう少し増えるかもしれない。鏃身の形態を大まかにみると両丸造の長三角形式のものが多く、逆刺の発達するもの、しないもの、篦被も存在するもの、しないもののそれぞれ２種類ある。長三角形式以外のものとしては35号住出土の片丸造の鑿箭式のものがみられるが、棘の有無は不明。鏃の出土遺構は、やはり住居址からの出土が多く、１軒の住居址から多量に出土するケースはみられず、出土している住居址のほとんどが１点ずつの出土状況を示している。ここでは武具として鏃をとり挙げているが、先の釘と同様に、本来の使用目的以外の使われ方をされていた可能性も十分に考えられる。22号住ではカマド脇の床面直上から出土し、379号住ではカマド内から出土しており、武具としては不自然な場所から出土している。こうした出土状況から鏃も祭祀具として使われていたことも考えてもいいのではなかろうか。

(f)その他

上記以外の鉄製品では、鉸具の刺金と思われる製品が６号住と87号住から１点ずつ計２点出土している。帯金具あるいは馬具であろう。性格不明品では環状鉄製品１点、棒状鉄製品42点、板状鉄製品５点がみられるが、棒

状鉄製品のなかには、釘や鏃、紡錘車の紡軸の一部のものも含まれるだろう。また、鋳造品として鍋の脚部も１点みられる。これは48号掘立の掘り方内から出土しているもので、山梨県内における鍋脚の出土例はきわめて珍しい。掘立柱建物址の時期は不明な点が多いものの、主軸方向や掘り方の形態等から平安時代（９世紀前後）の所産であることはほぼ間違いなかろう。当該期の他の出土例としては、神奈川県海老名市の海老名本郷遺跡ＫＥ地区でみられ（合田ほか　1991）、規模は異なるものの、９世紀前半に属する５間×３間の大型の掘立柱建物址から出土している。また、菅原正明氏は、鋳造の釜（鍋）は宮殿や寺院の煮沸用具あるいは湯釜として使用されていたと指摘している（菅原　1983）。もし釜（鍋）が当該期において仏教的色彩が強いものとすれば、宮ノ前遺跡では「寺」と記された線刻土器も出土していたり、他にも寺（仏教）と密接な関係を示唆する遺物が多く出土しているという状況が認められるため、この鍋脚も寺（仏教）との関わりのなかで存在したことが想定できる。

⑵　銅製品

(a)鑷子

100号住から１点出土しているが、その出土状況から本住居址に直接伴うものではない。完存ではないが幅７㎜、厚さ３㎜を測る蒲鉾状の断面をもち、現長93㎜を測る。全体に金を鍍被し、丁寧なつくりである。

(b)円鏡

141号住から１点出土しているが、これも出土状況から本住居址に伴う可能性は低い。141号住の覆土上面で、挽物の中に伏せた状態で納められており、鏡に漆紙片と絹と思われる布片が付着していることから、これらの紙と布に包まれていたと考えられる。そして鏡とともに人の歯も１本一緒に納められていた。何らかの儀礼行為に伴って埋納されたものだろう。歯科医師の畑秀明氏によると、この歯は永久歯の中切歯（第１歯）もしくは側切歯（第２歯）で、性別については、中切歯だとすれば性別は不明で、側切歯だとすればその大きさから男性である可能性が高く、年齢については、当時の栄養状態、健康状態によって左右されやすく、正確にあてはめることはできないが、おおよそ壮年（30～40歳）のものだろうというご教示を得ている。

鏡の文様構成は錆と摩滅が著しく不明で、鏡の縁は厚く外傾し、内部は細い線によって分けられ、単圏である。明確な所属年代は不明であるが中世段階まで降る可能性が強い。

(c)帯金具

287号住から１点出土している。おそらく鉈尾の表金具であろう。側辺が緩やかなカーブを描く形態を呈するものと思われる。現長37㎜、現幅32㎜、厚さ２㎜を測る。漆等の付着はみられない。本住居址からは他にも石製の巡方が１点出土している。

(d)環

160号住から１点出土している。径20㎜、厚さ４㎜を測り、表面の剥落が著しく、金等鍍被されていたかは不明である。おそらく古墳時代のものが本住居址内に混入したものと思われる。

(e)ピン状製品

302号住から１点出土しており、現長76㎜、厚さ２㎜を測り、断面形は円形を呈する。やや彎曲しているが、本来の形状、その用途は不明である。

(f)筒状製品

37号住から１点出土している。現長56㎜、幅10㎜を測り、その用途は不明。煙管の可能性も考えられる。

⑶　銭貨

遺構外から２点、表採で１点計３点出土しており、遺構内からの出土はみられない。いずれも中国銭で、唐銭、北宋銭、南宋銭が各１枚ずつみられる。皇朝銭の出土を期待したものの結局検出されなかった。

２．鍛冶関連遺物（本文編第19表・図版編第323図参照）

鍛冶関連遺物としては鉄滓と羽口がある。羽口は本来土製品ではあるが、鉄生産等と密接に関わりあう遺物であるため、鍛冶関連遺物としてここで扱う。

(a)鉄滓

鉄滓は総数52点出土しており、総重量は3175ｇを量る。そのうち遺構内出土のものは総数39点である。内訳は17軒の住居址（10・15・18・31・35・54・69・79・105・113・211・220・227・238・291・319・322号住）から総数37点、１号溝状遺構から２点、７号溝址から１点出土している。残りの12点は遺構外からの出土である。遺構内出土のものも大半は覆土から出土であり、211号住と319号住ではカマド内からの出土となっている。

ひとつの重量が300ｇ～500ｇを超える大形のもので、その形状がいわゆる椀形を呈するものは２点あり、10号住と79号住からの出土である。次いで重量が100ｇを超える中形のものは、15・79・105・113・220・322号住から計７点出土している。そして最も多くみられるのが、数ｇから50ｇ未満の小形のものである。大形や中形の鉄滓は単独で１点ずつ出土する傾向が強いが、小形の鉄滓はいくつかまとまって出土する傾向が強い。小形の鉄滓は概して表面が発泡し、磁性の弱いものが多い。

(b)羽口

羽口は総数７点出土している。そのうちの５点が住居址内からの出土である。86号住から１点、105号住から２点、317号住から１点、330号住から１点出土している。残りの２点は遺構外からの出土である。いずれも欠損品で全体の形状を知り得るものはない。幅は5.7～7.7cm、孔径は1.8～2.2cmを測り、孔の断面形は円形を呈する。羽口の先端部には大方溶解鉄が付着し、橙色の表面が熱をうけ灰褐色に変色している。

３．各期の出土状況

以上では、金属製品と鍛冶関連遺物の個々の遺物について概観してきたが、それら全体の本遺跡における各期の出土状況をみてみたい。

金属製品の出土している遺構（主に住居址であるが）を時期別にみていくと、何らかの金属製品が出土している住居址は108軒で、そのうちの１軒は縄文時代の住居址であり、明らかに混入品である。住居址以外で金属製品が出土している遺構では、掘立柱建物址があり５棟から出土し、他に溝址、溝状遺構から出土している。

Ⅰ期では51号住の１軒のみで刀子が１点出土している。

Ⅱ期では141・225・235・375号住の４軒がみられるが、141号住の円鏡は前述のとおり、その出土状態や鏡自体の形態等から時代的に中世まで降る可能性が強く、本住居址に直接伴うものではなかろう。225・235・375号住では刀子、紡錘車の紡軸と思われる棒状製品や刀子の一部と思われる板状製品が１点ずつ出土している。

Ⅲ期では179・244・271・282・370・377・412号住の７軒から出土しており、刀子、釘、紡錘車の紡軸と思われる棒状製品等が出土している。特に244号住では釘が３点、刀子が１点みられ、ややまとまって出土している。また、鉄製品はみられないが211号住のカマド内から鉄滓が１点出土し、317号住では羽口が１点出土している。

Ⅳ期では100・230号住の２軒から出土している。100号住では刀子２点の他、鑷子が１点出土しているが、鑷子はその出土状況等から本住居址に伴うものではなかろう。230号住では紡錘車の紡輪部が１点出土している。

Ⅴ期では65・138・159・212・395・410号住の６軒から出土している。65号住では苧引金具が１点、138号住では鏃が２点出土し、159号住では刀子と釘の茎部と思われる棒状製品が１点づつ、395号住では刀子の一部と思われる棒状製品１点と410号住では紡錘車の紡軸と思われる棒状製品１点が出土している。

Ⅵ期では３・６・21・22・48・59・99・107・111・137・288・293・302・331・356・379・416号住の17軒から出土している。本期は住居址自体の数も前時期に比べ倍以上に増加する時期である。そして１軒における金属製品の保有点数が多くなっているのも本期の特徴といえる。点数的に多く出土している住居址は３・６・288・293・302号住で、３点～５点程度出土している。３号住では釘３点の他、鏃と斧が１点ずつ出土し、６号住では鑿と鏃、鉸具の刺金が１点ずつ出土している。288号住では刀子２点と鏃１点、用途不明の棒状・板状製品が１点ずつ出土している。293号住では刀子のみ３点、302号住では刀子３点と用途不明のピン状銅製品が１点出土している。その他21号住では刀子と鎌・鑿状鉄製品が１点ずつ、22号住では鏃が１点、48号住では鋸が１点、59号住では肘金具が１点、137号住では斧１点、379号住と416号住では鏃が１点ずつ出土している。このように本期においては前

時期までの刀子や釘を中心とした製品以外に、鏃、斧等がみられるようになり、製品の種類もバラエティーに富んでいる。特に鏃が本期によく目につく。また、鉄製品はみられないものの54号住と113号住では鉄滓が、330号住では羽口が１点出土している。

Ⅶ期では16・25・33・37・113・122？・210・238・292・307？・315号住の11軒から出土している。16号住と25号住では釘が１点、33号住では斧が１点、37号住では釘と銅製の筒状製品が１点、113号住では紡錘車の紡軸と同じく紡軸の一部と思われる棒状製品が１点ずつ、鏃の茎部と思われる棒状製品が１点出土している。122号住では鏃が１点、238号住では半月形穂摘具が１点、307号住と315号住では刀子が１点ずつ、210号住と292号住では紡軸や釘等の棒状製品が出土している。Ⅵ期と異なり、１軒の住居址で多数の製品を保有する例は本期ではみられない。

Ⅷ期では31？・87・104・115・143・144・152・153・226・243・250・251・294・304・314・354号住の16軒の住居址から出土している。31号住では刀子が２点と鉄滓、87号住では鉸具の刺金が１点、104・152・226・250・294・314・354号住では刀子が１点づつ、243号住では刀子が２点、251号住では釘が１点、304号住では鋤か鍬の刃先の一部が１点、115号住と143号住では鎌が１点ずつ出土し、その他の住居址からは棒状製品が出土している。本期の特徴として、鋤か鍬、鎌等の農具類が比較的多くみられる。鉄滓は31号住の他、鉄製品の出土はないものの291号住から１点出土している。

Ⅸ期では９・18・35・36・45・49・50・63・69・71・78・83・86・105・132・158・160・161・163・169・177・218・227・247・274・287・298・301・318・321・335号住の31軒から出土している。出土住居址の軒数がⅥ期からⅧ期までと比べると倍以上に増加している。これは本期が全時期を通して住居址数が最大に膨れあがる時期で、金属製品出土の住居址も住居軒数の増加に比例し増加しているといえよう。主な住居址をみると、18号住ではくの字に折れ曲った釘と棒状製品１点ずつと鉄滓３点、35号住では鏃と紡錘車の紡軸と思われる棒状製品、鉄滓が１点ずつ、36号住では刀子と鏃が１点ずつ、45号住では鏃が１点、49号住では釘が１点、50号住では鎌が１点、69号住では鎹と鏃の茎部と思われる棒状製品が１点ずつと鉄滓が７点、86号住では刀子が１点の他、羽口も１点、105号住では斧と刀子、鉄滓が１点ずつと羽口が２点、132号住では鏃が１点、160号住では銅製の環、刀子の一部と思われる棒状製品、そして鑷子用金具が１点づつ出土している。227号住では刀子が１点の他、苧引金具と紡錘車が１点ずつ、鉄滓が出土しており、その住居の住人が紡織関係に深く関わっていたことが想定される。287号住では銅製帯金具（鉈尾）が１点出土しており、同住居址では石製の銙帯（巡方）も出土している。318号住は刀子、釘、鏃、棒状製品を１点ずつ出土しており、本期に属する住居址のなかでも金属製品が比較的集中して出土している住居址である。その他の住居址でも刀子を中心とした製品類が１点から２点出土している。鉄製品はみられないものの15号住からは鉄滓が１点出土している。

Ⅹ期では本期に属すると思われる住居址自体が７軒とⅥ期からⅨ期に比べると激減し、金属製品自体出土している住居址も本期ではみられない。

Ⅹ期でも本期に属すると思われる住居址が４軒と少ないが、385号住から紡錘車の紡輪が１点出土している。

各期の住居址の保有割合をみていくと、Ⅰ期では13%、Ⅱ期では15%、Ⅲ期では32%、Ⅳ期では19%、Ⅴ期では19%、Ⅵ期では39%、Ⅶ期では28%、Ⅷ期では28%、Ⅸ期では27%、Ⅹ期では０%、Ⅹ期では25%となり、Ⅲ期とⅥ期に30%以上になるものの、他の時期では10%から20%の割合であり、大方４～５軒に１軒の割合で金属製品が出土していることになる。１軒の住居址から出土する点数は１～２点が多く、数十点以上出土している住居址はみられない。４～５点出土する住居址が本遺跡では多い部類に入る。出土点数４点以上住居址を挙げると、Ⅲ期の244号住、Ⅵ期の288号住と302号住、Ⅶ期の３号住、Ⅸ期の318号住であるが、244号住や318号住のように大きい規模をもつ住居址からの出土例もあるが、一般的な規模をもつ住居址からも複数出土している。

4．ま と め

本遺跡での鉄製品は前述した製品類が出土しており、棒状鉄製品や板状鉄製品の用途不明製品を除いた数で出土割合をみると、刀子が全体の約34%、釘が約26%、この両者で全体の過半数を占めている。他では鏃が13%、

鎌が５％、紡錘車４％、斧が３％を占めている。こうしてみると工具状の製品が全体に占める割合が高く、農具などの生産具の占める割合が低い。これは東国の集落おいて全般的にみられる傾向であり、宮ノ前遺跡でもその状況がうかがえる。しかし金を鍍被した鑷子や鋳造の鍋脚等、山梨県内では希な製品類もみられ、本遺跡が一般の集落とは異なった性格を持ち合わせる可能性を示唆している。また、鉄滓や羽口の鍛冶関連遺物が出土しているが、本遺跡では炉等をもつ明確な鍛冶遺構は検出されていない。

各期を通してほぼ全般にみられる製品は刀子と釘、紡錘車で、その他の製品はⅥ期以降の出土が多い。しかしⅩ期以降はほとんどの製品がみられなくなる。刀子はⅠ期からⅨ期までみられる。釘もⅠ期とⅣ期、Ⅹ期～Ⅺ期を除いてみられる。紡錘車もⅠ期とⅥ期、Ⅷ期、Ⅹ期を除いてみられるが、紡錘車と関わりの深い苧引金具はⅤ期とⅨ期のみにみられる。鏃はⅣ期に２点みられ、Ⅵ期～Ⅶ期、Ⅸ期にみられる。一方、鎌や鋤・鍬、斧等の農工具類の出土は前述のとおりⅥ期以降からであり、鎌はⅨ期に３点と最も多くⅩ期以降はみられない。詳細な時期は不明であるが173号住出土のものはⅥ期以前と考えられる。鋤・鍬はⅧ期のみにみられ、ごく一般的な規模をもつ住居址から出土している。斧はⅥ期～Ⅶ期、Ⅸ期にみられる。

以上のように、Ⅵ期を境に金属製品の種類や出土量がそれ以前とは異なった様相を示していることがわかった。Ⅵ期（９世紀第３四半期中心）という時期は、集落内の住居数が大きく膨らむ時期であり、当該期に何らかの社会的状況の変化が起こったことが推測できる。そうした社会的状況変化の一端を金属製品の出土状況も示している。Ⅵ期以降、量的には少ないものの鎌、鋤・鍬等の農具がみられるようになるのは、耕地拡大とその経営の拡大を図ろうとした状況ともうけとれる。そして紡錘車がⅡ期からⅪ期まで量的には少ないものの、それが存在することは、稲作以外の生産基盤の一つとして麻生産も大きなウェイトを占めていた状況を反映している。古代甲斐国は「延喜式」にみえるように布の貢進国となっていることから、中央への調庸等の貢進国としての布生産が早い段階から行われていたことも十分考えられる。

周知のとおり、鉄は鋳直しが可能で、腐食しやすい性格をもつ金属素材であることや、貴重品等は移動の際に持ち去ることが考えられるため、鉄製品を中心とした金属製品の消長や量的変化等から当時の社会状況を推察することは危険が大きい。集落構造の綿密なる分析や他の遺跡の状況も踏まえて、金属製品のあり方を導かなければならない。

第８節

文字関係資料について

宮ノ前遺跡から出土した文字関係資料は、墨書土器と線刻土器およびヘラ書土器にほぼ限られる。文字資料以外では２号溝状遺構から絵画的資料である人面墨書土器の破片資料が出土しており、また、漆紙の断片が46号住居址から出土しているが、残念ながら赤外線調査でも文字の確認はできなかった。本節では確認されている文字資料を中心にそれらの出土状況と記銘状況を概観し、それらに関連し筆記具の一つである硯の出土状況から墨書土器の普及に関わる問題も考えていきたい。

本報告書での墨書土器とは、文字や記号、絵画等を墨書きあるいは朱書きされた土器のことをいう。そして線刻土器とヘラ書土器については、土器焼成後に刀子状工具あるいは釘状用具等で、記号や文字、絵画等を刻み記した土器を線刻土器といい、研究者によっては刻書土器とよんでいるものである。土器焼成前に記した土器を従来からよばれているヘラ書土器とした。土器の焼成前に記されることは生産地で記した可能性が高く、他方焼成後に記されることは集落等の消費地で記した可能性が高いと思われる。よって両者の記された目的は基本的には異なると考えられ、ここでは両者を切り離して考えたい。しかし浅学のため、数多くの資料をみていくと、焼成前に記したものか、あるいは焼成後に記したものか、判断しにくい曖昧なものも数点みられ、本報告の文字内容（釈文）においてもいくつか誤認しているものや欠漏しているものがあろうかと思われる。そのような資料については別の機会に訂正していきたいと考えている。

１．出土遺構について

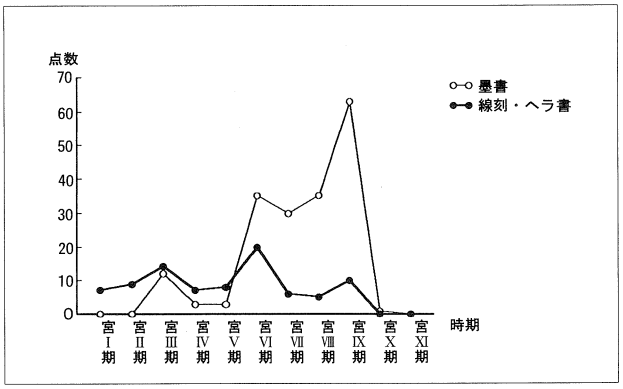
本遺跡からは墨書土器が総数287点、線刻土器（ヘラ書土器も含む）が総数160点出土している。遺構別にみると、墨書土器は、竪穴住居址から215点、掘立柱建物址から２点、土坑から１点、溝址から１点、畝状遺構から２点、溝状遺構から53点、性格不明ピットから１点、遺構外から12点出土している。一方、線刻土器（ヘラ書土器も含む）は、竪穴住居址から116点、畝状遺構から２点、溝状遺構から33点、遺構外から９点出土している。両土器ともに、竪穴住居址内からの出土が圧倒的に多く、次いで溝状遺構内の順となっている。なお、各遺構についていえることだが、床面および底面直上から覆土全般から出土したすべての遺物を、原則として各遺構の出土資料として扱っている。ただ明らかに異なる時期のものが認められたものについては、一覧表（第28・29表）において混入品と記しておいた。

出土遺構において注意しなければならないことは、いうまでもなくその出土状況である。両土器が最も多く出土している竪穴住居址内の出土状況については、覆土内からの出土が最も多く、床面直上やカマドからの出土が数例みられる程度である。しかも一箇所からまとまって出土する例はまったくみられず、大半が単体の完形や破片で出土している。竪穴住居址内からの出土状況をみる限り、他の出土土器群と区別できるような特別な出土状況を見出すことは難しい。ただ、集落の東西端を流れる１・２号溝状遺構で多量の墨書土器と線刻土器が出土しており、破片資料が多いものの、それらは使い込まれた状況や水流によって摩滅した状況はほとんどみられず、特に２号溝状遺構では、竪穴住居址内からも多数出土している「宅」と記した墨書土器が、人面墨書土器や木製の斎串、胡桃や桃の植物遺体、獣骨片等、祭祀色の強い遺物群とともに出土している。そうしたことから、墨書土器と線刻土器が何らかの祭祀・儀礼行為に伴って廃棄された状況が推測でき、両者の性格・使用状況を考えるうえで興味深い出土状況といえよう。

２．各期ごとにみた量的推移と記銘内容について

出土土器の分析によって奈良～平安時代はⅠ期からⅪ期までの変遷が辿れることが先に提示されている。そこから得られた分析結果をもとに、各期ごとにみた墨書土器と線刻土器の出土状況の量的推移をみてみたい。

第46図にその量的推移をグラフで示しておいた。まず、宮ノ前遺跡のⅠ期段階では墨書土器は確認できていない。Ⅱ期も同じである。次のⅢ期が墨書土器が確実に確認できる時期である。同期以降、Ⅴ期まで量的に著しい変化はみられないが、Ⅵ期になるとその数は急増する。当該期は竪穴住居址数も増大する時期で、それに比例するかのように墨書土器も増加している。ⅦとⅧ期は同様な水準を保ちながら推移し、竪穴住居址数が最も多いⅨ期に量的にピークをむかえる。Ⅵ期からⅨ期は墨書土器の盛行期といえる。しかしつづくⅩ期には竪穴住居址も墨書土器も激減し、Ⅺ期では４軒の竪穴住居址がみられるものの、墨書土器はまったくみられない。Ⅹ期が墨書土器の終焉期といえる。各期の全竪穴住居址のうち墨書土器を出土した竪穴住居址の割合をみると、出現期のⅢ期からⅤ期までは８％～18％と20％以下だったものが、Ⅵ期以降、Ⅸ期まで30％～42％となっている。１軒ごとの保有率はⅢ期からⅤ期までは低く、Ⅵ期以降は高くなる傾向がみられる。



第46図　墨書土器・線刻土器の量的推移

一方、線刻土器はⅠ期の集落の出現段階からみられる。つづくⅡ期からⅤ期までほぼ横這い傾向を示しながら推移し、Ⅵ期において微増するが、Ⅶ期以降またⅤ期段階までの水準に戻り、横這い傾向を示す。Ⅹ期になると墨書土器と同様にまったくみられなくなる。墨書土器と同じように線刻土器が竪穴住居址から出土している割合を各期ごとにみると、Ⅰ期が63％と高く、Ⅱ期からⅣ期が30％～35％、Ⅳ期にいったん19％と下がるが、Ⅵ期には再び30％となる。しかし、Ⅶ期では15％と半減し、Ⅷ期、Ⅸ期にいたると７％、８％となり竪穴住居址の増大という傾向にもかかわらず、線刻土器の竪穴住居址からの出土率は極端に減少する。保有率については、墨書土器とは異なり古い段階の方が比較的高い傾向にある。

次に記銘内容をみると、墨書土器の場合、記されていることが判明しても欠損していたり、墨痕が薄く器面の摩滅等によって判読できないものや、運筆もトレースすることが困難なものが多数あり、すべての内容を把握するに至っていない。こうした状況のもとで把握できた墨書内容の一部を挙げてみると、「廣」「北」「宅」「家」「氏」「生万」「木」「主」「長」「中」「上」「十」「□麻」「万」「[illegible]」「毛」「[illegible]」「内」「秋」「義」「介」「子」「又」「丈」「吉」「民」「[illegible]」「[illegible]」「山」「完ヵ」「[illegible]」「[illegible]」「永ヵ」「丙」「稲」「[illegible]」「浄人」等の文字が各期においてみられる。これらのなかで、Ⅴ期以前において特徴的な文字を挙げると、１号溝状遺構から比較的まとまって出土している「宅」で、竪穴住居址からも数点出土している。同文字は宮ノ前Ⅲ期からⅧ期までに属する土器に記され、長期にわたって使用された文字であるが、溝状遺構出土のものはⅢ期に属する土器でやや古い段階のものが多い。Ⅵ期以降では文字の種類も増え、Ⅵ期では「木」が大形住居址の293号住居址からまとまって出土し、２号溝状遺構でも数点みられる。また、13号住居址では「氏」がまとまって出土している。Ⅶ期では「万」が238号住居址からややまとまって出土し、Ⅷ期では引き続き「万」、新たに「介」「子」が主体的にみられるようになる。Ⅸ期でも引き続いて「万」「介」「子」が主体的な存在で、新たに「民」や則天文字の「[illegible]」の異形と思われるような「[illegible]」等がみられる。Ⅹ期ではⅨ期に引き続いて「介」「万」の文字がみられる他、「完ヵ」「[illegible]」「[illegible]」「永ヵ」等もみられ、「万」「介」「[illegible]」「[illegible]」は23号住居址から出土している。

線刻土器ではⅠ期からⅤ期まで圧倒的に「×」や、「×」をアレンジしたものと思われる「[illegible]」等の記号状の線刻（以下、記号線刻とよぶ）が多い。他には「＃」「|||」等がみられる。Ⅰ期における文字と思われる線刻（以下、文字線刻とよぶ）は55号住居址出土の「田」がみられるのみである。Ⅱ期では墨書でもみられる「山」「万」の他、「又」「寺」等の文字線刻がみられる。墨書の「万」はⅦ期以降に盛行したのに対し、線刻のそれはすでに当該期にみられることから、「万」は長期にわたって使用された字句といってよい。また「寺」は大形住居址である141号住居址か

ら出土しており、同住居の住人が当該期において仏教関係に携わる人物か、あるいは直接ではないが仏教と密接な関係にあったことをうかがわせる興味深い文字資料といえる。同竪穴住居址からは「寺」の他、「×」「#」「𐤀」の記号線刻がまとまって出土している。Ⅲ期では引き続き「𐤀」を中心とした記号線刻が目立ち、墨書も併記するケースも多い。そして「𐤀」は１号溝状遺構内から出土しており、広範に使用されていた字句であることをうかがえる。文字線刻では370号住居址で「山」「万ヵ」、172号住居址で「又」がみられる。Ⅳ・Ⅴ期でも「𐤀」「×」が中心で、Ⅳ期では文字線刻はまったくみられず、Ⅴ期では「得ヵ」がみられる程度である。

「𐤀」「×」は199号住居址のように相変わらず集中して出土する傾向があり、墨書の「万」と同じようにⅠ期からⅤ期までの集落内で代表される線刻記号といえる。

Ⅵ期ではⅠ期～Ⅴ期に比べると文字線刻が増加する。文字線刻では「万」「東」「大」「北」「帀」等がみられ、「帀」は土器の時期からみて一段階古いⅤ期に属する可能性もあるが、字形的には墨書の「爪」「爪」にみられるような篆書体・則天文字に関わる字形とみてもよかろう。記号線刻では前期まで盛行していた「𐤀」は姿を消すものの、「×」は引き続きみられる。代って以前にもわずかにみられた「卅」「卌」等の文字か記号か判別がつきにくい線刻が増加する。Ⅶ期、Ⅷ期ではともに線刻土器自体の出土量が少ないが、Ⅶ期の記号線刻では「×」「≒」等がみられ、文字線刻では「万」がみられる。238号住居址では線刻の「万」の他、墨書の「万」も３点出土している。Ⅷ期でも「×」等の記号線刻がわずかにみられ、文字線刻の「大」「吉」がみられるのみである。終焉期にあたるⅨ期での記号線刻は「×」のみで、この「×」はⅠ期からほぼ最終段階まで使用された記号であり、これも本集落を代表する字句・記号といってよかろう。文字線刻では「伴」「祝」「矣」等がみられる。

以上のように、墨書土器では文字の方が記号より多く、線刻土器では全般的に記号が主に記されている。しかしそれはⅤ期までで、Ⅵ期以降は文字線刻も比較的記されるようになっていく。このことは墨書土器の盛行が同期に求められることから、そうした状況が少なからず線刻土器に影響を及ぼしているかもしれない。

３．記銘状況について

まず、墨書土器では、墨書されている種別の割合をみると（第47図）、土師器が85％近くを占め、次いで須恵器が27％、黒色土器が18％となっている。墨書土器はこれら三つの種別の土器にほぼ限られている。器種はいずれも坏・皿・蓋等の食膳具がほとんどである。記される部位は（第48図）、土師器では約66％が体部外面（以下、体・外とよぶ）、約34％が底部外面（以下、底・外とよぶ）となっており、体部内面（以下、体・内とよぶ）も１点ではあるがみられる。底部内面（以下、底・内とよぶ）は全くみられない。また、体・外に記されるもののなかで、土器を使用時の状態に置いてみた時に、正位に記されているもののは84％、倒位に記されているものは15％、横位に記されているものは１％となっている。須恵器では58％が底・外、38％が体・外、４％が底・内となっており、体・内に記された例はみられない。体・外に記されるもののうち、倒位に記されているものは10％で、あとはすべて正位に記されている。黒色土器では、体・外が76％、底・外が24％で、体・内および底・内はまったくみられない。黒色土器でも体・外に記されるもののなかで、倒位に記されているものは15％で、あとはすべて正位となっている。

次に線刻土器であるが、線刻されている種別の割合をみると（第47図）、土師器が83％、須恵器が14％、黒色土器が３％となっている。線刻土器も墨書土器と同様にこれら三種類に限られ、器種は坏・皿・蓋等の食膳具の他、貯蔵具か煮沸具の甕もわずかだがみられる。ちなみにヘラ書土器では点数が少ないために大まかな傾向であるが、須恵器が50％以上を占め、次いで土師器と灰釉陶器が23％となっている。線刻土器で種別ごとにみた記される部位の状況は（第48図）、土師器では底外が83％と圧倒的な割合を占め、底・内が９％、体・外が７％、体・内が７％となっている。須恵器では底・外が62％、体・外が24％、底・内が９％、体・内が５％となっている。黒色土器では、体・外および底・外ともに50％ずつを占め、体・内および底・内に記された例はみられない。三種類全体をとおして体・外おける記銘状況は、本部位に記されるものが少ないものの、25～50％が倒位に記している。

こうしてみると墨書土器、線刻土器ともに記される種別や器種は類似した状況を示しているものの、両者間の

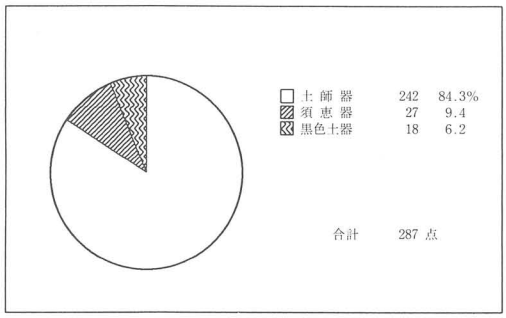
種別で、記される部位の割合が異なっていたり、両者における同器種でもその傾向が異なったりしている。以下、本遺跡における両者の特徴や両者間の相異点等をいくつか挙げておきたい。

①墨書土器、線刻土器ともに記す対象となる種別は、坏・皿等の食膳具にほぼ限られる。

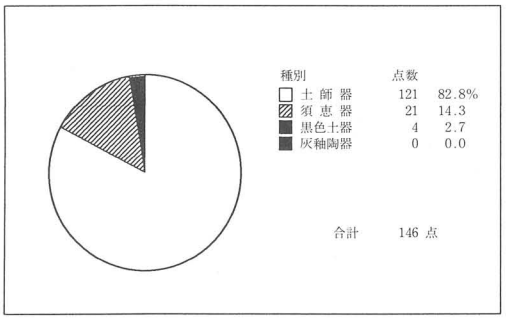
②墨書土器の土師器では、体・外に記される傾向が強いが、特にⅨ期に体・外に記される傾向が強くなる。黒色土器では各期を通してその傾向が強い。須恵器では底・外が半数以上を占め、底・内にも記している例がある。

③線刻土器は墨書土器に比べ、土師器でも底・外に記す割合が高く、底・内に記す割合も高い。須恵器もほぼ同様な傾向を示している。黒色土器では底・内と体・内に記す例はなく、体・外と底・外とほぼ同数の割合を示している。

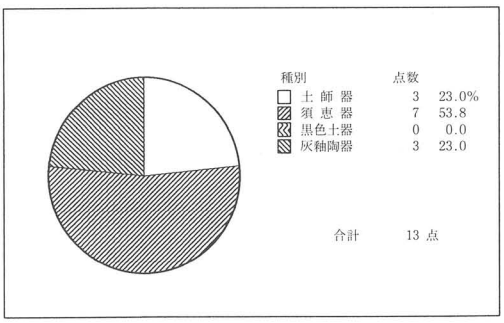
④墨書土器、線刻土器両者ともに、体・外に記される場合、正位に記される割合が高く、通常の使用時を意識して記されたことがうかがわれる。



墨書土器



線刻土器



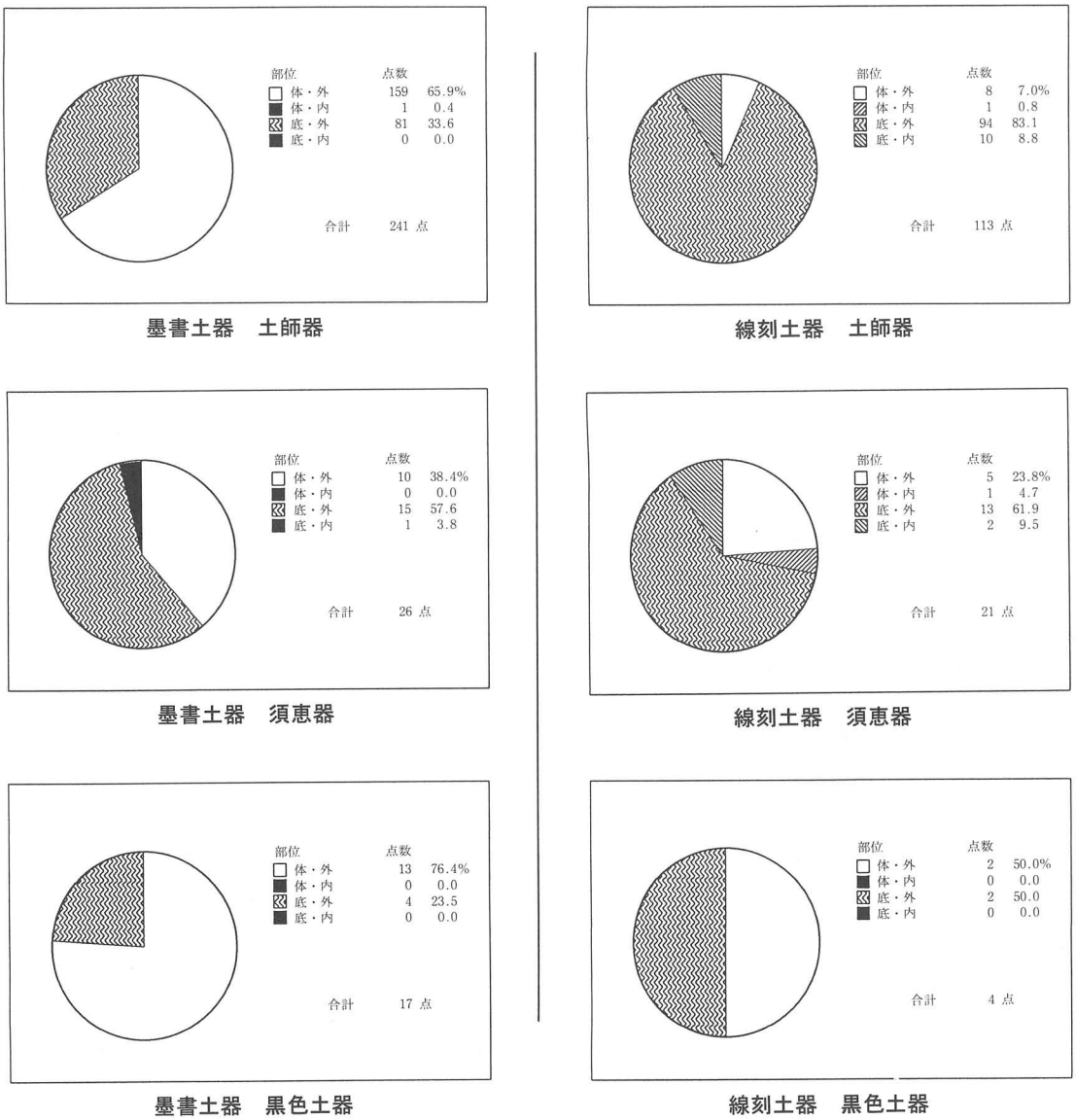
ヘラ書土器

第47図　墨書・線刻・ヘラ書をされる種別割合

4．墨書土器と硯（転用硯）との関係

文字を記す際、墨書で必要となるのは筆、墨、硯等の筆記具であるが、本遺跡では筆と墨は遺物として検出できなかった。しかし、硯（陶硯および転用硯）については遺構内外から計32点出土している。そのうちの４点は須恵器製の円面硯で、台脚に透かしをもつタイプのものである。うち１点が47号住居址出土で残りは遺構外出土である。いずれも破片または小片で、47号住居址出土のものは、他の出土した土器群が新しい様相を示すため流れこみである可能性が強い。そして残る28点は転用硯であり、それらは須恵器の蓋の内面や瓶の底部外面、甕の胴部破片の内面、土師器（黒色土器）高台付坏の高台部外面、灰釉陶器椀、皿の高台部外面を硯として転用したものである。出土している多くの転用硯（陶硯も含む）には、摩滅痕がみられたり、墨が付着していたりするが、墨の付着は黒墨だけではなく朱墨もみられる。点数としては４点と少ないが、墨書土器では朱墨のものが一点も確認されていないのが気にかかる。単に見逃しているだけなのか、別の用途で使用していたものなのか、朱墨の用途が問題となってこよう。

さて、竪穴住居址出土の転用硯は、竪穴住居址の時期をそれらに当てはめると、Ⅱ期、Ⅲ期、Ⅳ期、Ⅵ期、Ⅶ期、Ⅷ期、Ⅸ期にその存在が認められる。Ⅱ期、Ⅲ期、Ⅳ期の転用硯は、須恵器蓋の内面を磨墨面として使用したもので、Ⅵ期以降の転用硯は、故意に打ち欠いた須恵器甕胴部破片の内面を磨墨面として使用したものが大半を占める。ただ、Ⅸ期では、土師器（黒色土器）高台付坏や灰釉陶器椀の高台部外面を使用しているものが多くⅡ期の墨書土器は現段階では確認されていないものの、同期に転用硯がみられることから、墨書土器の出現期がⅡ期まで遡る可能性がある。また、Ⅱ期～Ⅳ期までは、各期１軒１点程度の保有状況であったのが、Ⅵ期以降、Ⅸ期まで各期２軒～８軒が転用硯を保有している状況がわかる。墨書土器がⅥ期以降急増するに伴って、転用硯



第48図　墨書土器と線刻土器における種別ごと記銘状況

もそれに比例して増加しているのではあるが、実は各期ごとに存在した竪穴住居址の全体数からすれば、その量は大した量ではなく、その保有率は低いといえよう。墨書土器は量的な面からみると集落内に普及した状況がうかがわれるが、文字を記した人間、いわゆる識字層は、転用硯の出土状況からみると、ある程度限られた存在であったことが推測できる。

5．小　括

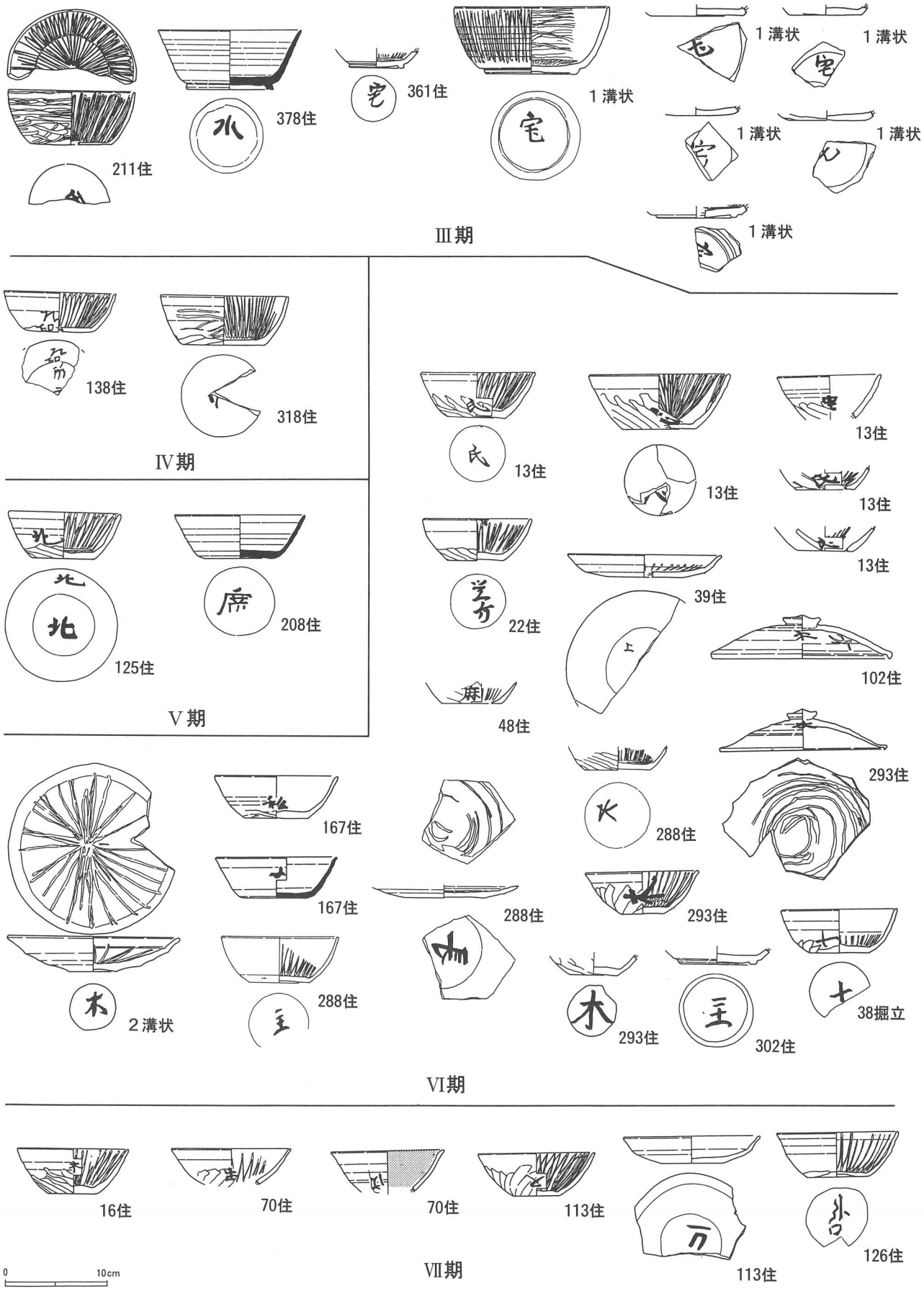
以上のように、本遺跡における墨書土器と線刻土器の様相を、出土遺構、出現と終焉の時期と各期における出土量の変化、文字内容、墨書および線刻される土器の種別と器種、記銘部位、硯との関係等から概観してきた。繰り返しになるが、本遺跡における文字関係資料は集落出現当初は線刻土器だけだった。その内容は記号資料が多く、文字資料は非常に少なかった。８世紀後半（Ⅲ期）に入り墨書土器がはじめてみられたが、その時点ではまだ線刻土器の方が主体的な存在であり、その傾向は９世紀初頭（Ⅴ期）まで続いた。しかし墨書土器は９世紀前半（Ⅵ期）には急激な増加を示し、線刻土器を量的に凌駕した。そして墨書土器は10世紀後半（Ⅸ期）に最高の出土量がみられたが、11世紀に入ると皆無状態となり、線刻土器と共に終焉を迎えた。このような状況の背景

には如何なる事象が存在するのだろうか。また、墨書土器と線刻土器の集落遺跡における存在意義は何だったのだろうか。

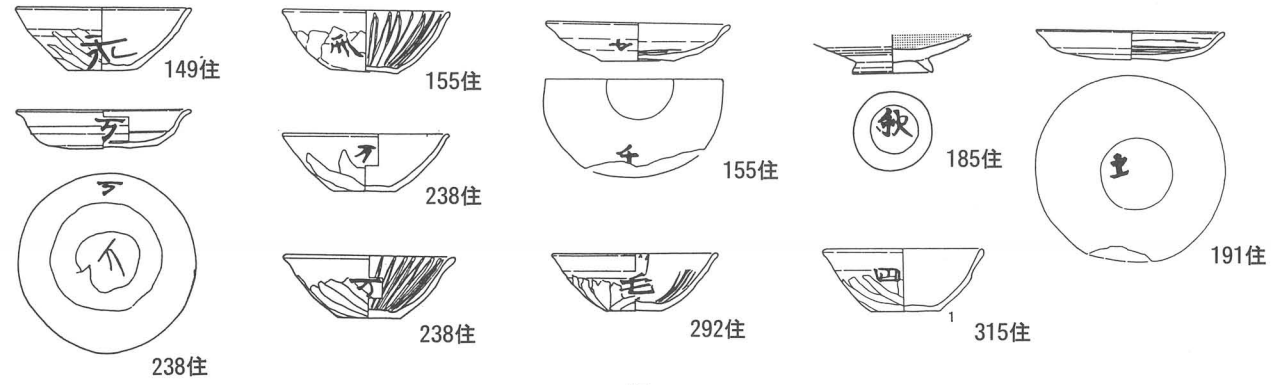
そうした問題を墨書の文字の字形から分析を試みた平川南氏の「墨書土器とその字形—古代村落における文字の実相—」と題する論文がある（平川　1991）。氏はこのなかで、東日本各地において墨書土器の出土量が多い遺跡を20遺跡ほど選び出し分析を行っている。そして墨書土器に記されている文字の種類がきわめて限定され、共通した文字を記していることが多いこと。変形したままの字形が広く分布していること。中国で考案された則天文字、篆書体等の特殊文字やそれらに類似する日本独自の特殊な字形の文字が東日本各地の遺跡に広く分布していること等を指摘し、「集落遺跡の墨書土器は古代の村落内の神仏に対する祭祀・儀礼形態をものがたる側面が強く、必ずしも、墨書土器が文字の普及のバロメーターとはなりえない」と祭祀・儀礼面を強調し、「東国各地の農民が会得した文字を取捨選択して記したものではない」と識字層の拡大には否定的な見解を示している。

宮ノ前遺跡でも１・２号溝状遺構から多数出土している墨書土器や線刻土器が他の祭祀遺物との共伴から、祭祀・儀礼行為に伴うものと推測でき、竪穴住居址内からも溝状遺構出土の墨書土器と同じ文字内容をもつものが多数出土していることから、竪穴住居址内出土のそれも祭祀・儀礼行為に伴う可能性があることが指摘できる。そして陶硯、特に転用硯の出土状況から、墨書土器が量的にピークを迎えた時でも識字層はある程度限られた存在であった可能性が強く、平川氏が指摘した状況がうかがわれる。また、墨書土器の普及以前に「寺」と記した線刻土器が出土していること、そして則天文字、篆書体等の字形に影響された文字もみられることから、これも平川氏が指摘するように、僧侶的な人物が文字を伝播させた可能性も考えられる。

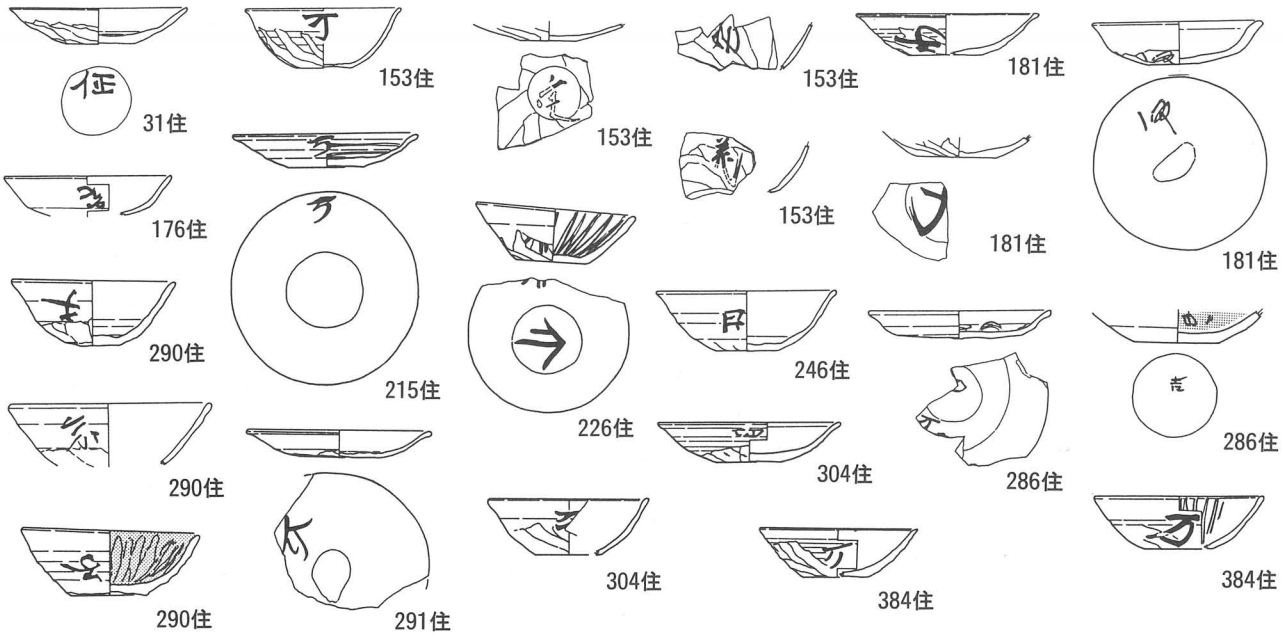
浅学のため文字内容（釈文）に対して事実誤認も多数あろうかと思われる。御叱正をいただき資料の内容の充実を図っていきたい。宮ノ前遺跡の文字関係資料は、古代における本集落の社会状況をものがたる有力な資料といえ、さまざまな視点から分析を行っていかなければならない。時間的推移のなかで集落内の分布状況の変化や文字内容に関する詳細な分析等も試みることができなかったため、別の機会に試みたいと考えている。



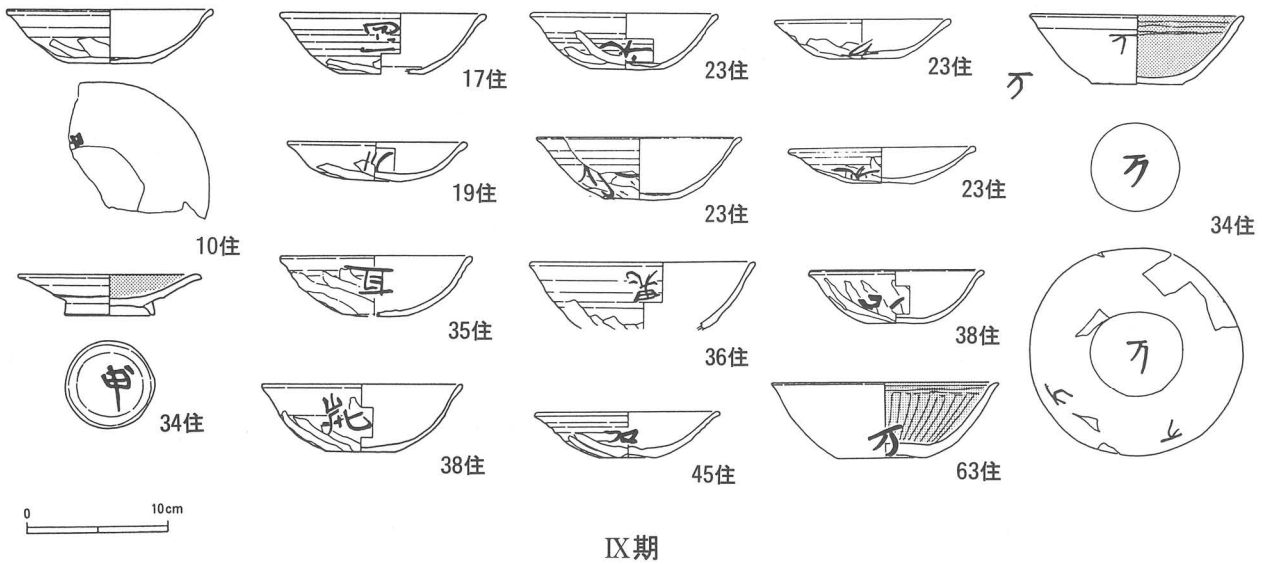
第49図　各期の墨書土器(1)



Ⅶ期

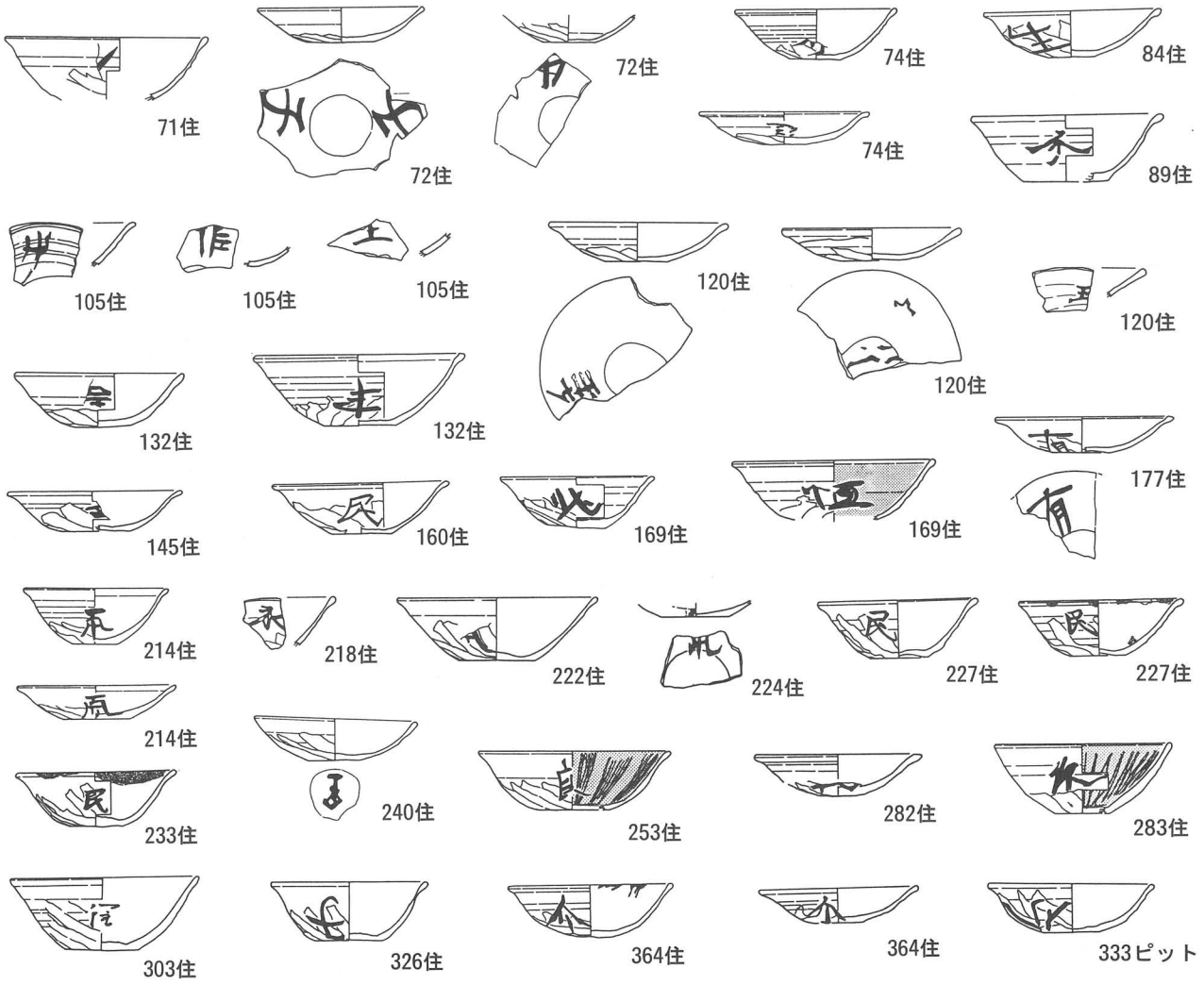


Ⅷ期

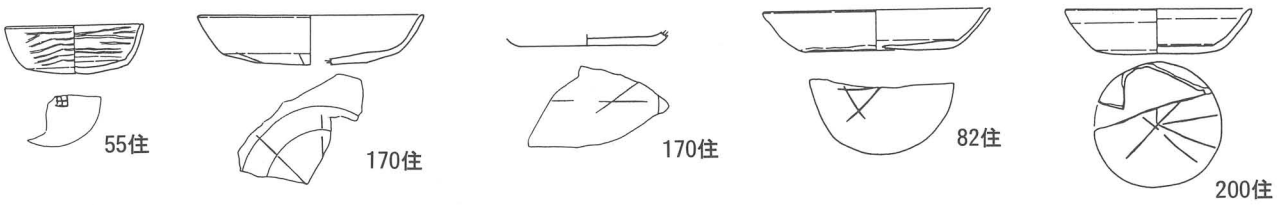


Ⅸ期

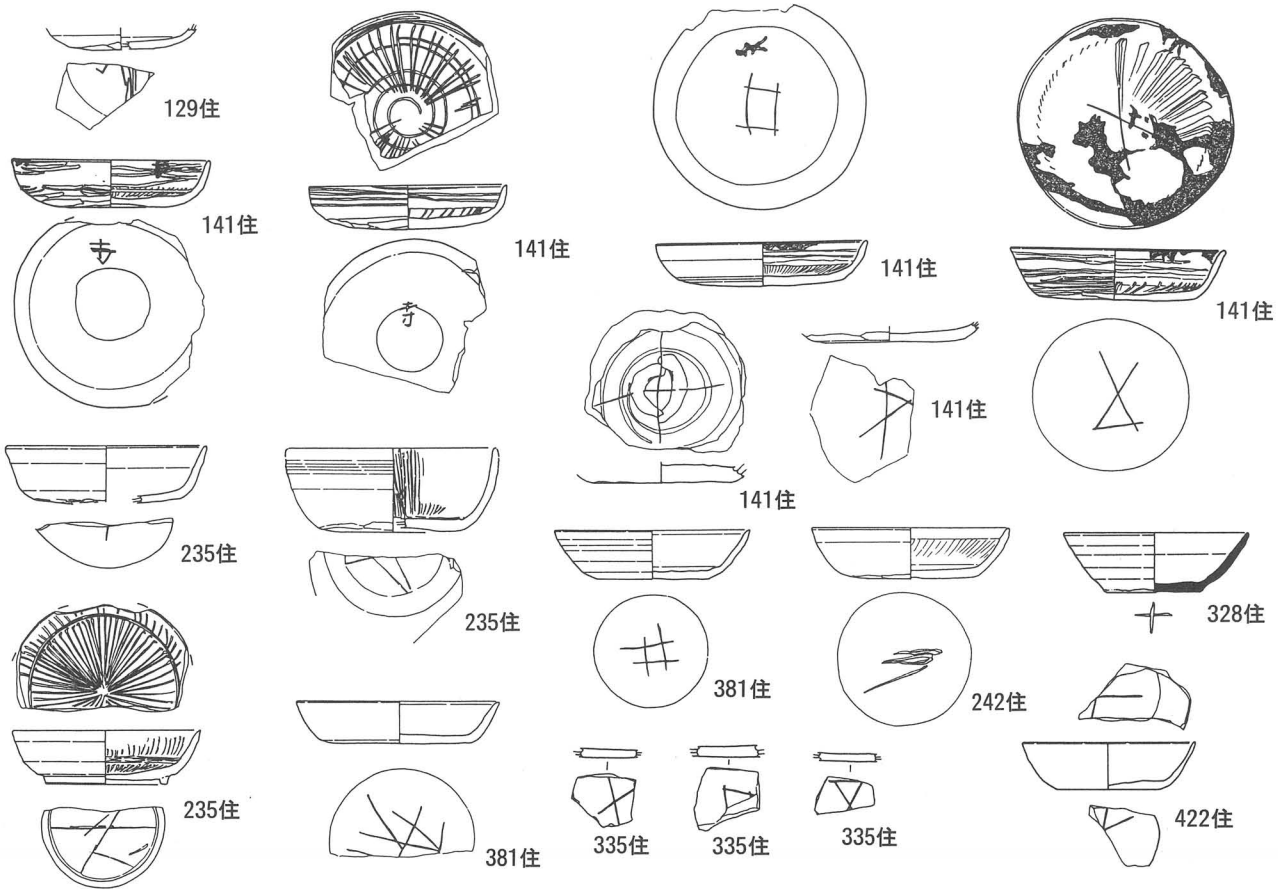
第50図　各期の墨書土器(2)



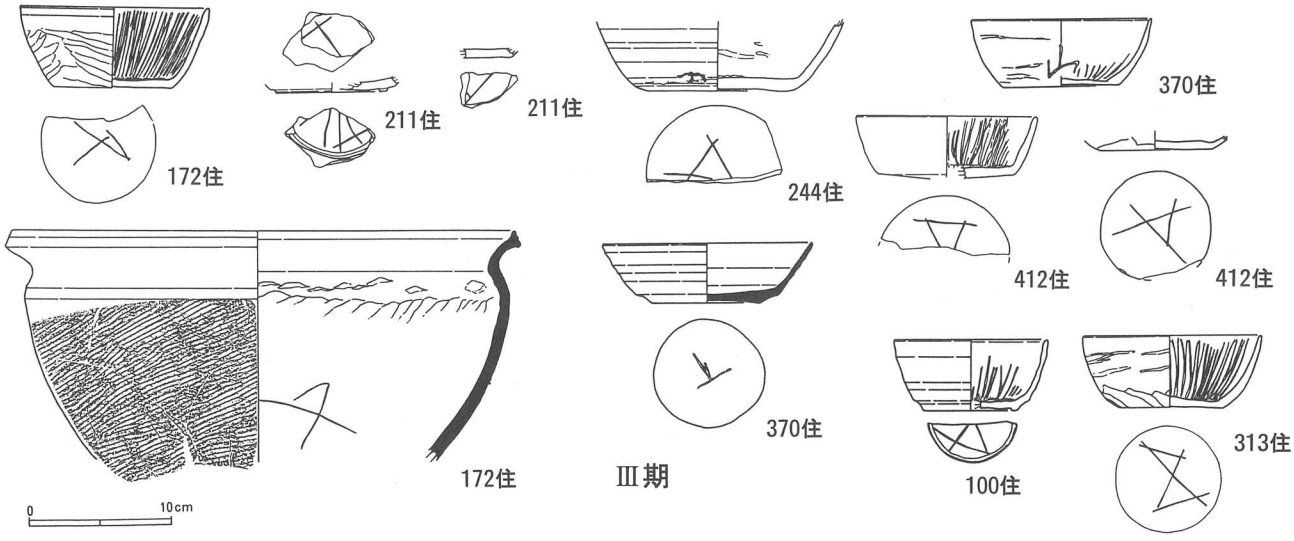
第51図　各期の墨書土器(3)



Ⅰ期

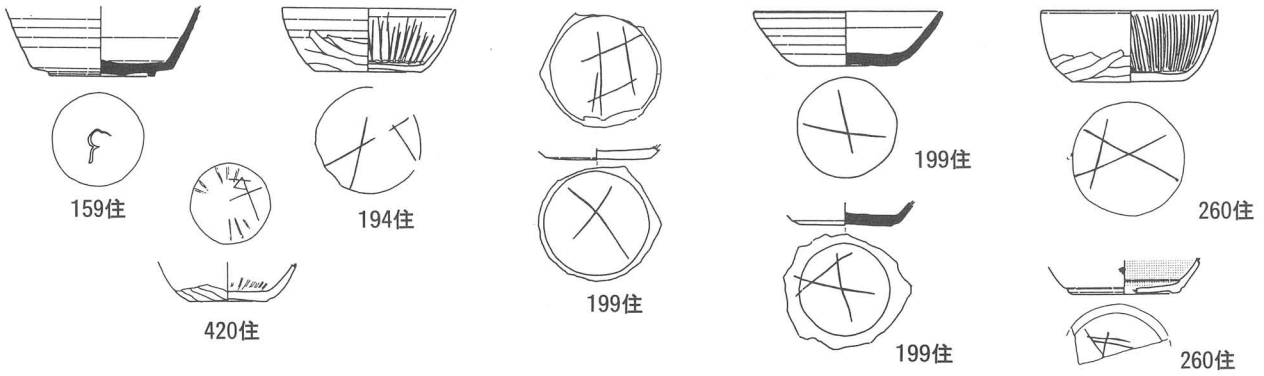


Ⅱ期

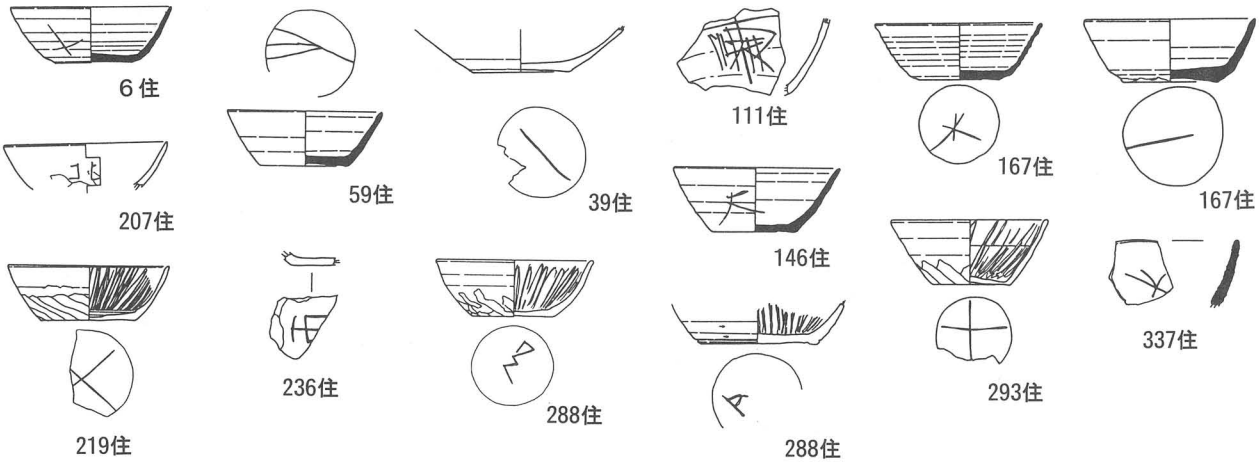


Ⅲ期

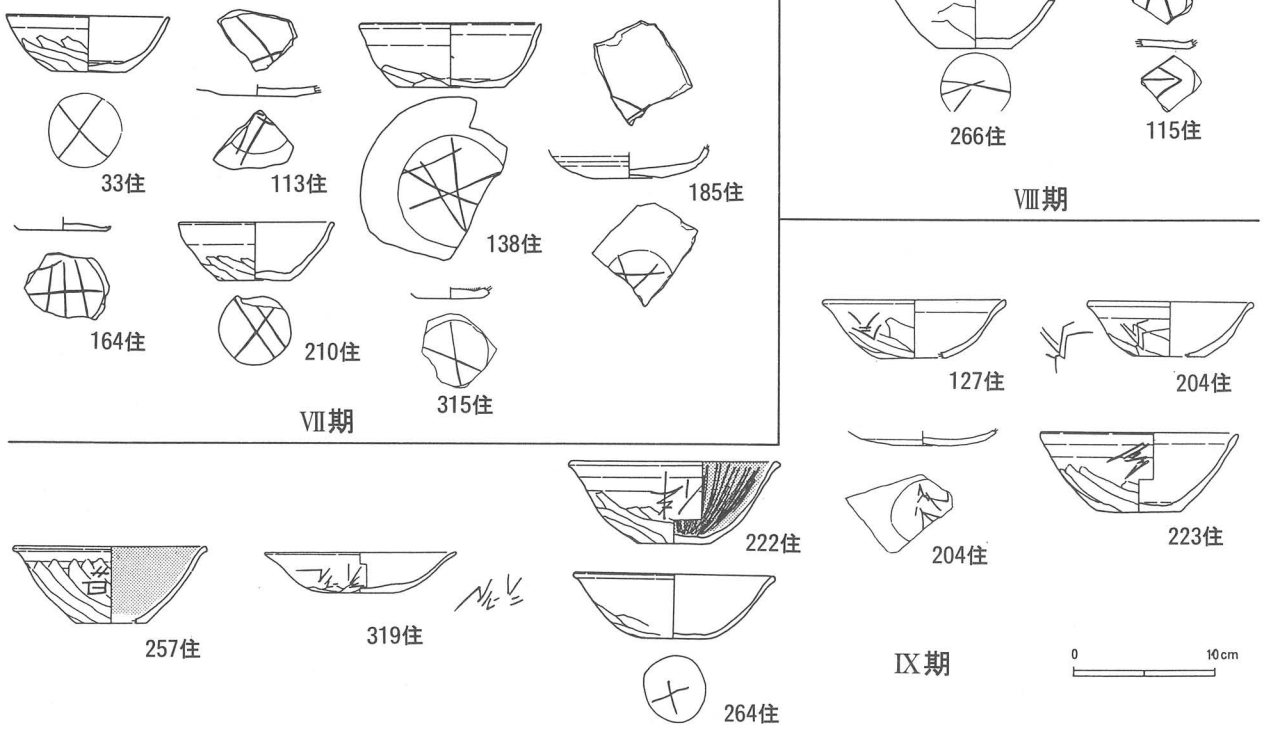
第52図　各期の線刻土器(1)



V期



VI期



VII期

VIII期

IX期

第53図　各期の墨書土器(2)

第28表　宮ノ前遺跡出土墨書土器一覧表

挿図番号	出土遺構名	墨書内容	種別	器種	記銘部位およびその状況	時期	備考
131-3	4号住居址	□	土師	坏	体・外	Ⅷ	
133-7	10号住居址	七カ	土師	坏	体・外　横位	Ⅸ	文字は小さい
134-12	11号住居址	上	土師	坏	底・外	Ⅵ	
135-2	13号住居址	氏・氏	土師	坏	体・外／底・外	Ⅵ	同一文字を２箇所に記す
135-3		氏・氏	土師	坏	体・外／底・外	Ⅵ	同一文字を２箇所に記す
135-4		宅カ	土師	坏	体・外	Ⅵ	
135-5		氏	土師	坏	体・外	Ⅵ	
135-6		氏	土師	坏	体・外	Ⅵ	
135-12		□	土師	坏	体・外	Ⅵ	
135-13		□	土師	坏	体・外	Ⅵ	
135-14		□	須恵	坏	底・外	？	
136-1	16号住居址	木	土師	坏	体・外	Ⅶ	文字は小さい
136-2	17号住居址	罡カ	土師	坏	体・外	Ⅸ	「岡」の異体字か
137-14	18号住居址	□	土師	？	体・外	？	
137-8	19号住居址	川カ	土師	皿	体・外　倒位	Ⅸ	
139-1	22号住居址	生 万	土師	坏	底・外	Ⅵ	墨痕うすい、灯明具
140-3	23号住居址	夕	土師	坏	体・外　倒位	Ⅹ	
140-5		□	土師	坏	体・外	Ⅹ	
140-6		介	土師	坏	体・外	Ⅹ	
140-8		万	土師	皿	体・外	Ⅹ	
140-9		夕	土師	皿	体・外　倒位	Ⅹ	
140-10		□	黒色	坏	体・外	Ⅹ	
141-14	25号住居址	宅	土師	皿	体・外	Ⅶ	
141-18		□	土師	坏	体・外	Ⅶ	１文字か２文字
144-1	31号住居址	征	土師	皿	底・外	Ⅷ	２文字の可能性あり
145-3	34号住居址	万・万・万	黒色	坏	体・外／体・外／底・外	Ⅸ	「万」を３箇所に記す
145-8		申	黒色	皿	底・外	Ⅸ	
145-5	35号住居址	直(直カ)	土師	坏	体・外　倒位	Ⅸ	
146-3	36号住居址	畏	土師	坏	体・外　倒位	Ⅸ	合わせ文字だろう
147-1	38号住居址	□	土師	坏	体・外	Ⅸ	墨痕うすい
147-4		帋	土師	坏	体・外	Ⅸ	２文字か
147-6	39号住居址	上	土師	皿	底・外	Ⅵ	文字は小さい、墨痕うすい
150-6	45号住居址	□	土師	皿	体・外	Ⅸ	墨痕うすい
150-2	46号住居址	□	黒色	坏	体・外	Ⅶ	墨痕うすい
151-1	48号住居址	□ 麻	土師	坏	体・外	Ⅵ?	２文字以上の可能性あり
151-1	49号住居址	□	土師	坏	体・外　倒位	Ⅸ	
153-7	58号住居址	□	土師	坏	体・外	Ⅸ	
154-4	59号住居址	□	黒色	坏	底・外	Ⅵ	墨痕うすい
155-5	63号住居址	万	黒色	坏	体・外	Ⅸ	墨痕かすれる
158-7	70号住居址	生	土師	坏	体・外	Ⅶ	

挿図番号	出土遺構名	墨書内容	種別	器種	記銘部位およびその状況	時期	備考
158-9	70号住居址	内カ	黒色	坏	体・外　倒位	Ⅶ	
159-2	71号住居址	□	土師	坏	体・外	Ⅸ	
159-1	72号住居址	子・子	土師	皿	体・外／体・外　倒位／倒位	Ⅸ	文字は大きい、墨痕うすい、同一文字を２箇所に記す
159-2		□	土師	坏	体・外　倒位	Ⅸ	
159-1	74号住居址	介カ	土師	坏	体・外	Ⅸ	
159-4		辶	土師	皿	体・外　倒位	Ⅸ	
160-7	78号住居址	□	土師	坏	体・外	Ⅸ～Ⅹ	
161-6	83号住居址	□	土師	坏カ皿	体・外	?	
161-7	84号住居址	生	土師	坏	体・外	Ⅸ	
162-3	87号住居址	□	土師	坏	体・外	?	
163-2	89号住居址	介	土師	坏	体・外	Ⅸ～Ⅹ	
164-2	91号住居址	□	土師	皿カ	底・外	Ⅶ?	墨痕うすい
164-1	94号住居址	□	黒色	坏	体・外　横位	?	２文字以上、器面汚れみえにくい
166-3	102号住居址	木	土師	蓋	体・外	Ⅵ	
167-8	105号住居址	□	土師	坏	体・外	Ⅸ	
167-9		□	土師	坏	体・外	Ⅸ	
167-10		□	土師	坏	体・外	Ⅸ	
168-9	107号住居址	□	土師	坏	底・外	?	２文字か。線刻もあり
168-1	110号住居址	□	土師	坏	体・外	Ⅶ	
169-5	111号住居址	□	土師	坏	底・外	Ⅵ	器面汚れかつ墨痕うすく判読不可
170-2	113号住居址	又	土師	坏	体・外　倒位	Ⅶ	墨痕うすい
170-4		□	土師	皿	体・外	Ⅶ?	
170-6		万カ	土師	皿	底・外	Ⅶ	墨痕うすい
171-13	115号住居址	□	土師	皿	体・外	Ⅷ?	
172-5	119号住居址	□	土師	坏	体・外	?	墨痕うすい
172-1	120号住居址	□ □	土師	皿	体・外	Ⅸ	２文字か、１文字かもしれない
172-2		□・□	土師	皿	体・外／底・外	Ⅸ	２箇所墨痕あり
172-4		□	土師	皿カ	体・外	Ⅸ	
173-1	122号住居址	□ □	土師	坏	底・外	Ⅶ	２文字か、１文字めが判読不可
174-1	125号住居址	北・北	土師	坏	体・外／底・外	Ⅴ	２箇所に記す
175-9	130号住居址	□	土師	坏	底・外	Ⅵ?	
175-10		氏カ	土師	坏	底・外	Ⅵ?	
175-1	132号住居址	吉	土師	坏	体・外　倒位	Ⅸ	
175-2		ま	土師	坏	体・外　倒位	Ⅸ	墨痕うすい
176-6	133号住居址	卫	土師	坏	底・外	?	２文字か、混入品か
176-9	137号住居址	□	須恵	坏	体・外	?	
177-2	138号住居址	□印カ所□	土師	坏	体・外～底・外	Ⅳ～Ⅴ	４文字以上か
177-8		□	土師	皿	体・外	?	
177-2	139号住居址	立	土師	坏	体・外	Ⅷ	
177-8		□	土師	坏	体・外	Ⅷ	

挿図番号	出土遺構名	墨書内容	種別	器種	記銘部位およびその状況	時期	備考
178-13	139号住居址	□	黒色	坏	体・外	Ⅷ	
180-1	144号住居址	□	土師	坏	体・外	Ⅷ	
180-3		□（義カ）	土師	坏	体・外	Ⅷ	
180-4		□□	土師	皿	体・外　倒位	Ⅷ	2文字か
181-2	145号住居址	□	土師	皿	体・外	Ⅸ	
182-3	149号住居址	永	土師	坏	体・外	Ⅷ	
182-9		□	土師	坏	体・外	？	
182-10		□	土師	坏	体・外	？	
182-11		□	土師	坏	体・外	？	
183-2	153号住居址	万	土師	坏	体・外	Ⅷ	
184-20		□	土師	皿	底・外	Ⅷ	
184-23		宅カ	土師	皿	底・外	Ⅷ	
184-26		義カ	黒色	坏	体・外	Ⅷ	
184-34		宅カ	土師	坏	体・外	Ⅷ	
184-35		義カ	土師	坏	体・外	Ⅷ	
185-1	155号住居址	爪	土師	坏	体・外	Ⅶ	カマド内出土
185-4		□	土師	坏	底・外	Ⅶ	
185-7		千	土師	皿	体・外　倒位	Ⅶ	
185-9		□	土師	皿	底・外	Ⅶ	
186-3	158号住居址	□	黒色	坏	底・外	Ⅸ	
186-6		□	土師	坏カ	体・外	？	
187-3	160号住居址	民	土師	坏	体・外	Ⅸ	
188-1	161号住居址	□	土師	坏	体・外	Ⅸ	
190-2	167号住居址	私	土師	坏	体・外	Ⅴ～Ⅵ	
190-5		才	須恵	坏	体・外	Ⅴ～Ⅵ	
191-1	169号住居址	北カ	土師	坏	体・外	Ⅸ	
191-8		恒カ	黒色	坏	体・外	Ⅸ	
191-6	170号住居址	宅	土師	坏	底・外	？	線刻もあり、混入品か
193-2	176号住居址	宅カ	土師	坏	体・外　倒位	Ⅷ	
194-11	177号住居址	十月 または 有	土師	皿	体・外	Ⅸ	
194-13		□	土師	坏	底・外	？	
195-4	181号住居址	子	土師	坏	体・外　倒位	Ⅷ	
195-6		子	土師	坏	底・外	Ⅷ	
195-7		□	土師	坏	体・外	Ⅷ	
196-7	185号住居址	秋	黒色	皿	底・外	Ⅶ	
196-9		□	土師	坏	体・外	？	
197-2	188号住居址	□	土師	坏	体・外	？	
198-4	189号住居址	□	土師	皿	体・外	？	
198-6	191号住居址	土カ	土師	坏	体・外	Ⅶ	
198-8	191号住居址	土	土師	皿	底・外	Ⅶ	

挿図番号	出土遺構名	墨書内容	種別	器種	記銘部位およびその状況	時期	備考
204-2	208号住居址	廣カ	須恵	坏	底・外	V?	文字かすれる
205-1	211号住居址	□	土師	坏	底・外	Ⅲ	墨痕うすい
205-1	214号住居址	丙	土師	坏	体・外	Ⅸ	混入品だろう
205-2		丙	土師	皿	体・外	Ⅸ	混入品だろう
206-3	215号住居址	万	土師	皿	体・外	Ⅷ	
206-5		万	土師	坏カ	体・外	Ⅷ	
207-6	218号住居址	永	土師	坏	体・外	Ⅸ～Ⅹ	
207-7		□	土師	坏	体・外	Ⅸ～Ⅹ	
209-3	221号住居址	宅	土師	坏	底・外	Ⅵ?	墨書の後、線刻
209-4	222号住居址	丙カ	土師	坏	体・外	Ⅸ	
209-9		宅	土師	坏	底・外	?	混入品か
210-5	224号住居址	万	土師	坏	底・外	Ⅸ	文字太い
210-6		丙カ	土師	坏	体・外	Ⅸ	
211-1	226号住居址	介カ・介	土師	坏	体・外／底・外	Ⅷ	墨痕うすい、 ２箇所に記す
211-2	227号住居址	民	土師	坏	体・外	Ⅸ	
211-3		民	土師	坏	体・外	Ⅸ	灯明具
212-30		□	土師	坏	底・外	Ⅸ	
212-31		□	土師	坏	体・外	Ⅸ	
213-4	233号住居址	民	土師	坏	体・外	Ⅸ	灯明具、墨痕うすい
216-2	238号住居址	万	土師	坏	体・外	Ⅶ	
216-4		万	土師	坏	体・外	Ⅶ	
216-8		万	土師	皿	体・外	Ⅶ	底・外に線刻「万」あり
217-9	240号住居址	□	土師	皿	底・外	Ⅸ	墨痕うすい
219-14	243号住居址	□	土師	坏	体・外	Ⅷ	
219-2	244号住居址	□	土師	坏	体・外　倒位	Ⅲ	カマド内出土、 底・外に線刻あり
220-1	246号住居址	民カ	土師	坏	体・外	Ⅷ	
220-2	247号住居址	山カ	土師	坏	体・外　横位	Ⅸ	
223-5	253号住居址	良カ	黒色	坏	体・外	Ⅸ	
231-2	282号住居址	丙カ	土師	坏	体・外	Ⅸ?	
231-2	283号住居址	□	土師	皿	体・外	Ⅸ?	
231-3		□	土師	皿	体・外　倒位	Ⅸ?	
231-4		□	土師	坏	体・外	Ⅸ?	
231-6		〆	黒色	坏	体・外	Ⅸ?	
233-11	286号住居址	万 □	土師	皿	底・外	Ⅷ	最低２文字
233-12		□（吉カ）	土師	皿	底・外	?	
233-13		□	土師	皿	底・外	?	
234-4	288号住居址	主	土師	坏	底・外	Ⅵ	
234-6		□	土師	坏	底・外	Ⅵ	２文字か
235-8		□ □	土師	坏	底・外	Ⅵ	２文字か、 線刻もあり
235-13		長	土師	皿	底・外	Ⅵ	墨痕うすい

挿図番号	出土遺構名	墨書内容	種別	器種	記銘部位およびその状況	時期	備考
236-1	290号住居址	丈	土師	坏	体・外　倒位	Ⅷ	
236-4		□	土師	坏	体・外	Ⅷ	
236-7		丈カ	土師	皿	底・外	Ⅷ	
236-8		子・子	黒色	坏	体・外／体・外　倒位／倒位	Ⅷ	
236-12	291号住居址	介	土師	皿	体・外	Ⅷ	
237-4	292号住居址	毛	土師	坏	体・外	Ⅶ	
237-9		万	土師	皿	体・外	Ⅶ	
237-15	293号住居址	木	土師	皿	体・外　横位	Ⅵ	
238-31		□	土師	皿	底・外	Ⅵ	
238-36		乕(正合カ)	土師	坏	体・外	Ⅵ	
238-37		木	土師	坏	底・外	Ⅵ	
238-38		木	土師	坏	底・外	Ⅵ	
238-39		木	土師	蓋	体・外	Ⅵ	
240-1	299号住居址	□	土師	坏	体・外	Ⅸ	
240-7	301号住居址	□	土師	坏	体・外	?	
241-13	302号住居址	主	土師	坏	底・外	Ⅵ	
241-3	303号住居址	□	土師	坏	体・外	Ⅸ	
242-1	304号住居址	万	土師	坏	体・外	Ⅷ	
242-8		□	土師	皿	体・外	Ⅷ	
242-10		□	土師	坏	体・外	Ⅷ	墨痕うすい
242-11		宅	土師	坏	底・外	Ⅳ	線刻もあり、混入品か
244-8	310号住居址	□	黒色	坏	体・外	Ⅸ	
246-1	315号住居址	山	土師	坏	体・外	Ⅶ	
246-4		□	土師	坏	体・外	Ⅶ	
246-7		□(山カ)	土師	坏	体・外	Ⅶ	墨痕うすい
246-17		万カ	土師	坏	体・外	Ⅶ	
246-18		□	土師	坏	体・外　倒位	Ⅶ	
246-6	316号住居址	万カ	土師	皿	体・外	Ⅷ	
246-8		□	土師	坏	体・外	Ⅷ	
247-1	318号住居址	□	土師	坏	底・外	Ⅳ	体・外に線刻あり、混入品か
248-8	324号住居址	□	土師	坏	体・外	?	
249-1	326号住居址	子	土師	坏	体・外　倒位	Ⅸ	
251-1	332号住居址	□・□	土師	坏	底・外／体・外	Ⅸ	墨書らしい、うすい墨痕あり
252-3	336号住居址	□	土師	坏	底・外	?	
252-11	337号住居址	□	土師	坏	底・外	?	
252-12		□	土師	坏	体・外	?	
253-3	338号住居址	完	土師	坏	体・外	X	
256-2	346号住居址	□	土師	坏	体・外	Ⅷ	墨痕うすい
257-2	348号住居址	□	土師	坏	体・外	Ⅷ	
259-2	356号住居址	中	土師	坏	底・外	Ⅵ?	

挿図番号	出土遺構名	墨書内容	種別	器種	記銘部位およびその状況	時期	備考
260-1	361号住居址	宅	土師	坏	底・外	Ⅲ?	墨痕うすい
261-2	364号住居址	介	土師	坏	体・外	Ⅸ	灯明具
261-5		介	土師	皿	体・外	Ⅸ	
262-2	369号住居址	□	黒色	坏	体・外	Ⅸ	
263-1	371号住居址	宅	土師	坏	底・外	Ⅴ?	墨痕うすい
266-2	378号住居址	水カ	須恵	坏	底・外	Ⅲ	墨痕うすい
266-5	379号住居址	□	土師	皿	体・外　倒位	?	
268-1	384号住居址	万	土師	坏	体・外	Ⅷ	
268-2		万	土師	坏	体・外	Ⅷ	
272-3	403号住居址	□天□	土師	坏	底・外	?	比較的小さな文字で丁寧に記す
272-4		□	土師	坏	体・外	?	
274-5	413号住居址	□	土師	坏	底・外	?	
277-12	421号住居址	山カ	土師	坏	体・外	?	墨痕うすい
277-13		杁	土師	坏	底・外	?	
278-2	10号掘立柱建物址	木カ	土師	坏	底・外	Ⅵ	灯明具、混入品か
279-26	38号掘立柱建物址	十・十	土師	坏	体・外／底・外　倒位	Ⅵ	2箇所に記す
281-15	22号土坑	木	土師	坏	底・外	?	
284-32	17号溝址	□	土師	皿	体・外	Ⅸ?	
284-1	2号畝状遺構	□	土師	坏	体・外	Ⅵ?	混入品か
284-4		万カ	土師	坏	体・外	?	混入品か
288-78	1号溝状遺構	宅	土師	坏	底・外	Ⅲ	
288-79		□	土師	坏	体・外	?	
288-80		□	土師	坏	体・外	?	
288-81		□	土師	坏	体・外	?	
288-82		□	土師	坏	体・外	?	墨痕うすい
288-83		氏カ	土師	坏	体・外	?	
288-84		□	土師	坏	体・外	?	
288-85		□	土師	坏	体・外	?	
288-86		□	土師	坏	体・外	?	
288-87		□	土師	坏	体・外	?	
288-88		宅カ	土師	坏	底・外	Ⅲ～Ⅳ?	
288-89		宅カ	土師	坏	底・外	Ⅲ～Ⅳ?	
288-90		宅カ	土師	坏	底・外	Ⅲ～Ⅳ?	
288-91		宅	土師	坏	底・外	Ⅲ～Ⅳ?	
288-92		宅カ	土師	坏	底・外	Ⅲ～Ⅳ?	
288-93		宅カ	土師	坏	底・外	Ⅲ～Ⅳ?	
288-94		万	土師	坏	底・外	?	
288-95		宅カ	土師	坏	底・外	Ⅲ～Ⅳ?	
288-96		家	土師	坏	底・外	Ⅲ～Ⅳ?	文字は小さく記す
288-97		中カ	土師	坏	底・外	?	墨痕うすい

挿図番号	出土遺構名	墨書内容	種別	器種	記銘部位およびその状況	時期	備考
288-98	1号溝状遺構	□□	土師	坏	底・外	Ⅵ?	2文字か、墨痕うすい
288-99		□	土師	坏	底・外	?	
288-100		□	土師	坏	底・外	Ⅳ～Ⅴ?	
288-101		又カ	土師	坏	底・外	?	
288-102		□	土師	坏	底・外	?	
288-103		阝	土師	坏	底・外	?	
288-104		丙カ	土師	坏	底・外	?	文字はやや小さく記す
288-105		□	土師	坏	底・外	?	
289-106		冗	須恵	坏	底・外	?	
289-107		宅カ	須恵	坏	底・外	?	墨痕うすい
292-31	2号溝状遺構	木	土師	皿	底・外	?	
292-32		□	土師	坏	体・外	?	
292-33		□	土師	坏	体・外	?	
292-34		四カ	須恵	坏	底・外	?	
292-40		稲（稲）	須恵	坏	体・外	?	
292-41		□	須恵	坏	底・外	?	
292-42		久カ	須恵	坏	体・外　倒位	?	
292-43		□	須恵	坏	体・外	?	
292-44		吉	須恵	坏	底・外	?	底・内に線刻あり
292-45		吉	須恵	坏	体・外	?	
292-46		□	須恵	坏	体・外	?	
292-47		主カ	須恵	坏	体・外	?	
292-48		□	須恵	坏	底・外	?	
292-49		宅カ	須恵	坏	底・外	?	
292-50		□	須恵	坏	底・内	?	
292-51		宅カ	須恵	坏	底・外	?	
292-52		吉	須恵	坏	底・外	?	
292-53		□・□	須恵	坏	体・外／底・外	?	2箇所に記す
292-54		□	須恵	坏	体・外	?	
292-55		□	須恵	坏	体・外	?	
292-56		□	須恵	坏	底・外	?	
292-57		主	須恵	坏	底・外	?	
292-58		浄人	須恵	坏	底・外	?	墨痕うすい
296-2	333号ピット	介	土師	坏	体・外　倒位	Ⅸ?	
296-71	A22B28	□	土師	坏	体・外	Ⅵ?	
296-72	A23B26	□	土師	坏	体・外	?	
296-73	A21B29	□	土師	坏	体・外	?	
296-74		□	土師	坏	体・内	?	
296-75		□	土師	皿	体・外	?	
296-76	A23B27	木	土師	坏	底・外	?	

挿図番号	出土遺構名	墨書内容	種別	器種	記銘部位およびその状況	時期	備考
296-77	A23B27	□	土師	坏	底・外	Ⅵ～Ⅶ?	
296-78	A22B28	木	土師	坏	底・外	Ⅵ～Ⅶ?	
296-79	A23B26	□ □	土師	坏	底・外	?	2文字以上、墨痕うすい
296-80	A23B27	□	土師	皿	底・外	?	
296-81	A23B25	□	土師	皿	体・外	?	
296-82	表採	万	土師	坏	底・外	?	
135-10	13号住居址	□	土師	蓋	体・外	Ⅵ	
292-35	2号溝状遺構	人面墨書	土師	鉢	頸・外	?	35～39は同一個体
292-36		人面墨書	土師	鉢	胴・外	?	
292-37		人面墨書	土師	鉢	胴・外	?	
292-38		人面墨書	土師	鉢	胴・外	?	
292-39		人面墨書	土師	鉢	胴・外	?	

第29表　宮ノ前遺跡出土線刻土器一覧表

挿図番号	出土遺構名	線刻内容	種別	器種	記銘部位およびその状況	時期	備考
132-1	6号住居址	卅	土師	坏	底・外	Ⅵ	
132-3		十	須恵	坏	体・外	Ⅵ	
144-4	32号住居址	×カ	須恵	坏	底・外	？	混入品か
144-1	33号住居址	×	土師	坏	底・外	Ⅶ	
147-5	39号住居址	—	黒色	坏	底・外	Ⅵ	焼成前
153-1	55号住居址	田	土師	坏	底・外	Ⅰ？	
154-6	59号住居址	万カ	須恵	坏	底・内	Ⅵ	
161-1	81号住居址	川	土師	坏	体・内	Ⅰ	
165-1	100号住居址	×カ	土師	坏	底・外	Ⅳ	
165-14		□	土師	坏	底・外	Ⅳ	
168-9	107号住居址	卅カ	土師	坏	底・外	？	墨書もあり
169-10	111号住居址	卌カ・東カ	土師	坏	体・外	Ⅵ	2つの線刻が同一の箇所に記される
170-7	113号住居址	□・□	土師	皿カ	底・内／底・外	Ⅶ	2箇所に記す
170-8	114号住居址	卅カ	土師	坏	底・外	Ⅵ？	
170-9		□	土師	坏	底・外	？	
171-14	115号住居址	□・个	土師	坏	底・内／底・外	？	
174-1	127号住居址	矣	土師	坏	体・外　倒位	Ⅸ	
175-1	129号住居址	□	土師	坏	底・外	Ⅱ？	
177-3	138号住居址	×・×	土師	坏	底・内／底・外	Ⅳ～Ⅴ	2箇所に記す
177-7		□	土師	坏	底・外	？	
177-7	139号住居址	×	土師	坏	底・外	Ⅶ～Ⅷ	
178-1	141号住居址	寺	土師	坏	底・外	Ⅱ	
178-2		寺	土師	坏	底・外	Ⅱ	
178-3		井	土師	坏	底・内	Ⅱ	灯明具
178-4		×・×	土師	坏	底・内／底・外	Ⅱ	灯明具、2箇所に記す
178-6		十カ×	土師	坏	底・内	Ⅱ	
178-7		×	土師	坏	底・外	Ⅱ	
179-3	142号住居址	井	土師	坏	底・外	？	
181-1	146号住居址	大	須恵	坏	体・外	Ⅵ？	
184-22	153号住居址	□	土師	皿	体・外	Ⅷ	
184-31		廾	灰釉	椀	底・外	？	K-14段階、ヘラ書
186-5	158号住居址	□	土師	坏	底・外	？	
186-5	159号住居址	得カ	須恵	坏	底・外	Ⅴ	ヘラ書
189-7	164号住居址	卅	土師	坏	底・外	Ⅶ	
190-4	167号住居址	米	須恵	坏	底・外	Ⅴ～Ⅵ	
190-6		—	須恵	坏	底・外	Ⅴ～Ⅵ	
191-3	170号住居址	×カ	土師	坏	底・外	Ⅰ	
191-6		×	土師	坏	底・外	？	墨書もあり
191-7		×カ	土師	坏	底・外	Ⅰ	
192-1	172号住居址	×	土師	坏	底・外	Ⅲ	

挿図番号	出土遺構名	線刻内容	種別	器種	記銘部位およびその状況	時期	備考
193-12	172号住居址	又	須恵	鉢	体・内	Ⅲ	
194-12	177号住居址	米カ	土師	坏	底・外	Ⅸ	
196-2	182号住居址	乂カ	土師	坏	底・外	Ⅰ？	
196-2	185号住居址	乂カ・乂カ	土師	坏	底・内／底・外	？	２箇所に記す、混入品か
201-1	199号住居址	乂カ	土師	坏	底・外	Ⅳ～Ⅴ	
201-2		井・乂	土師	坏	底・内／底・外	Ⅳ～Ⅴ	２箇所に記す
201-8		乂	須恵	坏	底・外	Ⅳ～Ⅴ	
201-11		乂	須恵	坏	底・外	Ⅳ～Ⅴ	
202-1	200号住居址	木	土師	坏	底・外	Ⅰ	
203-2	204号住居址	〆	土師	坏	体・外	Ⅸ	絵画状
203-5		祝	土師	Ⅲ	底・外	Ⅸ	
203-4	207号住居址	北	土師	坏	体・外	Ⅵ	
203-8		乂カ	土師	坏	底・外	？	混入品か
203-7		川カ	土師	坏	底・外	？	混入品か
204-2	210号住居址	キ	土師	坏	底・外	Ⅶ	
205-3	211号住居址	乂・□	土師	坏	底・内／底・外	Ⅲ	２箇所に記す
205-4		□	土師	坏	底・外	Ⅲ	
208-4	219号住居址	乂	土師	坏	底・外	Ⅵ	
209-3	221号住居址	乂	土師	坏	底・外	Ⅵ	墨書の後、線刻 混入品か
209-10	222号住居址	伴	黒色	坏	体・外　倒位	Ⅸ	
209-6	223号住居址	□	土師	坏	体・外	Ⅶ	
211-9	226号住居址	十カ	土師	坏	体・外	？	
211-10		□・□	土師	坏	底・内／底・外	？	２箇所に記す
214-14	233号住居址	万カ	須恵	坏	底・外	？	混入品か
214-2	235号住居址	□	土師	坏	底・外	Ⅱ	
214-3		廿カ	土師	坏	底・外	Ⅱ	
214-4		〆	土師	坏	底・外	Ⅱ	
215-5	236号住居址	帀	土師	坏	底・外	Ⅴ～Ⅵ?	カマド内出土
216-8	238号住居址	万	土師	Ⅲ	底・外	Ⅶ	体・外に墨書「万」あり
216-2	239号住居址	大	土師	坏	体・外　倒位	Ⅷ	
218-2	242号住居址	□	土師	坏	底・外	Ⅱ？	
219-2	244号住居址	乂カ	土師	坏	底・外	Ⅲ	カマド内出土、 体・外に墨書あり
223-2	256号住居址	〆日カ苔	黒色	坏	体・外	Ⅸ	
224-1	260号住居址	乂	土師	坏	底・外	Ⅲ	
224-2		〆	黒色	坏	底・外	Ⅲ	
226-5	264号住居址	乂	土師	坏	底・内	Ⅸ	
226-3	266号住居址	〆	土師	坏	底・外	Ⅷ	
229-12	275号住居址	乂	須恵	坏	底・内	？	ヘラ書の可能性あり、 混入品か
231-1	279号住居址	乂カ	土師	坏	底・外	？	
231-5	282号住居址	乂	須恵	坏	底・内	Ⅲ?	混入品か

挿図番号	出土遺構名	線刻内容	種別	器種	記銘部位およびその状況	時期	備考
233-20	286号住居址	吉	黒色	坏	底・外	Ⅷ	
234-2	288号住居址	𠂉	土師	坏	底・外	Ⅵ	
235-8		卌	土師	坏	底・外	Ⅳ～Ⅴ?	墨書もあり、混入品か
235-9		□	土師	坏	底・外	Ⅵ	
235-18		彡	須恵	坏	底・外	?	ヘラ書
236-10	291号住居址	□	土師	坏	底・外	?	
237-16	293号住居址	×カ十	土師	坏	底・外	Ⅵ	
242-11	304号住居址	×	土師	坏	底・外	Ⅳ～Ⅴ	墨書もあり、混入品か
244-1	313号住居址	乂	土師	坏	底・外	Ⅳ	
246-14	315号住居址	×	土師	坏	底・外	?	混入品か
246-16		×	土師	坏	底・外	Ⅶ?	
247-1	318号住居址	×	土師	坏	体・外	Ⅲ～Ⅳ	底・外に墨書あり、混入品か
247-1	319号住居址	祝	土師	皿	体・外	Ⅸ	混入品か
250-5	328号住居址	十カ×	須恵	坏	底・外	Ⅱ～Ⅲ	
250-3	330号住居址	十	土師	坏	体・外	Ⅵ?	
251-10		十	須恵	壷	頸・外	Ⅵ?	ヘラ書
252-10	335号住居址	乂カ	土師	坏	底・外	?	混入品か
252-11		乂カ	土師	坏	底・外	?	混入品か
252-12		乂カ	土師	坏	底・外	?	混入品か
252-10	337号住居址	大カ	須恵	坏	体・外　倒位	Ⅵ?	
253-6	338号住居址	×カ	須恵	坏	底・外	?	混入品か
257-2	349号住居址	れ	灰釉	壷	底・外	?	ヘラ書、混入品か
262-1	370号住居址	山	土師	坏	体・外	Ⅲ	
262-6		万カ	須恵	坏	底・外	Ⅲ	
267-1	381号住居址	廾	土師	坏	底・外	Ⅱ?	
267-2		□	土師	坏	底・外	Ⅱ?	
271-2	398号住居址	彡	須恵	坏	底・外	Ⅳ?	
272-3	405号住居址	山	土師	坏	体・外　倒位	?	
273-1	410号住居址	□	須恵	坏	底・外	Ⅴ?	
273-2	412号住居址	×カ	土師	坏	底・外	Ⅱ～Ⅲ?	
273-3		×	土師	坏	底・外	Ⅱ～Ⅲ?	
274-3	414号住居址	□	須恵	坏	底・外	Ⅳ?	
276-1	420号住居址	弋	土師	坏	底・内	Ⅴ	
277-1	422号住居址	×カ・×カ	土師	坏	底・内／底・外	Ⅱ	2箇所に記す
277-2		—	土師	坏	底・外	Ⅲ～Ⅳ	
284-2	2号畝状遺構	十カ×	土師	坏	底・外	Ⅳ?	
284-3		□	土師	坏	底・外	Ⅳ?	
289-108	1号溝状遺構	乂	土師	坏	底・外	Ⅲ～Ⅳ?	
289-109		十カ×	土師	坏	底・外	Ⅵ	
289-110	1号溝状遺構	十カ×	土師	坏	底・内	Ⅵ	

挿図番号	出土遺構名	線刻内容	種別	器種	記銘部位およびその状況	時期	備考
289-111	1号溝状遺構	□	土師	坏	底・外	?	
289-112		×カ	土師	坏	底・外	?	
289-113		×カ	土師	坏	底・外	?	
289-114		□・□	土師	坏	底・内／底・外	Ⅲ?	2箇所に記す
289-115		□	土師	坏	底・外	?	
289-116		×カ	土師	坏	底・外	Ⅲ～Ⅳ?	
289-117		×カ	土師	坏	底・外	Ⅲ～Ⅳ?	
289-118		×カ	土師	坏	底・外	?	
289-119		×カ	土師	坏	底・外	?	
289-120		□	土師	坏	底・外	?	
289-121		×カ	土師	坏	底・外	?	
289-122		×カ	土師	坏	底・内	?	
289-123		廿	土師	坏	底・外	Ⅵ?	ヘラ書
289-124		×	土師	坏	底・外	?	
289-125		×カ	土師	?	底・外	?	
289-126		×カ	土師	坏	底・外	?	
289-127		𠂉	土師	坏	底・外	?	焼成前と焼成後の線刻あり
289-128		×カ	土師	皿	底・外	?	
289-129		□廣	土師	坏	底・外	?	小さく2文字以上記す
289-130		×カ	土師	坏	底・外	?	
289-131		×カ	土師	坏	底・外	?	
289-132		×カ	土師	皿カ	底・外	?	
289-133		□	土師	坏	底・外	?	
289-134		□	土師	坏	底・外	?	
289-135		□	土師	坏	底・内	?	
289-136		×	須恵	坏	底・外	?	
289-137		⊗	須恵	壷	底・外	?	ヘラ書、 転用硯の可能性あり
289-138		十	灰釉	瓶	頸・外	?	ヘラ書と焼成後の線刻あり
292-59	2号溝状遺構	十カ×	土師	坏	底・外	?	ヘラ書
292-60		卅	須恵	坏	底・外	?	ヘラ書
296-83	A24B21	×	土師	坏	底・外	Ⅷ?	
296-84	A21B28	□	土師	皿	底・外	?	ヘラ書
296-85		□	土師	坏	底・外	?	
296-86		×カ	土師	坏	底・外	?	
296-87	A21B29	×カ	土師	坏	底・外	?	
296-88		×カ	土師	坏	底・外	?	
296-89	A18B27	大	須恵	坏	体・外　倒位	?	
296-90	A25B27	个	須恵	蓋	体・外	?	
296-91	A23B27	才	須恵	壷カ	胴・外	?	ヘラ書

第 6 章

自然科学分析

プラント・オパール分析のための資料採取

第１節

^{14}Ｃ年代測定の実施について

すでに第３章第９節の水田址の報告でも、^{14}Ｃ年代測定の実施について若干ふれている。まず、本遺跡の水田址の調査にあたっては、地形環境分析やプラント・オパール分析等の周辺諸科学の分析法を援用し、それら分析結果を十分に踏まえたうえで考古学的調査を実施する方針で行った。つまり、調査開始前の空中写真判読による調査区の設定に始まり、ついで同調査区にトレンチを設定し掘り下げ、地層観察による旧地表面と微地形の確認、同トレンチ内３地点においてのプラント・オパール分析のための試料採取を実施し、それらの分析結果を踏まえて考古学的調査を実施した。その結果、２面の水田址を検出したが、その内の一つである２号水田址は、出土土器から東日本では調査例の少ない弥生時代前期後葉に属する水田址である可能性が強まった。しかし水田址という遺構の性格上、出土遺物は極めて少なく、年代決定に際しては水田層上面出土のわずかな土器と上層と下層の土器群の編年によって推定する以外になかった。幸いにも同水田層は厚い砂層で覆われていたため後世の撹乱をうけることなく良好な状態で保存されており、^{14}Ｃ年代測定でも比較的安定した数値を得られるのでないかと判断し、絶対年代と出土土器の相対年代の整合性のため、同年代測定を実施することとなった。試料は水田層の19a層とそれと同層準と考えられる西側の地層の２点について約10㎝角に採取して、社団法人日本アイソトープ協会に分析の依頼をした。採取地点については図版編第129図を参照されたい。

第２節

^{14}Ｃ年代測定結果報告

韮崎市遺跡調査会　殿

社団法人　日本アイソトープ協会

年代測定結果報告書

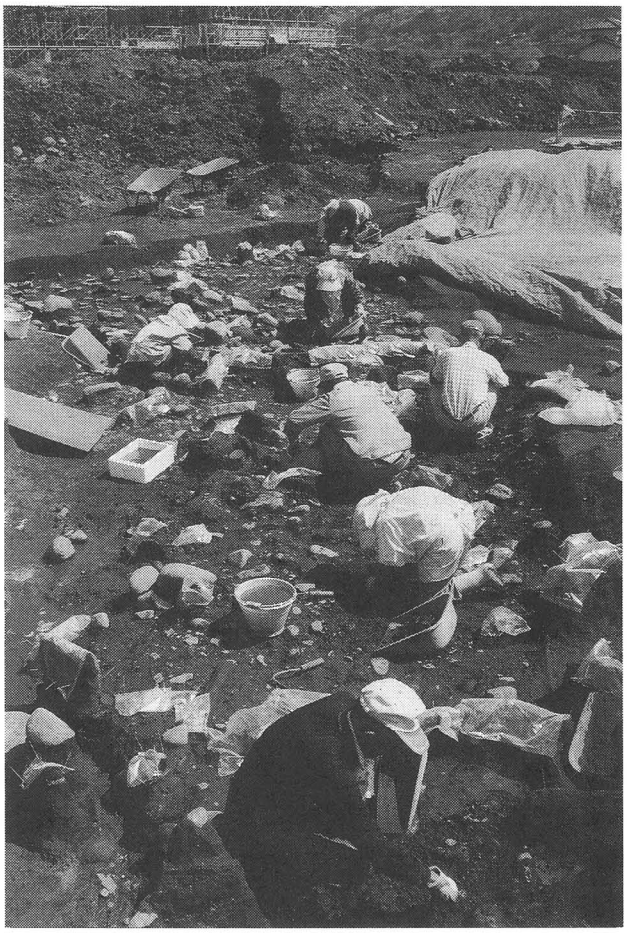
平成２年５月８日に受取りましたＣ－14試料２個の測定結果がでましたのでご報告します。

当方のコード	依頼者のコード	Ｃ－14年代
Ｎ－5747	宮ノ前①－Ｅ	2670±80yB.P.（2590±75yB.P.）
Ｎ－5748	宮ノ前②－Ｗ	2190±80yB.P.（2130±75yB.P.）

年代は^{14}Ｃの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（yearsB.P.）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、^{14}Ｃ年代がこの範囲に含まれる確率は約70％です。この範囲を２倍に拡げますと確率は約95％となります。なお、^{14}Ｃ年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。

第 7 章

結　　語



2 号溝状遺構の調査

まとめにかえて

宮ノ前遺跡が所在する韮崎市藤井町駒井周辺、通称“藤井平（ふじいだいら）”は、山梨県屈指の埋蔵文化財の包蔵地帯である。今回、韮崎市立韮崎北東小学校建設工事に伴って宮ノ前遺跡の発掘調査に着手したわけであるが、その結果、当初の予想をはるかに上回る夥しい数の遺構および遺物が検出されたとともに、多くの情報をわれわれに提供してくれた。

宮ノ前遺跡の初源は縄文時代前期まで遡る。縄文時代では前期以降、縄文時代晩期まで、検出された遺構は少ないものの、根強くその痕跡をこの土地に残している。当時の人々が高燥な土地条件を好む時代にあって、このような低地に集落を営むことは、同時代においては比較的安定した土地条件であったことがうかがわれる。

弥生時代にはいるとその痕跡はやや薄れるが、前期から後期まで辛うじてその痕跡を残している。特に、埋没旧河道内においての水田址の調査では考古学的調査の他、地形分析やプラント・オパール分析、水田址土壌層の^{14}C年代測定も行い、大きな成果を得た。その中でも２号水田址は、東日本では発見例の少ない弥生時代前期中葉から後葉に営まれた水田であることが判明し、また、水田層直下から出土した氷Ｉ式に属する甕形土器の胎土からイネの機動細胞プラント・オパールが検出された。このことは東日本における縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての稲作の波及と受容の問題を考えるうえで大きな意義をもつといえよう。２号水田址は地形的にきわめて制約をうけながら構築されていることや、ごく短時間で洪水砂によって埋没してしまっていることから、当時の土地条件がきわめて厳しい状況であったことがうかがえる。

こうした厳しい土地条件の状況は古墳時代まで続いたらしく、同時代ではＳ字状口縁をもつ台付甕の破片資料が埋没微高地上からわずかに出土しているだけで、竪穴住居址等の遺構はほとんどみられない。つづく中期、後期では遺物さえもほとんどみることができない。

奈良～平安時代はこの土地に最も多くの痕跡を残した時代である。400軒以上に及ぶ竪穴住居址、50棟以上に及ぶ掘立柱建物址、条里の施行を示す溝址、祭りを行ったと思われる溝状遺構等、当時の人々がこの土地にどのように挑み、どのように関わってきたのかを示す良好な資料が残っている。藤井平には宮ノ前遺跡の他、近年の発掘調査の進展によって宮ノ前第２遺跡や中田小学校遺跡、駒井遺跡等の８世紀段階から始まるいくつかの集落遺跡が確認されている。先章でもふれたが、８世紀初頭から新たに現われる集落ということから、宮ノ前遺跡の集落を「三世一身法」等の口分田の拡大をねらった律令政府の開墾奨励策に伴う開墾集団の移住によって出現した集落として捉えているが、それら他の遺跡の集落も同じような性格をもって出現した集落といえよう。こうした集落が密接に関わりながら藤井平一帯の開発を推し進めていった状況がうかがわれ、しかもそれは藤井平全体にまで及ばないにしろ、条里の施行も目的にしていたことを宮ノ前遺跡の微高地上で検出された溝址が物語っている。そうした開発に伴う結びつきだけではなく、各集落は精神的にも密接に結びついていたこともわかる。先に挙げた宮ノ前遺跡の北方約300ｍに位置する宮ノ前第２遺跡では、多量の瓦片や瓦塔片を伴い仏堂風の四面廂付の掘立柱建物址が確認されいる。報告者によると、この仏堂風の掘立柱建物址は８世紀段階の所産とされている。宮ノ前遺跡でも８世紀第２四半期を中心とした宮ノ前Ⅱ期に141号住居址から「寺」と記された線刻土器が出土し、それ以降でも仏教と密接な関わりがあるとされる則天文字あるいは篆書体の字形を模した字句を記した墨書土器が出土していることからも周辺の集落との密接な関係がうかがわれる。

奈良～平安時代では、宮ノ前遺跡をはじめとする大小の集落がこの藤井平に存在することが近年の発掘調査で判明していることはすでに述べた。当然そこには『和名類聚抄』にみるような、当時の行政区画である郷（里）制に伴う郷名が冠せられたろうが、その比定地については諸説はあるものの現在のところ未だ決着をみていない。調査前には郷名比定の問題解明にむけて墨書土器等の文字資料の出土が期待されたが、結局それらを示すような文字資料は得られず、郷名比定問題の解決は持ち越されてしまった。しかし少なくとも８世紀初頭段階から集落

が存在したという事実だけでも、今後の郷名比定研究に大きな意義をもつと思われる。

9世紀半ばに一端、微高地上の条里の施行を目的とした開発から手を引き、微高地上の集落は10世紀前半まで膨張し続ける。しかし10世紀後半から11世紀前半以降、その規模は劇的に縮小し8世紀以来集落が営まれてきた微高地上は、再び条里型土地区画をもつ耕地として開発が推し進められていくことになる。その背景には、藤井平を南北に流下する塩川の浸食によって段丘化が進んだことによる自然状況、土地条件の変化が大きなエポックになったと考えられる。そうした状況とともに、律令体制の弛緩によって古代集落内部を貫いてきた構成原理も解体し、新たな在地領主とよべるような有力者層の台頭によって、新たなる秩序、統治システムのもとに中世のムラへと移行していったことだろう。おそらく人々はこうした耕地と隣接した場所へ移り住んだものと思われ、現在にみられる集落とほぼオーバーラップしていることも十分に考えられる。

以上のように、宮ノ前遺跡は縄文時代から平安時代にいたる複合遺跡であり、各時代におけるこの土地への働きかけが鮮明に浮かびあがってくる遺跡である。宮ノ前遺跡を解明していけば、藤井平全体の開発の歴史像に迫ることができるといっても過言ではない。しかし今回は本遺跡において奈良・平安時代の開発があまりにも大規模かつ広範囲にわたっていることや、担当者の非力のためその分析が奈良・平安時代に偏り、宮ノ前遺跡を含めた藤井平全体の歴史をトータルに編むことができなかったことを後悔している。一見、等質にみえる古代の集落遺跡ではあるが、それらをさまざまな視点から細かく分析していくことによって、それら集落がそれぞれもっている個性や性格を知ることができるだろう。さらに集落ごとあるいは集落間の複雑な支配関係や格差も浮かびあがってこよう。今回は主に膨大な資料の提示にとどまっている部分が多いが、宮ノ前遺跡はその解明に向けてまだ多くの課題を残している。そうした課題については後日別の機会に行っていきたい。

また、調査開始当初から宮ノ前遺跡は古代の巨麻郡の中心的な遺跡としてマスコミ等に取り上げられてきた。そして情報の公開、啓蒙普及の側面から、ミニコミ紙を随時発行したり、現地説明会も調査期間中2回ほど行った。特に現地説明会では、一般の方々にも遺跡の内容やここに生きた祖先の生活のありさまを理解していただきたいという想いは日頃からあったものの、工期等に追われ十分な準備もできないまま催してしまい、単なる遺構の説明会に終わってしまったことを後悔している。しかしそうした活動が功を奏したのか、調査終了間近になって地元の藤井町の方々を中心に高い関心を集めるようになり、こうした文化的遺産を研究分野のみならず地元の財産として子孫にも受け継いでいきたいという気運が盛り上がってきた。そこで調査終了後ではあったが「宮ノ前遺跡勉強会」なるものを開催したところ、100名以上に及ぶ大勢の方々の参加をえて、成功のうちに終えた。これによって住民の遺跡（文化財保護）に対する関心の高さを再認識するとともに、第一線で遺跡の調査にあたるわれわれの責任の重大さも痛感させられた。こうした住民のささやかな願いをつぶさないためにも、行政サイドには遺跡（文化財保護）が地域社会の形成に役立つことを認識し、将来を見通したよりよい文化財の保存と活用を実現してもらいたい。

最後に、本遺跡の発掘調査で雪の混じる八ケ岳颪の吹き荒ぶなか、あるいは夏の炎天下のなか黙々と発掘作業に従事していただいた多くの地元の皆様をはじめ、発掘調査、整理作業において終始ご指導、ご協力いただきました関係諸氏、諸機関に深く感謝の意を表したい。さらに本書が藤井平の地域史を編む一資料として、有意義に活用されることを念願し結語としたい。

引用・参考文献

（第２章第１～２節および第５章第６～８節分）

合田芳正ほか　1991　『海老名本郷（Ⅷ）』　本郷遺跡調査団

赤羽　篤・赤羽義洋　1979　「長野県上伊那郡辰野町出土の土偶」『信濃』第31巻第４号　信濃史学会

浅川耕三　1932　『先史原史時代の調査』　北巨摩郡教育会郷土研究部

浅利　司ほか　1990　『中込遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第52集　山梨県教育委員会・山梨県農務部

雨宮正樹　1983　「高根町湯沢遺跡」『山梨考古』第10号　山梨県考古学協会

石上周蔵ほか　1990　「下神遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書６』　長野県教育委員会

磯貝正義・飯田文弥　1973　『山梨県の歴史』　山川出版社

磯貝正義ほか　1986　『山梨県の中世城館跡』　山梨県教育委員会

岡本範之　1990　「平安期における甲斐巨麻郡の動向」『山梨県考古学協会誌』第３号　山梨県考古学協会

河西　学ほか　1989　「八ヶ岳南麓地域とその周辺地域の縄文時代中期末土器群の胎土分析」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第１集　帝京大学山梨文化財研究所

金田章裕　1985　『条里と村落の歴史地理学研究』　大明堂

櫛原功一　1992　「平安時代の寺院址」『山梨県考古学協会誌』第５号　山梨県考古学協会

小泉光昭・野出道孝　1984　「七里岩台地の地形と地質」『山梨の自然をめぐって』　築地書館

坂本美夫　1983　「甲斐の郡（評）郷制」『研究紀要』１　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

1987　『二之宮遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第23集　山梨県教育委員会・日本道路公団

七里岩第四紀研究グループ　1989　「八ヶ岳火山と七里岩台地」『甲斐路』67　山梨郷土研究会

清水　博　1983　「第Ⅷ章第２節　金属製品について」『向原遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告１　神奈川県教育委員会

志村滝蔵　1965　『坂井』　地方書院

末木　健　1986　「甲斐国巨麻郡の成立と展開」『研究紀要』３　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

1990　「甲斐仏教文化の成立」『研究紀要』５　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

菅原正明　1983　「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』　奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集　奈良国立文化財研究所

関　晃　1959　「甲斐の帰化人」『甲斐史学』７　甲斐史学会

高橋　学　1986　「微地形・超微地形分析からみた古代の水田開発－瀬戸内東部臨海平野の場合－」『条里制研究』第２号　条里制研究会

田中勝弘　1985　「残存条里と集落遺跡」『滋賀考古学論叢』２　滋賀考古学論叢刊行会

堤　隆　1987　『前田遺跡』　御代田町教育委員会

1988　『十二遺跡』　御代田町教育委員会

1989　『根岸遺跡』　御代田町教育委員会

1992　「信濃国佐久郡における奈良・平安時代の集落構造－鋳師屋遺跡群における集落構造把握の試み－」『長野県考古学会誌』64号　長野県考古学会

萩原三雄　1986　「八ヶ岳南麓における平安集落の展開」『山梨考古学論集』Ⅰ　山梨県考古学協会

原　明芳ほか　1989　「吉田川西遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書３－塩尻市内その２－』長野県教育委員会

平川　南　1991　「墨書土器とその字形－古代村落における文字の実相－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集　国立歴史民俗博物館
平野　修　1986　『宮間田遺跡発掘調査概報』　武川村教育委員会
1988　『宮間田遺跡発掘調査報告書』　武川村教育委員会
1991　「宮ノ前遺跡における祭祀についての若干の問題」『研究所報』第12号　帝京大学山梨文化財研究所
1992　「山梨県における特殊文字を記した墨書土器と線刻土器」『山梨県考古学協会誌』第５号　山梨県考古学協会
平野修・外山秀一　1990　「弥生前期の水田址－山梨県韮崎市宮ノ前遺跡－」『研究所報』第10号　帝京大学山梨文化財研究所
保坂康夫　1986　『駒井遺跡発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第18集　山梨県教育委員会・山梨県土木部
竹内理三ほか　1984　『角川日本地名大辞典　19　山梨県』　角川書店
宮崎幹也　1989　「条里遺構の調査と現状」『紀要』第２号　財団法人滋賀県文化財保護協会
室伏　徹　1990　「能見城防塁」『山梨考古』第33号　山梨県考古学協会
森　和敏　1978　「先史－古代」『韮崎市誌』　韮崎市誌編纂委員会
1990　「甲府盆地における条里型地割の事例」『研究紀要』５　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
八ヶ岳団体研究グループ　1988　『八ヶ岳山麓の第四系』　地学団体研究会
八巻與志夫　1988　『西川遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第37集　山梨県教育委員会・峡北土地改良事務所
山路恭之助　1983　『大小久保遺跡』須玉町埋蔵文化財調査報告第１集　須玉町教育委員会
山下孝司　1984　『坂井南遺跡』　東京エレクトロン株式会社・韮崎市教育委員会
1985a　「「葛井」と記された墨書土器」『甲斐路』54　山梨郷土研究会
1985b　『中田小学校遺跡』　韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所
1986　『金山遺跡・下木戸遺跡・中道遺跡』　韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所
1987　『中本田遺跡・堂の前遺跡』　韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所
1988a　『前田遺跡』　韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所
1988b　『坂井南』　東京エレクトロン株式会社・韮崎市教育委員会
1989a　『後田遺跡』　韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所
1989b　「山梨県韮崎市後田遺跡出土の中空土偶」『考古学雑誌』第75巻第１号　日本考古学会
1989c　「「にらさき」考」『甲斐路』67　山梨郷土研究会
1990　『北後田遺跡』　韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所
1991a　『北下条遺跡』　韮崎市教育委員会
1991b　『宮ノ前第２遺跡・北堂地遺跡』　韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所
吉田　晶　1980　『日本古代村落史序説』　塙書房

報告書概要

フリガナ		ミヤノマエイセキ	
書名		宮ノ前遺跡	
副題		韮崎市立韮崎北東小学校建設に伴う発掘調査報告書	
シリーズ			
著者名		櫛原功一・高橋　学・外山秀一・中山誠二・平野　修・山下孝司（五十音順）	
発行者		韮崎市遺跡調査会・宮ノ前遺跡発掘調査団・韮崎市・韮崎市教育委員会	
編集機関		韮崎市遺跡調査会	
住所・電話		〒407 山梨県韮崎市水神一丁目３－１　韮崎市教育委員会内　☎0551-22-1111(代)	
印刷所		峡北印刷株式会社　〒408 山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2313　☎0551-32-3245(代)	
印刷日・発行日		平成４年（1992）２月20日・平成４年（1992）３月31日	
宮ノ前遺跡		所在地	山梨県韮崎市藤井町駒井字宮ノ前
		25,000分の1地図名・位置・標高	韮崎　北緯35°43′17″　東経138°26′42″　標高388m
概要	主な時代	縄文時代前期・中期・後期・晩期、弥生時代前期、奈良時代、平安時代	
	主な遺構	縄文時代前・中・後期の竪穴住居６軒・配石遺構・単独埋甕、奈良～平安時代の竪穴住居417軒・掘立柱建物54棟・土坑・溝状遺構・条里関連溝址、弥生時代前期と平安時代の水田	
	主な遺物	縄文時代前期・中期・後期・晩期の土器および石器、奈良～平安時代の土師器・須恵器（墨書・線刻土器多数）・灰釉陶器・緑釉陶器・金属製品・鍛冶関連遺物・石製品・木製品等多数	
	特殊遺構	弥生時代前期後葉の水田址、３間×４間総柱式の大形掘立柱建物	
	特殊遺物	奈良三彩、須恵器製円面硯、帯金具、「寺」と記した線刻土器、人面墨書土器片、斎串	
	調査期間	平成１年（1989）２月20日～平成２年（1990）４月26日	

宮ノ前遺跡

— 韮崎市立韮崎北東小学校建設に伴う発掘調査報告書 —

（本文編）

1992年３月31日発行

編集・発行　韮崎市遺跡調査会
〒407 山梨県韮崎市水神一丁目3-1
韮崎市教育委員会内
☎0551-22-1111(代)

印刷　峡北印刷株式会社
〒408 山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2313
☎0551-32-3245(代)